敬愛学園史　三

創立八〇周年記念

建建民土

愛愛愛
土人祐
黒澤酒造場書
一九五九年十月起工
一九六〇年八月竣工
施工者 株式会社竹中工務店

酪農学園大学のシンボル 希望の塔(左頁)　とわの森三愛高等学校の正面(右下)

第1
駐車場
駐車場 A
(中生産室)
20

歴代理事長
名誉理事長
学園長

酪農学園初代学園長
酪農義塾２代理事長
酪農学園初・４代理事長
故 黒澤　酉蔵

酪農義塾開設時の理事長
故 佐上　信一

酪農学園２代学園長
酪農学園５代理事長
酪農学園初代名誉理事長
故 佐藤　　貢

酪農学園３代理事長
故 佐藤　善七

酪農学園２代理事長
故 青山　　永

酪農学園４代学園長
故 牛島　純一

酪農学園７代理事長
平尾　和義

酪農学園３代学園長
酪農学園６代理事長
故 遊佐　孝五

酪農学園６代学園長
故 原田　　勇

酪農学園５代学園長
黒澤力太郎

現役員

常任理事

仙北富志和
酪農学園学園長

麻田　信二
酪農学園理事長

榮　　忍
とわの森三愛高等学校校長

干場　信司
酪農学園大学学長

福山　二仁
酪農学園常務理事

短期大学部開学60周年・大学開学50周年記念
「酪農讃歌」碑　2011年

序に代えて

―酪農学園の使命を果たすために―

酪農学園理事長　麻田信二

酪農学園は、１９３３(昭和8)年に北海道酪農義塾として設立され、本年80周年を迎えることができました。この間、多数の学校を設立するなど、幾多の変遷を経て、現在では、酪農学園大学並びに大学附属とわの森三愛高等学校を運営するわが国の中では特色のある学校法人として発展してきました。

これまで、北海道酪農義塾から酪農学校(通信教育)の卒業生を含めると14万人を超える多くの人材を世に送り出し、全国各地のみならず海外においても酪農学園精神を持っての活躍がみられることは、わが国における地方の中小規模の私立学校としては特筆すべきことであり、改めて酪農学園の普遍的な存在価値を感じることができます。

今後、少子化により私学経営の厳しさは増し、地方の私立学校の存続は困難になることも予想されますが、酪農学園は、創立の原点に立ち戻り、これまでの歴史や教訓に学び、本学園につながる人々が心をひとつにして前進することで、多くの賛同者を得ることができ、

創立１００年、１５０年に向け継続発展していくことができるものと確信するものです。

酪農学園史については、１９８０年に学園の約半世紀をまとめた酪農学園史が編纂され、創立70周年の記念事業として酪農学園史二が編纂されています。わずか10年後の今年、酪農学園史三を80周年記念事業として編纂することにしたのは、21世紀に入り世界の政治経済情勢は大きく変化し続けているなか、本学園の持続的な発展に資する大きな改革を実施して来たことをこれまでの歴史と合わせて整理し、これを学園関係者が共有することを通じて、創立１００年に向けたたゆまぬ改革の推進力にしたいと考えたからです。

加えて、２０１１年３月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の重大事故は、今後の日本社会の在り方を大きく変えるものであり、これからの時代を担う人材を育てる教育機関としての酪農学園の使命の大きさを改めて感じさせられたことから、これからの学園に働く教職員の皆さんが酪農学園の歴史と使命を正しく理解するとともに、田中正造や賀川豊彦、町村金弥や宇都宮仙太郎といった酪農学園に直接、間接に影響を与えた人々とそれにつながる人々の想いを受け止め、わが国の発展と世界の平和に貢献する人材を育てるという強い使命感を持って欲しいと願ったからです。

地球人口が70億人を超え、今世紀半ばには90億人になると予測されるなか、穀物価格の上昇、飢餓人口の増加、気候変動の問題、生物多様性の喪失、化石資源の枯渇など農業の発達によって築かれてきた文明社会は一大転換期を迎えています。

学園に様々な形で影響を与えた先人を取り上げればきりがありませんが、田中正造は、「真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さゝるべし」と喝破しました。酪農讃歌を作詞した賀川豊彦は、協同組合こそが世界平和を実現すると訴え、その基本的な考え方7項目、「利益共楽、人格経済、資本協同、非搾取、権力分散、超政党、教育中心」を揮毫し、「教育」をその中にしっかりと納めています。国際化、情報化、技術革新が進み、近年、生命(いのち)よりも経済(かね)が優先される風潮が社会により強まってきており、こうした先人の考え方に学ばなければ、人類社会の持続的な発展はあり得ません。

今後、わが国の少子高齢化は進行し、人口減少が続くことが予測されています。国家百年の計は教育にあるといわれますが、何時の時代も未来を担う人材の育成は重要であり、特に人口減少社会においては何事よりも優先されなければならない最重要課題です。

歴史に学ばなければ未来を創造することはできません。そして何より長期的なビジョンに基づき実行し前へ前へと進むことです。酪農学園80年の歴史に学び、真の文明社会の担い手を数多く社会に送り出す酪農学園でなければなりません。この酪農学園史三がその一助となることを願っています。

終わりに、これまで酪農学園の歩みを外にありながら温かく見守り、ご支援いただきました多くの皆様方に深く感謝申し上げ、今後もより一層のご指導を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

発刊に当たって
―教育理念の反芻―

酪農学園学園長　仙北富志和

酪農学園の緒は、今から80年前の１９３３(昭和８)年に創設された北海道酪農義塾です。創立者黒澤酉蔵翁の寒地農業、なかんずく北海道における酪農の発展のためには、「教育をおいて他に道なし」の理想と信念によって導かれたものです。

酪農学園史は、これまで2巻刊行されています。「酪農学園史(１９８０年９月１日)」と「酪農学園史二(２００３年10月１日)」です。いずれも酉蔵翁のご長男で、酪農学園の苦難と発展の道のりのなかで献身された、黒澤力太郎先生の克明な資料収集に基づくものです。改めて心からの敬意を表します。

今回、学園創立80周年の記念すべき節目に当たり「酪農学園史三」の発行となりました。本学園を取り巻く社会・教育などの情勢変化のテンポは激しく、常日頃から時々の出来事を克明に記録・収集しておかなければ足跡が消し去られることを痛感します。

酉蔵翁は酪農義塾を創設した思いを「私の頭から去ることがなかったのは、農民自身が農業

の本質と使命をしっかりと身につけなければ、農業はおろか国家そのものが滅びてしまう。農民の教育がどうしても必要であるということであった。農業の教育機関はもちろん数多くあるが、私から見るとどうも物足りない。他に求めても解決しないとなると、自分でやるよりほかはない。誠に無鉄砲な話であり、教育に全くのしろうとの自分ではあるが、『必要である限り神ご自身が為し給うであろう』こうした信念が心の底にあって、止むに止まれぬ気持ちで、始めたのである」と述懐しています。

晩年になって酉蔵翁は、酪農学園の発展を喜び、「私の人生で酪農学園ほど苦労したものはない。北海道に適した寒地農業を成功させるためには、これを担う青年を教育するほかに道はない。人が育たなくて酪農が育つわけがない。『なせば成る』だけの信念でしたが立派になりました」と回顧し、支援していただいた後援会、関係機関、関係会社、教職員の方々に感謝しています。

酉蔵翁の遺した語録に、酪農学園の教育に直接携わっている教職員が心すべき一文があります。「日本には農学があっても農業教育はない。農民に寄生する教育はあっても農民を育て上げる教育はない」と断言しています。農学徒を戒める言葉として、東京農業大学初代学長横井時敬の「農学栄えて農業滅ぶ」の名言に通ずるものがあります。

酉蔵翁の教育への思いは、ひたすら北方農業、酪農界の発展を願ってのことでしたが、やがて「酪農教育を通じて、広く人類の福祉・平和に貢献し得る人材の養成」へと酪農学園の教育の広がり、深化を求めています。酪農学園創立80年周年のこの機会に、このことを改めて反芻

し更なる発展のために心をひとつにして奮励努力することを誓い合いたいものです。

繰り返しになりますが酪農学園の歴史は、第二次世界大戦を挟んだ激動と波乱の世情のなかで、学資無料の「理想と信念」の旗を掲げて、「どんなに貧しい農家の子弟でも意欲さえあれば、身体ひとつあれば勉学できる学校」を目指しました。これを支えたのが、北海道製酪販売組合連合会であり、戦後これを母体として発展した雪印乳業株式会社です。そして酪農民が出荷する乳代の何パーセントかを積み立てた基金などによるものです。

拡大発展を遂げてきた酪農学園ですが、これから創立１００年を目指した前途は決して楽観できるものではありません。新たな試練に立ち向かわなければならないことを心しなければならないのです。しかし如何なる場面に直面しようとも、創立者達の熱い思いを反芻し、建学の精神をしつこいほどに再確認し合い、時代の要請に応えうる特色ある教育研究の充実向上に努めていかなければなりません。

「酪農学園史三」は、このような願いも込めての発刊となりました。その構成は、80年の歩みを総括的に整理した上で、特に創立者酉蔵翁の農民教育にかける「思想と信念」を、学園関係者はもとより、改めて広く世に問うものにしました。また80年を回顧する「写真が語る酪農学園史―教育の道・星霜80年―」も添えました。

学園史をお届けするに当たり、激動・苦難に立ち向かわれた多くの先人に心から感謝いたしますと共に、故人になられた先達諸兄姉に衷心より哀悼の誠を捧げます。

例言

本書は表題を『酪農学園史三』（以下『学園史三』と略す）と定め、１９８０（昭和55）年に刊行された『酪農学園史』（以下『学園史一』と表記する）および２００３（平成15）年に刊行された『学園史二』と連続性を持たせた。

『学園史三』の編成は第１部酪農学園草創史、第２部とわの森三愛高等学校の改革、第３部酪農学園大学の改組、第４部酪農学園の財産・機構・関係団体、第５部黒澤酉蔵遺訓集の５部とした。

第１部には主として酪農学園創立および組織の経緯、酪農学園が設置した各学校の変遷と閉校、第２部は、とわの森三愛高等学校の改革と展望、第３部は２学群５学類へと改組した酪農学園大学、第４部には酪農学園の財産・農用地・法人機構・事務局と関係諸団体の現況、第５部は創立者が往年自ら語った学園の使命や田中正造像、人生訓「反芻自戒」（抜粋）を掲載した。

また、付１には酪農学園80年の歴史を写真集とした。付２には酪農義塾創設以来、今日まで就任・在職した役職員名を掲出した。

一、人名はすべて敬称、敬語を省略した。

一、書き表し方については、「新聞用字用語集」（共同通信社）によった。ただし、人名、地名など固有名詞は慣用に従った。また、外来語の表記は外国の地名、人名と同様片仮名を用いた。

一、引用資料と引用文については、原則として原文のままとした。その際、明らかな誤植は訂正した。
また、漢字の一部を旧字体から新字体に、歴史的仮名遣いの一部を現代仮名遣いに改めた。
一、数表記については、洋数字を用い、おおよそを意味する概数には数十、数百などを用いた。
一、度量衡についてはメートル法と慣用のものを併用した。
一、年次表記については西暦に従い、和暦は必要に応じ(カッコ)内に示した。ただし、図表の一部は西暦表記としてある。

酪農学園史三　目　次

扉・背文字　佐藤　貢

□グラビア
序に代えて　酪農学園理事長　麻田信二……1
発刊に当たって　酪農学園学園長　仙北富志和……5
例　言……9
第1部　酪農学園 草創史……23
第1章　創立者 黒澤酉蔵の思想と実践……25
1　田中正造との運命的な出会い……26
2　牛飼い入門と寒地農業の確立……29
3　酪農民の組織化と事業拡大……34
4　「北海道酪農義塾」誕生の背景……37
(1)創立者黒澤酉蔵の思い　(2)その時代背景など
5　校名に「機農」を冠した農思想……42

6　新たな教育展開のための用地確保……46
7　人格教育の継承とその深化……49
第2章　酪農学園 創立前史―北海道開拓と酪農人……55
1　北海道の黎明期……55
2　アメリカを範とする畜産奨励……56
3　寒地農業の行き詰まり……58
4　北海道酪農の先達たち……60
(1) 宇都宮 仙太郎―空樽自鳴　(2) 深澤 吉平―心の長者たれ　(3) 佐藤 善七―天自助者助
(4) 町村 敬貴―「土・草・牛」づくり　(5) 佐藤 貢―天地人　(6) 出納 陽一―無私淡々
(7) 黒澤 亮助―獣医学科の産婆役
第3章　酪農学園創立初期の教育……77
1　北海道酪農義塾の始動……77
(1) 北海道酪農学校(酪農義塾)設立の趣意　(2) 酪農義塾の開設
2　北海道酪農義塾教育の展開と特質……81
(1) 酪農義塾教育の展開　(2) 酪農義塾教育の特質
3　精神鍛錬と実学の徹底……85
(1) 農民魂「農民道五則」　(2) 実習農場の開設

4　北海道酪農義塾の閉塾と教育成果……89
(1) 閉塾の決断　(2) 酪農義塾教育の社会貢献
第4章　学校の設置と変遷・閉校……95
1　機農学校(高等学校)の開設と変遷・閉校……95
酪農義塾教育の継承／戦中における学校教育／戦後の学校改革／キリスト教教育の浸透と教会の設立／新制高等学校への移行／「農業協同組合科」(農村経済科)の新設／同盟休校／農業の変容と両課程の統合／委託実習／生徒数の減少と教育整備／校名の変更と統合問題／歴代高等学校長／統合時の教職員
2　三愛女子高等学校の開設と変遷……107
市内唯一の女子高校／人格と徳性の情操教育／開校後の推移／学校の移設／教育内容／短期大学との連携および英語科の設置／歴代(旧)高等学校長／統合時の教職員
3　酪農学園短期大学酪農学校……117
酪農教育の浸透／全国各地に分校を開設／月刊「近代酪農」／歴代学校長／業務停止時の教職員／卒業生数
4　酪農学園自動車学校……122
小型自動車とトラクター／コースの移転と新設／免許取得法規の改正と閉校／歴代学校長／閉校時の教職員／卒業生数の状況

第2部　とわの森三愛高等学校の改革　……125
第1章　新しい教育課程の構築　……127
1　はじめに　……127
とわの森三愛高等学校の変遷
2　新しい教育課程のねらい　……129
(1)社会状況　(2)とわの森三愛高校の改革の必要性　(3)２０１０年度に向けた高校改革の背景　(4)新たな学校づくりの方向　(5)教育課程の特色
3　コース制　……134
(1)全日制課程普通科、5コースの展開とカリキュラム「総合教育コース」「フードクリエイトコース」「トップアスリート健康コース」「アドバンスコース」「獣医進学コース」(2)全日制課程アグリクリエイト科「機農コース」の誕生と学習環境の整備／アグリクリエイト科「機農コース」／実習環境の整備
4　通信制課程の設置　……139
(1)設置の目的　(2)対象生徒　(3)コース設定　(4)カリキュラムの特色
5　校舎増築と繋ぎ飼い牛舎の新設　……153
(1)学校改革による課題　(2)普通教室南棟の増築　(3)新築牛舎
第2章　学　事　……157

1　年間学事と主要行事 …… 157
⑴ 学年スリー・ステージ「通年制」と授業の安定・充実　⑵ 定期考査日程を主軸に据えた学事暦の設定　⑶ 時間割、教員業務の効率化と合理化の追求　⑷ 学校年度内の行事
2　研修旅行 …… 162
⑴ 新しい研修旅行の考え方　⑵ ２０１１年度コース教育プログラムとしての位置づけ
⑶ 企画の特色
＜付１＞「とわの森三愛高等学校」20周年記念事業 …… 167
榮 忍校長式辞
＜付２＞ クラブ活動の10年間 …… 170
クラブ活動の位置づけ／クラブ活動の特徴／クラブ活動の支援体制／諸課題／２０１３年度時点のクラブ活動／全国大会出場実績
入学志願者数および入学者数／在籍生徒数／歴代とわの森三愛高等学校長／現教職員

第３部　酪農学園大学の改組 …… 179

第１章　酪農学園大学短期大学部の変遷・閉校 …… 181
1　短期大学設置の経緯 …… 182
短期大学設置への始動／酪農学園大学部として発足／教育方針／開学時の農場教育と工場実習／初期の農場概況／学生寮／大学ＹＭＣＡ／三愛塾／特別入学制度／酪農

学園大学短期大学部の経緯／校舎・校地
2　学科の推移と変容 …… 189
製造科／生活科学専攻／酪農科（第1コース）／酪農科（第2コース）
3　校名の変更と3学科体制 …… 194
「教養学科」の設置と変遷／歴代教養学科学科長／「経営情報学科」の設置と変遷／歴代経営情報学科学科長
4　酪農学園大学短期大学部「酪農学科」 …… 200
⑴ 附属農場における実習教育／附属農場の経緯／実習内容／圃場管理／牛舎実習／歴代酪農学科（酪農科）学科長　⑵ 酪農学園大学短期大学部閉校記念式典の挙行／麻田信二酪農学園理事長式辞／歴代酪農学園大学短期大学部学長／学生数の推移
第2章　酪農学園大学 …… 215
はじめに／3学部8学科・大学院の推移
1　農食環境学群 …… 217
2学群5学類のカリキュラム／農食環境学群長　⑴ 農食環境学群「循環農学類」／酪農学コース／畜産学コース／農学コース／農業経済学コース／循環農学類長／農食環境学群「循環農学類」　⑵ 農食環境学群「食と健康学類」／食品機能科学コース／食品開発学コース／食品流通学コース／管理栄養士コース／食と健康学類長／農食環境学群「食と健康学類」／農食環境学群「食と健康学類」管理栄養士コース／農食環境学群　食と健康学類　管理栄養士コース専攻教育　⑶ 農食環境学群「環境共生学類」／野生動物学コース

／生命環境学コース／環境共生学類長／農食環境学群「環境共生学類」
2 獣医学群 ……245
獣医学群長／(1) 獣医学群「獣医学類」／獣医学類長／獣医学群「獣医学類」 (2) 獣医学群「獣医保健看護学類」／獣医保健看護学類長／獣医学群「獣医保健看護学類」
3 酪農学園大学大学院研究科 ……256
大学院酪農学研究科酪農学専攻(修士課程)／大学院酪農学研究科フードシステム専攻(修士課程)／大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻(修士課程)／大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻(博士課程)／大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻(博士課程)／大学院獣医学研究科獣医学専攻(博士課程)／歴代酪農学研究科研究科長／歴代獣医学研究科研究科長
歴代酪農学園大学学長／歴代宗教主任／歴代教養科科長／歴代酪農学部学部長／歴代酪農学部各学科長／歴代獣医学部学部長／歴代獣医学科学科長／歴代環境システム学部学部長／歴代環境システム各学科長
4 教育センターの新設とカリキュラムの特徴 ……266
建学原論／農場実習(健土健民入門実習)
5 学生生活 ……268
学生生活／学生寮／課外活動／奨学資金および授業料免除制度／健康管理と医療互助会／学生相談室／中央館ロビー・学生ホール／酪農学園生活協同組合
6 学生の進路状況 ……274

キャリア教育／就職状況／学生の進路状況の推移（各学科）
7　開学記念式典と記念行事 …… 281
短期大学部開学60周年・大学開学50周年記念式典と行事
第3章　酪農学園大学附属教育施設・機関 …… 283
1　酪農学園大学附属農場 …… 283
農場の再編と牛舎の消失／農場教育／農用地／施設・設備の整備／インテリジェント牛舎の建設／歴代附属農場農場長
2　酪農学園大学附属図書館 …… 287
大学紀要／現施設の概要／歴代図書館館長／年次別大学紀要登載論文数／図書館統計
3　酪農学園大学附属動物（家畜）病院 …… 293
歴代附属動物病院長／年度別の診療頭数
4　酪農学園大学エクステンションセンター …… 297
生涯学習課（普及・出版）／生涯学習部門（公開講座）／国際交流（国際交流）／研究支援部門（委託研究・委託研修）／歴代エクステンションセンター所長／出版物一覧／酪農公開講座開催一覧／学術交流協定締結先一覧
〈付〉学生数の推移／現教職員 …… 306
第4部　酪農学園の財産・機構、関係団体 …… 323

第1章　財産（学校用地・建物）・機構関係……325
1　学校用地（文京台キャンパス）の取得……325
2　教育農場・植林地の概要……326
中央農場／元野幌農場／植苗農場／福島林地／別海植林地／望来原野・畑地／学園用地の位置略図
3　建造物の充実……333
黒澤記念講堂／酪農学園本館／酪農学園大学中央館／学園内主要構築物・施設
4　経営機構の変遷……337
社団法人から財団法人へ／学校法人と寄附行為
5　理事長・学園長の交代……329
⑴ 理事長／8代理事長に麻田信二／麻田信二理事長の就任あいさつ　⑵ 学園長／6代学園長に原田 勇／7代学園長に仙北富志和／歴代役員／理事長／副理事長／学園長／副学園長／専務理事／酪農学園事業部長／常務理事
6　学園記念式典と記念事業……346
学園創立70周年記念式典・祝賀会
7　酪農学園事務局……350
事務組織の改編／「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」の設置／学校法人酪農学園組織機構図（現）／歴代酪農学園事務局長／現学園事務局職員

〈付〉「北海道夏季大学」と学生の共感～〝頭脳交配〟を合言葉に～ …… 358
第2章　酪農学園を支える団体 …… 361
1　公益財団法人酪農育英会 …… 361
2　公益財団法人酪農学園後援会 …… 367
3　酪農学園同窓会連合会 …… 374
4　北海道アルバータ酪農科学技術交流協会 …… 381
5　酪農学園職員組合 …… 387
6　酪農学園貴農同志会（酪農学園職員ＯＢ会） …… 391
7　アジア酪農交流会 …… 395
〈付〉学園経営のための収益事業の展開 …… 399
(1) クロバー食品株式会社の解散　(2) 野幌機農高等学校の採種圃　〈追〉機農高等学校採種圃
第5部　黒澤酉蔵 遺訓集 …… 403
第1章　酪農学園の歴史と使命 …… 405
1　酪農と酪農学園の使命　2　酪農教育30有余年　3　酪農学園の建学の精神　4　三愛主義とは何か

第2章　健土健民新論〔1989年　黒澤酉蔵文書保存会発行〕……425
1　健康と長寿の創造　2　三健論と健土健民　3　化学偏向農法の怖さ　4　国土汚染の新農法　5　機を知るは農の始め　6　有畜機械化農業の神髄
第3章　田中正造を語る〔1968年（財）尾崎行雄記念財団発行〕……441
1　予想に反した田中正造の人柄　2　無数の毒塚　3　友愛会を結成　4　無実の罪で3年入牢　5　三島事件　6　新井奥遽先生　7　公害防止か富国強兵か　8　壇上に鉱毒の土と水　9　谷中村事件　10「亡国を知らざるは亡国なり」　11　治水の要諦
第4章　反芻自戒……467
付1　写真が語る酪農学園史―教育の道・星霜80年―……487
付2　酪農学園役員・教職員録……537
1　北海道酪農義塾役員・教職員……537
2　酪農学園役員・教職員……539
付3　酪農学園80年史主要年表……579
編集後記……598
酪農学園略図……600

第1部　酪農学園 草創史

第1章　創立者 黒澤酉蔵の思想と実践

酪農学園は1933(昭和8)年10月1日、北海道製酪販売組合連合会(酪連)の事業の一環として、「北海道酪農義塾」が誕生して以来、80年を経て今日に至っている。

創立者黒澤酉蔵翁は「私の人生で酪農学園ほど苦労したものはない。北海道に適した寒地農業を成功させるためには、これを担う青年を教育するほかに道はない、と考えてやり通した。人が育たないで酪農が育つわけがない。『なせば成る』の信念だけでしたが、立派になりました」「あえて申し上げておきましょう。日本には農学があっても農民教育はない—と。農民に寄生するものを育てる教育はあっても、農民をつくり上げる教育はないといってもよいのです。この日本の旧弊を打破するために、農民自らがデンマークを範として自らの努力で守り育ててきたのが酪農学園だといえるのです」と言い残している。

また、酪農学園の隆々発展を願う酉蔵翁は「酪農教育を通じて、広く人類の福祉・平和に貢献し得る人材の養成」へとその使命、理想を深めている。

付言すれば、農業の将来を思う酉蔵翁は「農業が貧困であるということは、農業そのものが本質的に貧困なるがためではありません。科学の力と農民の努力があれば、まだまだ向上し発展する余地は大いにあります。…物事は総てその本質を忘れてはならない」と希望の灯を後事に託している。

「酪農学園史三」の発刊にあたり、創立者黒澤酉蔵翁の思想と実践を「1章」を設けて再認識する

こととした。ただし、酉蔵翁の生涯や思想、社会的貢献等については、既に「黒澤酉蔵―青山永著黒澤酉蔵伝刊行会発刊（１９６１年）」「酪農学園の歴史と使命―わたしはなぜ酪農学園をつくったか―黒澤酉蔵著（初版１９７０年）」「酪農学園史一・二」など多くに詳述されている。本章では、酉蔵翁の生涯にも触れながら、酪農学園の歩みとその時代背景を総括的にピックアップする。

1　田中正造との運命的な出会い

黒澤は１８８５（明治18）年、茨城県久慈郡世矢村（現常陸太田市、水戸市の北方約20キロ）に生を得た。生家は50アールほどの田畑を持つ貧農で、もともとは資産家であったが、父の大酒が災いして財を失っていた。

酪農学園創立者 黒澤 酉蔵

母は４人の子供を抱え、行商で辛うじて生計を立てるどん底生活であった。家の再興を願う母は、黒澤に「お前だけは大酒飲みにならないように」と戒めた。黒澤はこの戒めを守り、終生禁酒を貫いた。

黒澤は、尋常小学校を卒業と同時に家業を継ぐが、勉学への思いは止むことなく、近くの村で漢学・水戸学（陽明学）を学ぶ。生地が水戸光圀公の西山荘の近くであったので、水戸学を学ぶ気風があった。この学びから「知行合一」「初一念を貫く」「元を正す」

の精神を身につけた。黒澤の生涯を貫いた正義感と行動力、実学教育への信念は、この学びに源泉がある。

数え年15歳の時、向学心を抑えることができず、母の「どんな苦労にも耐え抜く覚悟があれば…」との理解を得て上京が許される。１８９９(明治32)年６月であった。神田中猿楽町(現千代田区神保町)にある神田数学院の小使い兼給仕として住み込みながら、講義を盗み聞きした。その後、正則英語学校(神田)に学び、海軍兵学校への入学も試みるが、体格検査で落とされるという体験もする。

田中正造の明治天皇への直訴事件は、このように黒澤の最も多感で、人生の岐路に立たされている時の出来事であった。正造は１８９０(明治23)年、50歳の時に第１回総選挙で栃木県から衆議院議員に当選した。

翌年の帝国議会において、「足尾銅山鉱毒の儀につき質問書」を提出し、以来その生涯を閉じるまで、農民に座標軸を置き鉱害から農民・国土を守る闘いに身を投じた。正造は被害を無視し続ける政府に対して、「亡国に至るを知らざれば、之即ち亡国なり」と訴えるが届かず、ついに衆議院議員を辞し、死を決しての直訴に及んだ。

１９０１(明治34)年12月10日午前11時過ぎ、第16帝国議会の開院式から帰途につく、明治天皇の馬車めがけての直訴であった。その顛末は警官に押さえられ、天皇は「事もなげ」に通過し、直訴は失敗に終わった。だかこの直訴事件を天下の大事件として新聞が大活字で報じた。

その数日後、黒澤は身震いする思いを止めることができず、正造が定宿としている三等旅館「越中屋」(東京市芝口2丁目・現港区新橋)を訪ねた。「怒髪天を突く烈々たる気魄」の大政治家と思いきや、

「ものごし言葉は優しく、礼儀が正しく、どことなく人を惹きつけるところがあった。私はまずその人柄に打たれ、ひれ伏して合掌したいような気持ちになった」と黒澤は述懐している。

事件の真相や経緯を理路整然と聞かされた黒澤は、「この人と一緒になって、虐げられている農民を救わなければならない」と決意する。黒澤は、自らの人生を決定づけた運命の遭遇について、「人生には『出会い』というものがあって、それがその人間の一生を支配してしまうことがある。私もまた、青春時代にひとつの偉大な人格に出会って、一生が決まってしまった」とその生涯を振り返っている。

黒澤は、学業をかなぐり捨て、蓑笠・草履ばきで鉱毒の村々を歩き、果敢な行動にでた。「農民の自主的な目覚めこそが問題解決の根本のはずだ」との考えから、青年行動隊の結成ももくろむ。数え年18歳の行動であった。

田中 正造（1912年）

官憲はこのような行動に出た黒澤を、危険人物とみてつきまとうようになった。被害民救済をめぐる世論が燎原の火のように広がっていた時だけに、当局は極端に警戒したのだ。1902(明治35)年3月5日、黒澤は群馬県館林で逮捕され、前橋監獄に放り込まれた。容疑は家宅侵入罪であった。6か月間の未決拘留の末、無罪となった。

獄中の試練の中で聖書に出会う。キリスト教の布教団体「婦人矯風会」会長の潮田千勢子の差し入れであった。監獄生活での聖書との出会いは、黒澤の生涯を貫く行動

規範となった。後年酪農学園の建学の精神「三愛主義」として開花する原点である。

正造は、黒澤青年の果敢な行動に感謝しながらも将来を案じ、学業への復帰を勧める。毎月10円の学費を送ることを約束するのだ。１９０３(明治36)年、京北中学(現東京都文京区白山)に学ぶことが許された。その感謝は「手を合わせて拝む思い」であった。

その学費は、正造が人を介して篤志家にお願いしたものであった。正造は、「同人(黒澤)の精神は、正造の遠く及ばざる点多く、気力また及ばざる点多し、非常に堅固謙遜の人に候…」との書状を篤志家(栃木県蓼沼丈吉)に送っていたのだ。

黒澤がこの事実を知ったのは、時がはるかに過ぎた１９６１(昭和36)年であった。黒澤は、「産業の興隆も、文化の発揚も、社会福祉も、国家の繁栄も結局は人の問題である」との信念から、私財を投げ打って財団法人酪農育英会を発足(設立認可１９５７年12月)させ、自らの体験から苦学生や酪農の振興活動を支援していた。

「徳は孤ならず、必ず隣あり」、黒澤は正造や篤志家など、多くの恩義に支えられて今日があることに改めて感謝し、育英会事業の更なる充実に尽くす。

―我が成せし仕事の内で育英は人に知られぬ偉業かと思ふ―(『三愛の歌』酪翁)

2　牛飼い入門と寒地農業の確立

１９０５(明治38)年、正造の深い恩義に感謝しつつ無事学業を終えた黒澤は、「人生を如何に生きるか」「社会運動もいいが生活の安定なくして何もできない」「母に孝行し弟妹を養う責任がある」など

と思い悩む。

そんな折「ハハ キトク スグカエレ」の電報が届く。断腸の思いでの惜別。7円50銭を懐に北海道行きを決意する。1905(明治38)年7月初め、黒澤は横浜から室蘭行きの船に乗った。札幌に着いた黒澤は、紹介状を持って北海タイムス社の阿部宇之八(後の札幌区長)を訪ねた。

「役人や月給取りは御免だ」との希望を聞いた阿部は、やや考えてから「牛飼いはどうかね」と勧めた。阿部が勧めた宇都宮仙太郎牧場は、白石村(現札幌市白石区菊水)にあった。

宇都宮は開口一番、酪農には三つの徳(得)があると自説を聞かせた。「役人に頭を下げなくてもよい。動物が相手だからウソをつかなくてもよい。牛乳は人々を健康にする」

即断即決、牧夫見習いを決めた黒澤であったが、早朝からの労働は、ほとんど手作業という重労働の時代であったので「体のあちこちがミシミシと痛む」辛いものだった。だが寸暇を惜しんで専門書を読みふけった。

乳搾りも手作業の時代なので、素人には触らせない。黒澤は、縄の先に小さな大根をくくりつけて交互に引っ張ったり、真綿で乳頭の形を作り、乳搾りの練習をした。「見上げた人物だ」、宇都宮はひそかに黒澤の将来を嘱望した。

1906(明治39)年12月、黒澤は徴兵により、札幌市月寒の歩兵隊に入隊した。営門まで送ったのは、宇都宮ただ一人であった。両者の絆は強く深く結ばれていたのだ。黒澤の軍隊での生活は、その勤勉さが認められて2か年で兵役を終えた。支給された1円20銭のうち、必ず1円を貯蓄し将来の独立に備えた。酪農自営への強い決意からだった。

宇都宮 仙太郎

除隊の翌年の1909(明治42)年、投獄時に触れた聖書の「愛の教え」を改めて覚え、日本メソジスト札幌教会で洗礼を受けた。生涯をキリスト者として生き抜くことを自らに誓ったのだ。

同年4月、念願の酪農自営の時が満ちた。山鼻東屯田村(現札幌市中央区南10条西8丁目辺り)の屯田兵将校の居宅と、乳肉兼用種エアシャー1頭を借りての第一歩であった。朝は3時前に起きて、餌づけ、糞だし、搾乳といった管理を一人でこなし、5時には近隣の酪農家から卸してもらった牛乳を荷車で配達して回った。冬は雪をかき分け天秤棒を担いでの配達であった。

初一念を貫くこと苦闘5年、乳牛も十数頭に増え、一人前の酪農家としての地歩を着実に固めていった。肩には肩ダコ、足に足ダコができたが、これを希望に燃えて刻苦勉励した記念として生涯の勲章とした。後年黒澤は、自ら育てた農村青年の旅立ちに際し、「家の者より必ず1時間早く起きて働け」との餞の言葉を贈っている。

1915(大正4)年の春、小学校教師をしていた瀬尾むめ江と結婚するが、コマネズミのような働きぶりは変わることはなかった。この超人的な精神を支えたものは、亡き母への「家督挽回の誓い」であった。

北海道は、明治以降の本格的な開拓を進める中で、悲惨な冷災害を繰り返していた。その原因は、

本州農業の模倣にあった。移住農民の願望は、稲作の成功を中心とする穀菽（こくしゅく）農業の実現であったからだ。

大正年代の末、黒澤自身が経営拡大のために入手した農地も、開拓以来の略奪農法で劣化し痩せたものだった。黒澤は、乳牛の腹を通した糞尿の撒布を繰り返し、地力の培養に努めた。寒地農業の基本は、酪農（家畜）を軸とした循環農法であるべきことを確信するのだ。

黒澤が後世に残した「循環農法論」とは、農業は天（風土・自然条件）、地（その土地の持つ特性）、人（機をとらえた経営能力）の合作であり、地力の増進を基本とした適地適作でなければならないとする理念だ。

黒澤は寒地農業の確立を生涯の使命とするが、北海道の大地を健土・適作にして冷害を克服することは、足尾の鉱毒被害民の救済運動とも共通するところがあると、次のように述懐している。

「それは田中先生の鉱毒民救済の根本にあった思想『国土の尊厳を犯すものは必ず滅びる』ということでした。田中先生は『国土は未来永劫何億年経っても生かして使える。われわれ人類が生きているのは国土があるからだ。その国土の一寸の土地でも粗末にする考えは間違っている』と言っています」「北海道の冷害といい、公害による国土の破壊といい、これまで随分長い間、天災とかやむを得ない災害として扱われてきました。しかし、いやしくも国富を増進し、国民福祉を向上させるために興した産業が、平気で国土の尊厳を傷つけることがあっては本末転倒です。冷害も公害も人間が作り出したものと考えます」

「北海道の開発は、北海道の国づくりです。その基本に過ちがあったから発生した大冷害です。本州のものまねをする農政は、こと北海道に限って言えば、百害あって一利なしです」

昭和初期(特に6～7年)の北海道の大冷害に、さらに追い討ちをかけたのが世界恐慌の波が農村に覆いかぶさったことだった。国はこの窮状を救うべく、農山漁村経済更生運動を展開し、農家の負債整理や救農土木事業などの施策を講じた。とりわけ農村の再興には「農民魂」の惹起(じゃっき)こそが緊要であるとして全国に農村青年の教育・鍛錬の場、農民道場の開設を国策とした。

北海道酪農義塾の設立は1933(昭和8)年である。黒澤が世上を察知し、酪農青年の教育に独自の思いを深めたであろうことは容易に推察できる。

この経済不況による窮状は、酪農家も例外ではなかった。黒澤ら北海道酪農のリーダーは、この危機に立ち向かうべく、経営の合理化運動「三立主義」を提唱した。「三立主義」とは、食糧の独立、飼料の独立、肥料の独立で、食糧・飼料・肥料の自給(経営内循環)を目標にして、生活と経営の無駄を省こうとする意識啓発運動であった。

循環農法論を説く黒澤酉蔵

今日表面化している農業近代化政策がもたらした弊害、とりわけ畜産の規模拡大に伴う飼料の海外依存、化学肥料・農薬の多用による環境汚染、食料自給率の低下などの問題にも通じる啓発である。

黒澤は機会あるごとに、「家畜なければ肥料なく、肥料なければ農業なし　ゆえに家畜なければ農業なし」「家畜の糞尿は農家の銀行である」とするヨーロッパの金言を説いた。

3　酪農民の組織化と事業拡大

大正年代に入り練乳を中心としたバター、チーズなどの乳製品の需要は、徐々に増え始め、加えて第1次世界大戦によって乳製品の輸入が減少したことから、国内乳業界は活気を呈し、ようやく牛を飼う農家も増えてきた。

ところが北海道酪農に受難の大波が襲いかかった。１９２３(大正12)年９月１日、神奈川県相模湾を震源とする大地震が起きた。関東大震災である。死者・行方不明者10万人以上、焼失した住家は45万戸にも及んだ。この大地震が酪農家に思わぬ難題をもたらした。惨状が世界に伝えられるとアメリカなどからの救援物資が続々と届けられた。その上政府は、食料不足による物価の値上がりを懸念して輸入関税を撤廃したのだ。

安い乳製品の大量流入によって、乳業会社は国内原料乳の買入れ制限に踏み切った。酪農家は搾った生乳を下水に捨てなければならない事態になってしまったのだ。乳業会社に対する酪農家の不信と不満は高まるばかりになった。

黒澤らは「こういう機会を逆用して、農民自身の力によって如何なる場合でも安心して生乳を受け入れる組織を創らなければならない」との考えを強くする。デンマークをモデルにした生乳の集荷から乳製品の製造・販売までを酪農民の責任で遂行するという製酪組合の創設である。

１９２５(大正14)年５月、６３０余名の同志が結集して「有限会社北海道製酪販売組合」が設立された。出資金は一口20円で50口まで。貧困な酪農民にとっては大きな負担で、夜を徹しての議論の末

の誕生だった。組合長は宇都宮仙太郎、専務理事は黒澤酉蔵だった。

白石村野津幌(現札幌市厚別区上野幌)の出納農場の一隅を間借りしての、バター製造の開始であった。だがこの組合の運営は資金繰りに苦しんだ。北海道庁から産業組合法に基づく「組合としての認可」が下りなかったために、組合系の金融機関からの資金借り入れができなかったのだ。農協は町村単位が原則であること、組合の事業は信用・購買などを兼ねること、などが壁になったのだ。

1926(大正15)年3月、「酪農家に直結した組合でありたい」との思いを残しながらも、石狩・空知管内の25の町村単位組合を傘下にした「保証責任北海道製酪販売組合連合会」(酪連)に改組した。産業組合中央金庫が、酪連の財産不足を理由に、なお融資に難色を示したが、黒澤は「酪農は国家の大事業、禁酒禁煙を誓って、断乎この製酪事業を成功させる」と激論の末押し切り、資金調達の苦難を乗り切っている。

練乳会社と並立の形で出発した酪連事業は、原料乳の増加もあり札幌村苗穂(現札幌市東区)に近代的設備を備えた工場を建設し、バターの生産を軌道に乗せた。昭和年代に入って襲った世界経済恐慌の余波は、乳業界に深刻な不況をもたらし、工場や集乳所を縮小、閉鎖するなど再び原料乳の買入れ制

酪連最初の札幌工場（札幌村苗穂 1927 年）

限の事態になった。

酪連は酪農民を守る立場から、これらを吸収して全道に集乳網を広げ、堅固な一元集荷体制を確立した。一元的に集荷した原料乳を、乳業会社が必要とする量を契約によって供給するという仕組みである。酪農経営の安定向上を旨とする酪連事業の真髄だ。

酪連は、バター、アイスクリーム、チーズ、カゼイン、市乳などの製造販売へと事業を広めていくが、その基本は北海道農業の安定・発展を願うものであった。

この酪連組織は、時局が日華事変に伴う戦時体制に入り、経済統制が強まる状況などを背景として明治製菓、極東練乳、森永練乳と統合した「有限会社北海道興農公社」に発展的に改組（１９４１年３月）される。社長には黒澤酉蔵が選任された。

その後興農公社は、北海道、拓銀、北連などの資本参加によって株式会社に変更し、製酪事業のほか、食品、肉加工、皮革、土地改良、種苗、農機具製造、製薬などを包含する一大総合事業体に発展拡大した。

戦後１９４７(昭和22)年、社名を「北海道酪農協同株式会社」として再出発したが、過度経済力集中排除法によって分割を余儀なくされた。黒澤は「アメリカは道理と正義を重んじる国である」ことを信じ、正攻法で猛反対したがかなわなかった。無念の分割ではあったが、牛乳部門は雪印乳業株式会社として新たな道を歩み、世界を代表する規模の乳業メーカーに躍進した。

１９６０(昭和35)年、雪印乳業株式会社は、創立10周年を記念して社史を刊行している。相談役の任にあった黒澤は、その第1巻の「発刊に寄せて」に次のように寄稿している。

「一貫した理想、信念に生きる民族は永久に繁栄する。同様に団体や個人も、真理に基づく理想、信念が生き生きとして脈打つ時代は、隆々たる発展を来すものである。…そもそも酪農は、民族の母体である国土を保護し、ますます健全にするための必須農業である。…国土が肥沃であり、国民が健康であることが、あらゆる産業の健全な発展の基礎であることは自明である。酪連創業の精神は以上の理念を信条として一歩一歩実践躬行したところに不滅の精神が流れているのである」。肝に銘ずべき至言である。

酪農学園の将来を担う者への警鐘とも受けとれる。

4　「北海道酪農義塾」誕生の背景

酪農学園は苦難の道をたどりながらも、80年の星霜を経て今日がある。その源流は１９３３(昭和８)年５月、真駒内種畜場で開かれた丁抹会(デンマーク農業を範とする研究会)において、黒澤が農村青年の教育構想を打ち出したことから始まる。佐上信一北海道長官も同席し、出席していた酪連幹部らの賛同を得たのだ。「北海道酪農義塾」の設置(札幌村苗穂酪連施設内)は同年10月１日。この時の塾生は、酪連、産業組合、集乳所職員など25名で修業期間１か月の短期講習であった。本来の目的である農村青年を対象にした入塾式の挙行は１９３４(昭和９)年２月11日(当時の紀元節―建国記念日)。修業年限各１か年の酪農科・製酪科生80名で、全寮制・実学教育がスタートしたのだ。理事長は佐上信一北海道長官、副理事長は宇都宮仙太郎、塾長は黒澤であった。

酪連会長でもあった宇都宮仙太郎は、黒澤の教育への思いに対して、当初は「なまじっかのことで

できるものではない。だいいち金がかかる」と難色を示したが、酪連の敷地内に教室・寮舎・食堂・講堂などを建てること、経営は酪連とは別法人とし毎年５０００円を支出すること、などを了承しよき理解者になった。

酪農義塾設立の趣意書や酪連臨時総会における決議録、教育理念などは、「酪農学園史一・二」に詳述されているので、ここでは酪農義塾の創設に至る黒澤の熱い思いと、その時代背景などに焦点を当てて酪農学園史の原点をたどる。

(1) 創立者黒澤酉蔵の思い

「農民のことは農民自らの手で」の旗を掲げて取り組んできた酪連事業も、難航の連続ではあったがどうにか一定の軌道に乗る目途がつき始めたころ、黒澤の胸奥にしまい込んできた「農民教育への思い」が熟してきた。

黒澤は、酪農民の組織化運動を通じて一番困ったのは「農民が無知であることと目先の欲にとらわれるということでした。これで何回となく苦杯をなめたのです。これは無知のいたすところでしょうがない。これは教育以外にない、こう決心し、協同主義の酪連事業とともに酪農教育に一生を捧げようと決意しました」と回想している。

また、北海道開拓回顧録（１９７５年　北海タイムス社）に、大正の末期デンマークから経営実演のために招いたモーテン・ラーセンが、帰国の際に言い残した「お国には帝国大学農科があるのにどうして農民はかような生活をしているのか」という言葉が胸に引っかかり、「私はもちろん、心ある指導者にはこの一言がひどく気にかかりました」とも述べている。

「日本の教育は知に片寄り過ぎ、実際を忘れてしまったものか、魂の抜けた雑兵多数を養成して、それで戦果を望んでいるようなものではあるまいか。そして突き当った壁は、要するに日本の農業教育は農民を支配する立場からつくられ、組み立てられているもので、真の農民、独立自営農民の養成に益してはいないのではないのだろうか」との思いに至るのだ。

そんな折に、佐上北海道長官の教育界改革に関連した大演説があり、道庁も国の動きに合わせて拓殖実習場を創設するという動きにあった。酪農義塾の設立に当たり理事長をかってでた佐上長官の教育理念は、①デンマーク興国の父グルンドヴィとこれを継承したクリステン・コルの精神に習い、すべて教育は独立自営(私学)であるべきこと　②祖国を愛し、土を愛し、天然を愛する精神を鼓舞すること、といったものであった。

黒澤はこのような考えにも触発され、青年学校令による青年学校でもなく、農林省の指定する農民道場でもない、自らの胸中にあたためてきた独創的な実学教育に、強いこだわりを持ったものと推察される。

⑵ その時代背景など

「北海道酪農義塾」誕生前後の農村経済の情勢や、国策としての農民教育の動きから、黒澤の思いに与えたであろう事象について概観する。

昭和初期わが国は、関東大震災の復旧の最中、未曾有の経済恐慌に襲われた。農村は、農家経済の破綻はもとより、地主を中心とした農村経済は崩壊の危機に直面した。加えて東北・北海道は相次ぐ冷害に襲われ、その疲弊は極に達した。ちなみに北海道の水稲の10アール当り収穫量は、１９３１(昭

和6)年が84キロ(全国262)、1932(昭和7)年が67キロ(全国285)であった。

時の政府はこの疲弊した農村を救済すべく、「農山漁村経済更生運動」を展開した。当座の農家経済を救済するための緊急対策に併せて、恒久的な国策として、自力更生、隣保共助、農本主義の精神に徹した農民魂の作興と農村の組織化(産業組合の強化)を推進することとした。

その背景には軍事色を強める中、挙国一致、天皇の下に団結し国難を乗り切るという強い国家的戦略(皇国農民の育成)の意図もあった。特に「農民精神の作興」については、農政の中枢にあった石黒忠篤(後の農林・農商務大臣)らによって、農林省の助成金で全国に修練農場、農民道場を設立させ、塾風教育による精神(農民魂)の鍛錬と骨身を惜しまない農業労働の体得を徹底させた。「真に農民精神に徹し、自ら鋤鍬を執って自家経営に精進すると共に、率先郷土更生のために邁進する中堅人物の養成に努める」というものだ。

既存の農学校では、農民精神の作興教育には十分ではなく、なによりもどちらかといえば地主や富農階層の子弟を対象とした学校教育では、時局の要請に応えられないとして、農家の二・三男を含む貧農層の子弟をも対象にした全寮制の実習訓練重視の場を創設させたのである。

その象徴的存在が茨城県友部に創立された日本国民高等学校(校長加藤完治 1925年)であり、農村更生協会の運営による八ヶ岳中央修練農場(場長石黒忠篤 1938年)であった。広くとらえれば賀川豊彦らによる「農民福音学校」運動もその範疇に含まれる。精神鍛錬のよりどころとしては、各地方自治体によって創立された施設は宗教的な色彩は薄いとしても、神道やキリスト教などその基調には幾つかの系統があった。

とりわけ、デンマークを範とする興国・興農の塾風教育は大きな流れであった。その中心的人物に、愛知県安城市一円を農業の先進地「日本のデンマーク」と呼ばれるまでにした山崎延吉（１８７３～１９５４年）がいた。山崎は愛知県立農林学校の初代校長（１９０１年）で、日本における農学校教育の草分け的存在である。山崎は経済恐慌による農村の疲弊を危惧し、修練農場「神風義塾」（三重県）を創設して全国を行脚し、農民教育運動の先頭に立った。

黒澤がこのような先行している農民教育運動にも触発され、「独自の教育手法で」との思いを募らせ酪農義塾の創設に突き進んだ、と見ることができる。黒澤は、１９３６（昭和11）年、山崎延吉を酪農義塾に招き、塾生に「農道精神」の講義を依頼している。

黒澤の農民教育への使命感は、戦雲下にあって寒地農業を確立し食糧増産を図る「皇道農業」の実践であった。皇道とは、「天皇・国民・国土」が一体化した皇国精神に徹し、国家の難局に対峙するというものである。農民はこの精神をよく心得、誠実・勤勉・倹約をもって食糧の増産に邁進すべし、とするものだ。黒澤独自の教育信条は、塾生やその後の機農校生に毎朝朗唱（１９５４年まで）させた「農民道五則」（後述）に収斂される。

国策としての塾風教育（修練農場・農民道場など）と、北海道酪農義塾の教育を対比した場合、全寮制による精神鍛錬や実習重視、デンマークモデルなどの共通性はあるが、例えば加藤完治に代表される「鋤鍬を執っての農民魂の高揚」という精神鍛錬重視主義に対して、黒澤は「立地条件に基づかずして農業の発展はない」として、寒地に即した適地適作による有畜機械農業の習得に力を入れる一方で、経営改善、家政・生活改善までにも踏み込んだ実学教育の実践を織り込んでいる。精神高揚主義と生

産労働重視の時勢にあって卓越した識見である。

5　校名に「機農」を冠した農思想

酪連事業の一環としての北海道酪農義塾は、実践酪農民の養成と、急を要した製酪技術者の養成を主目的とし、それに農村青年を対象とした短期講習「冬期学校」を併設するといったものだった。肝心の実習農場は、苗穂の酪連用地内と札幌村三角(現札幌市東区)に開設したが手狭で、１９３７(昭和12)年には、酪連に譲渡された出納農場の一隅を借受けている。

時局は益々戦時色を強め、支那事変の勃発や国家総動員法の公布へと進む。戦線の拡大につれて国内の労動力、物資の欠乏は深刻の度を深め業種を問わず生産力の低下は深刻になる。食糧生産を担う農村も、応召で男手が不足し不耕作地が目立ち始めるという事態になった。

黒澤はこうした事態を打開して、食糧の増産体制の立て直しに思いをめぐらした。酪農義塾の運営も難しくなっていた。導かれた結論は「指導者をつくることが先決」ということであった。早速独自の甲種農業学校の設立構想を胸に秘めて文部省高

酪農義塾第２農場（札幌村三角）

官に所見を開陳した。

黒澤は国家の緊急時にあって、食糧生産の実を挙げていくための農法は、有畜機械農業の外にはないとの持論を述べた上で、教室の代わりに規模の異なる農場を数か所設置して家畜・施設を整え、各農場には教官を農場長として生徒と共に分宿させ、即戦力たる筋金入りの農業指導者を養成する、との熱弁を振るった。教育方法は晴耕雨読、実習の現場が教室で教科書はなし。すべて作業を通じて学び、真の農民魂をもって、農民の前に立てる指導者を養成するとしたのだ。

黒澤の教育構想は文部省が定める教育令には相いれない。だが文部省高官らは諸手を上げて賛成した。「それが真の教育だ。残念ながら官学ではそれはできない。ご趣旨も方法も実に結構であるから、存分におやりください」との激励であった。財団法人興農義塾野幌機農学校の設置許可は、１９４２(昭和17)年３月30日。申請からわずか１週間という早さであった。

開校初年度は施設の関係もあって80名の採用となったが、勇躍入学した生徒は教員と共に各農場の寮に入り、食費も授業料も要らず、農場の生産物で自活する生活を始めた(この制度は戦後のインフレーションによってやむなく実費を徴することになった)。

黒澤は校名に「機農」を冠することにこだわった。文部省はもっと一般的な校名でいいのではないかと難色を示したが、「機」にこそ深い意味があるとして譲らなかった。

「機を知るは農の始めにして終りなり」、人間の生き方にも通じる名句を残している。

以下に黒澤の農業哲学の真骨頂として、自筆「機農の意義について」を学園史に留める。

☆機農の意義について

（黒澤酉蔵著「皇道農業（附全文）」育英出版株式会社　１９４４年）

私は昨年（昭和17年）我が国唯一の存在である、特色ある甲種農学校を設立し、これを機農学校と命名して、校舎を石狩国江別町大字野幌においたので、野幌機農学校と呼んでいる。ところがこの「機農」の意義について世上誤解少なからず、往々意外の質問を受ける場合があるので、ここに「機農」の意義を明らかにして、兼ねて私の意のあるところを宣明したいと思う。

順序としてこの学校の内容を説明するが、これは普通の甲種学校と同様、修業年限3か年とし、国民学校8か年の課程を修了した者を入学せしめるのである。ただし在校3か年間一切通学を許さず、すべて学校に寄宿せしめ、ただ、在校期間授業料も食費も徴せず、一切学校の負担とすること、仕官学校や兵学校と同様である。

しかして学校は２００町歩の農場を所有し、これを幾つかの小農場に区分し、それぞれの経営面積を形成する。即ち5町歩経営、7町歩経営、10町歩経営、15町歩経営、20町歩経営、30町歩経営及び50町歩経営となし、1農場ごとに1経営農家即ち学生寄宿舎が設備されている。

この経営農家即ち学生寄宿舎には、先生一家と生徒10数名で一家族を構成するという仕組みで、その家族労働力において以上の各農場を実地に経営せしめ、一般農家と同様に、朝は5時に起きて朝の作業に従事し、夕は7時ころまで作業に服せしめる。その間教練もあれば、学科も授けるのである。

農繁期は圃場教育を主とするので例えば土地の耕起とか、除草というような仕事は、教室で講義するよりも実地圃上で実物教育を施す方が遥かに効果的であり、かつ確実に教え込むことができる。即ち、百聞一見にしかず否百聞一行にしかずで、万事この調子でやるので、生徒は1か年も経てば、誰も彼もが役馬を自由に駆使し、一通りの作業ならば、立派にやってのけるようになるのである。

3年目になると、もはや立派な一人前以上の百姓になって、世間でいう篤農家並みの腕前に仕立てあげられるの

である。のみならず、学科の方も課程表によって甲種農学校程度の授業を施すことは言うまでもない。しかも日常先生一家と起居を共にするので、一挙手一投足、また行住座臥、ことごとく活教育となるばかりでなく、外間と隔絶せる清浄境に生活するので、耳に無用な雑音が入らず、思うままの農業教育を施し得るのである。

寄宿舎における食生活は、農家本来の建前たる自給自足を原則となし、合理的な、栄養に富める郷土食を工夫創始するのである。どの農場にも耕馬2頭から10頭、乳牛3頭から20頭、豚、鶏等の家畜家禽を飼育し、かつその農場に必要なる一切の農機具を整備しているので、これこそ真の有畜機械農業の農場、かつ道場であることは言うまでもない。

しかしてこれらの寄宿舎たる農家が20数戸の1部落を形成しているので、一つの農村部落の理想的な構成、即ち私のいわゆる皇国農村部落を実地に構成経営しているのである。ゆえに見方によっては学校でもあるが、また農村部落でもあり、他日の農家経営者としてのよき体験を、在校中十分に習得することができる。

かようにこの学校を表面から見ると、畜力機械を相当使用するので、機械農業の略称として「機農」と命名したものと解釈する。これは先ず十中八九であるが、しかし私の「機農」は決してそんな形からとったものではない。

元来農業は天、地、人三才の機動和合によって成立するもので、天地の機の発動せざるところに生命宿らず、生命宿らざるところに健土健民の実は挙がらないのである。しかして天地の機を体得するには、農民もまた天地の心を心として至誠神に通ずるの心境に到りて、はじめて確実に把握し得るのである。

一代の篤農家と称さるる農家は、その度合いにこそ深浅の相違はあれ、皆この天地の機を把握体得せる人々である。それなればこそ立派な業績を挙げ得たのである。種子を蒔くにしても、除草をするにしても、収穫をなすにしてもよく天地の機を感得し、つぶさに作物の心を知り、与うるにも取るにも時を失せず、機を逸せず、施して誤ることなき神機、妙機をつかみ得るものにあらざる限り、真に農業を学んで門に入り、堂に上ったものと言うことができぬ。

今日の農学は大方実学でない。虚学が多い。机上の農業、紙上の農業は畢竟(つまるところ)畳水練と等しく、幾十年その形を学んでも、一たび水に入ればただ溺没あるのみである。私の機農学校は、天地の機を探って味得体得の妙境に到り得る農学校であるという意味を現したものである。カラクリの機、機械の機ではない。天機とか、機微とか、機動とかという意味の機である。

この機農学校において、農場5町歩から50町歩に区分したのは、世界いずれの場所においても農業を営みうる実教育を施さんがためで、機農学校の狙いどころはまさにそこに在るのである。日本内地においても、満州、北支においても、南洋、豪州においても、与えられた土地、託された条件に即応して、縦横自在に皇道農業を営み得る農業教育を目標として、機農学校は創設されたのである。

(一部現代仮名づかいなどに改変)

6　新たな教育展開のための用地確保

北海道酪農義塾は計画から開校まで、短時間で慌しく進められ財政的にも酪連依存で、実習農場も分散、手狭であった。だが開設以来、精神鍛錬された多くの酪農青年や製酪技術者を養成した。

一方では戦局の烈化は益々進み、生徒の青年学校への入校(軍事訓練)の義務化などを背景に、酪農義塾の存続が困難になってき

野幌機農高校生 有畜機械農業実習

た。黒澤は食糧生産力の低下に加え、このような事態にも対処して、農業指導者の養成に着目した甲種農学校の設立を思い立った。酪農義塾は１９４４(昭和19)年1月、10期の卒業生をもって閉塾した。

酪農義塾の教育理念を継承しつつ、より本腰を入れた実学教育の場を実現させるためには、まとまった規模の用地を必要とした。酪農義塾の理事長でもある黒澤を中心に検討が重ねられ、選定されたのが江別町西野幌(現学園用地)の畑地であった。国道に面し背後に野幌原始林が広がる景勝地で、将来の発展構想に相応しい団地をなしていた。宅地と農地合わせて１６０haもの規模の買収であった。斡旋の労を執ったのが黒澤の盟友で、地元農家の信望も厚い町村敬貴(後述)であった。１９４２(昭和17)年1月、町村は厳寒雪の中を馬橇を御して黒澤を案内した。

しかしこの地には重粘土と闘いながら、やっとの思いで営農・生活している22戸の自小作農家が居た。居住者にとっては降って湧いたような「驚き」の出来事でありその交渉は難航を極めた。14戸は地主の意向もあり、しぶしぶではあるが北海道農地開発営団事業地区の元野幌原野に移転することで同意した。残りの農家は移転に猛反対であった。これらの農家は明治期に新潟県から入植した移民団(北越殖民社)の自小作農家で、「小作地を手放す時は会社(殖民社)に戻す」という契約があり、これを根拠に移転を拒んだのだ。

大幅な譲歩で移転に同意した農家は、「野幌機農学校とは永久不離の関係として独立農家の創造を支援する」ことを了として、１９４２(昭和17)年11月7日、江別町長(坪松唯三郎)と興農義塾野幌機農高校長(黒澤酉蔵)の三者で覚書を交わした。その支援条件の主な内容は、

①農地は1戸当り10～15町歩を可能にする。

②道路・治水・排水・幹支線等は営団又は国が行う。
③播種できるまでの整地は機農学校が協力し助成金を支出する。
④住宅は寒地農家のモデルとなるよう資金を援助する。
⑤畜舎・納屋等の資材、開墾の農機具は営団が配給する。
⑥酪農経営の集乳施設、農機具等は興農公社が行う。
⑦現在の所有地の買収価格は最高公定価格とする。

などである。（原文詳細　酪農学園史一参照）

移転地は泥炭土で深いところは30メートルもあり、「道路から牛を入れるのに、重みで足が埋まり腹までつかえて歩かれず」という排水不良地であった。加えて豊平川の氾濫は常態化しており、その被害は永住も営農意欲も失うものだった。兵役応召や罹病の家庭も多く、移転地での開墾生活は難渋を極め「騙された」との不満も噴出した。

機農学校は覚書の通り、営農・生活両面で全面的に支援したことから、この移転集落は「機農部落」と呼ばれるようになった。移転地に隣接する学園の元野幌農場は、農家の移転と同時期（１９４２年）に開発営団から４５０haを無償で借受け（実際の活用は１８０ha程度か）、本校で飼っている馬や牛の野草場として大事な役割を果たした。

黒澤は本校農地の重粘土と酪連から譲渡された苫小牧市植苗の火山灰土、元野幌農地の泥炭土を、北海道農業の三劣悪土壌として、これを酪農によって改良できることを実学教育をもって実証しようとした。

酪農学園が苦難の道をたどりながらも今日があり、更なる発展を期し得る可能性の根源の第一は、学園用地をこの地に求めたことであろう。創立者たちの先見性と、土地を提供し辛酸をなめた多くの理解者に改めて感謝の意を表さなければならない。

7　人格教育の継承とその深化

１９４５(昭和20)年８月15日、第２次世界大戦はわが国の敗戦をもって終結した。失意のどん底にあった黒澤は、天皇の終結宣言から数日後、「灼熱した火の玉のようになって」ＮＨＫ札幌放送局のマイクの前に立った。

黒澤は「この大試練に日本国民は果たして合格するや否や」と自問しながら、「禍を転じて福となす民族は、ますます栄えるのみで断じて滅びない」と述べ、農漁業を科学の力によって発展させ、これを軸にして産業の復興を期すべし、と「希望と光明」を目標に国民の団結を呼びかけた。

デンマークを範とした協同組合主義による日本再興に確信をもった黒澤は、代表世話人として日本協同党を結成するなど公人としての活躍の場を広げるが、公職追放になり無念の涙を呑んだ。それに先立ち宗教活動の制約が解かれるや否や、財団法人興農義塾野幌機農学校の教育理念をキリスト教の聖書に置くことを理事会決定した。１９４６(昭和21)年９月１日である。ちなみに法人名を「酪農学園」に変更したのは１９４９(昭和24)年、財団法人を学校法人に変更したのは１９５１(昭和26)年である。

黒澤はキリスト教教育に「誤解があってはならない」として、次のように念を押している。「立派な人をつくるには、どうしてもバイブル中心の教育でなければならない。これは私の信念です。しか

し信仰は自由でありますから決して強いるものではありません。仏教がすきであれば仏教でいいのです。キリスト教にも弊害がありますが、バイブルそのものは立派です」。

戦後の混乱の中、酪農の先達の間に、新しい時代に対応して高度な酪農教育を目指した4年制大学の設置構想が浮上した。この構想は国際キリスト教大学の設立とも絡み合って検討されたが、結果的には設備、陣容の不備などから実現を見なかった。

幻に終わった基督教大学構想ではあったが、文部省に認められなかった設立趣意書の中に、いかにも黒澤らしい堅い信念を読み取ることができる一節「大学開設に対する後援」がある。

それによれば「基督教酪農大学建設奉仕会」を立ち上げて、その活動によって施設を整備するというのである。「この奉仕会は『野幌機農学校』の卒業生とその前身であった『北海道酪農義塾』の卒業生約1万名によって組織せられ大学建設を後援推進するために、主として労働奉仕をなすものである。事業内容 ⑴建物敷地の地均し ⑵建築用の煉

酪農学園大学校舎群 背後に野幌森林公園

瓦焼き　(3)煉瓦積その他建築工事の労力奉仕　(4)竹木等建築資材の採取並びに運搬」とある。このような黒澤の熱い思いがあってこそ、苦難の道をたどりながらも大学部、短大、大学へと発展を遂げ得たものと推量される。

この大学構想の学長候補として、黒澤の強い要請で赴任したのが樋浦誠である。樋浦は1949(昭和24)年、岐阜農林専門学校の教授を辞して渡道した。燃えるような農村愛は一研究者に止まることを許さなかったのだ。だが、あまりの準備不足に愕然とする。

樋浦 誠

1949(昭和24)年7月、辛うじて設置認可された酪農学園大学部(各種学校)の学長に就く。樋浦は「農村青年の無知からの解放」を叫び、就学できない農村青年を対象にした三愛塾を全国的に展開するなど、農村青年の「科学への目覚め」をひたすら願い行動した。

樋浦は学生に対し「犬や豚には理想がない。しかし、人間には理想がある。理想は人間の特異性である。理想なき人は人らしくない人である。」「君たちは大供(おおども)である—まだ一人前の人間でない—」などと迫り、日々の研鑽を促した。黒澤もまた「希望のない人生は生ける屍である」「希望も理想もない人生ほどつまらないものはないよ、君たち」を口癖にした。

酪農学園が創立されて80年、建学の精神に「三愛主義と健土健民」を置き、一貫して人格の陶冶を重視する教育を貫いてきた背景には、黒澤、樋浦の未来を託す青年への強い期待があったればこそである。

酪農学園の更なる発展を担う関係者には、人格教育の継承とその深化への努力が求められている。

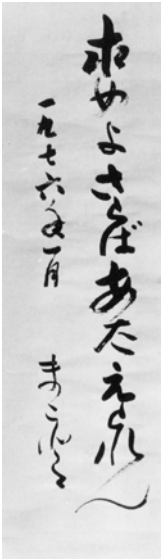
☆ 樋浦　誠

樋浦誠は１８９８(明治31)年、新潟県西蒲原郡鎧郷村(現新潟市)の庄屋に生まれた。北海道帝国大学に進み、宮部金吾に師事して植物病理学の道に進む。宮部は札幌農学校の二期生で、新渡戸稲造や内村鑑三らと同期。植物病理・菌類学、北方の植物相などの研究に多大な功績を残し、１９４６(昭和21)年に文化勲章を受章した。

樋浦は、亜麻や粟、甘藷、ナタネなどの病原菌類の研究に精力的に取り組み、植物病理学に化学的手法を取り入れた草分けとされている。研究の集大成としての著書「植物病原菌類」(１９３９年初版養賢堂)は、改訂再版を重ね今もって専攻学徒のテキストとして活用されている。

樋浦は、宮部の推薦を得て26歳の若さで岐阜農林専門学校の教授に就任する。１９４９(昭和24)年、予定されていた新制岐阜大学農学部の教授の席を捨てて、黒澤酉蔵が構想した「野幌の地に基督教酪農大学の設置を」に賛同して単身渡道した。

黒澤は、樋浦を学長予定者として招聘する際、内村鑑三著「デンマルク国の話」(岩波文庫)を朗々と読み上げたという。樋浦は後年、「あの壮志に燃えた情熱は甚だ感銘深く、今も眼前によみがえる」と回想している。



追憶集より

当初の大学創設構想は実現を見なかったが、樋浦は酪農学園短期大学部学長、同短期大学学長、

酪農学園専務理事、野幌機農高等学校校長、酪農学園大学学長として建学の基礎を築いた。

樋浦は、研究・教育・三愛塾と、その燃えたぎる情熱のタネを余すところなく蒔き、「必ずや、日本の歴史に『農村時代』が招来されるに違いない。だが、この重大な農村社会における青年の指導を一体誰が受け持っているのだろうか。かかる重大な仕事を、果たして誰が積極的にやっているのだろうか」と自問しつつ、「選ばれて優秀な人達にのみ農業が可能であるような時代に変わりつつある。静かなる変革である」と予言し、１９９１(平成３)年93歳の生涯を閉じた。

科学は体験や実験を通して
現状の仕組みを究明する仕事である
科学の知識が深く高くなるほど
新しい疑問を持つようになる
解(わか)れば解るほど解らない世界が
新しく展開してくる

前方：酪農短大校舎　　後方：大学校舎

黒澤酉蔵の主な業績

年　　次	事　　柄
＜出生から渡道＞	
1885（明治 18）	茨城県世矢村生まれ（現常陸太田市）
1900（　同　33）	東京の神田数学院・正則英語学校で苦学
1901（　同　34）	田中正造の明治天皇への直訴後、足尾鉱毒被害民救済運動に挺身
1905（　同　38）	母の死を機に渡道を決意、宇都宮牧場の牧夫見習い
1909（　同　42）	キリスト教の洗礼、酪農家として独立
1982（昭和 57）	２月７日永眠
＜教育活動＞	
1933（昭和　８）	北海道酪農義塾創設
1942（　同　17）	野幌機農学校設立
1948（　同　23）	野幌高等酪農学校（通信教育）設立
1948（　同　23）	北海道酪農青年研究連盟の設立を後援（現日本酪農青年研究連盟）
1949（　同　24）	酪農学園大学部設立
1950（　同　25）	酪農学園短期大学設立
1954（　同　29）	北海道農業教育振興会会長
1957（　同　32）	（財）酪農育英会設立
1958（　同　33）	三愛女子高等学校設立
1960（　同　35）	酪農学園大学設立
1971（　同　46）	「田中正造全集」の出版決意
＜産業活動＞	
1925（大正 14）	全道の酪農民を対象にした北海道製酪販売組合を創立（酪連に改組）
1926（　同　15）	農業組合中央会道支会長（現北農中央会）
1940（昭和 15）	北海道興農公社社長
1950（　同　25）	（株）雪印乳業相談役
1960（　同　35）	北海タイムス社社長
＜政治活動＞	
1924（大正 13）	道議会議員
1942（昭和 17）	衆議院議員
1945（　同　20）	日本協同党を結成、代表世話人
1946（　同　21）	公職追放
1950（　同　25）	公職追放解除
1951（　同　26）	道知事選に立候補、落選（以後、直接的な政治活動を断つ）
＜北海道開発活動＞	
1923（大正 12）	北海道畜牛研究会をつくりデンマーク農業を紹介
1924（　同　13）	第２期拓殖計画を主導（牛馬 100 万頭計画）
1934（昭和　９）	北海道農業革新期成会を結成
1945（　同　20）	戦災者北海道集団疎開 100 万人案を建言
1954（　同　29）	北海道開発審議会会長（８期 16 年）

黒澤酉蔵翁…生存者叙勲の受章

1964 年　勲３等旭日中綬章（酪農振興に尽力　79 歳）
1970 年　勲２等旭日重光章（北海道開発の推進　85 歳）
1981 年　勲１等瑞宝章（北海道開発の父・酪農学園の創立　96 歳）

第２章　酪農学園　創立前史―北海道開拓と酪農人

１　北海道の黎明期

北海道に国策として本格的に開拓の鍬がおろされたのは、１８６９(明治２)年、明治新政府が開拓使を設置したことから始まる。鎖国によって遅れをとった軍事力と経済力の強化策(脱亜入欧)として、これまでほとんど無視してきた北辺の地(蝦夷地)の豊富な自然資源に注目したのだ。

時を同じくしてロシアは、１８５０年代(江戸末期)からアムール河左岸を支配下に置き、河口の港(ニコラエフスク)を太平洋方向への進出(南下政策)拠点とした。ロシア(シベリア)艦隊寄港(食糧調達・載炭・休養など)の格好の場所として不凍の箱館(函館)港に触手をのばす動きにあった。樺太の国境問題も無視できないものになっていた。

明治政府は、このような動きに警戒心を強め、北辺の宝庫を守るために屯田兵を送り込むことになった。１８７４(明治７)年、黒田清隆開拓使次官(後に長官)の建言による。

このような背景の中で、明治政府は北海道の内陸部の開発(主として農業による定住)を急ぐために、国有地化した未開地を一定の条件を満たせば無償で貸与・払い下げるとする政策(土地売貸規則・土地払下げ規則・国有未開地処分法)を講じた。

移民の形態は、独立移民(個人)、士族移民、屯田兵、民間集団移民などに大別されるが、とりわけ

屯田兵制度は、武士の身分を失った士族の授産(失業対策)、北方警備、開拓を兼ね備えた政府の庇護政策として展開され開拓史に残るものになった。民間集団移民は、維新以後の資本主義の進行による農村不況と貧農層の構造的窮乏からの解放を旨とする結社(社会的地位の高い人物が組織)が率いて渡道した集団である。

ちなみに酪農学園近傍の開拓集団は、屯田兵による江別兵村が１８７８(明治11)年、野幌兵村が１８８５(明治18)年の入植、民間集団移民の北越殖民社が本格的に入植したのは１８９０(明治23)年である。

移民団による大農場方式の発想は、佐藤昌介(札幌農学校1期生・北大初代総長)によるものとされている。留学から帰った佐藤が、アメリカで目の当たりにした大規模農場を北海道農業の将来にダブらせたのである。しかし、地主と小作という関係で構成されたこれらの移民集団農場は、過酷な自然条件に加え、小作農民の労働条件、不便な交通運搬などの悪条件が重なり、時代の趨勢の中で解体していく道をたどった。小作争議が頻発したのだ。

２　アメリカを範とする畜産奨励

開拓使の発足当時、実質的に采配を振るったのは次官の黒田清隆であった。黒田は北海道開拓の範をアメリカに求めることを発意し、１８７１(明治４)年、自ら渡米し厚遇をもって時の農務局長官ホーレス・ケプロン(Horace Capron)を開拓使顧問として招聘することを実現させた。

ケプロンは１８０４(文化元)年、マサチューセッツ州の豪農に生まれ、軍人・政治家の要職を経て

政府の農務局長官という高職にあったが、黒田の懇願により渡道し、１８７５(明治８)年に帰国した。ケプロンは未開の道内をつぶさに踏査し、その業績は土木道路事業、鉱工業、農業、水産加工業など多岐にわたっている。

とりわけ農業については、気候・土質などから稲作には不適とし麦作を中心とする作物の栽培を論じ、特に広がる広野を活かした畜産の振興を献策した。開拓使はケプロンらの建言を受けて、内地(本州)からの移住民が願う稲作を厳しく取り締まる策を講じた。それでも移住民の国元(出身地)の農業(米づくり)の再現熱は止むことがなかった。

過熱した稲作願望に抗しきれず、道庁が中央から稲作の権威、酒匂常明を財務部長に招き、やむなく方向転換したのが１８９２(明治25)年である。冷害・凶作の歴史をたどることになる。

ケプロンの建言を受けた開拓使は、東京に農耕園(官園)を開き、北海道のために欧米から輸入した各種の種苗や農機具、家畜の中継農場を設置した。併せて道内の七重、札幌、根室に官園が設置された。なかでも畜産については、１８７６(明治９)年に真駒内牧牛場が開設され、アメリカ農業の本格的移入が始動する。

真駒内牧牛場開設の中心をなした人物は、エドウィン・ダン(Edwin Dun)である。ダンは１８４８(嘉永元)年、アメリカ・オハイオ州に生まれ、大学を中退して父親が経営する大畜産農場の手伝いをしていた折、北海道に移送する牛(ショートホーン)や緬羊などの面倒を懇願されたのである。事故もなく横浜に上陸したのが１８７３(明治６)年、ダン24歳の青年であった。

輸入した家畜は、東京の第三官園に入舎し、北海道に移送する準備が行われた。ダンの来札は

１８７６(明治９)年６月。真駒内牧牛場建設の陣頭指揮を執った。約81haの原野を切り拓き飼料畑とし、搾乳場やバターなどの製造所を配置するなどこれまで国内にはない目を見張る牧牛場を実現させたのだ。北海道における洋式畜産、酪農の黎明である。

３　寒地農業の行き詰まり

ケプロンの建言とダンの登場により、北海道はその自然条件に合った畜産の適地として方向づけられたが、本州から移住した農民は、国元(出身地)の延長農業への願いを捨てることなく穀菽(こくしゅく)(米・麦・豆中心)農業にこだわり続けた。

開拓当初は、気象条件は厳しいものの開墾地は概して地味は豊沃で、地力の維持増進には意を払わない略奪農法でよしとしていた。特に稲作については、ケプロンらの「ここに稲田を作らんとするは最も迂(う)(事情に沿わない)なるを知るべし」の忠言にもかかわらず、寒地向け種籾の改良や管理技術の向上によって、明治末期には道央まで稲作を可能にした。

道内の水稲作付け面積は、１８９０(明治23)年に函館を中心に約２０００ha程度であったものが、１９１２(大正元)年には４５０００haを超えるものになった。だが寒地の厳しい自然条件によって、冷害凶作という苦難の歴史をたどることになる。

北海道農業の主流をなす豆類など畑作にあっても、本州農業の模倣の域をでず、単作・連作によって地力の減耗は際立つものになった。ケプロン、ダンによるアメリカ式の有畜農業の展示指導は、やがて行き詰まるであろう北海道農業の将来を予言するかのようなものであった。

明治中期に既に表面化した「開拓―略奪―行き詰まり」の寒地・北海道の農業は、その後「根本的な立て直し」を合言葉に有畜農業奨励の旗が振られることになる。特に乳牛飼養を主とする酪農経営の導入政策が、北海道農業立て直しの主役となる。北海道に限らず、わが国の畜産は、役馬(農耕・軍用)、役牛(農耕・荷役)の飼養が主体であった。

(注)「酪農」という用語は、いつ頃から使われだしたのかに諸説があるが、「北海道農業発達史・上巻」(１９６３年北海道総合経済研究所)には次のように解説されている。

①「酪農」はDairy Farmingの訳語で「乳牛飼養経営」あるいは「専門的乳牛飼養経営」というのが正確。「酪農」は「乳牛の飼養・その生産物の流通・加工」を総じたものである。

②「酪農」という言葉を最も早く用いた刊行物は、ウィリアム・ユーアット(イギリス人)の著書を知識四郎が翻訳した「酪農提要」(明治19年)であろう。

③ 雑誌・資料類では、明治24年以降の『牧畜雑誌』に宇都宮仙太郎が牧童と号して「酪農」の用語を使って論考を載せている。またこの1～2年前ごろに埼玉県で刊行した雑誌に『酪農のすゝめ』があった、といわれる。

4 北海道酪農の先達たち

エドウィン・ダンの指揮の下で、真駒内牧牛場が開設されて5年後の１８８１(明治14)年、札幌農学校２期生の町村金彌が畜産の道に志を立てて勤務する。町村は経済的な事情もあり、官費生を募集していた札幌農学校に入学を決意した。同期生には、新渡戸稲造(国際連盟事務次長)や内村鑑三(思想家)、宮部金吾(植物学者)、南鷹次郎(北大2代目総長)など歴史に残る逸材が机を並べている。

エドウィン・ダン

町村金彌

ダンは牧牛場での任務の傍ら、農学校での教師も兼ね畜産技術の教育に励んだ。町村はダンの影響を強く受け、卒業と同時に開拓使御用係として真駒内牧牛場に職を得た。１８８１(明治14)年から１８８６(明治19)年までの5年間の勤務を通じて、アメリカ式の大規模農場経営を体得し、畜産物の加工技術も習得した。

１８８５(明治18)年、町村は宇都宮仙太郎を牧夫として採用する。また長男敬貴を札幌農学校に進ませ、さらにアメリカ・ウィスコンシン州立農科大学で先進国の酪農を学ばせた。町村金彌の蒔いた一粒の種は、やがて多くの酪農の先達を生み、酪農学園の創立者黒澤酉蔵を招来することになる。

「一粒の麦が地に落ちて…豊かに実を結ぶ」の聖句のままにである。

以下、窮乏の酪農民の組織化と酪農学園創立の精神的支柱として、

酪農学園史に銘記しておくべき先達の人となりを限定的に紹介する。

(1) 宇都宮 仙太郎―空樽自鳴（くうそんじめい）

１８６６(慶応2)年、大分県下毛郡大幡村(現中津市)生まれ。中津中学校で学ぶうち同郷の先輩福澤諭吉の「洋学を学ぶ進取の気風」に強く触発され、独立自尊の精神を生涯貫き、「空樽自鳴」―中味が空っぽな者ほどわめき立てる・空の樽はたがが外れて崩れる―を自らの戒めとした人物である。

中学を終えた宇都宮は、政治家を目指して上京し、神田共立学校に入学したが政治志望の学生の多いことに気づき諦めることになる。そんな折、体が弱かった宇都宮は下宿屋の隣にあった牛乳屋の牛乳を飲むことを勧められた。後に外務大臣になる青木周蔵の弟が営む牛乳屋であった。

畜産業の大切さを知った宇都宮は、１８８５(明治18)年、エドウィン・ダンの指導の下で、真駒内牧牛場の場長格の任にあった町村金彌に請うて牧夫になった。やがて本場アメリカの近代酪農を体験したいとの思いを強くし、１８８７(明治20)年、横浜から20日間の船旅でカリフォルニアに着き、ワシントン州の農場やイリノイ州のガラー農場で働き、生涯の師としたウィスコンシン州立大学のヘンリー博士(農学部長)に巡り合う。

宇都宮 仙太郎

ヘンリー博士の世話を得て、同大学の酪農短期講座での学びが許され、キング式牛舎の設計者キング博士や牛乳脂肪検査法を考案したバブコック博士など酪農の世界的権威から直に指導を受けることができた。

１９０６(明治39)年、有能基礎牛(ホルスタイン)の購入のため再び渡米しヘンリー博士に再会した際、ヘンリー博士の「アメリカ農業は、

すべからくデンマークに学ぶべし」との記念講演に電撃的感動を覚える。後年、全国各地の農業指導者が「酪農王国、デンマークを範とすること」を標榜し、とりわけ北海道における酪農の先達たちが「北海道を東洋のデンマークに」の壮大な旗を振る源流になった。

１８９１(明治24)年、札幌市北１条西16丁目付近（現在の知事公館の一画）で酪農(搾乳販売業)を自営し、その後一時東京に進出するが、１８９８(明治31)年、再び札幌に戻り牛乳やバターの販売を始めた。１９０２(明治35)年には、札幌郡白石村に約20haの土地を取得し、アメリカ式の本格的な酪農を開始した。

宇都宮は仲間とともに「札幌牛乳搾取業組合」を結成し、組合長として北海道酪農発展の基礎づくりに努めた。この組合は、開拓使札幌麦酒醸造所(後のサッポロビール)からビール粕を共同購入する組織でもあった。毎月４日に代金の精算に集まる組合員に、乳牛の改良や管理技術、アメリカ・デンマークの酪農事情などを講話し、組合員を啓発したのだ。

札幌牛乳販売組合(１９１５年)、札幌酪農組合(１９１７年)の設立に加え、全道の酪農民を対象にした北海道製酪販売組合(１９２５年)、同連合会(酪連１９２６年)の会長として酪農民の組織化に心血を注ぎ「酪農の父」として畏敬され、１９４０(昭和15)年、74歳の生涯を閉じた。

酪農学園の緒「北海道酪農義塾」は、酪連の決議によるもので、専務理事黒澤酉蔵の農民教育への強い熱意を宇都宮ら酪連幹部が受け止めたものである。宇都宮は副理事長として、黒澤の描く独自の農民教育の成就を願い支援した。

⑵ 深澤 吉平(きっぺい)―心の長者たれ

１８８５(明治18)年、山梨県巨摩郡南湖村(現南アルプス市)生まれ。同じ年生まれの黒澤酉蔵の盟友

として酪農、酪農学園の発展に貢献した。「心の貧乏になるな、心の長者になれ」は、農民の幸せをひたすら願う深澤の信念であった。

深澤は同村の高等小学校を卒業後、塾に通って就学に努めていたが、近所に牛乳屋があったことから乳牛に関心を持ち、ここに勤めることになった。後年酪農振興への思いを強くする素地である。一方で、内村鑑三の無教会派のキリスト教主義に傾倒し、宗教や哲学に深い関心をもった。二宮尊徳の報徳主義にも共鳴するなど幅広い人格が形成されていった。

１９０３(明治36)年、父に帯同して空知郡音江村(現深川市)に入植した。深澤19歳の春である。一家は水車小屋を仮住まいに開拓に汗するが、音江村役場に不祥事が起こり吏員の補充として急遽役場職員に任用されることになる。

その明晰な頭脳と非凡な手腕によって、まもなく上席書記、収入役を経て29歳の若さで村長に任命された。１９１４(大正３)年である。繰り返される悲惨な冷害凶作を体験し、とりわけ１９１３(大正２)年の大凶作は、上川・空知など稲作の適地とされた地帯でさえ水稲の収穫が皆無で、秋になっても穂が直立のままという惨状をもたらした。

深澤吉平

深澤と黒澤酉蔵の出会いはこの時であった。既に洗礼を受け教会活動をしていた黒澤は、被害地に義捐の金品を送る活動を全国的に展開していた。草の根・ドングリ・藁(わら)を粉にして作った団子を路傍で掲げ、餓死寸前の農民救済を訴える黒澤の熱弁は、聴く者の肺腑をえぐるものがあった。この時黒澤は空知方面の慰問に出かけ、深澤と面談する。

年齢も宗教観も同じ、冷害を克服し寒地農業を安定させるためには、酪農を中心とする有畜農業でなければならないことでも意気投合した両人は、以来生涯の盟友として行動を共にし、後年深澤は、黒澤が取り組む農民教育のよき理解者となった。

深澤は村長として、「音江畜産振興計画」を立案して、乳牛・緬洋・鶏の飼養を奨励し、音江を北海道のモデル酪農村として再建させた。１９２２(大正11)年、２度目の現職村長のまま、北海道長官宮尾舜治に起用されて1年2か月に及ぶデンマーク留学の機会を得た。

宇都宮仙太郎の啓発が基になった「デンマークに学ぶべし」の機運は、宇都宮の娘婿出納陽一の留学、深澤を含む4人の帰国報告、さらには5年間契約で全額道の公費で招いたデンマークの2戸の農家(フェンガー・ラーセン)の経営実演などを通じていやが上にも高まり、北海道における有畜・酪農振興への気運は盛り上がった。

宇都宮、黒澤らの「北海道を東洋のデンマークに」の思いは、道庁(官)をも動かし、「北欧に学べ」を持論とした宮尾長官は、ドイツの畑作農家2戸をも招くという気の入れようとなった。黒澤の「水田亡道論」による酪農振興の熱い訴えは、北海道農政の柱となり花開いていくのである。なかでも第21代長官佐上信一は、不毛の根釧原野を大規模酪農地帯へと誘導する功績を残した。北海道酪農義塾設立の際、黒澤に請われて現職長官のまま理事長を引き受けるほど、窮乏を救う農民教育にも理解を示した。

深澤は１９２４(大正13)年、道議会議員に当選し、黒澤も初当選する。深澤・黒澤の道政の初仕事は、政府の第2期拓殖計画「牛馬１００万頭増殖計画」の策定であった。相次ぐ冷害凶作を克服するためには、農業経営の中に牛馬を導入させるという政策を不眠不休で立案した。酪農の位置づけを明確に

し、その奨励、補助政策への道を拓いたのだ。

深澤は音江村長、北海道議会議員、衆議院議員など公人として北海道農業の発展に大きな足跡を残したが、黒澤の同志として北海道製酪販売組合連合会や北海道興農公社、北海道農材工業株式会社などの設立とその運営にも奔走した。

１９５７(昭和32)年12月、後事を黒澤に託して72歳の生涯を閉じた。深澤は常に農村青年の教育に深い関心を持ち、北海道酪農義塾の創立に際しても積極的に尽力し、生涯を閉じるまで酪農学園の理事として学園の発展に貢献した。

⑶ 佐藤 善七―天自助者助

１８７４(明治7)年、北海道有珠郡伊達町(現伊達市)生まれ。祖父武治は伊達藩の支藩である亘理藩士であったが、藩主伊達邦成(くにしげ)が率いる移民団として伊達に入植した。１８７３(明治6)年である。１８７６(明治9)年、札幌に山鼻屯田兵村が開設され、父幸内が志願したことから一家は札幌に移住した。

佐藤は終生この地に軸足を置いて、北海道農業と酪農学園の発展に貢献した。佐藤が貫いた信条は、「天は自ら助くる者を助く」―自己の力で努力する者には天は必ず幸福を授ける―であった。明治維新の直後、「西国立志編」として翻訳されたサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles)の世界的名著「自助論」の訓である。日本の近代化・自立を志す青年たちの心に深く刻まれた格言である。

１８９０(明治23)年、札幌創生小学校高等科を卒業し、文官試験に合格して道庁官吏となり財務分野などで手腕を発揮した。だが１９００(明治33)年、子供の頃傷めた右脚が骨膜炎になり、大腿部から切断するという悲運にあった。

佐藤善七

退院後、札幌の北１条西８丁目付近で生活し人力車で通勤するが、経済的負担や健康上の理由から道庁を退職する。北１条付近には、宇都宮仙太郎が経営するアメリカ式の牧場があり、酪農に関心を持つきっかけになった。

道庁を退官した佐藤は、かねてからの計画通り山鼻村（札幌市中央区南16条西８丁目付近）に「自助園」と名付けた果樹園を開いた。最初は収入もなく貧農に甘んじるが、徐々に経営を拡大安定させる。

１９０９（明治42）年、黒澤西蔵は宇都宮牧場での牧夫見習いを終えて、独立自営の準備を始めていた折、山鼻（現札幌市中央区南10条西８丁目付近）の農地を世話したのが佐藤であった。

佐藤と黒澤は家も近く、同じキリスト者であることなどから意気投合し、親交を深めていく。しばしば訪れる宇都宮との交わりも深まり、聞かされる酪農の魅力に引かれていくのである。

１９１５（大正４）年、自助園は札幌市南の沢に牧場を開設し、長男貢のアメリカでの酪農留学からの帰国を待って本格的に酪農経営に転化し、１９２４（大正13）年には乳牛30余頭規模までになった。

そのころ北海道酪農は受難の時で、宇都宮・黒澤・深澤らの先達によって酪農民の組織、北海道製酪販売組合が立ち上った時でもあった。佐藤善七・貢親子は、この組合事業に賛同し善七は常務、貢はバター製造の技師として重責を担うことになる。戦後の雪印乳業発展への緒である。

佐藤は札幌市市議会議員の公職のほか、札幌信用金庫、北海道特殊農機製作所、札幌酪農牛乳株式会社設立の中心的役割を果たすなど北海道の経済界、酪農界に計り知れない功績を残した。

佐藤はこのような幅広い活躍のなかにあって、絶えず農民教育の重要性を訴え、創立された北海道酪農義塾の常務理事となり、その後の野幌機農学校の設置にも黒澤の片腕となった。さらに戦後は「日本を亡国より救い平和な日本として新生する道は、キリスト教主義による教育以外にない」と説き、酪農学園の教育理念をキリスト教の聖書におくことに尽力した。１９４９(昭和24)年に酪農学園の理事長に就任し、１９５７(昭和32)年、83歳の生涯を閉じるまで学園の発展を願い続けた。

佐藤の葬儀に際し黒澤園長は「酪農学園の慈父とも慕い、柱石とも仰いだ先生を失ったことは、惜しみても余りあり悲痛の極みですが、先生の学園に残された不朽の功績を一層輝きあるものにすることを誓っております」と述べ、その偉大な足跡に深い感謝の意を表している。

⑷ 町村 敬貴(ひろたか)―「土・草・牛」づくり

１８８２(明治15)年、真駒内牧牛場で父金彌の長男として生まれた。誕生の12月20日は猛烈な吹雪で、産婆の迎えをかってでたのは牧夫として働いていた宇都宮仙太郎であった。わが国酪農の黎明期を切り開いた先達の、運命の出会いである。

１９０３(明治36)年、町村は札幌農学校農芸伝習科に入学し、上白石(現札幌市白石区菊水)から通学していた。近くに宇都宮牧場があり、朝夕必ず乳牛の管理を手伝うという牛好きになっていた。

卒業後、宇都宮の世話を得てアメリカ・ウィスコンシン州のラスト牧場での実習の道が開かれた。ウィスコンシン州は酪農の先進地域で、「良い草は良い土壌から、良い草から良い牛を」の酪農の真髄を体得する。渡米４年後に、宇都宮も学んだ州立農科大学の短期コースに入学が許され、「酪農への道」を確固たるものにする。

町村敬貴

町村は１９１２(大正元)年、10年にも及ぶアメリカでの酪農修業を終えた。東京で牛乳搾取業に関わった後、本格的な酪農経営を決意して渡道を決意する。金彌が入手していた樽川(現石狩市花川)の地に農場を拓いたのだ。アメリカからホルスタインを輸入し、乳牛の改良繁殖に努めたが、この地はひどい泥炭地で、アメリカで習得した土地改良技術もままならず悪戦苦闘する。

１９２８(昭和３)年、江別市対雁(ついしかり)(現同市いずみ野)に移転した。ここは重粘土で排水が悪く、ひどい酸性土壌であった。町村は早速煉瓦工場に土管を注文し、アメリカで学んだ暗渠排水を実践した。酸性矯正もアメリカで目の当たりにした石灰粉を撒くことを実践した。佐上信一北海道長官を説得して粉砕機を導入するという本格的なものであった。

後年自らの発議で、北海道・酪連・乳業会社が大同団結して設立した興農公社の主要な事業に、「土管暗渠による排水・石灰粉撒布による酸性矯正」を掲げさせ、道内の劣悪畑地土壌の改良を積極的に推進した功績は大なるものがある。

町村農場の「土づくり」は、10年の歳月を経て実を結び、生育が不可能とされた栄養価の高いアルファルファの栽培「草づくり」を成功させるに至った。北海道農業にとって、いかに地力の増進が重要であるかの範としたのである。酪農学園(研究者　原田勇)でのアルファルファ栽培の科学的研究を先導したともいえる。

一方町村は生涯で12回も渡米して、優秀なホルスタインの種牛、基礎牝牛の導入に努め、これを更

に改良育成して全国の酪農家に供給した。これによってわが国の酪農経営に、乳量・乳質の著しい向上をもたらした。町村が「牛の神様」として敬愛されている所以である。町村は戦後、勅撰の貴族院議員や参議院議員として国政にも参画し、「北海道開発へのビジョン」を熱く語り残している。

黒澤は、同世代でもある町村の酪農実践を、酪農民の組織運動や経営改善、更には酪農学園の教育実践の拠り所として尊敬する良き同志であった。

北海道酪農義塾を創立してから10年、黒澤酉蔵は戦雲の厳しさが増す状況下を思い、食糧増産に強い使命感を持った。そのためにもより徹底した実学教育の場を求めた。現在の文京台キャンパス(江別町西野幌)である。

この地を斡旋したのが町村であった。１９４２(昭和17)年1月早々、厳寒積雪1メートル以上もある畑地を自ら馬橇を御して案内している。この地で営農していた農家の立ち退きにも尽力した。町村の支援なくして今日の酪農学園はないのである。

(5) 佐藤貢(みつぎ)―天地人

１８９８(明治31)年、山鼻村東屯田で佐藤善七の長男として生まれた。貢は小学校5年生の夏、急性肋膜炎に罹り、高熱で医者に見離された。その時干したミミズを煎じて飲むことを勧められ、一晩で熱が下がり一命をとり止めた。貢は終生そのことに感謝し「私は天の時、地の恩(ミミズ)、人の恵みによって九死に一生を得たことを思うとその恩恵に感謝を忘れることができない」と述懐している。

貢の酪農との出会いは、病後健康のために勧められた牛乳配達であった。配達先を分けてくれたのが、既に牛飼いを軌道に乗せていた宇都宮仙太郎であった。裸足で朝霧の札幌市内を配達に回ったの

である。若くして生涯を酪農にかける決意の基になった。

貢は北海道帝国大学農学部農業実科を卒業後、父善七の「本場で畜産の勉強を」の勧めでアメリカ・オハイオ州立大学に留学した。ここの乳製品工場で働き酪農製造学を修めたことが人生を決定づけることになった。

１９２３(大正12)年、帰国した貢は、「自助園」で牧場を開きバターやアイスクリームの製造を始めた。１９２５(大正14)年、兵役を終えた貢は、善七や宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵らが酪農民の窮状を救うべく立ち上げた北海道製酪販売組合の技師としてバター製造をまかされた。

とはいっても資金繰りに苦しい組合は、施設は皆無であった。札幌市郊外(現厚別区上野幌)出納陽一が経営する出納農場の製酪所の一隅を借りてのスタートであった。バター製造の技師はただ一人、１台の手回しバターチャーンを腕がはれ上がるほど回し続けた。

佐藤 貢 酪連発祥の地にて(現札幌市厚別区)

貢はこの事業の開始に当たり、買入れ乳価は脂肪率によることを決めた。やがて全国の乳価はこの方式に改まっていく先鞭をつけた。また原料乳を輸送する際には、バターの原料となるクリームだけを分離して送ることを実行させた。輸送経費の削減はもとより、脱脂乳は子牛や豚に飲ませて活用すればいいとの考えからである。

製造されたバターの販路拡大は、組合専務の黒澤酉蔵が担った。黒澤は造りたまったバターをさばくため、東京・大阪・福岡など全国を行脚して販売促進に努めた。「品質が良くない」「包装・梱包に欠点があり」「海水塩の改善が必要」などといった厳しい指摘を克明に貢に伝えた。「ある日の夕暮れ、雨ゴザをかぶり豪雨の中を、まるでルンペンのようにズブ濡れになって店頭を訪ね歩いた」ことが、黒澤の誠意と熱意の現われとして語り継がれている。

貢と黒澤の息の合った「牛乳の付加価値を高め利益を酪農民に還元する」との乳製品製造への思いは、上海・南京・天津といった中国市場の開拓へと進み、１９３５(昭和10)年には、ロンドンへのバター輸出も成功させた。国産バターの品質の高さが先進国に認められたのだ。

無からスタートしたこの組合(１９２６年酪連)は、第２次大戦という政情不安の最中にあって北海道興農公社、さらには土壌改良や農機具製造、飼料作物の育種事業など寒地農業確立のための総合機能を持った北海道酪農協同株式会社へと発展する。だが戦後の過度経済力集中排除法によって、分割を余儀なくされた。

牛乳部門は、雪印乳業と北海道バターに分社され、貢は雪印乳業の社長に、黒澤は相談役についた。雪印乳業株式会社社史(１９６０年)に、貢は「当社は今日まで幾度か死生の間を彷徨、受難の苦しみを味わった…しかし百難を克服してきた」と述懐している。

佐藤貢は黒澤酉蔵の教育へのよき理解者として、また酪農学園の経営安定のために理事長(１９６６～91年)、副理事長、学園長、大学学長(１９６６～69年)、名誉理事長として今日の酪農学園発展の礎を築き、１９９９(平成11)年１０１歳で天に召された。

貢は黒澤について「彼には味方も多かったがまた敵も多かった。これは彼が所信をまげず急進的に邁進する性格であったことと、彼の高遠な理想と夢を理解し得ないためと、その主張の熱烈さに対する反動でもあったといえよう。しかしこれは時が解決する」と回想している。終生強い信頼の絆で結ばれていたのだ。

(6) 出納 陽一――無私淡々

黒澤酉蔵の同志として酪農学園発展の礎となり、献身的な生涯を送ったのが出納陽一である。出納の物心両面にわたる理解と協力なくして、北海道製酪販売組合(酪連に改組 戦後の雪印乳業株式会社)の隆々たる発展も、さらには酪農学園の今日もなかったといっても過言ではない。

発足まもない販売組合が、出納農場の一隅を借りてバター製造の緒についたことは前述(⑤佐藤貞)した。札幌村苗穂に開設した北海道酪農義塾が、１９３７(昭和12)年、実学教育の充実のために移転した実習農場も出納農場であった。出納が酪連に譲渡した農地、21haである。場所は白石村野津幌(現札幌市厚別区上野幌 雪印種苗株式会社所在地)だ。

出納陽一

その翌年には塾校舎もここに移転し、酪農学園が現在地に移転するまで、黒澤の目指す実学教育の拠点となった。出納は農場を酪連に譲渡した後、酪連に籍を置き酪農の発展のために日本国内はもとより満州にまで活躍の場を広げ、酪農青年の教育と酪農経営の指導に心血を注いだ。戦後は教員、理事として酪農学園の発展に尽力した忘れ得ぬ人である。

出納は１８９０(明治23)年、大分県南海部郡上野村(現佐伯市)に生まれた。長じて進学準備のために上京後、東北帝国大学農科大学(現北海道大学農学部)に入学し畜産科を専攻した。学生生活が宇都宮牧場の近くであったことから、仙太郎の教えを受ける機会が多かった。

卒業後は東京下板橋の愛光舎牧場に就職するが、ここの主人夫妻のお世話で仙太郎の次女琴子と結婚する。時あたかも、宇都宮や黒澤らを中心として、「北海道農業はデンマークを範とすべし」の機運が高まっていた折から、宇都宮は娘婿である出納を私費でデンマークに派遣し、デンマーク酪農の実際と経営技術の習得に当らせることになった。１９２１(大正10)年である。

宮尾舜治北海道長官が、前出の深澤吉平らをデンマークに派遣する1年前である。出納の妻琴子も宇都宮の計らいでデンマークに渡り、料理や家事など先進的な農村生活の実際を学ぶ機会を得た。宇都宮や黒澤ら酪農の先達たちは北海道畜牛研究会を組織し、これらの情報を基に「デンマークに学べ」の啓蒙普及に努めたのだ。

出納はこのデンマーク留学で、農村青年の教育に強い関心を持った。全国に開設されている国民高等学校が、短期教育でありながら祖国愛を基底にした人間教育に大きな成果を挙げていることに惹かれたのだ。出納はデンマーク興国の父として畏敬されているグルンドヴィと、その教えを国民高等学校の教育で実践したクリステン・コルの研究に没頭し、その紹介にも努めた。酪農学園の建学の精神「三愛主義」が、グルンドヴィやコルが提唱した「神を愛し　隣人を愛し　祖国を愛せよ」がベースになっていることを思えば、出納の果たした功績が改めて認識させられる。

酪連に譲渡するまでの出納農場は、酪農経営を成功させるということよりも、酪農青年に実習の場

を提供したり、女子青年にデンマーク農村の生活を体験させるという狙いの方が強かった。出納は昭和初期の農村の窮乏に応え、自らの経営農場を農村青年に供して豊かな農村の実現を願ったのだ。

１９４１(昭和16)年、出納は満州拓殖公社の招きで渡満して開拓移民の酪農指導に当り、終戦での帰国後は、佐賀酪農塾の塾長として酪農青年の養成に努めた。１９５３(昭和28)年以降は酪農学園短期大学教授、野幌機農高等学校の校長代理、酪農学園大学教授などを務め、経営が困窮のなか「いささかの名誉も待遇も求めず」、酪農学園の発展に貢献した。

黒澤は、出納の人柄について「実に善人で、根からの善人…」と追憶し、薫陶を受けた教え子たちからも、温厚柔和・無私淡々の信仰の人として慕われる生涯を送った。

(7) 黒澤 亮助―獣医学科の産婆役

酪農学園大学獣医学群獣医学類は１９６４(昭和39)年、難産の末酪農学部獣医学科として船出した。当時学園長・理事長の任にあった黒澤酉蔵は、全国唯一の酪農学部の教育領域を充実させるための主要な分野として、獣医学科新設の構想を持った。

昭和30年代になり、酪農家の戸数も飼養頭数も増加の一途をたどり始めた。当然のことながら現場に対応できる獣医師の需要も増すことになる。だが当時の獣医学系大学の卒業生は、公衆衛生や製薬会社、愛玩動物病院などへの就職が主流で、農村現場で臨床治療を目指す者はごく少数であった。

黒澤は酪農が将来、大規模経営に移行していくであろうことを見通せば、酪農家は飼養技術や経営分析のみならず、患畜の診断もできるくらいの総合的な知識や技術を身につける教育が必要である、との思いを強く持っていた。獣医師も家畜の飼養技術や経営指導ができるようでなければならないとも考え

黒澤亮助

た。農協など畜産の現場からも産業動物に対応できる臨床獣医師の養成を求める動きが出てきた。黒澤はこの機をとらえて、１９６３(昭和38)年９月、文部省に対して「国の畜産政策である規模拡大に応えるためにも、酪農に関わる獣医師の養成は急務である」ことを訴え、酪農学園大学酪農学部に獣医学科を新設したい旨の協議書を提出した。

ところが日本獣医師会や北海道獣医師会などの動きは逆で、優先すべきは「獣医学教育の年限延長による教育内容の充実」など獣医師の少数精鋭化を計るべし、というものだった。当然のことながら、大学の獣医学科の新設には猛反対の立場をとった。獣医師会は、黒澤らの数次にわたる協力要請に対しても、頑としてこれを受け入れることはなかった。

厳しい獣医学科の船出であっただけに、担当教員スタッフの緊張はなみなみならぬものがあった。「教育が軌道に乗るまでは定員40名で」を理事者側に要望し、これを実現させもした。この難産を極めた獣医学科を立派に育て上げる礎として、奮励したのが黒澤亮助である。

お粗末な施設と教員を束ねて、「虐めにあった妾の子(亮助の口癖)」である獣医学科の社会的評価の獲得に尽力した。獣医師国家試験の合格率を高めるために、学生を叱咤激励・特訓する先頭に立ち、その成果は注目されるものになった。

黒澤亮助は１８９１(明治24)年、黒澤酉蔵と同郷の茨城県に生まれた(両者には血縁関係はない)。１９１５(大正４)年、東北帝国大学農科大学畜産学科第２部(現北海道大学獣医学部)を卒業後、宇都宮仙太郎の「将来は牛の獣医が必要になる時代が来る」との勧めで、生活費の援助を受けながら東京の山

の手界隈の牛飼いを回って臨床見習いを体験した。庁立空知農学校などに勤務の後、母校の講師に迎えられ１９５５(昭和30)年の定年まで北大獣医学部に奉職した。その間、初代の北大獣医学部長や北海道獣医師会会長、日本獣医師会会長の重責を担った。

亮助は早くから酪農学園の教育に関わり、酪農短大の教育の充実や４年制大学の創設にも協力を惜しまず、副学長として学生運動対策にも奔走した。本大学の獣医学科新設に際しては、これに猛反対する獣医界との板ばさみになり、15年間務めた北海道獣医師会会長を辞任した。固い決意で本学獣医学科の新設に尽力したのだ。

研究室に閉じこもった「お座敷獣医」で、「理屈ばかりで馬１頭助けられないのは獣医ではない」との体験に基づく臨床重視の強い信念が、本大学が目指す獣医師教育に共鳴したのだ。若かりし頃、宇都宮仙太郎の導きがあったことも酪農学園との深い縁を感じさせる。

獣医界の重鎮、黒澤亮助の熱い思いなくして、本大学獣医学科の誕生も今日に至る発展もなかった。

第３章　酪農学園創立初期の教育

―北海道酪農義塾の理念と展開―

酪農学園の源流である「北海道酪農義塾」誕生までの創立者黒澤酉蔵の思いや、その時代背景、北海道製酪販売組合連合会(酪連)の決議、さらには先達の理解と支援などについては、1章で概録した。本章では、酪農義塾創設の理念や、開塾から閉塾までの教育展開などを総括する。

1　北海道酪農義塾の始動

１９３３(昭和８)年５月、酪連専務の任にあった黒澤は、原料乳の統制問題や製酪事業などに一応の目途が立ったことの機をとらえて、かねてから胸奥に温めていた酪農民教育の施設「北海道酪農義塾」開校の私案を開陳した。真駒内種畜場でのデンマーク会でのことである。

同席していた第21代佐上信一北海道長官も、私学教育重視の自説に符号するものとして賛意を示した。発起人は、北海道長官佐上信一、酪連会長宇都宮仙太郎、同専務黒澤酉蔵、同常務佐藤善七、道立農業試験場長我孫子孝次、道立種畜場長相原金治、北海道帝国大学教授上原轍三郎、デンマーク会出納陽一らであった。

黒澤が農民教育の必要性を強く意識したのは、苦難の道を辿った酪農民の組織化運動からであった。「自分が一番悩んだことは、農民は無知であるということである。にもかかわらず目先の欲は人一倍強い。誰が味方で、誰が敵かの判断さえつかない。…これはすべて無知のせいで、農民を責めてもしょ

うがない。それには教育以外にない。この農民を教育し、北海道をデンマーク並みの酪農国にするには、まず農民自身の魂と腕を鍛えることからはじめなければならない」

(1) 北海道酪農学校(酪農義塾)設立の趣意

酪連を主体にその設立を決意した幹部は、１９３３(昭和８)年８月、設立趣意書(全文「酪農学園史一」に収録)を作成し、関係機関(者)に協力を要請した。その要旨は、以下のとおりである。

① 酪農は北海道の気候風土に最も適し農業経営改善の要諦であり、農村の自立更生を策す核心をなすものであることは定論である。

② 今後の問題は、これを如何に普及させるかであって、本道農業の将来はその経営方法の指導と農民の努力如何にかかっている。

③ 本道には諸種の農事指導機関や農学校などがあるが、酪農に関する指導や教育のための施設はなんら見るべきものはない。

④ 青年は一国元気の中心であり、北海道の青年が真に結束し覚醒して本道更生の途に奮励努力すれば、農業は決して行き詰まることはない。いわんや本道は土地も広大で、酪農には好適な天恵を有している。

⑤ 経営は人にあり、火の如き熱と鉄の如き腕と、そして磐石不動の意志を持つ農村青年を養成する道場がないことは寂しい限りである。

⑥ 今日の農村において必要なことは産業組合主義の徹底である。資力のない農民の生きる途は、産業組合の発達充実によって協力共栄の実を挙げる以外にない。だが組合精神すら理解してい

ないのが実態である。

⑦ 今日の農村が沈滞しているのは、誇りとすべき質実剛健の気風が失われ、勤労を嫌いいたずらに救援助力に頼り、奮闘的精神が弛緩しているためである。

⑧ 特に前途有為な青年に対しては、新時代に処すべき確固不抜なる信念を与え、その勇気を鼓舞しなければならない。

⑨ 新しい農業の知識と技能とを与え、これを実地に経験体得させて真に農村更生の第一線に立てる教養を身につけさせなければならない。

以上のように農村青年、なかんずく実践酪農青年の養成が急務であることを訴えた上で、「北海道酪農学校(酪農義塾)はこの目的をもって設立し、自給自足の建前により実地に酪農業の経営をなし、農村青年の精神的道場たらしめんとするものである」としている。

その教育方針については、「先ず勤労によりて体力気力を養成し、我が国古来の国民精神を作興振作し、専ら人格の修養鍛錬につとめ、更に産業組合協同主義の教育を経となし、酪農業の教習を緯としこれを総合訓練して、真に郷党(郷里)の儀表(模範)たるべき農民を養成する」と明言している。

つづいて、9月5日酪連12回臨時総会において、「北海道酪農学校(仮称)後援に関する件」と「職員養成開始の件」が提案され、黒澤専務理事の詳細な説明、協議の結果原案通り承認された。黒澤はその提案説明のなかで、教育方針については実際に行ってからでなければ確定的なことは言えないがとしながらも、

① 農民の個性を作ることに重きをおく、即ち農民精神の涵養に重点をおくこと

②何事も組合主義でいくこと、即ち組合を中心とし組合主義の信念に生きること
③家畜、家禽等酪農に必要なる教育をすること

と説明している。

⑵ 酪農義塾の開設

酪連の臨時総会での原案可決を受けて、酪農義塾の経営は酪連とは別法人とし、酪連は毎年５０００円の経常費を支出することとした。また設備費は、篤志者から寄付を求めることとして開設を急いだ。

１９３３(昭和８)年10月１日、札幌村苗穂(現札幌市東区苗穂)の酪連敷地内に新築された塾舎に酪連、産業組合、集乳所職員ら25名を集め、修業期間１か月の短期講習を開始した。これが酪農学園誕生の緒である。

酪農義塾創設の主目的である農村青年に対する酪農教育は、翌１９３４(昭和９)年２月12日、全道から選抜された80名の生徒を迎えて始動した。全寮制による修業年限１か年の実学教育である。外泊は許さず、働き且つ学ぶという仕組みによって足が地についた中堅農民をつくり、自家の経営改善はもとより、適地適作による寒地農業確立の拠りどころとしての役割を担うことを期待したのだ。

教育・寮・食事の費用はすべて農場収入と酪連や有志の寄付に依存し、生徒からは一切徴収しないという徹底ぶりだった。この自給自足の実践は、戦後機農高校に継承されたが、新円切り替えやインフレーション等のため断念せざるを得なくなり、１９４７(昭和22)年度から生活費の一部を父母の負担とした(授業料は１９５０年度から徴収)。

酪連からの寄付は、零細な酪農家が出荷する牛乳代金の一部を積み立てた基金からのものだった。塾長としての黒澤は農業（酪農）の知識・技術を、実習を通じて体得させることはもとよりであるが、デンマーク興国の農民教育をモデルにした人間教育（農民魂の惹起）に重きをおいた。

２　北海道酪農義塾教育の展開と特質

⑴ 酪農義塾教育の展開

酪農義塾の教育機構は以下のとおりであった。

① 酪農科―将来自ら酪農に従事する者

② 製酪科―酪連や産業組合における技術、事務職員となる者

③ 補習科―随時酪農、製酪についての講習

の３科とし、教育は毎年２月から始め、翌年１月をもって終了とした。

１か年を３期に分けて、最初の３か月間は精神教育と基礎学習、次の６か月間は農場や工場での徹底した実習による体力強化と技術の習得、残りの３か月間は、この間の反復補修とした。

酪農科は農民教育、製酪科は酪連の従業員教育で、職業も身分も異にするものであったが、目指すところはただひとつ「酪農という寒地農業建設の戦士としての自覚と信念を植え付ける」とするものであった。

酪農科生の入塾年齢は、満17歳以上20歳未満、「身体強健・思想堅実」で産業組合長、町村長、農会長、青年訓練所、酪連等の推薦者とした。そのねらいは、

①義務教育卒業後、農業について実地に体験（２年以上）を積んでいること（酪連推薦者除く）

②満16歳と17歳の頭脳には、物事の把握消化に大きな格差があること

からであった。

１９３６（昭和11）年からは、苗穂の塾舎を活用して冬季学校を開設し、農村青年に対する酪農教育を展開した。この冬季学校は、わずか１週間単位の合宿教育であったが、行き詰まりにあえぐ在来農法からの脱皮を図るために、進んで行動する酪農青年を育成しようとするものだった。合理的な寒地農業の確立発展を願う酪農義塾の記念事業として開校したものだ。

義塾生（船本松良）が残した講義録　1937年

入学者は町村長、農会長、青年学校長等の推薦による年齢満17歳以上30歳以下の青年男子で、実際に農業に従事している地方の中堅者に限るとした。１９３８（昭和13）年からは女子部も開設され、生活・家計の合理化や食生活の改善運動にまで踏み込んだ。さらに道内各地にも冬季学校を設けて講師を派遣し、１９４４（昭和19）年まで継続実施された。その受講人員は１１１４名を数えた。

これらの修了生は、国の農山漁村経済更生運動とも連動した酪農経営合理化運動の実践・先導役を担うことにもなった。酪農経営合理化運動は、１９３７（昭和12）年、その前年に勅使が親しく酪連事業を視察されたことを記念して、黒澤らが発案した運動である。疲弊する農村経済の建て直しのために、酪農経営の体質改善「三立主義―食糧・

飼料・肥料の独立―」・「牛乳の増産」・「牛乳統制の強化」・「集乳所の整備」を全道的に展開するものだった。黒澤はその実効を期するために、くまなく実行組織を設けたが、酪農義塾の卒業生や冬季学校の受講生は、その中核となって活躍した。

⑵ 酪農義塾教育の特質

酪連の承認を得た酪農義塾設立趣意書の表題は、「北海道酪農学校（酪農義塾）設立趣意書」となっている。このことについて黒澤は、「ようやく知れ渡った農業組織としての酪農は、府県流の主穀生産農業よりもはるかに高等、複雑な経営です。これを本道独自の農法として広める使命をもった青年の養成機関として酪農義塾は誕生したのです。この塾はもともと『北海道酪農学校』として正規の教育機関として発足させたかったのですが、それでやるとどうしても文部省の基準に従う必要が出てきますし、それではこちらのねらうところが死んでしまいます」（北海道開発回顧録）と回顧している。

黒澤は全国的な農民教育の動向を見極めながら、あくまでも北海道農業の特性を生かす酪農振興のための農民教育にこだわりを持ったのだ。酪農義塾の特質は次の３点に集約される。

① 少数精鋭主義（酪農自営とともに地方の指導者になるための厳しい選抜）

② 全寮制主義（教師と生徒が寝食を共にした人間教育）

③ 実学主義（酪農の経営や技術を実際に体得するための農場教育）

しかし、この教育目標を達成するためには指導者の育成が先決であった。このため厳しい財政事情にありながらも、中曽根徳二、野喜一郎の両講師をデンマークに派遣した。黒澤塾長は、デンマーク興国の農業教育に強いこだわりをもったのだ。

中曽根は酪農義塾設置の発起人の一人である我孫子琴似農事試験場長の推薦で、酪農義塾の講師に就いたが、酪農義塾初期の状況について「私は最初から10期の卒業まで酪農科の担当であったので、この間、生徒とともに同じ寮生活をしながら教育に当ったが、毎期多くの入塾希望者があったので、その中からの選抜だけに優秀な生徒が多かった」と回想している。

また野は、黒澤塾長の片腕としてデンマーク農業と農家生活を体得し、これを酪農学園の実学教育に生かそうと奮励した貢献者である。黒澤は、野の功績について「酪農学園はある時から大きくなったが、問題は農民魂を如何に植え付けるかであった。野先生は塾生と寝食を共にし、その先頭に立って実践躬行した。酪農発展の大恩人である」と感謝している。

中曽根徳二　１９１０年１月生まれ。琴似農業試験場でデンマーク農業指導員フエンガーの助手を務め、その後同試験場農業教習所教官。酪農義塾創設に際し講師。以後機農学校（高校）教諭、酪農学園短期大学・同大学教授、酪農学園中央農場長等を歴任。１９３５年10月～１９３７年６月までデンマーク留学。

野喜一郎　１９１２年９月生まれ。永山農学校卒業後、天塩農事試作場助手、天塩中央青年訓練所指導員、上磯郡知内村農会技術員。１９３４年１月酪農義塾講師、以後機農学校（高校）教諭・教頭、高等酪農学校長、酪農学園短期大学・同大学講師、酪農学園中央農場長。１９３８年11月～１９４１年３月までデンマーク留学。

―実学の範を示せし野（喜一郎）中曽根我が学園の礎石なるらん―（『三愛の歌』酪翁）

３　精神鍛錬と実学の徹底

酪農義塾の教育は開設以来、黒澤塾長を先頭に各界の指導者や優れた教師たちによって着々とその教育成果を収めた。１９３６(昭和11)年６月には文部次官山本厚三が来塾し特別講演を行い、７月には社団法人の認可を得るなど、その存在は社会の注目を集めるものになった。酪連をはじめ関係者の強力な財政援助もあって教育内容も充実し、施設の拡充も進み、優れた卒業生は農村社会の中堅として酪農の振興に寄与した。

酪農義塾における教育の基本は、生徒(農村青年)の精神と身体を徹底的に鍛えるところにあった。徹底した実習によって体力の増進と酪農の知識・技術を体得させることとし、生徒全員の塾寮生活を義務づけた。教員の生活もこれと一体で、塾内・圃場・畜舎・工場をすべて教室とみなし、晴耕雨読・流汗悟道に徹したのだ。

(1) 農民魂「農民道五則」

精神教育では酪農義塾をひとつの道場に見立て、修養と鍛錬によって人格の高揚と磐石不動の精神を植え付け、農業人としての確固たる人生観と農民精神の育成に努めた。具体的には黒澤の主唱する「農民道五則」として展開された。

黒澤は、経済の困窮や軍事色を強める世上のなかで、農業・農村の使命は強い信念をもった農民による食糧の増産である、との認識の下に行動をしていた。その信念の具象が「農民道五則」である。

一、農民は誠そのものたれ（農民は正直であれ）
　相手を疑う前にまず自分の姿勢を正直一途にすること
一、農民は天地の経綸に従え（農民はその土地の役目を知れ）
　気候風土を十二分に活用した農業を実践すること
一、農民は土を愛せよ（農民は土を肥やせ）
　国土を豊かにする農業経営をなすこと
一、農民は勤労を尊び倹約を守れ（農民は無駄をせずうんと働け）
　独立自営民は如何なる時代でもこの心構えを持つこと
一、農民は協力一致せよ（農民は産業組合によって団結せよ）
　農民は連帯心を持ち協力しあって大をなすこと

塾生は、夏は4時に起床し毎朝国旗を掲揚して、この「農民道五則」を朗唱した。また寮生活では、短期間で最大の成果を挙げるため、「塾内五則」を定めて厳しい規律を要求した。

一、誠心を本とし責任を重んじ言行表裏なきこと
一、規律を守り節制を旨とし礼儀を正しくすること
一、勤労を尊び遊惰を排し流汗悟道の精神に生きること
一、小我を捨てて大同に就き互譲協同の実を挙ぐること
一、禁酒禁煙常に健康の増進に努力すること

黒澤塾長は、「自分で生んだ子供は自分が育てるのが当然」と、常に塾生の先頭に立って行動し、農民の心構えを説き、農民はいかにあるべきかを繰り返し吹き込んだ。

「農民道五則」は、その後の野幌機農学校、戦後の野幌機農高等学校においても朗唱された（１９５４年まで）。１９４６（昭和21）年９月、酪農学園（興農義塾）の建学の精神を「三愛主義」とすることを理事会決定するが、黒澤は「農民道五則」はキリスト教主義となんら矛盾するもではない、との信念で農民教育の主柱に据え続けたのだ。

黒澤の農民道への思いは、１９４３（昭和18）年、自らの筆（歌詞）で制定した野幌機農学校（高等学校）校歌（戦後字句訂正）にも収斂されている。

野幌機農学校　校歌（２番）

勤労の汗尊しや　農は御国の基にして
又健民の泉なれ　農村荒れて何処にか
国の栄を求むべき　使命は重し　ああ我等

校旗（1949年焼失）

⑵ 実習農場の開設

酪農義塾における酪農教育は、１９３４（昭和９）年２月の開塾とともに開始され、80名の生徒は同年５月までに第１期の基礎教育を終え、製酪科の生徒は酪連の工場における実習教育に入った。酪農科の生徒は酪連用地の一部を第１農場とし、札幌村三角に購入した農地11haを第２農場として玉ねぎ

や牧草の作付けをした。

三角(第2)農場の牛舎・サイロは生徒らの実習を兼ねた作業によって、同年の10月に完成し、酪農家の寄付により7頭の乳牛が導入され、酪農経営と乳牛飼育の実習体制が整った。

当時の塾教育や農場実習について、創期の塾生は次のように回顧している。

☆開塾のころは、酪農教育といいながら1頭の牛もいなく、もっぱら豚の飼養や玉ねぎつくりをやらされた。7月、札幌村三角の農場に牛舎やサイロを建てることになり、毎日豊平川から玉石を運び、10月にはこの牛舎、サイロが完成し、宇都宮、町村(敬貴)、黒澤、佐藤(善七)、中西などの牧場から寄贈された乳牛も入って、冬ころにはその数も10頭余りになり、どうにか酪農義塾らしい格好がついてきた。

☆夏はもっぱら素足で畑作業に従事した。食べ盛りの生徒には酪農食という満腹感のない食事だったので腹はすく労働は厳しい、しかしそんな毎日を耐え得たのは教師も生徒と一緒に行動したからで、この時代塾長はじめ教師の教育にかけた情熱は、今顧みても本当に生きた教育で、一日一日が厳しくつらかったが、それだけに価値のあった青春時代だったと思う。特に黒澤塾長、青山(永)主事、中曽根、野先生の熱意と行動には頭が下がった。

酪農義塾理事長の任にあった現職の佐上北海道長官は、しばしば建築中の牛舎に足を運び激励した。その後、第1農場は酪連が使用することになった。そのころには飼養乳牛も増加し、三角の第2農場だけでは耕地面積が少なく、乳牛の飼育や教育上に支障がでてきた。このため、１９３７(昭和12)年4月、酪連が取得した札幌郡白石村野津幌の出納農場の土地21haと家屋その他の施設を利用し、第1

農場を移転した。１９３８(昭和13)年10月には、第2農場も廃止してすべてを移転した。

農場開設当時は、飼料不足などから泌乳量も少なく、周辺の酪農家から「義塾の酪農教育はどうなっているのだ」などと変な目で見られることもあったが、開塾後数年の苦節を経てようやく実学教育の体制を整えたのである。

移転した農場は、宇都宮・町村牧場の管理方式を取り入れた模範的な輪作方式の導入やラデノクローバーの栽培、わが国最初の電気牧柵の敷設など、当時としては画期的なモデル経営として注目を集め、酪農教育の成果を高めた。

4　北海道酪農義塾の閉塾と教育成果

１９３３(昭和8)年、酪連関係者の短期講習からスタートした酪農義塾は、翌年2月から本格的な酪農教育に取り組み、佐上理事長と黒澤塾長を先頭に各界の指導者や優れた教師たちによって着々と教育成果を挙げはじめた。

しかし、その財政は常にひっ迫し、たびたび酪連や関係者の援助協力を求めることになった。１９４１(昭和16)年には、酪連より基本財産として現金10万円と野津幌農場内の施設及び奥行臼(別海村)、植苗農地(苫小牧市)、福島造林地(福島町)等の寄付を受けるなどして、その難局を乗り切りながら戦時下の酪農教育を続けた。

(1) 閉塾の決断

開設以来、幾多の難局を克服しながら続けてきた酪農青年の養成教育は、北海道農業、なかんずく酪農の振興発展に大きく貢献するものになった。だが戦局が次第に苛烈化するに及び、わが国の教育機構の改編、とりわけ軍事教練を意図した青年学校令（１９３５年公布）による小学校（後の国民学校）卒業者の青年学校への入学義務化（１９３９年改正）などによって、酪農義塾の生徒募集を困難にする情勢になった。戦場に赴く農村青年も増加し続けた。

酪農義塾の酪農教育が、ようやくその将来に明るい兆しが見え出したところでありながら、存続の岐路に立たされたのだ。黒澤はこのような事態に直面して、戦時体制化での急務は国内農業の立て直しによる食糧増産にあるとして、農業指導者の養成に着目した甲種農業学校の設立を構想し、酪農義塾の閉鎖を決断した。

黒澤の新たな構想を受けた理事会は、３年制農業学校への転換を図ることにした。１９４２（昭和17）年３月、黒澤の文部省高官に対する熱い説得（１章⑤参照）など、関係者の奔走努力、関係機関の理解と尽力によって野幌機農学校の設置が認可された。同時に教育拠点を江別町西野幌（現文京台緑町）の宅地・農地合せて１６０haを購入し移転した。

酪農義塾は逐次その体制を縮小し、１９４４（昭和19）年２月、第10期の卒業生を最後に閉塾した。その施設など一切を機農学校に譲り、３月31日をもって10か年に及んだ「社団法人北海道酪農義塾」は、光輝ある歴史に幕を閉じた。

卒業生数は、酪農科２０１名（1～10期）、製酪科６７０名（1～9期）、皮革科７名（5期のみ）の総数

８７５名であった。

⑵ 酪農義塾教育の社会貢献

このように酪農学園の緒である義塾教育は、10か年間という短いものではあったが、多くの酪農自営者や酪連・産業組合の基幹要員を養成した。さらに短期講習や冬期学校の開設などによって、開拓以来の略奪農業や冷害凶作に悩む北海道農業に新たな道を開き、わが国酪農発展の導火線となったことは高く評価されなければならない。

当時本格的な酪農自営を目指すための手段は、数少ない先進的酪農家で実習することしかなく、技術習熟の場が限られていた。このような実情に対し酪農義塾の酪農科は、酪農自営者の大量養成を目的とし、その教育は実際に即した鍛錬に徹したものだった。加えて、優秀な青年を厳選したこともあって、わずか1か年という教育期間にもかかわらず、将来の酪農自営に情熱を燃やして勉学に励み、卒業後はそのほとんどが出身地に帰って自営酪農家になった。

一方、製酪科は、農業団体や酪連の職員をあわせて教育したが、その教育はわが国酪農の将来を左右するものとして、厳しい精神鍛錬と徹底した工場実習が課された。

これらの義塾卒業生は、後年酪農の第一線で範となることはもとより、農村や乳業界で指導的な役割を果たすなど、「酪連精神の実践者」として大きな足跡を残した。

☆酪連精神と報徳思想…１９３６(昭和11)年、北海道経済部長に遠山信一郎が就任した。遠山は報徳思想の熱心な

信奉者であった。報徳思想とは、二宮尊徳の教えである「天地の恵みに感謝し、民(農民)自身が『忍耐・信念・勤勉』を旨とする道徳心と人生観を養い、生活の改善(経済の自立)に励むべし」とするものだ。黒澤はこの思想にも強く触発され、１９３８(昭和13)年には「酪連報徳社」を設立し、酪連の役員や従業員はもとより、酪農民に対してもこの思想の普及啓発に努めた。自ら掲げた農村青年教育の理念に確信を持ったのだ。

「農業は天地を相手にするものである。されば誠そのものである天地と心が通い、血が通うためには、農民それ自体が誠そのものでなければならない」

☆酪農義塾第１回卒業式訓示(塾長 黒澤酉蔵)　１９３５年２月15日(酪報42号)

諸君は志をたててこの塾に入り、既に１ヵ年が経た。この間を顧みると、全く異なった生活に入ったために、初め１ヵ月位は諸君等の体も精神も側から見ても、よくやってゆけるや否やと思われた。私はその後、諸君を数名ずつ自宅において懇談し、当時の感想を伺うと「とてもやってゆけそうもない」との感想に接して、さこそと思われた。

諸君は農村出身なるも、その生活は全く異なり黎明に起きて厳寒にもよく耐え忍び、なすべき勤めを十分に果たし得た。如何なる時にもなさねばならないのは塾の掟である。日曜も無論休まない。ある者は「体のよい牢獄生活だ」と言った。しかし見様によっては左様見える。

顧みて入塾時を想起すると、皆がよくやってくれて、一人の誤まった者もなく、病気のため一人の退学者ありたるも、この１年間厳粛な規定の内に終わったことをあり難く感謝する。さて、これから諸君がそれぞれの方面に出るのであるが、中には農村に帰り部落の中堅となる者、ペンをとる者、集乳に働く者等々、こ

れからは諸君の思いのままの世界である。

今まではもう少し寝たいと思ってもそれはできず、外出したいと思ってもそれもできない。知らず知らずの間に誘惑を退けて来たのである。私は諸君をこの塾より出すに心配でたまらない。丁度トマトの苗を苗床より移植したるそれにも似て、今諸君は義塾なる苗床より社会なる畑に移植されるのである。これより後には雑草も生える。虫もつく、風も吹く、実を結ぶまでには幾多の誘惑がまっている。

これは諸君等の意志の力によりて追い払わねばならない。これからは諸君等がその一生涯を共にする仕事に就くのである。ここで色々のことを習ったが、これはホンの雛型を教えたにすぎない。世の中には色々と異なった形になって出会う様々の事柄を処理して目的を完成しなければならない。この1年間の生活は、苦しかったろうが、これはほんの序曲にすぎないのである。

今日の諸君の気分は、入塾当時のそれと雲泥の相違がある。これは在塾中における精神的、肉体的鍛錬による結果である。そこでこれからの諸君は、堅き信念を持って突進し、如何なる誘惑にも打ち勝たねばならない。

さて卒業における諸君と塾とは、更に密接な関係に置かねばならない。諸君の品性や作業についても色々とお伺いしたい。人生の難路に差しかかっても弱くてはならない。強者たれ、難事に向かって踏みとどまり、自分等の背後に大きな力があるのだ、ということを信じて総てのことに当らなければならない。

農民道五則の信念に燃える時、これほど強いものはない。正しい心を持って仕事に当る時は、天地を動かすだけの力が出てくる。かくなる時、我々はほんとうに強くなる。ここでは世間と違った仕事をしてきたが、これを一生涯続けるのである。

自分の意志と力をもって続ける時は、大いなる力は諸君を守ってくれる。世間の人はなんと言おうと、この真面目な気分を持続せよ、しかる時は農村に大きな輝きが出る。そして農村はきっと更生する。

知行一致、知って行なはざれば知らぬと同じである。まもなく又新しき生徒が60名入ってくる。諸君は長男であるが故に真面目にならねばならない。重ねてお願いする、何とぞ強い人になって頂きたい。今までの生活をどこまでも続けてゆくこと、幾重にもお願いしたい。

黒澤酉蔵塾長は、第2回卒業式（1936年3月1日）においても同趣旨の訓示を行っているが、特に「食費を徴収しない」ことを実現させた意図について、次のように述べている。

今や皆さんが先生と共に1か年間、涙ぐましい精進を続けられて研究を重ねた自給自足経営の方式は、一つの型となってきております。この計画の初期にあっては、一同その結果を心配致したことも、今日では苦痛どころか誠に愉快な生活となって酬（むく）いられております。この愉快な生活をば、今日以後、帰村せられたならば一家、一村に実行して頂きたいと思うのであります。由来、農業経営の改善、ことに本道農業経営の革新は難事とされておりますが、これがためには結局、自給自足経営に進まねばならぬと考えられます。皆さんが努力の1か年は、ここに郷土食というべきものを確立したのでありますが、これは本道農業にとって一つの大なる貢献であります。本会（酪連）では昨年来、寒地農業確立のために酪農食実行連盟の結成を計画し、全道農民に酪農食を勧めておりますが、本義塾においての皆さんの1か年の体験は、これに確信を与えたのであります。

（一部現代仮名づかいなどに改変）

第４章　学校の設置と変遷・閉校

今日まで学園が開設し閉校した学校は６校に及ぶが、酪農義塾については前章で述べた。２０１１年３月に募集停止した短期大学部は第２部に記述するので、本章では、すでに閉校（統合・再編）した機農高等学校、三愛女子高等学校、短期大学酪農学校（通信教育）、酪農学園自動車学校の４校の変遷について記述する。なお、「学園史一」に各校の設置申請書、学則、教科内容、学校生活（寮生活）、農場教育、歴代学校長のプロフィールなどが詳述されているので、重複を避けるため、本章では変遷の概要にとどめる。

１　機農学校（高等学校）の開設と変遷・閉校〔１９４２年～１９９１年（昭和17年～平成３年）〕

酪農義塾教育の継承　時代的には戦時色が強まり軍隊への応召者や産業徴用者が相次ぎ、農村の不耕地、生産の低減、加えて農業技術の指導力低下などから、せっかく軌道に乗りかけてきた本道の農業は停滞のやむなきに至った。

こうした状況の中にあって酪農義塾の関係者は、学制に基づく3年制の農業学校を設置して義塾教育を継続することにした。この計画は買収した江別町西野幌（現在地）の土地に、１９４２（昭和17）年３月31日「甲種農学校野幌機農学校」（農業科課程）として、文部省より設置が認可され、校舎の落成を待って、６月16日、１２６名の入校生を迎え入学式を行い、続いて18日、関係者多数出席のもとに開校式

を行った。暗雲覆う太平洋戦争の最中の開校であった。

本校は、農業学校として種々の学制の制約を受けながらも、あくまで実学教育によって、すぐれた農人を養成することを教育の根幹とした。そのため、農場実習に重点を置いた教育が行われ、１年生は基礎実習農場(20ha)において牛、馬、小家畜を主体の畜産と普通作物や飼料作物、蔬菜園芸作物の基本を学ぶ耕種を主とし、２、３年生は経営実習農場(規模の異なる5～15ha)において経営を実践し、経営能力を身に付けることにした。従って、１年生全員は集合寮(機農寮)に、２、３年生はそれぞれの後出の経営農場附属寮に分蜂した。

これらの寮には、寮長が家族とともに住み、寮生活と農業技術の指導に当たったが、この体制は戦後十数年間続き、生徒の人間形成に大きな影響を与えた。

戦中における学校教育　しかし、戦争が苛烈になるにつれて学校教育に対する国の統制がますます強化され、学校教育は軍隊精神が強調され、学級の編成も小隊、分隊と呼称されるなど寮生活も軍事色に塗りつぶされていった。

また、教職員の兵役応召者も相次ぎ、その数も終戦時までに23名を数え、生徒の中からも徴兵される者もあった。さらに終戦年の１９４５(昭和20)年５月には軍の要望により教職員、生徒18名を千島に派遣し、同地の開拓指導に当たり、７月薄氷を踏む思いで帰校した。

ともあれ、同年３月、１期生の卒業式を挙行し96名を送り出したが、うち11名は学校に残り助手として後輩の指導に当たった。

戦後の学校改革　このように、学校関係者の意に反して学校教育は戦時色の度合いを強めざるを

得なかったが、１９４５(昭和20)年８月15日、多くの人命の犠牲の中でわが国は未曽有の敗戦を迎えた。戦争が終わってしばらくの間、本校の教育も混乱が続いた。やがて、極度の緊張から解放された生徒たちは、戦時中の抑圧に対する反発もあって、45年10月、２、３年生全員が教育の改革を訴え「無断脱寮」帰郷するという事件が起きたが、互いの話し合いの中で歩み寄りを見つけ２週間余りで平常に戻った。

翌46年、興農公社の社長でもあった黒澤校長は同社の再建に専従することになり校長を辞任し、代わって４月、十勝農学校(現帯広農業高校)校長であった川村秀雄が校長に就任し、戦後の学校改革に着手した。川村は、まず学校の組織と教職員の配置替えを行い、新たに１年制の研究科、選科の別科制度を設けて酪農の速成教育の道を開き、また通信教育酪農科(２年制・後出の「野幌高等酪農学校」)の設置に踏み切った。そして同年９月には、かねてより検討されていた教育方針を「精神教育の基本理念をキリスト教の聖書に置く」との方針に転換された。いわゆる「三愛精神」である。

農場教育についても独立採算制を基本に整備強化を図り、夏期間の教室授業は各学年を２学級に分け、１週間交代で半数が午前中教室で授業を受け、半数は実習、午後は全員が実習につくという実学教育の本質を守り、毎週の各寮での研究会と相まって実習効果を高めた。１９４７(昭和22)年より７農場(７寮)に機農寮を合わせて８寮(第１農場・報徳寮、第２農場・平和寮、第３農場・栄光寮、第４農場・自由寮、第５農場・希望寮、第６農場・精農寮、第７農場・至知寮、第８農場・機農寮)となり、農場の整備とともに寮の体制も整うことになった。

キリスト教教育の浸透と教会の設立　敗戦を契機に、キリスト教をもって精神教育のよりどころとした機農学校においても、職員、生徒は少数の信徒を除いて、戸惑いを感じていた。そうした中で、

１９４６(昭和21)年９月、大森三郎牧師が本校に着任した。大森牧師は１９４０(昭和15)年より宣教師として、中国において伝道活動に献身していたが、敗戦により引き揚げて来札し、白戸牧師を通じて札幌教会より派遣の形で、本校のキリスト教啓発に努めた。氏の教室や寮における情熱あふれる説教と祈りに、若い魂は大きな感化を受けた。同年12月23日には、本校教室で初のクリスマス賛美礼拝が行われ、各寮より多数の生徒がこれに参加した。

また、生徒の有志によって「機農学校キリスト青年グループ」が結成され、卒業後のキリスト教による農村再建運動を目指し、約20名が参加した。大森牧師の在任は翌年の８月までのわずか1年間に過ぎなかったが、当時の生徒でその後牧師など、直接牧会活動をしている者は８名を数え、いかに影響の大きかったかを知ることができる。

同時にキリスト教教育の母体となる教会を学園内に設立する計画は、黒澤、白戸らによって進められていたが、大森牧師の辞任後、１９４８(昭和23)年３月に古山金作牧師を迎えるに及んで急速に展開された。当初は、職員住宅を集会所として職員の信徒を中心に、礼拝および日曜学校がもたれていたが、５月に信徒による教会設立の総会が開かれ、学園構内に教会敷地が決定された。農場内の旧農家住宅を移動、改修して10月待望の会堂が誕生した。１９５２(昭和27)年西野幌３番地に、宗教法人野幌教会として新会堂が移転するまで、職員およびその家族をはじめ、学生、生徒の布教など学園教会として大きな役割を果した。

学園職員に対して、キリスト教の理解を深めるための努力も折に触れてなされていたが、夏冬の休暇時にキリスト教講座が計画された。第１回は１９４８年１月に、白戸牧師の「宗教と教育」という

講座が定期的に行われた。同年7、8月には第2回講座が、機農学校教職員を対象に行われ、この講座は１９５０(昭和25)年ころまで続けられた。しかし、学園にキリスト教が浸透するには多くの日時を要し、定着したのは短期大学(樋浦誠学長)の教育が軌道に乗ってからである。

新制高等学校への移行　１９４８(昭和23)年1月「高等学校設置基準」が公布されたため、本校も高等学校の認可を受け、同年4月より「野幌機農高等学校」として新たな出発をした。まず、校則を根本的に改め新制度に基づく教科課程としたが、その中心教科を「実習」に置いた。しかしその後、文部省の教科課程の変更もあって、この「実習」という教科は廃止されて「総合農業」となり、単位制が取り入れられるなど大きく変化していくことになった。

また、同時に研究科、選科を廃して、新たに別科(修業年限1年)、１９４９(昭和24)年4月、農機科(同)を設置するなど、教育の再建は着々と進んだ。同年9月、学校火災によって校舎、施設のすべてを焼失するという痛恨事もあった。しかし全道の農業協同組合、農民、関係者の援助によって１９５１(昭和26)年7月復興した。

「農業協同組合科」(農村経済科)の新設　１９５４(昭和29)年4月、既設の農業科のほかに農業協同組合の職員養成を目的とした「農業協同組合科」(修業年限3年)を併置した。55年には別科、農機科を廃止し、翌56年4月農業協同組合科の名称を「農村経済科」と改め、農業協同組合の職員養成と併せて農村の二、三男教育にも門戸を広げた。

同盟休校　こうした中で１９６２(昭和37)年、北海道農協連や関係団体、会社の寄付により鉄筋コンクリート3階建の校舎の竣工をみるなど、開校20周年を迎えて本校の様相は一変した。

野幌機農高等学校校旗　黒澤力太郎書

校　歌

作詞　黒澤 酉蔵・作曲　小松 耕輔

1

手稲の嶺の雪清く
緑綾なす原始林
身を興農に捧げんと
燃ゆる希望を抱きつつ
集う機農の旗の下
ああ　光栄(ひかり)あれその行途

2

勤労の汗尊しや
農はみ国の基にして
又健民の泉なれ
農村荒れて何処にか
国の栄を求むべき
使命は重し　ああ我等

3

千辛万苦先人の
遺烈かぐわし北の海
試錬の波は高くとも
真澄の心　鉄の腕
天地と人と一体の
農の真髄悟らばや

4

平和の日景(かげ)身に享けて
振うも嬉し聖の鍬
普遍の誠広き愛
科学の翼とりそえて
真農道をまつしぐら
重き使命を果さなん

しかし、ここに至る１９５４(昭和29)年11月に本校の存亡にかかわる危機が発生した。いわゆる「同盟休校」である。この同盟休校は生徒会(自治会)が校内の民主化、寮運営の改善など、学校側に20項目の要求を掲げて授業放棄したものである。終戦から9年目ということもあって、学園内にはまだ民主化に戸惑いの残っている分野もあった。この全国的にも稀有な事態は2か月に及んだが、この事件は本校はもとより酪農学園の、その後の民主化と発展のための大きな契機ともなった。

農業の変容と両課程の統合　１９６１(昭和36)年、農業基本法が制定され、自立経営農家育成のための農業の近代化が推し進められることになった。これに伴って中央産業審議会は、同年「農業の近代化に即応する高等学校教育の改善方策について」の建議を行い、翌62年文部省は、「高等学校農業教育近代化実施要綱」を発表し、農業自営者養成学科に対し、3か年にわたって設備など内容充実のための助成金制度ができ本校もその対象になった。

こうした農業の大きな転換期にあって、本校は農業自営者の教育に徹することになり、１９６３(昭和38)年農業科、農村経済科の両科を統合して「酪農経営科」とし、定員3学級１５０名を2学級90名とした。折りしも中学卒の急増期で、入学希望者も多いことから3学級に編成し、１９６５(昭和40)年には定員１３５名に変更した。

委託実習　酪農経営科の実習の中でも道内の優秀酪農家で20日間実体験する、いわゆる委託実習は１９６５(昭和40)年から実施された。この実習は校内酪農実習で味わうことのできない貴重な体験であり画期的なことであった。受け入れ酪農家87戸の選定は農場職員を中心に幾度も協議を重ねて慎重に決定された。(学園史二に詳述)

生徒数の減少と教育整備　しかし、農業基本法に基づく農政が進行する中にあって、農家の規模は拡大されたが同時に離農する農家が増えて、その戸数は減少をたどり中学卒そのものも減った。そのため１９６９(昭和44)年より再び定員を2学級90名に変更した。やがて、この生徒数の減少は財政問題ともからんで本校の存続に大きな課題を投げかけることになった。

そのため、赤字軽減の具体的方策の一つとして、統合寮2棟を新築して、全生徒をこれに収容し、厨房組織の改善と併せて寮関係経費の節減を図った。１９７５(昭和50)年には、①定員の確保　②大学、短大との連携による優先入学　③国、道、後援会に対する助成金対策　④園芸科併置の検討　⑤厨房の外部委託による経費の節減などを図ることとした。まず厨房の外部委託を実行し、76年には道および文部省に対し、管理運営費と産業教育設備費の助成陳情を行った。特に文部省初中局職業教育課では、本校の教育趣旨に深い理解を示し、１９７７(昭和52)年より異例とも思われる特別助成(農業自営者養成教育)が実現したが、このことは本校にとって財政面はもちろん大きな精神的支援となった。

一方、同窓生や農業団体の協力などによって、60名台にまで低下していた入学生徒数も１９７７(昭和52)年度以降は毎年90名の定員を確保するまでの復調をみせた。

しかし、１９８１(昭和56)年度より再び生徒数が急減し始めた。こうした状況の中でたびたび教育課程を改訂し、実験、実習強化のために農業実験室を新設して、実習農場の再編成を行うなど、私立農業高校としての特性を生かした教育体制を整えて生徒数定員の確保に努めた。

さらにキリスト教による精神教育を柱とし、毎週の学校礼拝や聖書の授業、春秋の聖書週間を通じてキリスト教教育の浸透を図る一方、広大な農場を活用した教科内、総合、時間外実習のほか、夏期、

冬期の特別実習、さらに、１９６５(昭和40)年から酪農家への委託実習(前出)を行ってきた。

このほか農業クラブ、スポーツなどの教科外活動にも意を用いた。また全寮制の特性を生かし、放課後や夜間を利用して危険物、毒劇物、溶接の取扱者資格、家畜商、簿記検定、自動車、大型特殊車の免許取得の機会を与えるなど、卒業後酪農自営者となるための素地づくりに努めた。

校名の変更と統合問題　このように多くの曲折と体験の中で１９８２(昭和57)年６月18日、開校40周年を迎えた。折りから、わが国の酪農を取り巻く諸情勢は極めて厳しく、特に農村の近代化に伴う農業人口の減少は、農業高校への進学生徒数の激減となって現われてきた。そのため全道の農業課程高校は公私にかかわりなく定員確保が困難となってきた。本校も年々入学生徒が減り、再々にわたって岐路にたたされるに至った。

そのため、年々評価を高めていく酪農学園大学との連携を強めることを得策として、校名を「酪農学園大学附属高等学校」として位置付け、大学との連携を強化し、建学の理想である酪農教育をさらに一歩進めると同時に、農場運営の効率化、生徒数の確保、学校運営の改善への対策を進めるなど、存亡をかけて同窓生や全職員も懸命の努力を重ねてきた。しかし、検討を重ねてきた理事会は、この危機を乗り切るために苦渋の選択をした。三愛女子高校(とわの森三愛)との統合に踏み切る決断であった。

歴代酪農学園大学附属(旧・酪農学園機農)高等学校長

初　代	黒澤酉蔵	１９４２・３・31～１９４６・３・31
第２代	川村秀雄	１９４６・４・１～１９５５・３・16
第３代	黒澤酉蔵	１９５５・３・16～１９５６・７・１

第4代 樋浦誠 1956・7・1～1960・3・31
第5代 黒澤力太郎 1960・4・1～1974・6・30
第6代 山花豊 1974・7・1～1976・10・31
事務取扱 津田佳吾 1976・11・1～1977・3・4
第7代 津田佳吾 1977・3・4～1981・6・25
第8代 山下正亮 1981・6・25～1989・3・31
第9代 牛島純一 1989・4・1～1991・3・31

統合時の酪農学園大学附属高等学校教職員

校長 牛島純一
教諭 甲斐猛
事務長 深谷正男
宗教主任 吉田真
同 杉山昇
主事 関戸キヨ子
教頭 原田泉
同 中ノ目敏雄
同 照井俊秀
教諭 有好潤二
同 深澤秀則
主事補 伊藤明美
同 伊藤茂生
同 山中桂郎
技師 稲垣義人
同 内生藏啓貢
同 山谷繁男
同 佐々木九二一
同 小野木弘司
養護教諭 坂本妙子
夜警員 柏倉宏造

表１　野幌機農高等学校(附属高等学校)生徒数の推移

（本科：農業科、農業協同組合科、農村経済科、酪農経営科）

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1942(昭和 17)	120	−	120	120	−
1943(同 18)	120	−	135	249	−
1944(同 19)	120	−	126	360	96
1945(同 20)	120	−	126	373	119
1946(同 21)	120	−	124	364	99
1947(同 22)	120	−	89	299	90
1948(同 23)	120	−	38	206	49
1949(同 24)	120	337	97	252	64
1950(同 25)	120	334	92	261	83
1951(同 26)	120	236	90	264	81
1952(同 27)	120	202	89	283	87
1953(同 28)	120	235	87	306	108
1954(同 29)	120	370	147	350	95
1955(同 30)	120	219	90	308	86
1956(同 31)	120	207	100	313	121
1957(同 32)	120	274	89	266	74
1958(同 33)	120	250	145	315	81
1959(同 34)	150	233	152	375	84
1960(同 35)	150	238	137	401	124
1961(同 36)	150	162	96	360	122
1962(同 37)	150	356	126	326	110
1963(同 38)	90	424	143	354	83
1964(同 39)	90	345	148	407	115
1965(同 40)	135	353	143	423	134
1966(同 41)	135	321	141	423	139
1967(同 42)	135	292	121	394	132
1968(同 43)	135	349	131	386	137
1969(同 44)	90	308	94	334	110
1970(同 45)	90	217	106	321	123
1971(同 46)	90	132	73	263	85
1972(同 47)	90	134	72	243	99
1973(同 48)	90	140	68	207	67
1974(同 49)	90	162	75	208	62
1975(同 50)	90	172	72	210	60
1976(同 51)	90	143	66	209	72
1977(同 52)	90	179	100	233	66
1978(同 53)	90	197	101	257	60
1979(同 54)	90	177	97	287	94

野幌機農高等学校生徒数の推移(つづき)

（本科：農業科、農業協同組合科、農村経済科、酪農経営科）

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1980(昭和55)	90	165	94	276	92
1981(同 56)	90	106	69	241	92
1982(同 57)	90	97	64	209	78
1983(同 58)	90	83	59	185	63
1984(同 59)	90	100	64	178	60
1985(同 60)	90	84	62	170	50
1986(同 61)	90	97	63	174	58
1987(同 62)	90	96	70	180	49
1988(同 63)	90	116	78	200	57
1989(平成 1)	90	81	49	183	65
1990(同 2)	90	89	64	173	66
1991(同 3)	90	61	43	146	43
1992(同 4)	90	73	49	151	57
1993(同 5)	45	49	40	132	43
1994(同 6)	45	38	31	119	48
1995(同 7)	45	37	26	92	35
1996(同 8)	45	36	34	89	30
1997(同 9)	45	42	39	95	23
1998(同 10)	45	39	35	105	30
1999(同 11)	45	39	28	94	34
2000(同 12)	45	31	25	82	31
2001(同 13)	40	44	36	85	24
2002(同 14)	40	38	33	86	23
2003(同 15)	40	45	39	101	
計	−	−	−	−	4,562

（研究科、選科、別科、農機科の卒業生数）

	研究科	選　科	別　科	農機科	小　計
1948(昭和23)	7	27	−	−	34
1949(同 24)	−	−	30	−	30
1950(同 25)	−	−	32	7	39
1951(同 26)	−	−	32	9	41
1952(同 27)	−	−	66	16	82
1953(同 28)	−	−	3	11	14
1954(同 29)	−	−	35	17	52
1955(同 30)	−	−	−	29	29
計	7	27	198	89	321

２　三愛女子高等学校の開設と変遷〔１９５８年～１９９１年　昭和33年～平成３年〕

市内唯一の女子高校　酪農学園における女子教育機関の設置問題は酪農義塾開設以来の課題でもあった。しかし、わが国の農業政策がたえず揺れ動いている中にあって、農村女子の都市への流出が相次いでおり、加えて厳しい学園の財政もからんで農村女子のみを対象にした教育機関の設置は現実性を欠いていた。

ところが、もはや戦後ではないといわれた昭和30年代（１９５５―）に入って、道都札幌市は急激に人口が増加し、江別市もベッドタウンとして急速に発展し著しい人口の増加がみられ、女子を含む高等学校進学希望者は激増してきた。

当時、江別市には道立江別高校、道立野幌高校と酪農学園設置の機農高校の３校があったが、江別高校を除いた２校は農業課程であり、また機農高校は男子校であったため一般女子の高校進学は極めて狭き門となっていた。そのため、普通課程の女子高校設置への市民の声は日を追って高まり、間もなくそれらの声が江別市を動かすかたちとなって学園に要請してきた。

学園ではこうした状況を慎重に検討しながら近隣町村の諸情勢も分析し、地域住民の要望に応えるとともに、長年考えていた女子教育の実践に踏み切った。１９５８（昭和33）年２月、北海道知事の認可を得て、全日制普通課程の「酪農学園女子高等学校」を設置し、同年４月21日、学園用地内東端に新築した仮校舎において開校した。学校長は黒澤酉蔵であった。

人格と徳性の情操教育　本校の教育は、私立女子高等学校としての特性を生かし、キリスト教に

校歌

作詞 宮古 哲雄・作曲 太田 和男

1

空 遙か
わが石狩は 美し郷土
乳蜜流る 原始林の丘辺に
鳴り響む 啓示の鐘は
ぬば玉の 闇を放ちて
開かばや 真理の秘帳
あゝ三愛 わが学び舎に 光あれ

2

光 充つ
学びの園は 女の城
咲き匂う わが友垣の
常聖き 高き理想は
三つの愛 堅く結びて
祈らばや 永遠の平和を
あゝ三愛 わが学び舎に 恵みあれ

3

生くる日よ
義しくぞあれ いや崇く
若き日は 日々に新し
地の塩の みことば秘めて
青雲の 虹をいだきて
つくらばや 新しき世紀を
あゝ三愛 わが学び舎に 栄えあれ

移転前の三愛女子高等学校礼拝堂
1976年頃

よる神・人・土の三愛精神を基調として、人格と徳性を養うための情操教育を行い、公正な人生観、世界観に立脚した人間育成に努め、社会・家庭に有用な女性を養成することに主眼を置いた。

当初の教育は、酪農学園女子高校という特殊性から、そのカリキュラムも独創的で、進学を目的とした「普通コース」と就職および家庭生活を目的とした「家庭コース」、「生活コース」の３コースを設けた。

特に、生活コースでは学園の特殊性を強調し、地方風土に適合するための総合的生活教育を目指し、酪農食品＝乳製品、食品の調理および各種食品のびん詰加工による保存。園芸＝園芸草花の栽培、造園、室内飾花、冬期温室管理。生活実習＝生活寮での実習――など実際生活に役立つ技術の修得に力点を置いた。しかし、こうしたカリキュラムも時代の変遷や生徒の生活環境の変化によって、１９６１年以降「生活コース」を廃止して純然たる普通高校とした。

開校後の推移　本校は設置者が酪農学園であり、当初は一部酪農に関する教育構想もあって「酪農学園女子高等学校」としたが、開校後、父母や生徒などから普通課程の女子高校にふさわしい校名に改名して欲しいとの要望もあって、生徒や保護者より校名の募集を行い、１９６０(昭和35)年４月「三愛女子高等学校」と校名を変更した。

このことは、草創期の生徒が早くも本校の建学の精神を深く体得していたことを示すものでもあった。１９６１(昭和36)年には第１回卒業式を行い86名が巣立った。この間、１９５８(昭和33)年本校舎、62年体育館、63年礼拝堂が建てられ、１９６８(昭和43)年には開校10周年を記念して、本道では最初の電子オルガンが設置され、本校の音楽教育にも新たな一ページが加えられた。

また、１９６３(昭和38)年には募集定員を２００名から２５０名に、翌64年からは３００名に改められ、生徒数も毎年増え続けて、65年以降は全校生８００名を超えた。教育内容も生徒自身もさることながら教職員の努力と相まって父母の信頼も大きくなった。一方、生徒会、ＰＴＡ、同窓会の設立、制服、校旗、校章、校歌などが相次いで制定された。

このように本校は開校以来、関係機関、関係者の努力によって多くの建物を次々に建設し、また、礼拝堂をはじめ諸施設を整備し、ようやく江別市における唯一の私立女子高校としての態様を整えた。

学校の移設　ところが１９７２(昭和47)年、国土開発幹線北海道縦貫自動車道路・札幌――岩見沢間の敷設計画案が浮上し、この道路が本校のグランドを横断することになった。この案が実施されると本校の教育環境は根本的に破壊され、将来の学校教育に大きな支障をきたすことが明らかになったので、学園をあげて反対し阻止に努めた。

しかし、その後６年間に及ぶ年月の間に、この構想は着々と進み、周囲の状況からみて学園のみの反対は困難になってきた。加えて、20年にわたって整備、充実を図ってきた本校の建物や施設は木造が主であったため老朽化が進み、更新の必要に迫られるものも多くなっていた。同時に既にＪＲ大麻駅が１９６６(昭和41)年に開設されていたことも移転決断への大きな判断材料になった。

こうした経緯のもとに１９７８(昭和53)年、理事会は、本校を大麻駅最寄りの学園用地西端(現在地)に移転することを決定し、翌79年11月には校舎・施設の竣工移転を終えた。

新築された建物はすべてコンクリート造りで普通教室、特別教室、体育館、礼拝堂(講堂)と管理棟の５棟よりなっており、各棟はドーナツ状に廊下によって結ばれた極めてユニークな形態となってい

る。特に普通教室では東南に面して半円形をとり、日照に配意しているほか、体育館は冬期間の活用を考慮し、大きなスペースをとっている。

また、礼拝堂は本校教育のシンボルである三愛精神の三つの愛を象徴する三角形構造の独創的な建物とし、その中に宗教音楽の立場から、新たに東北以北唯一のアーレン・パイプ電子オルガンを設置した。一方、遠隔地よりの生徒のため、48名収容の生徒寮（シオン寮）を設置しているほか、クラブ室、合宿所を整備して、課外教育活動にも配意した。

教育内容　このように本校は、開校以来教師、生徒の努力、父母の協力などによって、教育施設も整備され、女子高校としての独特の校風を樹立した。この間、大学、高校をめぐる激動の時代を背景に、授業料の改訂論議や、「キリスト教主義とは何か、教育における礼拝問題」などを経験してきたが、こうした試練の中にキリスト教主義教育はさらに定着し、地域社会の要請にこたえる教育が進められた。

その後、本校では、①キリスト教教育　②人格と個性の尊重　③分かる授業と進路別クラス編成　④徹底した生活指導による生活能力の養成　⑤社会組織の一員としての自覚の養成　⑥教師との人格的接触――を教育の指導方針とした。そのため、毎週の学校礼拝と聖書の時間を設けてキリスト教教育による全人的人間形成を図ったほか、1学年は基礎学力に重点を置き、特に数学、国語はグレード別授業を行って個人指導の徹底を図った。2学年は進路に沿った指導の下に進路別、類型別教育を実践し、3学年は進路別、類型別をさらに発展させ各自の進路に応じた教科選択ができるように配意した。

短期大学との連携および英語科の設置　移転した新校舎はＪＲ大麻駅に近く、さらに道立図書館に近接した文教地区の中心に位置し、広大なキャンパスと牧歌的ふん囲気の中に近代的校舎、施設を

完備して教育環境は大きく改善されており、同時にこの諸状況を生かして新しい教育が展開された。

ところが戦後、もっぱら私学の増設によって高校問題に対応してきた本道の教育行政は、住民の公立志向傾向もあって私学の振興とはうらはらに公立偏重に移行し、公立高校の新・増設へと方向を転換した。

すなわち、道教育庁が執り進めている「北海道教育長期総合計画」によると、１９７６(昭和51)年から１９８５(昭和60)年までの10年間に、36校の公立高校(前期16校、後期20校。後期20校のうち10校は札幌圏)を新設することにした。この計画が進行するに従って、既に公立高校においてさえ定員割れをみている現状にあって私立高校への影響は、計り知れないものとなった。事実、丙午年生れが入学した１９７７(昭和52)年は別として、１９７８(昭和53)年以降における本道私立高校への入学者は平均１割の定員割れを招くに至った。

加えて、１９８４(昭和59)年大麻に公立高校を設置することが決定し、本校を取り巻く諸情勢は一段と厳しさの度を加えてきた。こうした状況に対応して本校では、将来展望対策委員会、将来展望委員会を中心に対策を検討し、１９８４年より「英語科」を新設した。

また、本校生徒の上級学校進学希望者の増加に対応して、学園内の酪農学園大学・同短期大学との連携を強化するとともに、本校＝短期大学という女子一貫教育体制の確立を図ることになった。この女子一貫教育体制については、学園においても当時の酪農学園短期大学に女子のための教養学科を増設することを決め、１９８５(昭和60)年開設を目指して具体的準備作業に入っていた。

一方、大麻への公立高校新設に伴う本校への影響について、道教育庁および江別市にその対策を要

請した結果、１９８２(昭和57)年９月30日、江別市議会は私学振興のため本校への助成を決議し、83年から管理運営費の一部助成化が実現することになった。

このように本校は、１９８３年創立25周年を迎えて重大な局面に立たされるに至ったが、これに対し前述の酪農学園短期大学との連携、自治体よりの助成に加えて、地域住民との密接な交流、教育内容の充実強化を図るため、ボランティア活動、英語科の併置、３学期制度の実施、教育相談室の設置などと取り組み、不退転の構えで新たな発展を目指したが、残念ながら状況は改善されなかった。

学園理事会はその前途に大いなる危機感を持ち、酪農学園大学附属高校との統合を現実問題として、時間をかけて検討し、１９９１(平成３)年３月統合に踏み切った。

歴代とわの森三愛(旧・三愛女子)高等学校長

初代	黒澤酉蔵	１９５８・４・１～１９６１・３・31
第２代	宮古哲雄	１９６１・４・１～１９７２・４・５
第３代	伊藤幸太郎	１９７２・４・５～１９７４・３・31
第４代	辻村富士朗	１９７４・４・１～１９８２・７・７
第５代	井上昌保	１９８２・７・８～１９９１・３・31

統合時のとわの森三愛高等学校教職員

校長	井上昌保	教諭	三島陽子	教諭 阿部忠夫
宗教主任	栄 潤子	同	小野愃弘	同 天谷正通
教諭	村山昭二	同	赤尾全廣	同 荒川光夫

教諭 荒木とみえ
同 池田麻実
同 板垣甲子治
同 伊藤敦司
同 今井保之
同 梅津佐衛子
同 梅津敏
同 大北直子
同 風岡利尚
同 梶原興正
同 河原淳
同 川上真知子
同 川端順造
同 黒畑勝男
同 Cornerlia Roghair

教諭 小松純子
同 小松守
同 小山勇夫
同 櫻井孝一郎
同 佐々木寿
同 佐藤久美子
同 柴橋伴夫
同 島崎忠利
同 神正士
同 田村敬子
同 千葉昌子
同 泊出秀雄
同 三浦寛
同 中村文夫
同 林田敏江

教諭 原国夫
同 藤島浩二
同 矢端信介
同 山田和弘
養護教諭 松田孝子
助手 中居千枝子
助手 中村真智子
事務長 日下雅順
主事 菊地真紀子
主事 杉江敏子
同 新政文
同 編田悦子
主事 賀川和子
技師 中村武
炊事員 村上カヨノ

表１　三愛女子高等学校(とわの森三愛高等学校)生徒数の推移

普通科

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1958(昭和 33)	200	221	103	103	−
1959(同 34)	200	240	124	216	−
1960(同 35)	200	200	107	315	86
1961(同 36)	200	183	95	317	117
1962(同 37)	200	412	203	393	96
1963(同 38)	250	616	265	549	83
1964(同 39)	250	711	257	714	195
1965(同 40)	250	534	296	805	257
1966(同 41)	250	586	288	827	245
1967(同 42)	250	689	312	885	285
1968(同 43)	300	484	295	883	283
1969(同 44)	300	396	260	841	287
1970(同 45)	300	470	290	832	283
1971(同 46)	300	402	281	828	248
1972(同 47)	300	452	303	871	282
1973(同 48)	300	446	290	875	274
1974(同 49)	300	499	303	883	290
1975(同 50)	300	444	237	805	275
1976(同 51)	300	496	285	799	277
1977(同 52)	300	509	261	764	221
1978(同 53)	300	579	270	766	241
1979(同 54)	300	575	251	722	218
1980(同 55)	300	620	254	709	217
1981(同 56)	300	554	225	681	224
1982(同 57)	300	497	213	630	209
1983(同 58)	300	652	245	620	186
1984(同 59)	260	652	241	635	177
1985(同 60)	260	556	173	591	191
1986(同 61)	260	702	253	627	204
1987(同 62)	300	629	252	646	153
1988(同 63)	300	1,035	392	830	208
1989(平成 1)	350	1,024	391	956	203
1990(同 2)	350	1,049	365	1,049	332
1991(同 3)	350	1,002	372	1,029	304

表１　三愛女子高等学校（とわの森三愛高等学校）生徒数の推移（つづき）

普通科

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1992（平成 4）	300	884	286	959	311
1993（ 同 5）	300	915	287	886	321
1994（ 同 6）	300	1,104	332	863	255
1995（ 同 7）	300	1,259	442	1,026	257
1996（ 同 8）	260	1,116	331	1,053	297
1997（ 同 9）	260	1,123	313	1,026	390
1998（ 同 10）	260	1,096	288	886	298
1999（ 同 11）	305	1,107	330	880	283
2000（ 同 12）	305	1,115	326	893	252
2001（ 同 13）	295	1,264	317	928	301
2002（ 同 14）	285	1,246	376	967	287
2003（ 同 15）	325	1,389	326	957	
計	－	－	－	－	10,400

英語科

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1984（昭和 59）	40	42	13	19	－
1985（ 同 60）	40	49	12	33	－
1986（ 同 61）	40	54	15	40	14
1987（ 同 62）	40	56	17	42	11
1988（ 同 63）	40	81	30	62	12
1989（平成 1）	40	87	30	77	17
1990（ 同 2）	40	46	21	76	28
1991（ 同 3）	40	55	20	68	27
1992（ 同 4）	40	71	24	61	19
1993（ 同 5）	40	76	17	53	16
1994（ 同 6）	40	73	24	59	17
1995（ 同 7）	40	89	32	73	16
1996（ 同 8）	40	53	19	75	26
1997（ 同 9）	40	53	24	73	29
1998（ 同 10）	40	68	28	71	20
1999（ 同 11）	40	51	22	72	22
2000（ 同 12）	40	59	25	74	27
2001（ 同 13）	40	63	31	73	20
2002（ 同 14）	40	41	15	66	23
2003（ 同 15）	－	－	－	41	
計	－	－	－	－	344

３　酪農学園短期大学酪農学校〔通信教育　１９４８年～１９９０年〕
昭和23年～平成２年〕

戦後の混乱が次第におさまり、経済統制の撤廃、農地の解放、乳業界の再編成、外地からの基幹労働力の復帰によって、荒廃地や未墾地の開拓が進められる中にあって、酪農が大きく取り上げられ、酪農民に対する教育問題が起こってきた。

酪農教育の浸透　こうした状況に対し、創設以来酪農教育一筋の道を歩んできた学園では、通信教育によってこれに対応することになり、１９４８(昭和23)年４月、機農高等学校内に通信教育制の酪農科(2年修業)を発足させた。ところが、入学希望者は予想をはるかに超える１２００名にも及んだ。そのため学園では、この通信教育を機農高等学校より分離して、通信教育専門の独立した学校とし、通信教育の徹底を図ることにして、同年８月、「野幌高等酪農学校」(12月27日北海道教育委員会認可各種学校)を設置した。しかし校舎や諸施設の建築が間に合わず、教育業務は機農学校内で行われていたが、１９５１(昭和26)年３月の校舎(レンガ1階建５９３㎡)の落成に伴って移転した。初代校長は機農高等学校長の川村秀雄が兼ねた。

本校の設立状況や教育内容・各種講座については『学園史一』に詳述されているので割愛するが、この通信教育は、通信と集合教育(スクーリング)を組み合わせた教育方法をとり、酪農科に次いで１９５１(昭和26)年４月には家庭科(家庭科1年・生活研究1年＝2カ年)を設け、2課程がしばらく続いた。

酪農科は毎月、テキスト「酪農講座」と補助テキストの「酪農技術講座」、さらには機関誌として「学習の友」および「酪農学校」(後の「酪農の学校」)を配布した。生徒は本校もしくは地方教室におけ

る集合教育に出席して指導を受け、また希望者は学園農場において実習教育を受けられることにした。

家庭科は主として農村家庭の女性を対象に食品の調理、献立、作法、育児、衛生をはじめ、家庭経営に関するテキスト(「家庭講座」)や機関誌(「学習の友」および「家庭の学校」)、それに加え関係図書を配布した。このほか、両科とも通信による質疑応答と添削、小作文、本学園講師による出張教育、学習会なども併せて行い、いずれも修業年限は2か年とした。なお、集合教育は毎年1回以上(概ね10日～1か月間)本校あるいは分校(地方教室)に集めて実地教育をするとしたが、実質的には、農家の子弟に時間的余裕もなく、この期日を下まわった。

野幌高等酪農学校時の入学案内　1960年頃

全国各地に分校を開設　その後、時代の推移に対応し教育内容の改善、講師陣の充実、全国の酪農地帯に分校の設置に努めた結果、入学生徒数も著しく増加し、１９６０(昭和35)年には道内40、府県１２０の分校設置となった。この間、校舎を新築したり東京都に連絡事務所(酪農学園東京事務所)を開設した。また、61年(１９６２年文部大臣認可)には修業年限３か年の酪農経営研究科を増設し、64年６月校名を「酪農学園短期大学酪農学校」と改称した。

この通信教育は働きながら学ぶ農村青年の教育機関として全国的に反響を呼び定着した。北海道大学教授陣を中心に執筆された「酪農講座」（１９６２年文部大臣認可）は当時の難解な酪農技術を平易でていねいに解説するなど、その内容、編集手法は画期的なものであり、それだけに道内はもとより全国的に普及されて入学希望者は驚異的に増え、一時は７０００名を超える入学者になった。しかし、１９６０年代後期に至って農村の近代化、農業政策の変革が進められるに伴って、農村人口が減少し、一方、農村青年の高等学校への進学志向が高まり本校への入学者は漸減をみることになった。

そのため、１９７０（昭和45）年、家庭科を廃止し、72（昭和47）年には酪農経営研究科を農業経営科に改め、73年、その修業年限も2か年に短縮するなどの方策をとり、通信教育の再興に努めた。

その後本校は酪農科と農業経営科の2科を置いて、①教材と指導書　②現地スクーリング　③添削と質疑などを強化して生徒数は１２００名、地方分校数50校を数えるに至ったが、時代の変化はそのまま生徒数の減少となって影を落とした。

月刊「近代酪農」　このほか本校では、酪農家の生涯学習を目的に月刊「近代酪農」（後の「酪農ジャーナル」）を発行し、内外の酪農事情、技術、経営、管理などの知識を中心に編集し、その中に酪農学園教育の特殊性を生かし、会員制による酪農総合誌として酪農の啓発に努めてきた。また、本校は開校時から出版部門（『通信教育出版部』『酪農学園出版部』）を置き、多くの出版物を刊行してきた。

一方、会員の要望に応え、本校の講師、優秀酪農家を随時派遣し研究会、講習会、座談会を開くなど酪農教育の浸透に意を用いてきた。

しかしながら、昭和50年代（１９７５―）に入って社会情勢も大きく変化し、特に地域では過疎化が

進むにつれて地元高校への全入傾向が強まってきた。さらに農業・酪農経営者の高学歴化、あるいは技術の高度化などの諸要因によって年々本校受講生が減少した。これらの状況に危機感をもった理事会は、幾度も協議を重ねた結果、通信教育部門の生徒募集を停止するとともに、出版部門を新しく大学に設立されるエクステンションセンターに業務移行することを決定した。１９４８年以来42年間に及ぶ本校は実に９万余名の卒業生を送り出し、１９９０(平成２)年３月31日をもって業務を停止して、その幕を閉じた。閉校認可は１９９１(平成３)年１月11日であった。

歴代酪農学園短期大学酪農学校長

初代　川村秀雄　（１９４８・８・１～１９６０・４・16　１９６４・４・１～１９７２・６・21）
第２代　野喜一郎　１９６０・４・16～１９６４・３・31
第３代　勝目孝雄　１９７２・６・21～１９８０・６・30
第４代　杉田文雄　１９８０・６・30～１９８８・６・30
第５代　遊佐孝五　１９８８・７・１～１９９１・３・31

業務停止時の教職員

教諭　長野徳之　同　加藤隆　同　津田佳吾　助教諭　奥山武美　教諭(嘱)　髙尾幸吉
事務長　加藤正勝　主事　十倉宏　同　柴田弘幸　同　山崎久美子
東京事務所　香味昭　同　天田輝久

短期大学酪農学校卒業生数

年　　度	酪農科	家庭科	農業経営科	合　　計
1949(昭和24)	1,210			1,210
1950(同 25)	1,619			1,619
1951(同 26)	2,114			2,114
1952(同 27)	3,943	1,458		5,401
1953(同 28)	4,715	1,550		6,265
1954(同 29)	5,100	1,485		6,585
1955(同 30)	5,700	1,300		7,000
1956(同 31)	4,850	990		5,840
1957(同 32)	4,338	819		5,157
1958(同 33)	4,480	885		5,365
1959(同 34)	4,870	835		5,705
1960(同 35)	3,084	856		3,940
1961(同 36)	2,200	938	750	3,888
1962(同 37)	1,510	850	800	3,160
1963(同 38)	1,402	835	807	3,044
1964(同 39)	1,320	550	790	2,660
1965(同 40)	1,580	380	808	2,768
1966(同 41)	1,500	335	812	2,647
1967(同 42)	1,617	185	860	2,662
1968(同 43)	1,008	135	855	1,998
1969(同 44)	558	130	360	1,048
1970(同 45)	704	116	322	1,142
1971(同 46)	513		362	875
1972(同 47)	251		826	1,077
1973(同 48)	224		380	604
1974(同 49)	127		566	693
1975(同 50)	84		247	331
1976(同 51)	112		173	285
1977(同 52)	62		656	718
1978(同 53)	71		462	533
1979(同 54)	49		697	746
1980(同 55)	35		402	437
1981(同 56)	27		582	609
1982(同 57)	19		316	335
1983(同 58)	17		438	455
1984(同 59)	53		521	574
1985(同 60)	119		531	650
1986(同 61)	12		438	450
1987(同 62)	39		249	288
1988(同 63)	83		354	437
1989(平成元)	12		190	202
計	61,331	14,632	15,554	91,517

４　酪農学園自動車学校〔１９５５年～１９７６年　昭和30年～昭和50年〕

終戦から10年を経てようやく落ち着きを見せ始めた農村にも農業の機械化が急速に進み、従前の馬を中心とした畜力が耕耘機に、耕耘機が小型トラクターに漸次変わるとともに、国も国民車構想を打ち出すなど自動車の普及は年を追って上昇していた。

こうした時代のニーズに応えるため、運転免許の取得を目的とする自動車学校の設置が理事会において決定され、諸手続を経て１９５５(昭和30)年２月８日、北海道知事の設置認可を得るとともに、学園用地内(現大学Ａ１号館の前庭付近)に自動車コースおよび諸施設を整備し、７月１日、各種学校「機農自動車学校」として開校した。初代校長は高杉成道短期大学教授が兼ねた。

７月開校当時の申込者は56名を数えたが、途中脱落する者、満18歳に達しないため受験不可能の者などもおり、初年度はわずか40名程度の受講者に終わった。

小型自動車とトラクター　初年度は普通自動車のみの教習に終わったが、農村の実情と生徒の希望などにより、小型自動車とトラクターを併せ行うこととし、１９５６(昭和31)年度より小型自動車およびオート三輪車の教習を始めた。また、トラクターの練習は、機農高校の農業クラブなどの時間も活用し、着々と成果を上げるに至った。このため、１９５８(昭和33)年度よりは一般人の募集を中止し、学園内の希望者を対象にすることとした。１９５９(昭和34)年度から所管を機農高等学校に移した。

コースの移転と新設　１９６０(昭和35)年の大学開設によって従来のコースは使用不可能となったため取りあえず機農高等学校農場内(林木育種所前)に、全長５００ｍの練習コースを造成した。交通

法規の改正により61年度から小型自動車の免許は無くなり、普通自動車のみとなった。さらに年々大学生の入学希望者も増加したため、63年には旧三愛女子高等学校隣接地に、１５、０００㎡の新コースならびに事務所、車庫、講義室などを新設し職員も増員した。

こうした整備もあって、64年以降は毎年３００名を超す合格者を出すことができ、同年６月校名を「酪農学園自動車学校」と改めた。さらに68年には４、０００㎡の舗装が完成した。

免許取得法規の改正と閉校　順調な歩みを続けてきた本校も、一大転機を迎えざるを得なくなった。１９７３(昭和48)年免許取得法規が改正になり、教習方法が大幅に変わって、路上運転教習が義務づけられることになった。同時に、公安委員会の指定自動車学校以外の学校での免許取得は、困難な状況になってきた。

こうした中で、指定校の認可を受けて存続することを検討したが、多くの条件を充足するには困難な面があり１９７５(昭和50)年度をもって生徒募集を中止した。なお、特筆すべきは１９７３年度から大型特殊車の教習を始め、70名の免許取得者を出していることである。

１９７５年度をもって一切の業務を終了し、76年６月30日閉校を決定(77年１月13日認可)し、開校以来21年の歴史を閉じた。しかし、学園内の学生、生徒に対して果たした教育的役割は大きなものがあり、同時に社会的要請にも十分応え、４、１００名を超える卒業生を送ったことは高く評価される。

歴代酪農学園自動車学校長

初　代	高杉成道	１９５５・７・１～１９６０・７・31
第２代	黒澤力太郎	１９６０・８・１～１９７５・３・31

表１　卒業生数の状況

年　度	自動車科	トラクター科	合　計
1955（昭和30）	28	9	37
1956（同 31）	55	14	69
1957（同 32）	49	54	103
1958（同 33）	38	30	68
1959（同 34）	31	39	70
1960（同 35）	55	59	114
1961（同 36）	82	32	114
1962（同 37）	160	30	190
1963（同 38）	237	37	274
1964（同 39）	262	56	318
1965（同 40）	325	87	412
1966（同 41）	268	57	325
1967（同 42）	270	40	310
1968（同 43）	239	49	288
1969（同 44）	303	(553)	303
1970（同 45）	324		324
1971（同 46）	301		301
1972（同 47）	279		279
1973（同 48）	116	(大特)58	174
1974（同 49）	26	(大特)12	38
1975（同 50）	6		6
計	3,454	663	4,117

事務取扱　山花豊　1975・4・1～1975・6・17

第３代　山花豊　1975・6・17～1976・6・30

閉校時の教職員

石川健一　丹治昌宣　的場豊継　津田佳吾（兼務）　五十嵐厳（兼務）　鈴木明子（兼務）

第2部　とわの森三愛高等学校の改革

第1章　新しい教育課程の構築

1　はじめに

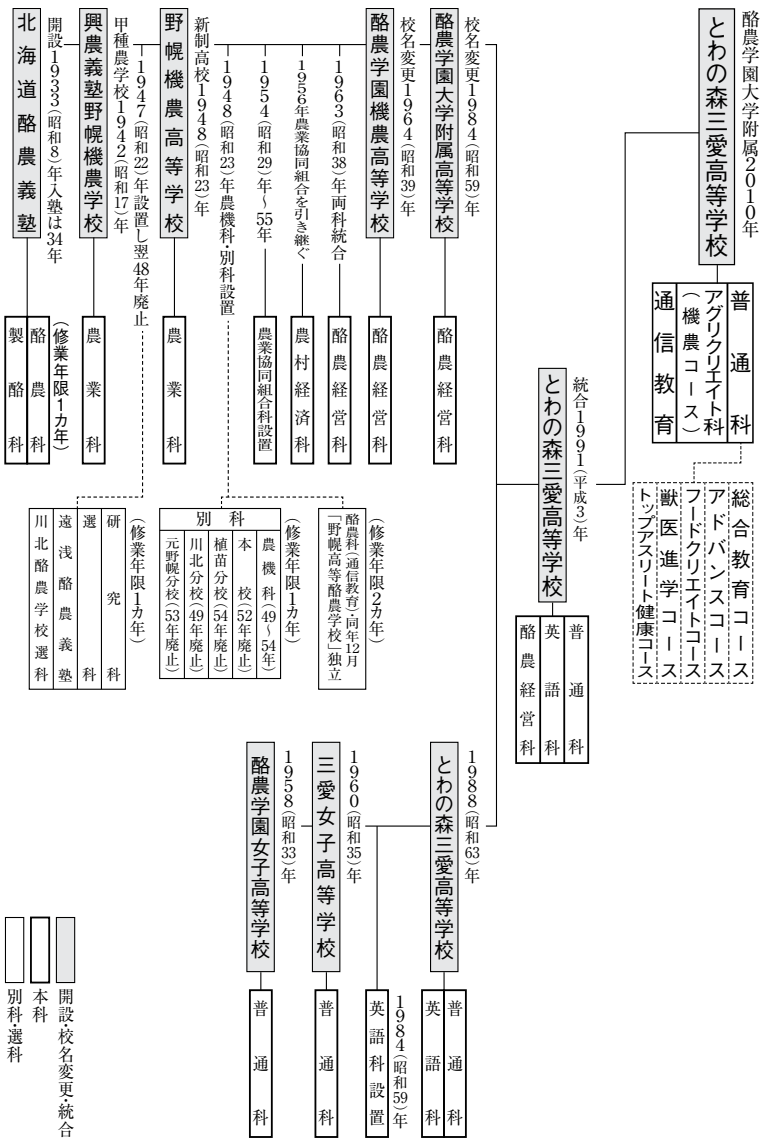
「とわの森三愛高等学校」の変遷は図に示したように、その源流は１９４２(昭和17)年に開校した甲種農学校興農義塾野幌機農学校にまでさかのぼる。また、もう一つの源流は、江別市に要請され１９５８(昭和33)年に開校した酪農学園女子高等学校である。

それぞれの学校は開校以来、とりわけ農業と農村の激変、普通科高校の増加、公立高校設置に関する教育行政の改変による社会環境の大きな変動の中で今日に至っている(変遷の経緯については学園史一・二に詳述)。両高校は、酪農学園の高校として多くの有為な人材を全国に輩出してきた。特に酪農業や酪農関連企業の振興、農村の発展に寄与する人材の育成に貢献してきたといえる。

しかし近年にあっては、酪農家の激減や全く回復が期待できない少子化進行の時代の到来を背景として、公立・私立、そして地域を問わない入学定員の確保の問題など、経営環境に厳しさが増している。近未来的には、少子化による問題のみならず国内の国際化とボーダーレス化がますます進む中、多くの学校に改変が迫られる状況にもなっている。

とわの森三愛高等学校は、取り巻く環境を厳しく認識しつつ建学の理念を今一度反芻し、その今日的意義を見出し、２０１０(平成22)年度から酪農学園大学の附属高校としての位置づけを明確にして

とわの森三愛高等学校の変遷



教育改革を断行した。しかし、教育理念の追求と合わせて将来に向けた改革の継続が必要である。本章では、新生「とわの森三愛高等学校」の改革の背景やその狙い、内容等を記述する。

２ 新しい教育課程のねらい

⑴ 社会状況

道外法人の北海道への進出を契機として１９９６(平成８)年頃より私立高等学校(以下「何々高校」と略す)の教育改革は大きく進んだ。北海道の私立高校が従来持っていた公立高校の補完校というイメージは次第に改善されてきてはいたが、私立高校の入学試験期日も２期制(２グループ)となり、推薦と専願入試を合わせて私立高校受験のチャンスが最大で３回となった時点でまた大きく情勢が動いた。公立高校の滑り止めの併願校とする私立間にも生徒募集競争と学校間の学力レベルの競争がいっそう鮮明になった。

これによって私立高校間に受験進学指導を看板にした募集力や中学部での募集による差異が生まれた。校風にもいっそう明確な差異ができると同時に、私学の生徒募集は以前のように足並みを揃えることだけではなくなった。

社会環境としては道央圏の少子化も進み、従来の公立・私立高校間の募集定員枠の調整では収まらない状態に至るようになった。急増期に石狩管内、札幌市内に設置された公立高校は統廃合も含んだ学校配置計画が進むことが明らかとなり、私立高校にとっては定員割れへの危機は避けられない状況となったため、長期展望に立っての経営戦略に各校がしのぎを削り始めた。２０００(平成12)年の前

後には中高一貫校の開校や名門私立が相次いで中学校を復活させ、小学生段階からの潜在的高校生の囲い込みが進んできた。

⑵ とわの森三愛高校の改革の必要性

とわの森三愛高校は、機農高校と三愛女子高校の伝統を引き継ぎそれぞれの時代で地域と社会の要望に応えつつ変遷と進化を遂げてきた。

１９８８(昭和63)年の三愛女子高校の男女共学化、１９９０(平成2)年の特設進学コースの設置、１９９１(平成3)年におけるこの二つの高校の統合による酪農経営科・普通科・英語科の３学科による「とわの森三愛高校」の誕生。そして英語教育に特色を見た時代の終焉に合わせて英語科の２００３(平成15)年募集停止と05年の廃止が大きな変容であった。

１９８８年の共学化からその間は安定的に推移した。１９９６(平成8)年頃からの他の私学の多くが変容する10余年の間も、その波とは一線を画して安定した生徒募集を展開していた。

しかし、公立を含む入試環境の変化に影響を受け、急激に学校が荒れた２００６(平成18)年次以降、07、08年は、入学者数が激減した。先見的な教育内容や方針を策定し、積極的に新たに特色を打ち出すことの必要性が見え始めた。

２００７(平成19)年麻田信二を新理事長に迎え、また、諸問題を越えて新たな学校の再開を期し、新校長には榮忍高校宗教主任が就任し、常任理事会は学園全体の改革に合わせて高校改革への道を用意した。

⑶ ２０１０(平成22)年度に向けた高校改革の背景

２００７(平成19)年秋、「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」が設置された後、11月には高校内部

に本部と連携する「高校改革準備室」が置かれた。高校改革準備室は、翌08年には「高校改革室」とされ、酪農学園大学の附属高校として、新たな教育の創造と教育フレームのリニューアルへの検討を始めた。教務、入試業務に若手教員が登用され改革が推進された。

改革室は、進行する少子化動向の調査と、江別市内、札幌市内、石狩管内の中学生の学校選択の状況と関連する公・私各高等学校の教育の特色分析を行った。合わせてとわの森三愛高校の江別市を中心とする地域の評価や今後の可能性を分析した。また、新しい時代の人材育成に求められる教育環境の展開の余地と提供の可能性についても検討を進めた。

改革の背景にある課題としては、

① 私学間競争の中での競争力の獲得：各学校の持つイメージや私学の格差の固定化の中で、あらためて選ばれる学校としての再構築という課題

② 少子化と公立高校再配置計画の影響にも耐えうる学校の魅力の構築：高校の統廃合や設置学級数の変動などの影響にも耐えうる学校の魅力の創出という課題

③「酪農経営科」の存続のための工夫：本学園の出発点でもある「酪農経営科」は、酪農家の減衰と後継者入学生の確保の困難を抱えてきた。教育の理念の再認識や見直し、新たな教育目標や環境の検討

④ 国内外での社会の国際化への対応：社会のボーダーレス化が進む中、学園改革の方向に立ち、高等学校、大学、大学院が一体となった食と農と生命、環境、人材交流を注視した高大一貫教育環境の設計

などと整理した。

⑷ 新たな学校づくりの方向

新しく構築する学校のフレームについては、とわの森三愛高校の持つ現在の教育力と潜在力、そして酪農学園全体の人材資源、教育環境資源、社会連携力を総合的に検討し、教育課程の設定にあたっては次のようなコンセプトを定めた。

① 普通科においては、生徒たちの幅広い個性に応えるように普通科にコース制を導入し、単なる普通科目増単展開ではなく、特色あるカリキュラムをそれぞれのコースで展開すること

② 普通科はさらに、ますますボーダーレス化する社会において国際化を意識するカリキュラムや教育プログラムを用意すること

③ 農業科においては、酪農業と酪農に関連する仕事や産業などについて、その重要性を広く深く理解させる教育を展開すること

④ 農業科教育はさらに、これまでの「酪農経営科」での教育を主体的かつ実学的に発展させることを目指し、農場教育環境の整備を行うこと

⑤ 普通科コース制と農業科の特色化による多コース募集で多元的に生徒の確保を図り、一元的な学力観による学校間競争とは別の競争軸を打ち出し、酪農学園の魅力を伝えつつ生徒を確保すること

⑥ 高大同一キャンパスのメリットを最大限に活かし高大連携を広く行う。高大連携授業の展開や、カリキュラム内容での「高大一貫」性を追求するなど、高められた学習動機による学内進学を制度的にも整えていくこと

⑦ 大学への学内進学者の増加を図り、酪農学園の教育理念や「建学の精神」の浸透と増進に貢献す

る学生を育てること

⑧ 北海道の地方過疎化から狭まる高校選択の幅が広げられるように、安心安全で学べる寮の環境を提供すること

⑨ ユニークなコース教育の展開と寮をもつ学校として、広く全国から入学志望者を集め、地域特有の価値観や風習を超える全国区型の高校教育の展開を目指すこと

以上の観点を改革具現化の方針として進めることとした。

従来の学校評価と札幌郊外の江別市に所在するという構造的課題に加え、全国的に進む少子化による動向を再認識しつつ、酪農学園が設置する「寮を持つ全国展開の高校」として新たな可能性の追求に改革の方向性を定めた。

⑸ 教育課程の特色

課程・学科の設定、コース化とコース別カリキュラム設定の観点として、目指したものは以下のとおりである。

① 少子化の進行によりゼロ入試化（全入化）する公立高校もある中で、とわの森三愛高校を積極的に選びたくなるカリキュラムの設定

② 受験進学校の私立中高一貫校と公立校との狭間で、向学の受験生が求める特色ある環境を提供するカリキュラムの設定

③ 農業と食を特化させて、大都市圏に隣接しながら他にない学校の魅力を打ち出せるカリキュラムの設定

④ 進学に悩む不登校の生徒に対し、農業実学を通して積極的な社会参加の姿勢を育む通信制課程カリキュラムの設定

３　コース制

⑴ 全日制課程普通科、５コースの展開とカリキュラム

「総合教育コース」（１６０名）　１年次から「キャリア学習」を必修科目とした。高大一貫教育科目「大学ゼミナール」を通年開講とし、大学や専門学校への進学や就職を考えるにあたり、社会に出る際に必要な学びについて継続的に学習できる環境を整えた。また、発展するアジアを見据え、２年次から「基礎中国語」を必修とした。

２年次の研修旅行は中国語圏とし、中国、台湾、マレーシア、シンガポールをターゲットに、時勢に合わせて展開することを目指す。目的は高校卒業後、中国語の継続学習へのインセンティブとアドバンテージを与えることとした。また、役立つ教養科目として「簿記」や「コミュニケーションスキル」を開講。新聞記事や報道内容を教材として現代社会を学ぶ「ＮＩＥ」では、国際社会の動きなどに関心を深め進路選択の一助となる学習内容を目指す。

「フードクリエイトコース」（30名）　「食」の大きな流れについて、畑での作物栽培から食卓までのフェーズ別で学ぶ。大学進学に対しては「食」や「農」に関する実践経験を付加価値とすることを目指す。普通科のカリキュラムの演習型科目設定等を削減し、学校設定科目として農業を科学的に体験する「食料生産科学」、マーケティングを基本的に学ぶ「トータルフード」「フードビジネス」、加

工などについての基礎知識や技術に触れる「食品加工」などを開講する。これを通じて現代社会に不足する実学的素養を持つ生徒の育成を目指す。

研修旅行地は日本と似た食料事情、食文化を持つ韓国とした。アジア諸国の中ではとりわけ外国との経済競争を激しくしている国情や社会事情についても学び、近未来の日本社会の中での積極的な生き方を模索させることも副次的目的とした。

「トップアスリート健康コース」（40名）　学校政策としての強化指定クラブの生徒の活動と学習効率を高めるクラスとして設定した。男子バレーボール、男子サッカー、女子ソフトボール、女子バドミントン、女子ソフトテニスの五つの指定クラブの中心選手生徒で構成される1クラスのコース。実践的体育科目と科学的学習の体育科目がカリキュラム内での増単位となっている。増単位科目では大学との連携で科学的なトレーニングも組み入れるなど体育に関する科学的な学習を深める。高大一貫教育科目として大学教員による通年の「健康栄養学」も特色とする。実技実践の時間を確保しつつも、強化クラブ競技以外での体育学的な学習の場ともし、身につけた知識や力を進路選択に生かすことを目的とする。合理的なトレーニング・プログラムと放課後の活動終了後の可処分時間を確保し学習時間を保証、全国大会上位入賞を目指しながら競技実績での進学や実業団などへの就職、また、スポーツ以外での進学の可能性を目指す。

２年時研修旅行は、全日本代表級がトレーニングを積む施設見学や筑波大学などの施設の利用も含めた国内とする。

「アドバンスコース」（40名）　平日７時間授業に土曜日の90分２コマの演習型講座を組み込み、数

学と理科の授業時間数を多く配置。理系進学でなくても数理的に考えることの習慣をつけるカリキュラムを設定した。ＰＤＣＡ学習システムをＨＲ指導に取り入れ、年間７回の定期考査はもとより、外部模擬試験の定期的実施と、その検証で学習動機を高める指導を目指す。コース設定以前の「特進クラス」を学力的ポテンシャルが高い生徒をターゲットに募集する。

学力だけを目的とするのではなく、将来のキャリアを見つめ実社会に関する様々な情報をキャッチできるように、高校生にはなかなか分からない仕事、職業の実相を知ることができる色々なプログラムを日常的に組み入れる工夫を図る。

研修旅行先は、アジアの国際環境を見据えベトナムとした。ＧＤＰ、１人当たりＧＤＰもはるかに日本には及ばない経済状況のベトナムは、今や国家政策として日本企業の受け入れを推進している国である。10年後の日本と国際社会を展望する「先取り学習の場」として現地企業での視察研修を取り入れる。

「獣医進学コース」（30名）　全国型の生徒募集を目指す。定員充足型入試ではなく、水準クリア型をベースとする競争入試とした。１日８時間授業、土曜講座の展開で学習する。３年次に一定の学力条件を満たせば、酪農学園大学の獣医学類への内部進学が最大30名が認められる。

１、２年次は大学教員による高大一貫通年科目の「獣医学入門」をコース設定の特色とした。職業観育成のプログラムから、大学教員によるオムニバス形式の講義で、大学での学びのインセンティブを高めることを狙いとしている。さらに、１年次には１週間の早朝牛舎実習や北海道研修小旅行、２年次には沖縄研修旅行がある。いずれも獣医師のかかわる現場や仕事内容を体験させる実学型カリ

キュラムの一環である。日常の学習と実学的プログラムから獣医師への適性を見極めさせ、獣医師の仕事の根本的な再認識とモチベーションの再構築を狙う教育内容となっている。

⑵ 全日制課程アグリクリエイト科「機農コース」の誕生と学習環境の整備

アグリクリエイト科「機農コース」（40名）　創立者黒澤酉蔵の名言である「機を知るは農の始めにして終りなり」に倣って機農高等学校の名を復活させた。酪農経営の可能性を読み込み、「酪農経営科」を改称して「アグリクリエイト科」とし、「アグリクリエイト科機農コース」とした。

「機農」という名に戻ることで、学園創立時の建学の精神に立ち返り、改めて有畜型農業の必要性と循環型社会の基礎的な実践の提示、次世代につなぐための学びの必要性を訴えることとした。

アグリクリエイト科には、この「機農」の１コースよりないが、コース増設の可能性を示しながらコース名称を付すことで学科の境を超えて普通科５コースとの並列化を狙った。

募集に当たっては、非農家出身の生徒を多く抱えることになる時代の趨勢を意識し、「後継者教育」から複合的に「農業理解者教育」、あるいは「農業支援者教育」を打ち出し、首都圏、関西圏の大都市圏からの非農家出身の生徒の募集にも力を入れることとした。

カリキュラムはこれまでの教育内容と経験をもとに、特に優秀な牛群の育成ということを目指した。学園が所持している牛群とは違う遺伝子を持つ乳牛を導入し、共進会などに堂々と出陳できる乳牛を育成することによって生徒たちの学びと活動実践の意識を高めることを目指した。高校生が主として朝夕に世話をする牛舎実践を深めることを中心にして展開することとした。したがって、座学の教材も実践と結びつく教学内容とした。

目標は、全国のどの農業高校よりも充実した授業を行うこと、実践環境に臨場感を与えることである。自分たちの育てる牛、自分たちの創る牛群、作る牛舎環境と守る循環型環境への強い実感と自信、牛への愛情と食料生産への真摯な情熱を育てることを目指した。

同時に、寮生活による自立と自律、協力と友情、思いやりと協調の心を同時に育てることで、大きな自信と充実感、達成感を高校生活全体で享受することを目指し、教育環境の充実を追求した。

実習環境の整備　学園の同窓生であり、江別市での中田牧場を経営者している中田和孝氏の支援を得てレベルの高い乳牛を導入した。以後、同窓生の篤志家からの支援をも得て牛群を大きくし、育成する環境を整えてきている。これにより酪農家からの再評価を得るようにもなり、また、目指した非農家出身者の生徒募集にも一定の効果が現れた。

首都圏や関西圏出身の生徒を含め、非農家出身の生徒が3分の1超であるが、基本的な除糞から牛体洗い、給餌の個体別管理、バケットミルカーによる搾乳と牛乳の管理、検温などの学習を日常的に行う教育を展開している。生徒たちは飼養環境にも慣れ、自らが育成する牛については相当の誇りを抱けるようになっている。各学年次において北海道内各地の酪農家でファーム・ステイによる実習研修を行う。こうした実地研修は全国の他の農業高校には類を見ない独特のものである。

生徒が、自ら積極的にかかわる牛舎環境から得る成果は、乳牛の育成技術や酪農の諸学の習得にとどまることなく、食料の危機、農業の危機、地球環境の危機のそれぞれの「機」を知り発信する力の習得でもある。視覚的にも物理的にも遠くなった食料生産現場の風景に一般の人々の心を繋ぎ戻す「農業支援者」の養成である。

4 通信制課程の設置

⑴ 設置の目的

２００７(平成19)年度までの統計では、学校不適応やいじめによる不登校、中途退学者が高校生全体の５パーセントにのぼった。それらの生徒たちの「居場所」づくりが社会の大きな課題となってきている。とわの森三愛高校は酪農学園の教育環境を活かし、生徒たちの再スタートのために特色あるカリキュラムを設定することとした。特色としては、「農」の実践をカリキュラムに取り入れ、当該の生徒たちにとってそれまでの学校環境とは趣の違う環境での学校生活を提供し、卒業後の社会参加へのスプリング・ボードとしての働きを担う教育プログラムを用意することにした。

とわの森三愛高校はこれまでも全日制の教育課程の中で、不登校傾向の生徒の一定数を受け入れてきた経緯がある。その取り組みに関しては、江別市はもとより広く石狩管内の中学校から評価を得てきた。しかし、中学時代に不登校であった生徒の半数は、全日制であるがゆえの出席日数や授業出席時数の不足などで、進級や卒業に至れず中途で進路変更をした例も少なくない。再び新たな傷を心に負い、自尊感情を失って学校を去っていく。そうした生徒たちに対し、通信制への転籍でとわの森三愛高校在籍の可能性を残す制度としても期待される。

また、人間関係が原因で不登校状況にあり続ける中学生や、他の高校の生徒なども対象にした。

⑵ 対象生徒

本校の通信制課程が受け入れ対象とする生徒は、基本的に

①人間関係の何らかの原因による不登校生徒
②何らかの人間関係による不登校がきっかけで、一定の期間を経ても対人関係が理由で通学が困難になってきた生徒
③学習に関する疑問や学校環境への不適応によって不登校となっている生徒、とした。
また本校の設置目的に合致しない生徒として入学を許可しない生徒は、
④本人の素行の不良や非行、また、いじめ(加害の側)が主たる理由で違う学校環境を求めている場合
⑤特別支援教育の枠組みに入るべきと判断する場合や特別なサポートで対応することが必要と判断する場合、とした。

不登校の背景には生徒固有の理由や要素も多く一概には対応できない。とわの森三愛高校の通信制課程が持つ教育目的は、人間関係形成力の再構築であり、社会貢献への積極的関与の助長である。したがって、学校での生活だけではなく実社会での学びやアルバイトなどでの関わりを追求させることとし、社会的関係力を高めるプログラムとした。

⑶ コース設定

週に3日登校する「通学コース」と、年間に1週間のスクーリングを2度課す「通信コース」の2コースを設定した。

通信制課程は、基本的に家庭学習による課題提出とスクーリングによる面談指導への出席を必要とし、それらと試験成績で単位を認定する教育課程である。学校でのサポートは基本的に自学内容の支援である。「通学コース」は、月曜、火曜、木曜の登校とし学習の指針となる単元ごとの集中学習とした。

ただし、火曜日は、学校設定科目としての農業、学校行事、保健体育、総合的な学習の時間としている。農場での畑作から実社会での体験型授業など実学体験を主とするプログラムである。

「通信コース」には、年間２回のスクーリングを課している。１週間のスクリーニング期間は、月曜から金曜午前まで通常の登校が求められ、金曜の午後から土曜日にかけて「北海道研修」が組まれている。農場体験や北海道の観光地で実施する体験型プログラムへの参加を必修としている。

本校は全国の13府県以外の生徒が入学できる「広域制」の通信制課程の学校として認可されているが、一般的に広域制通信制高校が遠隔地の（「通学コース」を物理的に選べない）生徒のために設置している「サポート校」や「技能連携校」を設置していない。本校でのプログラム参加に重点を置いている。

⑷ カリキュラムの特色

学校設定科目としての農作業などを通年で行う「アグリトライ」や「食品加工」、「食の安心安全学」を設定している。これらの開講科目のうち最低単位数を必修化し、卒業に必要な必修得科目とした。狙いは農業に関連する学習や作業を通じ自らの心と対話をする機会をつくることである。

種まきから育成、収穫に至るまで、作物を通して「成長と結実」に関わる。しかし実際は、作物との関わりだけではなく自分との関わりや内面との対話となる。もの言わぬ作物だからこそ、その着実な成長と変化を通して、教員の言動が示す以上の意味を学ぶ。初年度の卒業生が卒業式の答辞で述べた「農業を通じてコツコツと作り上げるものこそ価値があると実感した。…この経験を自分の人生に生かそうと思いました」は、それを象徴している。生徒は作物の成長に季節の変化や天候の変化とともに感動をもって携わる。ここに、とわの森三愛高校通信制課程の大きな特色がある。

また、普通科必履修科目展開での特色は、学習支援の必要内容が生徒によって大きく異なることへのサポート体制である。通信制課程に在学する生徒全員に対して、中学の学習内容の復習から高校の学習や大学入学センター試験のレベルまで、効果的に基礎を自学することのできるインターネット上でのｅ−ラーニング教材を与え、学校でも家でもどこでも学習できる環境を与えている。学校はネット上でその学習状況をモニタリングし、それらのデータを用いて生徒のＨＲ指導資料にも活用している。

普通科総合教育コース（総合コース・2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
外国語	ＯＣＩ	2	3			3
	英語Ⅰ	3	3	3		
	英語Ⅱ	4	3		3	
	Reading	4				
	English Conversation Ⅰ					
	English Conversation Ⅱ					
	English Conversation Ⅲ					
	総合英語					
	基礎中国語		4		2	2
家庭	家庭基礎	2	2		2	
	生活と健康		2			▲2
情報	情報Ａ	2	2			2
	Word・Excel		2			▲2
商業	簿記		4		2	2
農業	農業科学基礎					
	総合実習					
	作物					
	畜産					
	農業経営					
	課題研究					
	農業選択					
	総合実習（外）					
	アグリトライⅠ		2		△2	
	アグリトライⅡ		2			▲2
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ		2		△2	
	NIE		2			2
	健康栄養学					
	ビジネス入門		2			2
	トータルフードⅠ					
	トータルフードⅡ					
	トータルフードⅢ					
	食料生産科学					
	フードビジネス					
	大学ゼミナール		2		△2	
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス		3	1	1	1
活特動別	LHR	3～	3	1	1	1
合計			91	31	30	30

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習		2		△2	
国語	国語総合	4	5	5		
	現代文	4	6		2	4
	古典講読	2	2		2	
地理歴史	世界史Ａ	2	4	4		
	日本史Ａ	2	3		3	
	地理Ａ	2				
	北海道の地理歴史		2		△2	
公民	現代社会	2	3			3
	倫理	2				
	政治・経済	2				
数学	数学Ⅰ	3	3	3		
	数学Ⅱ	4				
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2				
	数学演習		2			▲2
	数学活用		2		2	
理科	理科総合Ａ	2	2	2		
	理科総合Ｂ	2	2	2		
	化学Ⅰ	3				
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3				
	環境科学Ⅰ		1		1	
	環境科学Ⅱ		2			▲2
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	
	スポーツⅡ					
	スポーツ実践Ⅰ					
	スポーツ実践Ⅱ					
	スポーツ実践Ⅲ					
芸術	音楽Ⅰ	2	2	☆2		
	音楽Ⅱ	2	2		☆2	
	音楽Ⅲ	2	2			☆2
	美術Ⅰ	2	2	☆2		
	美術Ⅱ	2	2		☆2	
	美術Ⅲ	2	2			☆2
	書道Ⅰ	2	2	☆2		
	書道Ⅱ	2	2		☆2	
	書道Ⅲ	2	2			☆2

注：△▲☆は、それぞれのグループの中から１科目選択

普通科総合教育コース（大学進学・2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
芸術	音楽Ⅰ	2	2	☆2		
	音楽Ⅱ	2	2		☆2	
	音楽Ⅲ	2	2			☆2
	美術Ⅰ	2	2	☆2		
	美術Ⅱ	2	2		☆2	
	美術Ⅲ	2	2			☆2
	書道Ⅰ	2	2	☆2		
	書道Ⅱ	2	2		☆2	
	書道Ⅲ	2	2			☆2
外国語	ＯＣⅠ	2				
	英語Ⅰ	3	3	3		
	英語Ⅱ	4	3		3	
	Reading	4	4			4
	Writing	4				
	英語演習Ⅰ					
	英語演習Ⅱ					
	英語演習Ⅲ					
	実践英語					
	基礎中国語		2		2	
家庭	家庭基礎	2	2		2	
	生活と健康		2			▲2
情報	情報Ａ	2	2			2
	Word・Excel		2			▲2
商業	簿記		2		2	
農業	アグリトライⅠ		2		△2	
	アグリトライⅡ		2			▲2
学校設定	コミュニケーションスキル		2		△2	
	NIE		2			2
	獣医学入門					
	獣医プレゼミ					
	大学ゼミナール		2		△2	
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス		3	1	1	1
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合計			91	31	30	30

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習		2		△2	
国語	国語総合	4	5	5		
	現代文	4	6		2	4
	古典講読	2	2		2	
	国語演習Ａ					
	国語演習Ｂ					
地理歴史	世界史Ａ	2	4	4		
	日本史Ａ	2	3		3	
	日本史Ｂ	4				
	地理Ａ	2				
	北海道の地理歴史		2		△2	
公民	現代社会	2	3			3
	倫理	2				
	政治・経済	2				
数学	数学Ⅰ	3	3	3		
	数学Ⅱ	4				
	数学Ⅲ	3				
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2				
	数学Ｃ	2				
	数学演習		2			▲2
	数学活用		2		2	
理科	理科総合Ａ	2	2	2		
	理科総合Ｂ	2	2	2		
	物理Ⅰ	3				
	物理Ⅱ	3				
	化学Ⅰ	3	2			2
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3	3			3
	生物Ⅱ	3				
	環境科学Ⅰ		1		1	
	環境科学Ⅱ		2			▲2
	化学演習					
	生物演習					
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	

注：△☆▲は、それぞれのグループの中から１科目選択

普通科フードクリエイトコース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
外国語	ＯＣＩ	2	3			3
	英語Ⅰ	3	3	3		
	英語Ⅱ	4	3		3	
	Reading	4				
	English Conversation Ⅰ					
	English Conversation Ⅱ					
	English Conversation Ⅲ					
	総合英語					
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2		2	
	Word・Excel					
商業	簿記		3	3		
農業	農業科学基礎					
	総合実習		4		2	2
	作物		6	2	2	2
	畜産					
	農業経営					
	課題研究					
	農業選択					
	総合実習（外）					
	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ					
	NIE					
	健康栄養学					
	ビジネス入門					
	トータルフードⅠ		2	2		
	トータルフードⅡ		2		2	
	トータルフードⅢ		2			2
	食料生産科学		4	4		
	フードビジネス		4		2	2
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス					
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合計			91	31	30	30

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	5	3	2	
	現代文	4	3			3
	古典講読	2				
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2				
	地理Ａ	2	2		2	
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2	3			3
	倫理	2				
	政治・経済	2				
数学	数学Ⅰ	3	4	2	2	
	数学Ⅱ	4				
	数学Ａ	2	2			2
	数学Ｂ	2				
	数学演習					
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2				
	理科総合Ｂ	2	2			2
	化学Ⅰ	3	3	3		
	化学Ⅱ	3	2			2
	生物Ⅰ	3	3		3	
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	
	スポーツⅡ					
	スポーツ実践Ⅰ					
	スポーツ実践Ⅱ					
	スポーツ実践Ⅲ					
芸術	音楽Ⅰ	2				
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2	2		2	
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2				
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				

普通科トップアスリート健康コース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
外国語	ＯＣＩ	2				
	英語Ⅰ	3	3	3		
	英語Ⅱ	4	3		3	
	Reading	4	3			3
	English Conversation Ⅰ		1	1		
	English Conversation Ⅱ		2		2	
	English Conversation Ⅲ		2			2
	総合英語					
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2	2		
	Word・Excel					
商業	簿記					
農業	農業科学基礎					
	総合実習					
	作物					
	畜産					
	農業経営					
	課題研究					
	農業選択					
	総合実習（外）					
	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ					
	NIE					
	健康栄養学		2	1	1	
	ビジネス入門					
	トータルフードⅠ					
	トータルフードⅡ					
	トータルフードⅢ					
	食料生産科学					
	フードビジネス					
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス					
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合　計			91	31	30	30

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	3	3		
	現代文	4	5		2	3
	古典講読	2	4		2	2
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2	2		2	
	地理Ａ	2				
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2				
	倫理	2	2			2
	政治・経済	2	3			3
数学	数学Ⅰ	3	2	2		
	数学Ⅱ	4	4		2	2
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2	2		2	
	数学演習					
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2	2		2	
	理科総合Ｂ	2				
	化学Ⅰ	3	2	2		
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3	4		2	2
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	
	スポーツⅡ		6	2	2	2
	スポーツ実践Ⅰ		2	2		
	スポーツ実践Ⅱ		2		2	
	スポーツ実践Ⅲ		2			2
芸術	音楽Ⅰ	2	2	2		
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2				
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2				
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				

普通科アドバンス理系コース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
芸術	音楽Ⅰ	2	2	☆2		
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2	2	☆2		
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2	2	☆2		
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				
外国語	ＯＣⅠ	2				
	英語Ⅰ	3	4	4		
	英語Ⅱ	4	4		4	
	Reading	4	4			4
	Writing	4	2	2		
	英語演習Ⅰ		2		2	
	英語演習Ⅱ		2			2
	英語演習Ⅲ		1			1
	実践英語		3			○3
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2		2	
	Word・Excel					
商業	簿記					
農業	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ					
	NIE					
	獣医学入門					
	獣医プレゼミ					
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	ｷｬﾘｱｶﾞｲﾀﾞﾝｽ					
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合計			103	35	34	34

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	5	5		
	現代文	4	4		2	2
	古典講読	2	4		2	2
	国語演習Ａ		4		2	2
	国語演習Ｂ					*3
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2				
	日本史Ｂ	4	6		3	3
	地理Ａ	2				
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2				
	倫理	2	2			2
	政治・経済	2	6		3	3
数学	数学Ⅰ	3	4	4		
	数学Ⅱ	4	4	1	3	
	数学Ⅲ	3				
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2	2		2	
	数学Ｃ	2				
	数学演習		3			*3
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2	2	2		
	理科総合Ｂ	2				
	物理Ⅰ	3				
	物理Ⅱ	3				
	化学Ⅰ	3	4	4		
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3	3		3	
	生物Ⅱ	3				
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
	化学演習					
	生物演習		3			○3
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	

注：＊○☆は、それぞれのグループの中から１科目選択

普通科アドバンス文系コース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
芸術	音楽Ⅰ	2	2	☆2		
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2	2	☆2		
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2	2	☆2		
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				
外国語	ＯＣⅠ	2				
	英語Ⅰ	3	4	4		
	英語Ⅱ	4	4		4	
	Reading	4	4			4
	Writing	4	2	2		
	英語演習Ⅰ		2		2	
	英語演習Ⅱ		2			2
	英語演習Ⅲ		1			1
	実践英語		3			○3
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2		2	
	Word・Excel					
商業	簿記					
農業	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ					
	NIE					
	獣医学入門					
	獣医プレゼミ					
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス					
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合計			103	35	34	34

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	5	5		
	現代文	4	4		2	2
	古典講読	2	4		2	2
	国語演習Ａ		4		2	2
	国語演習Ｂ					*3
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2				
	日本史Ｂ	4	6		3	3
	地理Ａ	2				
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2				
	倫理	2	2			2
	政治・経済	2	6		3	3
数学	数学Ⅰ	3	4	4		
	数学Ⅱ	4	4	1	3	
	数学Ⅲ	3				
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2	2		2	
	数学Ｃ	2				
	数学演習		3			*3
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2	2	2		
	理科総合Ｂ	2				
	物理Ⅰ	3				
	物理Ⅱ	3				
	化学Ⅰ	3	4	4		
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3	3		3	
	生物Ⅱ	3				
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
	化学演習					
	生物演習		3			○3
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	

注：＊○☆は、それぞれのグループの中から１科目選択

普通科獣医進学コース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
芸術	音楽Ⅰ	2	2	☆2		
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2	2	☆2		
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2	2	☆2		
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				
外国語	ＯＣⅠ	2				
	英語Ⅰ	3	4	4		
	英語Ⅱ	4	4		4	
	Reading	4	4			4
	Writing	4	2	2		
	英語演習Ⅰ		2		2	
	英語演習Ⅱ		2			2
	英語演習Ⅲ					
	実践英語					
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2		2	
	Word・Excel					
商業	簿記					
農業	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	コミュニケーションスキル					
	NIE					
	獣医学入門		6	2	2	2
	獣医プレゼミ		2			2
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス					
活特動別	LHR	3～	3	1	1	1
合計			115	39	38	38

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	5	5		
	現代文	4	4		2	2
	古典講読	2	4		2	2
	国語演習Ａ					
	国語演習Ｂ					
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2				
	日本史Ｂ	4				
	地理Ａ	2	2		2	
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2				
	倫理	2	2			2
	政治・経済	2	3		1	2
数学	数学Ⅰ	3	4	4		
	数学Ⅱ	4	5	1	4	
	数学Ⅲ	3	5		2	3
	数学Ａ	2	2	2		
	数学Ｂ	2	2		2	
	数学Ｃ	2	2			2
	数学演習		2			2
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2	2	2		
	理科総合Ｂ	2				
	物理Ⅰ	3	3		3	
	物理Ⅱ	3				
	化学Ⅰ	3	3	3		
	化学Ⅱ	3	5		2	3
	生物Ⅰ	3	3	3		
	生物Ⅱ	3	5		2	3
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
	化学演習					
	生物演習					
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	

注：☆の中から１科目選択

アグリクリエイト科　機農コース（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
外国語	ＯＣＩ	2	2		2	
	英語Ⅰ	3	2	2		
	英語Ⅱ	4				
	Reading	4				
	English Conversation Ⅰ					
	English Conversation Ⅱ					
	English Conversation Ⅲ					
	総合英語		2			■2
	基礎中国語					
家庭	家庭基礎	2	2			2
	生活と健康					
情報	情報Ａ	2	2		2	
	Word・Excel					
商業	簿記		3	3		
農業	農業科学基礎		4	4		
	総合実習		10	2	4	4
	作物		6	2	2	2
	畜産		6	2	2	2
	農業経営		4		2	2
	課題研究		2			2
	農業選択		2			■2
	総合実習（外）		6	2	2	2
	アグリトライⅠ					
	アグリトライⅡ					
学校設定	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ					
	NIE					
	健康栄養学					
	ビジネス入門					
	トータルフードⅠ					
	トータルフードⅡ					
	トータルフードⅢ					
	食料生産科学					
	フードビジネス					
	大学ゼミナール					
総合	礼拝	3～6	3	1	1	1
	キャリアガイダンス					
特別活動	LHR	3～	3	1	1	1
合計			97	33	32	32

教科	科目	標準単位	合計単位	１年	２年	３年
宗教	聖書		3	1	1	1
	キリスト教演習					
国語	国語総合	4	4	2	2	
	現代文	4	3			3
	古典講読	2				
地理歴史	世界史Ａ	2	2	2		
	日本史Ａ	2				
	地理Ａ	2	2		2	
	北海道の地理歴史					
公民	現代社会	2	2			2
	倫理	2				
	政治・経済	2				
数学	数学Ⅰ	3	4	2	2	
	数学Ⅱ	4				
	数学Ａ	2	2			2
	数学Ｂ	2				
	数学演習					
	数学活用					
理科	理科総合Ａ	2				
	理科総合Ｂ	2	2			2
	化学Ⅰ	3	3	3		
	化学Ⅱ	3				
	生物Ⅰ	3	2		2	
	環境科学Ⅰ					
	環境科学Ⅱ					
保健体育	体育	7～8	7	3	2	2
	保健	2	2	1	1	
	スポーツⅡ					
	スポーツ実践Ⅰ					
	スポーツ実践Ⅱ					
	スポーツ実践Ⅲ					
芸術	音楽Ⅰ	2				
	音楽Ⅱ	2				
	音楽Ⅲ	2				
	美術Ⅰ	2	2		2	
	美術Ⅱ	2				
	美術Ⅲ	2				
	書道Ⅰ	2				
	書道Ⅱ	2				
	書道Ⅲ	2				

注：■の中から１科目選択

通信制課程 教育課程表（2010年度入学生）

教科	科目	標準単位数	合計単位数	必修科目	自由選択科目
総合的な学習	総合的な学習	３～６	３	３	
国語	国語表現Ⅰ	２	２	２	
	現代文	４	４	４	
	古典	４	４		４
地歴	世界史Ａ	２	２	２	
	日本史Ａ	２	２	２	
	地理Ａ	２	２	２	
公民	現代社会	２	２	２	
	倫理	２	２		２
	政治経済	２	２		２
数学	数学Ⅰ	３	３	３	
	数学Ⅱ	４	４		４
	数学Ａ	２	２	２	
	数学Ｂ	２	２		２
理科	理科基礎	２	２	２	
	化学Ⅰ	３	３		３
	生物Ⅰ	３	３	３	
体育 保健	体育	７～８	７	７	
	保健	２	２	２	
芸術	書道Ⅰ	２	２	２	
英語	ＯＣⅠ	２	２	２	
	英語Ⅰ	３	３	３	
	英語Ⅱ	４	４		４
家庭	家庭基礎	２	２	２	
情報	情報Ａ	２	２	２	
学校設定	食の安心安全学		２	２	
	アグリトライⅠ		３	３	
	アグリトライⅡ		３		３
	アグリトライⅢ		３		３
	食品加工Ⅰ		３	３	
	食品加工Ⅱ		３		３
	食品加工Ⅲ		３		３
			88	55	33
特別活動		30時間	30時間	30時間	

2013年度 高大一貫教育概要（案）2013・4・26 高大一貫教育担当委員会 資料抜粋

№.	科目名（開講年度）	対象コース／学年	授業科目の概要
1	アグリトライ（2006年度～）	総合教育コース 2・3年生	教職コース生に、アグリトライの展開を経験させることにより、現実的な授業実践する能力を養うとともに、農業教育の持つ自学自考をはぐくむ場とする。野菜の栽培および調理加工を中心とした体験指導とする。（2013年度より「教職インターンシップⅠ」）
2	作物（2010年度～）	フードクリエイトコース 1・2・3年生	栽培学実習および作物育種学実験で高校生に大学生が指導するスタイルで実施。育種遺伝的な観点からの生育調査。循環農学概論の内、農業経済について出張講義。
3	健康栄養学（2010年度～）	トップアスリート健康コース 1・2年生	栄養の基礎的知識の習得を目指し、１タームの構成は事前学習と大学教員による講義、事後学習とする。講義とトレーニング実践により、理論と実践の融合を図る。
4	獣医学入門（2010年度～）	獣医進学コース 1・2・3年生	獣医学を学ぶ上で重要となる生物の臓器の成り立ちや機能に関して、自主学習とグループ学習で身につけ、その知識を大学教員の講義の中で確認する。
5	大学ゼミナール（2011年度～）	総合教育コース ２年生	一般的な大学に対するイメージを具体化させ、進学意識を高める。幅広い学問分野と自分の希望する研究学問分野との接合を図る。酪農学園大学に対する興味・関心を高揚させ、内部進学者数の増加を図る。
6	畜産（2011年度～）	機農コース 1・2・3年生	①乾草の梱包上げ実習 ②元野幌肉牛牛舎施設見学 ③インテリジェント牛舎にてルーメン観察実習 ④家畜繁殖ゼミによるＡＩ，ＥＴの見学、説明、ジャッジング講習
7	獣医プレゼミ（2012年度～）	獣医進学コース ３年生	①本学獣医学類に入学し、その獣医学専門教育を履修する上で重要となる各分野の活動について予め情報を得ること ②大学での学びに実感を持つこと ③本学獣医学類に入学する意欲を高めること ④入学志望の個々の生徒を深く把握する（教員）
8	現代社会（2012年度～）	フードクリエイトコース ３年生	現代社会の高大連携では、特に食の生産・流通・消費までの仕組みを理解させ興味をもたせる。そのために、講義だけでなく講義に連動した実体験や現場見学をさせる。そのことを通じ、本学（農食環境学群）への進学増大を目指す。
9	（仮）教職連携（2012年度～）		①放課後学習支援「とわ塾ＡＴ」 数学（高1～2）・英語（高1～2）の指導補助 ②教職履修者対象「授業見学」 取得希望免許科目の授業見学 ③教職コース生対象「授業実践」
10	特別授業（2012年度～）	アドバンスコース フードクリエイトコース トップアスリート健康コース 総合教育(特別選抜)コース	志望未定生徒に対し、進学動機付けを行う。 ①研究室訪問 ②環境問題に関する講義

５　校舎増築と繋ぎ飼い牛舎の新設

⑴ 学校改革による課題

１９９５(平成７)年以降全国的に情報教育の整備が加速した。多くの学校で情報教室が整備され校内ＬＡＮ整備が進んでいく中で、本校は情報教育環境の最低限は確保されているものの、授業インフラとしてのＬＡＮ環境は未設置、普通教室のＡＶ対応整備さえ整わない状況で推移してきていた。新しいＩＣＴ環境を利用する授業展開のできない不十分な環境は、生徒募集にも影響するほどであった。

一方、「心」の教育、キリスト教に基づく全人教育が特色で、不登校生徒も一定数で積極的に受け入れてきた経緯がある。しかし２００７(平成19)年度前後、生徒指導問題も増えた。メンタル・ケアが必要な生徒も増え、環境改善の改革のスタートでは生徒の安定した学校生活の環境の確保が第一の課題ともなった。

改革の緒として、人的増員として２００８年度は保健室勤務の看護師の配置、２００９(平成21)年度はカウンセラーを常駐させて外部専門家との連携で「ステップルーム」を開設。他校との差別化を図った。ステップルームは保健室に隣接する西棟２階の１教室を充当し常設とした(利用する生徒のための教務的措置も整えた)。同時に、非常勤講師陣の専用室の拡充を図り、進路指導室を移動し１教室占有して生徒の利用上での利便を図った。

２０１０年の改革で通信制課程を開設し４教室を占有とする中、校舎スペースが余裕のある状況ではなくなった。特に、改革のスタートによる注目もあり、コース化２年目の２０１１年度には早くも

総合教育コースの入学生が増え、総合教育コース１クラス増の状況となった。ホームルーム教室によって選択授業や展開授業で利用する特別教室等の空き教室の確保が窮屈となった。

また、全日制コース化で時間割もコース別に６時間目から８時間目までのバリエーションを持つようになり、放課後の教室や教室棟廊下を利用するクラブ活動と継続する授業との間で、校舎全体の利用環境として不具合が想定以上に大きくなった。

放課後の校舎活用での問題の解決と併せて、寮生の昼食の安全の増進と通学生徒への利便性の追求で、食堂を併設する校舎の増築を検討することとなった。特に寮生の弁当の配膳方法は、昨今の社会情勢から管理上の安全面と衛生面で万全とは言い難い状況となってきており、課題解決は喫緊の課題でもあった。

⑵ 普通教室南棟の増築

南棟は、本校舎から２階渡り廊下で結ばれる独立の構造で、１階の食堂兼多目的ホールは、昼休みには寮生の昼食会場と自宅通学生も利用できる食堂とした。昼食会場としてはゆったり２００席。食器や厨房調理用具は同窓会から寄贈された。

多目的に利用する場合は、ＡＶ環境完備、テーブル設置で２５０席が可能な広さで、日常の教育活動では授業や集会、コース別展開の講義などでの利用や可能性として学校説明会、ＰＴＡの会合開催、諸会議などへの利用も考慮された。

２階は、ＡＶ環境完備の６つの普通教室で、７、８時間目の授業が展開されるアドバンスコースと獣医進学コースの１～３学年の専用教室棟とした。７、８時間目授業への静粛性の確保は同時に、雨

南棟の増設　１階食堂兼多目的ホール

天時や冬季間の教室や廊下など校舎内を利用した活発なクラブ活動を可能にした。西棟は通信制課程の教室棟として閑静な環境が整うこととなった。

鉄筋コンクリート地上２階建て　南棟として竣工（２０１２年12月）

１階：食堂兼多目的ホール「フォレスト」、厨房ほか、床面積６５０㎡

２階：教室６室、廊下ほか、床面積６５４㎡

⑶ 新築牛舎

酪農学園の大学と高等学校の共同利用の実習施設となるが、主として高校生が朝夕の牛舎実習に日常的にかかわる牛舎として設置された。高校改革として２００８年から中田牧場（江別市大麻）等の協力で再開された高校生の実習向け「繋ぎ飼い」牛舎の構想を新たにして設置したものである。

北海道産カラマツの間伐集成材を使用した木造で、既設のバイオガスプラントのガスを給湯ボイラーに利用、発電用太陽光パネル20枚（約５㎾の発電）、ＬＥＤ照明、インバーター式換気扇などの設置で環境を配慮した。

教育現場の社会的な意義づけとしては、「実学経験が少なくてもよしとする今日の学校教育への提案」、「動物への関与と慈しみから、食と命への感謝、夢と希望を学ぶ環境の提供」としても意味があるものを目指した。農業科全寮制の機農コースの全生徒が実習として朝夕の牛舎作業に関わる。高い志を持つ生徒が全国から集まっているが、２０１０年改革では「後継者」教育と同時に、「農業理解者」・「農業支援者」教育も明確に目指すこととした。非農家出身も増え、首都圏や関西圏、近郊の通学圏内からも入学が見られるようになった。

床面積５５０㎡、木造平屋建て　繋ぎ飼い牛舎として竣工（２０１２年12月）

Ｄ型チェーンタイストール16頭分、独房６頭分

育成房３房、保育ペン４房

実習用フリースペース

離脱装置付きミルカーユニット６組、ミルカーユニット搬送装置（吊り下げレール）、バルククーラー（１６００Ｌ）

除糞バンクリーナー＆エレベーター（11ｍ）

鉄骨造堆肥舎（１９２㎡）、鉄筋コンクリート造尿溜め（44㎡）

第2章　学　事

1　年間学事と主要行事

⑴ 学年スリー・ステージ「通年制」と授業の安定・充実

カリキュラムのコース別の特色化はスムーズな学事進行でもたらされることを念頭に、学期制の見直し、時間割に関する抜本的な発想の転換、学習の定着の効率的な方法の模索をすることとした。

２０１０年度改革でのコース制への移行と通信制の設置では、それまでの学年を前期と後期に分けていた2学期制を廃止し、通年制とした。ただし、夏休みと冬休みを便宜的な区切りとして学年スリー・ステージ制とし、定期考査間の授業日数の均等配分による堅実な学習の助長と、学校行事等のバランスの良い配置を目指した。

⑵ 定期考査日程を主軸に据えた学事暦の設定

多くの学校では、夏休み、冬休み、春休みの長期休業を境目にする3学期制と1年を大きく二つに分けて9月末で前・後期に分ける2学期制が主流である。それぞれ、各学期の中で成績を評価するのが通例である。おおよそ各評価の数値の平均が年間の評定数値に反映される。しかし、学期の日数の差異やテストまでの間の授業時数の違いによる範囲の差異、それらによる評価数値間に格差が生じるのも現実である。

通年制では学期設定がない。年度途中での仮評定を行わず、年度末に確定評定値を出す。年間７回の定期考査で評価を重ね、日常の授業内での評価と合わせて最終成績を確定する。年度進行途中で成績が芳しくない生徒に対しては、定期考査ごとに公式の注意・警告が発せられ、結果的に単位不認定にならないように、その時点から年度末に向けて指導の徹底を図るようにした。

定期考査を合理的に配置して向学の姿勢をつくらせつつ、またその姿勢を維持させるための行事等を暦に織り込み、学校生活の充実と種々活動を通して、生徒の成長を促す取り組みに配慮をした。

通年制の導入に対しては生徒の戸惑いもあった。しかし、改革準備に当たっては、教学部による先例校の調査を全国的に行い、生徒全員が緊張感を保ちつつ学力を向上させ、また、行事等の活動での充実を追求することができるようなシステムを導入した。

通年制の導入は、本校の授業日数、学事全体での生徒の落ち着いた生活の追求でもあった。２０１０年度の改革に向けて、カリキュラム検討員会を若手教員を積極的に参加させて設置したのと同様に、行事検討委員会を設置し、行事設定の意義や行事催行での合理化を検討した。当然、そうした検討に必要な統計的な点検も行った。学校が不安定になり生徒募集で失敗した年度は、授業日数でもその関連性がうかがえる検証ともなり、改革に合わせて、落ち着いた授業環境の追求を行った。

⑶　時間割、教員業務の効率化と合理化の追求

時間割も、年間授業時数と実際の教授時間に関する他校の事例調査を行った。正味45分の授業が展開されるように授業開始前３分の予鈴で出欠点呼を行うようにし、午前３時間、午後３時間、その後に１時間もしくは２時間をつける、コース別６時間授業、７時間授業、８時間授業のスケジュールと

した。なお、昼休みを実質55分の1時間休みとして、昼食、委員会活動、面談等の展開が効率よく行えるようにし、また、生徒の昼休み時間の学習も確保できるようにした。

学籍・成績・出欠、学費等の出納の管理については、システムDの開発ソフトで、全国で最も進んでいる汎用型の管理システム「キャンパス・プラン」を導入。特に出欠管理に関しては端末ツールとしてPDA、または将来的にi－pod、i－padの導入を予測した。その場で入力でき管理上での間違いが起きにくく、データ集約の時間が大幅に短縮される。北海道では先駆的な実践で本校のオリジナル的導入となった。教員業務の合理化により、教員の生徒との関わりの増、担当時間数の増にも繋がる大きな前進であった。

ただし、職務組織の効率化の増進という点では、担当分掌教学部への業務集中が課題となり、事務職の教務担当への配置をした。

⑷ 学校年度内の行事

コース制完成年度としての2010年度主要行事は次のとおり。

4月5日(木)	始業礼拝
4月6日(金)	入学式・入寮式
4月20日(金)	2年機農十勝実習(～30日)
4月23日(月)	3年機農道南実習(～27日)
4月27日(金)	1年総合教育社会見学　3年総合教育清掃奉仕活動
5月11日(金)	強歩遠足
5月16日(水)	生徒総会

6月4日(月)　全道大会壮行会
6月5日(火)　**確認試験①**
6月12日(火)　1年全コース愛の実践活動(社会福祉施設等でのボランティア活動)
6月14日(木)　2年機農委託実習(～7月5日)
7月4～6日(水～金)　**夏季試験**
7月9日(月)　1年トップアスリート道内研修(～11日)
7月13～18日(金)　学校準備活動期間(終日活動期間)
7月19～21日(木～土)　学校祭
7月23日(月)　全国大会壮行会
7月24日(火)　夏休み(～8月19日)
7月24日(火)　夏期講習(～8月1日)
7月29日(日)　1年アド・獣進夏季合宿(～8月1日)
8月23日(木)　3年総合教育野外学習
8月31日(金)　生徒会役員選挙活動開始
9月11日(火)　1年獣進道内合宿研修(～13日)
9月14日(金)　生徒会役員選挙演説会・投票日
9月21日(金)　**確認試験②**
9月27日(木)　全校球技大会
9月28日(金)　コース別活動日
10月3日(水)　1年総合教育愛の実践活動
10月6日(土)　機能コース収穫感謝祭
10月15日～20日(月～土)　2年コース別研修旅行、1年機農体験学習
10月30日(火)　**確認試験③**

11月7日(水)　2年総合教育企業訪問
11月9日(金)　フードクリエイト・フードフェスティバル
11月26日(月)　アドベントⅠ
12月3日(月)　アドベントⅡ
12月5～7日(水～金)　冬季試験
12月10日(月)　アドベントⅢ
12月17日(月)　機農寮クリスマス
12月19日(水)　清温寮クリスマス
12月21日(金)　クリスマス礼拝・祝会
12月22日(土)　冬休み(～1月14日)
12月21日(金)　冬期講習(～26日)
1月4日(金)　カナダ研修旅行(～17日)
1月26日(土)　推薦・単願入学試験
1月29日(火)　確認試験④　3年家庭学習(～2月27日)
1月30日(水)　1年スキー授業(～2月1日)2年総合教育除雪奉仕活動
2月8日(金)　2年全コーススキー遠足
2月19～21日(火～木)　一般入学試験、採点業務
2月28日(木)　卒業記念礼拝　機農寮退寮記念会食
3月1日(金)　退寮式　清温寮退寮記念会食
3月2日(土)　卒業式　生徒・保護者・教職員合同卒業記念祝賀会(体育館)
3月6～8日(水～金)　学年末試験
3月14日(木)　終了礼拝
3月14～22日(木～金)　春期講習

２　研修旅行

⑴ 新しい研修旅行の考え方

キリスト教に基づく平和教育と黒澤酉蔵の教育理念から引き継がれている実学主義は、酪農学園における教育実践の柱である。

２００９年度入学生まで行われてきた修学旅行は、普通科は沖縄を主目的地として平和学習を展開してきた。京都２泊を含む５泊６日の「修学旅行」で、沖縄の事前学習は歴史的理解、第２次世界大戦での地域の戦況考察、文化理解、今日的社会状況の考察を中心にした。経年のノウハウの蓄積で教員全体の指導力が高く、明確に旅行目的を感得させる修学旅行であった。

２０１０年度からのコース制の設定で研修旅行の意義もコース教育の中に位置づけることとした。コース別にそれぞれ訪問先の違う研修旅行を実施する理由は次のとおり。

① 研修内容の実体化

時代の速い流れや実社会の変容は、今や普通科教育が大勢を占める教室学習だけで学ぶことは不可能。現実に即応した実体験型研修として学ばせる。研修旅行を通して各コースの日常学習を臨場感あふれるものとする。

② ステークホルダーの満足感の増進

研修旅行が日常の学習にリンクすることで生徒や保護者の充実感を高めることができる。学校内部に対しても引率する教員や次年度を準備する教員の意欲を創造的に喚起できる。

③ 費用の抑制

小規模コース化で飛行機の小型化などへの対応も比較的容易、団体行動や交通利用、施設予約、プログラムの実施の容易化を図り、費用抑制も期待。保護者負担を軽減できる。

④「より安全」の確保

訪問先を違えることで、万一の危険を最小限にする。食虫毒、自然災害などの危険からの被害の可能性を分散、安全の確保を優先的に考えるのに有利である。

研修旅行先の多様化・少人数化は、引率教員の業務の多様化と増加となる。しかし本校は、特に一つ目の「研修内容の実体化」に関して次のようなことも今日的課題と理解し、その実践を目指した。

⑵ 2011年度（2010年度第1期入学生）コース教育プログラムとしての位置づけ

「総合教育コース」

＊研修旅行訪問地：中国。北京、万里の長城、学校交流

＊期間（日数）：4泊5日

＊プログラム上の特色：北京求実職業学校との交流　日本語を専攻する大学生を各班1名のヘルパー・ガイド役として配置し、王府井地区班別自主研修（買い物、散策を中心に）

＊事前学習等：中国語授業を利用し、旅行で使う会話に特化した練習　中国人留学生の日本語学習を指導する中国人講師による講話「現在の中国学生事情」

＊参加費用：120、000円

「フードクリエイトコース」

＊研修旅行訪問地：韓国。淳昌、ソウル

＊期間（日数）：４泊５日

＊プログラム上の特色：淳昌第一高等学校との交流　淳昌醤類体験館でのコチュジャン・ピザ作り体験　独立記念館、韓国民俗村見学　韓国宮廷料理など食事提供のバラエティー

＊事前学習等：社会科授業で韓国の歴史学習を組み込み、歴史的見解の相違についての事前認識を持たせる配慮　韓国語講座を実施

＊参加費用：１２０、０００円

「アドバンスコース」

＊研修旅行訪問地：ベトナム。ハノイ、ホーチミン

＊期間（日数）：５泊６日

＊プログラム上の特色：ラ・ホン・フォン高校との交流　国営市場等での現地散策　日本企業（エースコック工場）見学、ベトナム人採用の実態や工場労働の日本との違いについて見聞、ベトナム経済への影響などを学ぶ

＊事前学習等：７月の学校祭ではアドバンスコース内１・２年の縦割り活動でベトナム展を開催　戦争から経済発展政策、現在の市民生活、物価レベルなどを具体的に学習　本校近郊在住のベトナム人女性から簡単なベトナム語会話、風習について学ぶ

＊参加費用：１５７、０００円

「獣医進学コース」

＊研修旅行訪問地：沖縄

＊期間(日数)：４泊５日

＊プログラム上の特色：動物検疫で座学。マングローブ林でのトビハゼなどの観察　美ら海水族館での獣医師による説明と見学　海洋博総合研究センターでの魚の解剖実験の実践　国際種保存センター内での鳥類の見学　マリンスポーツ(シュノーケリング)、首里城見学

＊事前学習等：シュノーケリング以外、各施設見学に必要な基本情報や研修に必要な知識を事前に学習　事前学習はイン・カリキュラムの「獣医学入門」(学校設定科目、大学教員による高大連携科目)で実施　各テーマにつきペーパー資料、ＤＶＤなど多数

＊参加費用：１６０、０００円

「トップアスリート健康コース」

＊研修旅行訪問地：関東方面

＊期間(日数)：３泊４日

＊プログラム上の特色：筑波大学。他、アスリートを目指す生徒たちを鼓舞する施設見学、メンタル面強化とコミュニケーション力の育成プログラム、特別施設見学(詳細は先方の事情考慮で詳細開示不可)　精神的リフレッシュとしてディズニーランドでの遊園

＊事前学習等：各見学地、見学施設での注意事項の徹底

＊参加費用：８０、０００円

「機農コース」

＊研修旅行訪問地：デンマーク、フランス

＊期間（日数）：11泊12日

＊プログラム上の特色：デンマーク、カーロ農学校訪問　農協訪問、農家へのサービス内容の講義の受講　農業後継者育成教育に関する国策、制度等に関する講義の受講　ファーム・ステイでの実習　フランス、パリ郊外で日本人が経営する高級野菜農園の視察　ルーブル美術館見学を含むパリ観光

＊事前学習等：各研修先で必要な情報、知識に関する学習など

＊参加費用：４０２、５００円

⑶ 企画の特色

① 参加費用は、すべて北海道新千歳空港からの費用（燃油サーチャージを含む）で、国内の修学旅行と比較して価格的に高価ではなく、他校との比較でも十分にアピールできるものである。

② 各コースは固定とはせず、社会情勢によって研修先、訪問地の決定はフレキシブルである。現に、２０１２年度第２回目の総合教育の訪問地は、日中間の尖閣諸島領土問題による中国国内での安全の確保を不安視し、台湾への変更を行っている。

③ 10年後、20年後のボーダーレス化を想定し、国際的な感覚を感受性豊かな時期に涵養することを企図は、それぞれのコースでの日常の教育を活性化する良い試みとして評価を受けた。財団法人日本修学旅行協会の発行する月刊誌「教育旅行」（２０１２年２月号）にも特集として取り上げられた。（「新たな修学旅行への取り組みと実践内容について」―今日的社会状況からの位置づけを考える―）

〈付１〉「とわの森三愛高等学校」20周年記念事業

酪農学園の始祖校の酪農義塾（１９３３年）の流れを扱む機農高等学校と酪農学園女子高等学校（１９５８年）が統合し、新生「とわの森三愛高等学校」となって20周年を迎えた２０１１年９月、周到な準備のもとに記念事業が実施された。

記念事業が在校生の心に残る形になること、また地域社会との関係を含め各関係者の記憶に残る事柄となることを追求した。２０１０年度の高校改革を経ても、とわの森三愛高校が、新旧の同窓生によっていつまでも支援される学校として繁栄するための一環事業になることを目指した。

同窓会がＰＴＡらの賛同を得て協賛会を組織し、準備を進め運営を図った。学校改革の実質的な記念事業となるように、記念式典、祝賀会、記念講演会を充実させ、これからの教育展開に貢献できるものとした。

新生「とわの森三愛高等学校」20周年記念式典・祝賀会が２０１１（平成23）年９月30日に行われ、式典には８００人余りが参加した。式典は本校礼拝堂で、礼拝形式で進められ、榮忍校長式辞、麻田信二理事長の挨拶に続いて、町村信孝元酪農学園後援会長ら来賓の祝辞が述べられた。式典は厳粛な雰囲気の中で進められ、三浦奈々生徒会長のあいさつで終了した。

また、祝賀会（会場・札幌ガーデンパレス）は１６０名の参席者を招き和やかに行われた。

20周年記念式典次第

日時　2011年9月30日
会場　とわの森三愛高等学校　礼拝堂
司式　宗教主任　　肥　田　信　長
司会　教頭　　久保木　　崇
奏楽　　宮　本　紀　子

前奏　ハンドベルクワイヤ
招きの言葉　宗教主任
讃美歌　９番　一同
聖書朗読　ヨハネによる福音書（15：1～7）　宗教主任
祈祷　宗教主任
校歌斉唱　伴奏　中　村　文　夫
式辞　校長　榮　　忍
永眠者追悼の祈り　宗教主任
挨拶　理事長　麻　田　信　二
祝辞　衆議院議員　町　村　信　孝
北海道私立中学校高等学校協会会長　森　本　正　夫
（学校法人北海学園理事長）
キリスト教学校教育同盟常任理事　酒　井　玲　子
（学校法人北星学園理事長）
日本キリスト教団北海教区総会議長
（札幌北部教会牧師）　久　世　そらち
祝電披露　副校長　黒　畑　勝　男
記念事業贈呈　とわの森三愛高校20周年記念事業協賛会会長　内間木　和　美
生徒代表挨拶　生徒会長　三　浦　奈　々
讃美歌　234 A番　一同
祝祷　宗教主任
後奏

榮 忍校長式辞(抜粋)

20周年の基点は、酪農学園の二つの高校の統合です。統合当時は英語科もありましたが、残念ながら２００５年３月の卒業生をもってその使命を終え、現在の２科体制となり、２０１０年度より、普通科を五つのコースに展開してバリエーションを追求し、農業科の科目を「アグリクリエイト科」に改め、酪農を基本に据えながら農業全般を据え直す思いを表しました。

また、全日制だけでなく通信制も取り入れ、自学自習をサポートする体制も整備したところです。

酪農学園は昭和の初期から続いてきた教育機関です。当時まだ新しい分野であった酪農業に携わる農民に、専門知識・技術を深め伝える必要があったことが原点です。

戦後、あらためて教育方針を据える際に、「キリスト教」「聖書」を基盤にすることを鮮明にし、「キリスト教学校」としての歩みを始めました。創立者たちの多くが、クリスチャンでありましたから、おそらく、戦前、戦中の教育においても、その信仰の香りは漂っていたものと推測いたします。当時の世相では「キリスト教」を前面に立て、主張することは困難だったのでしょう。日本では成人に達したことを現す20年を迎えて、本校は「キリスト教を基盤とした教育」を展開できているのかを、建学の精神をただの表題としないために、精神を高めるためにも真剣に考える必要を感じています。

さて、この機会に校長からの感謝をお伝えいたします。まず、何よりも、教職員各位であります。いわば、骨身を削っての働きは、誇りとするところです。

次に、ここで学んだ多くの生徒たちに、感謝したいのです。残念ながら、道半ばで離れていった者もいましたけれど、ほとんどの生徒たちは、その個性を大切に育ててきました。１年次にクラス単位で施設を訪問する体験ボランティアを皮切りに、いくつものボランティアに積極的に参加し、汚れや、疲れを伴う作業でもにこやかに臨んでいた生徒たちを忘れることはできません。これからも、自らの学びを深めて、人格を高めて頂きたいものです。

そして、ご来場の方々を始め、本校の教育を影から支えてくださる多くの方々に感謝いたします。ここまでの歩みに感謝し、これからも三愛精神を中心に歩みを進めることを確認し、校長式辞といたします。

なお、記念講演は、式典・祝賀会に先立って３月１日に実施した。本校の生徒・保護者や学園関係者はもちろん、広く地域社会の人々を対象とするものとして企画し、講師には、１９９８年に『五体不満足』を著して全国的に著名な乙武洋匡氏を迎えて行われた。

氏は「境遇に負けず、環境に負けず、つねに希望を持って生きること」を活き活きと語り、卒業を二日後に控える卒業生はもちろん、聴衆一人一人の心に大きな希望と勇気を与える講演会となった。

講　師　　乙　武　洋　匡　氏
演　題　　『チャレンジ精神を忘れずに』
日　時　　２０１１年３月１日　13時30分～15時
会　場　　とわの森三愛高等学校礼拝堂
聴講者　　全校生徒(約８００名)、ＰＴＡ・学園関係者(約１００名)、江別市民他、一般(約２００名)

〈付２〉クラブ活動の10年間

クラブ活動の位置づけ

クラブ活動は本校の特色に位置づけられ、この10年間においても生徒指導の一環として、生徒の人間性を育てる特別教育活動の役割を大いに果たしてきた。生徒会が管轄する文化系クラブ、体育系クラブに加えて、宗教部による位置づけのＹＣＡ部、ハンドベル部、酪農経営科・

アグリクリエイト科の学校農業クラブが伝統を引き継ぎつつ、活躍を続けてきた。また、２０１０年度高校改革で総合教育コース2年次必修科目とした中国語の教育に合わせて、２０１１年からは教学部管轄での中国語研究会が発足し、中国語スピーチ大会への参加を含む取り組みを始めている。

クラブ活動の特徴　生き生きと活動する生徒が主役であることはもちろん、指導者として顧問の熱心な取り組みも特色である。専門外ながら研鑽をつみつつ指導に当たる教員や、高い専門性と資格を持つ指導者として指導に当たる顧問も一体となって取り組んでいる。社会的には、少子化等の影響による競技者人口の減少や学校教育の中でのクラブ活動の縮小が進む昨今ながら、本校のクラブ活動は熱心な取り組みが続けられている。

男女共学・学校統合の歴史を経て、男子クラブの育成をはじめ、クラブ諸活動の発展を通して人を育てることを積み重ねてきた本校は、その取り組みにおいて江別市をはじめ全道・全国から高い評価を得ている。

10年間の各種大会において全道大会出場を実現するクラブが多数あったほか、全国大会に出場をするクラブを毎年輩出している。これらの実績は、いうまでもなく、本校に在籍する生徒全員の誇りとなっている。特に強化指定クラブの活動は、クラブ活動全体を牽引する大きな役割を果たすとともに、その実績において本校の人間教育の柱となっている。その活動は、世界ジュニア競技にソフトボールやバレーボールで強化選手を派遣するに至り、さらに世界ジュニア監督を含む指導者としての派遣が求められるほどのものとなったことは特筆される。

生徒自身が目標を持って取り組んでいること、顧問の適切な指導が実現していること、保護者によ

る熱心な支援があること、地域各校との交流による研鑽が実現していることなど、どれ一つ欠かすことができないものの中で、感謝の思いを育てつつ活動が続けられてきた。クラブ活動における生徒の活動は、各種競技に特化されたものにとどまらない。特に各クラブではボランティア活動をはじめとする社会貢献活動においても、生徒の主体性と顧問の適切な助言が重ねられている。

クラブ活動の支援体制　教育振興会による支援が、特に全道・全国大会に出場するクラブを経済的に大きく支えてきている。また、学園創立70周年事業として学園後援会から寄贈された中型バスの貢献も大きい。この10年間、生徒の遠征・大会参加において高い頻度で活用され、生徒の経済的負担の軽減に大きな役割を果たしてきた。さらに、全道・全国大会参加時には各地の同窓生、学園の同窓会による応援の輪も広がっていることも大きな力となっている。

諸課題　活発な活動が続く一方、課題もある。特に活動場所に限りがあり、時間制での活動の調整が必要である。土日や祝日であっても活動場所の調整は必須となっている。

また、施設の老朽化も課題である。長期の展望に立った施設の改修も必要とされてきた。近年では旧第２校舎の活用を含む工夫をし、２００５年には野球・サッカー兼用グラウンドの改修整備も実施した。第１校舎体育館の床面全面塗り替えなど、積年の願いも実現している。

また、ソフトボールグラウンドやテニスコートを含め、夜間照明などの施設充実に向けては、保護者などの篤志による寄付によって実現してきたものもあるが、今後、生徒の活動を支える学校施設の維持管理、改修を計画的に進めていく必要がある。

クラブ活動の根幹的な理念とする「人間教育の一つの場」をしっかりと受け継ぎ、生徒の心と体と技

術が磨かれて、夢や希望・目標実現に向かうことができるよう、取り組み続けることが必要とされている。

2013年度時点のクラブ活動

【体育系クラブ】（＊は強化指定部）

男子部　＊バレーボール部　＊サッカー部　ソフトテニス部　硬式野球部　バスケットボール部

女子部　＊ソフトテニス部　＊ソフトボール部　＊バドミントン部　バスケットボール部　バレーボール部

男女部　体操競技部　硬式テニス部　陸上部　卓球部　剣道部　空手道部

【文科系クラブ】

吹奏楽部　音楽部　書道部　美術部　写真部　家庭科部　マンガ部　茶道部　放送部　軽音楽部　YCA部

ハンドベル部　学校農業クラブ

全国大会出場実績（2003年度～2012年度）

2003年度高体連全国大会＝ソフトテニス部　ソフトボール部　体操競技部

2003年度高体連選抜全国大会＝ソフトテニス部　ソフトボール部（全国5位）

2003年度高文連全国大会＝吹奏楽部（東日本大会）　琴部

2003年度学校農業クラブ全国大会＝農業鑑定　クラブ発表

2004年度高体連全国大会＝ソフトテニス部　ソフトボール部　バドミントン部　男子バレーボール部

体操競技部

2004年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　バドミントン部　男子バレーボール部　体操競技部

2004年度高文連全国大会＝放送部　琴部

２００４年度学校農業クラブ全国大会＝農業鑑定
２００５年度高体連全国大会＝男子ソフトテニス部　ソフトボール部（全国３位）　バドミントン部　男子バレーボール部　体操競技部
２００５年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　体操競技部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部
２００５年度学校農業クラブ全国大会＝家畜審査　農業鑑定
２００６年度高体連全国大会＝男子ソフトテニス部　ソフトボール部　バドミントン部　男子バレーボール部　体操競技部
２００６年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　体操競技部　女子ソフトテニス部　男子ソフトテニス部　男子バレーボール部
２００６年度学校農業クラブ全国大会＝家畜審査　農業鑑定
２００７年度高体連全国大会＝ソフトボール部（全国３位）　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部　男子バレーボール部　体操競技部
２００７年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　バドミントン部（全国３位）　女子ソフトテニス部　体操競技部
２００７年度学校農業クラブ全国大会＝農業鑑定
２００８年度高体連全国大会＝ソフトボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部　体操競技部　男子バレーボール部
２００８年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　体操競技部
２００８年度高文連全国大会＝放送部
２００８年度学校農業クラブ全国大会＝家畜審査　農業鑑定
２００９年度高体連全国大会＝ソフトボール部　男子バレーボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニ

ス部　バドミントン部　体操競技部
２００９年度高体連選抜全国大会＝男子バレーボール部　ソフトボール部　バドミントン部　体操競技部
女子ソフトテニス部　男子ソフトテニス部
２００９年度高文連全国大会＝放送部
２００９年度学校農業クラブ全国大会＝家畜審査　農業鑑定
２０１０年度高体連全国大会＝ソフトボール部（全国３位）　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部　体操競技部
２０１０年度高体連選抜全国大会（東日本大震災のため男子バレー以外中止）＝ソフトボール部　男子ソフトテニス部　男子バレーボール部　バドミントン部
２０１０年度高文連全国大会＝放送部（全国第３位）
２０１０年度学校農業クラブ全国大会＝意見発表　家畜審査　農業鑑定
２０１１年度高体連全国大会＝ソフトボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部
体操競技部
２０１１年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部　体操競技部
２０１１年度学校農業クラブ全国大会＝意見発表　家畜審査
２０１２年度高体連全国大会＝ソフトボール部　男子バレーボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部　体操競技部
２０１２年度高体連選抜全国大会＝ソフトボール部　男子バレーボール部　男子ソフトテニス部　女子ソフトテニス部　バドミントン部（個人複全国準優勝・個人単全国３位）　体操競技部
２０１２年度学校農業クラブ全国大会＝農業鑑定

入学志願者数および入学者数

年度	入学定員	入学志願者数			入学者数		
	全日制	全日制普通科	全日制酪農経営科（2010年度よりアグリクリエイト科）	合計	全日制普通科	全日制酪農経営科（2010年度よりアグリクリエイト科）	合計
2003	340	1,389	45	1,434	326	39	365
2004	340	1,300	44	1,344	299	38	337
2005	340	1,683	49	1,732	349	40	389
2006	340	1,705	40	1,745	362	29	391
2007	340	1,398	37	1,435	264	26	290
2008	340	1,261	34	1,295	216	23	239
2009	340	1,437	31	1,468	222	20	242
2010	340	1,418	37	1,455	278	26	304
2011	340	1,457	42	1,499	324	31	355
2012	340	1,529	25	1,554	288	16	304
2013	340	1,340	42	1,382	239	29	268

〈注〉2003年度以前の推移は106頁・115頁に掲載

在籍生徒数

年度	在籍生徒数				
	普通科	酪農経営科（2010年度よりアグリクリエイト科）	英語科（2003年度より募集停止）	通信制普通科（2010年度より設置）	在籍生徒総数
2003	961	102	42	−	1,105
2004	944	108	13	−	1,065
2005	934	116	−	−	1,050
2006	965	105	−	−	1,070
2007	903	89	−	−	992
2008	766	73	−	−	839
2009	672	63	−	−	735
2010	690	64	−	5	759
2011	802	75	−	18	895
2012	856	72	−	46	974
2013	819	74	−	50	943

〈注〉2003年度以前の推移は106頁・115頁に掲載

歴代とわの森三愛高等学校長（年度）

初代　井上昌保（1991～1994）
第2代　村山昭二（1995～2006）
第3代　榮　忍（2007～　）

現教職員（2013年4月）

校長　榮　忍
副校長　黒畑勝男
教頭　久保木崇
同　真田昭好
宗教主任　肥田信長
教諭　新井昭雄
同　有澤奈々子
同　池田淳郎
同　石川和哉
同　石橋紀彦
同　伊藤俊文
同　伊藤有輝
同　梅津敏
同　越後治之
同　大中隆

教諭
同　柿崎明子
同　風岡利尚
同　川口貴之
同　源津弥生
同　佐藤文彦
同　妹尾将義
同　大光慎太郎
同　建部大自
同　田村敬子
同　辻佳江
同　栃金健
同　中ノ目敏雄
同　西川謙
同　隼野謹
同　播磨良信

教　諭　福田憲太郎
同　藤島浩二
同　前田俊哉
同　宮本　禎
同　守田純子
同　諸橋めぐみ
同　八木啓太
同　矢端信介
同　山田和弘
同　龍　梓
同　龍　聡己
教　諭（嘱託）　青羽桃佳
同（同）　家山麻希
同（同）　伊藤稔
同（同）　岩井眞

教　諭（嘱託）　大熊成美
同（同）　加藤　啓
同（同）　田島友晴
同（同）　野坂しおり
同（同）　森田　努
同（同）　吉川明花
同（同）　吉能康博
同（同）　渡邊　淳
講　師（嘱託）　張　北荔
同（同）　三浦高譽
事務部長　加福幸枝
事務課長　松田浩治
主任主事　佐々秀和
主　事（嘱託）　山崎広子

第3部　酪農学園大学の改組

第１章　酪農学園大学短期大学部の変遷・閉校〔１９４９年～２０１２年（昭和24年～平成24年）〕

酪農学園大学短期大学部（以下「短期大学」と略す）の変遷については『学園史一』および『学園史二』で開設の経緯や初・中期の教育内容、学則、校地・校舎・寮、職員組織について詳述しているので本章では、短期大学の開設から募集停止に至る概要について記すことにする。

短期大学は１９４９（昭和24）年に酪農学園大学部として開学し、翌50年に酪農学園短期大学となり、１９６２（昭和37）年製造科、１９６４（昭和39）年に農業教育として極めてユニークな季節制の第２コース（全課程を３年間で履修）を設置し、１９７４（昭和49）年には、女子のための生活科学専攻課程を設けた。

１９８４（昭和59）年には第２コースの学生募集が停止されたが、翌85年に女子のための「教養学科」を新設し、既設の酪農科と併せて校名も「北海道文理科短期大学」と改めた。

さらに、１９９０（平成２）年４月より「経営情報学科」を新設したが、１９９８（平成10）年４月より「教養学科」ならびに「経営情報学科」の学生募集を停止し、併せて校名を「酪農学園大学短期大学部」に変更し、既設の「酪農科」を「酪農学科」と名称を改めた。

本学の教育理念は、キリスト教の精神によって人間教育を行い、健土健民の思想に基づいた真理を科学的・実際的に追求し、もって、神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛の精神に徹する社会的に有為な人材を養成することを目的としている。

1　短期大学設置の経緯

短期大学設置への始動　学園が大学設置に向かって行動を起こしたのは、戦後の新しい教育制度がようやく緒についたばかりの時であった。長年の酪農教育の経験を生かして、さきに定めたキリスト教主義教育を人間教育の柱とした酪農専門の４年制大学を設置して、新時代の酪農や乳業の技術者を教育、養成することがそのねらいであった。

たまたま、この大学設置計画は、日米キリスト教関係者による国際基督教大学の設立ともからみあって、積極的な動きとなり、１９４７(昭和22)年６月14日、理事会は国際基督教大学の一環として、酪農大学設置の基本方針を決めた。

この大学はキリスト教酪農大学と称し、①キリスト教の世界観に立脚し、人類文化の向上と世界平和に寄与する　②各人の天分を発揚し、品性を高め、智能をみがき、神を愛し、人を愛し、土を愛する人間を養成する　③実学を尊び、勤労主義に徹した農業人を育成することを教育の基本綱領として酪農、製酪の２部を置き、全寮制をとることにした。

ところが、その後、国際基督教大学は、資金問題などからその計画を大幅に縮小し、東京都に教養学部の大学を設置するにとどまったため、学園ではこの基本構想による独自の酪農大学を設置することになった。

酪農学園大学部として発足　１９４８(昭和23)年５月26日文部大臣あて、酪農大学の設置認可申請書を提出した学園は、引き続いて開学に向かって諸準備を進めるとともに、学生の募集を始めた。

しかし、当時わが国の教育界が戦後の激動期にあり、加えて、学園が計画していた校舎、施設や資金等多くの事由によって、文部省の認可を得ることができなかった。そのため、取りあえず北海道知事認可による２年制各種学校酪農学園大学部として発足することになり、樋浦　誠（前出・序章）を学長に任命し、１９４９（昭和24）年７月11日酪農科39名の新入生を迎えて開校した。

この大学部は機農高校より譲り受けた校舎、校地を利用して直ちに教育を開始した。ところが、間もなく学制の改正により短期大学制度が制定されたため、学園ではこの大学部を改編し、新学制にもとづく短期大学を設置することになった。

１９５０（昭和25）年３月その設置が認可され、４月開学したため、この大学部は開学後１か年で短期大学に吸収され閉校した。

教育方針　短期大学の教育方針は、キリスト教を人間教育の基本として、各人の天分を伸張せしめるとともに、その品性を高める方針をとった。そのため神を愛し、人を愛し、土を愛する、いわゆる三愛精神を教育の根幹とし、勤労を重んじ、実学を尊ぶ教育によって、酪農の指導者を養成することにあった。

したがって、本道農業の特殊性を充分に認識、把握せしめて、寒地農業に欠くことのできない知識や技術を体得せしめることにしたが、この実学教育こそ、学園の酪農義塾創設以来変わることのない教育の基本理念で、科学、知識、技術を正しく把握せしめ、これを実践することに主眼を置いた。

なお開学の翌１９５１年１月にはキリスト教学校教育同盟に加入している。

開学時の農場教育と工場実習　本学では開学に際し、実学教育の基本方針にもとづき、農場や工

場を教育の場として、教師、学生が一体となって酪農科学の究明に取り組んだ。

すなわち、広大な農地を農場として利用し耕作、収穫、貯蔵から乳牛の飼養、管理、さらに、各種機械、機器の取扱いなど広い範囲にわたって、酪農家として必要な知識、技術を修得せしめることにした。

また、工場実習は既述の北酪社より寄贈を受けた酪農学園乳製品工場(江別市緑町)を、１９５０(昭和25)年酪農学園短期大学の設置とともにこの附属実験、実習工場とし、短大の学生はこの工場において乳製品の製造、加工の研究、実験、実習に参加し、乳製品学実習２単位を取得することにした。

一方、この工場は江別市近郊酪農家の生乳処理工場として、市乳、練乳、バター、アイスクリームなどの乳製品の製造を行っていたため、学生は一定期間この工場において従業員とともに、作業に従事することが義務づけられ、現実に商品として市場に販売される乳製品の製造、加工の過程に直接参加することによって、学生はその実態を理解し、卒業後の酪農経営や製酪業務に適応することができる教育形態でもあった。

なお、この工場は１９６２(昭和37)年売却され、代わって学園内に酪農学園大学、同短期大学共用の乳製品実習室が設置されたため、引き続いて実習教育が行われている。また、農場についてはその後幾多の変遷を経て、附属農場(後出)として現在に至っている。

初期の農場概況　実習農場は１９４２(昭和17)年機農学校(高校)設置に際し学園で取得したもので、すでに同高校の実習農場として経営されていたものである。１９４９(昭和24)年酪農学園大学部の発足に当たり12ha(第２農場)、つづいて１９５０年酪農学園短期大学の設置にともない19ha(第１農場)の移譲を受けた。

これらの農地は必要な整備を行った後、学生の実習農場として運営されることになったが、大学教育の目的である酪農の科学的研究とともに、本道における酪農経営のモデルファームとすることを目標としていた。

そのため、輪作方式の確立による生産性の向上に重点を置き、①恒久的地力の維持と牧草の位置づけ ②飼料作物、販売作物と家畜頭数との相互関連と配分 ③動畜力、農機具の活用 ④技術の導入と労力の調整、能率の強化 ⑤飼料の生産費低減と経済の総合的研究等に重点が置かれた。

なお、施設、家畜、機械、器具の状況は次のとおりであった。（１９５０年度）

第　１　農　場

建　物　畜舎84坪　農具庫24坪　作業場24坪　堆肥場30坪　サイロ１２０トン　尿溜60石

家　畜　耕馬４頭　乳牛８頭

第　２　農　場

建　物　畜舎65坪　農具庫48坪　サイロ80トン　尿溜40石

家　畜　耕馬３　豚16　緬羊７　山羊３（この年乳牛は置かず）

学生寮　学生は道内外の遠隔地から入学する者が多かったため、機農高校より移譲の施設を利用し、ダビデ寮、ヤコブ寮、マルコ寮、マタイ寮、ヨハネ寮、ペテロ寮（東野幌の学長住宅を開放）を設け全寮制度をとった。これらの寮は自治寮であったが、教師との接触も多く、若き日の人間形成に大きな役割を果たした。

☆寮生活に関する指示（１９５２年度）

一、本大学に於ては全寮制度を採る。

一、寮は安息の場であると共に、起居の間三愛精神に徹し師弟朋友相携へて新しい農業人としての知性と品性を陶冶する所である。

一、寮生活の原則

① 寮の運営は大学指示にもとづき、互選による委員を以て自治的に当る。

② 寮生活の細則は、各寮毎に取り決め、寮生は進んで之を守ること。

一、注意事項

① 挙措進退すべて紳士的であれ。

② 飲酒は禁止する。

③ 喫煙はつとめて慎しむこと。

④ 外出（居住地域外）の場合は行動予定を明らかにして置くこと。

⑤ 外泊は休日以外は原則として禁ずる。

大学ＹＭＣＡ　開学の翌１９５１（昭和26）年には、学生の組織として、大学ＹＭＣＡが発足し、総務部、文化部、体育部、厚生部、寮務部を置いて学生の自治的諸活動が行われた。毎年12月のクリスマス時期に、ＹＭＣＡ主催の市民クリスマスが野幌交友館（駅前の映画館）で開かれ、各寮演出の演劇や合唱が市民に披露された。多勢の子供たちが楽しげに集まり、市民との交流に大きなはたらきをして、当時の野幌名物の一つでもあった。

なお、文化関係クラブに、サマリヤ会、農村文化研究会、音楽同好会、園芸クラブ、英語研究サー

クル、スピーキング、将棋同好クラブの７団体が、また体育関係には、排球、籠球、山岳、角力の４クラブが置かれ（１９５３年度）、活動していた。この組織は１９６０（昭和35）年の学生自治会の結成まで、短期大学においてユニークな活動を続けていた。

三愛塾　短期大学の教育活動の一環として１９５０年８月から、夏、冬の休暇時を利用して三愛塾が開講された。農村青年教育に情熱を燃やす樋浦学長のかねてからの宿願であり、大学の農村への開放の具体化でもあった。期間は２週間で、受講者の資格は、当初は男子青年に限られていたが、農村の希望にそって「男女、年令、学歴を問わず、新しい農村建設の熱意をもつもの」とした。講師には短大の教師を主に、教会、農村関係者等が当たった。樋浦学長の「無知からの解放」「新しい村づくり運動」の訴えは農村青年の心をとらえ、毎回20～80名の受講者が集まった。

また、三愛塾の参加者による「三愛友の会」が組織され、全国各地に支部が誕生して、地方での三愛塾も開催されるようになった。１９５５（昭和30）年には機関誌「三愛」が発行されたほか、樋浦学長の構想にあった三愛移動教育、通信教育のためのテキストも順次発行されていた。１９６４年、学長の交代もあって、大学の教育活動から切り離すことになり、大学内での開催は終わりを告げることになった。しかし、その後も三愛塾は各地において開催され、新しい村づくり、三愛運動の火はなお燃え続けている。

特別入学制度　「家庭の事情で高等学校に入学できずに農村に在住する、向学心に富む優秀な青年に短期大学で勉学する機会を与えたい」、この方針にもとづいて短期大学では開学以来受験資格に次の一項を設けた。

「其の他本学において相当の年令に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者」。ことに前記の三愛塾で学び、農村にあって村の建設につくしたいという意欲ある青年には、

酪農学園大学短期大学部の経緯

- 2011（平成23）年　酪農学園大学短期大学部　募集停止
  - 1998（平成10）年　校名変更　酪農学園大学短期大学部
    - 酪農学科　1998（平成10）年　学科名称変更
  - 1985（昭和60）年　校名変更　北海道文理科短期大学
    - 経営情報学科　1990（平成2）年～1999（平成11）年
    - 教養学科（女子のみ）
      - 教養コース
      - 秘書コース　1985（昭和56）年～1999（平成11）年
      - 生活文化コース
    - 酪農科
    - 酪農科　生活科学専攻　1974（昭和49）年
    - 酪農科第2コース（季節制・3カ年）1964（昭和39）年～1984（昭和59）年
    - 製造科　1962（昭和37）年～1972（昭和47）年
    - 三愛塾　1950（昭和25）年～1964（昭和39）年
- 1950（昭和25）年　酪農学園短期大学
  - 酪農科　酪農学園大学部を吸収
- 1949（昭和24）年　酪農学園大学部
  - 酪農科　各種学校として開設

大きな夢を与えることになった。短大では入学前２か月ぐらい、教養課目の特別講習を行い、学力を判定して受験させ入学を許可した。毎年数名の学生が入学したが、入学後の勉学意欲は他の学生に劣らず、卒業生は農村にあって、農業改良普及員、教師、町村役場、農協などで活躍している者が多い。この制度は１９５９(昭和34)年度で打切られたが、短大初期の教育の一つの試みとして、三愛塾とともに教えられるものが多い。

校舎・校地　機農高校の旧校舎木造平屋建を改装し第１校舎として出発した本学も、１９６５(昭和40)年には第２校舎木造２階建を新築したほか多くの実験、実習室を建築し、さらに、教室、実験室等を酪農学園大学と共用してきた。

この間、第２コースの学生収容のため１９６７(昭和42)年北光寮第１棟、翌１９６８年北光寮第２棟の学生寮を新築した。

２　学科の推移と変容

製造科　開学時は酪農科のみを設置し、主として酪農自営者と指導者の養成に重点を置いて教育を行ってきた。その後、農業形態や社会情勢の変化に対応して、酪農指導者の育成とともに畜産製造技術者養成への道を開くことになった。そのため、開学初年度40名に過ぎなかった学生数も逐年増加し、昭和30年代(１９５５―)に入って１００名に達し、さらに増加の傾向にあった。１９６２(昭和37)年、30名の定員を50名に変更する一方、新たに定員50名の製造科を増設した。１９６２(昭和37)年３月23日文部省よりその設置が認可され、４月より開講した。

この製造科では製酪技術者の養成を重点に教育を行った。ところが、この科に対する入学者は、開講初年度は50名の定員を満たしたが、２年目39名、３年目32名と急激に減少した。

これは、製酪技術の高度化にともない、４年制大学への志向が強まったことなどが大きな要因と考えられたため、１９６４(昭和39)年より一時学生の募集を中止したが、たまたま、１９６４年開設の酪農科第２コースの充実にともない、１９７２(昭和47)年３月31日をもって正式に廃止した。

生活科学専攻　絶えず流動するわが国の農業政策のなかにあって、農業を志向する若人の減少は新たな問題となってきた。こうした傾向のなかに、女子学生が増加しているが、これは当時の農村においては高度の知識や技術が男子のみならず、広く女子にも求められているものと思われる。本学ではこうした状況に対応して、１９７４(昭和49)年より酪農科に「生活科学専攻」を設けて、これら女子学生を対象にさきの教科のほか、食品、栄養、被服、住居、児童、公衆衛生学の講義と実習を行った。

なお、以上の酪農科の卒業生に対しては、在学中に特別講習を受けることによって、家畜人工授精師(牛)、毒物劇物取扱者の資格が取得できるほか、農業改良普及員、生活改良普及員の受験資格が得られる。また、酪農学園大学酪農学科、農業経済学科の２、３年目への編入学の道も開かれた。

酪農科(第１コース)　酪農科は、短期大学設置の根幹として、開学以来酪農自営者や酪農技術者の養成に主眼を置いた教育を行い、大きな成果を収めてきた。たまたま、１９６４(昭和39)年の季節制コースの開設によって酪農科を第１、第２の二つのコースに分けて、別個のカリキュラムを編成した。

この酪農科第１コースは２年間で酪農科に必要な全課程を終了する、いわゆる通常の短期大学教育形態で、実学をモットーに一般教育科目として、人文科学６、社会科学４、自然科学６、外国語４、

酪農科（第1コース）（太字数字は必修科目）

	科目名	単位数
選択必修10単位以上	酪農演習	1
	畜産製造学実習	1
	食物学実習Ⅰ	1
	食物学実習Ⅱ	1
	生活科学実習	1
	被服構成実習Ⅰ	1
	被服構成実習Ⅱ	1
専門教育科目選択	作物栽培学	2
	草地農学	2
	作物育種学	2
	家畜育種学	2
	小家畜学	2
	家畜管理学	2
	家畜繁殖学	2
	農業気象学	2
	微生物学	2
	農業簿記学	4
	作物病理学	2
	農業害虫学	2
	農業協同組合論	2
	家畜疾病学Ⅰ	2
	家畜疾病学Ⅱ	2
	家禽学	2
	酪農経営論	2
	農村社会学	2
	農業経営診断	4
	生活科学原論	2
	農家生活経営論	2
	食品学	2
	栄養学	2
	被服学Ⅰ	2
	被服学Ⅱ	2
	住居学Ⅰ	2
	住居学Ⅱ	2
	児童学	2
	公衆衛生学	2

	科目名	単位数
一般教育科目 16単位以上	キリスト教学Ⅰ	**2**
	キリスト教学Ⅱ	**2**
	哲学	2
	教育学	2
	経済学	**2**
	歴史学	2
	政治学	2
	日本国憲法	2
	数学	2
	化学	**2**
	化学実験	**1**
	生物学	2
	生物学実験	**1**
外国語科目 4単位以上	英語Ⅰ	**2**
	英語Ⅱ	**2**
	英語Ⅲ	2
	独語	2
保健体育 2単位	講義	**1**
	実技	**1**
専門教育科目 必修18単位	家畜栄養学	**2**
	土壌肥料学	**2**
	家畜解剖生理学	**4**
	畜産製造学	**2**
	農業経営学	**2**
	農業政策学	**2**
	農業機械学	**2**
	飼料作物学	**2**
専門教育科目	酪農実習Ⅰ	**2**
	酪農実習Ⅱ	**4**
	土壌肥料学実験	1
	家畜育種繁殖学実習	1
	家畜飼養管理学実習	1
	飼料作物学実験	1
	作物保護学実験	1
	農業機械学実習	1
	獣医実習	1

保健体育２の計22単位と専門教育科目46の計68単位を最低修得しなければならない。さらに、本学では酪農経営を学ぶための酪農実習、専門科目の実験、実習に力を入れ、また、全国の優秀酪農家への委託実習を行うとともに、酪農人としての人間教育にも重点を置いている。

酪農科（第２コース）　このコースは１９６４（昭和39）年４月設置されたもので、第１コースと同様の酪農科の全課程を３年間で履修することになっている。

本コースの特色は、授業を11月から３月までの５か月間行い、修学期間を３か年とし、１年目は４、７、８月、３月後半、２年目は３月後半にそれぞれ２週間程度の集中授業を行うほか、２、３年生対象に夏期数日間の現地教育を行うことにある。

この現地教育は多くのブロックを編成し、それぞれの地域における農業の問題点をとらえ、本学の教師を中心に、現地の行政指導機関などの協力の下に実際に即した教育を実施することにした。

特に、研究課題としては、農政、経営、技術の全般にわたっているが、農政の転換期における地域実態の把握と、これに対応した方向づけなどである。

たとえば、水田地帯では「水田の省力化の問題点、今後の稲作の展望、減反政策と農業の方向性、水田酪農の実際、農協と農民の実態や今後のあり方」などである。畑作地帯では「地域農村の実態と今後の方向、規模拡大と生産性、北限農業の実態、酪農経営の実態と今後の課題、山地酪農の実態、開拓と酪農の将来」など、きわめて広い範囲にわたって研究、検討を行うほか、研究指導機関や優良農家、役場、農協、農業改良普及所などを視察して農村の生活改善、農政、経営の実態に触れ、卒業生も含めた多くの農業人との交流を深めることに努めた。

酪農科（第2コース）（太字数字は必修科目）

	科目名	単位数
一般教育科目 15単位以	キリスト教学Ⅰ	**1**
	キリスト教学Ⅱ	**1**
	キリスト教学Ⅲ	**1**
	哲学	2
	教育学	2
	経済学	**2**
	歴史学	2
	政治学	2
	日本国憲法	2
	数学	2
	化学	**2**
	化学実験	**1**
	生物学	**2**
	生物学実験	**1**
外国語科目 4単位以上	英語Ⅰ	**2**
	英語Ⅱ	**2**
	英語Ⅲ	2
	独語	2
保健体育 2単位	講義	1
	実技	1
専門教育科目 必修16単位	家畜栄養学	**2**
	家畜解剖生理学	**2**
	農業経営学	**2**
	土壌肥料学	**2**
	畜産製造学	**2**
	飼料作物学	**2**
	農業政策学	**2**
	農業機械学	**2**
専門教育科目 選択必修6単位	酪農演習Ⅰ	1
	酪農演習Ⅱ	1
	酪農演習Ⅲ	1
	酪農実習Ⅰ	1
	酪農実習Ⅱ	2
	家畜育種繁殖学実習	1
	家畜飼養管理学実習	1
	土壌肥料学実験	1
	飼料作物学実験	1
	畜産製造学実習	1
	農業機械学実験	1
	獣医実習	1
	食物学実習Ⅰ	1
	食物学実習Ⅱ	1
	生活科学実習	1
	被服構成実習Ⅰ	1
	被服構成実習Ⅱ	1
専門教育科目選択	作物栽培学	2
	家畜育種学	2
	蔬菜園芸学	2
	農業気象学	2
	微生物学	2
	農業簿記学	4
	酪農経営論	2
	家畜管理学	2
	家畜繁殖学	2
	作物育種学	2
	農協協同組合論	2
	家畜疾病学Ⅰ	2
	家畜疾病学Ⅱ	2
	農業経営診断	4
	草地農学	2
	農村社会学	2
	小家畜学	2
	家禽学	2
	作物病理学	2
	食用作物学	2
	特用作物学	2
	稲作機械化論	2
	農業害虫学	2
	生活科学原論	2
	農家生活経営論	2
	食品学	2
	栄養学	2
	被服学Ⅰ	2
	被服学Ⅱ	2
	住居学Ⅰ	2
	住居学Ⅱ	2
	児童学	2
	公衆衛生学	2

このように、農閑期を利用した集合教育や現地教育は、現状にもっとも即したものとして毎年多くの入学者があり、そのほとんどが自営者であるだけにこの教育の成果は大きく、農村後継者養成に明るい希望を与えた。また、こうした特殊の教育形態をもっている第２コースの学生のために、学生寮として、当初機農高校旧校舎を改造した申命寮が利用されていたが、その後北光寮２棟（男子、収容人員２０４名）と、かなん寮（女子、収容人員25名）が施設されて、コース開講時に開寮した。

３　校名の変更と３学科体制

１９８５（昭和60）年、校名を酪農学園短期大学から、「北海道文理科短期大学」に改め、新たに女子のための教養学科、そして１９９３（平成５）年３番目の学科として、経営情報学科が加わり、念願の３学科体制が名実ともに整い、「都市と農村の調和」を標榜する総合短期大学となった。

「教養学科」の設置と変遷　１９８５（昭和60）年、校名変更と共に改めて女子の教養学科がスタートした。学科には秘書コース、生活文化コース、教養コースの３コースを設け、きめ細かい指導で実社会で即対応できる人材を養成してきた。

この学科の教育の目標の一つは「都市と農村との融合」ということであった。酪農を中心的なイメージとして存立する本学に、都市（農村以外）からの女子だけを入学させる学科は学園にとっては極めて画期的なことであり、注目を集めた。初年度の入学生は13名と少なかったが年々微増し、ピーク時の１９９３（平成５）年には定員１００名に４６０名の志願があった。

入学以来学生に対して求めたことは、実践的な学問の追求であり、三愛精神の具現化であった。カ

リキュラムにおいては、「乳と乳製品」「寒地の農業」などの女子短期大学にはない科目を配置して、本学の特色を持った教育課程を展開した。

教養学科の教育上の工夫は、カリキュラムにあることは当然だが、それらは多数の担当者によって進められることでもあり、また授業以外の面でも種々配慮された。

まず１年次の担任を学科の専任教師全員に割り当てるため「総合演習Ⅰ」をつくり、その単位を必修させたことである。また、この「総合演習」という名称は、この当時、教養学科だけが用いた名称であるが、「総合演習Ⅰ」は、入学時の出席番号順に機械的に割り当てるので、演習の内容は教師各自の専門とは関係なく、自由にテーマを選んで行った。教員には２年のゼミ「総合演習Ⅱ」に加えて１年のゼミを担当するということには負担はあったが、これによって学生の把握が可能となった。また、１年生のゼミで行う小旅行や文集の編集などは本学ではユニークな活動であった。

しかし、教養学科は１９９８(平成10)年４月から募集を停止し、その定員は、大学「環境システム学部」の中に移されて新しいスタートを切ったが、この女子の「教養学科」の経営や実践の経験も学部へ移されて生き続けている。卒業生数は１３００名以上に達し、各分野で責任ある仕事に携っている。

歴代教養学科学科長

坂本与市（１９８５～86）　尾崎　巖（１９８７～98）

北海道文理科短期大学　教養学科（太字数字は必修科目　1998年3月）

授業科目	単位数
教養科目	
キリスト教学	**2**
キリスト教文化論	**2**
英語Ⅰ	**2**
体育実技	**1**
文学Ⅰ	2
歴史学	2
社会と政治	2
社会と経済	2
社会と法律	2
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
英語Ⅱ	2
フランス語	2
自然科学概論	2
体育講義	1
教養科目または専門科目	
必修科目群	
総合演習Ⅰ	**2**
総合演習Ⅱ	**2**
秘書学概論	**2**
日本語表現法	**2**
事務機器演習Ⅰ	**1**
人間関係論	**2**
日本文化論	**2**
生活科学概論	**2**
消費者経済論	**2**
共通選択科目群	
文学Ⅱ	2
英語表現法	2
時事英語	2
日本語	2
英米文学	2
英会話Ⅰ	2
英会話Ⅱ	2
社会心理学	2
乳と乳製品	2
卒業研究	2

授業科目	単位数
秘書・情報科目群	
簿記学	2
会計学	2
社会と情報	2
企業論	2
国際理解	2
秘書実務	2
事務管理	2
マスコミュニケーション論	2
事務機器演習Ⅱ	**1**
コンピュータ演習	**2**
人間環境科目群	
自然環境論	2
北方文化論	2
生活経営論	2
消費者教育論	2
食物科学	2
食生活論	2
住環境論	2
環境と衛生	2
社会福祉論	2
日本文化演習Ⅰ	1
日本文化演習Ⅱ	1
食物科学実習Ⅰ	1
食物科学実習Ⅱ	1

	授業科目	単位数	開講学科
他学科受講科目	北海道開発論	2	酪農科
	野生動植物	2	酪農科
	国際経済論	2	経営情報学科
	貿易実務	2	経営情報学科

・他学科受講科目を履修した場合は、修得単位のうち４単位までを共通選択科目群の単位として、卒業資格修得単位数に算入する。
・卒業必要単位数64単位以上

「経営情報学科」の設置と変遷

教養学科に続く第３の学科新設への検討が１９８６(昭和61)年から開始された。新しい学科に対するおおよそのコンセプトは大きく二つに分類された。一つは生物理科的展開であり、もう一つが情報系への志向であった。前者については、その後多少の曲折を経て酪農科のカリキュラム改訂(１９８８年)に折り込まれ、応用生物コースとして実現をみた。

情報系への志向は、急速に展開する情報化社会へ向けて、これに対応できる人材の育成が社会的要請になりつつあったことと、当時、道内においては情報に関連する学部、学科が少なかったことからである。本学科構想は将来計画委員会の下に形成された新学科検討小委員会での討議や文部省との度重なる折衝の過程で骨格は次第に固まりつつあった。すなわち、一般企業を対象とする経営学や管理論あるいは工学的立場からの情報学が単に学科内の教育にとどまらず、全く新しい角度から酪農の科学や実際にも照明を与えるものであることが期待されたのである。

経営情報学科(定員１００名・男女)の第１次申請は１９８８(昭和63)年６月末日、第２次申請は翌１９８９年の７月末日であった。また、スタッフと学科目などとの最終調整である補正申請は同年11月上旬に完了し、設置認可の報は同年12月15日に届いた。

最初の推薦入試の受付期間はほぼ10日間と短いものであったが、予想を超える志願者があり、以後の第１期、第２期学力入試を通算すると志願者は定員の約３倍になった。

主な教育内容は、新たな企業経営についての知識と技術を系統的に学び、さらに経営にとって表裏一体の関係にある情報の収集、整理、伝達など情報の価値の創造のため、コンピュータを軸として実学主義によって学習することにある。これによって、卒業後は企業内で中堅的機能を担い、地域の経

済社会に貢献し得る人材の育成を目標としている。

主要な専門教育科目は以下のとおりである。

経営学系科目＝経営学総論、企業経済論、日本経営史、協同組合論、経営管理総論、生産管理論、市場調査、管理工学、簿記原理、会計学、経営分析論

経済学系科目＝商学総論、経済原論、国際経済論、統計学、北海道開発論、民商法概説、産業心理学、人間関係論

情報学科系科目＝情報処理論、電子計算機概論、情報数学、情報処理システム、同実習、プログラミングⅠ、Ⅱ、Ⅲ、同実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ワープロ実習

実務系科目＝秘書概論、秘書実務、英語表現法、英会話、国語表現法、総合演習

なお、入学式に先立つ学科会議では以下の事項が決定された。① 1年目にワープロ特別講習を実施する。② 1年後期でコンピュータ特別講習を実施する。③ 就職対策として、初年度から各企業を訪問し、人材育成目標、教育内容などの周知を図る。④ 欠席、遅刻などを厳格にし、礼儀作法についても配慮していく。

2年目に入ると、研究や就職活動などを通して、教員と学生とのより深い交流が始まる。特色あるスタッフとの研鑽により、三愛主義をベースとして、忍耐力、創造力、そして意欲あふれる学科の形成のために、総力を傾注してきた。しかし、1998(平成10)年募集を停止し、大学の新学部「環境システム学部」の開設と連動しながら定員や学科機能、教員らは移行した。

歴代経営情報学科学科長

横山節麿（1990～94） 齋藤 瞭（1995～98）

北海道文理科短期大学　経営情報学科（太字数字は必修科目　１９９８年３月）

授業科目	単位数
民商法概説	2
卒業研究	2
経営・会計システム科目群	
会計学	2
品質管理論Ⅱ	2
コンピュータ会計演習	1
原価計算論	2
組織管理論	2
生産システム工学	2
経営分析論	2
情報システム科目群	
情報数学	2
応用プログラミング論	2
応用プログラミング論演習	1
情報システム論	2
情報システム論演習	1
COBOL言語演習	1
情報システム応用論	2
情報システム応用論演習	1
高度情報技術概論	2
国際ビジネス科目群	
英語Ⅱ	2
英語表現法	2
ビジネス英語	2
英会話Ⅰ	2
英会話Ⅱ	2
国際経済論	2
貿易実務	2

	授業科目	単位数	開講学科
他学科受講科目	植物生態学	2	酪農科
	野生動植物	2	酪農科
	乳と乳製品	2	教養学科
	自然環境論	2	教養学科

・他学科受講科目を履修した場合は、修得単位のうち４単位までを共通選択科目群の単位として、卒業資格修得単位数に算入する。
・卒業必要単位数64単位以上

授業科目	単位数
教養科目	
キリスト教学	**2**
キリスト教文化論	**2**
英語Ⅰ	**2**
体育実技	**1**
文学	2
経済学	2
フランス語	2
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
歴史学	2
体育講義	1
法学	2
自然科学概論	2
教養科目または専門科目	
必修科目群	
経済原論	**2**
簿記原理	**2**
簿記演習	**1**
経営学総論	**2**
品質管理論Ⅰ	**2**
電子計算機概論	**2**
経営科学概論	**2**
ワードプロセッサ演習	**1**
企業形態論	**2**
プログラミング論	**2**
プログラミング論演習	**1**
経営管理総論	**2**
総合演習	**2**
共通選択科目群	
商学総論	2
秘書実務	2
国語表現法	2
マーケティング論	2
統計学	2
産業心理学	2
北海道産業論	2
日本経営史	2
企業経済論	2
協同組合論	2

４　酪農学園大学短期大学部「酪農学科」

１９４９(昭和24)年の開学以来、60余年の伝統を持つ酪農学科(酪農科)は、幾多の試練を克服して、建学の理念の「三愛精神」、「健土健民」「実学」を堅持し地域のリーダーとして活躍する酪農家や農業関係団体の専門技術者を多数輩出してきた。しかしながら、この十数年間は激動の時代だったといえる。18歳人口の減少と高校生の短大離れの傾向に加えて、酪農業を取り巻く環境がより厳しさを増して、受験者数が減少してきたために２度の大きな転換期を迎えた。

その第１は、１９９４(平成６)年度にカリキュラムを改訂し、酪農を目指さない、生物一般に興味を持つ学生に対応したコースの充実を図ってきた。それ以前も非酪農系の学生に対応するため、酪農科学コースとともに応用生物コースを設けていたが、より魅力的な科目配列で、修学の便を図るために必修科目群の見直しをした。同時に各コースに新設科目を配した新たなカリキュラムをスタートさせたことによって、これまで酪農に偏りがちだった学科教育を、環境、生物工学など学生がより興味を示す分野にも幅を広げ、全国各地からこれまで以上に多くの受験生を集めることができるようになった。

第２の転換期は、このカリキュラムでの新たな教育展開をもってしても、18歳人口の減少と高校生の短大離れの傾向に歯止めをかけることが難しく、教養学科、経営情報学科の２学科が大学へ改組転換されることに合わせて、本学科も幕を閉じることが学科会議や教授会で話し合われたのである。これらのことから、理事会は酪農家の定員を50名に縮少し、酪農自営者を育成し、かつ学部への編入を

可能にする学科へと変身存続することを決定した。

その決定によって応用生物コースは廃止され、酪農自営者養成を主眼としたカリキュラムを編成し、１９９８年度からスタートさせた。

また、本学科の日常の教育研究活動は大学酪農学科と協力して行い、１９９８(平成10)年度から学科会議も合同で開催している。

改組後初めての卒業生の進路を見ると、学部に編入する学生は多かったものの、酪農自営者はわずかに6名と1割に過ぎなかった。また、学生の間から履修できる教科目に幅が少なすぎるなどの声が挙がったことから、すべての学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、酪農を中心とした農業を志して入学してきた学生にとっては農業関連の教科が、生物が好きでその学習を志して入学してきた学生にとっては生物関連の教科がそれぞれ中途半端で物足りないという、カリキュラムに対する不満が寄せられた。

これを解決するため、２００１(平成13)年度に大幅なカリキュラムの改訂と単位認定の弾力化を行うとともに、本学の学生が大学の開講科目から単位が取得できるように酪農学部と単位互換協定を締結した。さらに講義およびゼミナールは、大学酪農学科の科目と同じ名称で同じ教員によって行われており、内容は非常に濃く、大学と同等のレベルとなっており、次のゼミナールが置かれていた。

動物生産システム＝家畜栄養学・家畜繁殖学・家畜管理学・家畜行動学・生物学・家畜飼料学・家畜遺伝学・家畜育種学・環境昆虫学

植物生産システム＝土壌植物栄養学・飼料作物学・草地学・農業工学・農業微生物学・植物育種学・資源植物学

環境情報システム＝畜産システム工学・酪農天然物化学・教育心理学・微生物利用学・キリスト教学（キリスト教ＮＧＯ論）・食物利用学・酪農経営学

附属農場＝乳牛飼養学

(1) 附属農場における実習教育

附属農場で展開される酪農実習は、本学における教育の重要な柱である実学教育の一翼を担っている。

附属農場の経緯＝附属農場の変遷については他の項でも触れているのでここでは概要について述べておく。酪農大学部実習農場の設置は酪農大学部の開設と合わせて１９４９（昭和24）年であり、翌50年の短期大学の開設に伴って短期大学実習農場が設置された。さらに１９６０（昭和35）年、大学の開設とともに大学・短期大学実習共同農場の発足となった。しかし、１９６４（昭和39）年、農場再編に伴って酪農学園中央農場が発足し、そのため、大学と短期大学農場に分離され、短期大学は中央農場に再編成されたが、約10年を経た１９７３（昭和48）年に再び大学・短期大学附属農場となった。

１９８８（昭和63）年には附属高等学校実習農場と合併（第１牛舎・第２牛舎）され、２０００（平成12）年には農場の再編により施設が新設（インテリジェント牛舎、バイオガスプラント、バンカーサイロなど）された。

実習内容＝附属農場が担当している短期大学の実習科目は、酪農実習Ⅰおよび酪農実習Ⅱ（委託農家実習）である。酪農実習Ⅰは、１９７５（昭和50）年までは中央農場（旧中央農場第２農場、後の附属農場第１牛舎）で展開され、元野幌農場も実習農場として活用されていた。その後学園農場の再編成に伴い大学の実習と同じ場での実習形態になった。

酪農実習Ⅰは、附属農場において、基礎的な農作業を中心に実習することを通して、酪農（農業）へ

の興味を持たせ、初歩技術を学び、研究心と観察力を養うことを目的として、労働作業を主眼においている。実習の内容は、一般実習と特別実習に区分され、２単位で行っている（大学は1単位）。一般実習は圃場管理と牛舎実習からなっている。

圃場管理＝圃場・牛舎周辺の環境整備、トウモロコシの播種、除草、粗飼料の収穫・調製など

牛舎実習＝搾乳の実際、乳牛の体格測定、乳牛管理作業など。実習内容は大学の実習とほぼ同じであるが、98年の入学定員減に伴って隔週実習から毎週実習になり、実習時間数は倍増した。特別実習は、旧来から続けられている早朝牛舎実習などの集中実習である。早朝実習は、５時30分からの搾乳実習が１週間継続して行われる。

歴代酪農学科（酪農科）学科長

横山節麿（１９８５～88）　土橋慶吉（１９８９～92）　市川　舜（１９９３～96）
水野直治（１９９７～２００２）　佐々木 均（２００３～４）　菊地治典（２００５～６）
上田純治（２００７～10）　寺脇良悟（２０１０～11）

取得資格など

［取得資格］　家畜人工授精師（講習会合格の場合）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位を修得した者）

［受験資格］　毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）、農業改良普及員（卒業後２年以上の実務経験者）

短期大学部　酪農学科（単位の太字数字は必修科目）

授業科目	単位数
家畜飼養管理学実習	1
家畜育種・繁殖学実習	1
家畜衛生学実習	1
酪農施設・機械学実習	1
酪農情報処理演習	1
畜産物利用学実習	1
海外実習	4
関連科目	
酪農場の微生物学	2
園芸学	2
作物保護学	2
ガーデニング	2
バイオテクノロジー	2
暮らしのサイエンス	2
農業協同組合論	2
生産物マーケティング論	2
総合科目	
総合演習	**1**
酪農演習	**1**
演習Ⅰ	**1**
演習Ⅱ	**1**
特別実習Ⅰ（技能）	1
特別実習Ⅱ（技術）	1
卒業研究	4
自由科目	
他大学等互換科目	
計	110

酪農学科

科目	卒業必要単位数
教養科目	12単位
専門科目	28単位
実験実習科目	9単位
関連科目	6単位
総合科目	4単位
自由科目	
合計	65単位以上

各々の科目区分の卒業に要する最低修得単位数を満たし、かつ合計単位数に不足する６単位をいずれかの科目区分から修得しなければならない。

授業科目	単位数
教養科目	
キリスト教学	**1**
キリスト教文化論	1
基礎英語	**2**
酪農英語	2
コミュニケーション・イングリッシュⅠ	1
コミュニケーション・イングリッシュⅡ	1
体育実技	1
健康管理学	2
生物学	**2**
生物学実験	**1**
畜産化学	2
畜産化学実験	**1**
コンピュータ演習	**1**
農村社会学	2
経済学	2
哲学	2
政治学	2
数学	2
統計学	2
専門科目	
酪農概論	**2**
酪農経営マネジメント	**2**
酪農経営論	2
農場管理の新戦略	2
作物栽培学	**2**
作物生理学	**2**
土壌・植物栄養学	**2**
草地・飼料作物学	**2**
酪農施設・機械学	**2**
反芻家畜生理学	**2**
家畜管理学	**2**
家畜栄養学	**2**
家畜育種学	**2**
家畜繁殖学	**2**
家畜解剖学	**2**
家畜衛生学	2
酪農環境論	2
畜産物利用学	2
実験実習科目	
酪農実習Ⅰ	**2**
酪農実習Ⅱ	**4**
土壌植物栄養学実験	1
草地・飼料作物学実習	1

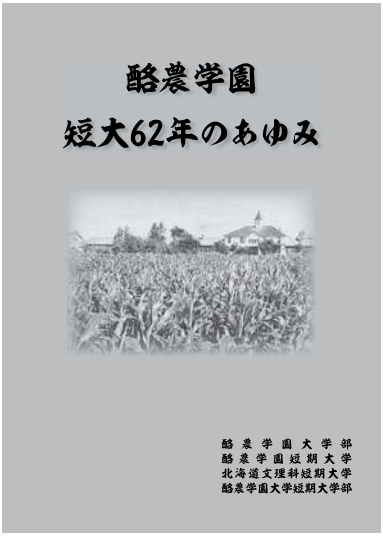
⑵　酪農学園大学短期大学部閉校記念式典の挙行

「酪農学園大学短期大学部」は、１９４９(昭和24)年７月11日、酪農学園短期大学部(同年９月６日各種学校認可)として開校されて以来、社会情勢のめまぐるしい変化と厳しい教育環境のなかで「酪農学園短期大学」「北海道文理科短期大学」と教育体制の再編を進め62年に及ぶ歴史を重ねてきた。

２０１３(平成25)年２月15日、その歴史に幕を閉じる閉校式典がホテル札幌ガーデンパレスで挙行され、併せて記念講演・懇親会が開催された。

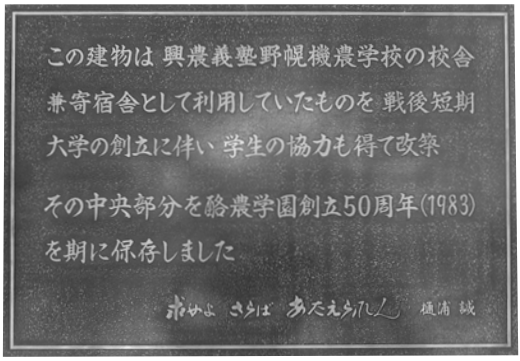
式典は約１５０名の関係者の列席の下、藤井創大学宗教主任の司式で進められ、酪農学園理事長麻田信二の式辞、同同窓会連合会顧問高橋節郎・同会長野村武・同短期大学部同窓会会長堀内信良から挨拶があった。酪農学園大学短期大学部同窓会からは記念品(「健土健民」碑・目録の贈呈)があり、学長谷山弘行の挨拶をもって閉式した。その後、本学園卒業生２名による記念講演があり、続いて懇親会が和やかに行われた。

なお、閉校を記念して「酪農学園　短大62年のあゆみ(閉校記念事業実行委員会編集)」誌が発行された。



酪農短大閉校記念誌

旧短期大学校舎（現同窓生会館）



＜式　次　第＞

司式　宗教主任　藤井　創
奏楽　金子　千恵

前　奏
賛 美 歌　２３４Ａ番
新約聖書　フィリピの信徒への手紙　３章 12－16 節
式　辞　理事長　麻田　信二
挨　拶　酪農学園同窓会連合会　顧　問　高橋　節郎
酪農学園同窓会連合会　会　長　野村　武
酪農学園大学短期大学部同窓会　会　長　堀内　信良
記念品贈呈
頌　栄　５４１番
祝　祷
挨　拶　学　長　谷山　弘行

記念講演　演題「酪農家とともに歩んだおいしい牛乳づくり」

函館酪農公社取締役会長　金子　隆
野幌高等酪農学校第６期

演題「これからの酪農学園に期待すること」

永井農場代表取締役　永井　進
北海道文理科短期大学酪農科第40期

麻田信二　酪農学園理事長式辞（抜粋）

短期大学は、１９４９年に酪農学園大学部の開校に始まり、翌50年には酪農学園短期大学として本格的に酪農の高等教育に乗り出しました。その後、１９６０年に、酪農学園大学が設立されましたが、短期大学は継続され、１９８５年に名称を北海道文理科短期大学として内容を大幅に改組し、「都市と農村の調和」を標榜する総合短期大学となりました。

そして、短期大学から四年制大学へのニーズの変化に対応し、１９９８年には、大学の改組の中で、酪農学科のみの酪農学園大学短期大学部となり昨年３月最後の卒業生を送り出し、短期大学62年の幕を閉じました。

短期大学の歩んできた歴史に学ぶ時、わが国のほとんど全ての大学が実学教育を標榜していますが、先生と学生が寝食を共にしながら、座学の授業に加えて、自らの手を使って土地を改良し、建物を作り、草を作り、牛を飼うことを通じて、正しい人間としての人格を完成していく教育は真の実学教育といえるものであり、それを実践したのが短期大学でした。その伝統の上に今の酪農学園大学が存在しているのです。

一昨年の３月11日、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の重大事故は、改めて短期大学の精神の中心にあった健土健民思想がいかに大切かを思い知らせてくれました。

田中正造全集の中に、正造翁の最後の祈りとして、「現在を救い給え、現在を救い給え、ありのままを救いたまえ」だったと記されています。そして、正造翁は、「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざる」と述べています。この精神こそが「健土健民」思想であり、賀川豊彦先生の「酪農讃歌」にも通じるものがあると思いますし、賀川先生や黒澤先生の世界平和実現のための世界連邦運動にも結びついているのです。

田中正造翁、賀川豊彦先生、黒澤酉蔵先生、樋浦誠先生といった先達の精神を強く持っている短期大学の精神は、酪農学園大学のこれからの歩みにしっかりと受け継がれていくことで、酪農学園は発展していくことができるものと確信を持って語ることができます。

短期大学の卒業生にとりましては、母校がなくなることは淋しいとのお考えは当然のことと思いますが、世界は常に変化しています。この世で変わらないものは何一つありません。人類社会、大きく言えば、宇宙・天地自然の変化の中で酪農学園が発展する一つの過程の中に本日の閉校式典があると考えます。

短期大学の輝かしい歴史とそこで学んだ方々に心から敬意の念を持ちながら、短期大学を創立し育て上げた先達の熱意を忘れることなく、現在酪農学園で働く職員が全力を尽くして、学園の発展に力を注いで行かなければならないと考えます。

歴代酪農学園大学短期大学部学長（酪農学園短期大学、北海道文理科短期大学）

初代	樋浦　誠	1949・4・1～1963・12・7
第2代	黒澤酉蔵	1963・12・7～1966・3・31
第3代	佐藤　貢	1966・4・1～1969・12・14
事務取扱	橋本吉雄	1969・12・14～1970・3・18

第２代	橋本吉雄	1968・3・24～1970・3・18
初代	黒澤亮助	1963・12・7～1968・3・23
副学長		
第10代	谷山弘行	2007・4・1～2012・10・12
第９代	大谷俊昭	2005・4・1～2007・3・31
第８代	安宅一夫	1997・4・1～2005・3・31
第７代	坂本与市	1989・4・1～1997・3・31
第６代	牛島純一	1985・4・1～1989・3・31
第５代	遊佐孝五	1973・7・6～1985・3・31
事務取扱	久米小十郎	1973・3・31～1973・7・6
事務取扱	土橋慶吉	1971・12・23～1973・3・31
事務取扱	中曽根徳二	1971・12・3～1971・12・23
事務取扱	沼田芳明	1971・6・18～1971・12・3
事務取扱	高杉成道	1971・2・24～1971・6・18
事務取扱	遊佐孝五	1971・1・7～1971・2・24
事務取扱	桜井豊	1971・1・4～1971・1・7
第４代	橋本吉雄	1970・3・18～1971・1・3

学生数の推移

酪農学科（酪農科１コース）　募集定員の（　）付数字は２コースと合算したもの

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1949（昭和24）	30	—	39	—	—
1950（ 同 25）	30	—	40	—	16
1951（ 同 26）	30	—	44	—	30
1952（ 同 27）	30	—	44	—	37
1953（ 同 28）	30	—	55	—	36
1954（ 同 29）	30	—	86	134	47
1955（ 同 30）	30	—	56	131	59
1956（ 同 31）	30	—	60	105	46
1957（ 同 32）	30	—	62	102	59
1958（ 同 33）	30	—	100	148	55
1959（ 同 34）	30	—	100	186	91
1960（ 同 35）	30	—	63	157	78
1961（ 同 36）	30	—	116	180	55
1962（ 同 37）	50	—	62	166	92
1963（ 同 38）	50	—	60	125	54
1964（ 同 39）	(50)	—	31	94	54
1965（ 同 40）	(50)	—	58	95	25
1966（ 同 41）	(50)	171	73	137	46
1967（ 同 42）	(50)	114	79	159	67
1968（ 同 43）	(50)	149	108	186	78
1969（ 同 44）	(50)	156	107	210	88
1970（ 同 45）	(50)	146	95	198	83
1971（ 同 46）	(50)	104	98	207	85
1972（ 同 47）	(50)	78	71	184	79
1973（ 同 48）	(50)	72	91	180	59
1974（ 同 49）	(150)	119	107	211	74
1975（ 同 50）	(150)	120	124	248	100
1976（ 同 51）	(150)	207	145	282	115
1977（ 同 52）	(150)	220	149	296	119
1978（ 同 53）	(150)	353	162	327	138
1979（ 同 54）	(150)	251	147	314	152
1980（ 同 55）	(150)	230	146	304	143
1981（ 同 56）	70	230	143	293	136
1982（ 同 57）	100	240	192	290	143
1983（ 同 58）	150	261	186	291	115
1984（ 同 59）	150	270	167	331	129
1985（ 同 60）	150	319	166	348	160
1986（ 同 61）	150	326	189	354	136
1987（ 同 62）	150	305	172	374	177

酪農学科（酪農科１コース）（つづき）

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1988（昭和63）	150	299	167	350	161
1989（平成１）	150	307	162	337	146
1990（ 同 ２）	150	310	164	335	154
1991（ 同 ３）	140	352	160	325	150
1992（ 同 ４）	140	364	160	325	145
1993（ 同 ５）	140	332	163	331	145
1994（ 同 ６）	140	360	162	332	144
1995（ 同 ７）	140	358	164	342	158
1996（ 同 ８）	140	513	160	334	157
1997（ 同 ９）	140	588	160	329	163
1998（ 同 10）	140	280	63	224	153
1999（ 同 11）	50	223	64	127	58
2000（ 同 12）	50	142	63	127	61
2001（ 同 13）	50	140	71	136	60
2002（ 同 14）	50	112	66	138	65
2003（ 同 15）	50	96	67	133	65
2004（ 同 16）	50	142	57	126	63
2005（ 同 17）	50	106	56	115	53
2006（ 同 18）	50	81	53	108	49
2007（ 同 19）	50	63	43	98	52
2008（ 同 20）	50	65	54	96	40
2009（ 同 21）	50	43	33	85	51
2010（ 同 22）	50	59	45	78	29
2011（ 同 23）	0	0	0	44	43
計	－	－	－	－	5,176

酪農学科（酪農科２コース）

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1964（昭和39）	－	－	111	111	－
1965（ 同 40）	－	－	105	196	－
1966（ 同 41）		123	114	286	77
1967（ 同 42）		113	101	297	95
1968（ 同 43）		123	107	306	93
1969（ 同 44）		178	115	314	81
1970（ 同 45）		144	116	313	86
1971（ 同 46）		110	98	306	85
1972（ 同 47）		89	79	285	93
1973（ 同 48）		86	83	264	79
1974（ 同 49）		97	90	237	57

酪農学科（酪農科２コース）（つづき）

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1975（昭和50）		82	79	254	64
1976（ 同 51）		124	94	261	83
1977（ 同 52）		180	136	296	62
1978（ 同 53）		169	124	331	75
1979（ 同 54）		171	121	351	93
1980（ 同 55）		102	77	309	105
1981（ 同 56）	80	96	74	264	95
1982（ 同 57）	50	—	50	199	71
1983（ 同 58）	—	—	37	149	58
1984（ 同 59）	—	—	—	80	42
1985（ 同 60）	—	—	—	34	34
計	—	—	—	—	1,528

製造科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1962（昭和37）	50	—	51	51	—
1963（ 同 38）	50	—	39	95	45
1964（ 同 39）	—	—	32	78	38
1965（ 同 40）	—	—	—	30	28
計	—	—	—	—	111

教養学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1985（昭和60）		124	73	73	—
1986（ 同 61）	100	163	99	169	69
1987（ 同 62）	100	167	104	199	92
1988（ 同 63）	100	159	109	212	96
1989（平成１）	100	173	112	223	109
1990（ 同 2）	100	290	127	241	101
1991（ 同 3）	90	252	114	248	125
1992（ 同 4）	90	277	112	230	113
1993（ 同 5）	90	460	124	235	107
1994（ 同 6）	90	403	102	224	121
1995（ 同 7）	90	237	106	208	97
1996（ 同 8）	90	188	83	190	105
1997（ 同 9）	90	226	117	196	74
1998（ 同 10）	—	—	—	110	108
計	—	—	—	—	1,317

経営情報学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1990（平成２）	100	298	113	113	－
1991（ 同 ３）	100	396	117	229	103
1992（ 同 ４）	100	507	118	237	114
1993（ 同 ５）	100	513	124	241	109
1994（ 同 ６）	100	431	127	250	107
1995（ 同 ７）	100	357	139	275	126
1996（ 同 ８）	100	314	124	262	119
1997（ 同 ９）	100	328	125	258	119
1998（ 同 10）	－	－	－	123	120
計	－	－	－	－	917

第2章　酪農学園大学

はじめに

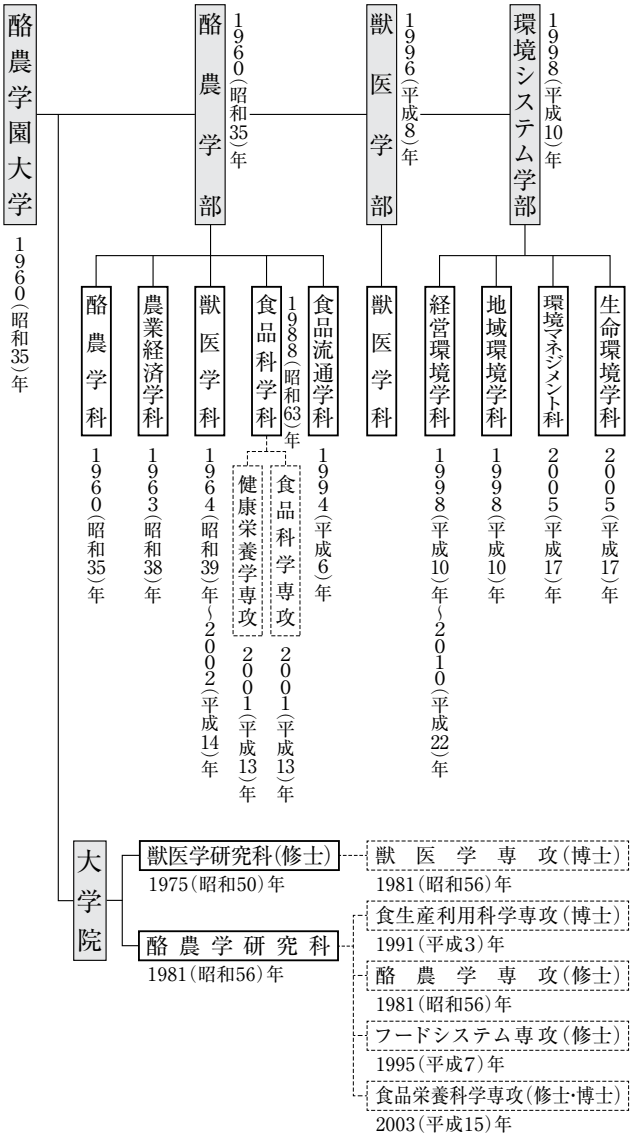
酪農学園大学(創立１９６０年)は建学の精神である神を愛し、人を愛し、土を愛する「三愛主義」のもと、酪農を中心とした農業後継者および農業支援者教育を展開するとともに、「循環農法」および「実学教育」による「健土健民」思想をわが国の農業のあるべき姿として、その具現化に貢献する人材の育成に努めてきた。また、本学は、戦後の酪農・畜産における生産技術の革新におおいに貢献し、農業自営者をはじめ多くの有能な人材を社会に送り出してきた。本学の設立にかかわる経緯については、前章の短期大学の設立がさまざまな形でベースとなっている。とくに農場教育や酪農専門科目間のカリキュラム、あるいは寮運営など、先行した短期大学から学ぶものが大であった。

酪農学部酪農学科の設置に始まる本学は、農業経済学科、獣医学科、食品科学科および食品流通学科を増設し、酪農・畜産の経営・経済、家畜の診療・衛生管理、食品の開発・製造に関する教育と研究に取り組み、さらには食品の流通機構におよぶ一貫した農業振興のための教育活動を推し進めてきた。

加えて、１９９８(平成10)年には経営環境学科と地域環境学科の２学科からなる環境システム学部を新設し、健全な農業と自然環境との関わりを追及し、現代ならびに未来の地球環境と食生産のあり方を探求する教育研究を展開してきた。これによって、本学は3学部7学科・1短期大学部となったが、

折りしも18歳人口の減少期と重なって、環境学部の２学科の理念は必ずしも社会的に浸透をみず、定員確保は厳しい現実となってきた。そんな中で関係機関によって企図されたのが、環境マネジメント

３学部８学科・大学院の推移



学科、地域環境学科、生命環境学科の３学科への改組であった。２００５(平成17)年、環境システム学部３学科体制への改組によって、本学は、３学部８学科・１短期大学部体制となって一応の定着をみた。

しかし、昨今、食の安全・安心や食生活と健康について社会の興味と関心が一層増してきており、食料生産のための農業の重要性が叫ばれるとともに、農業あるいは食生産に係わる諸産業を含め環境への負荷の軽減についても大きな関心事となっている。

このような社会的背景を基に、これまでの本学における教育組織を再編することによって、現代の社会が、農と食、さらに環境に求めているさまざまなニーズに応える人材の養成をして、社会に応えようとするものである。

大学の新教育体制(２０１１年度)は、従来の学部、学科による専門教育を最重視した縦割り型の教育を廃し、２学群５学類から構成され、全学共通の基盤教育、学群共通の専門基礎教育、学類共通の科目を設定するなど、横断的教育体制を取り入れ、学群間、学類間の敷居を限りなく低くすることとした。

すなわち、本学の「食農教育」は「土に学び、植物を知り、家畜を尊ぶ」ことを土台(基盤教育)とし、これにそれぞれの学類における専門教育を配している。初年次に設定される基盤教育は人間教育として設計されており、卒業まで一貫した教育体系を大学全体で総合的に対応できるカリキュラムとした。

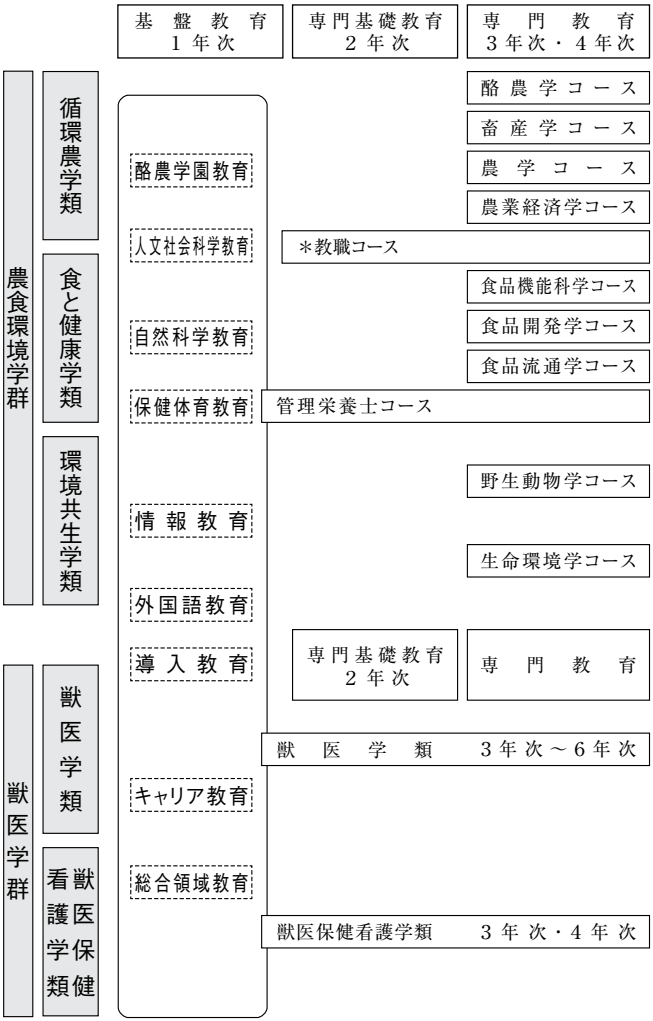
１　農食環境学群

農食環境学群では、本学の建学の精神である三愛主義のもと、健土健民、循環農法の具現化に向けた教育の展開ならびに研究の推進に向けて、循環農学類、食と健康学類ならびに環境共生学類の三つ

の学類を配した。

さらに各学類に専門教育を担うコースを置き、食糧の生産から消費に至るまでの一連のプロセスなら

２学群５学類のカリキュラム



農食環境学群の食と健康学類「管理栄養士コース」と獣医学群の獣医学類・獣医保健看護学類は１年次、教職コースは２年次、他コースは３年次から所属する。
＊循環農学類、食と健康学類いずれかの学類に所属

びにそれらを取り巻く環境について、実学教育をとおして単なる座学に留まることのないフィールドでの体験を重ねることによって、より実践的な教育を目指している。各学類の各々のコースの標準定員を40～60名とし、比較的少人数での専門教育を展開することで、より実践的で効果の高い教育を指向する。

本学群のいずれの学類も、初年次教育によって本学の建学の理念を十分理解させるとともに農場実習により農業を実体験させ、さらに農・食・環境を学習するために必要な基礎的知識を習得させ、それらの基礎を築いたうえでコースでの専門教科目の学習に取り組む体系的なカリキュラムの構築を行っている。

◇農食環境学群英語名称　College of Agriculture, Food and Environment Sciences

農食環境学群長　干場信司（２０１１～12）　荒木和秋（２０１３～）

⑴　農食環境学群「循環農学類」

循環農学類では、安全な食料を安定供給するための農業を実践できる深い知識と総合的判断能力をもった人材の養成を目指す。その目的達成のために、基盤教育ならびに専門基礎教育により、農業に関する広範な科学的知識を身につけるとともに社会における農業の意義を正しく理解する教育を行う。

循環農学類では、より専門的知識を身につけさせるために、酪農学、畜産学、農学、農業経済学の四つのコースを配置し、各々の分野での専門教育科目の修得に努める。

酪農学コース＝乳生産に関する理論と技術および酪農業の社会的文化的意義を学び、意欲的に課題

の発見や対応を率先して実践する人材を養成する。

畜産学コース＝肉牛をはじめ、豚、鶏、羊、馬の生産に関する教育をとおして、家畜の生体機能、繁殖生理、生産代謝および放牧を含む繁殖から肥育まで一貫した肉畜生産の理論と技術および肉畜生産の社会的文化的意義を学び、畜産業を支える人材を養成する。

農学コース＝持続可能な農業の実現と安全な農産物供給のために、稲作、畑作、蔬菜、花卉の分野における様々な農法を自然科学および社会科学の立場から習得し、自ら立案、実践できる産業としての農業を支える人材を養成する。

農業経済学コース＝国内外の農村と地域産業の生産現場を題材に、経営・経済・政策を総合的に学び、企画力、広報力ならびに政策立案力をもった農業経営者や地域産業・国際協力の指導者を養成する。

［取得可能資格］中学校教諭一種（理科・社会）　高等学校教諭一種（理科・農業・公民）、※「教職コース」に所属しなくても教員免許の取得は可能　家畜人工授精師（講習会合格の場合）、食品衛生責任者

［任用資格］食品衛生管理者、食品衛生監視員、飼料製造管理者

［学類でサポートする資格］簿記検定二級・三級、ＩＴパスポート試験（旧、初級シスアド）、経済学検定（ＥＲＥ）

◇循環農学類の英語名称＝Department of Sustainable Agriculture

◇学位名称および英語名称＝「学士（農学）」　Bachelor of Agriculture Science

循環農学類長　森田　茂（２０１１～12）　小宮道士（２０１３～）

農食環境学群「循環農学類」（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	**2**
英語Ⅱ	**2**
英語Ⅲ	**2**
英語Ⅳ	**2**
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
基礎演習Ⅱ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
キャリアベーシック	**1**
キャリアデザインⅠ	**1**
キャリアデザインⅡ	1
プレゼンテーション	1

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	2
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
統計学Ⅰ	2
統計学Ⅱ	2
生物学	2
生物学実験	1
化学	2
化学実験	1
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
分析化学	2
遺伝学	2
家畜育種学	2
家畜繁殖学	2
家畜栄養学	2
家畜解剖学	2
家畜飼料学	2
家畜管理学	2
家畜管理・栄養学実験	1
家畜育種・繁殖学実験	1
作物栽培学	2
農業機械学	2
園芸学	2
植物栄養学	2
作物育種学	2
作物保護学	2
土壌・植物栄養学実験	1
植物生理学実験	1
学外農場実習	4
農業政策学	2
農業経営学概論	2
食料経済史	2
農業法	2
食品科学領域	
食品学	2
乳科学	2
食肉科学	2
食品化学	2
食品分析学	2
食品衛生学	2
公衆衛生学	2
食品製造学	2
食品関係法	2
食品流通論	2
食品産業論	2

授業科目	単位数
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2
人と動物の関係の科学	2
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
基礎科学領域	
無機化学	2
有機化学	2
物理化学	2
生化学	2
微生物学	2
土壌学	2
植物生理学	2
動物生理学	2
昆虫学	2
基礎生態学	2
民法・商法	2
行財政学概論	2
経済原論	2
ミクロ経済学	2
マクロ経済学	2
マーケティング論	2
経営学総論	2
日本経済論	2
食生活論	2
エネルギーの物理学	2
ボランティア活動・NPO・NGO論	2
品質管理論	2
農業科学領域	
分子生物学	2

授業科目	単位数
農畜産物市場論	2
農村社会学	2
社会調査法	2
国際領域	
国際経済論	2
国際関係論	2
国際理解	2
国際法	2
コースガイダンス領域	
酪農学概論	2
畜産学概論	2
農学概論	2
農業経済学概論	2
野生動物学概論	2
生命環境学概論	2
食品機能科学概論	2
食品開発学概論	2
食品流通学概論	2
専門教育	
専門共通教育	
専門ゼミナールⅠ	2
専門ゼミナールⅡ	2
専門ゼミナールⅢ	2
専門ゼミナールⅣ	2
卒業論文	4
酪農学コース専攻教育	
乳牛飼養学	2
乳用家畜学	2
酪農経営論	2
飼料作物学	2
乳利用学	2
草地学	2
家畜衛生学	2
泌乳生理学	2
乳利用学実習	1

授業科目	単位数
販売特論	2
食料経済論	2
食品総合実験・実習	1
免疫学	2
栄養生理学	2
自然環境科学領域	
景観生態学	2
環境物理学	2
生物分類学	2
保全生物学	2
動物形態機能学	2
気象学の基礎	2
流域環境学	2
生物地球化学	2
北海道環境学	2
アジア環境学	2
自然環境学実験・実習	1
環境法	2
資源管理論	2
情報科学領域	
情報処理演習	1
ＧＩＳ基礎実習	1
リモートセンシング基礎実習	1
GIS・リモートセンシング基礎	2
社会科学領域	
地域政策論	2
経済統計学	2
流通経済論	2
消費経済論	2
経済地理学	2
環境経済学	2
簿記・会計学概論	2
協同組合学	2
中小企業論	2
市場調査論	2

授業科目	単位数
農業経済学コース専攻教育	
農業経営学	2
農業市場論	2
食料・農業政策論	2
農業協同組合論	2
地域計画論	2
アグリビジネス論	2
国際農業論	2
食文化論	2
簿記・会計演習	1
栽培学実習Ⅰ	1
栽培学実習Ⅱ	1
農業経済学演習	1
統計・情報演習	1
調査実習	1
教職コース専攻教育	
教職特論	2
教職インターンシップⅠ	4
教職応用演習Ⅰ	2
教職応用演習Ⅱ	2
教職インターンシップⅡ	4
サービス・ラーニング	2
教材開発演習	2
循環農学類教育	
家畜繁殖技術論	2
受精卵移植論	2
農業気象学	2
放牧利用学	2
農業施設学	2
地域経済論	2
有機フードシステム論	2
家畜生理・解剖学実験	1
有機農学総論	2
海外農業実習	4
営農システム論	2

授業科目	単位数
乳用家畜生産学実習Ⅰ	1
乳用家畜生産学実習Ⅱ	1
草地・飼料作物学実験	1
畜舎施設・機械学実習	1
家畜衛生学実験	1
畜産学コース専攻教育	
肉牛飼養学	2
肉用家畜学	2
畜産経営論	2
飼料作物学	2
肉利用学	2
草地学	2
家畜衛生学	2
肉畜肥育学	2
肉利用学実習	1
肉用家畜生産学実習Ⅰ	1
肉用家畜生産学実習Ⅱ	1
草地・飼料作物学実験	1
畜舎施設・機械学実習	1
家畜衛生学実験	1
農学コース専攻教育	
水稲栽培学	2
畑作物栽培学	2
農業経営学	2
蔬菜園芸学	2
花卉園芸学	2
土壌肥沃度論	2
雑草学	2
アグリビジネス論	2
食物栄養学実習	1
栽培学実習Ⅰ	1
栽培学実習Ⅱ	1
作物育種学実験	1
作物保護学実験	1
農業経済学演習	1

授業科目	単位数
農業科教育法Ⅰ	2
農業科教育法Ⅱ	2
社会科・地理歴史科教育法Ⅰ	2
社会科・地理歴史科教育法Ⅱ	2
社会科・公民科教育法Ⅰ	2
社会科・公民科教育法Ⅱ	2
道徳教育指導論	2
特別活動論	2
教育方法論	2
生徒・進路指導論	2
教育相談論	2
教職実践演習（中・高１免）	2
教育実習（高１免）	3
教育実習（中・高１免）	5
職業指導Ⅰ（農業）	2
職業指導Ⅱ（農業）	2
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	488

授業科目	単位数
実験動物学	2
実験動物学実習	1
実践酪農学	
実践酪農学	2
実践酪農学演習	1
実践酪農学実習Ⅰ	8
実践酪農学実習Ⅱ	8
教職課程教育	
教職入門	2
教職概論	2
教育原理	2
教育心理学	2
特別支援教育論	2
教育社会学	2
生涯学習論	2
教育課程論	2
理科教育法Ⅰ	2
理科教育法Ⅱ	2
理科教育法Ⅲ	2
理科教育法Ⅳ	2

農食環境学群 循環農学類 別表第３（学則第29条の３）

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数 選択	備　考
E群（その他関連科目）	土壌学	2	18単位以上を修得すること。
	家畜栄養学	2	
	動物生理学	2	
	家畜衛生学	2	
	乳利用学	2	
	肉利用学	2	
	遺伝学	2	
	植物生理学	2	
	品質管理論	2	
	植物栄養学	2	
	食品学	2	
	乳科学	2	
	食肉科学	2	
	泌乳生理学	2	
合　計		40単位以上	

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数 選択	備　考
A群（化学関係）	分析化学	2	各群より１科目以上履修し、22単位を修得すること。
	有機化学	2	
	無機化学	2	
	化学	2	
B群（生物化学関係）	生化学	2	
	食品化学	2	
	栄養生理学	2	
	食品分析学	2	
C群（微生物学関係）	微生物学	2	
	食品製造学	2	
D群（公衆衛生学関係）	公衆衛生学	2	
	食品衛生学	2	
	食品関係法	2	

学類／科目	循環農学類 卒業必要単位数
基盤教育	40単位
専門基礎教育	30単位
専門教育	30単位
自由科目	
合計	124単位以上

⑵ 農食環境学群「食と健康学類」

食と健康学類では、食品の製造から流通、消費、さらに食品と健康との関連について、食に関する一連のプロセスなどに体系的なカリキュラムを設け、食に関する幅広い知識と技術を習得することによって、食産業に貢献できる人材を養成する。本学類では、食品機能科学、食品開発学、食品流通学、管理栄養士の四つのコースを配し、それぞれの分野での専門的知識と技術を取得する。

食品機能科学コース＝最近研究が進んできている食品に含まれる様々な成分がもつ生体機能調節作用について、最新の知識を学ぶとともに、機能性成分の実際の食品への応用についても学び、健康に配慮した食品の開発にも結びつけられるような能力を備えた人材を養成する。

食品開発学コース＝食品成分の特性と食品製造の原理を学び、食品の加工・製造の技術を備え、さらに食品の市場調査や企画開発など、製品開発に必要な基礎知識を備え、独自の発想と強いリーダーシップをもって新たな食品の開発に取り組むことができる人材を養成する。

食品流通学コース＝世界的規模で流通する食品の流通ビジネスを学ぶとともに、食品の安全やトレーサビリティ、品質保持に関する知識をも習得し、食品の安全な流通に寄与できる能力をもった人材を養成する。

管理栄養士コース（入学定員40名）＝健康の基本は食事であるとの基本的考えの基に、食と健康について、食という面だけでなく、安全性や環境にまで配慮した食生産システムを学ぶことによって、食の大切さと人々の健康を理解し、実践できる管理栄養士を養成する。

［取得可能資格］中学校教諭一種（理科・社会）　高等学校教諭一種（理科・農業・公民）、※「教職コース」に所属しなくても教員免許の取得は可能。　食品衛生責任者、栄養士（管理栄養士コース）

［受験資格］管理栄養士国家試験（管理栄養士コース）、フードスペシャリスト

［任用資格］食品衛生管理者、食品衛生監視員

［学類でサポートする資格］簿記検定二級・三級、販売士二級・三級

◇食と健康学類の英語名称＝Department of Food Science and Human Wellness

◇学位名称および英語名称＝「学士（食品学）」　Bachelor of Food Science

食と健康学類長　山本克博（２０１１～12）　石下真人（２０１３～）

農食環境学群「食と健康学類」（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	**2**
英語Ⅱ	**2**
英語Ⅲ	**2**
英語Ⅳ	**2**
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
基礎演習Ⅱ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
キャリアベーシック	**1**
キャリアデザインⅠ	**1**
キャリアデザインⅡ	1
プレゼンテーション	1

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	2
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
統計学Ⅰ	2
統計学Ⅱ	2
生物学	2
生物学実験	1
化学	2
化学実験	1
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
分析化学	2
遺伝学	2
家畜育種学	2
家畜繁殖学	2
家畜栄養学	2
家畜解剖学	2
家畜飼料学	2
家畜管理学	2
家畜管理・栄養学実験	1
家畜育種・繁殖学実験	1
作物栽培学	2
農業機械学	2
園芸学	2
植物栄養学	2
作物育種学	2
作物保護学	2
土壌・植物栄養学実験	1
植物生理学実験	1
学外農場実習	4
農業政策学	2
農業経営学概論	2
食料経済史	2
農業法	2
食品科学領域	
食品学	2
乳科学	2
食肉科学	2
食品化学	2
食品分析学	2
食品衛生学	2
公衆衛生学	2
食品製造学	2
食品関係法	2
食品流通論	2
食品産業論	2

授業科目	単位数
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2
人と動物の関係の科学	2
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
基礎科学領域	
無機化学	2
有機化学	2
物理化学	2
生化学	2
微生物学	2
土壌学	2
植物生理学	2
動物生理学	2
昆虫学	2
基礎生態学	2
民法・商法	2
行財政学概論	2
経済原論	2
ミクロ経済学	2
マクロ経済学	2
マーケティング論	2
経営学総論	2
日本経済論	2
食生活論	2
エネルギーの物理学	2
ボランティア活動・NPO・NGO論	2
品質管理論	2
農業科学領域	
分子生物学	2

授業科目	単位数
農畜産物市場論	2
農村社会学	2
社会調査法	2
国際領域	
国際経済論	2
国際関係論	2
国際理解	2
国際法	2
コースガイダンス領域	
酪農学概論	2
畜産学概論	2
農学概論	2
農業経済学概論	2
野生動物学概論	2
生命環境学概論	2
食品機能科学概論	2
食品開発学概論	2
食品流通学概論	2
専門教育	
専門共通教育	
専門ゼミナールⅠ	2
専門ゼミナールⅡ	2
専門ゼミナールⅢ	2
専門ゼミナールⅣ	2
卒業論文	4
食品機能科学コース専攻教育	
応用生化学	2
食品微生物学	2
食品栄養学	2
タンパク質化学	2
食品と免疫	2
生物工学	2
発酵食品学	2
食品資源利用学	2
食品機能論	2

授業科目	単位数
販売特論	2
食料経済論	2
食品総合実験・実習	1
免疫学	2
栄養生理学	2
自然環境科学領域	
景観生態学	2
環境物理学	2
生物分類学	2
保全生物学	2
動物形態機能学	2
気象学の基礎	2
流域環境学	2
生物地球化学	2
北海道環境学	2
アジア環境学	2
自然環境学実験・実習	1
環境法	2
資源管理論	2
情報科学領域	
情報処理演習	1
ＧＩＳ基礎実習	1
リモートセンシング基礎実習	1
GIS・リモートセンシング基礎	2
社会科学領域	
地域政策論	2
経済統計学	2
流通経済論	2
消費経済論	2
経済地理学	2
環境経済学	2
簿記・会計学概論	2
協同組合学	2
中小企業論	2
市場調査論	2

授業科目	単位数
教職応用演習Ⅱ	2
教職インターンシップⅡ	4
サービス・ラーニング	2
教材開発演習	2
食と健康学類教育	
食品包装資材論	2
企業経営分析論	2
食品国際ロジスティック論	2
消費者行動論	2
外食産業論	2
フードコーディネート論	2
調理学概論	2
調理学実習Ⅰ	1
調理学実習Ⅱ	1
教職課程教育	
教職入門	2
教職概論	2
教育原理	2
教育心理学	2
特別支援教育論	2
教育社会学	2
生涯学習論	2
教育課程論	2
理科教育法Ⅰ	2
理科教育法Ⅱ	2
理科教育法Ⅲ	2
理科教育法Ⅳ	2
農業科教育法Ⅰ	2
農業科教育法Ⅱ	2
社会科・地理歴史科教育法Ⅰ	2
社会科・地理歴史科教育法Ⅱ	2
社会科・公民科教育法Ⅰ	2
社会科・公民科教育法Ⅱ	2
道徳教育指導論	2
特別活動論	2

授業科目	単位数
食品栄養化学実験	1
食品機能科学総合実験	1
生化学実験	1
食品微生物学実験	1
食品開発学コース専攻教育	
乳製品製造学	2
肉製品製造学	2
食品物性学	2
食品資源学	2
食品加工学	2
食品製造システム論	2
微生物利用学	2
食品マーケティング戦略論	2
食品企画開発論	2
食品品質特性学実験	1
食品開発学総合実験	1
乳肉製造学実習	1
食品企画開発実習	1
食品流通学コース専攻教育	
食品企画開発論	2
食品国際流通論	2
食品卸・小売商業論	2
ビジネスイノベーション論	2
食品流通施設論	2
食品物流管理論	2
食品流通情報システム論	2
食品品質保全学	2
食品表示学	2
食品マーケティング戦略論	2
食品流通実験・実習Ⅰ	1
食品流通実験・実習Ⅱ	1
教職コース専攻教育	
教職特論	2
教職インターンシップⅠ	4
教職応用演習Ⅰ	2

授業科目	単位数
職業指導Ⅰ（農業）	2
職業指導Ⅱ（農業）	2
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	497

授業科目	単位数
教育方法論	2
生徒・進路指導論	2
教育相談論	2
教職実践演習（中･高１免）	2
教育実習（高１免）	3
教育実習（中・高１免）	5

農食環境学群 食と健康学類

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数 選択	備考
E群（その他関連科目）	乳肉製造学実習	1	18単位以上を修得すること。
	食品栄養化学実験	1	
	乳科学	2	
	食肉科学	2	
	土壌学	2	
	植物生理学	2	
	動物生理学	2	
	品質管理論	2	
	遺伝学	2	
	家畜栄養学	2	
	植物栄養学	2	
	食品学	2	
	タンパク質化学	2	
	食品と免疫	2	
	発酵食品学	2	
	食品加工学	2	
	微生物利用学	2	
	食品品質特性学実験	1	
	食品品質保全学	2	
	食品表示学	2	
合計		40単位以上	

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数 選択	備考
A群（化学関係）	分析化学	2	各群より1科目以上履修し、22単位を修得すること。
	有機化学	2	
	無機化学	2	
	化学	2	
B群（生物化学関係）	生化学	2	
	生化学実験	1	
	応用生化学	2	
	食品化学	2	
	栄養生理学	2	
	食品分析学	2	
C群（微生物学関係）	微生物学	2	
	食品微生物学	2	
	食品微生物学実験	1	
	食品製造学	2	
D群（公衆衛生学関係）	公衆衛生学	2	
	食品衛生学	2	
	食品関係法	2	
E群（その他関連科目）	乳製品製造学	2	18単位以上を修得すること。
	肉製品製造学	2	
	食品物性学	2	
	食品栄養学	2	

学類／科目	食と健康学類 卒業必要単位数
基盤教育	40単位
専門基礎教育	30単位
専門教育	30単位
自由科目	
合計	124単位以上

農食環境学群「食と健康学類」管理栄養士コース（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	**2**
英語Ⅱ	**2**
英語Ⅲ	**2**
英語Ⅳ	**2**
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2
人と動物の関係の科学	2

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	2
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
統計学Ⅰ	2
統計学Ⅱ	2
生物学	**2**
生物学実験	**1**
化学	**2**
化学実験	**1**
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
家畜解剖学	2
家畜飼料学	2
家畜管理学	2
家畜管理・栄養学実験	1
家畜育種・繁殖学実験	1
作物栽培学	2
農業機械学	2
園芸学	2
植物栄養学	2
作物育種学	2
作物保護学	2
土壌・植物栄養学実験	1
植物生理学実験	1
学外農場実習	4
農業政策学	2
農業経営学概論	2
食料経済史	2
農業法	2
食品科学領域	
食品学	2
乳科学	2
食肉科学	2
食品化学	2
食品分析学	2
食品衛生学	2
公衆衛生学	2
食品製造学	2
食品関係法	2
食品流通論	2
食品産業論	2
販売特論	2
食料経済論	2
食品総合実験・実習	1
免疫学	2
栄養生理学	2

授業科目	単位数
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
基礎科学領域	
無機化学	2
有機化学	2
物理化学	2
生化学	2
微生物学	2
土壌学	2
植物生理学	2
動物生理学	2
昆虫学	2
基礎生態学	2
民法・商法	2
行財政学概論	2
経済原論	2
ミクロ経済学	2
マクロ経済学	2
マーケティング論	2
経営学総論	2
日本経済論	2
食生活論	2
エネルギーの物理学	2
ボランティア活動・NPO・NGO論	2
品質管理論	2
農業科学領域	
分子生物学	2
分析化学	2
遺伝学	2
家畜育種学	2
家畜繁殖学	2
家畜栄養学	2

授業科目	単位数
国際関係論	2
国際理解	2
国際法	2
コースガイダンス領域	
酪農学概論	2
畜産学概論	2
農学概論	2
農業経済学概論	2
野生動物学概論	2
生命環境学概論	2
食品機能科学概論	2
食品開発学概論	2
食品流通学概論	2
専門教育	
専門共通教育	
卒業論文	4
管理栄養士コース専攻教育(専門基礎教育)	
公衆衛生学	2
社会福祉概論	2
健康管理概論	2
医学概論	2
解剖生理学Ⅰ	2
解剖生理学Ⅱ	2
生化学Ⅰ	2
生化学Ⅱ	2
病理学	2
運動生理学	2
微生物学	2
解剖生理学実験・実習Ⅰ	1
解剖生理学実験・実習Ⅱ	1
生化学実験・実習Ⅰ	1
生化学実験・実習Ⅱ	1
食品学	2
食品加工学	2
食品衛生学	2

授業科目	単位数
自然環境科学領域	
景観生態学	2
環境物理学	2
生物分類学	2
保全生物学	2
動物形態機能学	2
気象学の基礎	2
流域環境学	2
生物地球化学	2
北海道環境学	2
アジア環境学	2
自然環境学実験・実習	1
環境法	2
資源管理論	2
情報科学領域	
情報処理演習	1
ＧＩＳ基礎実習	1
リモートセンシング基礎実習	1
GIS・リモートセンシング基礎	2
社会科学領域	
地域政策論	2
経済統計学	2
流通経済論	2
消費経済論	2
経済地理学	2
環境経済学	2
簿記・会計学概論	2
協同組合学	2
中小企業論	2
市場調査論	2
農畜産物市場論	2
農村社会学	2
社会調査法	2
国際領域	
国際経済論	2

授業科目	単位数
公衆栄養学実習Ⅰ	1
給食経営管理論	2
食品流通論	2
給食管理実習Ⅰ	1
総合演習Ⅰ	1
総合演習Ⅱ	1
給食管理実習Ⅱ	1
臨床栄養学実習Ⅰ	1
臨床栄養学実習Ⅱ	1
公衆栄養学実習Ⅱ	1
管理栄養士コース専攻教育(専門関連教育)	
健康栄養学演習Ⅰ	1
健康栄養学演習Ⅱ	1
食と健康学類教育	
食品包装資材論	2
企業経営分析論	2
食品国際ロジスティック論	2
消費者行動論	2
外食産業論	2
フードコーディネート論	2
調理学概論	2
調理学実習Ⅰ	1
調理学実習Ⅱ	1
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	426

授業科目	単位数
調理学	2
食品学実験・実習Ⅰ	1
食品学実験・実習Ⅱ	1
食品加工学実習	1
調理学実験・実習Ⅰ	1
調理学実験・実習Ⅱ	1
食品衛生学実験・実習	1
管理栄養士コース専攻教育(専門教育)	
基礎栄養学	2
栄養学実験・実習Ⅰ	1
応用栄養学Ⅰ	2
応用栄養学Ⅱ	2
応用栄養学Ⅲ	2
栄養学実験・実習Ⅱ	1
栄養教育論	2
栄養指導概論	2
栄養カウンセリング論	2
栄養指導論実習Ⅰ	1
栄養指導論実習Ⅱ	1
臨床栄養学Ⅰ	2
臨床栄養学Ⅱ	2
臨床栄養管理論	2
高齢者臨床栄養学	2
臨床栄養学実験・実習Ⅰ	1
臨床栄養学実験・実習Ⅱ	1
公衆栄養学Ⅰ	2
公衆栄養学Ⅱ	2

農食環境学群 食と健康学類 管理栄養士コース専攻教育

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数	備　考
E群（その他関連科目）	臨床栄養学実験・実習Ⅰ	1	18単位以上を修得すること。
	公衆栄養学Ⅰ	2	
	食品学	2	
	食品学実験・実習Ⅰ	1	
	食品学実験・実習Ⅱ	1	
	調理学	2	
	調理学実験・実習Ⅰ	1	
	調理学実験・実習Ⅱ	1	
	病理学	2	
	応用栄養学Ⅰ	2	
	応用栄養学Ⅱ	2	
	栄養学実験・実習Ⅱ	1	
	臨床栄養学Ⅱ	2	
	臨床栄養学実験・実習Ⅱ	1	
	公衆栄養学Ⅱ	2	
	医学概論	2	
合　計		40単位以上	

養成施設指定内規指定する科目区分	授業科目	単位数	備　考
A群（化学関係）	分析化学	2	各群より1科目以上履修し、22単位を修得すること。
	有機化学	2	
	無機化学	2	
	化学	2	
B群（生物化学関係）	生化学Ⅰ	2	
	生化学Ⅱ	2	
	生化学実験・実習Ⅰ	1	
	生化学実験・実習Ⅱ	1	
	解剖生理学Ⅰ	2	
	解剖生理学Ⅱ	2	
	解剖生理学実験・実習Ⅰ	1	
	解剖生理学実験・実習Ⅱ	1	
C群（微生物学関係）	微生物学	2	
	食品加工学	2	
	食品加工学実習	1	
D群（公衆衛生学関係）	公衆衛生学	2	
	食品衛生学	2	
	食品衛生学実験・実習	1	
E群（その他関連科目）	基礎栄養学	2	18単位以上を修得すること。
	栄養学実験・実習Ⅰ	1	
	臨床栄養学Ⅰ	2	

科目＼学類	食と健康学類 管理栄養士コース
	卒業必要単位数
基盤教育	32単位
専門基礎教育	2単位
専門教育	86単位
自由科目	
合計	124単位以上

⑶ 農食環境学群「環境共生学類」

環境共生学類は、農業を含めた環境をめぐる諸問題を科学的に理解し、環境問題の解決に寄与できる能力を備え、環境と調和・共生する社会の形成に貢献できる人材を養成する。本学類での環境教育は、生命圏（生物ならびに生態系）とこれを取り巻く自然環境（物質的、エネルギー的環境）に大別して、各々のコースを設置し、それぞれの専門領域の教科目の修得を目指す。また、両コースとも、フィールド調査に基づく実習、ＧＩＳ・リモートセンシングの演習および精密機器を用いた実験をカリキュラムに取り入れ、環境調査ならびに各種データの解析技術の修得を目指している。

野生動物学コース＝生物の生態系に関する理論と諸技術を学び、希少動物の保全、鳥獣被害の実態把握と対策、あるいは外来生物対策等にそれらの知識を活用し、野生動物の保全と管理を担うことのできる人材を養成する。

生命環境学コース＝生命圏を取り巻く物質的、エネルギー的環境についての理論と技術を学ぶことにより、地球温暖化を始めとする環境変動とその生態系への影響、森林破壊や河川・湿原への人的干渉による生態系の撹乱・喪失などのメカニズムの原因解明とそれに基づいた対策に携わることのできる能力を備え、自然環境の保全と管理を担うことのできる人材を養成する。

［取得可能資格］中学校教諭一種（理科）、高等学校教諭一種（理科）、食品衛生責任者
［学類でサポートする資格］気象予報士、公害防止管理者、生物分類技能検定、ビオトープ管理士、狩猟免許、ハンティングガイド

◇環境共生学類の英語名称＝Department of Environmental Symbiotic Science
◇学位名称および英語名称＝「学士(環境学)」 Bachelor of Environmental Science
環境共生学類長 矢吹哲夫（２０１１～12） 山舗直子（２０１３～）

農食環境学群「環境共生学類」（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	**2**
英語Ⅱ	**2**
英語Ⅲ	**2**
英語Ⅳ	**2**
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
基礎演習Ⅱ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
キャリアベーシック	**1**
キャリアデザインⅠ	**1**
キャリアデザインⅡ	1
プレゼンテーション	1

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	2
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
統計学Ⅰ	2
統計学Ⅱ	2
生物学	2
生物学実験	1
化学	2
化学実験	1
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
分析化学	2
遺伝学	2
家畜育種学	2
家畜繁殖学	2
家畜栄養学	2
家畜解剖学	2
家畜飼料学	2
家畜管理学	2
家畜管理・栄養学実験	1
家畜育種・繁殖学実験	1
作物栽培学	2
農業機械学	2
園芸学	2
植物栄養学	2
作物育種学	2
作物保護学	2
土壌・植物栄養学実験	1
植物生理学実験	1
学外農場実習	4
農業政策学	2
農業経営学概論	2
食料経済史	2
農業法	2
食品科学領域	
食品学	2
乳科学	2
食肉科学	2
食品化学	2
食品分析学	2
食品衛生学	2
公衆衛生学	2
食品製造学	2
食品関係法	2
食品流通論	2
食品産業論	2

授業科目	単位数
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2
人と動物の関係の科学	2
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
基礎科学領域	
無機化学	2
有機化学	2
物理化学	2
生化学	2
微生物学	2
土壌学	2
植物生理学	2
動物生理学	2
昆虫学	2
基礎生態学	2
民法・商法	2
行財政学概論	2
経済原論	2
ミクロ経済学	2
マクロ経済学	2
マーケティング論	2
経営学総論	2
日本経済論	2
食生活論	2
エネルギーの物理学	2
ボランティア活動・NPO・NGO論	2
品質管理論	2
農業科学領域	
分子生物学	2

授業科目	単位数
農畜産物市場論	2
農村社会学	2
社会調査法	2
国際領域	
国際経済論	2
国際関係論	2
国際理解	2
国際法	2
コースガイダンス領域	
酪農学概論	2
畜産学概論	2
農学概論	2
農業経済学概論	2
野生動物学概論	2
生命環境学概論	2
食品機能科学概論	2
食品開発学概論	2
食品流通学概論	2
専門教育	
専門共通教育	
専門ゼミナールⅠ	2
専門ゼミナールⅡ	2
専門ゼミナールⅢ	2
専門ゼミナールⅣ	2
卒業論文	4
野生動物学コース専攻教育	
環境アセスメント論	2
野生動物保全技術実習	2
野生動物観察同定実習	1
外来生物対策論	2
野生動物保全行政論	2
野生動物保全と人間事象	2
野生動物保全と環境汚染	2
海外野生動物学	2
狩猟管理技術論	2

授業科目	単位数
販売特論	2
食料経済論	2
食品総合実験・実習	1
免疫学	2
栄養生理学	2
自然環境科学領域	
景観生態学	2
環境物理学	2
生物分類学	2
保全生物学	2
動物形態機能学	2
気象学の基礎	2
流域環境学	2
生物地球化学	2
北海道環境学	2
アジア環境学	2
自然環境学実験・実習	1
環境法	2
資源管理論	2
情報科学領域	
情報処理演習	1
ＧＩＳ基礎実習	1
リモートセンシング基礎実習	1
GIS・リモートセンシング基礎	2
社会科学領域	
地域政策論	2
経済統計学	2
流通経済論	2
消費経済論	2
経済地理学	2
環境経済学	2
簿記・会計学概論	2
協同組合学	2
中小企業論	2
市場調査論	2

授業科目	単位数
教職概論	2
教育原理	2
教育心理学	2
特別支援教育論	2
教育社会学	2
生涯学習論	2
教育課程論	2
理科教育法Ⅰ	2
理科教育法Ⅱ	2
理科教育法Ⅲ	2
理科教育法Ⅳ	2
道徳教育指導論	2
特別活動論	2
教育方法論	2
生徒・進路指導論	2
教育相談論	2
教職実践演習（中・高１免）	2
教育実習（高１免）	3
教育実習（中・高１免）	5
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	390

授業科目	単位数
野生動物生態学	2
生息地保全管理論	2
野生動物総合演習	1
生命環境学コース専攻教育	
環境アセスメント論	2
ビオトープ論	2
生態環境総合実習	2
森林環境学	2
森林フィールド実習	1
水圏環境化学	2
水圏フィールド実習	1
自然環境保全と地球温暖化	2
環境気象・気候学	2
環境変動と自然生態系	2
自然資源計測学実験	1
生態環境総合演習	1
植物の環境応答論	2
環境共生学類教育	
環境教育論	2
環境思想・倫理学	2
動物園・水族館学	2
自然再生エネルギー論	2
海外自然環境実習	1
教職課程教育	
教職入門	2

学類／科目	環境共生学類 卒業必要単位数
基盤教育	40単位
専門基礎教育	30単位
専門教育	30単位
自由科目	
合計	124単位以上

2　獣医学群

改組前の獣医学部獣医学科は、酪農学園創立の基本理念の「三愛精神・健土健民・実学教育」に基づき、現在まで産業動物獣医師など社会的ニーズの高い領域に多くの人材を輩出してきた。

新たに獣医学群獣医学類として引き続き、これらの分野における特徴ある教育を実施すると共に産業動物医療分野では群管理に基づく予防衛生教育、伴侶動物医療分野では代替臓器開発や腫瘍の治療などの先端的高度獣医療、公衆衛生分野では食品や環境衛生、人獣共通の新興感染症対策など社会的ニーズの増しつつある領域について質の高い実践能力を備えた獣医師の養成を目指している。

獣医保健看護学類は、単に動物看護士の養成に留まらず、チームとしての獣医療における高度な専門知識や技術を有する高度専門職業人を養成する目的で設置された。獣医学教育に準拠した動物看護学の教育に加えて、動物の栄養管理、看護、行動管理、理学療法、動物と人の良好な共存関係の構築に関する高度な教育を行うことで、多様化・高度化する獣医療に求められるパラヴェテリナリーメディカルスタッフとしての「高度専門職業人」の養成を目指す。

獣医学群では、獣医学類と獣医保健看護学類の相互の教育を通して社会や地域から求められている「高度職業人」としての獣医療従事者を養成する。

このように獣医学群獣医学類と獣医保健学類は共に中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」の提言する「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」中の高度専門職業人養成機能を果たすものである。

◇獣医学群の英語名称＝School of Veterinary Medicine

獣医学群長　林　正信（２０１１～12）　田村　豊（２０１３～）

(1) 獣医学群「獣医学類」

本学の獣医学教育は、１９６４(昭和39)年に産業動物医療に従事する臨床獣医師の養成を目的に設置されて以来、獣医学はもとより酪農学や環境学を研究対象とする教員や広大なキャンパス内に飼育される産業動物を含めた教育資材を有効に利用し、先端的な産業動物関連の諸科学を学ぶことで酪農家を支援する実践的な獣医師の養成を図ってきた。

近年、食の安全・安心に関する意識の高まりや新型インフルエンザ等の人獣共通感染症への対応、伴侶動物医療の高度化、進歩の著しい生命科学への参加等、獣医師に求められる範囲は拡大の一途にあり新たな獣医学教育が求められている。獣医学類では、これまで培われた産業動物医療に関する知識や施設を最大限に活用しつつ、獣医学およびその関連分野における高度な知識と技術を習得し、迫り来る諸問題を解決できる能力を養うことによって実践的な産業動物、伴侶動物、公衆衛生関連獣医師を養成し、また、わが国の獣医療や食の安全および動物の福祉ならびに生命科学における先端的研究を推進できる人材の養成を目指している。

［取得可能資格］家畜人工授精師（獣医師＝資格取得）

［受験資格］獣医師国家試験

［任用資格］食品衛生管理者、食品衛生監視員、飼料製造管理者、狂犬病予防員、と畜検査員、薬事監視員、環境衛生監視員

◇獣医学類の英語名称＝Department of Veterinary Medicine

◇学位の名称および英語名称＝獣医学類「学士（獣医学）」＝Doctor of Veterinary Medicine

獣医学類長　田村　豊（２０１１～12）　竹花一成（２０１３～）

獣医学群「獣医学類」（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	**2**
英語Ⅱ	**2**
英語Ⅲ	**2**
英語Ⅳ	**2**
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
プレゼンテーション	1
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	2
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	**2**
数学Ⅱ	**2**
統計学Ⅰ	**2**
統計学Ⅱ	2
生物学	2
生物学実験	1
化学	2
化学実験	1
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
獣医生化学実習	1
獣医生理学各論	2
獣医生理学実習	1
消化生理学	1
栄養生理学	1
栄養生理学実習	1
臨床薬理学	1
獣医薬理学実習	1
獣医核医学基礎	2
獣医核医学基礎実習	1
感染・病理教育群	
獣医ウイルス病学	2
獣医ウイルス病学実習	1
獣医細菌病学	2
獣医細菌病学実習	1
寄生虫病学各論Ａ	1
寄生虫病学各論Ｂ	1
寄生虫病学実習	1
疾患モデル動物学	1
原生動物性疾病学	1
実験動物学・原虫病学実習	1
獣医基礎病理学	2
獣医実践病理学	1
獣医病理学実習	1
獣医免疫学	2
病態免疫学	1
獣医免疫学実習	1
衛生・環境教育群	
食品衛生学	2
食品衛生学実習	1
環境衛生学	2
毒性学	1
環境衛生学・毒性学実習	1
人獣共通感染症学Ａ	1
人獣共通感染症学Ｂ	2

授業科目	単位数
人と動物の関係の科学	2
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
獣医組織学総論	1
獣医生化学	1
細胞生物学	1
分子生物学	1
獣医生理学総論	1
内分泌学	1
獣医薬理学	2
放射線影響学	1
生物物理学	1
獣医療倫理と動物福祉	1
獣医基礎演習	1
獣医臨床基礎演習	1
生産動物行動学	1
野生動物医学概論	1
獣医ウイルス学	1
獣医細菌学	1
寄生虫病学総論	1
実験動物学	1
獣医公衆衛生学総論	1
獣医麻酔学総論	1
獣医臨床検査学総論	1
獣医臨床検査学各論Ａ	1
専門教育	
生体機能教育群	
獣医解剖学総論	1
獣医解剖学各論	2
獣医解剖学実習	1
獣医組織学各論	2
獣医組織学実習	1

授業科目	単位数
伴侶動物内科学総論	1
皮膚病・感覚器疾患	2
伴侶動物医療基礎実習B	1
伴侶動物内科学各論A	2
伴侶動物内科学各論B	2
伴侶動物運動器外科学	2
伴侶動物神経病学	1
伴侶動物医療臨床実習	2
伴侶動物軟部外科学	2
獣医腫瘍学	1
伴侶動物医療基礎実習C	2
専修教育	
専修教育共通科目	
統合獣医学	5
獣医畜産法規	1
魚病学	1
中獣医学	1
学外実習	1
研究発表	1
病院実習専修コース	1
専修教育コース別科目	
生体機能・感染病理学演習Ⅰ	2
生体機能・感染病理学演習Ⅱ	1
生体機能・感染病理学特論Ⅰ	1
生体機能・感染病理学特論Ⅱ	1
生体機能・感染病理学実習	2
生体機能・感染病理学基礎実験	4
衛生・環境学演習Ⅰ	2
衛生・環境学演習Ⅱ	1
衛生・環境学基礎実験	4
衛生・環境学特論Ⅰ	1
衛生・環境学特論Ⅱ	1
衛生・環境学実習	2
生産動物医療クリニカルローテーション	6
生産動物医療アドバンスコース	5

授業科目	単位数
獣医疫学	2
獣医疫学実習	1
獣医衛生学A	2
獣医衛生学B	1
予防衛生学実習A	1
獣医生産環境学	1
予防衛生学実習B	1
生産管理学	2
予防衛生学実習C	1
ハードヘルス学	2
予防衛生学実習D	1
生産動物医療教育群	
動物生殖機能学	1
動物生殖疾病学	1
動物生殖工学	1
動物生殖学実習	1
生産動物内科学総論	1
循環器・呼吸器内科学	1
消化器内科学	1
生産動物内科学実習A	1
代謝内科学	1
泌尿器・感覚器内科学	1
幼獣内科学	1
生産動物内科学実習B	1
生産動物手術学総論	1
生産動物軟部組織外科学	1
生産動物運動器外科学	1
生産動物外科学実習	1
伴侶動物医療教育群	
獣医麻酔学各論	1
獣医疾痛管理学	1
伴侶動物医療基礎実習A	1
画像診断学A	2
画像診断学B	1
獣医臨床検査学各論B	1

学類 / 科目	獣医学類 卒業必要単位数
基盤教育	32単位
専門基礎教育	21単位
専門教育	105単位
専修教育	20単位
自由科目	
合計	182単位以上

授業科目	単位数
伴侶動物医療クリニカルローテーション	6
伴侶動物医療アドバンスコース	5
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	301

⑵ 獣医学群「獣医保健看護学類」

獣医保健看護学類では一貫教育において獣医学に関する基礎知識と動物看護学に関する専門知識を習得し、幅広い獣医保健看護領域の業務を担える人材の養成を目指している。

さらに、専攻分野において動物栄養学、動物行動学および動物理学療法学に関する高度な教育を行い、それぞれのスペシャリストを養成する。動物栄養学のスペシャリストは、飼料会社における飼料の開発や動物病院における栄養指導者として活躍することが期待でき、動物行動学のスペシャリストは、動物のしつけ、問題行動動物の治療、盲導犬や介在療法動物など社会活動動物の提供等に関する分野で活躍することが期待できる。

また、動物理学療法スペシャリストは、獣医療の高度化や動物の高齢化に伴い今後需要が見込まれ、術後のリハビリや介護リハビリ分野で活躍することが期待できる。

［受験資格］動物看護師

◇獣医保健看護学類＝Department of Veterinary Science

◇学位の名称および英語名称＝獣医保健看護学類「学士（獣医保健看護学）」＝Bachelor of Veterinary Nursing Science

獣医保健看護学類長　北澤多喜雄（２０１１～）

獣医学群「獣医保健看護学類」（単位数の太字は必修科目）

授業科目	単位数
運動の科学	2
体育実技Ⅰ	**1**
体育実技Ⅱ	1
情報教育	
情報科学の基礎	**2**
情報処理基礎演習	1
外国語教育	
英語Ⅰ	2
英語Ⅱ	2
英語Ⅲ	2
英語Ⅳ	2
英語演習Ⅰ	2
英語演習Ⅱ	2
ドイツ語Ⅰ	2
ドイツ語Ⅱ	2
フランス語Ⅰ	2
フランス語Ⅱ	2
中国語Ⅰ	2
中国語Ⅱ	2
ハングルⅠ	2
ハングルⅡ	2
日本語Ⅰ（外国人留学生対象）	2
日本語Ⅱ（外国人留学生対象）	2
導入教育	
基礎演習Ⅰ	**1**
循環農学概論	2
食と健康学概論	2
環境共生学概論	2
獣医療概論	2
キャリア教育	
プレゼンテーション	1
キャリア実習Ⅰ	1
キャリア実習Ⅱ	2
総合領域教育	
国際関係とメディアコミュニケーションの科学	2

授業科目	単位数
基盤教育	
酪農学園教育	
建学原論	**1**
キリスト教学Ⅰ	**2**
キリスト教学Ⅱ	**2**
キリスト教と諸宗教	2
キリスト教と生命倫理	2
循環型農業論	2
農場実習	**1**
人文社会科学教育	
哲学	2
心理学	**2**
文学	2
社会学	2
日本史	2
世界史	2
地誌	2
地理学	2
法学	2
日本国憲法	2
経済学	2
自然科学教育	
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
統計学Ⅰ	2
統計学Ⅱ	2
生物学	**2**
生物学実験	**1**
化学	**2**
化学実験	**1**
物理学	2
物理学実験	1
地学	2
地学実験	1
保健体育教育	

授業科目	単位数
動物看護学実習A	1
動物看護学実習B	1
伴侶動物品種論	1
人と馬の関係学	1
動物介在療法論	1
動物介在療法実習	1
動物行動学A	1
動物行動学B	1
動物栄養学A	1
動物栄養学B	1
動物理学療法学A	1
動物理学療法学B	1
動物行動学実習	1
動物栄養学実習	1
動物理学療法学実習	1
動物ハンドリング論	1
動物ハンドリング実習	1
動物飼養管理学	1
動物飼養管理学実習	1
動物病院管理学	1
動物グルーミング理論	1
動物グルーミング実習	1
動物ウイルス病学	1
動物細菌病学	1
動物寄生虫病学	1
動物免疫学	1
動物病理学	1
動物遺伝学	1
臨床検査学実習	1
動物内科学	1
動物外科学	1
動物生殖学	1
臨床基礎実習	1
獣医麻酔学実習	1
附属動物病院実習	1

授業科目	単位数
人と動物の関係の科学	2
エントロピーによる生命・環境・農業の科学	2
食の安全・安心の科学	2
GIS・リモートセンシングによる空間情報の科学	2
観光と地域振興の科学	2
専門基礎教育	
獣医組織学総論	1
獣医生化学	1
細胞生物学	1
分子生物学	1
獣医生理学総論	1
内分泌学	1
獣医薬理学	2
放射線影響学	1
生物物理学	1
獣医療倫理と動物福祉	1
獣医臨床基礎演習	1
生産動物行動学	1
野生動物医学概論	1
獣医ウイルス学	1
獣医細菌学	1
寄生虫病学総論	1
実験動物学	1
獣医公衆衛生学総論	1
獣医麻酔学総論	1
獣医臨床検査学総論	1
獣医臨床検査学各論A	1
専門教育	
専門教育	
動物保健看護関連法規	1
動物解剖学	1
動物生理学	1
動物形態機能学実習	1
動物看護学A	1
動物看護学B	1

授業科目	単位数
栄養学実習A	1
栄養学実習B	1
行動管理専攻	
しつけ指導論	1
行動コンサルテーション論	1
行動学実習A	1
行動学実習B	1
理学療法管理専攻	
高齢動物理学療法論	1
整形外科疾患理学療法論	1
理学療法実習A	1
理学療法実習B	1
自由科目	
他学群他学類科目	
他大学等互換科目	
計	181

授業科目	単位数
学外動物病院実習A	2
学外動物病院実習B	2
特殊動物看護学	1
救急治療ケア概論	1
エキゾチックアニマル学	1
ドッグスポーツ論	1
アニマルレクリエーション論	1
ペットビジネス論	1
獣医保健看護学基礎実験	4
獣医保健看護学演習Ⅰ	1
獣医保健看護学演習Ⅱ	1
獣医保健看護学演習Ⅲ	1
獣医保健看護学演習Ⅳ	1
卒業論文	4
栄養管理専攻	
栄養指導概論	1
応用栄養学	1

学類 / 科目	獣医保健看護学類 卒業必要単位数
基盤教育	40単位
専門基礎教育	20単位
専門教育	53単位
自由科目	
合計	124単位以上

３　酪農学園大学大学院研究科

本学の大学院は、現在酪農学研究科酪農学専攻（修士課程＝１９８１年）、酪農学研究科フードシステム専攻（修士課程＝１９９５年）、酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程＝１９９１年）、酪農学研究科食品栄養科学専攻（修士課程・博士課程＝２００３年）、獣医学研究科獣医学専攻（博士課程＝１９８１年）の２研究科５専攻がある。

獣医学研究科については１９７５（昭和50）年３月25日、獣医学研究科獣医学専攻（修士課程）の設置が認可され、同年４月に開院した。これは、学術の進歩は獣医学の分野においても顕著なものがあり、畜産、酪農や公衆衛生の面においても、獣医師には精深な学識と高度の技術が要求される時代となり、大学の教育、研究もこれに対応し得る態勢が必要になってきたためである。

さらには、１９７８（昭和53）年、獣医師法の改正に伴う大学院修士積み上げ方式による６年制教育、そして84年の学校教育法改正によって獣医学教育の年限延長（６年制）実施が明らかになっており、それらに対応するためでもあった。

研究科には修士課程と博士課程が設置されており、修士課程は広い視野にたって精深な学識を授け、専攻分野における研究能力や高度の専門性を要する職業などに必要な能力を涵養し、博士課程は自立した研究活動の展開に必要な高度な能力と豊かな学識を有する研究者の育成を目的としている。

専門教育科目	
授業科目	単位数合計
農業経営学特論	2
農業経営学特別演習	2
酪農政策学特論	2
酪農政策学特別演習	2
農業市場学特論	2
農業市場学特別演習	2
環境共生学	
野生動物学特論	2
野生動物学特別演習	2
野生動物学特別実験・実習	1
国際環境情報学特論	2
国際環境情報学特別演習	2
国際環境情報学特別実験・実習	1
地球環境保全学特論	2
地球環境保全学特別演習	2
地球環境保全学特別実験・実習	1
（環境共生学共通科目）	
環境共生学特論Ⅰ	2
環境共生学特論Ⅱ	2
特別研究	**10**
論文	
計	95

履修基準

修士課程に必要な単位数は30単位以上とする。

⑴必修科目

大講座学科目の授業科目　８単位
特別研究　10単位
論　文

⑵選択科目

必修科目以外の授業科目12単位以上。ただし、演習・実験はその特論と合わせて履修すること。

専門教育科目	
授業科目	単位数合計
作物生産科学	
土壌植物栄養学特論	2
土壌植物栄養学特別演習	2
土壌植物栄養学特別実験	1
病理・害虫学特論	2
病理・害虫学特別演習	2
病理・害虫学特別実験	1
飼料作物学特論	2
飼料作物学特別演習	2
飼料作物学特別実験	1
植物遺伝学特論	2
植物遺伝学特別演習	2
植物遺伝学特別実験	1
酪農機械学特論	2
酪農機械学特別演習	2
酪農機械学特別実験	1
家畜生産科学	
家畜繁殖学特論	2
家畜繁殖学特別演習	2
家畜繁殖学特別実験	1
遺伝・育種学特論	2
遺伝・育種学特別演習	2
遺伝・育種学特別実験	1
家畜栄養学特論	2
家畜栄養学特別演習	2
家畜栄養学特別実験	1
家畜管理学特論	2
家畜管理学特別演習	2
家畜管理学特別実験	1
酪農生物化学特論	2
酪農生物化学特別演習	2
酪農生物化学特別実験	1
酪農情報学	
酪農経営情報学特論	2
酪農経営情報学特別演習	2

専門教育科目	
授業科目	単位数
食品情報システム論特論	2
食品情報システム論特別演習	2
食品情報システム論特別調査	2
食品情報システム論総合研究	4
食品情報システム論特別研究	10
論文	
計	100

履修基準

修士課程に必要な単位数は30単位以上とする。

⑴必修科目

所属する講座の授業科目　20単位

論　　文

⑵選択科目

必修科目以外の授業科目10単位以上。ただし、演習・実験・調査はその特論と合わせて履修すること。

専門教育科目	
授業科目	単位数
食資源利用システム	
農・畜産食品学特論	2
農・畜産食品学特別演習	2
農・畜産食品学特別実験	2
農・畜産食品学総合研究	4
農・畜産食品学特別研究	10
食料政策システム	
食料政策論特論	2
食料政策論特別演習	2
食料政策論特別調査	2
食料政策論総合研究	4
食料政策論特別研究	10
食品流通論特論	2
食品流通論特別演習	2
食品流通論特別調査	2
食品流通論総合研究	4
食品流通論特別研究	10
経営管理システム	
経営管理論特論	2
経営管理論特別演習	2
経営管理論特別調査	2
経営管理論総合研究	4
経営管理論特別研究	10

専門教育科目	
授業科目	単位数
共通	
総合研究	4
特別研究	10
論文	
計	54

履修基準

修士課程の修了に必要な単位数は30単位以上とする。

⑴必修科目

所属する分野の授業科目　10単位
総合研究　4単位
特別研究　10単位
論　文

⑵選択科目

必修科目以外の授業科目６単位以上。ただし、演習・実験はその特論と合わせて履修すること。

酪農学研究科酪農学専攻（修士課程）
フードシステム専攻（修士課程）
食品栄養科学専攻（修士課程）共通分野

専門教育科目	
授業科目	単位数合計
食の安全・安心基盤学	
食の安全・安心基盤学Ⅰ	2
食の安全・安心基盤学Ⅱ	2
食の安全・安心基盤学Ⅲ	2
食の安全・安心基盤学Ⅳ	2
計	8

専門教育科目	
授業科目	単位数
加工特性分野	
食品加工特性学特論	2
食品物性学特論	2
食品加工特性学演習	2
食品物性学演習	2
食品加工特性学特別実験	2
栄養機能分野	
食品栄養機能化学特論	2
食品機能生化学特論	2
食品栄養機能化学演習	2
食品機能生化学演習	2
食品栄養機能化学特別実験	2
健康栄養分野	
健康栄養学特論	2
臨床栄養学特論	2
健康栄養学演習	2
臨床栄養学演習	2
健康・臨床栄養学特別実験	2
食環境管理分野	
食品微生物管理学特論	2
食品環境汚染学特論	2
食品微生物管理学演習	2
食品環境汚染学演習	2
食環境管理学特別実験	2

大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程）（単位数の太字は必修単位数）

専門教育科目	
授業科目	単位数
植物資源生産学Ⅰ	2
植物資源生産学Ⅱ	2
動物資源生産学Ⅰ	2
動物資源生産学Ⅱ	2
食資源開発利用学Ⅰ	2
食資源開発利用学Ⅱ	2
応用食品科学Ⅰ	2
応用食品科学Ⅱ	2
微生物利用学Ⅰ	2
微生物利用学Ⅱ	2
農業経営政策学Ⅰ	2
農業経営政策学Ⅱ	2
食料経済学Ⅰ	2
食料経済学Ⅱ	2
食生産利用科学総合演習Ⅰ	**1**
食生産利用科学総合演習Ⅱ	**1**
食生産利用科学総合演習Ⅲ	**1**
特別研究	**4**
計	31

履修基準

博士課程の修了に必要な単位数は、必修科目以外に１分野の授業科目４単位を修得し、11単位以上とする。

大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻（博士課程）

専門教育科目	
授業科目	単位数
加工特性分野	
食品加工特性学特別講義	1
食品物性学特別講義	1
食品加工・物性特性学演習	1
栄養機能分野	
食品栄養機能化学特別講義	1
食品機能生化学特別講義	1
食品栄養機能・生化学演習	1
健康栄養分野	
健康栄養学特別講義	1
臨床栄養学特別講義	1
健康・臨床栄養学演習	1
食環境管理分野	
食品微生物管理学特別講義	1
食品環境汚染学特別講義	1
食品環境汚染学演習	1
論文	
計	12

履修基準

博士課程の修了に必要な単位数は６単位以上とする。

⑴必修科目
所属する分野の授業科目　３単位
論　　文

⑵選択科目
他の分野の特別講義から３単位以上。

大学院獣医学研究科獣医学専攻（博士課程）

専門教育科目		
授業科目		単位数
専門分野	基礎獣医学演習Ⅰ	4
	基礎獣医学演習Ⅱ	4
	基礎獣医学演習Ⅲ	4
	基礎獣医学研究実験	12
	臨床獣医学演習Ⅰ	4
	臨床獣医学演習Ⅱ	4
	臨床獣医学演習Ⅲ	4
	臨床獣医学研究実験	12
	応用獣医学演習Ⅰ	4
	応用獣医学演習Ⅱ	4
	応用獣医学演習Ⅲ	4
	応用獣医学研究実験	12
形態機能学特殊講義		2
臨床獣医学特殊講義		2
応用獣医学特殊講義		2
予防獣医学特殊講義		2
国際獣医情報学特殊講義		2
計		82

履修基準

専門分野は、１分野の授業科目24単位を必修とする。

特殊講義より３科目６単位以上修得すること。

歴代酪農学研究科研究科長

平尾和義（1981～84）　楢崎　舜（1985～88）　堀内一男（1989～92）
鮫島邦彦（1993～98）　塩見徳夫（1999～2006）　市川　治（2007～8）
干場信司（2009）　市川　治（2010～）

歴代獣医学研究科研究科長

沼田芳明（1981～86）　河田啓一郎（1987～88）　阿部光雄（1989～94）
平棟孝志（1995～96）　森田千春（1997～2000）　種池哲朗（2001～6）
横田　博（2010～12）　林　正信（2013～）

歴代酪農学園大学学長

初代	樋浦誠	1960・4・1～1964・3・31
第2代	黒澤酉蔵	1964・4・1～1966・3・31
第3代	佐藤貢	1966・4・1～1969・12・14
事務取扱	橋本吉雄	1969・12・14～1970・4・7
第4代	橋本吉雄	1970・4・7～1971・1・3
事務取扱	桜井豊	1971・1・4～1971・1・7
事務取扱	遊佐孝五	1971・1・7～1971・2・24
事務取扱	高杉成道	1971・2・24～1971・6・18
事務取扱	遊佐孝五	1971・6・18～1971・12・3
事務取扱	桜井豊	1971・12・3～1971・12・23
事務取扱	久米小十郎	1971・12・23～1972・3・31
事務取扱	牛島純一	1972・4・1～1973・3・31
事務取扱	久米小十郎	1973・3・31～1973・7・6
第5代	遊佐孝五	1973・7・6～1985・3・31
第6代	牛島純一	1985・4・1～1989・3・31
第7代	平尾和義	1989・4・1～1997・3・31
第8代	安宅一夫	1997・4・1～2001・3・31
第9代	大谷俊昭	2001・4・1～2007・3・31
第10代	谷山弘行	2007・4・1～2013・3・31
第11代	干場信司	2013・4・1～

副学長

初　　代　黒　澤　亮　助　　１９６３・12・７～１９６８・３・23

第２代　橋　本　吉　雄　　１９６８・３・24～１９７０・３・18

歴代宗教主任

神塚アーサー（１９６０～66）　小沢一雄（１９６７）　管井大果（１９６８）　神塚アーサー（１９６９）

山畑勝美（１９７０～89）　菅沼英二（事務取扱・１９９０）　菅沼英二（１９９１～92）

山口　博（１９９３～２０００）　高橋　一（２００１～４）　山口　博（２００５～６）

高橋　一（２００７～10）　藤井　創（２０１１～）

歴代教養科科長

高見　稔（１９６３～64）　山下　勝（１９６５～66）　池田　実（１９６７）　川村健弥（１９６８～74）

菅沼英二（１９７５～80）　川村健弥（１９８１～88）　九津見明（１９８９～92）

太田一男（１９９３～94）　加藤　勲（１９９５～97）

歴代酪農学部学部長

安宅一夫（１９９６）　鮫島邦彦（１９９７～２００２）　岡本全弘（２００３～８）

菊地政則（２００９）　干場信司（２０１０～12）　荒木和秋（２０１３～）

歴代酪農学科学科長

高杉成道（１９６３～66）　遊佐孝五（１９６７～73）　松井幸夫（１９７４～76）

原田　勇（１９７７～80）　平尾和義（１９８１～84）　楢崎　舜（１９８５～88）

堀内一男（１９８９～92）　楢崎　舜（１９９３～94）　安宅一夫（１９９５）　川上克己（１９９６～２０００）
小山久一（２００１～４）　小阪進一（２００５～８）　森田　茂（２００９～）　小宮道士（２０１３～）

歴代農業経済学科学科長

中曽根徳二（１９６３～64）　桜井　豊（１９６５～66）　岩元典一（１９６７～68）
久米小十郎（１９７３～76）　桜井　豊（１９７７～78）　三田保正（１９７９～84）
岩井正敏（１９８５～86）　五十嵐涼二（１９８７）　岩元典一（１９８８）　大谷俊昭（１９８９～94）
工藤英一（１９９５～２０００）　村岡範男（２００１～６）　荒木和秋（２００７～11）
發地喜久治（２０１１～12）　丸山　明（２０１３～）

歴代食品流通学科学科長

鮫島邦彦（１９９４）　森田潤一郎（１９９５～96）　山本博信（１９９７～98）
森田潤一郎（１９９９～２０００）　芝崎希美夫（２００１～２）　田村　實（２００３）
細川允史（２００４）　鈴木忠敏（２００５～８）　本多芳彦（２００９～11）　尾碕　亨（２０１１～）

歴代食品科学科学科長

鮫島邦彦（１９８８～92）　塩見徳夫（１９９３～96）　安藤功一（１９９７～２０００）
中村邦男（２００１～４）　菊地政則（２００５～８）　山本克博（２００９～11）　石下真人（２０１１～12）
竹田保之（２０１３～）

歴代獣医学部学部長

平棟孝志（１９９６）　種池哲朗（１９９７～２０００）　加藤清雄（２００１～２）　岩井　浤（２００３～４）

谷山弘行（２００５～６）　林　正信（２００７～１２）　田村　豊（２０１３～）

歴代獣医学科学科長

牛島純一（１９６５～６６）　山下正亮（１９６７～７８）　沼田芳明（１９７９～８６）
河田啓一郎（１９８７～８８）　阿部光雄（１９８９～９４）　平棟孝志（１９９５～９６）
種池哲朗（１９９７～２０００）　加藤清雄（２００１～２）　岩井　浤（２００３～４）
谷山弘行（２００５～６）　林　正信（２００７～１１）　田村　豊（２０１１～１２）　竹花一成（２０１３～）

歴代環境システム学部学部長

太田一男（１９９８～２０００）　加藤　勲（２００１～４）　中原准一（２００５～６）
山舗直子（２００７～８）　金子正美（２００９～１１）　岩井　洋（２０１１～１２）　金子正美（２０１３～）

歴代経営環境学科学科長

中原准一（１９９８～２０００）　齋藤　瞭（２００１～２）　金子佳弘（２００３～４）
篠崎志朗（２００５～６）　齋藤　瞭（２００７～８）　加藤敏文（２００９～１０）

歴代地域環境学科学科長

太田一男（１９９８）　村野紀雄（１９９９～２０００）　森川　純（２００１～２）　岩井　洋（２００３～６）
森川　純（２００７～８）　岩井　洋（２００９～１１）　押谷　一（２０１１～１２）　遠井朗子（２０１２～）

歴代生命環境学科学科長

矢吹哲夫（２００５～１１）　星野仏方（２０１１～）

歴代環境マネジメント学科学科長
篠崎志朗（２００５～６）　齋藤　瞭（２００７～８）　加藤敏文（２００９～）
〈注・歴代各学群長・各学類長・大学院各研究科長などは、前掲の各項目末尾に掲載〉

４　教育センターの新設とカリキュラムの特徴

２０３３年の学園創立１００周年を見据えて少子化の進行や学部体制の再構築などの課題解決のため、２００７年12月に麻田信二理事長が自ら出された「酪農学園改革の検討方向」をスタートとして大学改革は始まった。数次の準備会議や検討委員会での協議を経て、２０１１年４月から農食環境学群（循環農学類、食と健康学類、環境共生学類）、獣医学群（獣医学類、獣医保健看護学類）の２学群５学類13コースという新たな教育体制が実現された。

酪農学園独自の教養教育として位置づける基盤教育と名付けられた初年次カリキュラムでは、新入生全員が「建学原論、キリスト教学」を通して「三愛精神」を学び、「農場実習、基礎演習」では家畜に触れ、土を触り、作物を育てる実習体験を行う。２年次以降は、広い視野を持って専門教育を修めるための準備教育としての専門基礎教育が学類単位で設定されている。

これらの教育の成果として「農、食、環境、生命をキーワードに食料供給や人・動物の生命の維持・福祉に貢献できる人材を育成する」ことが目的と定められており、その新教育体系を維持運営する中核組織として、従来の教務部を改組した形で教育センターが構想された。現在、改組届出の完成に向けて科目の展開を構築する教務２課と新旧教育課程の学生を教務指導する教務１課が協働して教務事

務を担っている。

また、２０１１年度からスタートした酪農学園大学の教育改革のなかで、特に全学共通（必須）の特徴的なカリキュラムとして、「建学原論」と「農場実習（健土健民入門実習）」「キャリア教育」（別掲）が開設された。

建学原論　本学園の教育理念を理解・体得し、意欲を持って学生生活を送るための導入として、本学が創立された社会的使命を学び、その普遍性を受け継ぐ意識の醸成を図ることを目的としている。この科目を通じて、学生自らが本学で学ぶ意義を自覚し、目的意識が確立されることを期待している。講義内容は、本学園の創立から今日までの沿革と建学の理念、そのバックボーンなどから学園の時代的ミッションでもある農業・食料生産、生命・環境問題と国際協力等の今日的意義を習得する。

とりわけ建学の精神である「三愛主義」と「健土健民」が、デンマーク興国の歴史と田中正造の国土尊厳思想に根ざしていることの認識を深める。また、建学の理念を根幹として活躍している卒業生からは、多くの困難を克服し、希望に向かっていかに生きてきたかなどを学ぶ。

農場実習（健土健民入門実習）　本学園の創立以来の教育の基本は、「実学教育」を通じて知識と実際（行動）を一体的に習得することである。だが、この理念は学園発展の軌跡の中で、十分に体制化（農場の教育的有効活用）されていないことが反省点とされてきた。今次の大学の教育改革で、1年次前期に、「土に触れることの教育的意義」を再構築することとした。実習における原体験をその後に学ぶ学理につなげ、科学的思考力あるいは柔軟な思考力の醸成に資することとした。

また、初歩的な技術の実際を理解するために、畜産・農業の基礎を学ぶ機会とも位置づけた。実習

体験によって、特徴的な本学の建学の精神を体得すること、食料が動植物の生命に由来して生産されることを体験的に理解すること、生命や自然との触れ合いを通じて「農と食」の歴史や文化を学ぶ、さらには協調性などが培われることが期待される。

5　学生生活

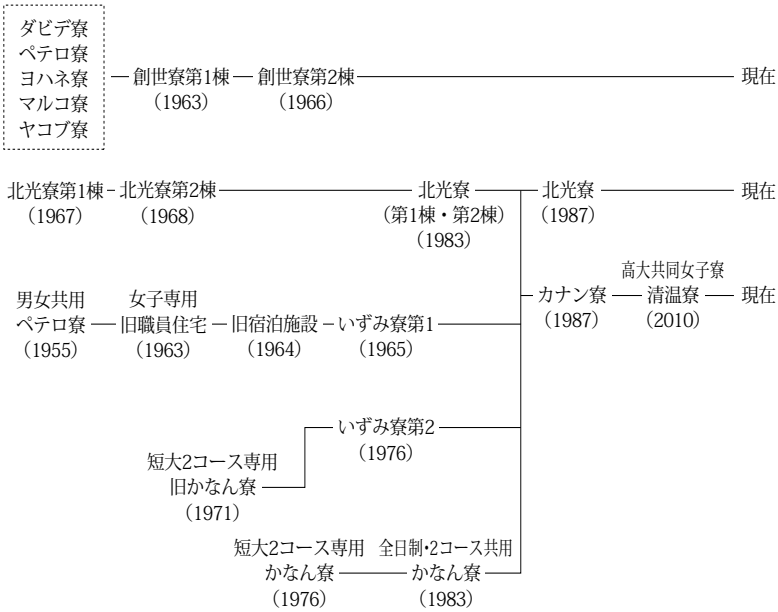
学生生活　大学の所在する江別市は、人口１９０万を擁する国際都市札幌市に近接し、緑豊かな自然の中に産業、文化の街として発展を遂げている。日本でも最大級の広大なキャンパスは市南西部の広大な原始林(道立野幌自然公園)を背景とした西野幌文教地区にある。近傍には、道立図書館、北海道教育研究所、札幌学院大学、北翔大学、北海道情報大学、開拓記念館、道立食品加工研究所など多くの教育機関などが林立している。

こうした環境の中で多くの学生が、学理、技術の研究体得と、大学人としての人間形成を目指して研さんに努めている。

学生寮　大学における学生寮の歴史は大学部、短大の開設とともに始まり、大きく変化しながら今日に至っている。すなわち、本学学生の多くは教育の特性から、道内各市町村や府県のいわゆる遠隔地出身者によって占められ、自宅からの通学者は極めて少なく、ほとんどが下宿、借間生活の余儀ない状況にあった。そのため、初期の大学部や短大では、機農高校より移譲を受けた農場寮など木造５棟を活用して学生寮としてきた。

その後、１９６０(昭和35)年の大学設置および学科の増設に伴い学生数は逐年増加した。しかし、

学生寮の推移



高大共同女子寮「清温寮」2010年４月開寮

当時本学を含む札幌市厚別、江別市西野幌の文教地区には、多くの学校が新設されたため、学生数も急増し、学生の住居確保は困難になってきた。

大学ではこうした状況に対応するため、１９６２(昭和37)～１９６７(昭和42)年にわたり、創世寮の２棟(男子、収容人員２３８名)と、いずみ寮(女子、収容人員20名)を逐次新設して、大学、短大の学生を収容した。また、短大第２コースの学生のため北光寮２棟(男子、収容人員２０４名)と、カナン寮(女子、収容人員25名)を設置してきた。

しかし、その後短大・大学の学科の新設、あるいは再編に伴い、また、寮の老朽化とも重なって統廃合の経緯(図示)をたどって、男子寮として創世寮および北光寮、女子寮としてカナン寮の三つの寮となっていたが、２０１０年度から高大共同の清温寮が完成し、大学生用としては、1人部屋が20室、2人部屋が26室、４人部屋が32室の合計２００名定員として運営されている。

これらの学生寮は学生の「福利厚生のための施設」であるとともに大学教育の理念に基づき、キリスト教主義による共同生活を通じて、人格の錬成と学究生活の充実を図るという教育目的を持っての設置であった。

学園の大自然を背景に校舎に隣接し、学生部の管理の下に寮監、寮母のほか専門の栄養士を置き、寮生より選出された委員による寮生委員会を設けて寮運営を行ってきたが寮母制度は創世寮は１９９０(平成2)年度、カナン寮は１９９３(平成5)年度までで廃し、現在は、昼間のみ非常勤職員(各寮1名)を事務室に配置して夜間は寮生だけの居住体制となっている。

一方、食事は、創世寮が3食、北光寮・カナン寮が2食を管理栄養士1名、調理員10数名で提供し

ている。また、清温寮の食事は、朝夕の２食を民間に業務委託している。

課外活動　大学は学生の自己形成の場であり、その自主性を養うため正課のほかに課外活動がある。この課外活動は大きくは体育系部のサークルと文化系部のクラブ・サークルの二つからなっており、現在合わせて80余りの団体が登録され、各団体には教職員による顧問を配している。

体育系部・サークル＝心身の鍛練を通じて人の和を学ぶこととしている。体育系部・サークルは開学時にはソフトテニス部・剣道部・馬術部・男子バスケットボール部・ラグビー部・山岳部の６団体であったが、現在は48団体に増えている。

文化系部・サークル＝教室における理論を実践的体験を通じて深めるクラブをはじめ、研究会、同好会的なものも多い文化系部・サークルは、開学時にはわずか合唱団一つにすぎなかったが、現在は30余団体になっている。

教育研究施設に比べて課外活動施設はかなり老朽化が進んでおり、必ずしも恵まれた環境にあるとはいえない中でクラブ・サークル数の増加や好成績を収める団体、個人が増えてきており、ここ十数年間で著しく発展、活発化してきた。学園はこうした現実に対応するため２００６年２月に新サークル棟「健音館」と５月には「緑音館」を建設した。健音館は鉄筋コンクリート２階建て、防音設備完備、総面１０２１・18㎡。主として音楽系および演劇・ＹＯＳＡＫＯＩのサークル棟として活用されている。

緑音館は、木造平屋建て、学園が所有する福島植林地産の杉材を使用して、防音、暖房、換気システムも完備されており、ブルーグラス研究所をはじめとするアコースティック系音楽のサークル棟として活用される。

奨学資金および授業料免除制度　本学学生の奨学金は、「日本学生支援機構」（旧・日本育英会）の奨学金制度を発足以来多くの学生が活用してきた。１９９８（平成10）年には制度が一部変わり第一種奨学生に加え、第二種（きぼう21プラン奨学生）が大幅に増員され、貸与月額についても第一種は２年ごとに変更される固定金額に対し、第二種は４種類より希望額を選択する方法となっている。

貸与月額については、第一種３種類（自宅・自宅外・月額３万円）、第二種５種類（３・５・８・10・12万円、（獣医のみ14万円あり））より希望額を選択する方法となり、２００９（平成21）年度実績は、第一種２１１名、第二種９２６名、併用１２４名となっている。短期大学部については第一種５名、第二種22名、併用２名となっている。大学院生については、第一種25名、第二種14名、併用３名となっている。

「酪農育英会」奨学金の貸与を受けているものは、２００９年大学30名となっている。本学独自の「酪農学園大学（同短期大学部）奨学金貸与制度」は、１９８８（昭和63）年より実施され、卒業後貸与を受けた年数の３倍の年数内に返還することを条件に貸与してきたが、さらに２００３年度からは無利子として卒業後10年以内の返還に改正し、学生の便宜を図っている。

奨学金制度とは別に、１９８６（昭和61）年より「授業料免除制度」が施行され、１９９４（平成６）年度からは私費外国人留学生も対象としてきた。また、１９９５（平成７）年の阪神大震災により被害を受けた新入生・在学生に対して当年度の学校納入金すべての免除を行ってきた。これらの奨学金の貸与、給付を受けるには単に経済的理由のみならず、学業成績も優秀でなければならないという条件がある。また、２０１０年度から兄弟姉妹等同時修学授業料減免、学業成績、人物並びに課外活動に優れた学生に特別奨学金（特待生）制度を実施している。

健康管理と医療互助会　学生の健康管理は、短大開設時の１９５０(昭和25)年から、当時の機農高校校医に依託していたが、１９６１(昭和36)年、同校内に学生診察室を設け高校、短大、大学の学生の診療救急処置に当たった。そして、１９６７(昭和42)年学園内に職員、学生のための医務室が設置された。それ以後、学生の利用率が年々増加し、１９８６(昭和61)年４月、それまで学園所属であった看護師を学生部所属とし、学生の健康管理をより充実させる方向に転換した。

その後、数度の移転を経て１９９８(平成10)年、現在の学生サービスセンターの1階に移転した。

学生相談室　学生相談室は、１９７５年に開設し、当初は教職員が学生の相談にあたっていたが、相談件数の増加等により２００１年度からは非常勤カウンセラーが相談を担当している。

２００４年には、学生相談室の改築を行い、面接室の他に、学生が自由に過ごせる待合コーナーが設置された。２００５年６月には学生相談室規程を改定し、学生生活において当面する心身上の諸問題や課題に関し相談に応じる専門業務を行うこととした。２００６年には応接談話室を新たに設け、ハード面においても、相談体制を整えている。

学生相談室では、具体的な相談事への対応だけでなく、心理学的な問題の解決や自分自身の理解のために、非常勤医師1名、非常勤カウンセラー(臨床心理士)3名によるカウンセリング体制を整えている。また、大学は学生に対する医療費の負担をできるだけ軽減するため、学園の全学生、生徒の加入による医療互助会制度を早くから採り入れて会員の医療費の一部を補助している。

中央館ロビー・学生ホール　１９９８(平成10)年3月に完成した中央館1・2階は、学生が自由にくつろげるロビーとなっている。1階は生協売店を併設した飲食・自由学習の場として、2階は各種

の表彰式や小規模の講演会などが行える談話室とクラブのミーティングや作品展示が可能な場所を併設し、日常の学生生活に十分な機能と空間を備えている。

学生ホールは、音楽系サークルなど各種クラブ・サークルの発表の場として、また大学祭、映画上映、中規模の講演会など、学生が自由に利用できる施設となっている。

酪農学園生活協同組合（略称・学園生協）　短期大学開学によって学生部厚生補導課管理の下に、学生の福利厚生のための事業として食堂部、購売部、理髪部の３部で始められ、学生委員の協力を得て運営されてきた。

その後、事業は逐次拡大し１９６５（昭和40）年４月、消費生活協同組合法による酪農学園生活協同組合に発展し、さらに１９８７（昭和62）年２月には待望の「酪農学園ホール」の完成に伴い移転した。

６　学生の進路状況

キャリア教育　わが国の高等教育への進学率は50％台半ばに達している。大学教育はいわゆる「ユニバーサル化」の段階に移行しており、さまざまな資質や能力、知識、興味、関心事などの面で多様な価値観を持つ学生が増えきたことが指摘されている。近年これらの変化に対応するため学生に対するキャリア形成支援の重要性が大きく取り上げられている。

本学は２０１１年度からスタートした新教育体制の下でキャリア教育を導入した。従前からも学生への就職支援内容の充実、個々の学生動向の把握、そして企業・団体との緊密な連携といった学生の目線にたったさらに質の高い環境整備に重点を置き現在に至っている。

学生の就職活動の時期に合わせて種々の支援プログラムを組んでいる。３年次（獣医５年次）対象とした就職講座を通年に実施し、２年次を対象とした準備講座も後期から行っている。７月には３年次（獣医５年次）を対象にした進路登録のためのガイダンスを実施、就職意識の醸成に努め、就職活動に対する実践力を高めている。

３年次の10月には本学に多くの企業の人事担当者を招いて業界や仕事の情報に接する機会を得ている。12月には東京や千葉で行われる合同説明会ツアーを実施、これには毎年30～40名の学生が参加している。２月には１週間以上にわたり企業の採用担当者による合同企業セミナーを開催し、学生は志望企業の具体的な情報入手に取り組むために積極的に参加している。

就職状況　過去10年間の就職状況を見ると別表のようになる。卒業者数に対する就職者数の割合は、２００３年、２００４年は60％台後半、２００５～２０１０年にかけて70％台、そして２０１１～２０１２年度は再び60％台後半へと推移している。この傾向は、全国の大卒求人倍率の推移の影響を受けていることが推察される。その間の大卒有効求人倍率は、２００４年から上昇に向かい始め、２００８年、２００９年卒では2・14倍と近年では非常に高い数値を示している。

この背景には団塊の世代の大量退職による人員補充による求人増があったことが指摘されている。本学の進路動向の特徴である自営者数は、40～60人台で推移している。進学者数は過去10年間で２００９年度が最も多く61人であった。２０１２年度は21人となっている。そのうち本学大学院への進学者数は約半数の11人である。

採用状況を地域別に見ると、北海道が52・４％と全体の半数を占め、次いで関東20・５％、近畿10・３％

などとなっている。業種別割合でみると、卸売業・小売業が全体の18・2％と最も多く、次いで公務16・0％、学術研究・専門技術サービス業13・1％、農業・林業が全体の7・5％となっている。その中で特徴的なのは、学生の農業協同組合への関心が高く毎年30名程度の進路実績がある。農業生産者に資材を供給する企業や食品の加工・製造・販売の関連企業、あるいはそれに関わる流通販売に関連する企業等への就職も多い。獣医学科では、生産動物診療に携わるＮＯＳＡＩ獣医師、動物病院、近年は公務獣医職への進路実績が高まっている。本学の特徴である自営に進む者は徐々に減少傾向をたどっており、２０１２年度は全業種を含め42名であった。

近年、就職活動の解禁時期に関して大きな変化が見られている。景気の低迷による就職活動の早期・長期化は、大学教育にも悪影響を与えるとして批判が高まり、採用時期や採用の要件が見直され始めた、経団連は会員企業対象の「倫理憲章」を改訂したことにより、２０１３年３月卒業予定の大学３年生の就職活動が12月解禁となり、例年より２カ月遅い12月からの就職活動のスタートとなった。このことで本学の半数が就職する北海道地域の一部企業の採用活動にも選考の長期化などの影響が現れている。

学生の進路状況の推移

酪農学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	163	75	16	16	11	45	65.6%
2004(同 16)	183	93	26	13	6	45	72.1%
2005(同 17)	173	99	20	8	6	40	73.4%
2006(同 18)	185	103	21	13	13	35	74.1%
2007(同 19)	175	109	14	10	5	37	76.0%
2008(同 20)	173	94	30	11	14	24	78.0%
2009(同 21)	173	109	14	12	5	33	78.0%
2010(同 22)	174	85	32	8	8	41	71.8%
2011(同 23)	161	90	18	5	13	35	70.2%
2012(同 24)	136	74	20	3	3	36	71.3%

農業経済学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	132	58	26	1	3	44	64.4%
2004(同 16)	113	44	28	4	7	30	67.3%
2005(同 17)	108	57	23	3	4	21	76.9%
2006(同 18)	111	72	12	0	5	22	75.7%
2007(同 19)	110	67	20	3	1	19	81.8%
2008(同 20)	83	55	11	1	1	15	80.7%
2009(同 21)	76	33	23	3	3	14	77.6%
2010(同 22)	69	37	18	1	0	13	81.2%
2011(同 23)	63	32	14	1	0	16	74.6%
2012(同 24)	71	40	16	0	3	12	78.9%

食品科学専攻

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	111	74	5	5	0	27	75.7%
2004(同 16)	89	58	2	8	1	20	76.4%
2005(同 17)	73	52	2	6	0	13	82.2%
2006(同 18)	70	55	1	7	0	7	90.0%
2007(同 19)	73	50	3	10	1	9	86.3%
2008(同 20)	66	46	0	6	0	14	78.8%
2009(同 21)	63	36	3	7	0	17	73.0%
2010(同 22)	61	41	3	3	0	14	77.0%
2011(同 23)	54	30	2	5	0	17	68.5%
2012(同 24)	54	32	0	2	0	20	63.0%

健康栄養学専攻

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2004(平成16)	30	18	0	1	0	11	63.3%
2005(同 17)	41	30	0	3	0	8	80.5%
2006(同 18)	40	31	0	0	0	9	77.5%
2007(同 19)	40	30	0	4	0	6	85.0%
2008(同 20)	39	27	0	0	0	12	69.2%
2009(同 21)	38	17	0	0	0	21	44.7%
2010(同 22)	44	19	1	3	0	21	52.3%
2011(同 23)	37	9	2	2	0	24	35.1%
2012(同 24)	38	11	0	1	0	26	31.6%

食品流通学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	77	48	1	2	0	26	66.2%
2004(同 16)	88	66	2	1	0	19	78.4%
2005(同 17)	71	58	2	0	0	11	84.5%
2006(同 18)	84	69	6	0	0	9	89.3%
2007(同 19)	68	61	1	0	0	6	91.2%
2008(同 20)	56	46	1	0	0	9	83.9%
2009(同 21)	48	33	1	0	0	14	70.8%
2010(同 22)	60	41	0	0	0	19	68.3%
2011(同 23)	67	35	1	0	0	31	53.7%
2012(同 24)	56	40	2	0	1	13	75.0%

獣医学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	151	126	0	8	2	15	88.7%
2004(同 16)	138	89	0	8	3	38	70.3%
2005(同 17)	137	99	0	3	0	35	74.5%
2006(同 18)	147	108	0	8	2	29	78.9%
2007(同 19)	136	99	0	8	0	29	78.7%
2008(同 20)	139	109	0	6	0	24	82.7%
2009(同 21)	139	103	0	8	0	28	79.9%
2010(同 22)	131	114	1	7	2	7	93.1%
2011(同 23)	141	107	0	5	0	29	79.4%
2012(同 24)	141	100	0	8	0	33	76.6%

経営環境学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	148	75	10	3	4	56	59.5%
2004(同 16)	142	91	3	4	2	42	69.0%
2005(同 17)	121	76	8	3	1	33	71.9%
2006(同 18)	110	76	2	1	0	31	71.8%
2007(同 19)	109	75	5	2	2	25	75.2%

環境マネジメント学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2008(平成20)	70	42	2	2	0	24	65.7%
2009(同 21)	41	23	1	2	0	15	63.4%
2010(同 22)	33	19	0	0	0	14	57.6%
2011(同 23)	19	10	0	0	0	9	52.6%
2012(同 24)	28	18	2	0	0	8	71.4%

地域環境学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	152	72	1	4	3	72	50.7%
2004(同 16)	142	72	1	6	0	63	55.6%
2005(同 17)	127	62	0	12	0	53	58.3%
2006(同 18)	135	91	4	5	0	35	74.1%
2007(同 19)	146	86	3	6	0	51	65.1%
2008(同 20)	84	49	1	3	1	30	63.1%
2009(同 21)	79	31	2	5	0	41	48.1%
2010(同 22)	85	43	0	2	0	40	52.9%
2011(同 23)	69	29	2	2	1	35	47.8%
2012(同 24)	36	14	1	0	1	20	41.7%

生命環境学科

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2008(平成20)	93	48	0	23	0	22	76.3%
2009(同 21)	103	48	2	24	1	28	71.8%
2010(同 22)	108	50	1	23	1	33	68.5%
2011(同 23)	108	46	0	15	1	46	56.5%
2012(同 24)	84	41	1	9	0	33	60.7%

大学計

年　度	卒業者数	進路状況					就職率
		就職	自営	進学	実習	その他	
2003(平成15)	934	528	59	39	23	285	67.0%
2004(同 16)	925	531	62	45	19	268	69.0%
2005(同 17)	851	533	55	38	11	214	73.6%
2006(同 18)	882	605	46	34	20	177	77.7%
2007(同 19)	857	577	46	43	9	182	77.7%
2008(同 20)	803	516	45	52	16	174	76.3%
2009(同 21)	760	433	46	61	9	211	71.1%
2010(同 22)	765	449	56	47	11	202	72.2%
2011(同 23)	719	388	39	35	15	242	64.3%
2012(同 24)	644	370	42	23	8	201	67.5%

７　開学記念式典と記念行事

短期大学開学30周年・大学開学20周年の記念式典１９８０(昭和55)年８月30日、同40周年・30周年記念式典１９９０(平成２)年９月14日、同50周年・40周年記念式典２０００(平成12)年５月26日――というように、本学ではその都度周年事業委員会を置いて周到な準備の中で開催してきた。

学園史二に、式典・祝賀会、記念行事・事業等について詳細に記録されているので、本項では２０１０(平成22)年の９月に行われた短期大学部開学60周年、大学開学50周年について記しておく。

短期大学部開学60周年・大学開学50周年記念式典と行事　酪農学園大学短期大学部開学60周年・酪農学園大学開学50周年の記念式典が２０１０(平成22)年９月17日午後１時から黒澤記念講堂において開催された。

式典は同窓生をはじめ教職員、そしてこれまでの歩みを共にした関係者３００名が集い、高橋 一宗教主任の司式により礼拝形式により執り行われた。

谷山弘行学長は、開会の式辞で、半世紀を超える歴史のなかで、３５、１７３名にものぼる卒業生を世に送り出してきた本学に対して多くの助言、支援をいただいた関係機関、関係者に感謝を述べ、「本学の建学の精神は、この時代にあって本当に必要であることの確信を持つとともに、次代を担う人材を育て社会に送り出す使命」により、これからも歩みを続けていくことを強調した。

続いて、原田 勇学園長による本学関係者の永眠者に対する追悼祈祷ののち、森本正夫日本私立大学協会副会長(同北海道支部長)、宮越昭男日本私立短期大学協会副会長(同北海道支部長)ならびに金井新

二日本キリスト教学校教育同盟北海道地区代表の祝辞があった。

また、麻田信二理事長より「本学の三愛精神、健士建民の建学の精神にもとづく使命を教職員一同再認識し、今後も揺るぐことなく社会の諸問題の解決に向けて貢献していく」との決意が示された。

引き続いて、独立行政法人国際協力機構理事橋本栄治の「国際協力～昨日・今日・明日～」と題する記念講演が行われた。

午後６時からは、会場を札幌市の札幌ガーデンパレスに移し、祝賀会が開催された。まず、谷山弘行学長、原田 勇学園長よりあいさつがあり、学園長は、「創立以来、多くの試練があったが、建学の精神に守られ、一人ひとりのはたらきにより今日があること、さらに終始、支えてくださった関係者と計り知れない神の導き」と感謝を述べた。続いて来賓の酪農学園後援会顧問でもある町村信孝衆議院議員、三好昇江別市市長、野村武連合会長のあいさつがあった。

酪農学園短期大学部、酪農学園大学同窓会校友会、酪農学園同窓会連合会札幌支部よりそれぞれ記念品の贈呈があり、途中、短期大学部・大学単位同窓会長、同窓会連合会支部長の紹介があった。

また、ＯＢ合唱団による男性合唱と在校生のブルーグラス研究所による演奏は、会場を暖かく包んだ。

最後に有限会社トンデンファーム代表取締役松山増男より、酪農学園で学び、社会のなかで会社を経験した自身の経験を踏まえて、乾杯のあいさつがあり、酪農学園大学短期大学部上田純司教授の閉会のことばによって祝賀会を締めくくった。

なお記念行事事業の一環として、「酪農讃歌」の碑が建立され、「記念誌」（Ａ４判・１８４頁）も刊行された。

第３章　酪農学園大学附属教育施設・機関

１　酪農学園大学附属農場

酪農学園建学理念のシンボルである教育農場は、当初は機農学校(高校)の実習農場として７～８区に分割されていたが、１９４９(昭和24)年の大学部の開設と共に改組され、機農高等学校の農場の一部を母体として酪農学園大学部実習農場として設立された。

その後、中央農場の開設などキャンパス内の農場は幾多の変遷を経て統合され、大学・短期大学部附属農場として現在に至っている。長い歴史の中で特に１９９９年から始まった文部科学省のハイテクリサーチセンター整備事業に伴う一連の施設・設備の開設により農場は大々的に刷新され、現在、耕地55ha、乳牛１５０頭を擁している。

農場の再編と牛舎の消失　１９７５(昭和50)年酪農学園中央農場の廃止に伴いキャンパス内の農場は大学と高校の附属農場に再編され、翌年大学農場の牛舎は増改築された旧中央農場第２牛舎へ移転した。しかし、１９７９(昭和54)年９月４日、実習中に第２牛舎２階の乾草収納庫より出火し成牛舎を焼失し教職員、学生ともども大きな衝撃を受けたが、幸いにも学生や乳牛に被害はなく、牛舎内の主要な備品も搬出することができた。この際、多くの学生や教職員が深夜まで献身的に消火後の作業を行った。また、高校生や同窓生・近郊酪農家からは乳牛の管理作業に多大の協力を得た。

１９８８(昭和63)年の合併に際して、農場内部においては、二つの牛舎の管理運営法、職員の勤務体制、学生・生徒の実習方法など多くの課題があった。また、大学内においても、農場は学校経営面からみるとコストがかかり、大学にとって農場の規模拡大には異論もあった。しかし農場の合併は、二つの牛舎を効率的に使うことで内容の濃い実習ができ、また、高校生が実習を通して多くの農場スタッフと接することによって教育効果を高めることになった。

農場教育　農場実習は、農場の日常の管理作業に合わせながら労働を中心に展開している。手鎌による草刈り、トウモロコシの手播きと手刈り収穫、ホー除草、乾草作業など学生にとっては苦痛な作業であるが、実習は、初歩的な作業を通して、酪農(農業)への興味・関心を深めることを目的にしており、実学教育の面からも手作業から入り、やがて作業精度を高めることが圃場作業の基本である。特に2群5類の大学改組に伴い、２０１１年から全入学生に農場実習が課せられることになり、ますます農場教育の重要性が増してきた。

農用地　合併による附属高等学校からの農地移管や道立食品加工センター用地の売却などにより、１９９１(平成3)年の附属農場用地は83・4haであったが、馬術部馬場移転により0・6haを学生部が使用することとなったため、総面積は82・8ha、キャンパス内の農地は法人事業部よりの借地7・7haを含めて56・3haであった。インテリジェント牛舎の建設用地は第2牛舎の運動場を活用したため、農地の減少を最低限にとどめた(見本圃0・7ha)。

施設・設備の整備　１９９０(平成2)年に第2牛舎の堆肥場と第2堆肥場を整備し、翌91年には附属農場教育研究棟が新築されたが、計画の一部は凍結された。また、乾草収納庫も整備した。

１９９３(平成５)年には第１牛舎尿溜を、翌94年に尿溜用電気整備をした。未完成のまま推移した教育研究棟は２０００年に未完成部分の追加工事がなされ完成した。

インテリジェント牛舎の建設　１９９９(平成11)年にはハイテク・リサーチ・センター事業により乳牛ふん尿循環研究センターを整備し、２０００(平成12)年当初からふん尿の嫌気発酵を開始し、バイオガスによる発電をするとともに附属農場の牛舎群を新築し、従来の第１牛舎と第２牛舎から引っ越しをした。

最新の機能を備えたインテリジェント牛舎が２０００(平成12)年11月完成し本格的に稼働した。この新システム牛舎は酪農学園大学・大学院および同短期大学部のハイテク・リサーチ・センター整備事業の一環として計画された主要施設である。

同事業では「酪農における情報と物質のリサイクルシステムの開発研究」というテーマの下に「酪農情報の管理と利用」「酪農における物質循環」「機能性食品」の３分野を研究するが、前２者がインテリジェント牛舎と関係している。

この新システムの牛舎群ならびに附属施設はフリーストール牛舎、育成舎、自動搾乳システム牛舎、哺育牛舎、貯蔵粗飼料研究センター(バンカーサイロおよび飼料調製室)、酪農機械実験・整備センター(格納庫)である。なお、これらの施設にはバイオガス発生発電装置、乳牛情報測定記録装置、搾乳ロボットシステムなどが収容されている。新牛舎システムは、従来の牛舎の機能にコンピュータで制御した高度な情報通信システムと牛舎管理システムを付加した牛舎であり、インテリジェント牛舎と呼ぶのにふさわしいところから名付けられた、いわゆる「ＩＴ牛舎」である。

搾乳室からの帰路には体重計があり、自動的に体重を測定し、健康や栄養状態の指標にもなる。牛舎内での運動量も自動計測し、発情発見の目安になる。もちろん、育種情報や発情や妊娠などの繁殖情報、病気や故障の治療法・治療歴などの電子カルテ、乳量・乳成分の変動などの生産情報、飼料や栄養状態の情報など、多彩な情報を管理するとともに学内ネットワークとも接続している。

自動搾乳システム牛舎では、自発的に搾乳ロボットにより搾乳されるので、上記の情報に加えて各牛の搾乳記録や種々のチェックリストなどが提供される。また、個体に応じた飼料給与やミルクの自動サンプリングなどもできる。

各牛舎で排泄されたふん尿はふん尿槽に集められ、地下パイプを通ってバイオガスプラントに送られる。バイオガスプラントでは、これを嫌気発酵して良質で無臭の液体有機肥料を生産するとともにバイオガスを回収し、発電機を運転して電気と80℃の温水を得ることができるようになっている。

歴代附属農場農場長

高松三守（１９６０～６１）　中曽根徳二（１９６２～６８）　森田　修（１９６９）
久米小十郎（１９７０～７１）　原田　勇（１９７２）　西埜　進（１９７３～７６）
横山節麿（１９７７～８４）　井上錦次（１９８５～８７）　原田　勇（１９８８～９０）
高橋清志（１９９１～９２）　堀内一男（１９９３～９６）　岡本全弘（１９９７～２００２）
菊池直哉（２００３～０６）　松中照夫（２００７～１１・６）
堂地　修（２０１１・７～１２）　小岩政照（２０１３～）

２　酪農学園大学附属図書館

本学における図書館の歴史は１９４９(昭和24)年７月、開設された酪農大学部に始まる。記録によると大学部が所蔵していた図書は６４７４冊(和書４１２２、洋書２３５２)となっているが、この中には、１９４２(昭和17)年、学園が設置した機農学校(高校)と共用のものも多く含まれていた。

１９５０年、酪農学園短期大学の設置によって大学部が吸収廃止されるに及び、この図書の一部は短期大学に引き継がれた。たまたま、「学校図書館法」の制定、施行により図書館の整備や図書の拡大が進められ、１９５５(昭和30)年、短期大学校舎内に２６８㎡の図書館を開設し、和洋書５３３８冊を収蔵した。１９６０年、酪農学園大学の設置によって同年９月、この図書館を大学校舎内に移し、大学、短大共用図書館として大学本館(現第Ａ１号館)３階に２９０㎡(事務室28、書庫１２２、閲覧室１４０)を施設し、図書１万６６０２冊を所蔵した。

その後、大学、短大の学科増設などによって学生数も２３００名と大幅に増加し、蔵書数も５万冊に達したため、１９７５(昭和50)年、大学院獣医学研究科修士課程の開設に伴い鉄筋コンクリート２階建を新築し、大学、短大附属図書館として９月１日、開設した(現学生サービスセンター)。

この図書館はその建築、設備など近代的なもので、総建坪９８２㎡(１階４２５、２階５５７)、閲覧室１９０席(３２２㎡)。書庫収蔵能力10万冊(２９６㎡)のほか、参考図書、新聞雑誌コーナー、事務室、館長室、会議室、情報管理から職員休憩室、ボイラー室などが完備されており、閲覧室からは広大な石狩平野が展望でき、また後方には野幌原始林を間近に見ることができるなど恵まれた環境にあった。

しかし、大学の発展に伴って機構の見直しや新学科の設置、ことに環境システム学部の開設によって施設の活用や見直しがされ、さらには蔵書数ならびに学生数が増加して狭くなり、新たな図書館の建設案が検討されてきた。１９９８(平成10)年の夏に学生ホール、ロビー、環境システム学部研究室、図書館を包括する10階建の中央館が完成して図書館は３～６階に移転した。これによって新図書館は従来のほぼ2倍の規模となり利便性が大きく向上した。

２０００(平成12)年秋には7階フロアにパソコンとその周辺機器およびインターネット環境を整備したオープンＰＣフロアを開設し、図書館内の情報メディア部門として、学生の利用が急増している。２００６(平成18)年には7階西側に隣接していた環境システム学部ＧＩＳルームの移設に伴い7階全フロアを図書館の管理とし、機器の更新・増設を行い、ネットワークサービスのさらなる拡充に努めた。２００３(平成15)年度から２０１０年度にかけては学内ネットワークの管理を図書館が担い、７階をサーバの設置場所とするとともに、２００５(平成17)年から新基幹ネットワークを稼働させ、全学生へのメールアドレス付与、セキュリティ対策としての認証制度導入などを行った。

２００１年秋には資料紛失を防止することにより不明本の数を減らし、利用者の信頼を高めること、および正確な入館者数を知ることを目的として、ブックディテクションシステム(ＢＤＳ：資料持ち出し防止装置)を導入した。

２００３(平成15)年には創立70周年記念事業として黒澤西蔵資料保存会が収集・保管していた明治期から昭和50年代後半までの資料が学校法人へ移設され、現在、図書館にて複製コレクションと書誌情報を公開している。また、２００４年には学生サービスセンター内にあった書庫をＢ１号館へ移転

した。可動式書架を導入し、従来の約1・5倍の収容能力を確保した。

大学紀要　高い学問水準を維持し、教員の学術、研究を促進するとともにその成果を発表するため、開学の翌１９６１(昭和36)年「酪農学園大学紀要」第1巻1号を創刊した。

その後１９６５(昭和40)年10月、酪農学園大学、同短大より選出された教職員によって「大学紀要委員会」が組織され、「大学紀要」の原稿選定、編集、刊行に当たってきたが、逐年、研究内容の充実によって寄稿者も次第に増加し、１９７４(昭和49)年より毎年１回発行を続けてきた。しかし、投稿論文数の増加や学科増に伴う研究分野の拡大により、１９７８(昭和53)年12月発行の第７巻２号をもって合冊形式を終了し、翌１９７９年10月発行の第８巻1号から「酪農学園大学紀要・人文社会科学編＝Journal of the College of Dairying. Cultural and science」と「酪農学園大学紀要・自然科学編＝Journal of the College of Dairying. Natural science」の分冊形式となった。

１９８８(昭和63)年10月発行の第13巻1号から「酪農学園大学紀要・人文社会科学編＝Journal of Rakuno Gakuen University. Cultural and Social Science」と「酪農学園大学紀要・自然科学編＝Journal of Rakuno Gakuen University. Natural Science」と名称を変更して、現在に至っている。

34巻1号(２００９年10月発行)から電子化を開始し、現在は本学の機関リポジトリ「酪農学園大学学術研究コレクション(CLOVER)」において初号から最新号までをインターネットで学内外に広く公開している。

なお、２０１２年４月発行の第36巻２号までの投稿論文数は総計１００９編でその他学位論文要旨も５３３編となっている。

現施設の概要（竣工　１９９８年４月１日）

延床面積合計（図書館書庫含む）５１８０・35㎡

３階（９６８・75㎡）：閲覧スペース、事務室、作業室、職員休憩室等

４階（９６８・75㎡）：閲覧スペース、物品庫

５階（９６８・75㎡）：閲覧スペース、製本室、製本準備室、物品庫

６階（９６８・75㎡）：閲覧スペース、ＡＶブース、ＡＶ編集室、文献検索コーナー、グループ学習室、館長室、事務室、作業室、物品庫

７階（９６８・75㎡）：パソコン利用フロア

図書館書庫（Ｂ１号館）３３６・60㎡（書庫１：１６８・00㎡／書庫２：１６８・60㎡）

歴代図書館館長

牛島純一（１９６０）

川村健弥（１９６７～68）

松井幸夫（１９７７～80）

小幡光正（１９８９～92）

山本克博（１９９７～２０００）

加藤清雄（２００７～11・６）

山下淳志郎（１９６１～64）

原田　勇（１９６９～70）

川上善三（１９８１～86）

青柳　剛（１９９３～94）

平賀武夫（２００１～02）

小山久一（２０１１・７～12）

高杉成道（１９６５～66）

牛島純一（１９７１～76）

平尾和義（１９８７～88）

岩井　浤（１９９５～96）

林　正信（２００３～06）

岩井　洋（２０１３～）

年次別大学紀要登載論文数

年 次	自然科学編	人文・社会科学編	合 計
1990 (平成元)	15	4	19
1991	10	5	15
1992	9	4	13
1993	9	15	24
1994	16	8	24
1995 (平成７)	19	22	41
1996	19	21	40
1997	24	13	37
1998	11	17	28
1999	17	13	30
2000 (平成12)	21	20	41
2001	20	10	30
2002	18	7	25
2003	12	11	23
2004	15	6	21
2005 (平成17)	17	14	31
2006	17	11	28
2007	16	11	27
2008	21	10	31
2009	16	15	31
2010 (平成22)	19	12	31
2011	25	10	35
2012	17	5	22
		合計	1,010

年 次	自然科学編	人文・社会科学編	合 計
1961 (昭和36)	14		14
1962	6		6
1964	6		6
1965	9		9
1967	2		2
1970 (昭和45)	8		8
1971	5		5
1972	5		5
1973	6		6
1974	7		7
1975 (昭和50)	9		9
1976	11		11
1977	15		15
1978	10		10
1979	11	4	15
1980 (昭和55)	14	5	19
1981	14	7	21
1982	17	6	23
1983	22	8	30
1984	14	5	19
1985 (昭和60)	19	5	24
1986	21	7	28
1987	18	6	24
1988	24	4	28
1989	15	4	19

※1979年より自然科学編と人文・社会科学編の分冊形式となった。
※1961～2012年までの発刊巻数は両編とも37巻。
※学位論文要旨の件数は割愛（1961～2012年の発表数は533編）

図書館統計

	1977 (昭和52)	1980 (昭和55)	1985 (昭和60)	1990 (平成2)	1995 (平成7)	2000 (平成12)	2005 (平成17)
奉仕対象者（学生・他）	2,577	2,687	2,824	3,240	4,189	4,486	4,466
職員数＊	8	10	11	12	13	16	9
専任	8	8	8	9	8	8	9
臨時・契約	0	2	3	3	5	8	0
蔵書冊数	69,000	85,000	128,681	179,080	222,866	270,477	310,865
雑誌	1,118	1,510	1,693	2,367	2,685	3,037	3,091
和雑誌	862	1,134	1,282	1,823	2,146	2,483	2,557
洋雑誌	256	376	411	544	539	554	534
年間開館日数	270	283	247	269	273	284	289
入館者数			51,460	66,162	88,421	163,362	204,021
利用（貸出）者数	3,459	3,015	3,856	5,900	7,974	9,921	13,801
利用（貸出）冊数	5,000	5,000	7,254	11,154	15,246	18,813	29,065
相互利用件数	349	684	2,215	1,971	4,376	5,796	4,045
依頼	323	583	1,832	1,634	2,696	2,910	2,658
受付	26	101	383	337	1,680	2,886	1,387

	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)	2011 (平成23)
奉仕対象者（学生・他）	4,328	4,235	4,066	3,963	4,339	4,249
職員数＊	9	9	8	20	18	17
専任	9	9	8	5	4	4
臨時・契約	0	0	0	15	14	13
蔵書冊数	316,618	319,376	322,316	327,374	332,766	338,121
雑誌	2,996	2,807	2,682	2,586	2,387	2,080
和雑誌	2,520	2,411	2,294	2,206	2,048	1,765
洋雑誌	476	396	388	380	339	315
年間開館日数	288	290	290	289	290	289
入館者数	225,181	208,335	213,764	215,953	200,997	174,009
利用（貸出）者数	13,921	12,330	12,080	11,146	10,123	9,866
利用（貸出）冊数	29,538	26,075	25,419	23,516	21,270	21,075
相互利用件数	3,763	3,304	2,983	2,866	2,570	2,561
依頼	2,374	2,057	1,759	1,772	1,434	1,712
受付	1,389	1,247	1,224	1,094	1,136	849

＊職員数に業務委託者は含めない。

３　酪農学園大学附属動物（家畜）病院

大学では獣医学科の設置に伴い、その臨床実験、実習のために１９６８（昭和43）年12月に大学附属家畜病院を開設した。この病院は病畜舎を含めて３５７㎡の木造２階建で、この中に臨床２講座を設けて臨床教育を行ってきたが、その対象はもっぱら学園内で飼養している家畜、家禽に置いていた。

その後、年々、獣医学の高度化、獣医技術の改革が進む中で、学園周辺も急速に都市化して、犬、猫などペットの診療数も増加し、臨床獣医学の分野が大幅に変化してきた。大学ではこれに対応して１９７５（昭和50）年９月に獣医学科第１校舎鉄筋コンクリート３階建の中に、診療治療室６９８㎡を併置し、旧病棟を合わせ１０５５㎡の病院となった。

当時、家畜内科、家畜外科、臨床繁殖の３診療科を置いて増え続ける診療頭数に対応していたが、その後内科第１、内科第２、外科第１、外科第２、臨床繁殖、病理の６診療科になった。

１９９２（平成４）年８月に大動物の入院および実習施設として大動物臨床センターが開設された。大動物臨床センターは、１４１７㎡の平屋で、畜舎部分がホールを境にして診療室、実習室、手術室と隣接しており、人と動物の動きを最小限にして診療と実習の効率化が図られ、獣医学科の設置趣旨である酪農産業に広く貢献できる獣医師を養成するために、大動物をできるだけ多数利用する実学教育に十分対応できるようになった。

しかし近年、動物医療、臨床教育ならびに学術研究の面で多様化が進み、獣医医療の高度化と卒後教育、普及活動が求められるようになったことから、一層の充実を図るために、附属動物病院が新築

され、２００４(平成16)年４月から稼働した。

附属動物病院は、国内の大学附属動物病院としては最大規模の教育研究施設であり、生産動物医療部門、伴侶動物医療部門、環境汚染物質・感染病原体分析監視センター、野生動物医学センターで構成され、建物総面積は８７２８㎡である。

生産動物医療部門は、往診準備室、牛診察室、胚移植操作室、牛手術室、馬麻酔導入覚醒室、馬手術室、共通検査室、細菌培養室の診療区域と、独立した実習牛繋留飼養棟、入院牛馬の繋留棟、感染動物管理棟を配置し、広い実習室を備えている。環境汚染防止のため糞は炭化プラントで炭化し、尿や洗浄水は膜濾過後殺菌して下水に放流する。ＢＳＥ(牛海綿状脳症)に対応できる１２００℃の焼却設備と検査室もある。

伴侶動物医療部門は、内視鏡検査室、超音波検査室、Ｘ線検査室、ＣＴ検査室、ＭＲＩ検査室を整備している。眼科、整形、軟部外科の手術室、陽圧手術室は、学生の診療参加型実習への活用を考えて広く造られている。学外臨床獣医師との連携や市民との交流促進のためのスペースも用意している。

環境汚染物質・感染病原体分析監視センターは、北海道における環境汚染物質の動物、農作物への移行を監視し、その無毒化、毒性低減化を図るための技術開発、及び、家畜の感染症流行の予報や治療、予防を含めた防疫システムの開発を行う施設。文部科学省の先端研究拠点への補助金により設置された。

野生動物医学センターは、野生動物の動物感染症病原体・寄生体と環境汚染物質検出を行う施設。入院・サンプリング室と分析室を備え、サンプリング、救護個体の検疫・飼育などを行う。文部科学

省の先端研究拠点への補助金により設置された。

現在、全国に16ある獣医科大学動物病院の中で、生産動物の診療頭数は２０００年以降、本学が毎年全国第１位である。２００９年度の診療頭数（２０１０年１月末現在）において、牛の診療頭数７７３０頭は、第２位の帯広畜産大学１７０１頭を大きく引き離している。また、伴侶動物の診療頭数は、日大、麻布大、東大に続いて、本学は第４位である。このように全国で上位の診療頭数であることが貴重な教材となって臨床獣医学の教育・研究に貢献しており実学に基づいた特色のある獣医活動を続けている。

歴代附属動物病院長

沼田芳明（１９７１～72）　河田啓一郎（１９８０、１９８３～84、１９８９～90）
其田三夫（１９８１～82、１９８５～86）　新山雅美（１９８７～88、２００１～４）
大友勘十郎（１９９１～94）　中尾敏彦（１９９５～96）　小谷忠生（１９９７～２０００）
廉澤　剛（２００５～８）　泉澤康晴（２００９～12）　中出哲也（２０１３～）

年度別の診療頭数

(単位：頭数)

年度	馬	牛	豚	緬山羊	犬	猫	その他	診療総頭数
1976 (昭和51)	81	457	172	10	285	181	3	1,189
1992 (平成４)	25	456	1	1	2,809	970	49	4,311
1993 (同 5)	19	1,160	2	7	2,412	810	32	4,442
1994 (同 6)	20	2,348	8	6	2,674	739	112	5,907
1995 (同 7)	26	2,819	27	12	2,806	677	69	6,436
1996 (同 8)	18	4,063	17	4	4,213	948	106	9,369
1997 (同 9)	116	5,216	823	0	5,520	1,001	85	12,761
1998 (同 10)	61	5,813	846	0	5,545	874	122	13,261
1999 (同 11)	58	7,044	921	0	6,315	963	148	15,449
2000 (同 12)	84	8,745	1,191	0	6,435	680	143	17,278
2001 (同 13)	248	5,782	1,233	0	6,989	896	90	15,238
2002 (同 14)	70	4,215	816	0	7,946	678	192	13,917
2003 (同 15)	84	5,992	654	93	7,152	760	54	14,789
2004 (同 16)	84	5,556	266	29	10,626	1,031	77	17,669
2005 (同 17)	87	6,633	1,214	58	11,522	1,260	169	20,943
2006 (同 18)	92	5,736	16	24	10,712	1,283	140	18,003
2007 (同 19)	120	6,751	41	16	10,745	1,214	133	19,020
2008 (同 20)	93	9,124	7	267	9,584	705	36	19,816
2009 (同 21)	25	8,926	3	2	9,906	925	36	19,823
2010 (同 22)	50	8,532	2	8	10,884	1,023	7	20,506
2011 (同 23)	140	9,660	10	5	12,098	1,480	10	23,403
2012 (同 24)	59	12,580	11	5	10,540	1,293	22	24,510

４ 酪農学園大学エクステンションセンター

高度情報化社会、国際化、生涯学習の進展、ハイテクノロジーなど、大きく変貌を遂げつつある社会への学園としての対応策については、学園理事会、大学・短大合同教授会などの諸機関において精力的に検討が進められてきたが、これらに対する機能を総合的に推進するものとして、１９８９(平成1)年４月 酪農学園大学エクステンションセンターが正式に設置された。

当センターの主な業務は、１普及・出版、２生涯学習、３国際交流、４研究・研修活動 の４本柱となっているが、特に普及・出版については、旧短期大学酪農学校においておよそ40年の歴史を有する月刊誌「近代酪農」(「酪農ジャーナル」に改題)の編集・出版業務を引き継ぎ、重要な事業部門を形成することにあった。

具体的には、①国際的視野に立って酪農に関する情報を提供する月刊誌「酪農ジャーナル」をはじめとする農業関係書籍の出版、②市民教養講座・酪農公開講座などの公開講座の開催、③学術交流協定に基づく協定締結校との交流事業の３点であったが、１９９３(平成5)年から新たに④委託研究などの受託窓口業務が加わり、いわゆる４本柱の下、業務を推進してきた。

このことがその後の当センターの業務増、質の多様化に伴って、機構の再編・見直しのベースとなって「編集・出版部門」「生涯学習部門」「国際交流部門」「研究支援部門」の４部門となって、ここ20年余間業務が定着した。しかし２０１１年、学園の大巾な機構改革に伴って、当センターの４部門の内、編集・出版部門と生涯学習部門が統合されて「生涯学習課」となり、また国際対応から「国際交流」

も部門から課制を取り入れた。さらに、研究支援部門は学務部所管の「研究支援課」へと編入された。この機構改革によって、エクステンションセンターの業務は「生涯学習課」と「国際交流課」の２課３部門体制となって現在に至っている。

しかし、ここでは、当センター開設時の歴史的経緯から機構改革直前の４部門制を軸に記述する。

生涯学習課（普及・出版）　「酪農ジャーナル」本誌が１９９７（平成９）年に創刊50周年、２００７年に60周年を迎え、大学が出版する普及刊行物として全国的にも例を見ない歴史と伝統を有している。その内容も国際的視野に立った酪農に関するものばかりでなく、食の安全、環境問題など農・食・環境・生命を視野に入れるなど多岐にわたっている。別冊（臨時増刊号）として「くらしのサイエンス」、「酪農経営日誌」などを毎年提供してきたが、本学の命題である環境問題・食の安全性などを広く扱ってきた「くらしのサイエンス」は業務見直しに伴い、25号をもって１９９９（平成11）年で休刊となった。

他の別冊としては、「酪農ジャーナル」創刊45周年を記念して全国的に注目された「黄金の土」を１９９２（平成４）年に復刻・出版し、１９９７（平成９）年には創刊50周年を記念した「日本酪農の歩み」を出版したほか、近年では「乳牛群の健康管理のため環境モニタリング」（２０１１）、「最新サイレージバイブル（２０１２）など、本学教員が執筆する教科書や学術研究図書の発行も随時行っている。

生涯学習部門（公開講座）　一般市民向けとして１９８９（平成１）年から始まった恵庭市民教養講座に加え、新たに野幌公民館を会場とする江別市民教養講座を１９９０（平成２）年から開講し、毎回多くの市民が受講していた。

また、１９９４（平成６）年からは石狩町（市）民公開講座など周辺地域の一般市民など対象にした

各種講座を実施してきた。その間、道新文化センターとの提携で、１９９４(平成６)年から５年間、講座を開講した。さらには道新提携講座を発展させた「わんわん学校」を１９９７(平成９)年から開講した。酪農関係者向けに開講される酪農公開講座は、２０１２(平成24)年で第44回を迎え、日本各地で、地元の生産者団体・酪農学園の同窓生の協賛により、多くの受講者を集めて開催されている(表２)。

１９８９年のエクステンションセンター設置以来、周辺地域の一般市民、本学卒業生などを対象にしたさまざまな生涯学習講座を実施してきた。具体的には、酪農学園オープンアカデミー(①専門講座として酪農公開講座・大動物臨床教育セミナー、②市民公開講座として酪農学園大学市民公開講座、③酪農学園大学公開講座など)のほか、提携講座(地域自治体との共催講座)や協力講座(元気!ミルク大学、ふるさと江別塾、えべつものづくりフェスタ)、酪農学園資格講座(英会話講座)などである。これらの講座には毎年１０００人を超える受講者を数え、高齢化社会における生涯学習として着実に定着してきた感がある。

また、地域総合交流事業にも取り組んでおり、２００５年度から毎年数件の交流協定を締結しており、さまざまな交流事業を展開している。このことは地域交流事業への大学の積極的な関わりの表れともいえる。

国際交流(国際交流)　２０１３年４月現在、16カ国33機関との間で、学術交流協定を締結し、研究協力、学生交流、学術出版物の交換などを行っている。

２００４年より外国人招聘研究者制度を整備し、協定機関からの研究者受入の活性化を目指している。２０１０年からは、在籍する留学生、海外留学を経験した日本人学生の体験談を学内で紹介する

「World Report」を開始した。２０１１年にはエクステンションセンター内に国際交流課が新設され、留学生受入業務が学生課から移管され、２０１２年からは3名体制となり、国際交流をサポートする体制が強化されつつある。同年には、中国・新疆農業大学内に酪農学園大学同窓会が設置されるなど、継続してきた人的交流の成果がネットワークとして機能しつつある。

２０１３年には、40周年を迎えた長い歴史を有するアルバータ科学技術交流協会事務局の業務も担いつつ、ロシア、ケニア、マレーシアなど、新しいパートナー機関との協力関係の構築にも取り組んできた。また、国際協力機構（ＪＩＣＡ）との連携では、従来のから実施してきた集団研修コース運営に係る受託業務、青年海外協力隊の募集説明会の開催に加え、草の根技術協力事業を通じた、マレーシアにおける環境保全活動のための事業提案が２０１２年度事業として採択され、複数年での現地活動を実施することになった。

研究支援部門（委託研究・委託研修）　前述したように研究支援部門は、現在学務部研究支援課の所管となって業務が遂行されているが、開設時からの経緯もあるので本項に記しておく。国および社会から産学官連携や知的財産への対応が求められて久しい。近年は競争的資金などの公的資金による研究への応募申請や受託対応の業務が増加しており、同部門の業務量は急増している。産学官連携が時代の要請として強く求められている。

研究成果の活用による社会貢献の推進や地域の要請に応える趣旨から、さらなる産学官の連携強化が求められている。事業としては、①共同研究・受託研究の推進、②知的資産の活用と知財管理、

③産学官連携事業の推進―などが挙げられる。

科学研究費を含めた競争的資金については毎年、増加傾向にあり、外部資金の重要な位置付けを占めつつある。受託研究・共同研究についても産学官連携の推進により、今後は大学に求められる専門知識の需要はさらに進んでいくと予測される。

受託研究・共同研究は年々増加しており、２００９年度の件数は64件、約２億円弱の契約金額となっている。また、地域総合交流事業も年々増加して、２００７年から毎年４～５件にわたる交流協定が締結されている。

歴代エクステンションセンター所長

平尾和義（１９８９～90）　平棟孝志（１９９１～92）　中原准一（１９９３～94）
横山節麿（１９９５～96）　堀内一男（１９９７～２０００）　永幡　肇（２００１～２）
松中照夫（２００３～６）　干場信司（２００７～８）　鈴木忠敏（２００９～10）
佐々木　均（２０１１～）

出版物一覧

年　度	出版物書名	備　　考
1990	90年代の日本酪農	
1992 （平成４）	黄金の土（復刻版）	「酪農ジャーナル」創刊45周年
1993	日本型酪農のデザイン	
1995	マニュアマニュアル'96	
1996	21世紀への酪農新技術	
1997	日本酪農歩み	「酪農ジャーナル」創刊50周年
2000	21世紀へのマニュア・テクノロジー	
2001	乳牛の生産病と対策	
2002	バイオガスシステムによる家畜ふん尿の有効活用	「酪農ジャーナル」創刊55周年
2003	酪農家のための土づくり講座	
2004	乳牛の受胎率向上戦略	
2005	たくましい乳牛に仕上げる育成の科学と技術	
2006	酪農バイオガスシステムの社会的・経済的評価	
2007	精鋭牛群へのロードマップ	「酪農ジャーナル」創刊60周年
2008	飼料自給・最前線	
	酪農語録＝北海道酪農を築いた人びと＝	
2009	新時代の乳牛改良	
2010	循環型酪農へのアプローチ	
2011	乳牛群の健康管理のための環境モニタリング	
2012	最新サイレージバイブル―サイレージとTMRの調製と給与	「酪農ジャーナル」創刊65周年

酪農公開講座開催一覧

場　　所	開催年月日	主　　題	派遣講師	参加者
第１回 中標津町	1970.12.21~22	公開講座	7	50
第２回 稚内市	1971.11.29~30	〃	6	112
第３回 釧路市	1972.11.20~21	〃	6	36
第４回 帯広市	1974.５.８~９	〃	4	90
第５回 長万部町	1975.２.５~６	〃	4	143
第６回 紋別・北見市	1976.１.27~28	〃	5	260
第７回 網走市	1976.11.29	転換期の農業経営問題	4	210
第８回 中頓別町	1977.10.12	酪農経営の基本に立ち返って	6	211
第９回 猿払村	1978.10.26	宗谷酪農の発展方向をさぐる	4	160
第10回 興部町	1979.12.５	西紋西部地区酪農の将来をさぐる	3	100
第11回 千歳市	1980.12.20	土・草・牛を健やかに	3	137
第12回 標茶町	1981.12.25	酪農経営の基本課題	3	120
第13回 大樹町	1982.12.18	酪農経営の試練と対応	4	140
第14回 中標津町	1983.12.６	酪農経営の体質強化をめざして	3	120
第15回 札幌市	1984.９.１	北の国から	3	740
第16回 滝上町	1985.11.30	西紋酪農における技術戦略と展開	3	200
札幌市	1985.10.５	【短期大学特別公開講座】北の風土と人間	3	100
第17回 鹿児島市	1986.11.26	九州における酪農経営の技術展開	3	150
福岡市	1986.11.28		3	200
第18回 瀬棚町	1987.11.25	健土健民	4	100
第19回 別海町	1988.６.７~８	健土健民	6	137
第20回 東藻琴村	1989.11.27	自由化における農村経済基盤を考える	4	160
第21回 浜中町	1990.10.６	浜中町における産業振興の展望	4	139
第22回 江別市	1991.11.29	21世紀の農業人への手紙	4	476
第23回 歌登町	1992.11.11	持続的酪農経営への展望	4	204
千葉市	1993.３.９	【千葉県酪農公開講座】21世紀への酪農デザイン	2	250
第24回 山形県米沢市	1993.11.24	21世紀への酪農デザイン	4	252
岩手県葛巻町	1993.11.26		4	170
第25回 広島県三次市	1994.11.22	日本酪農21世紀へのステップ	3	150
岡山県美咲町	1994.11.24		3	90

酪農公開講座開催一覧（つづき）

場　　所	開催年月日	主　　題	派遣講師	参加者
第26回 愛媛県野村町	1995.11.14	酪農新時代への招待	3	240
徳島県土成町	1995.11.16		3	110
第27回 長野県安雲野市	1996.11.26	酪農新時代へのパスポート	3	100
群馬県前橋市	1996.11.28		3	180
第28回 青森県東北町	1997.11.11	21世紀に向けたミルクづくり	3	83
秋田県大館市	1997.11.12		3	80
第29回 宮崎県宮崎市	1998.11.18	21世紀に向けての持続的酪農経営	3	113
熊本県菊池市	1998.11.20		3	68
第30回 宮城県大和町	1999.12.８	21世紀酪農の将来展望をさぐる	3	187
福島県郡山市	1999.12.10		3	101
第31回 岐阜県岐阜市	2000.11.28	乳牛における微生物の功罪	3	107
愛知県幸田町	2000.11.29		3	140
第32回 帯広市	2001.10.25		2	46
中標津町	2001.10.26		2	94
第33回 鹿児島県栗野町	2002.11.27		2	153
福岡県久留米市	2002.11.29		2	63
第34回 京都府南丹市	2003.８.27		2	70
石川県松任市	2003.11.26		2	72
石川県輪島市	2003.11.27		2	51
第35回 鳥取県琴浦市	2004.11.24		2	49
島根県出雲市	2004.11.25			86
第36回 東京都新宿区	2005.７.14	食の安全安心をどう確保するか	2	90
第37回 兵庫県南あわじ市	2006.９.８		2	70
第38回 三重県津市	2007.８.21	ミルクと酪農の真実と未来	2	152
第39回 岩手県滝沢村	2008.12.２	飼料価格高騰時代の酪農を考える	2	102
岩手県奥州市	2008.12.３			103
第40回 沖縄県豊見城市	2009.12.16	牛乳の恵みを科学する	2	213
第41回 北海道釧路市	2010.９.25	口蹄疫を乗り越え、牛乳の消費拡大をはかろう	3	70
第42回 北海道安平町	2011.９.４	牛の見方、飼い方、結び方	3	139
第43回 北海道幌延町	2012.10.20	牛の健康管理について	3	80
第44回 栃木県那須塩原市	2012.11.16	震災から学ぶ、震災後の酪農	2	136

学術交流協定締結先一覧（2013.４月現在）

学　校　名	国　名	締結年月日
アルバータ大学	カ　ナ　ダ	1985. ８. 1
オールズカレッジ	カ　ナ　ダ	1985. 10. 1
内蒙古農業大学	中　　国	1988. ８. ９
オハイオ州立大学　獣医学部	ア メ リ カ	1988. 11. 17
コーネル大学　畜産学部	ア メ リ カ	1991. ６. ３
ワルシャワ農業大学	ポーランド	1994. ５. 19
国立韓京大学校	韓　　国	1994. 10. 14
デンマーク農業科学研究所	デンマーク	1995. ２. 15
新疆農業大学	中　　国	1997. ７. 31
国立嘉義大学	台　　湾	1997. 11. 30
国立屏東科技大学	台　　湾	1998. ８. 31
オハイオ州立大学農業短期大学部	ア メ リ カ	1998. 12. 17
ハノーバー獣医科大学	ド　イ　ツ	2001. １. 22
韓国食品開発研究院	韓　　国	2001. 10. 31
東フィリピン大学　獣医学部	フィリピン	2002. ２. ４
内蒙古民族大学	中　　国	2002. ２. 16
フィンドレー大学	ア メ リ カ	2005. ４. 11
コペンハーゲン大学　生命科学部	デンマーク	2005. ６. 21
モンタナ州立大学	ア メ リ カ	2006. ５. 11
サスカチュワン大学	カ　ナ　ダ	2006. ７. 24
国立中興大学	台　　湾	2007. ８. 15
サムヒギンボトム農業科学技術大学	イ　ン　ド	2007. 10. 25
国立慶尚大学校	韓　　国	2008. ２. 15
モンゴル国立農業大学	モ ン ゴ ル	2009. ３. 23
国立韓国農水産大学	韓　　国	2009. 12. 15
国立バイオセンター	カザフスタン	2009. 12. 25
アルファラビカザフスタン国立大学	カザフスタン	2009. 12. 26
アスンシオンカトリック大学	パラグアイ	2011. ２. 22
サバ大学	マレーシア	2011. ８. 24
陝西省動物研究所	中　　国	2012. １. 20
国際家畜研究所	ケ　ニ　ア	2012. ２. 17
フスタイ国立公園	モ ン ゴ ル	2012. ８. 18
スイス科学研究所	コートジボワール	2013. ４. 18

〈付〉学生数の推移（各年度５月１日現在）

酪農学部　酪農学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1960（昭和35）	100	265	180	180	－
1961（ 同 36）	100	444	180	351	－
1962（ 同 37）	100	405	176	525	－
1963（ 同 38）	100	331	167	691	168
1964（ 同 39）	100	361	161	688	161
1965（ 同 40）	100	367	190	708	146
1966（ 同 41）	160	376	194	720	167
1967（ 同 42）	160	442	194	735	127
1968（ 同 43）	160	451	180	767	172
1969（ 同 44）	160	489	204	794	175
1970（ 同 45）	160	407	180	762	164
1971（ 同 46）	160	369	183	763	164
1972（ 同 47）	160	288	196	779	156
1973（ 同 48）	160	224	219	835	184
1974（ 同 49）	160	283	206	850	175
1975（ 同 50）	160	361	218	876	174
1976（ 同 51）	160	610	224	917	205
1977（ 同 52）	160	755	210	917	194
1978（ 同 53）	160	1,099	207	913	220
1979（ 同 54）	160	667	216	894	210
1980（ 同 55）	160	525	206	874	213
1981（ 同 56）	160	519	223	866	197
1982（ 同 57）	160	539	218	877	215
1983（ 同 58）	160	470	233	886	193
1984（ 同 59）	160	406	208	889	183
1985（ 同 60）	160	542	212	910	211
1986（ 同 61）	160	811	226	915	228
1987（ 同 62）	160	857	225	918	203
1988（ 同 63）	160	779	192	894	209
1989（平成 1）	160	679	192	884	227
1990（ 同 2）	160	856	164	815	231
1991（ 同 3）	160	935	205	799	191
1992（ 同 4）	180	1,080	193	814	190
1993（ 同 5）	180	1,083	194	829	185
1994（ 同 6）	180	1,059	170	828	219
1995（ 同 7）	165	1,010	175	797	199

酪農学部　酪農学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1996(平成 8)	165	1,663	171	785	210
1997(同 9)	165	1,439	169	767	184
1998(同 10)	165	1,128	171	775	182
1999(同 11)	165	842	206	822	207
2000(同 12)	155	951	170	785	188
2001(同 13)	155	789	170	759	191
2002(同 14)	155	673	184	753	206
2003(同 15)	155	698	173	725	163
2004(同 16)	155	604	173	734	183
2005(同 17)	155	533	170	729	173
2006(同 18)	155	452	179	735	185
2007(同 19)	165	440	192	739	175
2008(同 20)	165	402	168	727	173
2009(同 21)	165	406	171	713	173
2010(同 22)	165	466	177	710	174
2011(同 23)	0	0	0	523	161
2012(同 24)	0	0	0	343	136
2013(同 25)	0	0	0	188	−

酪農学部　農業経済学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1963(昭和 38)	100	134	126	136	−
1964(同 39)	100	81	72	225	22
1965(同 40)	100	119	90	295	33
1966(同 41)	100	190	128	384	78
1967(同 42)	100	164	126	413	58
1968(同 43)	100	245	133	469	66
1969(同 44)	100	202	146	525	92
1970(同 45)	100	169	128	525	90
1971(同 46)	100	161	119	514	100
1972(同 47)	100	138	109	496	121
1973(同 48)	100	77	135	477	88
1974(同 49)	100	104	131	501	106
1975(同 50)	100	164	157	535	65

酪農学部　農業経済学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1976(昭和51)	100	265	131	568	127
1977(同 52)	100	312	144	560	108
1978(同 53)	100	417	160	584	122
1979(同 54)	100	330	144	587	113
1980(同 55)	100	312	144	599	140
1981(同 56)	100	294	126	561	141
1982(同 57)	100	309	140	542	124
1983(同 58)	100	280	142	537	111
1984(同 59)	100	260	140	549	109
1985(同 60)	100	295	146	569	124
1986(同 61)	100	353	147	567	109
1987(同 62)	100	351	136	576	134
1988(同 63)	100	360	138	567	124
1989(平成 1)	100	514	141	576	124
1990(同 2)	100	655	128	564	126
1991(同 3)	100	823	158	577	128
1992(同 4)	150	960	156	603	141
1993(同 5)	150	903	155	614	117
1994(同 6)	150	847	139	641	152
1995(同 7)	130	623	140	628	154
1996(同 8)	130	630	137	606	146
1997(同 9)	130	486	141	588	136
1998(同 10)	130	417	141	585	116
1999(同 11)	130	246	137	587	136
2000(同 12)	110	239	146	581	121
2001(同 13)	110	240	138	575	134
2002(同 14)	110	209	127	550	122
2003(同 15)	110	221	134	537	132
2004(同 16)	110	216	118	503	113
2005(同 17)	110	188	115	486	108
2006(同 18)	110	162	91	447	111
2007(同 19)	100	139	98	410	110
2008(同 20)	100	113	71	350	83
2009(同 21)	100	134	83	330	76
2010(同 22)	100	107	57	296	69
2011(同 23)	0	0	0	208	63
2012(同 24)	0	0	0	138	71
2013(同 25)	0	0	0	63	−

酪農学部　食品科学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1988(昭和 63)		492	103	103	−
1989(平成 1)	80	649	97	201	−
1990(同 2)	80	581	95	297	−
1991(同 3)	80	745	120	419	92
1992(同 4)	120	793	129	454	93
1993(同 5)	120	792	120	485	100
1994(同 6)	120	906	124	513	117
1995(同 7)	105	835	118	515	133
1996(同 8)	105	1,000	110	492	121
1997(同 9)	105	829	110	499	120
1998(同 10)	105	610	113	506	120
1999(同 11)	105	391	112	509	128
2000(同 12)	90	435	113	497	126

酪農学部　食品科学科　食品科学専攻

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2001(平成 13)	50	277	87	456	141
2002(同 14)	50	267	70	384	101
2003(同 15)	50	244	70	349	111
2004(同 16)	50	237	73	313	89
2005(同 17)	50	165	65	290	73
2006(同 18)	50	165	64	281	70
2007(同 19)	50	163	65	276	73
2008(同 20)	50	122	58	263	66
2009(同 21)	50	121	55	251	63
2010(同 22)	50	157	64	248	61
2011(同 23)	0	0	0	186	54
2012(同 24)	0	0	0	129	55
2013(同 25)	0	0	0	71	−

酪農学部　食品科学科　健康栄養学専攻

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2001(平成 13)	40	61	22	22	−
2002(同 14)	40	200	41	63	−
2003(同 15)	40	147	41	112	0
2004(同 16)	40	166	41	154	30
2005(同 17)	40	147	41	166	41
2006(同 18)	40	125	47	170	40
2007(同 19)	40	145	50	179	39
2008(同 20)	40	112	40	172	39
2009(同 21)	40	122	41	168	37
2010(同 22)	40	185	45	171	44
2011(同 23)	0	0	0	127	36
2012(同 24)	0	0	0	87	37
2013(同 25)	0	0	0	42	−

酪農学部　食品流通学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1994(平成 6)	80	438	100	100	−
1995(同 7)	80	679	92	197	−
1996(同 8)	80	741	96	303	−
1997(同 9)	80	440	93	399	93
1998(同 10)	80	325	90	392	100
1999(同 11)	80	151	89	374	102
2000(同 12)	70	205	89	349	80
2001(同 13)	70	164	107	358	77
2002(同 14)	70	127	83	356	79
2003(同 15)	70	157	100	358	77
2004(同 16)	70	138	81	347	88
2005(同 17)	70	122	75	324	71
2006(同 18)	70	88	55	296	84
2007(同 19)	70	111	74	268	68
2008(同 20)	70	100	71	258	56
2009(同 21)	70	102	80	273	48
2010(同 22)	70	124	85	298	60
2011(同 23)	0	0	0	229	67

酪農学部　食品流通学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2012(平成 24)	0	0	0	153	56
2013(同 25)	0	0	0	88	−

獣医学部　獣医学科

(注)　1996年度から学部改組により、獣医学部獣医学科となる

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1964(昭和 39)	40	72	47	47	−
1965(同 40)	40	100	63	111	−
1966(同 41)	40	156	66	173	−
1967(同 42)	40	288	71	247	38
1968(同 43)	40	393	68	270	41
1969(同 44)	40	460	74	293	61
1970(同 45)	40	597	68	295	75
1971(同 46)	40	530	64	279	66
1972(同 47)	40	615	70	284	58
1973(同 48)	40	800	88	301	68
1974(同 49)	40	1,008	74	306	61
1975(同 50)	120	1,430	147	391	65
1976(同 51)	120	1,898	142	467	92
1977(同 52)	120	2,061	141	508	71
1978(同 53)	120	2,790	144	574	137
1979(同 54)	120	1,915	145	586	140
1980(同 55)	120	1,386	142	585	148
1981(同 56)	120	1,090	153	592	136
1982(同 57)	120	1,039	141	599	147
1983(同 58)	120	1,058	155	606	137
1984(同 59)	120	1,223	142	610	155
1985(同 60)	120	1,215	141	593	143
1986(同 61)	120	1,145	140	587	152
1987(同 62)	120	1,210	151	582	−
1988(同 63)	120	1,337	141	722	−
1989(平成 1)	120	1,379	140	856	134
1990(同 2)	120	1,713	144	868	141
1991(同 3)	120	2,305	144	867	143

獣医学部　獣医学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1992(平成 4)	120	2,599	149	874	143
1993(同 5)	120	3,053	143	875	139
1994(同 6)	120	2,921	147	880	125
1995(同 7)	120	2,964	151	909	141
1996(同 8)	120	3,557	140	907	149
1997(同 9)	120	3,623	141	899	145
1998(同 10)	120	4,253	137	895	142
1999(同 11)	120	3,519	137	887	151
2000(同 12)	120	3,243	137	876	136
2001(同 13)	120	3,376	141	883	147
2002(同 14)	120	3,550	135	864	132
2003(同 15)	120	3,331	140	874	151
2004(同 16)	120	3,599	140	859	138
2005(同 17)	120	3,556	138	863	137
2006(同 18)	120	2,783	136	861	147
2007(同 19)	120	2,576	138	848	136
2008(同 20)	120	2,057	138	851	139
2009(同 21)	120	1,868	140	847	139
2010(同 22)	120	1,657	135	843	131
2011(同 23)	0	0	0	709	141
2012(同 24)	0	0	0	564	141
2013(同 25)	0	0	0	420	−

環境システム学部　経営環境学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1998(平成 10)	140	334	150	150	−
1999(同 11)	140	324	156	302	−
2000(同 12)	140	324	162	457	−
2001(同 13)	140	286	180	623	126
2002(同 14)	140	254	148	622	124
2003(同 15)	140	256	162	629	148
2004(同 16)	140	228	143	586	142
2005(同 17)	0	0	0	407	121
2006(同 18)	0	0	0	263	110

環境システム学部　経営環境学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2007(平成 19)	0	0	0	145	109
2008(同 20)	0	0	0	29	13
2009(同 21)	0	0	0	10	2
2010(同 22)	7月12日廃止				

環境システム学部　環境マネジメント学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2005(平成 17)	80	144	86	86	0
2006(同 18)	80	110	59	137	0
2007(同 19)	80	79	37	166	0
2008(同 20)	80	58	29	176	57
2009(同 21)	80	51	27	136	39
2010(同 22)	80	48	22	118	31
2011(同 23)	0	0	0	81	18
2012(同 24)	0	0	0	55	28
2013(同 25)	0	0	0	25	−

環境システム学部　地域環境学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1998(平成 10)	140	668	151	151	−
1999(同 11)	140	642	164	324	−
2000(同 12)	140	517	155	482	−
2001(同 13)	140	434	156	636	148
2002(同 14)	140	347	143	632	159
2003(同 15)	140	354	155	617	152
2004(同 16)	140	289	145	592	142
2005(同 17)	100	250	106	545	127
2006(同 18)	100	216	89	491	135
2007(同 19)	100	196	106	452	146
2008(同 20)	100	141	71	359	84

環境システム学部　地域環境学科(つづき)

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2009(平成 21)	100	108	43	305	80
2010(同 22)	100	68	41	256	85
2011(同 23)	0	0	0	164	69
2012(同 24)	0	0	0	87	36
2013(同 25)	0	0	0	48	−

環境システム学部　生命環境学科

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2005(平成 17)	100	346	104	104	0
2006(同 18)	100	340	101	207	0
2007(同 19)	100	386	116	323	0
2008(同 20)	100	382	123	449	93
2009(同 21)	100	303	91	441	103
2010(同 22)	100	316	109	446	108
2011(同 23)	0	0	0	338	108
2012(同 24)	0	0	0	217	84
2013(同 25)	0	0	0	125	−

農食環境学群　循環農学類

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011（平成 23）	240	513	272	271	0
2012（ 同 24）	240	593	288	555	0
2013（ 同 25）	240	579	279	816	－

農食環境学群　食と健康学類（管理栄養士コースを除く）

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011（平成 23）	130	280	152	152	0
2012（ 同 24）	130	271	138	286	0
2013（ 同 25）	130	312	142	421	－

農食環境学群　食と健康学類　管理栄養士コース

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011（平成 23）	40	179	51	178	0
2012（ 同 24）	40	183	43	180	0
2013（ 同 25）	40	180	43	135	－

農食環境学群　環境共生学類

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011（平成 23）	120	367	135	134	0
2012（ 同 24）	120	349	138	268	0
2013（ 同 25）	120	408	145	416	0

獣医学群　獣医学類

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011(平成23)	120	1,744	153	153	0
2012(同 24)	120	2,225	137	289	0
2013(同 25)	120	2,060	133	424	−

獣医学群　獣医保健看護学類

年　度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2011(平成23)	50	341	60	60	0
2012(同 24)	50	334	62	122	0
2013(同 25)	50	349	61	181	−

現教職員

学長		干場 信司
宗教主任		藤井 創
酪農学研究科	研究科長 教授	市川 治
農食環境学群	学群長 教授	荒木 和秋
酪農学部長		
循環農学類	学類長 教授	小宮 道士
酪農学科長		
農業経済学科長	教授	丸山 明
同		市川 治
同		相原 晴伴
同		井上 誠司
同		今井 敬
同		上田 純治
同		岡島 毅
同		小澤 修二
同		金田 隆一
同		菊田 治典
同		小阪 進一
同		佐々木 均
同		佐藤 和夫
教授		佐藤 元昭
同		園田 高広
同		高橋 圭二
同		高橋 俊彦
同		寺脇 良悟
同		堂地 修
同		中辻 浩喜
同		野 英二
同		干場 信司
同		發地喜久治
同		松中 照夫
同		村岡 範男
同		森田 茂
同		山田 弘司
同		吉野 宣彦
同		義平 大樹
同		我妻 尚広
准教授		泉 賢一
同		大和田秀一
同		岡本 英竜
同		岡本 吉弘

食と健康学類　学類長　教授　石下　真人
食品科学科長　同　竹田　保之
食品流通学科長　同　尾碕　亨
環境マネジメント学科長　同　加藤　敏文
同　石井　智美

准教授　小糸健太郎
同　小林　昭博
同　澤本　卓治
同　杉村　泰彦
同　筒井　静子
同　猫本　健司
同　藤田　佳也
同　森　志郎
同　山田　未知
同　吉岡　徹
講師　安宅　仁人
教授(嘱託)　扇　勉
同(同)　岡田　正裕
同(同)　髙橋　茂
同(同)　玉川　真弓
同(同)　玉利　和弘
同(同)　三木　直倫

教授　小野寺秀一
同　金田　勇
同　清野　康二
同　樋元　淳一
同　舩津　保浩
同　眞船　直樹
同　山口　昭弘
准教授　岩﨑　智仁
同　上野　岳史
同　白石　治恵
同　深澤　史樹
同　三谷　光照
同　村松　圭
同　山口　太一
同　柳　京熙
講師　上野　敬司
同　萩原(金高)有里
同　栃原　孝志
助教　田上　貴祥
教授(嘱託)　鈴木　忠敏
同(同)　寺井　格
同(同)　千場　敏博

教授(嘱託)	本田 康夫	教 授	吉田 剛司		
同(同)	本多 芳彦	准教授	伊吾田宏正		
同(同)	山田 大隆	同	小川 健太		
准教授(嘱託)	安川 澄子	同	佐藤 喜和		
講師(嘱託)	奥村 昌子	同	中谷 暢丈		
助手(嘱託)	小野 静香	同	馬場 賢治		
同(同)	佐々木民江	同	保原 達		
同(同)	佐藤理紗子	同	吉田 磨		
同(同)	宮崎 早花	教授(嘱託)	赤坂 猛		
同(同)	横尾 千尋	同(同)	小川 巖		
環境共生学類 学類長	山舗 直子	同(同)	牧原 統		
教 授		同(同)	宮木 雅美		
同	金子 正美	同(同)	森 夏節		
環境システム学部長		准教授(嘱託)	鈴木 透		
同	遠井 朗子				
地域環境学科長					
同	星野 仏方				
生命環境学科長					
同	岩井 洋	獣医学研究科 研究科長	林 正信		
同	押谷 一	獣医学群 学群長	田村 豊		
同	小林 敬	獣医学部長			
同	篠崎 志朗	獣医学類 学類長	竹花 一成		
同	高取 則彦	獣医学科長			
同	藤井 創	教 授	浅川 滿彦		
同	森川 純	同	泉澤 康晴		
同	矢吹 哲夫	同	上野 博史		

教授
同 打出 毅
同 及川 伸
同 翁長 武紀
同 片桐 成二
同 廉澤 剛
同 菊池 直哉
同 桐澤 力雄
同 小岩 政照
同 鈴木 一由
同 田口 清
同 田島 誉士
同 谷山 弘行
同 田村 豊
同 寺岡 宏樹
同 中田 健
同 中出 哲也
同 萩原 克郎
同 永幡 肇
同 林 正信
同 平賀 武夫
同 福本真一郎
同 村松 康和

教授
同 山下 和人
同 横田 博
准教授 岩野 英知
同 植田 弘美
同 上野 弘志
同 岡本 実
同 川本 哲
同 黒澤 隆
同 高橋 樹史
同 能田 淳
同 林 英明
同 樋口 豪紀
同 平田 晴之
同 前原 誠也
同 蒔田 浩平
同 松田 一哉
同 森好 政晴
同 安井由美子
講師
同 臼井 優
同 遠藤 能史
同 美名口 順
同 三好健二郎

獣医保健看護学類　学類長　教授　北澤多喜雄
同　内田　英二
同　遠藤　大二
同　加藤　清雄
准教授　佐野　忠士
講師　郡山　尚紀
同　椿下　早絵
同　宮庄　拓
同　八百坂紀子

教育センター
事務次長　照井　俊秀
課長　漆原　滋

教務１課
課長補佐　佐藤絵里子
主任主事　永田　恭之
同　堀　美津穂
同　三井　友秀
主事　入江　遥
同　森重　尚子
主事補　内山　由香
課長　佐々木　淳
主任主事　浅野由貴枝
同　中野　亮子
事務次長　赤尾　全廣

教務２課

学生部

学生課
課長補佐　伊藤　明美
主任主事　有好　潤二
同　脇島　和宏
主事　品川　晴香
栄養士　山形　郷美
調理員(嘱託)　梅田美恵子
同(同)　小島　友子
同(同)　庄田　弘子
同(同)　野口　郁子
同(同)　走出　成子
同(同)　星野　澄子

医務室
医務室長　野越　禎子
カウンセラー　北山　有子

学生相談室
事務次長　川邊　哲司

入試部
課長　加藤　浩

入試課
課長補佐　岩森　昭憲
主任主事　長沢亜有美
主事　大津　円加
主事補　廣嶋　彩子
事務次長　十倉　宏
課長補佐　西田　智
主任主事　菊地眞紀子

就職部

就職課

附属図書館
主任主事　志田　理恵
事務課長　頭川　恵子
主任主事　川端　幸枝
同　窪田　系生
同　濵谷　耕一

学科附置施設
主任技師　岡崎　良生
技師(嘱託)　尾崎　邦嗣
同(同)　倉内　清貴

附属農場
主任技師　稲森　剛
同　上野　秀樹
同　上原恒一郎
同　奥平　武市
同　川岸　孝博
同　長濵　愛

附属家畜病院
課長補佐　髙山　基樹
放射線技師(嘱託)　赤羽　克美
技師(嘱託)　安　加奈子
薬剤師(嘱託)　髙野　加奈

エクステンションセンター
事務次長　林　多喜夫
課　長　後藤　哲也
課長(出版担当)　塩出　真司
主任主事　奥寺　好子

国際交流課
課　長　高橋　直樹
主任主事　篠原朱輝子
同　横川　容子

学務部
部　長　伊藤　眞美

学務課
課　長　髙橋　秀一
主任主事　津川　裕一
主事補　花田　愛

研究支援課
課　長　新　政文
課長補佐　金子　千恵
主任主事　立川　直生
同　玉田　哲也

生涯学習課

第4部　酪農学園の財産・機構、関係団体

第１章　財産（学校用地・建物）・機構関係

１　学校用地（文京台キャンパス）の取得

酪農学園が北海道酪農義塾として始動してから、今日に至るまでの教育用地確保の変遷について、特に現在地（江別市文京台緑町）の取得については、第１部酪農学園草創史・第１章で機農学校の開設（１９４２年）に際し、創立者黒澤酉蔵が町村敬貴の助言を得て「真の実学教育の場」を求めて取得したこと、また、義塾開設当時については、同部第３章で酪連用地（札幌村苗穂）の活用や札幌村三角の農地取得、更には白石村野津幌の酪連が取得した出納農場の活用などについて記述した。

学園発展の足どりは、学校用地の変遷からも顕著にうかがうことができるが、なんといっても今日的発展の礎は現在地の取得に負うところが大きい。現在地の文京台地区（旧西野幌）は、石狩平野のほぼ中央に位置し、東に道立野幌森林公園、西にＪＲ函館本線を配したなだらかな丘陵地帯に位置している。

文京台キャンパスの大部分は、明治政府の開拓政策によって鍬が入れられているが、隣接（西方）していた国有林は戦後の緊急入植政策によって農地化され、その後急速に宅地化が進み、大麻地区とともに１９０万都市札幌のベッドタウンへと変貌した。だが、学園を含むこの丘陵地一帯は、重粘土で飲用水にもこと欠くという悪条件のところであった。

戦局が烈火するなか、農業指導者の養成に着目して、広大な実習農場を備えた甲種農学校「野幌機農学校」の創設のための用地取得であったが、牧草の収穫もままならないという土地条件であった。

黒澤酉蔵は、学園が所有する文京台キャンパスの重粘土に加え、元野幌農場の泥炭土、植苗農場の火山灰土を北海道農業の三劣悪土壌として、これを酪農によって改良できることを実学教育を通じて実証しようとしたのであった。

２　教育農場・植林地の概要

学園は、文京台キャンパスの農場のほか、元野幌と苫小牧市植苗に農場、福島・別海・望来に植林地・原野を有している。以下にその概要を記述する。

中央農場（文京台）　１９４２（昭和17）年開校当時の機農学校では１６０haの農地に10～15ha規模の経営実習農場をつくり、それぞれに寮を設置して生活と実習を一体化させた実学教育体制を整えた。その後、酪農学園短期大学、同大学が設置されるなどの過程で農場運営のあり方が検討され、農場を統合合理化することになり、１９６４（昭和39）年４月に機農高校と酪農短大の共用とする中央農場が設置された。

一方、酪農学園大学に附属する農場は、学園用地の一部売却（道立図書館・道教育研究所用地）や学生寮の建設などにより著しく縮小されたため、実習農場の再編成が余儀なくされた。このため１９７５（昭和50）年に、中央農場は大学・短大共用の附属農場と機農高校農場に分割・再編成された。

酪農経営の規模拡大と技術革新の急進を背景に、「教育・研究・普及」の先端モデルとしての役割

を担うべき学園農場は、その充実に迫られた。このため１９９９（平成11）年、大学院の研究環境を強化するためのハイテク・リサーチセンター整備事業（文部科学省）を活用して、牛の糞尿からバイオガスを発生させ、熱と電気を回収するバイオガスプラントを擁する「乳牛糞尿循環研究センター」を設置した。

２０００（平成12）年には「酪農情報の管理と利用」「酪農における物質循環」を主目的とした「インテリジェント牛舎」が設置された。これらの整備によって、専門教育の実習・実験の充実、最新技術の研究、酪農情報の提供の充実が図られた。また２０１３（平成25）年１月には、私立高等学校産業教育施設整備事業（文部科学省）を活用した木造平屋建ての繋ぎ牛舎を新築し、飼育技術の比較実習や研究の充実を期することとした。

元野幌農場　１９４２（昭和17）年、北海道農地開拓営農事業団より１８０haの荒地を借り受け、その一部を機農学校の実習農場とした。当初はもっぱら野乾草の採草地として、不足していた本校の冬期飼料や敷料の生産に利用された。

戦後は機農高校の別科や農機科の実習農場として活用されたこともあった。だがこの地は泥炭地に加え、石狩川に合流する豊平川の水禍の常襲地帯で、酪農と機械開墾による土壌改良は難儀を極めた。１９５５（昭和30）年には別科・農機科ともに廃止されたが、その後も府県の農業高校生の委託実習や高等酪農学校（通信教育）の研修農場として活用された。１９５６（昭和31）年には事業団より、１１０haの有償払下げを受けた。１９７６（昭和51）年からは、サツラク農業協同組合との生産委託方式による試験耕作農場とするなどの経緯をたどった。１９８３（昭和58）年以降は、学園の牧草の試験耕作地とし、

その一部を大学附属とした。

２００７(平成19)年度から、大学酪農学部酪農学科に「肉畜生産コース」を新設されたことに伴い、元野幌農場を肉牛教育研究農場と位置づけて、日本短角牛にも着目した本格的な肉牛の教育・研究を目的とする農場として活用することになり、牛舎なども新築整備された。飼料の生産から飼養技術はもとより、経営分析や流通・加工に至るまで横断的な本学教育に供されることが期待されている。

また農場内には、珍しい草木や動物・昆虫も生息しており、動植物の生態や環境問題など幅広い教育・研究の場としてもその利活用が期待される。

植苗農場　１９４１(昭和16)年、北海道酪農義塾が酪連より寄付を受けた植苗農場は、当初は機農学校の実習地とされたが、本校農場の整備とともに利用されないままに過ぎた。この地は、樽前山系の粗粒火山礫地で農業にとっては劣悪な痩せ地であった。

１９４７(昭和22)年、機農高校の遠浅酪農塾の実習農場として活用された。１９５６(昭和31)年には、かつての酪農義塾の手法を踏襲した植苗塾として、酪農自営者教育の場に供された。１９６７(昭和42)年に学園事業部の収益農場として新発足し、乳牛部門のほか鶏・豚・しいたけ等の経営が試みられたが、１９７３(昭和48)年に学園本部所属になった。

しかし、施設の老朽化や経営収支の悪化、学園が保有する農場としての利用目的が曖昧なことなどから、２０００(平成12)年末をもって乳牛部門が廃止され採草農場として位置づけられた。その後、酪農関連器械メーカー(コーンズ・エコファーム)より産学共同研究施設としての利用提案があり、農場名を「酪農学園植苗農場」として、２００１(平成13)年２月から10か年契約(後に15か年に変更)で農場

を運営することになり現在に及んでいる。

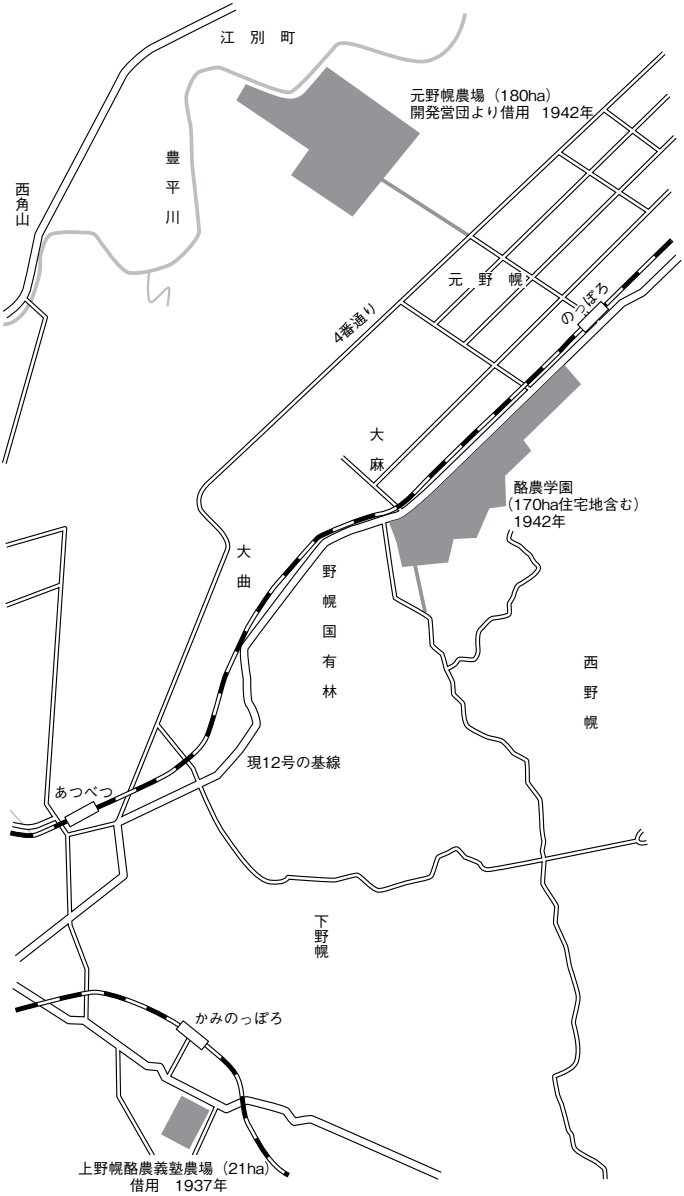
エコファームの協力を得て運営しているモデル農場の目指すところは、環境保全とＩＴをキーワードに最新技術を導入した「自然と牛と人との共生」である。１００ha規模の農場に約２００頭の乳牛が飼育され、排泄された糞尿からのバイオガス発電などが行われている。

なお１９８６（昭和61）年に、植苗農場の約14haを雪印乳業（株）受精卵研究所用地として所有権を移転した。

福島林地（松前郡福島町字千軒）　１９４１（昭和16）年酪連より酪農義塾の資産として寄付されたものであるが、その後一部を売却し、１９６８（昭和43）年には近隣地23haを購入、現在53haを所有している。そのほとんどに杉を植林しており、適宜間伐材、立木として売却している。なお「研修館」の建設資材として、この杉材が使われた。

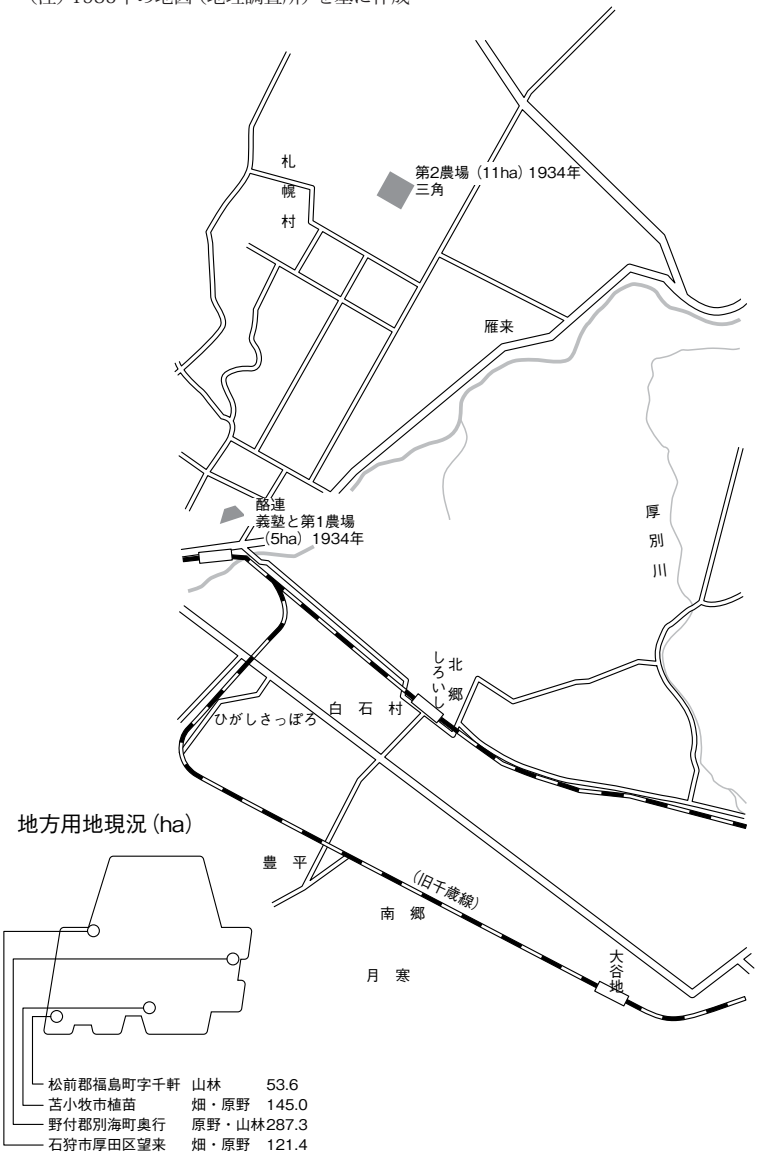
別海植林地（野付郡別海町奥行）　この土地も福島林地と同時期に酪連より寄付されたもので、当初は１３００ha近くあった。その後、道開発計画による新酪農村の建設や産業道路の敷設に伴い、１０００ha余りを分譲した。この間、一部を開墾して肉牛牧場を開設したこともあったが、みるべき成果は得られなかった。現在所有している２８７haは、すべて防霧保安林に指定されている。

望来原野・畑地（石狩市厚田区望来）　西野幌（現文京台キャンパス）農場の一部を道立図書館や道教育研究所、ＪＡカレッジの建設用地として分譲したこともあり、１９７３（昭和48）年、学園の将来展望のなかで農地を確保することになり、厚田村望来（当時）の原野と畑地１２１haを購入した。その一部を肉牛実験牧場としたこともあったが、現在は演習林として学生のフィールド演習などに供されている。


江 別 町
元野幌農場（180ha）
開発営団より借用 1942年
豊
平
川
西角山
元 野 幌
のっぽろ
4番通り
大
麻
酪農学園
（170ha住宅地含む）
1942年
大
曲
野
幌
国
有
林
西
野
幌
現12号の基線
あつべつ
下
野
幌
かみのっぽろ
上野幌酪農義塾農場（21ha）
借用 1937年

学園用地の位置略図

（注）1935年の地図（地理調査所）を基に作成



以上のように学園用地は、学園の歴史とともに変遷しているが、その現況は次のとおりである。

学園用地の現況（２０１２年度末）

区分	所在地	筆数	地積(ha)
基本財産	北海道江別市野幌若葉町	2	1・7
	北海道江別市文京台緑町	92	116・6
	北海道江別市文京台東町	2	1・5
	北海道江別市元野幌	9	104・0
	小　計	106	223・8
運用財産	北海道江別市野幌若葉町	1	0・8
	北海道江別市西野幌	4	7・3
	北海道江別市文京台東町	4	0・6
	北海道江別市文京台緑町	3	3・6
	北海道松前郡福島町字千軒	17	53・6
	北海道野付郡別海町奥行	19	287・3
	北海道苫小牧市植苗	22	145・0
	北海道石狩市厚田区望来	14	121・4
	小　計	84	619・6
合　計		190	843・4

３ 建造物の充実

酪農学園の教育は、厳しい財政事情のなかで進められたため施設の整備は十分ではなく、ほとんどが古材を利用した木造であった。そのため、その充実は急務であったが、財政事情の好転もあり急速に施設の整備が図られてきた。

学園最初の鉄筋コンクリート建ての大型建築物は、１９６０(昭和35)年の大学開設に合わせて建てられた第１校舎(現Ａ１号館)で、「希望の塔」とともに往時を偲ばせるものとなっている。近年になって、例えば古材を利用した獣医学科の講義・研究棟などは解体され、そのほとんどは鉄筋コンクリートの永久建造物になり、設備の高度化が図られている。

その象徴的なものの幾つかを例示すると次のとおりである。

黒澤記念講堂　１９８４(昭和59)年竣工。学園創立者黒澤酉蔵の召天に際し、学園創立50周年記念事業の一つとして、その遺徳を後世に継承するにふさわしい建物「黒澤記念講堂」の建設が企画された。その資金は内外からの寄付によることとし、募金の主体は学園と学園後援会が主体となり、雪印乳業株式会社に募金方を依頼した。

施設の基本的なコンセプトは、①創立者の思想と情熱とその業績を末永く顕彰し、学園のシンボルとし建学の理念を日々新たにする場とすること　②学園内の諸行事や地域社会と関連ある行事、講演会などに利用できること、とした。

完成した施設は、１階が礼拝や諸行事に使用できる講堂とし、２階には創立者に関する事績や資料、

遺品などを展示した部屋などが配置されている。募金額は広く酪農関係諸団体等の理解と協力を得て、総額２億１８４５万円となり、建設は株式会社松村組が２億円で落札した。

なお、現在記念講堂前に設置されている黒澤酉蔵の銅像は、１９６２(昭和37)年に酪農学園創立30周年記念事業の一環として、「黒澤酉蔵顕彰会」(会長　佐藤貢)の労により建立(当時は寿像　制作者加藤顕清)されたもので、当時は旧機農高等学校の校門近く(現緑音館近く)の丘上になったが、学園の発展とともに中心から離れたことなどから２０００(平成12)年に現在地に移設した。

酪農学園本館　１９９１(平成２)年竣工。建物の概要は、鉄筋コンクリート地下１階・地上４階建て２４９１㎡。総工費５億１５００万円、備品費１５００万円など。１階は大学エクステンションセンター、２階は学園事務局、大学学務部、３階は役員室、広報室、４階は大・中・小会議室などに利用されている。

酪農学園大学中央館　１９９８(平成10)年竣工。建物の概要は、鉄筋コンクリート地下１階・地上10階、高さ43ｍに及ぶ高層な建物で自然豊かなキャンパスのなかで、野幌森林公園や石狩平野が一望できる。総工費21億１７００万円、備品費２億８０００万円など。この建物は、新設する大学環境システム学部の施設整備にも関連して、教育研究活動や快適な学生生活の充実を期することを目的としたもので、学園のシンボル的な建物として威容を誇っている。

１・２階のロビーは、学生が休息・軽食・自習・ミーティングなどに、学生ホールは講演会・学術研修・各種行事などに活用されている。３～６階にはマルチメディア機能を重視した図書館、７階には情報管理・会議室、８～10階には研究室・演習室・教職センターなどが配置されている。

学園内主要構築物・施設（農場関係は省く）

◇学園・大学

施設名	建設年	面積(㎡)	備　　考
環境システム講義棟 （現Ｃ３号館）	1984 （昭和59年）	1,222	小教室４　実習室　実験室　研究室２ 演習室２他
黒澤記念講堂	1984 （ 同 59年）	1,133	ホール　展示室　宗教主任室　講堂事務室
農経館 （現Ａ３号館）	1984 （ 同 59年）	3,053	大教室２　小教室４　研究室 14 準備室３　会議室他
家畜センター実験実習室	1986 （ 同 61年）	457	実験室３　実験準備室　試料調整室 冷蔵室　乾燥室　粉砕室他
獣医２号館 （現Ａ４号館）	1986 （ 同 61年）	2,557	実験室７　研究室 10　演習室７ 無菌室２　準備室３　洗浄室他
酪農学園ホール	1987 （ 同 62年）	2,315	学生ホール　食堂　生協　北洋銀行・郵便局 ATM 他
食品科学館 （現Ｃ８号館）	1988 （ 同 63年）	2,169	実験室４　研究室７　演習室１　準備室他
食品科学講義棟 （現Ｃ４号館）	1988 （ 同 63年）	1,500	大教室３　小教室２　準備室１他
環境システム館 （現Ｄ１号館）	1989 （平成１年）	1,360	中教室４　小教室１　研究室１ コンピューター室２　演習室他
獣医４号館 （現Ｂ３号館）	1989 （ 同 １年）	2,548	実験室３　研究室９　演習室５ 実習室２　準備室３　共通機器室他
食品加工実習室	1990 （ 同 ２年）	314	実習室　講義室　乾燥室　検査室 スモーキングルーム他
酪農学園本館	1991 （ 同 ３年）	2,711	大学短大部学務部　入試部　エクステンションセンター 学長室　理事長室　事務局他
大動物臨床センター （現動物実験ステーション）	1992 （ 同 ４年）	1,417	研究室２　実験室１　演習室１　実習室１ 手術室２　準備室　牛舎他
環境システム館（増築） （現Ｄ１号館）	1993 （ 同 ５年）	674	研究室５　コンピュータ室３　演習室他
食品流通館 （現Ａ２号館）	1994 （ 同 ６年）	2,791	中教室３　小教室３　コンピュータ室１ 研究室 10　演習室５　実験室１他
環境システム講義棟（増築） （現Ｃ３号館）	1995 （ 同 ７年）	1,284	中教室２　実習室２　研究室５ 演習室２他
学生サービスセンター	1998 （同 10年）	1,781	就職部　学生部　教務部 学生相談室　医務室
中央館	1998 （同 10年）	10,660	研究室 37　図書館　会議室 教職課程指導室　学生ホール他

学園内主要構築物・施設（農場関係は省く）（つづき）

◇学園・大学

施設名	建設年	面積(㎡)	備　　考
弓道場	2002 （同14年）	170	射場　的場
研修館	2002 （同14年）	410	研修室　資料室　事務室他
中央講義棟 （現Ｃ１号館）	2003 （同15年）	2,540	大教室３　小教室２　ホール他
健身館	2004 （同16年）	3,386	体育系サークル施設　武道場３　会議室３ 部室　ロッカールーム　シャワー室他
動物病院（本　館）	2004 （同16年）	5,663	診療室　手術室　入院室　研修医・大学院 生・留学生室　外来講師室　大会議場他
トレーニングセンター	2004 （同16年）	1,196	トレーニング室　体力測定室　体育講義室 実験室他
Ｂ４号館	2006 （同18年）	4,721	実験室８　研究室８　共通教育開発室 学習支援室他
健音館	2006 （同18年）	1,021	音楽・演劇系サークル施設　練習場３ 練習室６　ライブスペース　部室他
緑音館	2006 （同18年）	108	アコースティック音楽系サークル施設　部室 器具庫他
フィールド教育研究センター実習棟	2013 （同25年）	1,329	実習室　実験実習室　実習用資材庫 物品庫　更衣室　管理室他
清温寮	2010 （同22年）	7,309	高校・大学共同女子寮　寮室128　食堂 多目的室　PC室他

◇高校

施設名	建設年	面積(㎡)	備　　考
校舎（西棟）	1989 （昭和64年）	644	普通教室
校舎（東棟）	1995 （平成７年）	1,025	教室３　実験室２　準備室　加工実習室 職員室
実習棟	2001 （同13年）	925	実習室　ロッカー室他
図書館棟	2001 （同13年）	761	図書室　教室３他
校舎（南棟）	2012 （同24年）	1,304	食堂兼多目的ホール　教室６
繋ぎ飼い牛舎	2012 （同24年）	551	木造平屋建て　Ｄ型チェーンタイストール 他

４　経営機構の変遷

社団法人から財団法人へ

１９３３（昭和８）年に創設した酪農義塾は、設立を急いだこともあって、その組織は単なる任意団体だった。

従って役員のほとんどは酪連創設にかかわった幹部や関係者であったが、その中にあって理事長に就任した佐上信一は現職の北海道長官であった。当時、現職の地方長官が、こうした一私塾の理事長に就任するということは、全国的にも異例のことであっただけに、同長官のこの塾に対する期待の大きかったことがうかがえる。

その後、酪農義塾の教育、施設の拡大充実に伴って法人化の必要性が生じてきたため、１９３６（昭和11）年７月、文部省認可による「社団法人北海道酪農義塾」とした。同時に黒澤酉蔵を理事長に選任し、組織の確立と教育の整備に努めてきた。やがて、この酪農義塾は多くの優れた生徒を送り出して、１９４４（昭和19）年３月をもってこの法人も解散した。

この酪農義塾を引き継いで文部省令による３年制の農業学校を設置することになった学園は、１９４２（昭和17）年３月31日、文部省の認可を受け「財団法人興農義塾野幌機農学校」を設立し、黒澤酉蔵理事長のもとに戦時下の教育に努めてきた。

１９４６（昭和21）年３月、黒澤に代わって青山永が第２代理事長に就任。青山は、戦後の学園運営と取り組み、野幌高等酪農学校（通信教育）を興して、農民教育と酪農振興に尽力した。また、酪農学園大学（国際基督教大学野幌キャンパス）の設備準備に入るなど終戦直後の法人運営に大きく貢献した。

１９４９(昭和24)年５月、青山に代わって第３代理事長に就任した佐藤善七は同月、財団法人興農義塾野幌機農学校の名称を「財団法人酪農学園」に変更するとともに、寄附行為を根本的に改訂し、先に決定したキリスト教の精神に基づく三愛精神をもって学園教育の基本理念とすることを明確に示した。一方、懸案であった酪農学園短期大学を設置開学したほか、学園の財政や機農高校舎焼失後の再建に当たるなど、法人運営に卓越した手腕を発揮した。

学校法人と寄附行為　その間、１９４９(昭和24)年12月に私立学校法が公布され、戦後の私立学校教育に画期的な改革がもたらされ、学校経営の性格や位置づけが明確に示されて民法法人の特例として学校法人の設置が認められることになった。そのため１９５１(昭和26)年、財団法人を「学校法人」に変更し、再び寄附行為の大幅改訂を行った。

この寄附行為では、その目的や建学の精神はもちろん理事会が学園の意志決定の最高機関であることは従来と変わりないが、理事会、評議員会の構成、権限および理事、評議員の定数、選出方法、任期のほか理事の代表権などを具体的に定めた。同時に評議員の中から理事を選出したり、学園の教職員や卒業生より評議員を選出するなど、役員などの民主化を図ってきた。その特色は「理事、評議員はキリスト者、またはキリスト教教育に賛同するものに限る」と規定し、学園のキリスト教主義教育に対する意思の統一を図っている点にある。

この寄附行為はその後、理事、評議員数の大幅増員によって、ますます合議制民主化の輪を広げるなど、時代の推移、変遷とともに部分的改正をみることになったが、その基本精神は変わることなく現在に受け継がれている。

５ 理事長・学園長の交代

⑴ 理事長

１９５７（昭和32）年２月、佐藤善七理事長の急逝によって、黒澤酉蔵が再び第４代理事長に就任した。黒澤は常に教育の重要性を訴えて翌58年、酪農学園女子高校を設置し、引き続いて１９６０（昭和35）年には念願の酪農学園大学を創設したほか、学園財政の確立に努め多くの成果を収めた。

１９６６（昭和41）年12月、黒澤に代わって佐藤貢が第５代理事長に就任した。佐藤は酪連、興農公社、北海道酪農協同株式会社および雪印乳業株式会社の社長、役員としての長年にわたる経験と豊かな国際感覚を生かして、学園経営の安定、財政の確立に取り組むとともに教育の充実、拡大に努めた。理事長職は25年間に及び、その間各学校の学科増設や大学院を設置したほか、三愛女子高校の移転や財政の長期安定方策を樹立するなど学園の近代的発展に努めた。特に酪農学園大学附属高校と、とわの森三愛高等学校の統合など数々の難題に、卓越した指導力を発揮するとともに学園の社会に対する地歩を固めた。

１９９１（平成３）年５月31日の理事会・評議員会において佐藤貢理事長は任期満了につき退任し、名誉理事長に推挙された。

代わって第６代理事長に遊佐孝五が選任された。同時に副理事長に高田哲夫、常務理事に牛島純一、菊池利治が選任された。

遊佐孝五は１９４７（昭和22）年より１９６１（昭和36）年まで酪農学園乳製品工場において実験、実習、

研究、指導（酪農学園短期大学、同大学講師、工場長）に当たった、いわゆる酪農学園はえぬきの教員であった。１９７３（昭和48）年７月から３期12年間学長を務め、大学、短大の事務統合、大学院の設置、獣医学科の定員増、授業料問題の改善などを図るとともに、校舎、施設の充実および大学教育の推進と運営に積極的に取り組むなど、長きにわたって学園運営の中枢的役割を果たしてきた。２期８年に亘った遊佐孝五理事長は１９９９（平成11）年６月30日をもって退任した。

代わって同年７月１日、７代理事長に平尾和義が就任した。平尾は北海道農業共済組合連合会講習所、根室生産連などの臨床現場を経て１９６９年（昭和44）年に酪農学園大学へ。１９８９（平成１）年、酪農学園大学７代学長に就任し、多難な時期を２期８年を務めたが、学長在任中の１９９５年から副理事長に就任した。

８代理事長に麻田信二　２００７（平成19）年７月に理事長平尾和義の任期満了に伴い、８代理事長として麻田信二が就任した。少子化時代の到来が現実のものになり、酪農学園の存続をかけた改革が緊要な課題として山積するなかでの招聘であった。麻田は１９４７（昭和22）年網走市に生まれ、１９７０（昭和45）年北海道大学農学部農芸化学科を卒業。１９７４（昭和49）年北海道入庁、一貫して道農政の陣頭指揮をとり、酪農畜産課長、農政課長、農政部次長、同部長を歴任した。２００４（平成16）年には道副知事に就任した。この間、とりわけ北海道の基幹産業である農業の「クリーン」な特性を強調した農業政策の立案に尽力した。副知事退任後は、自ら化学肥料・農薬を使用しない「健土」農業を実践すべく夕張郡長沼町で農園を営んでいる。

麻田信二理事長の就任あいさつ（抜粋）

このたび、酪農学園の理事長に就くことになりましたが、昨年３月に、道の副知事を任期半ばで辞し、人生の総仕上げとして、空知・長沼町で農業に従事していますので、今回の理事長就任は思いもよらぬことでした。

しかしながら、これまでの人生を振り返ってみますと、酪農と畑作を営む農家の次男として生まれ、小学生の頃、父の書棚にあった太田正治さんの「私は見たデンマーク農業」を見て、デンマークに憧れ、その気持ちは今も変わりません。

また、学園の評議員であった石塚喜明先生を師と仰ぎ、先生から内村鑑三の精神を学びました。道庁時代の10年ほど、佐藤貢先生に多くのことを学びましたが、聖書の「我々は艱難を喜んでいる。なぜなら艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである」という言葉を教えていただき、その言葉に勇気をもらいました。

そして、農民と共に生きた田中正造に心ひかれ、持続可能な農業の確立こそが、平和で豊かな文化の香り高い社会を作ることができると考え、自ら有機農業を実践していますので、崇高な建学の精神を持つ酪農学園の運営に携わることになりましたのは、天命とも考えています。

これまで、酪農学園の発展にご尽力いただきました諸先輩の皆さんや卒業生の皆さんのご指導をいただきながら、学園の先生方や役職員の皆さんのご意見をよく聴き、酪農学園のさらなる発展に努めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

⑵ 学園長

学園は義塾の創設以来理事長を中心に、経営と教育を進めてきたが、当時は組織や機構も小さかったことなどから、こうした運営方式が時宜を得ていた。

戦後、法人組織の変更、学校の増設、特に教育の拡大に伴い、教育体制の確立と運営のため、その責任者を置く必要が生じてきた。

そのため、１９５０(昭和25)年12月、学園が学園長制度を制定し、初代学園長に黒澤酉蔵を選任した。学園長に就任した黒澤は、先にも述べたが、教育の拡大、充実に努めるとともに、高校校長、短大、大学学長を歴任し、学園教育に大きな足跡を残した。

１９８２(昭和57)年２月、黒澤学園長の逝去に伴い、同年６月佐藤理事長が２代学園長を兼任した。１９８５(昭和60)年４月から副学園長の遊佐孝五が３代学園長に就任したが、１９９１(平成３)年遊佐の理事長就任に伴って同年７月牛島純一が４代学園長に就任した。

牛島は１９４６(昭和21)年、北海道大学農学部畜産学科卒業。三井物産株式会社、北大副手・北海道酪農協同組合を経て１９４９(昭和24)年酪農学園に移任。その後も短大、大学開設に尽力し、開設後は教育の質向上に中心的な働きをし、後に短大・大学学長、附属高等学校長、常務理事などを歴任した。

１９９５(平成７)年７月、牛島の退任に伴って黒澤力太郎が５代学園長に就任した。黒澤は京都大学農学部を卒業し、１９４３(昭和18)年、機農学校の草創期から戦中・戦後の混乱期の教育に携わっており、多難な時代の酪農学園と歩みをともにしてきた。機農高等学校長、短大、大学教授、酪農育英会理事長などを歴任し、酪農学園の教育充実に大きな足跡を残している。

この間、１９７９(昭和54)年６月、副学園長制度の発足により遊佐孝五が副学園長に選任され、１９８５(昭和60)年３月まで就任した。２代副学園長に山口博が１９９５(平成７)年７月から２００３年６月まで就任した。また、３代副学園長に仙北富志和が２０１０(平成22)年７月から２０１３(平成

25）年５月まで就任した。

６代学園長に原田　勇　２００７（平成19）年７月に前任の黒澤力太郎の後を受けて、６代学園長に原田勇が就任した。原田は１９２７（昭和２）年網走郡網走町に生まれ、１９４３（昭和18）年に興農義塾野幌機農学校に入学した。１９４８（昭和23）年に新制野幌機農高等学校に編入。酪農学園短期大学部に勤務後、１９４９（昭和24）年帯広畜産大学畜産学部酪農学科に入学した。

その後、酪農学園短期大学の講師・同大学の教授などを歴任し、教育はもとより学園運営の要職につき学園の発展に尽力した。原田の研究テーマは、わが国では栽培が難しいとされた牧草（アルファルファ）の栽培法を科学的に究明し、普及に努めることであった。また、とりわけアジア圏との交流と留学生の支援を目的とした「アジア酪農交流会」を誕生させたことの功績は大きい。

７代学園長に仙北富志和　２０１２（平成24）年12月、原田勇学園長の急逝の後を受けて、２０１３（平成25）年６月に仙北富志和が７代学園長に就任した。仙北は１９４１（昭和16）年増毛郡増毛町に生まれ、１９６４（昭和39）年に酪農学園大学酪農学部酪農学科の創期生として入学した。卒業後青森県に入庁し、農業指導課長、農業構造政策課長、農林部参事（農政課長）、農林部長などを歴任した。

その間、一貫して地域特性を生かした農業政策「地域選択型農政」の立案に意を配したが、その基底には黒澤酉蔵の教えである「全国画一縦割り農政への猛省」があった。２００１年４月、県職員を辞して酪農学園教授（嘱託）に転職した。学園常務理事・副学園長を歴任し、２０１３（平成25）年２月には酪農育英会理事長に就任した。

歴代役員（2013年7月）

理事長

理事長	佐上信一	酪農義塾開設時
初代	黒澤酉蔵	1942・3・31～1946・3・31
第2代	青山永	1946・3・31～1949・5・12
第3代	佐藤善七	1949・5・12～1957・2・2
第4代	黒澤酉蔵	1957・2・7～1966・12・19
第5代	佐藤貢	1966・12・19～1991・6・30
第6代	遊佐孝五	1991・7・1～1999・6・30
第7代	平尾和義	1999・7・1～2007・6・30
第8代	麻田信二	2007・7・1～

副理事長

初代	佐藤貢
第2代	川村秀雄
第3代	山本庸一
第4代	高田哲夫
第5代	平尾和義
第6代	高橋節郎
第7代	金川幹司

学園長

初代	黒澤酉蔵

1950・12・25～1982・2・6
1965・4・19～1966・12・19
1966・12・19～1972・6・21
1979・6・18～1987・6・9
1987・7・1～1995・6・30
1995・7・1～1999・6・30
1999・7・1～2007・6・30
2007・7・1～2010・6・30

第２代 佐藤貢 1982・6・30～1985・3・31
第３代 遊佐孝五 1985・4・1～1991・6・30
第４代 牛島純一 1991・7・1～1995・6・30
第５代 黒澤力太郎 1995・7・1～2007・6・30
第６代 原田勇 2007・7・1～2012・12・16
第７代 仙北富志和 2013・6・1～

副学園長

初代 遊佐孝五 1979・6・18～1985・3・31
第２代 山口博 1995・7・1～2003・6・30
第３代 仙北富志和 2010・7・27～2013・5・30

専務理事

初代 樋浦誠 1951・6・20～1956・7・1
第２代 川村秀雄 1960・4・6～1965・4・19

酪農学園事業部長

初代 西本宗信 1967・6・14～1987・6・30
第２代 斎藤義孝 1987・7・1～1990・12・31
代行 坂本与市 1991・1・1～1991・6・30
第３代 菊池利治 1991・7・1～1995・3・16

常務理事

初代 川村秀雄 1951・6・20～1960・4・6
第２代 西本宗信 1958・7・23～1967・6・14

第３代	川村秀雄	1965・4・19～1966・12・19
第４代	菊地正一	1967・6・14～1977・7・11
第５代	小林哲威	1977・7・11～1983・6・29
第６代	鈴木徳信	1979・6・18～1981・3・31
第７代	濱本恒男	1983・6・30～1989・5・31
第８代	牛島純一	1989・6・1～1994・3・31
第９代	菊池利治	1991・7・1～2004・5・24
第10代	渡辺誠治	2004・5・24～2007・6・30
第11代	仙北富志和	2007・7・1～2010・6・30
第11代	日下雅順	2007・7・1～2010・6・30
第12代	福山二仁	2010・7・1～

６　学園記念式典と記念事業

本学園80年の星霜の過程で学園外から多くの来賓を迎えての大がかりな記念式典は１９６２(昭和37)年10月14日、大学体育館において行われた創立30周年記念式典が最初である。その後は10周年ごとに、地味ではあるが、本学園の発展と教育振興に尽力された個人や団体・諸機関への深い感謝の思いから開催してきている。

創立30周年記念式典には学園役職員、学生、生徒のほか、教育、酪農関係者６００余名が出席して盛大に開かれ、引き続き記念事業の一環である「黒澤酉蔵寿像」の建立除幕式が行われている。

創立40周年記念式典祝賀会は、１９７３（昭和48）年10月１日、大学礼拝堂において行うとともに、さらに会場を札幌パークホテルに移して、関係者３００余名を招待して式典と祝賀会を挙行した。

創立50周年記念式典は、学園内部の催しとして１９８３（昭和58）年９月24日、学園関係者出席による催しは10月１日と２回にわたって開催され、共に学園半世紀の歴史を象徴するにふさわしい、厳粛にしてかつ盛大に行われた。１日午前11時からの学園外関係者を迎えての式典ならびに祝賀会には教育界、官界、酪農界など、さらに学園旧教職員、学園卒業生代表ら５００余名らが出席して札幌市の京王プラザホテル札幌において開催された。

創立60周年記念式典は、１９９３（平成５）年９月30日には学内の催しとして黒澤記念講堂において、10月１日は午前11時から、学園外関係者を迎え札幌ガーデンパレスにおいて記念式典ならびに祝賀会が開かれ、教育界、官界、酪農界その他各界から関係者、学園旧職員および同窓生など約４００名の出席があった。

これらの式典・祝賀会については、学園史一・二に詳述しているので、ここでは２００３年10月１日に開かれた学園創立70周年記念式典・祝賀会について記す。

学園創立70周年記念式典・祝賀会　本学園創立70周年記念式典は、学内としては２００３年９月30日、黒澤記念講堂において、10月１日には札幌ガーデンパレスで学外関係者３００名を迎えて開かれた。

式典は午前11時から榮忍宗教主任の司式によって礼拝形式で行われ、オルガンによる荘厳な前奏と出席者全員による讃美歌の合唱で始まった。高橋一宗教主任の聖書朗読、祈祷の後、平尾和義理事長が次のように式辞を述べた。

「本学園はキリスト教による三愛精神で人間教育を行い、実学教育による健土健民の復元を標榜する創立者・黒澤酉蔵先生の建学の精神に基づく教育を実践している。このことは、全国的にも例のない最も特色ある私学として各界から高い評価を得ている。今日の学園はその志を引き継ぐ多くの先人たちの努力によって大切に育てられ、血と汗が蓄積した努力の賜である。私たちは先人たちの受け継いできたこの輝かしい伝統を継承、発展させる義務がある」と建学の精神の継承を固く誓い、さらに「私学を取り巻く環境は一層厳しい状況になっている。本学園がこれらの困難を乗り越え、皆さまのご期待に応えるためには学園役職員、関係者が一丸となって学園教育の特色と独自性をさらに引き出す必要がある。未来の担い手である若者が21世紀の舞台で活躍できる教育研究の場として、これからも不断の努力をしていく決意である」と。

この後、酪農学園に功労のあった12人に対して平尾理事長から感謝状を贈呈。引き続き、来賓として高橋はるみ北海道知事(代読)、小川公人江別市長、日本私立大学協会北海道支部長の森本正夫氏(北海道私学団体連合会議長、学校法人北海学園理事長)からの祝辞があり、厳かな雰囲気の中で記念式典は幕を閉じた。なお、同日午後12時30分からは祝賀会が行われた。

感謝状贈呈者(酪農学園の役員等としての永年功労者)

菊地正一　(故)船木長一郎　牛島純一　高橋節郎
堂垣内尚弘　黒澤力太郎　高倉勝孝　小野愃弘
西本宗信　遊佐孝五　森田正夫　石田貞夫

学園創立70周年記念式典　平尾和義理事長式辞

学園創立70周年記念式典 式次第（学園外関係者分）

司式	宗教主任	榮　忍
奏楽		宮本　紀子
前奏		
讃美歌	３１２番	
聖書	ローマ人への手紙 5章1節～5節	宗教主任　髙橋　一
祈祷		
式辞		理事長　平尾　和義
感謝状贈呈		理事長　平尾　和義
祝辞		北海道知事　高橋はるみ
		江別市長　小川　公人
		北海道私学団体連合会議長 日本私立大学協会北海道支部長 学校法人北海学園理事長　森本　正夫
祝電披露		
頌栄	５４１番	
祝祷		
後奏		

７　酪農学園事務局

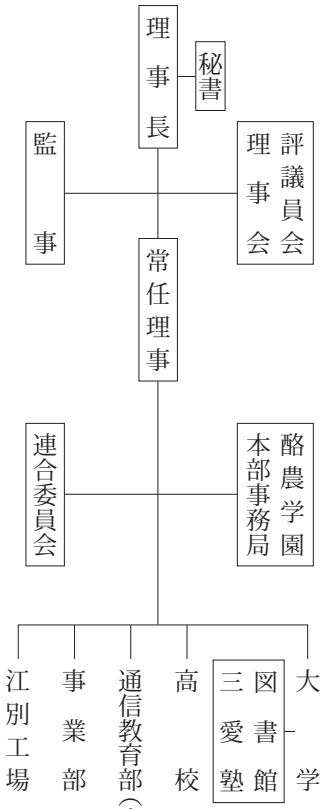
学園は１９４６(昭和21)年、理事会の決断によって教育の基本をキリスト教の精神に置くこととした。また、１９４６、49年の２度にわたり理事長が交代し、１９４８年には機農学校の高等学校への改編、野幌高等酪農学校(通信教育)の設置、新たに収益事業の開始があり、さらに１９４９(昭和24)年には酪農学園大学部(翌50年「酪農学園短期大学」に改組)の開設と学園法人名の変更ならびに機構の拡大が行われた。たまたま、この年機農高等学校校舎の焼失があって、学園の組織や経営などに大きな変化がもたらされた。

そのため、従来各学校や組織単位で処理してきた事務機構を一元化し、法人業務の執行を中心に庶務、人事、管理、給与、経理など共通の業務を統括し、その円滑な運営を図るとともに各学校間の連係を密にする目的をもって１９５０(昭和25)年７月１日、酪農学園事務局を旧酪農学校(通信教育)校舎内に設置した。

その後、事務局は幾度も機構を改めながら、１９５５(昭和30)年機農自動車学校(76年閉校)、１９５８(昭和33)年三愛女子高等学校(79年移転)、１９６０(昭和35)年酪農学園大学、１９６４(昭和39)年中央農場(76年廃止)などの設置による校舎、施設、設備の拡充に苦しい財政と取り組んできた。

さらには、その後三愛女子高等学校の移設および両高等学校の統合、短期大学、大学の学科増設、新学部の設置に伴う寮舎新設、また黒澤記念講堂、酪農学園本館、大学中央館、近年においてもインテリジェント牛舎群の家畜病院(動物病院)の建設など学園の発展とともに次々と施行される大型プロジェクトに総力を挙げて対処してきた。

学園事務局設置時の組織図（1950）



この間、１９６２（昭和37）年には社会一般に比してはるかに低かった教職員の給与体系をおおむね地方公務員に準ずる「酪農学園職員給与基準規程」を制定し、大幅な改善を行った。また、野幌教会近郊にあった職員住宅45戸も老朽化し、その管理維持することは財政上極めて困難な問題であった。

そのため用地を売却することによって転住者に建築資金を融資し、隣接地の野幌５６２番地に宅地50筆を造成し、教職員に分譲して、１９６８（昭和43）年移転を完了したが、これには3年余の年月を要した。

また、新任職員に対して「酪農学園の成り立ち、理念や使命」への理解を得させるオリエンテーションは１９６５（昭和40）年から続けられ、今日に至っているが、学園創立30、40、50、60、70周年記念式典の実施および記念誌の作成、年３～４回の酪農学園だよりの刊行など、激動の時代に多くの成果を収めてきた。

事務局には長年総務、管理、経理、特別会計の４課を置いてきたが、１９８６（昭和61）年には企画調整室を設置するなど機構を改革した。１９９４（平成６）年10月より、早くからの検討課題であった

従来の法人事務局と短大・大学事務部の業務を統合して業務の一元化、新たに企画推進部を設けるなど法人事務機構を大幅に改革した。それに伴って名称も学園事務局と変更し、総務部（総務課、経理課）、財務部（財務課、施設管理課）、それに東京事務所という機構に変更した。

一方、元野幌農場、植苗農場の地方農場のほか望来、福島、奥行などの山林も直轄管理運営している。また、年々増える業務の効率化を目指すためコンピュータなどのＯＡ化を進め省力化に努めている。

事務組織の改編　学園機構・事務組織は学園の教育拡大発展と共に幾度も改編され今日に至っている。特に、ここ10年ほどは学校の閉校、統合、再編があったため、大きく改編した。

２０００（平成12）年７月に学園広報室が新設され、２００１（平成13）年９月には企画推進部が廃止され、財務部と総務部（経理課）を新設した。

教学系では学務部（学事課、学務課）が新設された。２００２（平成14）年当時の事務組織は、学園事務局は総務部（総務課、経理課）、財務部（財務課、管理課）からなっており、学務関係では、入試部（入試課）、教務部（教務課）、学生部（学生課）、就職部（就職課）、図書館（事務室）、エクステンションセンター（事務室）、学務部（学事課、学務課）で構成されていた。その後２００４（平成16）年７月に附属家畜病院事務部門に正職員を配置し、２００５（平成17）年５月には内部監査室を新設した。同年10月には大学・短大および学園事務局の管理系業務の組織改編として、業務部（庶務課、業務課、システム支援課）、総務企画課、施設管理課の体制へと再編された。

２００７（平成19）年10月からは、業務部を学園事務局へ業務統合し、学園改革を目的として「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」を新設した。２００９（平成21）年10月には教育センター準備室、資

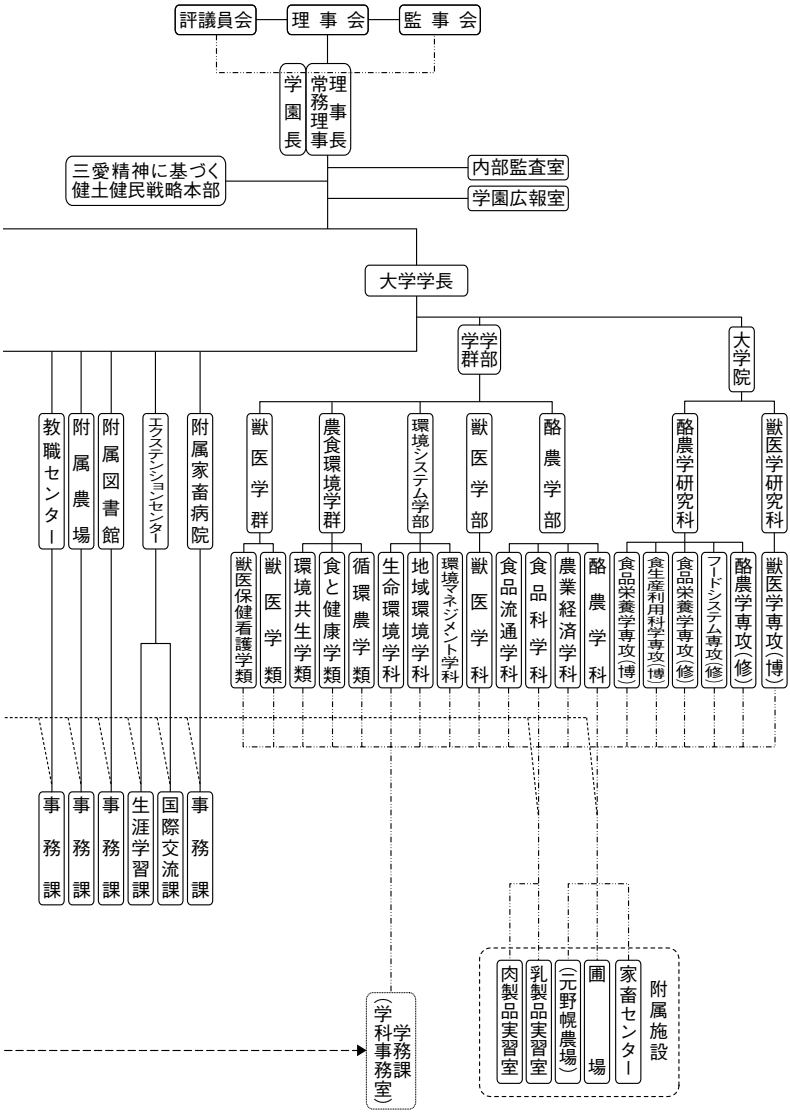
産管理課準備室を設置し、２０１０（平成22）年４月には、学事課を学務課に統合し、資産管理課が新設されて現在の事務組織体制「学園事務局：総務部（総務課、システム支援課）、財務部（財務課、施設管理課、資産管理課）、三愛精神に基づく健土健民戦略本部、内部監査室、広報室、東京事務所」および学務関係として「入試部（入試課）、教務部（教務課）、学生部（学生課）、就職部（就職課）、図書館（事務課）、エクステンションセンター（事務課）、附属家畜病院（事務課）、学務部（学務課）」となっている。

「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」の設置

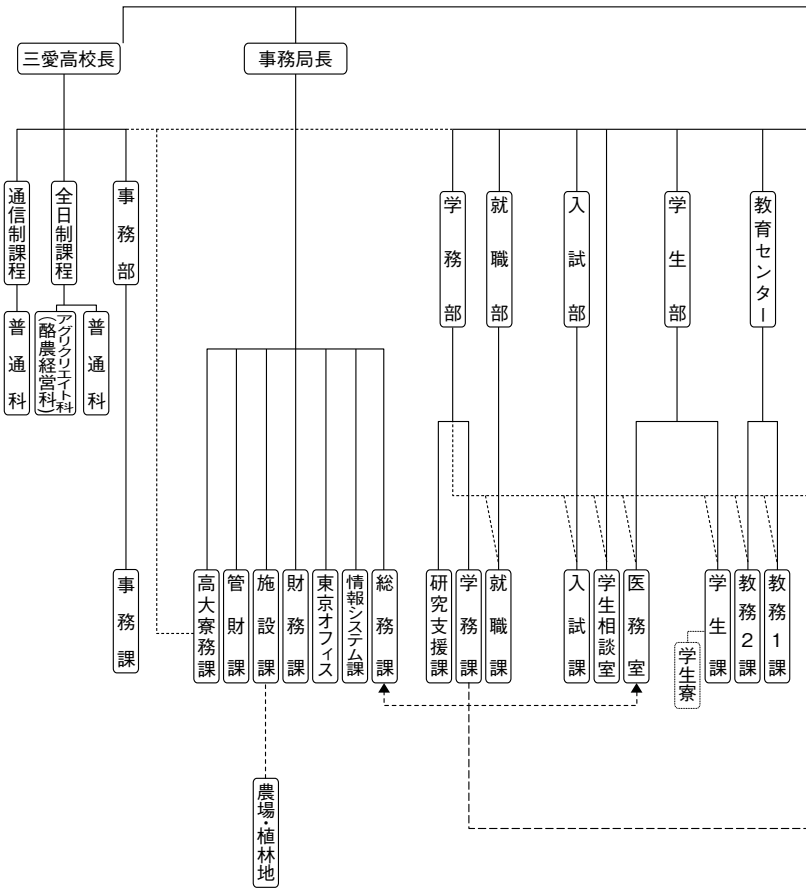
２００７（平成19）年６月から酪農学園は、麻田信二を理事長とする新役員体制がスタートした。

これを機に同年10月１日付けで、「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」が設置された。麻田理事長はその意図するところについて、「酪農学園が、無事創立１００周年を迎え、これを永続させていくためには、他の私学並みの取り組みではなく、酪農学園の特色を生かした取り組みが必要です。１９３３年、官立の農学校がある中、貧しい農家子弟の教育の必要性を痛感し、学費無料の全寮制の学校を創設した先達者の情熱に思いを致し、今一度建学の精神に立ち返って学園改革に取り組むことが必要と考えます」「人類の生存にとって、必要不可欠な食料を生み出す農業の担い手やそれを支える人材を育てる教育は、地球環境問題や人口増加と食料問題が全地球的な課題になる中、これからの社会にとって最も大切なことです」とメッセージしている。

戦略本部は、このような基本認識のもとに、大学教育体制の学群・学類等への改革や大学附属に位置づけられた高校のコース制等への改革など、その総合指揮を執るとともに、創立１００周年を展望した「酪農学園のめざす姿」や「長期施設整備計画」の立案などを担っている。


評議員会
理事会
監事会
学園長
常務理事
理事長
三愛精神に基づく健土健民戦略本部
内部監査室
学園広報室
大学学長
学群部
大学院
教職センター
附属農場
附属図書館
エクステンションセンター
附属家畜病院
獣医学群
農食環境学群
環境システム学部
獣医学部
酪農学部
酪農学研究科
獣医学研究科
獣医保健看護学類
獣医学類
環境共生学類
食と健康学類
循環農学類
生命環境学科
地域環境学科
環境マネジメント学科
獣医学科
食品流通学科
食品科学科
農業経済学科
酪農学科
食品栄養学専攻（博）
食生産利用科学専攻（博）
食品栄養学専攻（修）
フードシステム専攻（修）
酪農学専攻（修）
獣医学専攻（博）
事務課
事務課
事務課
生涯学習課
国際交流課
事務課
（学科事務課）
学務課
肉製品実習室
乳製品実習室
（元野幌農場）
圃場
家畜センター
附属施設

学校法人酪農学園組織機構図（現）



歴代酪農学園事務局長

初代	川村秀雄	1950・7・1～1951・3・31
第2代	高杉英男	1951・4・1～1955・4・1
第3代	西本宗信	1955・4・1～1956・4・1
第4代	宝出久直	1956・4・1～1960・12・5
第5代	西本宗信	1960・12・5～1965・4・1
第6代	川村秀雄	1965・4・1～1967・3・31
第7代	青山義人	1967・4・1～1979・8・31
（次長）	菊池利治	1979・8・1～1981・6・30
第8代	斎藤義孝	1981・7・1～1987・6・30
第9代	菊池利治	1987・7・1～1997・8・1
第10代	諏訪馨	1997・8・1～1999・3・31
第11代	菊池利治	1999・4・1～1999・8・23
第12代	澤田憲宏	1999・8・23～2005・3・31
第13代	田中義則	2005・4・1～

現学園事務局職員（2013・4・1現在）

事務局長　田中義則

次長（総務担当）兼総務課長兼情報システム課長　廣岡亨

次長（財務担当）兼管財課長兼高校事務部長　加福幸枝

部長　関浩一

総務課	総務課長（同窓会担当）	浦川 利幸
	課長補佐	北山 陽
	同	髙橋 千鶴
	主任主事	小林 めぐみ
	同	佐藤 雄平
	同	志田 和仁
	同	島田 恵子
	同	永田 真弓
	主事	蓑島 ゆかり
情報システム課	課長補佐	廣田 政則
	主任主事	竹下 善史
財務課	課長	岩井 繋和
	主任主事	小島 比鎖子
	同	菅 昌弘
	同	森 忠大
管財課	主任主事	野村 正裕
	主任主事	保原 明子
施設課	課長兼高大寮務課長	田口 俊哉
	主事（嘱託）	尾形 仁
	同（同）	松原 久夫
	主任技師	中村 丞
高大寮務課	主任主事	中村 真智子
	主事（嘱託）	相馬 憲子
東京オフィス	所長	髙澤 靖
産業医・学校医		野呂 英行
学園広報室職員	課長補佐	中村 隆文
戦略本部職員	局長兼内部監査室長	近 雅宜
	主任主事	浅井 太一
	同	中港 康裕
	同	吉田 陽平
	主事（嘱託）	阿部 悦夫

〈付〉「北海道夏季大学」と学生の共感 ～〝頭脳交配〟を合言葉に～

埋もれた学園史の一つに、酪農学園大学を舞台に展開された「北海道夏季大学」の開校がある。１９６３(昭和38)年、当時酪農学園の学園長・理事長の任にあった黒澤酉蔵は、北海タイムス社の経営再建のために請われて社長に就いていた。

北海道開発審議会会長の重責にもあった黒澤は、かねてから戦争で遅れをとった北海道開発を「戦後日本の若い世代に認識を深めてもらい、北海道の発展を飛躍させたい」との思いを温めていた。

その思いを評論家大宅壮一に吐露したところ「本州と北海道の頭脳交配をやれば、本州にも新しい血が流れるし、北海道にもプラスになる」と意気投合し、北海タイムス社が主催し、理事長黒澤酉蔵、学長大宅壮一の体制で「北海道夏季大学」の開校が実現した。この大学は、１９６３(昭和38)年８月１日の第１回開校から第９回まで、酪農学園大学のキャンパス(創世寮)を拠点に５～７日間、受講料無料の合宿研修で行われた。この企画は全国各地の学生に大きな反響を呼び、多くの受講生が参集した。その総数は５１４名、41大学にも渡った。

各回の講師には、大宅壮一、黒澤酉蔵はもとより、学界人・政財界人などの著名人が配された。初代学長の大宅壮一は「北海道夏季大学は、今まで開いたことのない企画である。日本を代表する全国と本道の若者が集まって生活をともにし、意見を交換、頭脳的な交配で新しい日本人の型をつくってもらいたい」「頭寒足熱の例にもあるように人づくりは日本の頭部にある北海道がさきがけになってもらいたいし、その下地はある」と日本・北海道の発展を担う青年への期待を述べている。「頭脳交配」は受講生の合言葉になった。

また黒澤酉蔵は、「教育事業は営利ではできないし、即効は期待できない。…しかしこれがいつの日か、若人が成人したときに、何かの形で、たとえ北海道にそれが還元されなくても、その人に何かのプラス

を与えるに違いないという期待、確信をもっている」と夏季大学企画の意義を述べている。

酪農学園大学の草創期において、このような形で広くキャンパスが開放され、戦後日本の復興発展を担う青年の発掘に貢献したことを学園史の一端に留めておきたい。受講生は同窓会「野幌会」を組織し、未だその絆を強め政治、経済、医療、教育、マスコミなど各界の中核として活躍している。１９９３(平成5)年、北海タイムスは同窓会30周年特集を組んで大々的に報道し、意義深い企画であったことを伝えている。

☆受講生内訳　第１回(昭和38年)68名、第２回65名、第３回55名、第４回55名、第５回55名、第６回55名、第７回52名、第８回54名、第９回(昭和46年)55名　総受講生５１４名

☆受講生の在籍大学名　北海道大学　北海道教育大学　小樽商科大学　北海学園大学　北星学園大学　室蘭工業大学　北見工業大学　藤女子大学　酪農学園大学　帯広畜産大学　札幌大学　東海大学　札幌医科大学　東京大学　お茶の水女子大学　早稲田大学　慶応義塾大学　明治大学　法政大学　上智大学　立教大学　東京農業大学　日本女子大学　津田塾大学　東京女子大学　東京教育大学　国際基督教大学　大阪大学　京都大学　名古屋大学　南山大学　愛知県立大学　東北大学　獨協大学　中央大学　一橋大学　東京工業大学　大阪市立大学　琉球大学　多摩美術大学　同志社大学　受講生在籍大学41校

☆講座内容(例)　・北海道の使命(黒澤酉蔵)・北海道開拓史(北大教授高倉新一郎)・アイヌ史(郷土史研究家更科源蔵)・北海道風景論(北大名誉教授今田敬一)・北海道の酪農とその展望(道酪農協会副会長澤潤一)・特別講演(大宅壮一　町村金五)など

☆酪農学園への寄付　１９９３年7月、北海道夏季大学同窓会30周年記念大会(代表坂田隼通・岡田匡令)が開催された折、酪農学園に10万円を寄付し往時に感謝の意が表された。

第２章　酪農学園を支える団体

１　公益財団法人酪農育英会

黒澤酉蔵は、戦後のわが国の産業、経済の大きな転換期にあって、その発展は「一にも二にも人である」ことの思いを深め、酪農学園の教育体制の充実とともに、育英事業の創設構想を練り続けていた。青年期の苦学体験と困難を極めた酪農民の組織化運動から導かれたものだ。

１９５７(昭和32)年12月、文部省から財団法人酪農育英会の設立が認可され、翌年１月に第１回の理事会が開かれ、当面の課題が審議された。

基本金の造成　設立当初の法人財産は、黒澤酉蔵、むめ江の寄付によるもので、①土地２、３０３坪85(評価額１、１５０万円)、②現金53万円、合計１、２０３万円であった。基金の造成が急務になったので、その方策として、土地の売却による現金化、団体・個人への寄付の要請が決議された。

寄付は、創設者の熱意に応える形で関係会社・団体の協力が得られて順調に集まり、１９５８(昭和33)年度より事業開始の目途をつけることができた。特に、雪印乳業株式会社６５０万円(58～68年)、北海道農業協同組合連絡協議会６００万円(59～68年)、北海道農材工業株式会社１５０万円(58～70年)と約10年間にわたって協力が得られた。

その後、黒澤力太郎はじめ酪農学園後援会、多くの会社、団体、個人から継続的に寄付が寄せられ、

現在(２０１２年度)の基本財産は、５億２００万円となっている。このなかには、２０１０(平成22)年(財)北海タイムス教育文化振興財団の解散に伴い残余財産２、４９０万７、３８３円の寄付が含まれている。北海タイムス社の経営再建のために社長についた黒澤酉蔵をはじめとする酪農学園との縁から配慮されたものである。

黒澤酉蔵は育英会の設立当初、法人の基本財産として将来換金できる土地の取得を構想した。当時実弟である和雄の所有する東月寒の農地約５haを、子息の力太郎名義で売買を終え仮登記を済ませた。１９７６(昭和51)年ころから換金を始めた。この土地は都市化が進み地価が上昇したことから、育英会の基金造成による事業の充実に大いに役立った。

奨学事業の展開　奨学金の貸与は１９５８(昭和33)年度から開始された。当時酪農学園大学は開校しておらず、同年開校の三愛女子高等学校がこの年の対象になった。また、学園職員や雪印関連会社職員の子弟(特に遺族)枠を広げた。貸与事業を開始してから現在(２０１２年度)までの貸与実績は、対象者は大学、大学院、高校の学生・生徒合計４、０８９名、貸与総額は７億１、８７６万円余となっている。

なお、１９９８(平成10)年以降の貸与実績は、貸与総人数６４８名、貸与総額は２億７、７６２万円となっている。

１９８８(昭和63)年度からは、「国際化の時代を迎え、酪農学園も、発展途上のアジア地域より本学園に学ぶ学生、研究者がとみに増えつつあり、とくに私費留学生に対する援助を必要としていた。酪農育英会は、酪農学園が今後アジア地域に果たすべき使命、役割の重大なことを思い、とくに私費留

学生に対する就学・生活費援助の方法をもって、彼地よりの人材受け入れを側面から支援していきたい」との趣意により、１９８９(平成元)年に「給与奨学生規定」を定め、翌年度から奨学金の給与(返還不要)事業を開始した。

さらに２００６(平成18)年度からは、とわの森三愛高等学校の生徒に対して月額１万円の給与事業を実施し、育英事業の充実に努めている。２０１２(平成24)年度までの給与奨学金の実績は、給与総人数２７６名、給与総額は1億９１８万円余となっている。

また１９８７(昭和62)年、酪農育英会設立30周年の記念として同年より、学園内の40歳未満の若手研究者に研究奨励金(一件30万円)を交付することとし、その実績は２０１２(平成24)年度までに、大学獣医学科、食品科学科、酪農学科の准教授・講師・助手28名に交付されている。

さらに、戦後酪農の復興を願い黒澤酉蔵の提案により発足した日本酪農青年研究連盟(日本酪農青年研究連盟)の活動(優秀発表者)に対して、１９５８(昭和33)年より賞金を交付している。この賞金は、当初は2万円であったが、その後3万円、5万円、10万円と増額し、２０１１(平成23)年からは30万円となっている。

公益財団法人へ　２００８(平成20)年12月に新しい公益法人制度が施行され、認定を受けている財団・社団法人は、２０１３(平成25)年11月までに公益法人の認定を受けるか、一般法人として認可を得るか、あるいは解散するかの選択が迫られた。公益法人になると個人・団体等の寄付が減税になり、法人自体も源泉所得税等が非課税となるなどの優遇措置が講じられる。

そのためには、公益目的事業を行うための経理的基盤がしっかりしていること、公益目的事業比率

が50％以上であることなどの厳しい条件をクリアしなければならないが、酪農育英会は公益法人の認可を得るべく準備を進めた結果、２０１３年４月１日、財団法人から「公益財団法人酪農育英会」として新たにスタートすることになった。育英事業の一層の充実が求められている。

歴代理事長

黒澤酉蔵　１９５７・12・27～82・２・６
佐藤　貢　１９８２・６・30～92・６・29
黒澤力太郎　１９９２・６・30～２００９・６・29
原田　勇　２００９・６・30～12・12・16
仙北富志和　２０１３・１・29～２０１３・３・31

歴代常務理事

黒澤力太郎　１９５７・12・27～１９８８・６・29
菊池利治　１９８８・６・29～２００８・７・６
渡邊誠治　２００８・７・30～２００９・６・29
日下雅順　２００９・６・30～２０１３・３・31

（公益財団法人発足時　２０１３年４月１日）

現理事

仙北富志和（理事長）
日下雅順（常務理事）
金川幹司
平尾和義
野村武
永田亮
町村均

現評議員

平棟孝志
宮田勇
山﨑惠子
麻田信二
谷山弘行
黒畑勝男
榮忍

表１　基本金の推移

（単位：千円）

年　度	基本金繰入額	基本金残額
1957　設置分（設立当時）（昭和32）	12,030	12,030
1958～1965（昭和33～40）	17,120	29,150
1966～1975（ 同 41～50）	23,850	53,000
1976～1985（ 同 51～60）	195,000	248,000
1986～1993（ 同 61～平成５）	197,000	445,000
1994（平成６）	15,000	460,000
1995（ 同 ７）	7,000	467,000
1996（ 同 ８）	4,000	471,000
1997（ 同 ９）	4,000	475,000
1998（ 同 10）	4,000	479,000
1999（ 同 11）	4,000	483,000
2000（ 同 12）	2,000	485,000
2001（ 同 13）	1,000	486,000
2002～2006（ 同 14～18）	0	486,000
2007（ 同 19）	14,000	500,000
2008（ 同 20）	2,000	502,000
2009～2012（平成21～24）	0	502,000

表２　年度別奨学金貸与学校別内訳

年　度	奨学金貸与実績		貸与人数（人）			
	人数	金額	大学	短大	大学院	高校
1998（平成10）	45	18,600,000	38	4	1	2
1999（ 同 11）	44	17,790,000	42			2
2000（ 同 12）	50	20,070,000	44			6
2001（ 同 13）	51	21,270,000	45		1	5
2002（ 同 14）	43	17,880,000	35			8
2003（ 同 15）	37	15,700,000	31			6
2004（ 同 16）	36	15,440,000	29			7
2005（ 同 17）	37	16,920,000	29	3	1	4
2006（ 同 18）	39	17,460,000	32	1	1	5
2007（ 同 19）	42	18,720,000	35	1		6
2008（ 同 20）	45	19,200,000	36			9
2009（ 同 21）	46	19,600,000	38		1	7
2010（ 同 22）	45	19,610,000	38		2	5
2011（ 同 23）	46	20,160,000	39		2	5
2012（ 同 24）	42	19,200,000	38		1	3
合　計	648	277,620,000	549	9	10	80

表３　奨学金（貸与月額）の推移

（単位：円）

年　度	大学・短大	大学院	高校
1958～1971（昭和33～46）	3,000		2,000 （1,000）
1972～1974（昭和47～49）	4,000		3,000 （2,000）
1975～1977（昭和50～52）	7,000		4,000
1978～1979（ 同 53～54）	12,000	12,000	6,000
1980～1981（ 同 55～56）	15,000	15,000	7,000
1982～1983（ 同 57～58）	17,000	17,000	8,000
1984～1986（ 同 59～61）	20,000	20,000	9,000
1987～1988（ 同 62～63）	23,000	23,000	10,000
1989～1991（平成１～ ３）	30,000	30,000	10,000
1992～1998（ 同 ４～10）	35,000	50,000	15,000
1999～（平成11～）	40,000	50,000	20,000

注）高校の（　）内は寮生活生徒

表４　年度別給与奨学金の実績

（単位：円）

年　度	アジア地域私費留学生		邦人私費留学生	邦人高校生	人数	給与金額合計
	大学・短大生	院生・研究生				
1990（平成２）	2	2			4	2,250,000
1991（ 同 ３）	4	1	1		6	3,605,057
1992（ 同 ４）	6	1	1		8	4,449,818
1993（ 同 ５）	6	1	1		8	3,849,986
1994（ 同 ６）	5	1	1		7	4,200,000
1995（ 同 ７）	4	1			5	2,700,000
1996（ 同 ８）	5	5			10	6,000,000
1997（ 同 ９）	5	3			8	4,350,000
1998（ 同10）	3	3	1		7	4,200,000
1999（ 同11）	5	4	1		10	5,400,000
2000（ 同12）	6	4	1		11	6,000,000
2001（ 同13）	10	4	1		15	8,550,000
2002（ 同14）	10	2			12	7,200,000
2003（ 同15）	10	2			12	6,000,000
2004（ 同16）	8	2			10	5,040,000
2005（ 同17）	5	2			7	3,440,000
2006（ 同18）	6	2		5	13	4,260,000
2007（ 同19）	3	2		9	14	3,420,000
2008（ 同20）	1	2		14	17	2,910,000
2009（ 同21）	4	2		15	21	4,220,000
2010（ 同22）	2	4		15	21	5,160,000
2011（ 同23）	2	5		18	25	5,960,000
2012（ 同24）	1	7		17	25	6,020,000
総　計	113	62	8	93	276	109,184,861

＊平成３年～５年の邦人私費留学生に対する奨学金は外貨建てにより給与
（平成３：605,057 円、平成４：599,818 円、平成５：199,986 円）
＊年度途中での採用者及び採用休止（停止）者もいるが、それぞれ１名として計上

２　公益財団法人酪農学園後援会

後援会活動の経緯　１９６０年代になって学園は、三愛女子高等学校や酪農学園大学を相次いで開校したが、これに伴う教育・施設、さらには老朽化した機農高等学校の改築などに多額の資金が必要になった。こうした学園の事情を、経済的に援助することを目的に、１９６０(昭和35)年５月31日、当時の北海道知事町村金五を会長に「酪農学園後援会」が設立された。

その活動によって、２億５、５００万円余の募金を得、大学校舎や女子高校の校舎・体育館、機農高校の校舎・体育館などが新増築された。１９６９(昭和44)年11月18日、この後援会組織はより積極的な活動に取り組むこととし、文部省より財団法人としての認可を得た。会長に経団連会長植村甲午郎を選出し、基金の造成と活動資金の募金を活発に展開した結果、１９７０(昭和45)年度から１９７７(昭和52)年度までに約５億２、７００万円が募り、大学校舎の新築や附属施設の充実が図られた。

１９７８年５月、植村会長が病気退任したため、再び町村金五(参議院議員)を会長に選出した。学園が展望した長期財務計画への対応、さらには黒澤記念講堂や学園本館、あるいは大学の学部・学科の開設、大学中央館の新築など大幅な資金造成を図ることの必要性に迫られた。

１９８８(昭和63)年５月をもって町村金五会長が退任し、その後倉成成正(衆議院議員)、町村信孝(衆議院議員)、町村末吉(町村農場主)に引き継がれた。２００７(平成19)年７月からは宮田勇(当時全国農業協同組合中央会会長)が就任した。

＜酪農学園後援会趣意書―財団法人発足時―＞

酪農学園は酪農後継者をはじめ、幾多の人材を輩出し世の注目を集めているところであるが、国の総合農政における酪農の使命が一段と強調されている折柄、酪農学園の教育に対する期待が愈々大きい。然るに財政的に恵まれない私学、殊に酪農学園の如く理科系私学においては多額の施設、設備費を要する反面、学生生徒は比較的少数のため教育効果を期す上での財政上の負担は一層容易ならないものがある。従って、財政確立のもとに教育内容の充実を図り酪農学園の使命達成のため、財団法人酪農学園後援会を設立する。

募金活動と広報活動

募金活動は、卒業生を中核に在校生父母、学園教職員、企業団体、会社、農業団体、及び個人を会員とした維持会員制度をつくり、組織の拡大充実を図ってきた。一方、会員相互の連携を深めることや情報交換、さらには学園の現況を広く理解してもらうために、会報「健土健民」誌を年２～３回、教職員を対象にした「身土不二」誌を年４回発行している。

募金活動の成果は、後援会が発足した１９６０(昭和35)年度から２０１１(平成23)年度までの寄付金・維持会員費の総額は34億２、６５０万円余(運用利息込み47億６、３２８万円余)となり、学園助成金の総額は30億６、６８５万円、基金積立の総額は12億２、８６８万円余となっている。(表１)

＜基本財産の実績　２０１２年３月31日現在　時価評価額＞

基金積立預金	６億６、２１２万円（寄付金、維持会費及び運用収益から基金へ積立累計）
黒澤記念講堂基金	１、５３４万円（黒澤記念講堂建設特別寄付金より基金繰入分）

佐藤貢基金	３、９１８万円	（佐藤貢名誉理事長　指定基金寄付）
土谷基金	９０５万円	（土谷長松　（株）土谷製作所会長　指定基金寄付）
宇都宮基金	１、０００万円	（宇都宮潤　宇都宮牧場社長　指定基金寄付）
雪印国際交流基金	１億円	（（株）雪印乳業の国際交流金　指定寄付）
アルバーター大学奨学基金	３、０００万円	（佐藤貢・（株）雪印乳業　指定寄付）
クロバー食品基金	４、９６４万円	
合　計	９億１、５３５万円	

公益財団法人へ　財団法人酪農学園後援会は、文部科学大臣から特定公益増進法人としての認定を受け酪農学園の教育事情を支援してきた。２００８（平成20）年12月に公益法人制度が施行され、認定を受けている財団・社団法人は、２０１３（平成25）年11月までに「公益法人か、一般法人か、解散するか」の選択が迫られた。公益法人になると税制上の優遇措置が講じられる。

酪農学園後援会は、公益目的事業比率50％以上であることなどの条件に加へ、その設立趣旨からして「指定校に対する助成事業」であることから、公益法人としての認定基準に該当するか否か懸念された。申請先である公益認定等委員会（北海道総務部法人局）と数次にわたる協議の結果、他の事例をも参酌して公益性が認められて２０１３（平成25）年４月１日から「公益財団法人酪農学園後援会」として新たにスタートすることになった。教育事業支援の一層活発な役割が期待されている。

酪農学園後援会歴代役員（２０１３・３・31現在）

会長

町村金五　1960・4・6～69・11・18
植村甲午郎　1969・11・18～78・5・6
町村金五　1978・5・6～88・5・30
倉成　正　1988・5・30～96・7・3
町村信孝　1996・8・30～98・3・25
町村末吉　1998・3・25～2007・6・30
宮田　勇　2007・7・1～現

副会長

高橋雄之助　1969・11・18～79・6・14
瀬尾俊三　1969・11・18～83・6・30
三井武光　1969・11・18～83・6・30
早坂正吉　1979・6・14～83・6・30
床鍋繁則　1983・6・30～94・5・25
福屋茂見　1983・6・30～93・5・27
山本庸一　1983・6・30～88・5・30
鈴木常正　1988・5・30～91・6・30
正野勝也　1991・7・1～99・6・30
町村末吉　1993・5・27～98・3・25
三澤政雄　1994・5・25～95・6・30
阿部忠男　1995・7・1～2000・6・30
高倉勝孝　1998・3・25～現
石川哲郎　1999・7・1～2000・12・14
宮田　勇　2000・7・1～03・6・30
西　紘平　2000・7・1～03・6・30
山口義弘　2003・7・1～05・5・6
金川幹司　2003・7・1～現
飛田稔章　2005・7・1～07・6・30
土谷令次　2007・7・1～現
髙野瀬忠明　2007・7・1～現

相談役

堂垣内尚弘　1973・7・6～2004・4・2
町村金五　1973・7・6～79・6・14
高田富与　1973・7・6～76・6・30
黒澤酉蔵　1973・7・6～83・6・30
佐藤　貢　1973・7・6～2000・6・30

菊地正一 1979・6・14～2012・9・5
山岸六郎 1983・6・30～2002・3・12
鈴木常正 1991・7・1～99・6・30
土谷長松 1991・7・1～2000・6・30
原田新介 1994・5・25～2000・6・30
正野勝也 1999・7・1～現
石塚喜明 2003・7・1～05・9・13
広瀬可恒 2003・7・1～07・6・30
西本宗信 2003・7・1～07・6・30
高倉勝孝 2007・7・1～10・6・4
黒澤力太郎 2007・7・1～現
町村末吉 2007・7・1～現
植田勝美 2010・7・1～2010・11・5

常務理事

菊地正一 1969・11・18～79・6・14
山岸六郎 1969・11・18～83・6・30（東京）
青山義人 1979・6・14～83・6・30
小林哲威 1983・6・30～88・5・30
原田新介 1983・6・30～94・5・25（東京）
植田勝美 1988・5・31～2000・6・30
濱本恒男 1994・5・25～95・6・30（東京）
戸水雅智 1995・7・1～2001・6・30（東京）
井上詳介 2000・7・1～07・6・30
須田利明 2001・7・1～現（東京）
永田享 2007・7・1～現

監事

安達勇 1970・2・14～79・6・14
増田信一 1970・2・14～73・7・6
西佐久一 1970・2・14～87・6・30
神田正秋 1973・7・6～76・6・30
三上孫一 1973・7・6～83・6・30
小林秀敏 1976・6・30～81・6・14
床鍋繁則 1979・6・14～83・6・30
大関正人 1983・6・30～91・6・30
堀巳之松 1983・6・30～87・6・30
木下知行 1987・6・30～91・6・30
黒澤力太郎 1987・6・30～2007・6・30
中島亘 1991・7・1～2000・6・30
山﨑真治 1991・7・1～95・6・30
物井清人 2000・7・1～03・6・30

二口清造　2003・7・1～05・6・30
遠藤秀孝　2005・7・1～現
福屋脩三　2007・7・1～09・9・1
松尾道義　2010・3・24～現

（公益財団法人発足時役員　2013年4月1日）

現理事　8名

宮田　勇（理事長）
麻田信二
井上詳介
高野瀬忠明
土谷令次
永田　享（常務理事）
長谷川行夫
細田治憲
河田啓一郎
佐々木靖子
堀内信良
渡邊進一郎
掛村博之
榮　忍
谷山弘行
野村　武
紺野勝歳

現評議員　12名

熊野康隆
佐藤　泉
金川弘司

現監事

遠藤秀孝
松尾道義

表１　寄附金・維持会費・学園助成金・基金積立内訳　（単位：千円）

年　度	寄付金・維持会費	学園助成金	基金積立
1960（昭和35）～1968（昭和43）	255,461	245,461	
1969	76,249	54,610	22,500
1970（昭和45）～1977（昭和52）	526,968	300,565	333,800
1978	280,917	94,667	149,500
1979	78,336	110,456	0
1980（昭和55）	66,140	82,365	3,000
1981	58,416	92,457	1,200
1982	58,429	93,447	1,000
1983	78,359	59,920	5,000
1984	134,055	167,295	7,000
1985（昭和60）	61,475	69,686	22,000
1986	161,859	211,926	9,800
1987	94,625	39,023	55,400
1988	94,314	87,799	33,000
1989	55,402	44,455	40,800
1990（平成2）	40,023	40,570	39,700
1991	68,355	51,695	53,200
1992	42,790	42,234	30,700
1993	78,667	58,012	53,500
1994	79,660	51,260	37,000
1995（平成7）	115,885	50,563	74,000
1996	84,219	47,213	40,000
1997	50,409	49,717	510
1998	50,219	46,982	3,000
1999	80,715	52,558	33,000
2000（平成12）	66,977	71,169	3,000
2001	44,888	47,683	13,000
2002	44,850	53,941	15,000
2003	52,488	62,870	11,000
2004	56,925	64,152	13,000
2005（平成17）	58,149	65,913	55,076
2006	54,415	67,802	50,000
2007	46,547	86,574	20,000
2008	56,857	80,792	0
2009	56,052	74,554	0
2010（平成22）	57,257	73,952	0
2011	59,151	72,512	0
合　計	3,426,503	3,066,850	1,228,686

３　酪農学園同窓会連合会

１９３３(昭和８)年、酪農義塾が創設されてから80周年を迎える今日までに、機農高等学校、短期大学酪農学校(通信教育)、酪農学園短期大学、三愛女子高等学校、とわの森三愛高等学校、酪農学園大学を設置し、発展してきた酪農学園は、さらに大学院、新学科、新学部等を開設して多くの卒業生を社会に送り出してきた。これらの同窓生は北海道に限らず全国各地において農業界をはじめ教育、文化、政治、経済などのあらゆる分野で大きな活躍を続けている。

活動の状況　各学校の卒業生は、かねてから独自の単位同窓会を組織し、それぞれ活動を行ってきた。しかし、１９７２(昭和47)年、この学校単位の同窓会をもって連合会を組織し、相互連携の下に強力な発展を図ろうという気運が高まった。そのため関係者による準備委員会が持たれ、検討の結果、１９７３(昭和48)年６月23日「酪農学園同窓会連合会」が設立され、初代会長に中西文雄(酪農義塾)が就任した。

この同窓会連合会は、単位同窓会相互の連携と緊密化によって、単位同窓会の向上発展を図るとともに、酪農学園の教育振興に寄与することを目的とし、学園内に事務局を設置し活動を続けてきた。

30数年前の１９８０(昭和55)年時の学園同窓生は１７、８２９名(酪農義塾87、機農高等学校３、４０９、同研究科、別科、選科農機科３２１、三愛女子高等学校４、５４３、酪農学園短期大学３、３４５、酪農学園大学５、３３３)、全国の支部数は13であったが、現在は５５、１４３名に達し、支部数も54支部に増えている。

この間、１９７５(昭和50)年２月、中西会長に代わって高橋節郎(短大創期生)が就任した。

酪農学園50周年の記念事業の一環として進められた同窓生会館建設は、同窓生および学園関係者の多大なるご協力とご厚志により１９８３(昭和58)年に完成し、80周年記念事業の一環である同窓生会館再整備事業の中でより一層の充実が図られようとしている。

また酪農学園大学は２０１１(平成23)年４月より、大学改革の中で、従来の学部学科制から学群学類制を導入し、２学群５学類へ再編した。酪農学園短期大学部は２０１２(平成24)年３月31日最後の卒業生を送り出し、62年に亘る歴史に幕を降ろすこととなった。

組織の再編　２０１２(平成24)年11月23日、とわの森三愛高等学校は20周年の節目に「機農会」「三愛会」を「とわの森三愛高等学校同窓会」に統合することとなった。

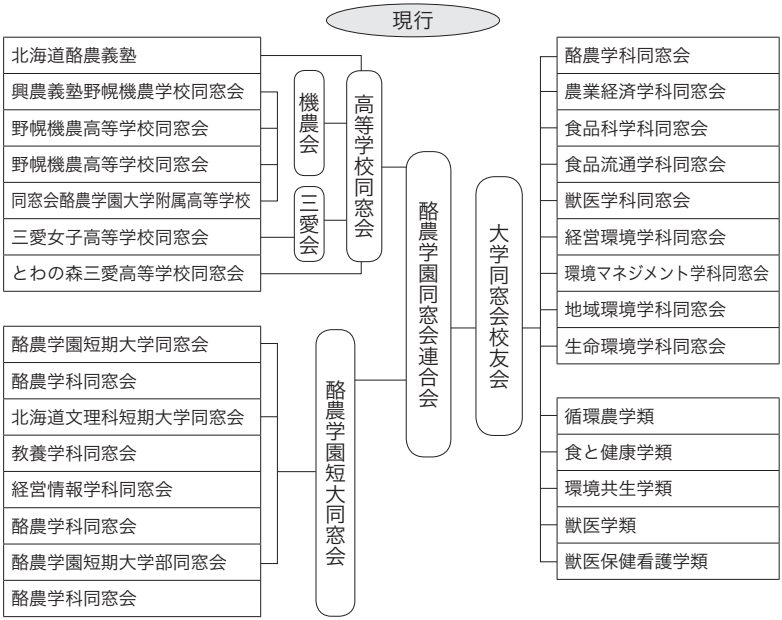
大学同窓会も２０１４(平成26)年３月の学部学科最後の卒業生を待って、学科同窓会から大学同窓会校友会として一元化することを組織決定している。したがって現在の単位同窓会は、とわの森三愛高等学校、酪農学園短期大学部、酪農学園大学の単位同窓会によって構成されている。

２００６(平成18)年、関東同窓会を中心に支部同窓会を含めた同窓会連合会の組織改革が進められ、２００９(平成21)年３月には会則が変更され、地区制の導入および代議員制の導入が決定されている。

２００７(平成19)年には、高橋会長から野村武が三代目会長に就任し、現在、全国12地区75支部が会則上で定められており、会則の具現化が進められている。

２０１２(平成24)年５月、全国より50名を超える理事・代議員が集まり、新会則による初めての理事・代議員総会が開催された。

現在の役員構成は、各単位同窓会および地区同窓会より選出された、会長１名、副会長４名、理事



23名、代議員56名、監事2名で構成されている。

同窓会連合会では、発足以来膨大な同窓生会員の住所および動向の掌握を進め、現在会員の約7割の住所を管理している。

２０１１(平成23)年1月に学園からの要請を受け、18歳人口減少に伴う入学者確保対策として同窓生入試アドバイザーの導入や就職活動における同窓会組織の活用等を推進している。

地区・支部同窓会（２０１３年３月現在）（12地区55支部）

◇道内地域の地区・支部同窓会（5地区16支部）（　）は旧支部名

北海道１区（石狩）　札幌　千歳（千歳　恵庭）
北海道２区（道央）　空知第二（北空知）　日高第一（新冠）
北海道３区（道南）　渡島第一　渡島第二　檜山
北海道４区（道北）　上川第三（名寄　剣渕）　留萌第二（幌延）
北海道５区（道東）　十勝第一　第二　網走第一（斜網）　網走第二（紋別）
釧路第一（鶴居）　釧路第二（標茶）　根室第二（根室）

◇道外地域の地区・支部同窓会（7地区39支部）（　）は未設置支部

東北地区　青森　岩手　宮城　秋田　山形　福島　６支部
関東甲信越地区　茨城　栃木　群馬　埼玉　千葉　東京都　神奈川　新潟　山梨　長野　10支部
中部地区　富山　石川　福井　岐阜　静岡　愛知　（三重）６支部
近畿地区　京都　大阪　兵庫　和歌山　（滋賀）　（奈良）４支部
中国地区　岡山　広島　山口　（鳥取）　（島根）３支部
四国地区　徳島　愛媛　高知　（香川）３支部
九州地区　福岡　佐賀　長崎　熊本　宮崎　鹿児島　沖縄　（大分）７支部

歴代会長・副会長

会長

中西文雄 1973・6～1975・2
高橋節郎 1975・2～2007・5
野村武 2007・5～現在

副会長

高橋節郎 1973・6～1975・2
石田貞夫 1973・6～現在
野村武 1995・5～2007・5
高倉勝孝 1973・6～1991・5
中井保博 1991・5～2007・6
窪田佐智子 1973・6～1989・5
小山内豊美 1989・5～1995・5
山崎惠子 1995・5～2007・5
浅野政輝 2007・5～現在
板倉敏雄 2007・5～2011・5
堀内信良 2011・5～現在
野田修平 2007・5～2008・5
南雲良三 2008・5～2012・5
岡田勉 2012・5～現在

歴代事務局長

辻田武作 1973・6～1976・3
安藤功一 1976・4～1979・4
杉田文雄 1979・4～1980・7
山下正亮 1980・7～1981・7
深谷正男 1981・7～1985・8
木村敏雄 1985・8～2004・5
新谷良一 2004・5～2011・6
浦川利幸 2011・6～現在

顧問

高橋節郎

理事

長井信之
伊藤明美
大澤宏一
松原純子
阿部綾子
澤口正義
高蓋和朗
後藤久雄

三宅幸治
山崎惠子
竹花一成
島田恵子
紺野勝歳
浅井健治
渡辺博文

中川修
野原康
上村正
佐藤篤
都築恒夫
山本信平
古賀浩
友光英

表１　同窓生会員「大学、短大、高校、義塾」卒業年度別推移（調査月は５月）

（単位：人）

年　次	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	累 計
大学・大学院	947	967	956	884	914	882	827	787	805	750	27,357
大学院計	24	33	31	33	32	25	24	27	40	31	1440
獣医学研究科(修士)＊											883
獣医学研究科(博士)	6	10	4	6	9	1	5	2	4	4	87
酪農学研究科(修士)	16	21	26	24	21	17	17	23	34	27	430
酪農学研究科(博士)	2	2	1	3	2	7	2	2	2	0	40
大学計	923	934	925	851	882	857	803	760	765	719	25,917
酪農学科	206	163	183	173	185	175	173	173	174	161	9,184
農業経済学科	122	132	113	108	111	110	83	76	69	63	5,223
食品科学科(食品)	101	111	89	73	70	73	66	63	61	54	2,052
食品科学科(健康)			30	41	40	40	39	37	44	37	308
食品流通学科	79	77	88	71	84	68	56	48	60	67	1,150
獣医学科	132	151	138	137	147	136	139	139	131	141	5,218
経営環境学科	124	148	142	121	110	109	13	2	0	0	895
環境マネジメント学科							57	39	33	19	148
地域環境学科	159	152	142	127	135	146	84	80	85	69	1,327
生命環境学科							93	103	108	108	412
短大計	65	60	63	53	49	53	40	51	29	43	9,487
酪農科(Ⅱコースを含む)	65	60	63	53	49	53	40	51	29	43	7,256
教養学科＊											1,314
経営情報学科＊											917
高校計	333	338	371	324	303	338	313	262	217	222	18,299
酪農経営科	23	29	32	38	35	36	25	23	19	19	5,108
普通科	287	281	327	286	268	302	288	239	198	200	12,781
英語科	23	28	12								386
通信制課程									2	3	5
合計(大学院+大学+短大+高校)	1,345	1,365	1,390	1,261	1,266	1,273	1,180	1,100	1,053	1,015	55,143
酪農義塾											303
酪農学校											92,000
総 合 計											147,446

注）卒業生数は、調査集計時点で人数に差異がある。
　　とわの森三愛高校、酪農経営科学校統合前卒業生累計数　4,450 名
　　＊制度変更により獣医学研究科(修士課程)は廃止
　　＊制度変更により短期大学教養学科、経営情報学科は廃止

４　北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

協会設立の経緯　カナダ・アルバータ州の政府関係者と親交の深かった佐藤貢理事長は、かねてから本道と気候風土の類似しているアルバータ州と、教職員や学生および実習生の相互交流を通した両国の文化理解および、酪農科学技術の研究推進と向上を図ることを考え、これの具体策について両者の間で検討を進めていた。

１９７３(昭和48)年５月、アルバータ州農業省よりこの交流構想に関する提案があったため、急速に話し合いが進展して、同年９月10日、アルバータ州エドモントンにおいて開催された北海道貿易物産展に出席した佐藤貢理事長と、アルバータ州農業省および同州立大学との間に具体的な計画の合意が成立した。北海道側は事務所を酪農学園に設け、大学・短大と連携をとって準備作業を進めた。

このようにして１９７３年10月16日「北海道アルバータ酪農科学技術交流協会」(会長佐藤貢)の設立となり、アルバータ大学に１９７４(昭和49)年７月に第１回の酪農交流生８名、同年10月には本学教員鮫島邦彦助教授が１年間派遣された。一方、アルバータ州からは、第１回酪農交流生としてパトリシア・ファリスさんを迎えた。その後も毎年大学、短大から研究者や学生を派遣したほか、多くの酪農青年の相互交流を実施して、酪農の振興と日加親善のため大きな成果を収めてきた。

ことに最初の10年間は、教員・学生・酪農青年の三者レベルでの交流事業であったが、１９８５(昭和60)年にアルバータ州立大学が道内３大学との交流に変更したため、酪農青年の交流が主になった。しかしながら、１９８９(平成１)年、本交流事業の派遣と受入の数のバランスが取れていないという

ことで、カナダ連邦政府が労働ビザを発行停止したため酪農青年の交流は中止となった。

新たな交流展開　このため１９９０(平成2)年、アルバータ協会は実学に重きを置くオールズカレッジと協定を結び、学生の派遣を開始した。本協定によるオールズカレッジへの派遣学生総数は、２０１３(平成25)年３月末現在で72名に上る。また、アルバータ酪農協会の協力により、１９９２(平成4)年４月に酪農青年(ワーキング・ホリデービザ)の派遣が可能になった。１９９６(平成8)年５月にはアルバータ州立大学のフレーザー学長の熱心な交流再開の申し出を受け、教員・学生・酪農青年の交流が継続できるようになった。

交流はオールズカレッジに学生を派遣する事業に限定されていたが、２００６(平成18)年より派遣留学制度にアルバータ州立大学で英語を学ぶ英語研修コースが加えられ、派遣先が拡大した。また、これまでの交流事業に加え、酪農環境、家畜衛生、農業教育、産業クラスターなどの諸分野においてアルバータ州をはじめとするカナダから実践的優秀な技術者を招き、２００１(平成13)年度より海外農業技術セミナーを開催して北海道地域への酪農技術の積極的導入を図っている。開催状況は別表のとおりである。さらにアルバータ協会は、これまで同州に派遣した酪農研修生のネットワークづくりを進め、道内各地、生産現場の技術普及を通じ、本道酪農の発展に一層寄与するために努力している。なお、本会は２００５(平成17)年度まで北海道の助成を得ていた。

このほか会報「アルバータニュース(前アルバータだより)」を発行(年1回)し、会員相互の交流を図っている。また、１９９８(平成10)年６月27日には創立25周年記念祝賀会を挙行するとともに「25周年記念誌」(Ａ４判52頁)を刊行した。２００３(平成15)年６月27日には設立30周年記念式典が挙行された。

海外農業技術セミナー開催実績

年度	講師・所属	テーマ
2001 (平成13)	講師 ピエール・レベスク教授 所属 カナダ・ラ・ポカティエール農業技術大学	効果的な乳房炎防除と乳質管理
2002 (同 14)	講師 デイビッド・ハミルトン獣医師 所属 モーデン動物病院	カナダにおける乳牛の栄養管理と疾病予防
2003 (同 15)	講師 ゴードン・アトキンス獣医師 所属 アトキンス家畜診療所	乳牛の繁殖能力における重要な要素を理解する
2004 (同 16)	講師 ルーベン・ジョン・メイプルトフト教授 所属 カナダ・サスカチュワン大学獣医学部	高泌乳牛における受胎性と繁殖管理
2005 (同 17)	講師 久米新一教授 所属 京都大学大学院農学研究科	高泌乳牛の栄養管理の実際
	講師 張敬萬副教授 所属 韓国・韓京大学校動物生命資源学科	韓国酪農の現状と将来
2006 (同 18)	講師 ジョン・ケネリー教授 所属 カナダ・アルバータ大学 農業・生命環境学部	デザイナーズ・ミルク ～次世代高機能ミルクへの可能性～
2007 (同 19)	講師 デイヴィッド・クリステンセン名誉教授 所属 カナダ・サスカチュワン大学農・生物資源学部	高泌乳達成のための飼養管理
2008 (同 20)	講師 マイク・サウスウッド氏 所属 カナダ・アルバータミルク ジェネラルマネージャー	コスト高騰時代における酪農新戦略 ～カナディアン アプローチ～
2009 (同 21)	講師 グレッグ・アダムス教授 所属 カナダ・サスカチュワン大学獣医学部	牛から卵子まで ～繁殖機能を超音波画像に映し出す～
2010 (同 22)	講師 デイビッド・クラック氏 所属 クラックホルム・ホルスタイン牧場主	私の酪農経営と乳牛改良の戦略
2011 (同 23)	講師 カラム・マッキンベン氏 所属 ルックアウト・ホルスタイン牧場主	優秀な乳牛をどう管理すれば最大の利益をもたらすか
2012 (同 24)	講師 デビッド・チャラック氏 所属 ロッキーマウンテン・ホルスタイン社長	乳牛改良におけるジェノミック・パワー

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会 交流実績一覧（2013年４月現在）

年度	教育者研究者		学生		酪農青年		計			備考
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計	
1974（昭和49）	1				8		9		9	
1975（同 50）	1				9	1	10	1	11	
1976（同 51）	1				9	1	10	1	11	
1977（同 52）	1		1		10	6	12	6	18	学生派遣はアルバータ大学大学院
1978（同 53）	1				10	2	11	2	13	
1979（同 54）	1	1	1		8	4	10	5	15	学生派遣はアルバータ大学大学院
1980（同 55）	1	1			9	3	10	4	14	
1981（同 56）	1	1			10	4	11	5	16	
1982（同 57）	1		1		10	5	12	5	17	学生派遣はアルバータ大学大学院
1983（同 58）	1	2			4	4	5	6	11	
1984（同 59）		1			5	2	5	3	8	
1985（同 60）		1			7	1	7	2	9	
1986（同 61）					7	1	7	1	8	
1987（同 62）					8	2	8	2	10	
1988（同 63）					9	1	9	1	10	
1989（平成元）					6		6		6	
1990（同 2）			1		10		11		11	学生派遣はオールズカレッジ
1991（同 3）			4				4		4	オールズカレッジ
1992（同 4）		1	1		1		2	1	3	学生派遣はオールズカレッジ
1993（同 5）			7		2		9		9	学生派遣はオールズカレッジ
1994（同 6）			2				2		2	オールズカレッジ

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会 交流実績一覧（つづき）

年 度	教育者研究者		学 生		酪農青年		計			備 考
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計	
1995（平成７）			4				4		4	オールズカレッジ
1996（同 8）			7		3		10		10	学生派遣はオールズカレッジ
1997（同 9）			10		1		11		11	学生派遣はオールズカレッジ６名 アルバータ大４名
1998（同 10）			6				6		6	オールズカレッジ
1999（同 11）			2				2		2	オールズカレッジ
2000（同 12）			4				4		4	オールズカレッジ
2001（同 13）			3				3		3	オールズカレッジ
2002（同 14）			1				1		1	オールズカレッジ
2003（同 15）			2				2		2	オールズカレッジ
2004（同 16）			1				1		1	オールズカレッジ
2005（同 17）			1				1		1	オールズカレッジ
2006（同 18）			4				4		4	オールズカレッジ (内１名は英語研修コースで派遣)
2007（同 19）			3				3		3	オールズカレッジ (内２名は英語研修コースで派遣)
2008（同 20）			3				3		3	オールズカレッジ （３名を英語研修コースで派遣）
2009（同 21）			3				3		3	オールズカレッジ （１名を英語研修コースで派遣）
2010（同 22）			4				4		4	オールズカレッジ （２名を英語研修コースで派遣）
2011（同 23）			1				1		1	オールズカレッジ （１名を英語研修コースで派遣）
2012（同 24）			2				2		2	オールズカレッジ
2013（同 25）			2				2		2	オールズカレッジ （２名を英語研修コースで派遣）
計	10	8	81	0	146	37	237	45	282	
合 計	18		81		183		282			

※酪農青年派遣事業はワーキングビザ渡航、1992年からはワーキングホリデービザで渡航
※2006年度学生派遣より、英語研修コースを新設（ファームステイの代わりにアルバータ大学エクステンション学部で集中英語研修）

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会役員（２０１２年６月29日現在）

名誉会長
高橋はるみ

顧問
羽貝敏彦
佐藤俊彰

会長
麻田信二

副会長
金川幹司
小川澄男

常任理事
佐々木均

理事
原田勇
仙北富志和
谷山弘行
安宅一夫
掛村博之
北良治
長谷川行夫
菅沼英二
蒔田浩平
髙橋茂

監事
永田享
高橋徹

参与
小山内薫
干場信司
林正信
岩井洋
森田茂
發地喜久治
石下真人
尾碕亨
田村豊
加藤敏文
押谷一
星野仏方
野村武
堀内信良

事務局長
堂地修

5　酪農学園職員組合

組合の発足　酪農学園職員組合の誕生は１９６２(昭和37)年２月27日であった。この日の午後５時、野幌教会附属幼稚園ホールに16名が参加して賛美歌・聖書の朗読、祈祷の中で結成大会が開かれ、組合結成の歴史的な一歩をしるした。

それまでは１９４８(昭和23)年に設立された酪農学園共済会があった。この共済会は学園に働くすべての教職員を会員とし、会員の親睦、教養、生活の安定、体育の向上および福利の増進などを目的としていた中、その後「学園教育の理想を推進するとともに会員の生活を擁護する……」と生活の擁護を前面に掲げるなどして、長年にわたって労使間の問題討議の場として、一定の役割りを果たしてきた。

しかし、たまたま世論を二分する、いわゆる60年安保(昭和35年)を背景に、酪農学園にも労働組合法に基づく組合を組織しようという気運が急速に高まり、有志らによって周到な学習と準備が静かに進められていた。

当時の社会風潮は、まだまだ労働組合に対しての偏見や懐疑の念を抱く者も多くタブー視されていた。そのような時代相は酪農学園も同様であった。結成大会出席者わずかに16名――という人員からも当時の状況をうかがい知ることができよう。次の16名の人たちこそが酪農学園職員組合のパイオニアであった。

阿部　彰　五十嵐　厳　井上昌保　浦部浩行
大澤二郎　岡部孝也　川端順造　神　正士
塩入　隆　斎藤忠夫　杉山　昇　長井　実
原　国夫　野村　喬　松縄善三郎　本谷静江

組合活動の展開　しかしその後、これらの人たちを中心とした一途な働きかけによって着実に組合への理解も深まって、同年12月には多くの教職員が参加して共済会を解散し、本格的な組合活動が始まった。

以来、組合は組合員の自主的な団結権および団体交渉権を確立し、労働条件の維持改善、社会的、経済的地位の向上を図るとともに、併せて学園の教育目的達成に寄与する一方、学園の建学精神と民主化、民主教育の推進、労働条件および待遇の改善、組織の拡大強化、上部団体との連携などと取り組んできた。特記すべきことは規約第３条にあるように「学園所期の教育目的達成のために寄与する」としていることである。これらの、いわゆる組合精神は綿々と今日に引き継がれている。

さらに、酪農学園職員組合は学園の職場の組合にとどまることなく早くから江別地区労働組合協議会、北海道私立学校教職員組合、日本キリスト教主義学校教職員組合連合会に加入している。

一方、酪農学園職員組合は、年間計画の基に各部が組織化されており、福祉・厚生・文化の向上をはじめ組合員の家族を交えての親睦を図っている。

歴代委員長・書記長（年度）

委員長

大澤 二郎 1962（62・2・27～12・1）
牛島 純一 1962（62・12・1～63・7・6）
井上 錦次 1963、64、65
神 正士 1966、70、71、72、73
野村 喬 1967、68、69
小野 愃弘 1974、81
村山 昭二 1975、76
太田 一男 1977、78、85
大谷 俊昭 1979
中原 准一 1980、86
小野 愃弘 1981
青柳 剛 1982、83
塩見 建樹 1984
安宅 一夫 1987
小阪 進一 1988
髙橋 清志 1989
菊池 直哉 1990
中尾 敏彦 1991
市川 治 1992
平賀 武夫 1993
谷山 弘行 1994
佐々木 均 1995
横田 博 1996
石下 真人 1997
加藤 勲 1998
宮川 栄一 1999
干場 信司 2000
森田 茂 2001
佐藤 博 2002
荒木 和秋 2003
永幡 肇 2004
發地喜久治 2005
市川 治 2006
浅川 満彦 2007
押谷 一 2008、09
小宮 道士 2010
上田 純治 2011

高橋　圭二　2012

書記長

神　正士　1962（62・2・27～12・1）
井上　昌保　1962（62・12・1～63・7・6）
神　正士　1963、64、65、67、68
小野　愃弘　1966、77、80、86
浦部　浩行　1969
村山　昭二　1969（70・3・20より代行）70、74（7～11）
井上　昌保　1971、72、74（74・12～75・6）、75
渡邊　基　1973
柴橋　伴夫　1976、81
梶原　興正　1978
塩見　建樹　1979、83
原　国夫　1982
沖本　憲行　1984
浦川　利幸　1985
林　多喜夫　1987、93
佐々木　淳　1988、89、90、00、02
泊出　秀雄　1991、92
加藤　浩　1994
藤島　浩二　1995
十倉　宏　1996
浅川　満彦　1997
久保木　崇　1998
大中　隆　1999
佐藤　文彦　2001
石川　和哉　2003
石橋　紀彦　2004
新井　昭雄　2005
石川　和哉　2006
佐藤　文彦　2007
小糸健太郎　2008
大和田秀一　2009、10
吉岡　徹　2011
栃原　孝志　2012

６　酪農学園貴農同志会(酪農学園職員ＯＢ会)

同志会の発足　酪農学園教職員ＯＢ会の組織である「貴農同志会」は酪農学園創立60周年に当たる１９９３(平成５)年８月６日、黒澤記念講堂において旧職員ら86名が参加して設立総会を開き、初代会長に山下正亮を選任した。

設立総会は佐藤貢名誉理事長、遊佐孝五理事長をはじめとする常任理事と酪農学園後援会、酪農育英会よりの来賓を迎え、学園記念行事に倣い、職員ＯＢである山畑牧師の司式により礼拝形式で行われた。この日は遠く東京、埼玉、山形県などからの参加者もあり、会則、事業計画、役員の選任などについて審議が行われた。

会の名称は佐藤名誉理事長によるもので「貴農同志会」(酪農学園職員ＯＢ会)と名付けられ、名誉理事長より名称を記した色紙が贈呈された。

同会の設立に当たっては早くからその動きがあったが、具体的には前年の１９９２(平成４)年８月28日、有志20余名から成る発起人会を発足させ、山下正亮が代表となって、準備を進めてきたものである。同会設立の趣旨は旧職員間の親睦を深めることはもちろんだが、旧職員として酪農学園を支援していくという強い思いからであった。

このようにして設立した同会は、以来毎年１月に新年交礼会と、夏期には総会を開いてきた。この間会旗の作成、会員名簿の整備、２００３(平成15)年７月に迎える10周年記念事業の準備などを進めてきた。ことに、旧職員の生の声でつづられた記念誌「貴農」(Ｂ５版・１６０頁)の作成に当たっては

命名者 佐藤 貢の揮ごう

会　　旗

60余名の貴重な体験談の寄稿があった。

また、同会設立10周年を記念して「10周年記念式典」が２００３年７月４日実施された。この日は、午前10時から酪農学園中央館多目的ホールを会場に、平尾和義理事長ら来賓を迎え、63名が出席した。定期総会に続き11時から黒澤力太郎学園長の「酪農学園と歩みを共にして」の特別記念講演会が行われた。

設立趣意書（抜粋）

酪農学園の前身は北海道酪農義塾で、昭和８年10月、札幌郡札幌村大字苗穂の北海道製酪販売組合連合会(酪連)の構内の一隅に誕生しました。

酪農義塾は創立以来多くの農村青年に酪農経営の学理と実学を教授してきましたが、昭和17年その農業部門を財団法人興農義塾野幌機農学校として、現在の野幌の地に生まれ変わりました。機農学校は、戦後学制改革により、野幌機農高等学校となり、その後酪農学園大学附属高等学校を経て、とわの森三愛高等学校の酪農経営科として存続し

ております。現在の酪農学園は、機農学校が野幌にあったお陰で酪農学園大学、北海道文理科短期大学(旧酪農学園短期大学)、とわの森三愛高等学校(旧酪農学園女子高等学校、三愛女子高等学校)と発展して参りました。

今、酪農学園の義塾時代から機農学校、事業部、高等酪農学校、酪農学園短期大学、酪農学園自動車学校、三愛女子高等学校、酪農学園大学、大学院と設置順に学園の発展を眺めてみますとき、そこに勤務された人々は専心献身して努め、時到って学園を去って行かれました。それらの先輩諸氏は、本学園にとって酪農学園発展の礎石となられた大切な方々であります。ここに、有志の者が相計り、退職者諸賢と新なる交誼の輪をひろげ絆を結び酪農学園発展のために相協力して支援する組織を設けたいと考えます。

つきましては、来る平成５年10月は、酪農学園創立60周年のめでたい年に当たります。この日を職員ＯＢ会創立の日と致したく、酪農学園職員ＯＢ会(仮称)設立を提唱して、各位の御賛同を希望する次第であります。

平成５年１月20日

酪農学園職員ＯＢ会発起人　一同

会員の状況（２０１３年３月31日現在）

会　　員　　数（死亡会員数含む）　１４４２名

消息不明会員数　　１３２名

貴農同志会歴代会長・副会長

会　長

山下　正亮	１９９３・８～２００１・７
原田　　勇	２００１・７～２００５・９
阿部　光雄	２００５・９～２００７・６
原田　　泉	２００７・６～２０１１・９
井上　昌保	２０１１・９～現

副会長

福原虎雄　1993・8～1997・7
和田季雄　1993・8～1995・6
沼田芳明　1995・7～1998・12
西村富男　1993・8～2001・7
長谷川清市　1997・7～2007・6
原田勇　1999・7～2001・7
木村敏雄　2001・7～2007・6

阿部光雄　2001・7～2005・9
楢崎昇　2005・9～2007・6
小野恒弘　2007・6～現
榮潤子　2007・6～2011・9
湯浅亮　2007・6～2011・9
大谷俊昭　2011・9～現
荻原康之　2011・9～現

7　アジア酪農交流会

経緯と活動　アジア酪農交流会は、原田 勇本学教授の「アジアにおける酪農の振興と農学徒に対する支援」という深い思いから１９７５(昭和50)年10月に設立された。酪農学園大学教授らとそれに賛同する人々によるボランティアの国際交流組織である。

本会の事業は、①酪農に関する情報交換 ②アジアの農学徒に対する援助 ③セミナー・シンポジウム、視察などの開催である。

本会設立後の最初の事業は、当時酪農学園短期大学2コースに在学中の韓国からの留学生であった柳監永氏への奨学金援助であった。柳監永氏は健康を害し1年で帰国したが、１９７７(昭和52)年1月に氏が中心となって立ち上げた「農村青年塾」を１９８９(昭和64)年まで16回にわたり支援し、その後は韓国種畜改良協会による「韓国酪農セミナー」に協力した。

また、本会の事業によって来日した崔一信氏は、黒澤勉牧場(本会顧問)で実習し、帰国後再来日して酪農学園大学を卒業して北海道大学で博士の学位を取得した。氏はその後母校の韓国安城農業大学(現国立韓京大学)の教授となり、さらに総長を務め韓国酪農の発展と国際交流に多大な貢献をしている。

この間、崔一信教授と本学安宅一夫教授が中心となり１９９３(平成5)年に「日韓酪農セミナー」を立ち上げ、現在酪農学園大学、韓国国立韓京大学、台湾国立嘉義大学、台湾国立屏東科技大学による酪農の国際コンファレンスである「アジア酪農会議」の基礎を築いた。

本会は、毎年春の総会時と秋の研修旅行に留学生を招待し、会員と留学生の交流を行っている。ま

た、本会は、毎年アジアの諸国を訪問し、「酪農フォーラム」を開催しているが、１９９４(平成６)年11月に20周年記念事業として「世界に開かれたアジア酪農を探る」と題して、本学と韓国ソウルおよび済州島において記念シンポジウムを開催した。

２００５(平成17)年９月には30周年事業として「酪農の原点を探る」と題する「北欧フォーラムツアー」を企画し、デンマーク、スウェーデン、フィンランドを訪問した。

本会は、酪農学園では北海道アルバータ酪農科学技術交流協会に次いで設立された国際交流組織であり、アジアにおける酪農交流の推進や本学における国際交流の窓口の一つとして海外の大学との学術交流の橋渡しなどにも貢献している。

名誉会長

原田　勇　　１９９５・７～２０１２・12

歴代会長

原田　勇　　１９７５・10～１９９５・７
安宅一夫　　１９９５・７～１９９７・６
中原准一　　１９９７・６～２００５・６
安宅一夫　　２００５・６～２００９・12
野　英二　　２００９・12～現在

歴代副会長

中原准一　　１９９５・７～１９９７・６
中尾敏彦　　１９９７・６～１９９９・９

細田治憲　1999・10～2009・12
後藤郁子　1999・10～2008・3
野　英二　2008・3～2009・12
河野崇治　2009・12～現在
市川　治　2009・12～現在
井下英透　2009・12～現在

歴代事務局長

坂本与市　1975・10～1995・7
小阪進一　1996・5～1999・3
山田　実　1999・3～2006・4
野　英二　2006・4～2008・3
發地喜久治　2008・3～現在

〈現役員〉

名誉会員　金　奉柱　崔　炳七

特別会員　町村末吉

顧　問　平尾和義　村山三郎　坂本与市　尹　汝昌　柳　監永
黒澤　勉　宇都宮　潤　後藤郁子　細田治憲　牧野一穂
谷山弘行　麻田信二　金川幹司　北　良治　趙　民大
嘎尔迪　Ｖ・Ｉ・グレビッジ

会　長　野　英二

副会長　河野　崇治　市川　治　井下　英透

理　事　崔　一信　李　柱三　孫　鏞錫　胡　尓査　梁　信喆
盧　金鎮　林　翰群　玉　柱　徐　春城　小角　正
三浦　照男　菊地　創　中田　和孝　三谷　耕一　山田　実
中原　准一　安宅　一夫　名久井　忠　小山　久一　仙北富志和
押谷　一　干場　信司　小岩　正照　高橋　一　艾尼瓦尓艾山
堂地　修　星野　仏方　高井　久光　アイヌル・エズム
小林　紀彦

監　事　加藤　勲

事務局長　發地喜久治

〈付〉 学園経営のための収益事業の展開

⑴ クロバー食品株式会社の解散

経営難に苦しみながらも、授業料・寮費の無料化を貫きながら終戦を迎えた酪農学園（興農義塾）ではあったが、混乱を極める社会情勢とインフレーションの波を受けて、その経営はいよいよ厳しいものになった。このため学園は、収益事業を展開することとし、１９４８（昭和23）年関連業務を統合させた事業部を発足させた。

１９５５（昭和30）年代に入り、三愛女子高校、酪農学園大学の開校などに伴って、学園財政は著しく窮迫しその対策が迫られた。その一環として、「教育と収益事業」という難しい課題を抱えていた事業部は、これを統廃合した会社組織「クロバー食品株式会社」（資本金３００万円　学園出資）を設立して、計画的な収益確保の体制を整えた。

クロバー食品株式会社は、学園直営の収益事業のうち、食堂・喫茶店などを継承して学園経営に貢献した。具体的には札幌市内の北農会館地階の職員食堂「北農パーラー店」と札幌駅舎地下街のステーションデパート内の「純喫茶ノール店」であるが、北農パーラー店は１９９７（平成９）年に、ノール店は１９９５（平成７）年に退店した。その経緯等については「酪農学園史二」に詳述しているが、関係者の並々ならぬ努力によって会社発足から撤退までの間に、出資元である酪農学園（後援会を含む）に約２億１、７００万円を納付・寄付した。

また寄付金の一部は、社名を冠した「クロバー食品教育振興基金」（４、９６４万円　２０１２年３月末現在時価評価額）として酪農学園後援会の基本財産として残されている。

学園製薬工場（苗穂）1948年頃

⑵ 野幌機農高等学校の採種圃

江別町西野幌（現文京台緑町）に用地を得て開校した野幌機農学校は、戦雲厳しさを増すなか、その経営は難儀を極めていた。（株式）興農公社の社長でもあった黒澤酉蔵は、食糧増産という国家への貢献と合わせて、少しでも機農学校の経営のためにとの思いから、１９４３（昭和18）年公社の牧草種子の増産と品種の改良を機農学校に委託した。

この委託事業は翌年、機農学校に移管されたが圃場の管理指導者は、公社の松岡農場（和寒町）から派遣された小川義雄、多田省一、小竹四郎らが担った。生徒の基礎実習としても活用しながら生産に励んだ。栽培された牧草は、オーチャード、チモシー、赤クロバー、ラジノクロバーなど、その系統・品種は多岐にわたり、その優秀さが認められ大手種苗会社や北海道農業試験場、北海道大学の研究用原種にも供された。

１９４７（昭和22）年、教育制度の改革により私立学校においても収益事業ができるようになったことから、本学園内に牧場経営・農産加工・農機具工場・木芸工場・出版部・採種圃が設けられた。

１９４８（昭和23）年、学園事業部の一部門として発足した種苗部は、終戦直後の食糧と飼料の増産に貢献した。採種圃の母体は基礎実習農場の蔬菜園と牧草の原種圃であった。蔬菜園からの野菜類は機農寮生の食事にも供されたが、トマト・南瓜・西洋野菜などの優良種子は、取扱い会社はもとより全国の

農家から高い評価を受け多くの注文があった。

販売用の種子を入れる子袋は、戦後の物資不足もあり生徒の答案用紙の氏名を切り取って袋にした。種子のカタログには、「どっこいさん」の愛称で慕われた五十嵐齢七（１９７５年機農高校を定年退職）の挿絵を添えて販促に努めた。

高い評価を得たダリア育種圃　1981年頃

草花の採種と精選には多くの器材と手間を要したが、一年生草花は約50種、宿根草花は原種約30種を導入して増殖するという力の入れようであった。春植え球根では、ダリア・グラジオラス・カンナなど、秋植え球根ではチューリップ・ヒヤシンス・クロッカスなどを改良増殖して販売した。

とりわけダリアは、１９４９（昭和24）年の採種圃発足直後に北海道種苗株式会社（社長宮沢春永）より10数種の球根が贈られたのを機に育種に取り組んだ。１９５２（昭和27）年から１９８４（昭和59）年の間に育成した数は87品種にも及び、共進会でも数多く入賞するなど学園の評価向上に貢献した。

また１９４６（昭和21）年、北海道大学の中谷宇吉郎博士が、寒地農業の研究のために設けた農業物理研究所の一部実験圃場が機農学校に「野幌分室」として設置された。野幌分室では、高杉成道・小山忠雄・小竹四郎らが中心となり、電熱温床による水稲栽培や大豆の摘芯栽培、畜力除草の改善などに取り組むとともに、これらが生徒の実習にも供された。

（「貴農」酪農学園貴農同志会２００３年・小竹四郎先生追悼誌「一粒の麦」１９６９年　参照）

〈追〉　機農高等学校採種圃（樺沢茂男）「貴農」より抜粋

種子カタログは五十嵐先生の独特の漫画の入った作物別の小冊誌に価額表を付けて、酪農学校の通信講座の付録として発送した。

注文は道内を主に東北地方、関東中国地方と全国からきた。個人の注文が多く各地の農協、開拓農協、改良普及所、集乳工場などであった。送金は振替または書留郵便であったが、直接来校される人も多かった。

種子の荷造り発送は四種郵便、小包便、大口は鉄道小口扱いや客車便などで送られた。とくに試作用優良品種組物、展示圃用の注文が多く来た。

発送は２月初旬より始め３月、４月と多忙な毎日が続き、生徒の実習と重なり食事抜きのこともあったし、日曜日も来客で休日無しの状態であった。取り扱い品目は、昭和27（１９５２）年のカタログでは約２００種余りとなっている。後半から野菜や草花の種子は、絵袋詰めとした。

種子販売カタログの挿絵（五十嵐齢七）

種子取り引き特約店

飼料作物：雪印種苗株式会社、札幌興農園株式会社、横浜植木株式会社

野菜種子：北海道種苗株式会社

草花種子：札幌採種園

第5部　黒澤酉蔵 遺訓集

第1章 酪農学園の歴史と使命〔1970年 酪農学園発行〕

――私はなぜ酪農学園をつくったか（抜粋）――

1　酪農と酪農学園の使命

酪農学園は普通の学校や大学と違います。普通の農学校や農科大学とも違います。私はこのことをよく知ってもらいたいと思って、この小冊子をみなさんに読んでもらうつもりで出しました。

この学園の敷地をみなさんご覧なさい。この広さは日本一です。教室に入るためには必ず農場や牛舎のそばを通りますね。見かけでこの学園の特徴を自慢するつもりは少しもありませんが、この風景のなかにだって、学園の建学の精神はりっぱに生きているのですよ。

酪農学園は私が創立しました。あれは昭和８年ですから、もう37年になります。当時は酪農義塾という名前でした。しかし、私にだってこんな大きな学園をつくる私財なんかありませんでした。いまでも財産なんかありません。

ではどうしてできたのか。今日はこの話をあるがままに、あからさまに、赤裸々にしてみましょう。これを一口にいっておけば、酪農民の浄財でできた学園だということです。

この小冊子を読めば判ることですが、雪印乳業とその前身の酪連―興農公社そして農協団体が酪農教育の必要性、重要性を骨身にしみて感じて、育て上げてきたのがこの酪農学園なんです。

普通の私立学校や大学なら卒業生は実業界や政界にどんどん進出していい顔役になってくれます。そうして母校にはどっさり寄付もしてくれます。けれども、酪農学園の卒業生はまた農村へ帰り、自

ら土と取り組む人々が多いのですからそんな金持ちにはなれません。しかし、北海道にはもう50年以上も前から、本物の農業をやるにはデンマークを理想にしなければならない、それにはデンマークのように本当の農業をやれる農民、それも技術だけではなくて頭も心もりっぱな農民を育てなければいけない、という考え方がありました。

雪印だってこの考え方を正しいと信じ込んだ酪農の同志がつくったものです。

ですから、酪農学園は、米麦中心の日本農業の体質を根本から改めようとする運動、すなわち協同主義に基づく組合運動が拡がるなかから誕生したものだといえるんです。

世界一流の酪農王国をこの日本につくろうと決心した酪農家が若い腕と心のしっかりした指導者を育てようとしてつくった学園なんですね。よくいわれる背広農民とか、農村に寄生するような人間を育てる学校ではありません。このことは学園の歴史を知れば、よく理解してもらえると思います。

さて、本論に入る前にほんの僅か、農業に対する私の考え方を話しておきます。

一体、わが国の産業は明治以来目覚ましく発達しました。まさに日の出の勢いです。しかし、農業はだめです。大いに反省しなければなりません。どうも発達が遅いですね。

なぜでしょうか。これは農業の宿命でしょうか。私はそうは決して思いません。農業だって科学の力を十分応用し、農民の努力が十分みのるような仕組み、方法をとれば必ず繁栄するものなのです。

また、私はこんな信念を持っています。農業をないがしろにする国や、土地を粗末にする農業は必ず滅びる、と。

まず一国の繁栄がそうです。農業を土台にして、その上にりっぱな工業を築き、商業や貿易を盛んにするのでなければ、その国の繁栄は絶対に長続きするものではありません。これは世界史にちゃんとしるされている。証明されていることです。

例えばいまから２～３００年前です。そのころの世界の１等国はオランダ、スペイン、ベルギーでしたね。彼等は商売上手でしたから世界を股にかけて、活躍していました。しかし、彼等の繁栄はただ貿易に頼るだけでしたから長続きしていませんよ。

その次に世界に君臨したのはイギリスです。鉄と石炭を基礎として商工業の発達をはかり、やはり貿易によってインドやインドネシアから莫大な富を吸収して王座につきました。しかし、今日のイギリスはどうでしょうか。いまイギリス人は国内の農業をかえりみなかった時代のことを深く反省してくやんでいるではありませんか。

その後世界をリードしたアメリカは大農業国ですよ。ソ連も農業の振興に大いに力を入れて伸びてきました。

ですから私は、日本も農業という産業の土台をしっかり固め、その上に工業、商業の繁栄を図っていく必要がある。そうしなければ日本の繁栄は長続きしないと信じています。

では一体、どのような農業を日本で育てるべきなのでしょうか。わが国の農業は米と果樹の農業として栄えてはきましたが、すでに米だけが食糧であるという時代は終わりました。動物性の蛋白と脂肪の生産が必要な時代となったんです。乳肉を生産する酪農はこれからの農業です。

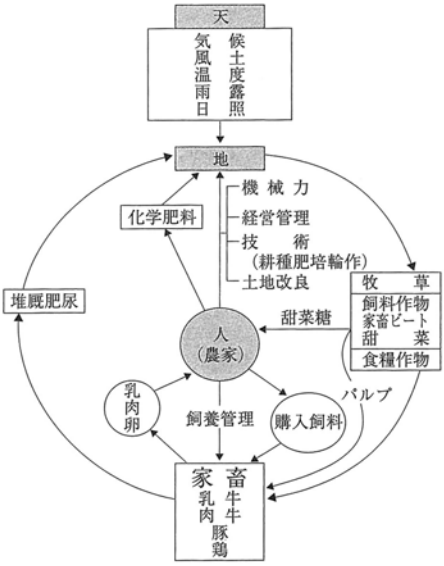
一体、欧米人の体格はどうしてあんなに偉大なのでしょうか。これは単なる人種的素質や遺伝に依るだけではありません。彼等には日本人よりも遥かに充実した食物があるからです。その中心が牛乳・卵・肉なんです。しかも食物のいかんは頭脳にも影響します。したがって、わが国で酪農を発展させることはわが国民の人種改造という重大な事実に深くかかわりがあるのです。

また、酪農は単純な穀作経営や無畜農業には不可能な国土づくりを使命とする重要な農業です。農業は穀物や実をとるものだと日本人は長い間信じ込んできました。土地をつくる、国土を豊かにする

ということをはっきり意識した農業はありませんでした。農業を続ければ土地は荒れるものだと思ってきました。水田も古くなれば水がわき、秋落ちするのが当たりまえでした。畑は作物がとれなくなるまで使うというやり方でした。

しかし、いま私達が志している農業は酪農です。この農業は世界でただ一つ、続ければ続けるほど土地をこやし、作物も家畜も良く育つ農業なんです。家畜のふんや尿は土地のなかで土地をこやす役目をしてくれるバクテリアのエサになるのです。草の根もそうです。ただ忠実に基本を守っていけば必ず土地がよくなる、りっぱになる、そういう農業は酪農だけです。水田では地力が落ちてくると山や川から土を運んできて入れなければなりませんが、酪農は自家生産物でやれるのです。酪農にはこのように国土を豊かにするという案外気づかれていない重要な役割りがあるのです。

この酪農をさらに盛んにするために有為な人材を農村へ送り出すのが本学園の使命にほかなりません。



循環農法図

2　酪農教育30有余年

北海道の酪農界は一応落着いてきました。しかし私は酪連初期の7～8年のことを考えると、これは農民自身の自覚を高め、腕を上達させる以外にない、これは教育だ、こう決心しました。北海道農業を東洋のデンマークのように仕上げるには教育しかないと思いたったのです。

私が一番困ったのは農民が無知であることと目先の欲にとらわれるということでした。世のなかのことは何にも判らんのに欲ばかり強い、だからちょっと誘惑されるとすぐひっくりかえる。資本家に酒でもごちそうになるとすぐついていく、これで何回となく苦杯をなめたのです。しかし考えてみると、これは無知のいたすところで、誰が敵で誰が味方か判らないのですからしようがない。これは教育以外にない、こう心に決し、協同主義の酪農事業とともに酪農教育に一生を捧げよう、こう決意したんです。

そこで昭和8年に北海道酪農義塾をつくりました。理事長は佐上長官、塾長は黒澤です。農民精神の作興、酪農経営の実地教育、産業組合主義の徹底の三つを旗印にしました。もちろん私塾ではありません。

酪連がやったのです。酪連は昭和8年秋の臨時総会で「北海道酪農学校後援に関する件」「職員養成開始の件」の二つの議案を承認し学校の設立と毎年５０００円ずつの補助金を出すことを決めました。塾制度にしたのは学校にすると各種の制約を受け、実地を重んずる教育ができなかったからです。看板は酪連に出しました。

酪農義塾は1年制にしました。学科は酪農科と製酪科の二つです。酪農科は農村青年に農民としての人生観を持たせる、寒地農業の理論とその実際を体得させ又帰農後、模範経営を確立できる人材の

養成を目的としました。そのための実習農場は苗穂工場の近くに４町歩用意し、牛は篤志家からホルスタインの純粋種を寄付してもらいました。これではもちろん狭いもんですから後に出納農場を譲り受けここで本格的な実習をさせました。先生は中曽根徳二さんと先年亡くなった野喜一郎さんのお二人にお願いしました。

また製酪科は酪連の従業員の教育が目的です。ここでも酪農科と同じ精神教育を行ない製酪技術をこれに加えました。主任教授は佐藤貢君です。

ですから、いまの雪印の幹部はみなこの義塾の出身者になります。現在の雪印の幹部はみな、その当時私が教えた連中です。また、酪農家の卒業生も村へ帰っていまでは堂々たる酪農家になっており、村長になっている人、組合長になっている人、名誉職にある人などたくさんいます。

これは10年間続けました。ここではもちろん全寮制度です。酪農科の方は文字どおり農場の一員となり、晴耕雨読、働きながら学ぶという方法で、単に牛がいる、牛がはいったという程度の酪農を現地で本物に育てられる青年を育てました。また製酪科にしても身分、働き先は違いますが、同じ酪農のためということで実学第一に育てました。

経営は社団法人組織でしたが、経費は職員と塾生の勤労収入、農場収入が第一で、ほかに酪連からの交付金と会員からの寄付でまかなってきました。学資はとりません。

この10年の成果を見ますと、自画自讃のようですが、非常にりっぱなものがあります。製酪科の卒業生は世にいう酪連精神の推進者として酪連を育て、酪農科の卒業生はまた集約酪農のモデル経営者として地域に貢献するという具合です。なによりも成功だったのは後者です。それまでは酪農家になろうとすれば宇都宮さんとか町村さんのところで２～３年見習いに入り、技術を習得する以外にありませんでしたから、１年に20人、30人と大量生産するわけにはいきません。これを酪農義塾はみごと

に解決してくれました。たった1か年ですが地方へ帰ってそれぞれりっぱにやっている、この実績を見まして、これをもう少し拡張して大きくすることを考えました。これをしっかりした学校に育てようというわけです。

それには資金がいります。そこでまた、酪連で基金づくりを始めました。これも農民の出荷する牛乳代の何％かを拠出してもらい、これを積み立てることにしました。もちろん総会の了承を得てやりました。

これが昭和15年になりますと５００万円近い基金になりました。これは全て酪農民が積み立ててくれたもんです。これはいまの金にすれば何10億にも相当する大金です。なぜ、こんなに積んだのかといえば、私には一つの理想があったからです。

いまでこそ酪農民も自家用車を持っていますが、当時の農民というものはそれはとても生活に困っておったもんです。とても十分に高等教育なんか授けられなかったという時代です。そこで私は有為な青年は一つ無料で教育する、とこう考えざるを得なかったのです。生徒からは月謝はとらない。３か年ここで勉強すれば家に帰って本当の農業がやれる、こういう人材を育てようという考え方です。

そのころは農学校といえば1か年6万円あればやっていけました。そこで私は1か年20万円使えば、生徒に食も衣も与えて、十分実習もさせてやれる、とこう思った次第です。

ところで昭和15年というと酪連が興農公社に発展的に解消した年です。そのとき酪連を整理しましたら60余万円の余剰金が出ました。これは本来なら組合員である地方の組合に分配すべきものです。しかし、私は総会に教育資金として寄付してほしいと提案しました。なるほど60余万円といえば時価３億円はするでしょう。貨幣価値５００倍としてです。しかし、分けてしまえば少ししかないが後継者の教育資金にまとめて使わせてほしい、というわけです。

しかし、このときはもめました。寄付した方がよいという側と分けよという側、まさに五分五分でした。人は欲が深いですから、とうとう夜中の12時までかかりましたがまとまらない。遂に決選投票で5〜6人の差でようやく通った、これがあったものですから機農学校ができたわけです。

酪連解散時の剰余金60余万円で、いま酪農学園になっている江別の土地等を買い施設もしたのです。このカネは本来は酪農民に返すべきものでしたし、教育事業に反対もずいぶんありましたが出してもらったんです。

一方、先の５００万円ですが、あれは北方農業教育基金として北連に積むことになりました。もっとも、こちらの方の会長も私が兼ねておりましたから別に不都合はありません。毎年10万円ずつ補助してもらうことにし、機農学校が出来るときは5年分の50万円をもらいました。

しかし、そのうちに戦争が激化する、日本がおかしくなる、占領軍の政策によって組合もズタズタになってしまった、貨幣価値が変わった、ということで役に立たなくなってしまいました。でも、この基金はいまも北農中央会のなかに残っています。

ですから機農学校も1〜2年は月謝をとらずにやりましたが、経営の方は難儀のしどおしです。これは甲種農業学校として昭和17年6月にできて以来、学制改革によって野幌機農高等学校に変わりましたが、依然、卒業生の大部分は村へ帰り、農業経営の第一線に活躍するなど、立派な農村青年の教育を今日まで続けています。開校当時は実習農場２００町歩。これを大小15の農場に分けて各農場に教師を配して農場長に任命しました。

また、生徒も特別の寄宿舎にはいって、先生と一日共に働き、共に学ぶという方法をとったわけです。ですから教育の成果には見るべきものは実に多い。しかし学校の経営の方は初めから目算が狂ってしまいましたから容易なことではありません。

先生方の月給はがまんしてもらう。本当に奉仕的な考え方でやってもらいましたがそれでも行き詰まってしまいました。どうしても先生の月給が払えなくなってしまった訳です。で、先生も職員もみんな興農公社の嘱託にしてもらい、それでしのいだわけです。それでも先生の月給はよそからみればうんと安いのです。それでも釘づけというわけにはいきません。やはり少しずつでも上げていかんとならんでしょう。

一方、学生の方からはなかなか月謝はとれません。最初からとらないという方針でやってきたのですし、農民のカマドのことを考えてみますとそうとれるもんじゃ、ありません。しかし機農学校の教育は必要に迫られて始めたものですから、どうしても続けなければなりません。それどころか、さらに、もっと酪農教育の内容を充実し、本当に東洋のデンマークにふさわしい北海道に育てるための人材をどしどし農村に送り出さなければなりません。高等学校ばかりでなく短期大学も４年制大学も必要になってきました。

そのためには酪農民と雪印の協力を仰ぐ道以外にありません。そこで考えに考えたすえ、江別市にあった雪印の工場を実習工場という名目でそっくり寄付してもらうことにしました。これは昭和22年のことです。土地も機械も施設もそっくりタダでもらいました。これで機農学校の農場や寮の新築もできました。

この工場はもちろん実習工場としても利用しました。がそれよりも、乳製品工場として附近の酪農家から牛乳を集め、バターの製造をやりました。遊佐先生に2代目の工場長をやってもらいましてバターをつくり、

実学を説く黒澤酉蔵

こんどは特別高い値段で雪印乳業にまた買い取ってもらいました。

こんなことは単なる営利会社なら絶対にしてくれませんよ。雪印にしたってとんでもないことだと思ったことでしょう。タダで工場をくれてやって、こんどはバターを高く買うというんですからね。私が雪印の創立者ですから私のいうことは聞かなければいけない、また酪農教育の重要なことは判るし、そのおかげで会社も北海道の酪農も発達してきたのですから、しぶしぶでも聞かざるを得ない、これでまた何年かしのぎました。これが短期大学時代です。

昭和35年には４年制大学を発足させました。しかし、学生はそうふやせませんし、学費もそんなにとれません。一方、先生や職員はどんどんふやさなければなりませんし、先生だけはそれ相当の優遇措置もとらなければなりません。それでもよそから見ると必ずしも十分でありません。

仕方がありませんから、こんどは江別の工場を雪印に買ってもらいました。昭和37年です。タダでもらったものを５億円で買いとってもらったわけです。こうして今日の酪農学園ができたのです。ただできたんではありません。

その間寄付金の募集を４回もしました。１回目は26年、２回目は28年、３回目は31年、４回目は35年から37年にかけて１億５千万円集めました。このときも雪印が３７００万円、北海道農協連合会が３千万円、雪印の傍系会社の島屋商事が１千万円、土谷製作所が４５０万円、全国農業団体連合会が３００万円など約３７０の会社、団体から拠金を仰ぎました。このときは先年死んだ後藤さんがよくやってくれました。私も何度も足を運びましたが、それで借金を払い、施設をつくりました。

いま第５回目の募金を進めていますが、こんどは５億５千万円です。このうち１億５千万円は雪印に出してもらいます。北農連にも１億５千万円の協力を要請しています。これが集まれば施設の方や実験設備の方はやや格好ができるんじゃないかと思っています。

これが今日までの酪農学園の赤裸々な歩みです。酪農民と酪農民のつくった雪印がわがこととして酪農教育の発展を願い、この学園を支え育ててきてくれたのであります。いわば酪農民の血と汗の結晶がこの学園であり、その酪農民の願いがすなわちこの学園の建学の精神といえるのです。

3　酪農学園の建学の精神

酪農学園の建学の精神は健土健民であります。これはいままで話してきたことからもお判りになろうと思いますが、酪農というものは、単に牛を飼い牛乳を搾り、バターやチーズをつくるというだけではありません。それと同時に、日本の国土を豊穣なものにし、肥沃なものにするという大きな使命があるのです。真の国土づくりです。これが健土です。健やかな土地づくり、これが酪農です。

この国土は地球が存在する限り、未来永劫何億年経っても滅びるものではありません。実に尊いものです。全てのものはここから生まれ、ここへ帰る、母なる大地です。私もあなたがたもやがては大地に帰るわけです。この土地をもっと健康なものにするのが人類の大きな使命といわなければなりません。

北方農業発展への願い

また、世界の同胞はいま30億とか36億とかいわれますが、これら全人類のからだと頭脳をりっぱなものにする、心身共に健康にする必要があります。が、これはなんといっても食べものが元です。本当の健康食が与えられて、人類は初めて心身の健康が得られるのです。それにはもっともっと高級栄養食品であり高級蛋白食糧である牛乳や乳製品を飲んだり食べなければなりません。そのためにはもっともっと安く牛乳を生産する必要があります。それにはさらに酪農を発達させ、デンマークの酪農のように育てなければなりません。

このように二つの大きな使命を自ら果せるのが酪農です。単に牛を並べ、牛乳を搾るというのは酪農ではありません。健土健民の思想を十分体得した酪農民をふやし、これが酪農の主流となり、遂にデンマークに達する、そのために有為な人材を育成する、これほど重要な使命をもっているのが酪農学園なのです。これが建学の精神です。

よく学園では実学ということがいわれます。私もそうでなければいけないと思ってきました。ただ、勉強したり頭で理解しているだけでは酪農はできません。まして指導者にはなれません。学理と実際が不離一体でなければまた、現実の役に立ちません。圃場と牛舎と教室と研究室がお互いに補い合い、より進んだ経営方法、経営技術を開発し教授していくのでなければ学園を創立した価値がなくなります。新しい時代にふさわしい若い農民を育てなければ学園の価値はありません。

この点については大いに反省すべきものがあります。実学という点になると、酪農学園は十分ではありません。機農学校はとにかく実学ができておりますし、短大第２部もこれに沿っています。通信教育もまずまずでしょう。しかし短大第１部と４年制大学の方では欠けるところが多いと思います。

これをどうしたらよいか、直接には園長の責任でありますが、教授法、行き方をこれから研究しようじゃありませんか。実学が本当に体得できるような学園に、実学が身についた学園に早く改善した

い。これは実は甚だ申しわけなく思っておるところです。

いったい、日本の農業教育の欠点は受ける生徒が農業の実際を知らないというところにあります。また受けさせる父兄の方も分家させるよりも学校を出して月給取りにでもさせる方が良いと考えて二、三男を近くの農学校へ入れるということが多かったのも周知の事実です。卒業しても農民にならないものに行なう農業教育ですから、実際はどうでもよい、学校の方もそれに迎合して形式的に教えることにしてお茶をにごす、これが実相だったといえます。

当然、教育方針も内容も資格をとらせること肩書だけをとるにふさわしいものに堕落してしまい、いつの間にか農民をつくる、腕も心もしっかりした農民をつくることを忘れてしまい、実際にはさっぱり役に立たない農学が栄えるようになってしまいました。

しかし、酪農学園だけは本当の農民をつくり、実際の農業の改革に役立つ研究をする教育機関でなければならないのです。

私はあえて申し上げておきましょう。日本には農学はあっても農民教育はない――と。農民に寄生するものを育てる教育はあっても、農民をつくり上げる教育というものはないといってもよいのです。この日本の旧弊を打破するために農民自らがデンマークを範にして自らの努力で守り育ててきたのが酪農学園だといえるのです。

酪農学園の神髄をなすものはいま一つあります。それが、「三愛精神」です。いくら酪農の実際にくわしくなり、技術が上達して、免許皆伝の腕前になっても、人間の心のおき方が間違っていてはいけません。このため真実の三愛精神を師弟共に会得する必要があるのです。

我々の理想とするデンマークがあれほどりっぱな福祉国家となり、酪農王国となったのは三愛精神に徹したからにほかなりません。デンマークを亡国の危機から救い、今日の理想社会に再生させたの

は三愛精神によったからです。神を愛し、人を愛し、土を愛するというのがグルンドヴィの教えでありました。デンマーク人は本当に真面目にこの精神を実践し、酪農にいそしんだものです。

これは、機農高校の井上錦次先生がデンマークから帰ってから聞いた話ですが、片田舎のある停車場に先生が降りました。日本でデンマーク農業の実際を指導してくれたショナゴーさんを訪ねるためでしたが、通りがかりの青年に道を聞いた。すると私が案内しますよと実に親切にいってくれる。ほっとして駅を出ようとすると、その青年は井上先生に、手に下げている大きなカバンは駅においていくように何度もいう。しかし先生は旅行中両手のカバンは離したことがない。第一、駅などに置いて盗られては大変だと思い頑として聞かないでぶら下げていった。ようやくショナゴーさんの家につくと、こんどはショナゴーさんが、こともなげに、なんだその重いものをどうして下げてきたんだ、駅においてくればよかったのに、という。案内してくれた青年は青年でチップを出してもそんなものはいらないといって帰っていく……。こんな話でした。

デンマークは正直な国です。旅人のものを盗ったり、困らせたりはしません。デンマークの青年は当り前のようにカバンをおいていても盗られないことを知っていたが、井上先生はそんな世界は知らなかったのです。また、青年の旅人の迎え方は聖書にもあるとおりです。これを実行しているのです。

いまの日本ではそれどころではありません。母親は子供を教育するのに、人を疑ってかかれといっているのです。誘拐されるのが恐ろしいので、子供の一人遊びやお使いもダメだと教え込んでいるじゃありませんか。なんと情けないことでしょうか――。これでどうして文明国といえますか。

日本人は好景気が10年か15年続いたといって有頂点になり、生産力が世界第２位だ、やれ第３位だと騒いでいますが、人間の魂の腐っていることは最劣等ではありますまいか。こういうことでは一体どうなりますか。私がまず、グルンドヴィの三愛精神に徹せよ、というのはこのためです。本当の人

間ができない以上金なんか問題ではありません。生産力がいくら伸びてもダメです。こんなものは一朝にして没落してしまいます。

私たちがデンマークに学ばなければならないのはこの点です。理屈とか講釈ではありません。実行です。毎日毎日の行い、心のおき方をバイブルにあるとおりにしなければダメだということです。

二重人格、三重人格でどうして良くなりましょうか。私はこの学園のバックボーンはどんなことがあっても三愛精神でなければいかんと確信しています。グルンドヴィのあの熱烈な信仰と愛国心、これは世界人類が歩むべき道だと思っているのです。

私は戦後、北海道に世界連邦建設同盟の支部をつくり、いまもその会長をつとめています。これも三愛精神の究極の教えである世界は一つである、一つでなければいけない、という信念から出た行動であります。けれども愛国心のないものがより集まったって世界連邦ができるものではありません。また空想空論であってもいけません。現実に即して一歩一歩本当の平和の道に進んでいくべきであろうと思います。

その意味では現代社会においても我々が学ぶべきは北欧であります。デンマークであり、ノルウェーであり、スウェーデンです。スウェーデンの如きは１５０年ものあいだ、どの戦争にも参加したことはありません。デンマークにしても、ノルウェーにしても第２次大戦でドイツに侵略されるまでは戦争に加担していません。かといって決して無防備ではありません。スウェーデンの如きは世界第３位の空軍を擁しておりますし、北欧３国とも国民皆兵です。これは他国から侵略されないためです。他から断じて犯されず、他をも断じて犯さない、というのがスウェーデン人の国民一人一人の信念であり、北欧人の生き方であります。私は日本もこうならなければいけない、こうありたいと願っています。

いずれは各国の軍隊はいらなくなります。世界は必ずそこまで進歩します。世界は一つになる、こ

れが私の理想です。ですから私が三愛精神を提唱しているのは決してお題目ではありません。どうしても、この心のあり方でなければ世の中が進みません。明るくなりません。本当の仕事はできません。協同主義の仕事にはなりません。

三愛精神とは真心をもって接するということです。協同主義とはだれかれと差別せずに心の底から信頼し合うことです。信頼し、真心をもって接すれば、どんな人間でも撃破できます。しかし、偽りがあってはいけません。本当の信念と真心があれば、神様は必ず守ってくれる、これが私の信念であり、三愛精神の解釈でもあります。

どうかみなさん、みなさんは酪農学園を構成する一員として、学園協同体の一員として学園の歩みきたった道程を共にふりかえり、さらに研究し合い、ともどもりっぱな日本を築き上げ、酪農をさらに伸ばすために日本一の学園を築き上げていこうではありませんか。

4　三愛主義とは何か（酪農学園だより第1号より・加筆）

酪農学園は酪農を通して日本はおろか、全人類の福祉向上に貢献し得る人材をはぐくみ育てる使命を持つ本邦唯一の実学習得の教育機関です。

したがって、私は建学の精神を何に求めるか、と自らに問うたとき、いささかも躊躇することなく、三愛主義をもって学園に生命を吹き込み、理想を与え、そのバックボーンとすることにしたのです。

神を愛し、人を愛し、土を愛す、という三愛主義は古今東西永遠不滅の真理に照し、断じて恥じるところがない。

それどころか、この三愛主義をもって再興したのが我等の理想郷福祉平和国家デンマークです。私は偉人グルンドヴィにならい、日本再建の祈りをこめて、三愛主義をもって酪農学園の建学の精神と

したのであり、これを体得させ、実践する人材を輩出させることを使命とした学園でなければ存在価値はないと確信しています。

では、一体、三愛主義とは何であろうか。その根本をなす愛とは何であろうか。聖書をひもとけば「神は愛なり」とあり、聖パウロがコリント人へ書き送った手紙には次のように記してます。「山を移すほどの強い信仰があっても、全財産を人に施しても、自ら焼かれるために泰然と火中の人となっても、真の愛がなければ全ては無益である」と。これは怖るべき言葉であり断言ではないか。

邪心、邪念、邪想を持てば、これはまた寝言の如きものに聞こえるであろう。しかしまた、私共は愛無き生活は砂漠のごとき生活であることを、理屈よりも実生活の体験から知っており、愛の実践を欲しているのではあるまいか。これは釈迦の慈悲、孔子の仁と同じケースであるが更に徹底した愛の極致です。

聖パウロの教える愛の極致は栄枯盛衰の人類の足跡をたどれば厳然として実証されます。人の道や道義は科学と力の前には無力、無益であるか。全てを支配するものは力であり、理詰めで勝ち栄えるのだろうか。

決してそうではない。「天網恢恢疎にして漏らさず」です。天の法網は広く、目が粗いようだが、悪人はこれを漏らさず捕える。天は即ち厳正であり、悪事には早晩悪報があります。また、力で臨むものは力による報いを受ける。たとえ、豪奢華麗を極めた宮殿で美衣美食にふけり、力を持って全世界に号令する権力者があったとしても、それが永続したためしはない。なるほど衣食住の豊かさも大切であり、権力は偉大であろう。また、科学も尊い。

しかし、愛にまさるもの、尊いものは絶対にない。愛は諸徳をもすべくくる帯のようなものであり、愛がなければ全ては無に等しく、愛の無い行為は全て無益であります。

聖パウロの教えを聞こう。「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない、不義を喜こばないで真理を喜こぶ。そして、全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」と。

私共の知識も力も、全知全能の神から見ればごく一部に過ぎない。だから必ず滅びる。しかし、信仰、希望、愛は永遠に存続し、このうちもっとも大いなるものは愛である、と教えています。私はこれを真理だと思う。この手紙を読むたびに霊感を覚え、永遠不滅の光を見る思いがするのです。

それでは一体「神を愛す」とはどういうことか。これは善人になりたい、聖人君子になりたい、終局は神人一体にまで到達したい、よしんばそこまで行きつけなくとも一歩でも近づきたい、という善なる人間の願望だと私は思う。愛神とは善なる行為であり、努力、精進、修養鍛錬を為すことです。聖パウロのごとき人でも「ああ我悩める人なるかな」と嘆声しているほど人は弱いものなのです。

良い行ないをしよう、しようと心掛けながらちょっと油断しているあいだに自分でもあきれかえるほどの罪深い行ないに走る。それが人間というものなのです。私もそうです。

ちょっとの油断に善心は消え、直ちに悪心がはびこる。そもそも、人間は善心と悪心の二心を持つものであることを悟り、常に心掛けて善なる心を刺激し続ければ、遂に悪しき心はかげをひそめ、私の心は全部善になる。この努力を続けること、すなわち愛神であろう。西郷南州先生の信条であった「敬天愛人」の敬天とは愛神と同じであり、これを実践する境地ではあるまいか。

また「人を愛す」ということは「神を愛す」という徳目に比べると判りやすい気がします。しかし、問題はその実践です。己れに好意を寄せるものを愛することは悪人でもなす。しかし愛人の極致はバイブルの教えるごとく敵をも愛することです。戦国時代、かの上杉謙信は塩の欠乏に苦しむ宿敵武田

信玄に塩を贈った。これはいまなお武士道の鏡として讃えられています。

が、私は真に人を愛することに徹すれば戦争のごとき力の争いは必ずこの世から抹殺することができ得ると信じています。愛なき禽獣の世界を支配する法則は力のみであるが、人間社会では自他相愛をもって天法としなければなりません。これは本能的欲望に身をゆだねた場合、決して到達できない境地であり、己れを愛するごとく、己れの欲するところを他に施し、愛するのでなければ人間とはいえません。それにはまず、人をわけへだてしない人間にならなければならないのです。

次に「土を愛す」とは何か。愛土とは人類の母体である土、母なる大地に心血をそそぎ、これを豊かにするということです。

人類はこの世に誕生して少なくとも百万年の才月を経て今日の進歩を致したのですが、人間はもちろん、生あるものは全て土から生まれ土に帰る。これは生命の続く限り、未来永劫に繰り返す。そうして神はそれぞれの民族に自然安住の地を与えてくれた。大和民族の地が、すなわち日本の国土です。

だから国土は民族の母体であり、民族永遠の安住の庭であり、生産の場です。それは何物にも換えがたき貴重なものであり、愛土は人間自然の国土愛の発露したものです。祖国愛というものも、この国土愛、民族守護の願望から発するものといえます。

ある場合、持てる国、持たざる国といい、その区分は石油、石炭、鉱物のごとき地下資源の有無に求められます。しかし、地下資源のごときものは自ら寿命がある。しかし、土には寿命がなく、その生命力を育てれば無尽蔵の資源となります。この大地を相手とし、これを健康に育てること、これが愛土です。愛土から生まれる「健土」、ここ

から初めて健康な食物が穫れこれを食してこそ「健民」が育つ。愛土に生きがいを持てる人間でなければ農業人たるの資格はないと私は断言してはばかりません。

私は神を愛し、人を愛し、土を愛す、三愛こそ神の道、人の道と信じており、これを実践し得る人材を開発することが酪農学園に課せられた使命だ、と確信しています。かかる強固な倫理観、道義を重んじる農業人の輩出を祖国日本は待望しているのです。

吉田松陰が松下村塾を開いて維新の大業を成し遂げた人材を世に送ったごとく、グルンドヴィが亡国の危機にさらされたデンマークを救わんがため、三愛主義に立脚した国民高等学校を興し、みごとその使命を果たしたごとく、私は酪農学園がその使命を達成することを切望しています。そのためには正しき道義をもって建学の精神とする必要がありました。

悪しき道義、誤れる道義に従って教育事業が成功することはない。ましてや民族永遠の基礎産業たる農業の担い手の養成機関においてなおです。古い日本が滅びたのは、日本さえよければ他はどうでもよい、という誤れる道義に民族をかりたて神国日本という虚偽の道徳律を信奉し、実践したからにほかなりません。

新しい農業人が、その使命を各個の農場で達成し、日本民族永遠の繁栄の礎石となるための心構えが三愛主義です。

第2章　健土健民新論〔1989年　黒澤酉蔵文書保存会発行〕

――「健やかな土」（抜粋）――

1　健康と長寿の創造

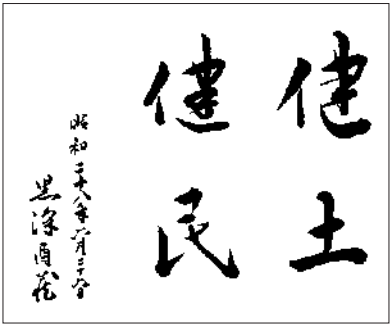
北欧の三国といえば、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーですが、ここは世界の長寿国として有名なところです。

しかし考えてみるとこれは非常に不思議なことではないでしょうか。北海道の遙か北方に位置する太陽の恩恵の極端に薄い寒冷の地が北欧です。その国民が世界の長寿国なんですよ。

そこで私はこう考えたのです。「北欧の国々の太陽の恵は薄い。人類を初め、地上の生物はすべて太陽なくして生きることが出来ぬ。北欧の人々は、どこの国の人々よりも太陽の有難みを知り、生活の知恵を働かせて、徹底的にそれを生かし、あるいは補足する工夫と努力を始めた。そして遂に長寿国になった」と。

北欧人は白人の原種といわれ、金髪青眼白色長身がその特徴です。キリスト教を知るにおよんで、勤勉、明朗のうえに温厚聡明、正直親切の特性が加わり、今日考えられ得る人知ではもっとも健全合理的な社会生活を営んでいます。なかでも食生活は徹底した合理主義で貫かれていて、主産品たる牛乳・乳製品、魚類の一人当たり消費量は抜群です。これに応じて女子の教育は非常に実際的で、健康管理者としての心得を徹底的にマスターさせています。

また、日光の恵みの少ないところを体操で補おうというのでしょう。体操の大衆化されたことは世



界一で、子供から老人まで朝夕の日課として必ず実行しているという具合です。スキー、スケートのような冬の運動が盛んなのも、国民の健康を増進させるためといえましょう。

このような北欧の実例をみると、私が「健康はもちろん寿命も創造できる」といった意味をお判りいただけるのではないでしょうか。人間は万物の霊長といわれます。その由縁のさいたるものが「なせば寿命まで伸ばせる」ということではありますまいか。北欧の実例こそ、その歴然たる証拠ではなかろうかと考えるのです。

この北欧の貴重な体験、すなわち健康も長寿も創造できるという実例をいま一歩進んで分析してみましょう。私はたちどころに健全でバランスのとれた食生活というところにぶつかりました。

日本の栄養科学はまだ必ずしも十分発達していませんから、案外、見かけとか腹を充たすことだけに目が向けられ勝ちです。が、日本でも数十年前からデンプン質文明からタンパク質文明へ進化すべきであるという論議はありました。大東亜戦争の結果、極端な食糧難が生じ、腹を充たすことだけに追われた頃はデンプンもタンパクもありませんでしたが、生活にゆとりが出てきて、あたりを見回すとまず子供が大きくなってきましたね。国民の体位は非常に向上したわけです。これが知らず知らずのうちに身についてきた食生活の改善、進歩の結果です。

人間と動物を一律に論ずるわけにはゆきませんが、動物の場合、獣肉を主食とするものはどう猛な性質を持ち、採草をする草食動物は従順な性質を持っています。このことから人間の食生活が変われば、素質、性格、能力まで影響を受けるということを考えるヒントが出てきますよ。例えば偏食をす

ると性質が片寄るとか、食生活に欠陥があると情緒に影響が出るとか、いろいろな研究が進んでいます。

そこで私は、「乳、肉、魚、卵などをほどよく配し、野菜、穀物、果実などを適宜に採れ」といいたいのです。バランスのとれた食生活をやればバランスのとれた性格も出来上がるでしょう。健康な食生活とか栄養食というのは結局、人間の健康を維持増進するためのものですし、人体の健康はまず食生活によって保持されるのですから、食生活のバランスをとるということは非常に大切なことだと思うのです。

しかも人間の健康は身体すなわち肉体の健康だけではありません。それと同じように大切なのが精神の健康でありますまいか。宗教とか教育がこの面では重要な役割りを果たしましょうが、知力、意思力、良識を体力と共に兼ね備えた人間を育てることになれば、食生活は決して軽視できません。それどころか私は、健康な食生活があって初めて健康な身体と精神が生まれるのではないかしらんと考えているのです。

2　三健論と健土健民

これでいくらかお判りいただけたかと思うのですが、私の「健康」という用語の使い方は非常に幅が広いのです。ごく一般的に健康と申せばそれは肉体的健康を直観するでしょう。私はこのうえに精神的健康、経済的健康が加わらなければ、人間として完全な健康は保持できないと思っています。これを健心、健身、健財といい、三健論としてまとめてお話してきました。

健心、健身、健財の三つの健康が備わって初めて、人生の意義が全うされるということです。そのさいもっとも重視すべきなのが「心」です。まず心の健康から始まり、ついで肉体の健康を保持し、

そうして経済の健康にいたるのが順序であろうかと思うわけです。この順序を忘れ、健心と健身を抜きにして健財だけを目指してごらんなさい。遂に身も心も滅び去るのですよ。これが個人としての完全な健康体とは何かという黒澤流の考え方です。

次は国家の場合です。私はこれも同じであると思います。個人の場合と――。ただ、いい方なり表現を変えなければなりません。そこで国家の三健論となれば、私は「健土健民健産」と唱えてはどうかと考え、このとおり多年にわたって提唱してきたところです。

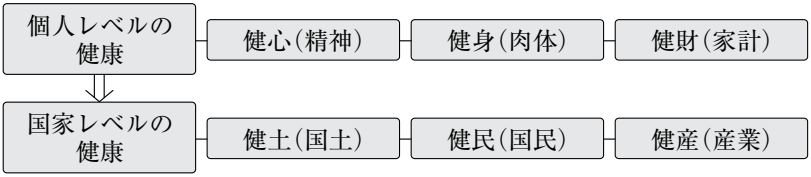
健康な国土、健康な国民、健康な産業の三つの健康があって初めて、国家の健康は保てるということです。なんども申しますが、健康とはバランスですよ。一つの部分、一つのところだけが伸びても他の部分が伸びなければそれはいかんのです。

そのつながり方、関連の仕方は説明の仕方とか対象によって種々様々になりますが、その一例をお話しますと次のようになります。

「健康な国民は健康な食生活から　健康な食生活は健康な食糧から
健康な食糧は健康な農業から　健康な農業は健康な農地から　健康な農地は健康な農民から　健康な農民は健康な心身から　まず心田を肥沃健康にせよ」

この三健論をふたたび北欧を例にとって説明しますと、北欧ことにデンマークですが、ここでは農業に科学をくまなく生かして健康な農地を

三 健 論



※健産（健康な産業）の基は農業である。ゆえにそれを担う農業人の教育が酪農学園の使命である。

つくり上げるのに成功したのです。太陽の恵みが薄く、日光が極端に不足しているところを体操と運動と食生活で補って、堂々たる体軀の国民をつくり上げたのと同じように、やせ地に豊富な堆厩肥を投入し、さらに足らずまいを化学肥料で補って肥沃な土壌をつくり上げました。これが健土です。

ここからとれる食物は健康な農地、健土から産まれるのですから、健康な、栄養豊富な食物といえます。これをまた教養ある主婦が料理します。これを食すればすなわち健康は心身共に増進し、長寿になるというわけですね。

よく北欧の視察者は農地、森林、漁場はもちろん都市、農村がすみずみまで美しく整とんされ、生産が豊かなことに驚いたという話をします。これは結局彼らの心の姿勢が正しく美しく豊かだからだと思います。良く心眼を開く、心田を耕すというでしょう。北欧はまさにこれです。国土を健康にし、農地を肥沃にする根本は、国民の心構えにあるのです。心田が荒れていては農地や国土がりっぱになるわけはないといえましょう。

まず、心田を肥沃健康に造成することから始めなければ、国土も農地もりっぱになりません。北欧に学ぶべき根本はここにあります。心を忘れたら、永遠の生命はなくなるのですよ。健土は健民をつくりますが、その健土をつくるのが健民なのです。

この関係を是非とも深く考えてほしいと思います。

3　化学偏向農法の怖さ

ひるがえって、わが日本はどうでしょうか。日本の三健はどうなっているのでしょうか。国土、国民、産業の健康度はどうなっていましょうか。ここでは対象を農業にしぼって調べてみることにします。農業はほかのどの産業よりも健土健民を実践しなければ成功しない分野ですから、私は非常に重

大に考えています。

ここでちょっとつけ加えておきますと、この健土健民という用語を考案したのは私です。本格的に使いだしたのは、わが酪農義塾の誕生とあい前後しますので、約40年前ですね。酪農義塾の卒業生や私の話を聞いた人の中には、正確にこの思想の神髄をつかんでくれた人が何人かはありました。これらの人々に助けられて、「健土健民論」はやや知られるようになってきました。

この思想を要約しますと、「健康と長寿を創造するには健康で豊じような国土を創造すべし」ということになります。人類の健康と不老長寿は健康な国土から産まれるものなのであります。これを簡単に申し上げると健土健民になり、これを実践するのが農業であるということになりましょう。私が全生涯を捧げてきた酪農はこの点から申しますと、まことに理想的な農業なのです。

ところが今日の日本の農業はどうでしょうか。近代的とか現代的とかいう農業は極端に堕落してしまったではありませんか。化学肥料と農薬、あとはしゃれた機械があれば農業はやれるものだと信じ込んでしまって、その偏向の弊害、怖しさ、誤りに目をおおったままではありませんか。

今日の如き化学農法を続けて行けば、日本の国土ばかりか民族が知らず知らずのあいだにおかしくなって行くのは確実です。国土と民族の生命力をむしばむ産業が亡国の産業でなくてなんでありましょうか。

私が改めて数十年来の主張を声を大にして叫ばねばならぬ、と決心したのはこのためなのです。健土健民という言葉こそ、少しは日本で知られるようにはなりましたが、私はまだまだ不十分だと考えています。率直にいうとその神髄を理解する人は少なく、これを実践する人となればさらに少ないのです。一方の北欧の如きは国を挙げてやっておるのに、日本ではその逆をやって平気でいるのです。私があえて健土健民新論を提唱すべし、と思い至りましたのは、このままでは遠からず日本は亡ぶと

確信したからにほかありません。

化学肥料と農薬がいかに便利だからといって、これのみに偏してはいかんのです。健土健民新論の立ち場からいいますと化学肥料はあくまでも補助肥料であって、肥料の主役はあくまでも堆廐肥、有機質肥料であるべきなのです。また、農薬も病虫害を防止する補助手段たるべきものであって、病害、虫害の防止の主役はあくまでも作物の生命力そのものにゆだねるべきなのであります。堆廐肥抜きの化学肥料の偏用、農薬の過用、乱用は絶対に慎むべきことといわなければなりません。

そこで一、二、化学肥料と農薬の弊害の実例を挙げてみましょう。まず化学肥料ですが、これを連用した畑の作物から採種した種子は、ジャガ芋のようなものでも2～3代で極端に生殖力がさがってくるといいます。これはイギリスのローザムステッド農事試験場の有名な実例で、「黄金の土」にも紹介されていますね。

また、最近西ドイツのハノーバーの農科大学の研究では化学肥料を連続大量に使用した牧草を食べていた種牝牛の授精能力が極端に低下した事実が発見されて、大きな反響を呼んでいます。

ここではその因果関係の細部の説明は省略しますが、要するにジャガ芋も種牝牛も現代文明の利器たる化学物質におかされ、遂に文明病になったというべきではないでしょうか。

農薬の弊害にいたってはもはや多言を要しますまい。農薬の成分はひとくちにいうと軍事用の毒ガスと同じものです。致死性のものがたくさんあります。これは早くから判っていました。ところが、自動車が増えれば交通事故が増えるといった具合のうわすべりの説明が幅をきかせて、農薬の事故にはあまり大きな注意が払われなかったのです。そして農薬が農薬を呼ぶという悪循環に陥こんで遂に世界一の農薬使用国・農薬人体実験国・日本ということになってしまいました。

ＦＡＯの統計を見ましても、1㌶当たりの農薬使用量はヨーロッパの6倍、アメリカの7倍という

すごさで、日本は国際的には農薬の人体実験国になってしまいました。これは今から10年前の数字ですが、日本の農地で1年間に使う農薬の量は、アフリカ、ラテンアメリカ、オセアニアにまたがる4億㌶の耕地に使われている量よりも多いというのです。

農薬が大量に使用されるようになってから農村には奇病、難病がずい分ふえました。散布中の事故が大型になりました。そればかりではありません。例の残留農薬です。農作物を通して有毒有害成分が国民全部にひろがっていったのです。しかも、ここで銘記すべきなのは農薬による国土汚染は工業面の公害よりも遙かに深刻なことです。工業方面の公害は全て産業廃棄物から発生していますが、農薬の方は、殺虫とか殺菌あるいは除草のために用いられる有用な部分そのものが公害源になっているからです。

また、光科学スモッグとか、ヘドロのようなものは一風吹くとか台風でも来ればいっぺんに消えてしまいます。流されてしまいます。けれども農薬の有毒分は土中や気中に残るのです。工業面なら、工場を抑えてしまえば発生源はなくなりますから心配はいりませんが、農薬の方はどんなに手をつくしてもいったん自然の中にまきちらされた有毒分は回収することが殆ど不能です。

4　国土汚染の新農法

そこで化学肥料と農薬で汚染された農地を目の当たりにして、私がまず申し上げたいのは、「身土不二」ということです。人間はもちろん、生命あるものは必ず死に、また、新しい生命が生まれてきます。地球上はその繰り返しですね。すべては土から生まれ土にかえるのです。霊魂は別ですが、私達の生命の糧はすべてこの大地から生まれるのです。身と土は別のものではなく「身土二ならず」なのです。ですから大地を健康にすることが人類の健康の土台だといえるのです。これは先に申し上げ

た私の「健康論」のとおりです。

ところが現実はあまりにもひどすぎます。荒廃地、やせ地、病土など不健康な土地から収穫した食糧ばかり食べていますと、必ず心身共に不健康な人間が出来上がるのでした。不健全な国土からは不健全な国民が生まれるのでした。この真理を知っていながら、国土の汚染・毒化に走るのは重大なる罪悪だと断言してはばかりません。国民を知らず知らずのあいだに滅亡に陥し入れる重大な罪悪を農業は続けているのです。

また、化学肥料と農薬の過用・乱用でようやく成り立つ日本の農業は全くの邪道農法に陥ったままなのです。国土を汚染毒化するばかりか、日本民族の生命源である食糧まで毒化するようになったのはこのためです。

私が健土健民新論を提唱したのは、日本の農業を正道に戻し、国土の清浄化食糧の健全化を図ることが日本のために絶対に必要だと確信したからにほかなりません。如何なる犠牲を払っても、化学肥料の過用と農薬の乱用を根絶する覚悟と決断が必要でありましょう。それを速やかに成すには法制を整えて国土の汚染毒化を厳禁したうえで、化学肥料と農薬の使用を厳重に規制すべきであります。

ですから、ここに提唱した健土健民新論は国土の清浄化、健全化運動、いいかえますと農薬を発生源とする公害根絶運動の理論的支柱になるべき性格をもっているのです。また化学物質偏向農法にとってかわる科学的合理的新農法の思想的根拠になるものであります。

化学肥料と農薬の過用・乱用はまさに文字どおりの相互関係にあります。地力を培養せずして化学肥料のみに頼って、手っとり早く多収穫を得ようとするのが邪道農法の第一歩でありました。さすれば農作物は見かけはりっぱに大きく育ちました。けれどもこれはモヤシみたいなもので、健苗、健康な作物ではなかったので、ちょっと病原菌が発生したり害虫が発生するとすぐ侵されてしまうのです。

これを退治する薬品が毒ガス用の劇薬ばかりですから、病害虫はなくなって見かけはきれいで、りっぱな作物がとれるようになりましたが、この農薬が食糧や国土を毒化してしまったのです。

欧米各国の農薬使用量がわが国の６分の１か７分の１に過ぎないのは、欧米各国の化学肥料の使い方が、わが国よりも６分の１か、７分の１と少ないからです。日本の農薬使用量が欧米の５倍も６倍もあるのは、日本の化学肥料の消費量が欧米の５倍にも６倍にもなるからです。化学肥料と農薬の関係はまさに正の関係にあります。

そこで話をいま一歩進めましょう。同じ文明の先進国グループを形成しながら日本の農業と欧米の農業における化学物質の使用量の極端な差を生じさせた根本原因は何であったか、ということにはいりましょう。

ちょっと考えてみますと、政治行政面では化学肥料と農薬の使用は全く野放しの状態できましたね。それよりも大量連用を奨励する方向にあったといえましょう。経済面で化学工業の躍進とともに化学肥料と農薬は多種多様になり値段もどんどんさがって使いやすくなり、手に入れるのに何の苦労もいらなくなりました。この面ではメーカーと共に農協の果たした役割は大きいですよ。

次の農業技術の面からいいますと、化学肥料とか農薬の連続大量投与はさほど深刻な問題にならず、主としていかなる時期にいかなる方法で、いかなるところに使うかという指導が前面に出ました。多収穫と病虫害の防止が農業生産の旗印になりきっていました。これは戦前も変わりません。食糧の増産―食糧難の克服―増産奨励―選択的拡大と生産第一主義のスローガンの中身は徐々にかわっていきましたが、多収穫と病虫害の防止というねらいが変わったことはないのです。

日本の農業が、その鉄則を踏みにじって、邪道農法に陥ったのは、あまりにも早手回しにしかも要領よく多収穫と病虫害防止の二つながらの大課題を解決してしまおうとしたからでしょう。しかし農

業だけはそう日本人好みのせっかち一本槍ではうまくいかぬのですよ。

5　機を知るは農の始め

私が酪農学園の前身であった酪農義塾を改組して機農学校を創立したときのことです。文部省や農林省のお役人から政治家まで、学校の名称の由来は「機械化農業」を教えるところからきたのだろうと見てとったようです。こういうことを私に直接聞いた人もいましたから、世間一般もそう思っていたのでしょう。当時、といってもいまから30年以上の前のことですが、私は科学的合理的農法は「有畜機械化農法」にありと提唱していました。

ところが私は命名の真意をもっと深いところにおきました。それは「機を知るは農の始めにして終りなり」ということです。機を知ることが農業の神髄を極めることになるという意味でした。私達は「機」のおおよそのところは知っています。日常生活のなかでごくさりげなくまた、なにげなく「機会」「チャンス」「はずみ」などということばを使っていますね。

しかし、実際、機ということを真に理解し、会得することは容易なことではありません。これを捉えた人は何事によらず百戦百勝するでしょう。ひとり勝負の世界ばかりではありません。事業、政治、外交、あるいは人生においては機を知る者は必ず成功します。

ですから農業に即して「機」をみますと、農業の急所、ツボということになりましょうね。これを捉えるのは容易なことではありません。が、凡夫凡人であっても、私心を去って至誠に徹して精進努力を重ねてごらんなさい。技は神に通じて、やがては機を知る境地に進めると思うのです。

この真理を知らずして、いかに科学知識を動員し、機械を動かしてみても、結局はマトはずれになってしまうのではないでしょうか。北海道のような寒地で発達した農業にはずいぶん独特の技術があり

ます。が、これをいくら知っていてもそれだけでは役に立ちません。寒地農業のツボは「適期をつかむ」ということにありますからね。農期間の短い寒地農業のツボをはずしてしまってはいかにりっぱな技術でも死んでしまいます。冷害危険期の化学肥料の投与も機を知らぬ農民のやることといえましょう。

要するに、農業は太陽の恵みと、大地の力と人間の知能が一体となって初めて成功するものなのです。私はこれを天地人の合作とも称するのですが、天地人が一体となって機を一にするところに農業の妙味があるといえましょう。

6　有畜機械化農業の神髄

さて、私は「健土健民」「機農」という用語と共に「有畜機械化農法」ということを唱導してまいりました。これは化学物資偏重農法に代わるべき唯一の科学的かつ合理的農法であります。

ご承知のとおり、農業の意義と申しますか農業の使命というものは大変重要なのであります。古来「農は国の基なり」といわれてきました。永く、農業は聖業といわれてもまいりました。これを現代流に解釈しなおしますとどうなりましょうか。農業はまず国民の生命の糧を生産いたします。ですから産業中の産業、一種の根本産業とみてさしつかえありません。国の基をなす産業であるわけです。また、農業は万物の母体である大地を直接管理愛護する使命があります。国土の汚染とか破壊からこれを守護することが大きな使命です。農業は国民と国土を維持増進するのですから「国の基」であるといってよいのではないでしょうか。

その農業の在り方が間違っているのではなにをかいわんやの状態になってしまいます。これが農法の問題です。今日の日本の農地は恐らく大半が「半病土」ではないかと思っています。それは化学肥料と農薬を過用、乱用した結果であり、このまま化学偏向農法を20～30年も続けてごらんなさい。日本

中の農地は、あのローザムステッド農事試験場の化学肥料連用実験圃場のように砂漠の状態になってしまうのではないでしょうか。少なくとも完全な病土になってしまうでしょう。

この農法の誤りを正し、邪道から日本農業を立ち戻らせるには「有畜機械化農法」に拠らせる以外にありません。

ここで「有畜」という概念は、欧米の金言である「家畜なければ農業なし」という鉄則を忠実に実行する農法の象徴として用いました。地力の根源である有機質肥料を堆廐肥から転用するものがもっとも合理的であるわけです。化学肥料を制限したり、補助肥料へ降格させるというからには、無制限に入手しうる主役肥料が準備されなければなりません。それをこの農法の場合は家畜が準備してくれるようにするわけです。

地力を合理的に培養し、肥沃にするにはこの家畜の準備してくれる有機質肥料が大変効果的なのです。地力培養と作物成育上に神秘的な働きをする土壌菌・バクテリアの食糧はこの有機質肥料に限ります。このバクテリアが増殖し活動が盛んになればなるほど地力は増加し、農作物は健康に育つからです。バクテリアは地力と農作物を結ぶ仲介者、なこうどに当たります。

これを育てずして農業を語るなかれと私は申し上げたい。化学肥料はバクテリアの食糧にはなりません。この一事は必ず覚えておいて下さい。バクテリアの存在しない土地は砂漠です。土壌菌を増殖することが「有畜農法」の目的であるわけです。

次の「機械化」の方は多言は要しません。終戦後、欧米特にアメリカの機械化農業に魅せられた農民は非常にたくさんいましたね。それが今日では日本の農村にも風びするようになりました。耕牛耕馬は殆ど姿を消して機械がとってかわりました。人力の節約、労働能率の向上、重労働の軽減ということから見ますと、これは大変な進歩です。けれども耕牛耕馬を放逐した片手落の機械化に走ってし

まいましたから、肥料はこれまた人手に頼ることになり、遂には化学肥料の専用に堕してしまいました。

有畜抜きの機械化農法は非常に怖ろしい結果をもたらすことはようやく判然としてきました。けれども、こんどは有畜農業の方にも欠陥が出てきましたね。結末は畜産公害だというんです。鶏なら何万羽も飼い、豚なら何百頭も飼い、牛でも多頭数飼育です。それを農地から離れた都会のまん中でやったり、農地とは関係なしの採卵・採肉・搾乳のみを目的としてやるものですから、肝心の産物たる堆廐肥と尿は邪魔物になってしまうのです。これもやはり邪道です。

こうした畜産公害のような珍現象は欧米にはありません。敢えていわせてもらえば、これほどはなはだしい恥さらしはありません。日本の有畜農業の在り方は根本から反省しなければならない理由がここにあります。

こう見てきますと、単に利便、利益を追い求めていては、遂には真理を見失ない、滅亡の淵に立つことになってしまうことがよく判るのではないでしょうか。

土地は自然の状態において、永遠の生命力をもっているものです。それを人類が発明した物質によって破壊したり

実学のための農場実習

奪うことがあってはなりますまい。化学物資の偏重と機械の単純な導入によって、農業と農法はすっかり狂ってしまったのではないでしょうか。

このような農業は天地人の合作でもなんでもありません。少なくとも機を捉えんとする農業者が採用すべき農法ではありますまい。国土を汚染し毒化すれば、国土の生命力は漸次うすれ、ついには死滅に至るのは日を見るより明らかなことであります。

（執筆　浅田　英祺）

第3章　田中正造を語る〔1968年（財）尾崎行雄記念財団発行〕

――明治百年記念講演より――

ただいま御紹介にあずかりました黒澤酉蔵であります。私は田中先生には青年時代に4年間師事したのでありますが、65年ほど前のことでありますし、私ももうすでに83歳で、かなりのおいぼれで、記憶ばかりじゃなく頭も少々ぼけておりますので、申し上げることがトンチンカンになったり、思い違いをしたりすることも相当あるんではないかということを心配しておるのであります。尾崎財団の鈴木さんからせっかくのご依頼でありますので、私まことにその任ではありませんけれども、それでは出てお話しいたしましょう、こういうことでお引き受けいたしたようなわけであります。これからしばらくの間、御清聴のほどをわずらわしたいと思います。

1　予想に反した田中正造の人柄

私と田中先生の関係は、いまちょっと申したようなことでありますが、それはいつごろのことであるかと申しますと、ちょうど直訴をされた直後であります。ご承知のように明治34年の12月10日に明治天皇に対して直訴をしたわけでありますが、これはあの当時新聞などで全面を埋めて報道されたのであります。

私がちょうど17歳のときであります。それを新聞で見まして、非常に青年の血がおどったわけであります。「いまどきこういう偉い人が世の中におるのかしらん」――私は感激をいたしまして、まことに乱暴というか、無謀というか、17歳の小僧が、直訴してから1週間ばかり後に芝口、いまの新橋

講演中の黒澤酉蔵
（尾崎記念会館 1967年）

駅の前の越中屋という旅館に田中先生をたずねていったのです。越中屋は三等客を扱うような旅館で、安宿でありますが、そこが田中先生の定宿なんです。そうすると、すぐ通されて会ってくれたわけです。新聞の写真なんか見ると、全く獅子のようなすさまじい容貌をしている。なるほどこういう容貌をしている人が演壇で獅子吼するということはぴったりで、いいんだろうというような姿をしておる写真がどの新聞にも出ているし、よほどおっかない人であろうと思って行ったわけです。

ところが会ってみると、まことにやさしい好々爺なんであります。本当に自分のおじいさんに会っているような気持なのです。かれこれ1時間余り、まあよくきてくれた、というようなことで、鉱毒事件というのはどういうことなんですかということを、こちらも何も知らぬ書生っぽですから聞いて、こうだ、ああだと本当によく、静かに説明してくれたわけであります。その態度といい、言葉つきといい、新聞やなんかで報道されるのとは全く違うのです。本当に泣く子もやまるといおうか、慈顔といおうか、あれが本当に人を惹きつける魅力とでもいうのでしょうか、私は心の底からすっかり感激してしまった。

そのときに田中先生が「そうだ、この12月27日に学生の視察団を催しておるから、それに加わって、君、現地を見たらいいじゃないか」こういうことであったのであります。それじゃ、そうですか――ということでそのときはそれで別れて、私も予想に反して田中さんという人柄を感じ入ったわけであります。

2　無数の毒塚

こうして12月27日に、鉱毒地の被害状況を見に行く都下各大学その他の学生の視察団に私は加わったわけです。有名な札幌農学校出身の内村鑑三先生がその時の青年視察団の団長なんです。大部分各大学から参加いたしました。私は中学生でありますけども、少しませている方とみえて、それに加わったわけです。早稲田では永井柳太郎君をはじめ、これは早く死にましたけれども菊地松堂だとか、こういうような人が主なメンバーであったわけであります。東大あたりからもずいぶん行きました。あとでみると、そのときの人はみな偉くなっておりますが、有名な河上肇さんなどもその時代の学生でした。その他どの学校もどの学校もみんな行った。私の記憶では１５００人ぐらい集まってきたと思います。

現地に行って一番驚いたことは、古河という駅がありますが、そこから降りて1里も行くか行かぬうちに村があり、そこの畑の中に土を集めて塚がいくつもできておる。なんだと思うと、これはみな鉱毒の毒の洪水がやってくる。そうすると洪水が引けた後には泥土が沈澱する。それをかき集めた塚なんです。これを毒塚と称しておりますが、草もなにもはえません。緑青がはえて、実に惨たんたる光景をなしている。この毒土を集めた塚が無数に畑にはある。水田にもあるわけであります。

それから竹薮に入ってみると、竹がぽつぽつ抜けるんです。あの大鵬と柏戸の二人がかりでかかったって、竹薮の竹は抜けるもんではありませんよ。その竹がすぽり、すぽり抜けてくるわけなんです。根がみんな毒のために腐ってしまっている。〝ひどいもんだなあ〟と思って桑畑を見ると、これも枯死している。それから今度は農家を一軒一軒回って見たのですが、実に惨たんたる有様であった。本当に飢餓が迫っておるというか、みんな病人のようになっておる。

その光景をわれわれ学生が見て、今度は内村鑑三先生が毒塚の上に登って、そこであの名調子でわれわれに演説するわけです。いまでも内村鑑三先生の風貌が目に見えるようであります。そういう視察をやって、その日は帰るのですが、私だけは友だちと「君、ここだけ見ても、1村だけなんだから、渡良瀬川の上流、足尾の近くまでずっと見ようじゃないか」「それはよかろう」というわけで、一行と別れて私どもはさらに次から次と渡良瀬の上流の村々を歩いたんです。

歩いてみると、至るところ大同小異なんです。ひどいんです。1カ所ばかりじゃない。渡良瀬川の北側は栃木県になり、南側は群馬県になるわけですが、この両側をずうっと上がって行って足利、桐生の近くまで参りまして5日間視察した。それではっきりわかったのです。これはなるほど田中先生のいうのは本当だ。新聞の報道も本当だ。

そうして東京に帰りまして各大学の学生の主なるものが集って学生鉱毒救済会というものをつくったわけです。学生運動を始めたわけです。私もそれに加わって大いに東京中を路傍演説をやった。永井柳太郎君は、政治家になって雄弁家になったのですが、おそらくこの鉱毒問題が彼の処女演説ではなかったかと思う。足を引きずりながら一緒にやったもんです。衣類を集めたり、金を集めたり、食料を集めたりして、どんどん鉱毒地に送ったわけです。

そのうちに文部大臣から「学生はそういうことをやってはいけない」という厳重な命令が各大学に下ったわけです。いまはそんなこといったって聞きゃしません。それどころじゃない、全学連は大変なことをやっているんですけれども、明治時代は全く違うのです。労組もありませんし、思想団体ももちろんありません。そこで自然に盛り上がった運動はいつとはなしに次から次とやめてしまった。けれどもそのうちの熱っぽい連中は若干残りまして、それを継続したわけです。残った連中の中には、永井君などもそうですが、後にかなり有名になった人もおります。

3　友愛会を結成

そういうことを2、3カ月やっておったのですが、私はつくづく考えたわけです。こんなことをやったって、これは一時の救済策だ。一時は助かるだろうけれども、根本の救済策にはならない。根本の救済策をやるのにはどうしたらいいだろうか。私はこういうことを、親しい友人と話し合ったのです。これは結局被害を受けている農民自身がもっと結束を固くして奮起する以外にないじゃないか。一時的のことをいくらやってもだめだろう。新聞もずい分書いておりましたけれども、そんなことだけじゃだめだろう。

やはり鉱毒地の被害を受けている人々が本気になって、それぞれの方面に要請をして、自分で解決するという姿勢を、いまでもとっているだろうけれども、さらに強くしなければだめだと思うがどうだろう。そうだなあ――というわけで私は田中さんのところに行ったわけです。「実はわれわれはこうやってやっておるけれども、どうもこの問題の解決というものは鉱毒民が本気にならなければだめだと思うが、あなたどう思いますか」「その通りだ。君の言う通りだ」「そうですか。実はわれわれの仲間でもいま議論をしておるのだが、私は一行と別れて沿岸をずっと見たんだ。ところが本当にひどいんだ。どこに行っても、よくもまあ、ああいうことがこの世の中にあるものだと実は思っておるのだが……」「君の言う通り、本当の自覚が農民になければこの問題はだめなんだ」田中さんはそう言った。「そうですか。それでは私どもが一つ鉱毒地に乗り込んで鉱毒地の青年を糾合して運動を展開したい」と言うたら「それはありがたいことだ」と言うのです。

いざそうなって鉱毒地に行くということになるとみんな消えちゃって、最後には私一人になってしまった。もちろんこれは学業を停止しなければなりませんから容易なことじゃないのです。しかし、

私は田中さんに約束しておるし、同意を得たんだし、というんで鉱毒地に乗り込んだのであります。

そうして至るところ村々を行脚して回って、いまでいえば青年行動隊とでもいうんでしょう、友愛会というものをつくりました。各村のみんな血の気の多い青年約５千名が集まりまして、私が隊長、指導者になったわけです。そうすると同時に、田中さんもしょっちゅう鉱毒地にきておりますから、一緒になって演説をする、集会をやるということで、これが私と田中さんとの関係なんです。

以来、私がこの運動を猛烈にやった、その間に６カ月くらい前橋の監獄に入ったわけです。当時今村力三郎、花井卓蔵という弁護士がおりまして、これは明治、大正にかけての日本弁護士のトップクラスの人ですが、この今村先生などは私の弁護士をただで、１厘も取らんで、犠牲を払って弁護をやってくれたんです。そういうような経過を経まして、結局は２審の東京高裁にまできたわけです。

もちろん無罪になりましたが、前橋の地方裁判所でも無罪なんです。検事の控訴によって東京まできたわけです。１年余りかかりましたけれども、こういう問題があったもんですから、田中さんはしょっちゅう私の宿にくるわけです。東京にくれば私のところにきて泊まる。だから私のところにはいまでも田中さんの手帳が50～60冊あります。それからあの人は着物だとか、いろいろな持ちものをそこにぬいで置いていくもんですから、そういうものはいまでも私の家宝として残っております。

心又水の如く 田中正造

そういうことで、田中さんとは４年の間まことに親子のようにさしていただいた。一緒に寝泊まりして鉱毒地を歩いたこともあれば、いろいろな機会にあの人の思想というもの、ものの考え方というものを汲み取ることができたわけです。ちょうど17歳から20歳まで４年の間、私が北海道に参ります

まで薫陶を受け、鉱毒問題に対して飛び歩いた。こういうのが私と田中翁との関係、また鉱毒事件と私の関係であります。

また、その当時農村の青年でいまも生きているのが、まだ5・6人残っております。私が一番年若で、小僧っ子なんですが、たいてい当時22～25歳くらいの青年で、きょうも2・3人から手紙や電報がきまして、どうしても行きたいけれども、からだが弱って行けないということをいってきているものもあります。

4　無実の罪で3年入牢

さて、そこで私、これから少し順序を立てて鉱毒問題と田中翁のことについてお話ししたいのですが、私は田中先生の生涯を1期、2期、3期と分けることができると思います。

先生の第1期はどういうのであるかというと、39歳ごろまでを、私は第1期と思うのでございます。栃木県の佐野市のちょっと北の方に行ったところに小中村というのがありますが、そこで生まれた方であります。実は庄屋というか、名主をやっておった。彼は19歳のときに名主を父から引き継いだわけであります。これは年代にいたしますと安政6年であります。そうして名主の方でも名主頭みたいなことをやっておったわけであります。そのかたわら寺子屋などを開いて子弟の教育をしておった。

ちょうど田中さんが28歳の時、明治元年になるのですが、一つの事件を起こしたわけであります。あそこは当時六角家の領地であったらしいのでありますが、田中さんは生まれつき正直で悪いことのきらいな人ですから藩内の改革をやろうということで努力して、あべこべに牢屋にぶち込まれてしまったのであります。そうして10カ月くらい入っているうちに明治維新になって牢屋から出てきたわけです。

そうして30歳の時、明治３年でありますが、今の岩手県、江刺県というのがあったのですけれども、この江刺県の小役人みたいなところに知人に勧められて行ったわけです。ところがその上役がだれかに殺されたのです。田中さんはああいう人ですからその話を聞いて、一生懸命夜中に駆けつけ、袴に血がついたりしたが、そんなことには無頓着で色々と世話をしたらしいのです。

しかし悪い一味がおって、田中さんは栃木県の方から向こうに行ったばかりなもんですから、よそ者扱いされ、怪しいとかなんとか宣伝された。明治の初めですから、それで嫌疑をかけられてまた牢屋にぶち込まれてしまったわけであります。この時は長く、３年近く入っておった。もちろん無実の罪ですから無罪であります。

それでまた郷里に帰って、彼が39歳ぐらいまで自分の家におっていろいろやっておったようであります。ところが、当時物価がどんどん暴騰するということがわかっておったもんですから、あらゆるものを金にしてあのへんの土地を全部買い占めたらしいのです。田中さんは相当商才もあったらしく、それが当たって、あの当時の金で３千円というのですから、いまなら大したもんでしょう。これですっかり借金を払い、なお田舎としては一生安楽に暮らせる資産ができたわけです。

そのとき、彼は父親に「これだけの金があれば食うのには差しつかえないから、自分はこれから日本の政治に一身を捧げたい。どうかお許しを願いたい」「よかろう」ということで、それからすっきりと商売とか金もうけということはやめて政治に転身した。これが39歳のときであります。

５　三島事件

それから今度は栃木新聞というものを興こした。なかなか着想はいいのです。そうしてそこの名義人となった。その翌年の明治13年に初めて県会の選挙が日本で行なわれたのでありますが、すぐ県会

に打って出て県会議員に当選したわけです。これは田中さんが40歳の時であります。これからが、いわゆる政治家としての田中正造が出てくるわけです。ですから私は、不正とか不義をにくみ、勤勉で硬骨、そして平凡な市民であった39歳までの田中さんを第1期としたわけであります。

県会議員になった彼は、今度は憲法発布、国会開設の運動を開始したわけであります。一方には新聞の事業をやり、一方においては尾崎咢堂、大隈重信、あるいは板垣退助という天下の名士と一緒になって、栃木、群馬の総代として、ずいぶんはなやかな運動を展開したのです。

そのうち県会の方でも三島事件というのが起こったわけであります。当時栃木県には三島通庸という人が県令としてきていたのでありますが、この三島通庸県令はなかなか剛毅な人とみえて、県庁の仕事、県営事業なんかでも、県会に相談しないでどんどんやってしまう。栃木県のあちこちの道路を普請（ふしん）するんでも、県会の決議なんざあすっぽかしちゃって、どんどん県令の命令で農民を動員してやる。こういうやり方をしたらしいのです。

まあ当時としては明治の初年で、幕府が倒れて、そのちょっと後ですから、行政官としてはこのくらいやらなければだめだったか知れませんが、自由民権というか、そういう方面の主張をしている田中正造としては「万機公論に決すべしというのに自分勝手に、県会議員に相談しないでやるのは何事か」というわけです。こんな乱暴な県令はおっぽり出さなければいかぬというので、これまた大葛藤になったわけです。

ちょうどその前後に、筑波山のすぐそばに加波山という山がありますが、あそこに職のない浪人が立てこもって加波山事件というのを起こしたのです。田中先生はそれにひっかけられたわけです。どうも田中は危険人物だ。加波山事件の脈を引いているらしい。こういうことでまた、三島県令にほおり込まれてしまったわけです。そうして10カ月ばかり監獄に入ったのです。そのうち三島通庸さんは、

中央の政府でいろいろ調査したところが少し乱暴すぎるということで免職になった。これで田中さんはすぐ凱歌をあげて出てきたわけです。

次いで県会議長になったわけですが、明治22年、御承知のように明治憲法が発布されて明治23年に国会が開設され、初めて選挙ということで栃木県から代議士として当選し、出てきたわけであります。

この39歳から61歳までが田中さんの第２期であります。県会議長が10年ばかり、国会議員が明治23年から代議士を辞職して直訴するまでの12年間であります。この国会時代、いわゆる鉱毒問題を引提げて論じた時代、これが世間に多く知られておるのであります。

6　新井奥遽先生

直訴したのは明治34年12月10日、61歳でありましたが、63歳から73歳までの12年間、これが第３期の田中正造だと思うのです。この第３期の田中正造はあまり世に知られていないのですが、この第３期12年間の田中正造の変わり方、これは実に研究するものにはおもしろいと思うのです。最近大分学者の中でも田中さんの研究をやっておるようでありますが、それは主として第３期の田中正造を研究しているわけです。

田中さんはよく手帳やいろんなものに所感を書いておるのですが、それを見ますと全く哲人といおうか聖人といおうか、実に驚くべき大文章を書いておるのであります。そうして彼が62歳のとき、官吏侮辱罪というような罪でまたしても牢屋に入ったわけです。この時は期間としては割合短かく40～50日であったのでありますが、その間にバイブルを読んだ。それで彼の人生観はころっと変わったのであります。その前からでも、ずいぶん宗教に対しては研究しておったのですけれども、彼は先ほども申したように昔の人ですから学問は儒教であります。四書五経とか、いろいろそういう漢文の学問

をやったのであります。その頭で政治のことでも社会のことでも考えておったのです。

ところが彼はだんだん鉱毒問題を通していろんな階層の人と付き合ったわけです。政治家もトップクラスの者はみな付き合っております。大隈さんをはじめ、この記念会館の尾崎先生、さらに思想家としては内村鑑三、木下尚江、あるいは島田三郎だとか幸徳秋水、堺枯川、早稲田の安部磯雄、こういうような人、宗教家としては本多庸一、植村正久、海老名弾正、また軍人では谷干城、こういう人ともしょっちゅう行き来をしておった。そういう関係で、あの人は非常に視野が広くなるとともに、実際問題を通していろんな訓練を受けたと思うのであります。正直な人なもんですから、全くすなおに受け入れた。

私は一緒に何回かお伴をしたことがありますが、そのうちで一番あの人が思想的に革命的な影響を受けたのは新井奥邃先生です。この人は世の中にあまり知られていませんが、巣鴨聖人と言われておった。巣鴨に庵を結んで、仙人のような生活をしておりました。

この新井さんがまた、足尾鉱毒問題に非常な同情者でありまして田中ファンなんであります。それで田中さんは新井さんの庵に時々聖書の講義を聞きに行くのです。私もなんべんか一緒に行ったのですが、例の内村鑑三さんはずいぶんりっぱな人ですけれども、おそらく日本の牧師の中で内村さんにほめられた人は余りないようです。だれでも遠慮なくこきおろします。アメリカなどはクソミソです。あんなのは本当の宗教国じゃない――ということを内村先生は言っております。その内村先生が新井奥邃だけは「あれは偉い人です」とほめておるのです。その新井先生が田中正造の思想の魂のお師匠さまなんであります。

「あなたは魂に病気があるのだ。それを治さなければだめですよ」こう新井奥邃に言われて田中さんはブッとしたわけです。「おれはどこへ行っても、だれに会っても病気なんてことは言われたこと

がないのに……」。最初は田中さんは非常に気分をこわしたらしいのです。ところが田中さんという人は、一時はムッとするけれども「なるほど考えてみれば、自分はそうかも知れぬ」。そこで彼は新井さんを師と仰いで、東京に行けば必ず寄って行って話を聞くようにした。これであの人は精神的な革命を起こしたわけです。だから書いたものを見ましても、直訴後のものは全く違っているのです。

キリスト教でいえば十二使徒の言うようなものを書いている。田中さんはああいう性格なもんですから、あとでは悪かったなあと後悔するんだけれども、その場になるとカッとする。だから間違っておれば、だれでもどなりつけるということを平気でやった人なんです。これが田中正造のいいところでもあり、悪いところでもあります。それを反省させてくれたのが新井奥邃先生なんです。

これはバイブルによって全く性格が変わった。この性格が変わった後の田中正造を知っている人は割合に少ないのです。私は直訴後の田中正造に師事しましたので、あの人が精神的に変わりつつあるところに一緒になっておったもんですから、私としても非常に幸いだと実は思っておるのであります。

以上のようなわけで田中さんの生涯は３期に分かれ、その最後の３期の田中正造というものをいま学者が研究しているわけなんです。これはおそらく相当のものができるのではないかと私は思っております。

7　公害防止か富国強兵か

そもそも足尾銅山というのは関東の真ん中にあるわけです。この足尾銅山を源として走って流れているのが渡良瀬川で、利根川に合するのであります。ちょうど栃木、群馬、埼玉、茨城と四県にまたがっておって、関東沃野の真ん中を川が下ってきておる。でありますから、あそこは非常に豊穣な土地なんです。昔は川も非常に深くて、江戸から桐生、足利まで舟が通ったというところであります。

明治11年に古河市兵衛が鉱山を手に入れて銅の製造を始めたわけです。鉱物だけ取るならばなんでもなかったが、あそこに精練所をつくって製銅まで始めたわけです。ところが明治初年のことですから科学が進歩していないので、いまからいえばむちゃくちゃであったのでしょう。そのために２～３年のうちに渡良瀬川の魚は死ぬようになった。そこで明治13年に県令で、あそこの魚を取っちゃいかぬ、食っちゃいかぬ――という命令を出すわけなんです。

ですからあそこには２～３千戸の漁民がおったのですけれども、みんなあがったりなんです。そうして10年ばかりたって、明治23年ごろから付近の人が騒ぎだしたのです。そのときに、先ほど言ったように田中正造が代議士となって、国会へ問題を持ちだしたわけです。

ところが、当時の日本の状態を一方において観察しなければなりません。ご承知のように日本の政治は列国に立ち遅れている。どうしても早く列国と肩を並べなければならない。それには富国強兵でなければならぬ、というのが、当時の上も下もない錦の御旗なんです。

これが明治維新以来、この間の戦争に負けるまでの一貫した姿勢であったのであります。その始まりのころでありますから、足尾にああいういい銅山ができた。どんどんあそこから金が出る。銅が出る。だからしてこれはたいした魅力であった。田中正造がいくら騒いだって、そんなものはがまんしてもらわなければならない。国家の利益には代えられない――という一言で片付けられたというのが実際なんです。

ですから鉱毒民からいえば足尾銅山が悪いというけれども、私はもっと広い意味からみると、あの時の国情からそういうことになったんだろうと思います。でありますから、田中さんが熱心に、一身を賭して議会で７・８回も質問演説をやった。けれども案外響かず、効果がなかったというのは、そういう国のあり方というものが一つ大きく影響していたと思う。

いま一つは、これはまことに私としては言いにくいけれども、古河市兵衛には子供がないのです。養子なんです。その養子は、鉱毒問題が起こった時の農商務大臣陸奥宗光の二男で潤吉という人なんです。そして後に政友会の総裁で総理大臣になった原敬が陸奥宗光の秘書官をしており、明治34、35年ごろは足尾銅山の副社長なんです。陸奥宗光も原敬もりっぱな人です。しかし、そういうような縁故が偶然にもあったのです。

けれども国情が、先ほど申したように富国強兵をやらなければならぬというときであり、また明治の初年でありますから、民権というものは言葉では言っておってもそんなに尊重されない。やはり官尊民卑の時代です。このごろでは民主主義になって民権はみんな大変に尊重する。それでもどうかすると忘れられますけれども、明治の時代というものは官吏万能時代であったのです。だから当然解決されねばならない問題が解決できなかったのであります。

8　壇上に鉱毒の土と水

そこで私どもが非常に高く評価したいのは農科大学の古在由直、横井時敬両博士です。この二人は明治14、15年ごろから地元の依頼を受けてたびたびあそこに出張し、農作物が全く取れなくなってしまった、どうして取れなくなるかという原因を調査するために土壌検査をやったわけであります。これは銅の毒だということを、これにははっきりありのままを報告しております。

しかし明治27、28年の日清戦争、その次には明治37、28年の日露戦争ということで軍備拡張というものは日本の至上命令なんです。なんでも軍備を拡張しなければならない、国を富まさなければならない。そこに足尾銅山というものができたんだから、百姓も少しぐらいは困っても辛抱させようじゃないか。こういうのが当時の大勢であったのであります。

だからそういうふうに考えてみると無理もないことではあるが、田中さんは実際に国会の議場、壇上に鉱毒の土を持ってき、コップに渡良瀬川の水を持ってきて「これは渡良瀬川の水だが、あなたこれを飲みなさい。これを農民はみんな飲んでいるんですぞ。この中で暮らしているのですぞ。あなたは農商務大臣だが、一つこれを飲んでください。あなたが飲めないやつを、どうして陛下の赤子の農民に飲ませるのですか」こういう調子なんです。実に徹底したもんです。

大隈さんも述懐しております。大隈さんが総理の時に大隈さんの家に行って、非常にかわいがっている植木に、鉱毒地からいっぱい毒の土を持ってきて乗せちゃって、そうして帰る。「いやあ、これにはおれも困ったよ」と大隈さんは言っております。それで国会では「大隈さん、あなたの屋敷の植木に鉱毒地の土を持ってきてかけたら怒るだろう。伊藤博文の大磯の蒼浪閣の、あのりっぱなお屋敷にその毒の土を私が持って行って振りまくがどうか。そんなことをされては困るといって拒絶するだろう。しかし植木が枯れたって知れたもんじゃないか。たかが木じゃないか。ところが十何万の陛下の赤子が日夜その中で暮らして健康を害し、食べ物は取れなくなる。大事な土地がみんな不毛になってしまうのだが、どうなんだ。それでも鉱山の方が大事か」。そういう責め方なんです。そういう点があの人の率直といおうか、端的といおうか、歯に衣を着せないやり方なんです。

話が長くなってしまいますが、鉱毒問題の方はそういう関係でなかなか解決できなかった。明治31年でございましたか、榎本武揚さんが農商務大臣になった時、相変わらず田中さんが獅子吼したわけです。

当時の速記録を見ると実に痛快な演説をしております。榎本武揚さんは非常にりっぱで正直な人なんです。そこでわざわざ渡良瀬川視察に行ったんです。そうして隈なく見てびっくりした。毒塚は累々とあるし、竹藪に入ってみれば竹がぽつぽつ抜けてくるし、食べ物はなんにも取れないし、農民は困

り果てておる。これは申しわけなかった――榎本武揚さんは昔の武士で函館に立て籠ったほどの生一本の人ですから非常に責任を感じたらしいのです。それで視察を終わると家にも帰らず、すぐに総理の大隈さんのところに飛んでいって実情を報告し、一両日の間に足尾鉱山の鉱毒調査会というものを内閣の中に設けた。そうして有名な神鞭知常さんが委員長になって調査を始めた。ようやくそこまでいったわけなんです。

しかし2、3日後に榎本武揚さんは辞表を出して辞めてしまった。これでたいていその当時の状態がおわかりかと思います。

私どもは記録を見たり、いろいろ話を聞いたりしておるのですけれども、どうしても先ほど言ったように富国強兵論、ロシアと戦争しなければならぬ。こういうことを盛んに考えておった矢先でありますから大事な銅山を停止するということはできない。それなのに調査会をつくるのはけしからぬ――というような議論が出たんではないかと思います。

そこで彼は責任をとって辞めたわけです。一時は明るみが見えてきたのですけれども榎本さんは辞し、それと相前後して明治30年には宮内省から広瀬侍従が鉱毒地にわざわざ視察に行くというようなこともあったわけですけれども、そのうち隈板内閣はつぶれてしまった。そうして軍閥山県有朋の内閣になったわけです。これからだんだん軍人の力が日本の政治にものをいうようになってきたわけであります。

田中正造の国会演説（小口一郎版画）

そういうことで、こんなことをしていては悪いなあということを知りながら、結局なにもせずに農民は苦しんでおる。そこで田中さんは前の国会で演説をして、政治に、これだけ困っている農民をどうするんだということで迫ったのですけれども、さらに手応えながない。

これは、自分が政党に属しておるからいけないのだ、ということで、大隈さんが当時率いていた立憲進歩党を脱退したわけです。そして政党なしでやったのですけれども同じなんです。さっぱり効きめがない。これはどうしてもいかぬ、というので、ついに衆議院議員を辞めちゃって天皇陛下に直訴した。これが明治34年の12月10日であります。これが鉱毒問題のいきさつです。それから冒頭に申し上げたように学生の運動となり、それを契機として世の中が騒然としてきたわけなんです。

9　谷中村事件

一方において、明治33年には大挙して5千人ばかり農民が請願に出たわけです。これは利根川を渡るところで食い止められ、例の有名な兇徒嘯聚罪（きょうとしょうしゅうざい）というもので50何名がぶち込まれたわけであります。ついに無罪にはなりましたが、いくたびかそういう牢獄事件が起きたわけです。けれども鉱毒問題は相変わらず片付かない。しかしそれが動機となって治水事業というものが非常に重きをなすに至ったわけであります。

つまり原始河川の域を脱し得なかった渡良瀬川をりっぱな近代河川にしようということで、あの当時からだんだん堤防を真っ直ぐにし、これを堅牢にして、どんな洪水があっても大丈夫のように直したのです。それでその後は上流の方は鉱毒という問題はだんだん薄れてきたわけです。これはやはり田中先生のあの努力が実ったんだと思います。

昨年あたりでしたか、群馬県あたりで用水の中に鉱毒があるということで国会で問題になりました

けれども、これは当時から比べればほんのわずかなものであります。それと科学が非常に進歩しましたから精錬所の施設がよくなっているので、鉱毒として流れる量も非常に少なくなったと思います。

ただここに一つ、谷中村事件があるわけであります。それはどういうことかというと、上流の方はずっと堤防を丈夫にして、曲がったところは真っ直ぐにして、だーっと水がくるようにした。そこで貯水池を下の方につくらなければならぬ。

こういうことで谷中村はしょっちゅう堤防が切れるから、あそこを貯水池にしようじゃないかということになったのであります。これが有名な谷中村事件であります。これは谷中村ばかりじゃない。そばの数ヵ村にも関係がありますが、谷中村が最後まで残った。ところが田中さんは先ほど言ったように人生観が全く変わった。聖書の中に〝一人の命を救うのは全世界よりも尊し〟という言葉があるのです。あの人はそれを実行したのです。谷中村がつぶされてどうにもならなくなる。そこの窮民を一人でも救わなければならないというので、最終まであそこに谷中村の村民と同じ生活をした。これはとうていできないことです。

私も谷中村には何べんも田中さんのお伴をして行って、よく知っておりますが、本当に偉いと思った。でありますから、あの人は死ぬまで窮民のために尽くしたわけであります。またその間に治山治水の問題をあの人はいろいろなことでやっておるのであります。

10　「亡国を知らざるは亡国なり」

治山治水のことは、いま日本では非常に大事な問題です。いま日本の災害予算というものの大きな部分が集中豪雨とか干害とか、こういう問題で悩んでおる。しかしこれはなにも戦後起きたんじゃない。昔から集中豪雨だとか、そういう災害の要因はあった。これに対して田中さんは実に徹底した見

識といおうか、見解をもっておるのであります。

要は、本当の治山治水をやらなかったならば国はだめなんだ。これがあの人の持論です。私は何べんもこれを聞かされた。田中さんは日本は滅びるということを日露戦争前後にしばしば言っておるのです。

日本は〝勝った、勝った〟で負けたことを知らない。〝神国日本〟と言って有頂天になっていたときに「こんな間違ったことをやっておって栄える国はないんだ。これは神様の道に反するんだ。」田中翁の信念といおうか、思想というものはこれなんです。「世界というものは神様がつくっておるのだ。それを人間の浅知恵やわがまま、私欲や都合で悪くしている。世界というのは神様がつくった大きな楽園なんだ。それを神様の意思のままにりっぱにしなければならぬのをこわしているじゃないか。こんなことをやって滅びない国はないんだ。」そうして、また「富国は結構だ。強兵も国を守る強兵ならいいけれども、他を侵略する強兵では侵略される方も迷惑するじゃないか。こんなことで神様は許すもんじゃない。天理に反するんだ。」だからあの人の日記を見ると「満州を取って喜んでおるというのはなさけない。いやしい。そんな根性で日本は栄えるもんじゃない。」こういうことを演説でも言っているのです。

また、昔の人ですから皇室などに対して非常に尊敬しております。けれども正しいことに対しては一歩も引かない。彼が国会を辞する最後の演説に「亡国を知らざるは亡国なり」こういう演説をしているわけです。けれども、それは当時としては気狂い扱いにされた。日清戦争には勝っているし、日露戦争にも勝っている。日の出の勢いで隆々となっている日本。国民全部がもう戦勝に酔っておる神国。日本で亡国なんというのは非国民である。

それこそ当時としては大変なことになるのです。それを平気で東京の青年会館で演説しておるので

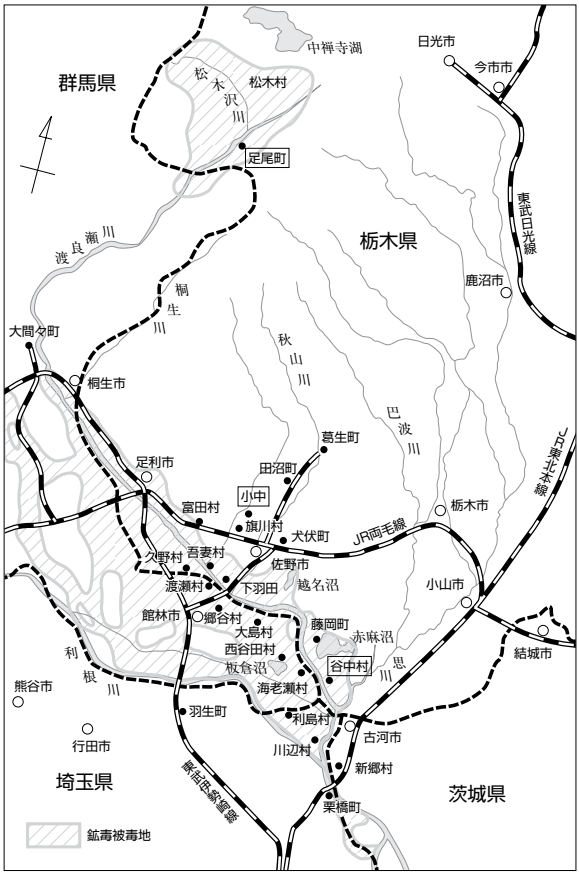
す。私はまだ19か20歳の若い時代ですから「先生、国が滅びるというのはおかしいじゃないか。そんなことは本当ですか。なんの証拠でそんなことを言うんですか」と言って詰め寄ったことがあるんです。

けれども、いま考えてみると、あれは本当の予言ですね。確かにそうです。あれから日露戦争後、日本のうぬぼれがつのって大陸政策という、一面からいえば侵略政策、こういうことでついに日本は滅びたわけです。だから田中さんの言った通りです。「日本はいっぺん滅びる」これを予言しておったわけです。

それからいま一つ記憶に新たなのは、島田三郎さんとつかみ合いのけんかをせんばかりに議論をしたことがあるのです。これは青年会館で演説会がすんだあと、控え室ではじめたもんです。

田中さんの持論は「国土はどんなわずかなものでも実に大事なもんだ。この日本の国土を不毛の地にしたり、こわしてしまうということはとんでもないことだ。これは何億年たっても、国土というものは生きているんだ。われわれ人類が生きているのは国土があるからじゃないか。その国土を一寸の土地でも粗末にするという考え方は間違いだ。足尾銅山がいくら銅が出るか知らないが、年限がくればなくなるじゃないか。これが永久に銅が出るんじゃありませんぞ。せいぜい50年か１００年もたったらなくなっちゃう。掘り尽くせばないんだ。ところが一方の渡良瀬川沿岸数十里の数万町歩の土地は永久に続く土地じゃないか。そこには昔から、何百年、何千年、何万年の先から人が住んでいる。今後も住んでいく。その土地をわずかの金、銅が出るといって、そんなものに目がくらんで片方をいじめるのはどういうわけか。その土地を不毛にさせて、未来永劫役に立たないような土地にするということは、こんなばかげたことはない。いま直ちに足尾銅山は停止しなければいけない。」これが田中さんの一貫した議論なんです。

足尾鉱毒事件関係略図



この地図は、明治30年頃の地図に現在の主な鉄道路線を加えたもの

しなければならぬじゃないか。その川に毒の流れぬように予防を厳重にやらせようじゃないか。」これが島田さんの常識的な議論であります。

ところが二人とも兄弟以上に仲がいいのですけれども、お互いの主張を1時間もやっているんだ。私はそばで聞いておって「どっちが本当かなあ。やっぱり島田さんの意見がいいんじゃないかしら」と思ったりしておったのです。私は青年の時ですから「田中さんの意見はどうも極端すぎるなあ」と

ところが島田三郎さんは「田中君、君は極端すぎるよ。やっぱり日本は国防をやらなければならぬし、軍備も拡張しなければならぬ。金もいるんだ。資材もいるんだ。だからして若干農民もがまん

思ったのです。ところがだんだん年をとってきて、ますます田中さんの意見の正しいことがわかってきたわけです。

11 治水の要諦

いま中東問題がやかましいが、あれなども自分の民族同胞の住む領土の問題ですよ。イスラエル民族は数千年来流浪の旅にあったんでしょう。それがようやく祖先の国土というものをあれだけ認められた。だからこれはその境涯に立たなければ私はわからんと思うのです。やはり民族とその国土というものはどんな犠牲を払っても守らなければならぬという、この考え方が人類当然の自然性だと思います。そういう点が、つまり田中翁の国土に対するものの考え方であります。

それから治水に対する考え方も私はよく聞かされました。「治水の要諦は、無理をしてはいけない。水は低きに従って流れるのだから、この自然の天理を逆にすれば、どんなにしてやってもだめだよ。熊沢蕃山が治水の神様と言われるのはそれだ。」その当時は、つまり青年の時代はそういうものかなあと思って、そう感心しなかったが、私は最近この言葉に非常に感心しておるわけです。

実はいまから15、6年ほど前に外国旅行したときにオランダに行ってみました。オランダは御承知のように半分ぐらいが海より低いのです。土地はライン川の下流ですけれども、国土がないから海を干拓している。いまボルダー干拓地をやっておりますが、ちょうど東京湾のようなところを30キロ。7里くらいの間に堤防を海の中につくって、中を干拓しているのです。そうして国土を造成しておる。私はあれを見て、田中先生が私の若い時分に話されたことをまざまざと思い出すわけです。

利根川というのは、大昔は関東を真っ直ぐに流れ、半分以上は東京湾に水がきておったわけです。銚子の方にはわずかしかいってなかったのです。けれどもこの間にいくつも支川が流れて向こうに行

きますから、銚子に行く時は霞ケ浦から相当大きくなるのですが、昔は江戸川にずうっとたくさんの水が流れてきておった。

田中さんの持論は「それを昔にかえさなければいかぬぞ。徳川時代に利根川南岸の権現堂堤というものを堅牢にして江戸を水害から防ごうとしてやったのがそもそもの誤りだ。あの関宿を締めちゃったから天理にそむいている。あれをもっと広げて自然のままに、水の行くままにまかせればいい。そのかわり東京の方は頑丈な堤防をがっちりやればいいじゃないか。そうすればどこもここも助かるのだ。それを小役人のわずかばかりの知恵で、土木技師の天理に逆行したやり方をするからこんなことになるんだ。土地をつぶしてしまうのだ」と言われたもんです。

これをオランダで見まして思い出し、オランダ国土の25％というものは海の中につくったものだ。オランダは偉い。日本はそれからみれば、いわゆる治山治水に対して幼稚だと思いました。田中さんも、しょっちゅう〝山泥棒〟と言っているのだが、「山の木を切るからだめだ。そしてあと木を植えもしない。政治がなっていない」と言って山の乱伐を戒めております。

私はかつてアメリカでＴＶＡを見たのです。これは有名ですから、みなさんおわかりだろうと思いますが、テネシー川の流域が非常に荒れて、アメリカ一の貧乏な地方になっておったのです。それがいまから40年前に、ルーズベルトの時代であったかと思いますが、テネシー川の開発、治山治水の法律をつくりましてＴＶＡができたわけです。私は3、4日踏査してみたのです。感心するのは治水事業、ダムの建設、工業、林業、農業、観光、すべてが一つの頭脳によって施行されている。

あの公団は理事が3人か5人しかいないのです。それがすべてをやっているのです。おととし行った人から聞くと、テネシー川のダムは30ヵ所を越えているのではないかと言っておりますが、私が行ったときには20ヵ所ぐらいダムがあったわけです。これがあの大きなテネシー川をせき止め、そこへダ

ムをつくって発電を起こす。だからテネシー川の沿岸には工業が興きておるわけです。同時に以前洪水で荒れ果てたところの山の傾斜地をどんどん改良して草地造成をやっております。

そうして家畜を飼う。山には木を本気になって植える。こういうことを公団が一つの手でやっているのです。日本のようにセクショナリズムで、なんの係だ、かんの係だといって、隣りとの連絡なくしてやるから、そこに間違いが出てくるのであって、ＴＶＡは一つの公団の手に政府は全権をまかしてやっている。あそこはもう今日たいしたもんです。工業もアメリカでは相当の地位になっているのではないでしょうか。電気は非常に安く、しかも農民には特価で供給する。こうして農民も非常によくなったわけであります。

私は、こういう点について田中翁がしきりに当時言っていたことを思い合わせまして、やはり日本もそういうふうにしなければだめだ――こういうことを深く感じて帰ったようなわけであります。

私は、予言者というものはないんだろうと思っておったのですけれども、このごろ深く考えてみると、やはり田中さんは予言者の一人であったと思うのであります。彼は61歳以後に牢に入り、いろいろな機会にいろいろな勉強をこつこつやったわけです。正造は無学だ、無学だ――と言っておりますが、無学どころじゃない。いま読んでみるとりっぱな文章を書いております。

以上、私が田中先生に接近して直接感得し、あるいは後に記録として見たものを取りまとめてお話しいたしました。〝田中正造を語る〟という、この財団のご要請に応えるのははなはだ貧弱でありますが、これをもって終わりといたします。みなさんのご静聴を心から感謝する次第であります。ありがとうございました。

☆質問応答

問 田中先生の家族関係をお聞きしたい。

答 奥さんは桐生の生家で88歳でなくなりました。子供はおりません。ただ妹さんがおりまして、足利の原田某という人のところにかたづいておりまして、これのお子さんはたくさんおります。

田中さんは衆議院の時代でもああいうふうに歳費を辞退した人です。８００円の歳費を2千円に値上げするという案が国会に出た時に賛否両論あったわけです。田中さんはその時大隈さんの立憲改進党の代表になって反対演説をやったわけです。歳費を自分勝手に上げるのはとんでもない話だ――ということで反対した。そうして自分は反対したのだし、これは正しいのだから、いくら貧乏でも自分は歳費はもらいません――と言って全部辞退して1厘ももらわないのです。そうして貧乏暮らしをしておりました。（拍手）

☆「三愛の歌」（黒澤酉蔵）

酪農は地力を肥やし乳を産む健土健民の母といふべし
この国土汚染毒化を放置して国富めりとは何のたわごと
学園も日本唯一の酪農校成せば成るとの証(あか)しなるかな
豊かなる希望あれば人生は幸福に充ち新希望生まるる
田畑は堆肥厩肥で作るべし生命の糧はここに産(うま)るる
金肥もて永く作らば田畑はつひには荒れて国は亡びん
泥くさき土の香りはいつまでも夢忘れまじ健土健民

第４章　反芻自戒〔１９７２年黒澤酉蔵先生米寿祝賀委員会発行〕

―訓話50編（抜粋）―

１９７２(昭和47)年５月、酪農学園の創立者黒澤酉蔵翁の米寿祝賀記念として、「反芻自戒」（黒澤酉蔵先生米寿祝賀委員会　雪印乳業株式会社）が刊行された。酉蔵翁は、１９４６(昭和21)年２月に北海タイムス社の設立委員に就任し、１９６０(昭和35)年５月には同社社長に就任した。ご高齢などを心配する向きもあったが、経営難に陥った同社の立て直しをかってでたのだ。

１９０５(明治38)年８月、渡道して職を求めた際、紹介状をもって真っ先に訪ねたのが北海タイムス社社長阿部宇之八であった。阿部の勧めによって宇都宮仙太郎牧場の門をたたき、生涯を酪農を軸とする寒地農業の確立と、農村青年の教育に捧げることになった。酉蔵翁はそのことの恩義にも応える思いで難職を引き受けたのである。

「反芻自戒」と銘打った小エッセイ(訓話)集は、１９６４(昭和39)年１月から１９６６(昭和41)年２月までの２年有余年にわたり、北海タイムス紙の題字下コラムに連日書き綴ったものと、１９７２(昭和47)年２月から連載を再開した「米寿寸感」の一部を収録したものである。その数は７７０余編にも及ぶが、その抜粋(50編)を遺訓として学園史に収録した。

＊　＊

牛や羊はおおいそぎで牧草、雑草類をかみ取る。彼等は、食したものを第一胃に送り込み、暫時ここに貯め置く。次なる休息中、彼等は第一胃で、酵素によって粗消化されたものを、逆に口中に戻す。これを何回も何回も繰り返し、入念にかみくだき、ふたたび第二胃にのみ込む。これを反芻という。

反芻動物に胃袋が四つあるのはこれがためである。反芻によって、牧草、雑草等から、貴重な栄養分を摂取するのである。

これと同様に、われわれも、日常ひとつひとつの事柄を、何回も何回も考え直し、思い直し、その事柄のなかに潜在する真理を充分にそしゃく(咀嚼)し、その神髄を会得し、もって、自己反省の資となすのである。かくすれば、人生行路において、誤りを最小限に防ぐことができると思うのである。このことを私は『反芻自戒』と命名した次第である。

日々反芻自戒しつゝ、己を正せば漸次、素行も改まり、誤りも少なくなると思う。これを人格の修練、陶冶というのである。

当たり前のことを当たり前に行い、わかりきったことをわかりきったように行い、日常、平凡なことを平凡に行うことがもっとも尊いことだ、と私は思う。反芻自戒は至極平凡なことを平凡に解説し、これを身につけ、実行に移そうとする場合の手引きに過ぎない。

これがまた、この書を刊行せんとする目的である。

昭和47年3月28日

八十八歳の誕生日を馬追山の黒澤酪農園で迎えた日に記す

黒澤酉蔵

＊　＊

☆国土の汚染

国土は国民の母体であって、健全なる国土から健全なる国民が生まれるし、不健全なる国土からは不健全なる国民が生まれる。国土を汚染、毒化することは、国民を知らず知らずの間に滅亡におとし入れる重大なる罪悪と言わねばならぬ。国土の清浄化、健全運動こそすべてに先んじてなさねばならぬ緊急時ではあるまいか。私は数十年来、健土健民論を主張してきたが、今やさらに声を大にして叫ばねばならぬ。

☆身心の汚染

身体の汚染も困るが、さらに心配なのは心の汚染である。かりに身体は汚染されても、心だけは清浄無垢でありたい。心が汚染されれば、その極は恥を知らぬ人間になる。心が清ければ、少しの汚れでも気にかかるものである。清廉潔白の人は安眠もできて心身ともに健やかである。われわれはこの世に生を享けた以上、その日その日を大切にし、出来るだけ長生きして、社会のために幾分なりとも貢献するのが人間の務めではあるまいか。

☆希　望

希望は生命(いのち)である。希望にかがやく国家、集団、青年をみるとその張りきった姿、疲れを知らぬ精進ぶりには神々(こうごう)しさを感ずるのである。希望のない人生は、生けるしかばねであって、あわれなる存在である。希望は清く高く、地についたものでなければならぬ。世界、国家の希望は愛と義による平和、協同友愛の福祉社会建設であり、青少年のそれは知徳、天分をみがき、社会の

良器となり、人生の幸福を享受することではあるまいか。

☆ 無限の力

人間の力は無限である。無限のような力を持っているのが人間である。この仕事はほんとうに世の中のため、ひとのためのものであると確信して突き進み、精魂こめてやるところに無限の力が泉のようにこんこんとわいてくるものである。そこが人間の人間たるところで、牛や馬にはそれができない。きまった力より出てこない。私どもが万物の霊長といわれるゆえんである。

☆ 三つの健康

健康といえば肉体的健康を直感する。しかし一番大切なのは精神的健康である。さらに経済的健康が加わって完全な健康になる。健心、健身、健財をかね備えてこそ人生の意義がまっとうされる。まず心の健康から始まり、ついで肉体さらに経済の健康に至るのではあるまいか。この順序を忘れ、健心、健身を抜きにして健財だけをめざすため、ついに身も心も滅び去るのではあるまいか。

☆ 知行合一

真理は、だれでも知っている平凡なことである。知っていて行わないのは、知らないより悪い。知って行ってはじめて真に知ったことになる。これを知行合一という。知っていることを真剣に実行してうむことを知らぬ人が聖人君子である。いやいや行うのではなく楽しみつつ行って感謝の生活を知る。むずかしい理屈を並べて得々たるは人間としてまだ子供の時代である。

☆天命を開け

『人事を尽くして天命を待つ』――誰でも知っている古い格言であるが、私は『人事を尽くして天命を開け』といいたい。その目的が正しく、その手段が正しければ如何なることでも成就できる。一代でできなければ二代にわたり、二代でできなければ三代、四代にわたって努力を重ねれば、必ず天命は開かれる。これが真の土根性である。土より生まれ出で、大地に根をおろした根性である。

☆時はいのち

『時は金なり』とよくいわれるが、実は『時は生命』である。時間のムダづかいは、いのちのムダづかいである。私たちの寿命を、その天分に応じて高度につかいこなすなら、それはりっぱな人生である。一日八時間はたらき、日曜を休日とするのは世界の常識である。文化が高度に発達すれば土・日両日を休むのはさらによい。いずれにせよ悔いなき好日を全力をもっておくるがよい。

☆身土不二

人間は必ず死ぬ。地上の動物も植物も生まれては死ぬ、その繰り返しである。すべて土から生まれ土にかえるのだ。霊魂については未解決であるが、他は科学がほぼその法則を明らかにしている。私たちのいのちの糧(かて)は、すべてこの大地から生まれ、身と土とは別のものではなく『身土二ならず』である。大地を健康にすることは、人類の健康の土台である。この事実を深く考えるべきである。

☆ 自分を知る

『敵を知りおのれを知れば百戦危うからず』という。人生行路も同じことで、自分を知らなければ人生を全うすることはできない。おのれを知るということは本当にむずかしいことだが、その秘けつは『自分が今こうして生活しているのは、自分の力ではなく、先人の努力の積み重ねと社会のおかげである』と感謝し、謙虚な心になることである。ごう慢と思いあがりは、身を滅ぼす悪魔である。

☆ 虚心坦懐

虚心坦懐――これほど大切なことはない。自我を捨ててわだかまりをもたず、考え方を平らにする、これは民主主義の根幹である。話し合いの場、つまり民主主義を育てる道場がいくらあっても、邪念や私欲を捨て、ひろい雅量をもって、相手の話をききいれるのでなければ、いたずらに闘争の場を提供するのみである。これでは禽獣のような知識人をはびこらすに過ぎぬ。

☆ 上向きの困難

仕事が上向きになればなるほど困難は加わる、文句も出る、苦しい。しかし、ここで正道と決めた基本方針を変えてはならぬ。さらにその方針をかたく守り、自らきびしくやっていくことが困難を乗り越えて大成する唯一の道である。小手先では困難は克服できない。万策つきたという苦しみの中から、自分でも驚くほどの発明、発見が生まれ、大事業が進むのだ。

☆天地人の聖業

農業とは天・地・人の合作によって、人間の生命の糧(かて)をうみだす聖業である。無限の天地と呼吸を合わせ、ものいわぬ作物、家畜――その心を心としてかぎりない愛情をそそいでこそ、人類を養い育て活動の源泉となり得るのだ。この聖なる業である農をいやしみ、斜陽産業などというものは、自分自身の生命を軽んずるものである。

☆私学の使命

封建時代を精算して、維新大業の思想的種まきは、吉田松陰の松下村塾であった。また明治時代の新、旧思想の長をとり短を捨てて、文明開化の道を教えたのは福沢諭吉の慶応義塾であろう。いずれも私学である。今日の思想的混迷を正道にみちびくのも私学であらねばならない。私学関係者はその使命の重大さを深く自覚しなければならぬ。

☆窮すれば通ず

昔から〝窮すれば通ず〟というが、誠に真理である。万事窮したときに、希望を失わず自信をもち、捨て身の努力を何百回も何千回も、うまずひるまず繰り返すなら、道はかならず開かれるものである。学問、芸術にしても、スポーツや事業にしても、私たちの人生にしても、この真理は同じである。障害にぶつかって捨てばちになるような薄志弱行の徒では、窮すれば倒れるのみである。

☆愛

聖書は神は愛なりと説き、釈迦は慈悲を、孔子は仁を説く。それぞれ宗教的に深い意味があろうが、私たち凡人の常識としては、同じような概念として受けいれている。愛、慈悲、仁――むずかしい理論よりも、常識的でよいから日々実行するところに意義がある。小さな親切を毎日くり返すなら、ついに親切をしなければ気がすまぬようになる。ごく自然に、意識せずにやる。これが真の愛である。

☆地の塩

『なんじらは地の塩なり』の聖句がある。塩は防腐の役割をなすから引用された、と解釈する人が多いようだが、さらに積極的な意味がある。それは物の味をつけるのは塩であるという考え方だ。人それぞれに持ち味がある。これに味をつけて、その人の持ち味を生かす、それでこそ世の中は多彩、多色、美しく、暖かく、なごやかになる。一人一人を生かすのが塩の役目である。

☆難事にあたれ

幾十万の青年が学窓を出て、それぞれ就職するが、多くは安きにつきたがる。わたしは人のいやがる仕事を喜んで引き受ける青年こそ、次の日本を背負ってゆくものと信ずる。高い月給、楽な仕事、それを選ぼうとするのは人情の常ではあるが、これが人生堕落の第一歩である。『かん難、なんじを玉にす』――古いことばだが、永久に新しいことばである。真綿にくるまれては、玉はみがかれぬ。

☆恥を知る

人間と動物のもっとも大きな違いは恥を知ることである。世間に対して恥ずかしい、他国民に対して恥ずかしいというように、恥を知るからこそおのずから責任感がわいてくるのだ。恥を知り責任感があれば発奮努力する。そして進歩もするのである。これが人間特有の感情である。恥を知る感情の大小こそ、人間を評価するバロメーターである。

☆自信と虚勢

根をはなれた浮き草が、風の吹くまま水のままに漂うさまは、自信のない人の姿である。理論的にも道義的にも確固たるよりどころに従って行動をする人は、思想や立場の違いは抜きにして、実にりっぱである。これを自信のある人、信念の人という。こういう人は常に謙虚な態度をくずさない。ところが自信ありげに思いあがった人を見かけるが、これはまったく本質の違う虚勢にしかすぎぬ。

☆求めよ、訪れよ

バイブルに、求めよさらば与えられん、訪れよさらば会えん、門をたたけよさらば開かれん、という聖句がある。願うことはきっと成就できるという意味だが、この願いには厳しい条件がある。その願いは私利私欲によるものであってはいけない。その目的は愛と義にもとづくものでなければならぬ。私欲からではなく、真に社会人類のための願いなら、必ず達成できるというのが神の約束である。

☆日に新たなり

『日に新たなり』とは不滅の真理である。きょうのわれは、きのうのわれにあらず、あすのわれは、きょうのわれにあらず、毎日、進歩し発展するのである。希望を新たにしつつ前進するのでなければ進歩はない。かといって、先だけをみて現在をおろそかにしてはならぬ。過去を土台に現在があるということを強く自覚し、その日その日を真剣に忠実に過ごす、これを日に新たなりというのだ。

☆心のゆとり

人は非常の事態にあわねば真価はわからぬ。誰でも、生涯には幾度か進退に迷うときがある。人の価値は、そういう場合の出所進退にありといっても過言でない。平常はりっぱなようにみえても、非常のときに進退をあやまる人がある。ゆとりを持つには、無私でなければならぬ。無私はその人の生まれつきもあるが、絶えざる反省と修養で得られるものだ。

☆光をおおう暗雲

人間はもちろん、地上の動植物はすべて日光の恵みなくしては生存ができぬ。この貴重な太陽も、ときには黒い暗雲におおわれてかくれてしまう。しかも、これが日光のほどよい調節となって万物は育ってゆく。この玄妙な大自然の天理は、神秘とでもいうべきか。人間社会も同じこと、日光のあたるときもあたらぬときもある。得意にも失意にも平然としているのが人生である。

☆ほどほど

『過ぎたるは及ばざるがごとし』という格言のとおり、何事でもやり過ぎ、いい過ぎ、しかり過ぎはまずい。むしろいくらか内輪内輪にすべきである。食べ過ぎは場合によって病気の因ともなるが、八分食は心配ない。老人の健康法は七分食とさえいう。事業も広げ過ぎるよりは控えめの方が安泰である。演説にしても余韻を残すほうが聞き手に感銘を与える。何事もほどほどこそよけれ。

☆態度とことば

目は口ほどにものをいう。態度とまなざしで大体その人の心中が読めるものであるが、さらにことばによって全部がわかる。心の姿が、眼光、態度、ことばを通じて相手の心に響いてくるのである。心の姿勢が元ではあるが、態度とことばについて、もっと研究くふうして、誤解されないよう修練すべきではなかろうか。国際的立ち場に立つ日本人としてとくにこのことが必要だと感ずる。

☆人間改造

他人の欠点や非行は水増しして攻める。ところが自分のことは棚に上げ、善人のように装って恥じない。個人間、会社間、団体間、国家間にこれが平気で行われているのが現実の姿である。こんなことでどうして世の中が平和にやってゆけるだろう。まず、自らを正しくし、他に対しては寛容と善意と同情をもって臨むなら、自然に協同愛の社会が生まれ、ついに目的に到達するのではないか。

☆ 希望は成長する

理想的社会を作り出そうとする願いは、人間の創生いらいの希望であろう。この希望があればこそ、科学も発達し文化も向上するのである。理想的社会とは何か、それは人間がそれぞれの天分に応じて楽しく働き、社会の一員として役立ち、人格が尊重され、有意義に生涯を終ることではなかろうか。人類は、この目的を達成するために過去幾千年間、苦労して今日に至った。

☆ 協同体

人間は大自然の一員である。大自然と共存共栄して文化を築き上げ、山河の自然を美化し、地上に一大芸術を描き出そうとする清純雄大なビジョンこそ、人間最高の名誉で、光栄ある大事業ではなかろうか。まずわれわれは天地自然が安住永遠のホームであるという信念から出発しなければならない。そして人間だけの世の中であるという、うぬぼれた独善的利己観念を捨てなければならぬ。

☆ 無言の戒告

冷害は北方の宿命であるかのように考えられたが、いくどかの苦い戒告に発奮、北方に適するような品種改良、栽培管理などで、米作についてはある程度まで冷害を克服した。これは科学とたん(丹)精、努力を巧みに北方の自然に調和させ利用したからであって、自然を征服したからではない。さらに賢明なのは適地適作を行なって、自然力を心ゆくまで活用することである。流れに逆らっても上れるが、流れを利用して下るほうがさらに有利である。

☆信ずる

信念のないところに実践なく、実践のないところに信念はない。信は実である。しかしこれが正しいと信ずるには正しい理性がなければならない。理性の欠けた信じ方は、ややもすると盲信になり、狂信になる。理性の欠けた信仰は危険である。野蛮民族の迷信のごときはよい見本である。理性と信念と実践、この三者がとけ合い結びついて、初めて真の人格が生まれる。小石と砂とセメントの三者が結合してコンクリートができるようなものである。

☆人の道

自己を真に愛することは、自分がこの世に生まれた意義を全うし自己の天分を完全に果たすことなのである。すなわち人の道を完全に歩むことなのである。人の道を完全に歩く人が多くなれば、その国は平和となり栄えるのである。このような国が世界に充満すれば、世界平和は自然に招来される。自分さえよければということが自己を愛することだと考えがちだが実は逆で、自己滅亡の道を突進している。真に人の道を歩めば自他ともに永遠に栄え、祝福される。

☆日本と日本人

日本人は真似ることがじょうずだといわれるが、バカではこれもできない。何事も最初は真似ることから始まる。親の真似、教師や先輩の真似から、ついに自分のものになるのだ。真に自己のものにするためには形だけではだめである。心の底からその真髄を会得して、初めて自分のものになる。幾度か厚い壁に突き当たり、難行苦行を重ねて本物に成長する。この過程をへずに単に形だけの真似に

終わるなら、世界の劣等民族になるであろう。

☆自己と戦う

自分と戦うのが人生である。人間には誘惑に負ける心とそれに打ち勝つ心がある。葛藤する心に勝ってゆける人が、自分の道を切り開いてゆける人である。こんごも負けることもあろうが、そのとき強く反省できるかどうかで将来が左右される。大志を抱くのはよいことだが、毎日自分に打ち勝ち、努力を積み重ねて初めて到達できる。若い時は甘く考えがちだが、千里の道も一歩ずつ、ということばは常に新しい。

☆一日を悔いなく

人間の生涯を有意義に送れるか送れぬかは、その日その日の一日を、有意義に暮らせるかどうかで決まる。押し寄せてくる魚を、網ですくい上げるように人生の幸福をつかめるものではない。人間はだれでも、それぞれの仕事があり日程がある。その毎日の仕事に全身全霊を打ちこんで働くのだ。その重なりが実を結び、成功となって現れる。このあたりまえで平凡なことを、たゆまずやれる人は、力量相当な成功を必ず勝ち取る。

☆鍛　錬

艱難(かんなん)は忍耐を生み、忍耐は練達を生み、練達は希望を生む。希望には失望はないと聖書は教える。人間の能力は無限に開発されるものである。それには、困難に耐える忍耐力が必要だ。忍耐を積み重ねてゆくときに、それが鍛錬されるのである。鍛錬を積み重ねてゆけば、練達の域に達す

る。これが達人であり、名人である。口先の理論だけでは役に立たない。名刀は水火の中で、幾鍛錬されてでき上がったものである。

☆冷害のない農業

人間にはそれぞれ天分がある。適材が適所について働いてこそ、生きがいがあり、悔いのない生涯を過ごせる。土地にも天分がある。土地の天分は、気候風土、地形地勢によって分かれる。土地の天分を存分に活用するのを適地適作という。暖地には暖地農業が発達し、寒地には寒地農業が発達する。こうして大自然に調和し、自然力を利用するのが人間の知恵である。北海道は何十年何百年かかっても、冷害のない寒地農業を確立しなければならぬ。

☆花と実

美しい花とおいしい果実は、万人の等しく喜び好むところである。花も実も、よい幹、よい根がなければ生まれない。よい根幹はよい土壌からでなければできない。これは平凡なわかりきったことではあるが、多くは花と実を得るのが急であって、土壌をつくることを忘れがちである。農業をはじめ、各産業、政治教育、社会改造に至るまで、この道理をかみしめて実践すれば誤りはないのだが、花や実を得ることをあせり、根本を忘れるので失敗するのである。

☆ミツバチの話

ある企業家が年中四季の花咲く南方にミツバチ群を移動させ蜜の採集を企ててひともうけしようとした。蜂群は数ヵ月は懸命に飛び回って、たくさん蜜を集めた。そのうち蜂群は採蜜作業をやめた。

一年中花が咲いているので蜜を貯蔵する必要がないのである。冬があるから勤労も貯蓄もする。冬がなければ勤労も貯蓄も、必要がない。冬があり、艱難、災害、病気があるから、くふうも研究も努力もする。苦難も災害も感謝して受けねばならぬ。

☆社会開発

社会投資から一歩進んで、社会開発という表現は、社会優先の思想からよいことである。しかし、道路、港湾、河川、用水の整備、住居の増設、公害の除去等、環境を整備し、さらに進んで、社会福祉の開発までゆかねば、真の社会開発とはいいがたい。しかし、いうはやすく実現は容易でない。社会開発の前提として勤労意欲の開発、むだ排除など精神開発から始めなければ、結局は机上プラン、空念仏に終わる。世の中は汗を流さずでき上がるものはない。

☆烏合主義

弱いから虚勢を張って強がる。ひとりでは心細いから大勢で押しかけて威圧してかかる。ときには群集心理で乱暴する。これが似て非なる民主主義の世相である。堅く信ずるところがあればすなおでおだやかであるはずだ。しかも主張は断じて曲げない。古語に『われ正しければ、先方は百万人といえどもわれ行かん』これだけの自信と勇気をもってほしい。烏合の衆では、ただやかましいだけで役に立たぬ。一人一人が自立完成せねば民主主義も烏合主義になる。

☆健土は健民をつくる

心眼を開く、心田を耕すと、昔からいわれている。国土を健康にし農地を肥よくにする根本は、国

民の心がまえにある。まず心田を肥よく健康に造成するのでなければ、国土も農地も立派にならぬ。心田が荒れているから農地も荒れていく。北欧視察者は農地、森林、漁場が美しく整とんされ、生産の豊かなのに驚くのであるが、結局は彼らの心の姿勢が正しく美しく豊かであるからであろう。心を忘れた経済政策に永遠性はない。

☆良心の躍動を

やむにやまれぬ青春の躍動、かけがえのない生命まで捧げる信仰心、心の底からほとばしる力はソロバンでは計算できないものである。いま日本の要求する最大のものは国民良心の躍動爆発である。マヒしがちの良心が一度目覚めて燃え上がり躍動すれば、山をも移す力を発揮する。経済の安定復興も社会秩序の調整も、文教の興隆も政治の浄化も外交の正常化も易々たるものだ。アジアにおける日本の大使命を思うとき全国民は起つべきときがきたと思う。

☆健土健民と長寿

良馬良牛は良い牧草から、良い牧草は良い土地から。この原理は人間も同じで、健康な人は健康な食物から、健康な食物は健康な農地から生まれるのである。北欧は寒冷地ではあるが、豊富な家畜の堆厩肥と化学肥料で肥沃な地力を造成する。農業科学をくまなく生かし、健康な農地を造り上げる。その大地から栄養豊富な食物が生まれ、教養ある主婦が料理する。それを食すれば健康は増進し、体位は向上する。北欧人の長寿はここからくるのである。

☆だれでもできる

小さい親切。やさしい慰めのことば、やろうとすればだれにでもできることを初めは意識的に毎日毎日根気よくやると、習い性となり、ついに無意識に自然に身についてくる。これを徳の備わった人格者というのである。小を積んで大をなすとは財産をつくる秘けつであるが、りっぱな人づくりも同じことで、小さな親切、善行、やさしいことばの積み重ねである。これはやろうとすればだれにでもできる。千里の旅も一里からである。

☆時期を待て

どう考えても自己の主張が正しいが大勢はわれに不利で、容れられない場合がある。良い意見ほどこれが多い。この場合、自己の主張は曲げぬが大勢に従って静かに時の至るのを待つのである。これが正しい姿勢である。血気にはやる熱情漢は忍耐ができず、力をもってこれに当り、あたら一生を台なしにする例が多い。慎むべきことである。梅は三月、桜は四月、桃李は六月に開花するのである。時期至らざれば、いかにあせっても花は開かないものである。

☆汗を流す喜び

世の中がどう変わりどう進んでも、汗を流さず成功する道はない。からだで汗を流すか頭脳で汗を流すか、心魂を砕いて汗を流すかの差はあるが、心身を労せずして成功し、財産を得る道は絶対にない。人知の進むにつれて、この天地不変の真理を忘れ、ちか道、ぬけ道を捜し、欲望をとげんとするから犯罪が増加し、世の中が暗くなる。汗を流すことは人生第一の勤め、楽しみであり、光栄である。これを幼児から教えるのが人づくりの根本であろう。

☆苦難到来

山登りはだれでも楽しい。頂上に達した時の心持ちはたとえようがない。さて山の半ばまでは身も軽く鼻歌まじりである。傾斜もゆるく元気いっぱいであるからである。ところが五合目頃から傾斜も少しずつきつくなり、体も疲れてくる。七、八、九合目になると、とても苦しく幾度か倒れそうになる。これを乗り越えねば頂上でご来光は拝めぬ。人生もこの事業の成否も同じことである。苦しい時代を経ねば成功に近づくことはできない。

☆運命の開拓

運が悪い、運が良かった、運命で仕方がない、いわゆる運命観で自他ともに慰め、あきらめる。こういう人生観が案外多い。しかしよく考えると努力が足りなかったか不注意であったか、必ず思い当たる原因があることを検討し、禍を再び繰り返さざるを期さねばならぬ。人間おのおの器量が違うものである。一斗のマスには二斗は入れられぬがその器量すら修練努力によってはだんだん成長するものである。運命観、宿命観は禁物である。

☆あき樽は鳴る

人間ができればできるほど物腰が低く、柔軟で、謙遜になる。しかしどこかに犯しがたいところが出る。未完成の人は知識ぶったり、偉ぶったりするものである。あき樽は軽くやかましく鳴るが、いっぱいつまった樽はどっしりとして音はせぬものだ。百言は一行にしかず。黙々としてよいことを実行してゆくうちに自然に気品風格が備わり、豊作時の稲穂のごとく重く頭を垂れる。愛は高ぶらない。誇らない。無作法をしない。味わうべし。

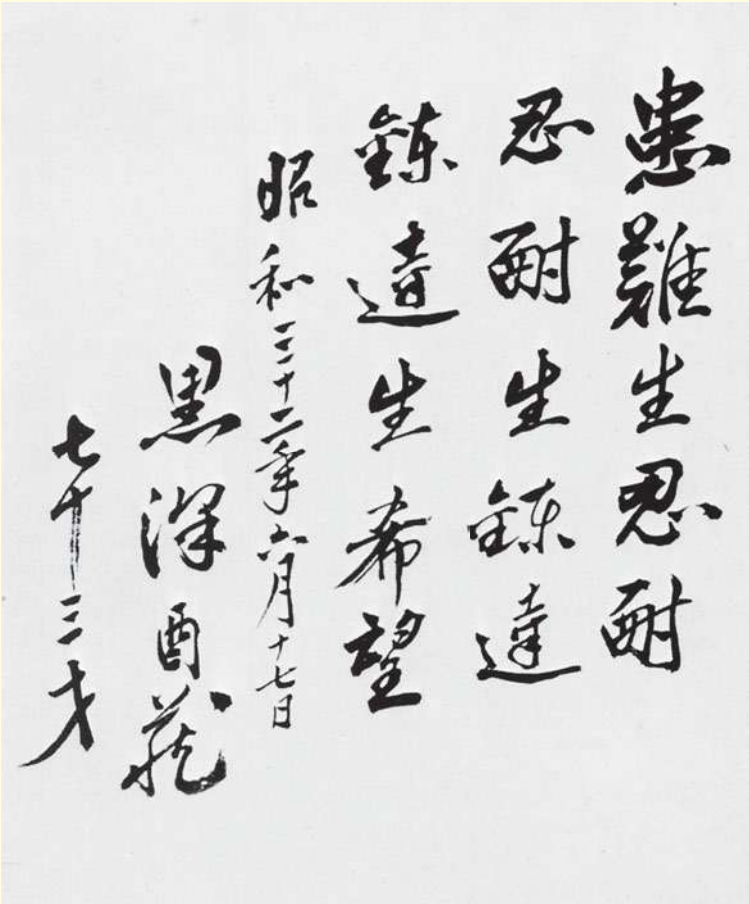
（一部現代仮名づかいになど改変）

希望

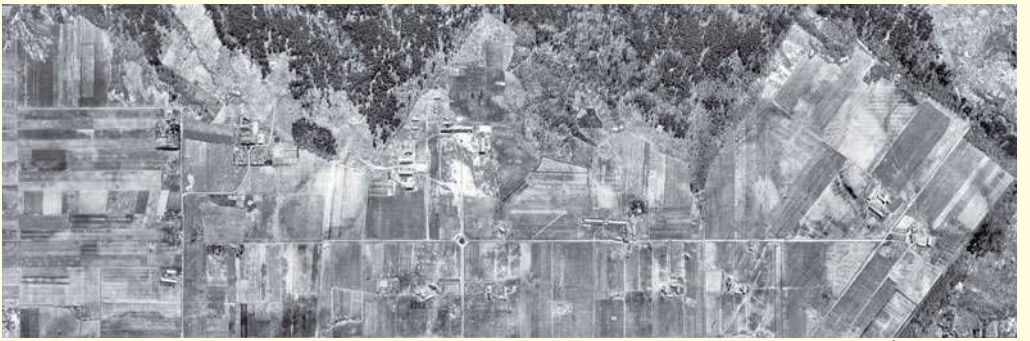
希望は生命である。希望
にかがやく國家、家園、青春
をみるとその張りきった姿
疲れを知らぬ精進ぶりには神
神しきさえ感ずるのである。
希望のない人生は生ける
しかばねであって、あわれなる
存在である。希望は清
く、高く、地についたものでなけ
れば意味がない。　世界、國家
の希望は愛と義による
平和、協同友愛の福祉社會
建設であり、青少年の夢は
知徳、天分を磨き、社會の良
器となり、人生の幸福を
享受することではあるま
いか。

付1 写真が語る酪農学園史

― 教育の道・星霜80年 ―


患難生忍耐
忍耐生錬達
錬達生希望
昭和三十二年六月十七日
黒澤酉蔵
七十三才

空から見た酪農学園史



1948年（昭和23年）

1976年（昭和51年）

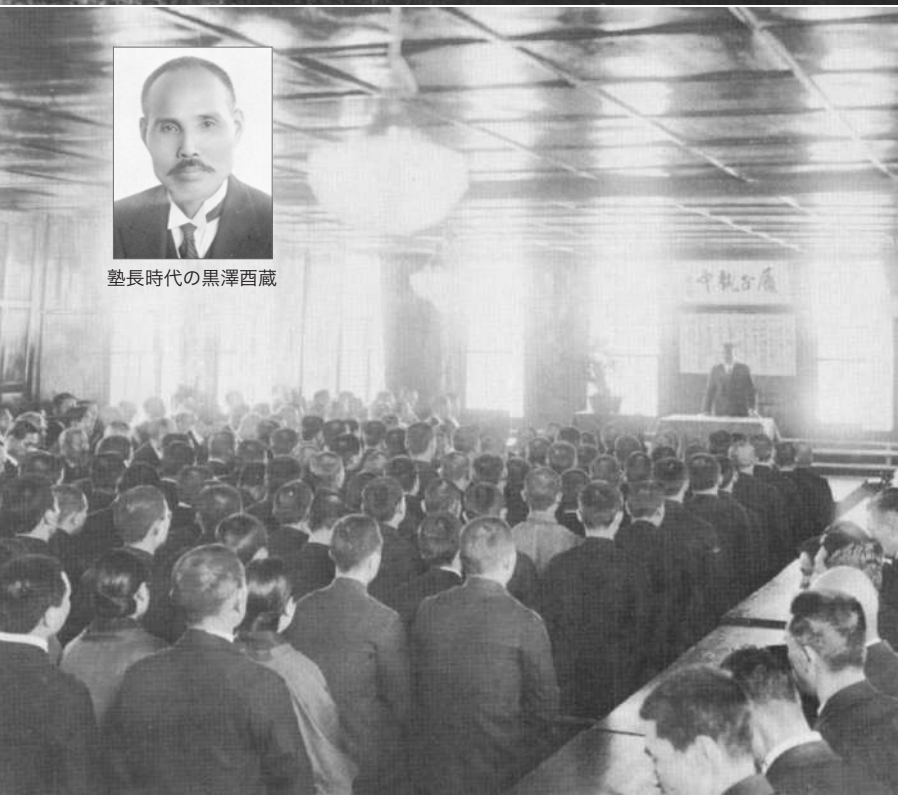
1991年（平成３年）

2011年（平成23年）

Ⅰ 『北海道酪農義塾』の創設から苗穂時代

1933年(昭和8)～1941年(昭和16)頃まで

昭和初期の経済不況下で黒澤酉蔵ら酪農の先達は、酪農民の組織化運動を展開した。農民魂の作興が叫ばれる中で黒澤は、独自の農民教育の必要性に思いを深め、北海道酪農義塾を創設した



塾長時代の黒澤酉蔵

上：北海道酪農義塾開塾　塾舎兼寮舎　1ヵ月講習開始
　　現雪印メグミルク酪農と乳の歴史館附近（札幌市東区苗穂町6丁目）1933年10月1日
下：酪農義塾入塾式　酪農科と製酪科各1ヵ年　1934年2月11日

上：酪農義塾開塾当時の役職員
前列左より佐藤善七
宇都宮仙太郎　黒澤酉蔵
青山永　1933年
下：佐上信一理事長（道長官）
を迎えて（実習牛舎完成）
1934年

酪農義塾第２農場（札幌村三角）　1934年

酪農義塾第２農場（札幌村三角）　1934年

酪農義塾製酪科実習　酪連工場内　1934年頃

福島植林地
酪連より寄付
1941年

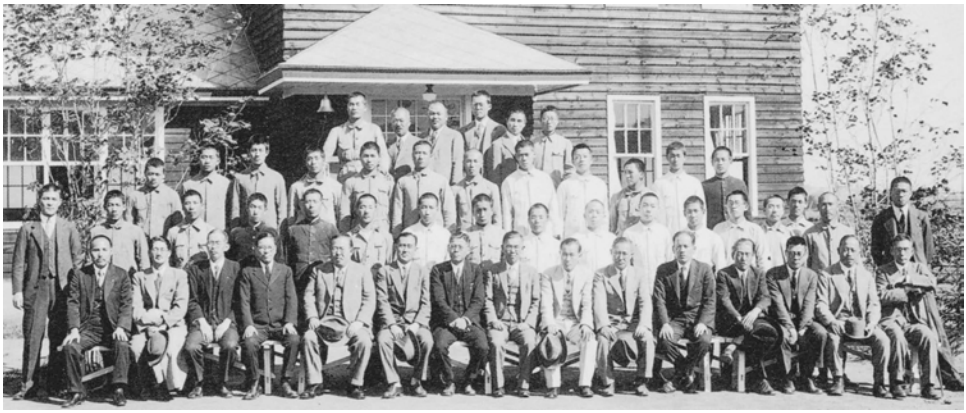
植苗農場
酪連より寄付
1941年

（現）演習林看板（奥行林地）

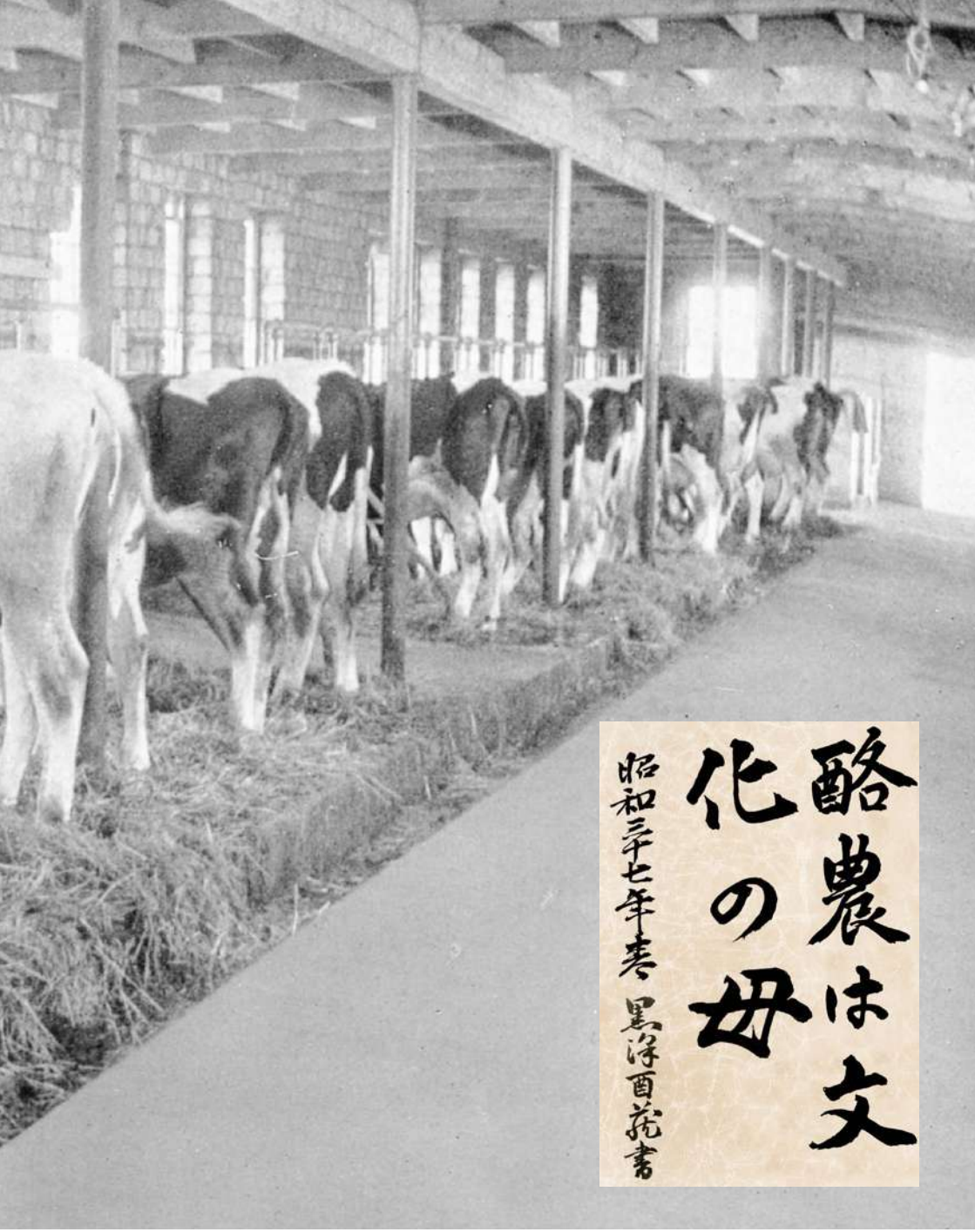
別海村奥行林地　酪連より寄付　1941年

酪農義塾生が残した講義録　1937年
（船本末雄氏提供）

酪農義塾の教師
左より野喜一郎　黒澤酉蔵（塾長）　青山永　中曽根徳二



酪農義塾１期生と役職員　黒澤塾長（前列左）ほか　1934年



植苗農場　酪連より寄付　1941年（実習牛舎　1955年頃）

Ⅱ 西野幌移転から『野幌機農学校』時代

1942年(昭和17)～1945年(昭和20)頃まで

黒澤酉蔵は、さらに真の実学教育の実現を目指すとして、まとまりのある大きな用地、現在地の野幌丘陵(旧西野幌)を得た。この地での営農者の元野幌原野への移転を求め(財)興農義塾野幌機農学校を創設した

財団法人興農義塾野幌機農学校開校記念　江別町西野幌に農地160haを取得移転　1942年

野幌機農学校　実習準備　1942年

野幌機農学校　実習準備　1942年

覺書

江別町ハ野幌機農學校用地内農家ノ移轉ニ関スル左記各事項ノ実施ニ付全責任ヲ負ヒ移轉者ハ之ニ基キテ異議ナク移轉スベキコトヲ確約シタルヲ以テ後日ノ爲メ江別町長及移轉者事者者並ニ之ガ関係事項履行ヲ承認シタル野幌機農學校代表者ニ於テ本覺書ヲ作成ス

甲 移轉地ニ関スル事項

移転地ニ付テハ江別町管内ニ於ケル農地開発營團事業地區中豊平川右岸ノ元野幌原野ニ於テ移転農家希望スル個所ヲ可及優先的ニ決定シ之ガ関係者ヲ一團トシテ機農第二実行組合ト稱スル農事実行組合ヲ組織シ野幌機農學校長ヲ組合長ニ推シ同校農場長ヲ指導係トシテ同校ト永久不離ノ関係ニ置キ新ナル構想ノ下ニ実地農業ヲ基本トスル模範部落ヲ建設シ以テ營團開発事業ノ先駆タラシムルト共ニ同校生徒ノ指標タラシムルガ爲メニ健全明朗ナル独立農家ヲ創造スルモノニシテ之ガ爲メニ左ニ切々仕要ナル施設及助成ヲ実施スルモノトス

第一、農地

(一) 農地ハ一戸当ニ十町歩ヲ標準トスルモ家庭事情ニ労働力及資力等ニ因リ十五町歩ヲ爲スコトヲ得ハモノトス

(二) 右土地ハ着手ノ年ヨリ五年ノ経過ニヨリ自作農ノ創設スルモノニシテ農地委員会ガ適正ト認ムル賠償ヲ以テ價格ヲ定メ江別町ノ自作農資金ニ因リ元利金均等年賦償還ノ方法ヲ執ルモノトス

(三) 農地ニ対スル道路治水排水幹支線等ハ巻末工事ハ營團又ハ國ヨリ施工セシムベキモノトス

現酪農学園の用地買収に当たり移転農家と江別町、野幌機農学校長との間で交わされた覚書の冒頭部分　昭和17年11月７日　（1942年）

上　：野幌機農学校校舎・前機農寮（後の短大部・短大）　1942年
左中：開校時の校門　1942年頃
右中：元野幌農場　野草刈り実習　1942年

移転当初（1942年）は地力も低く乳牛より馬を多く飼育

農作業はすべて畜力（馬）

上・右下：野幌機農学校　牧草刈り実習　1942年頃
下：バイレイショ収穫実習　1942年頃

荒木貞夫陸軍大将　来校　1942年９月

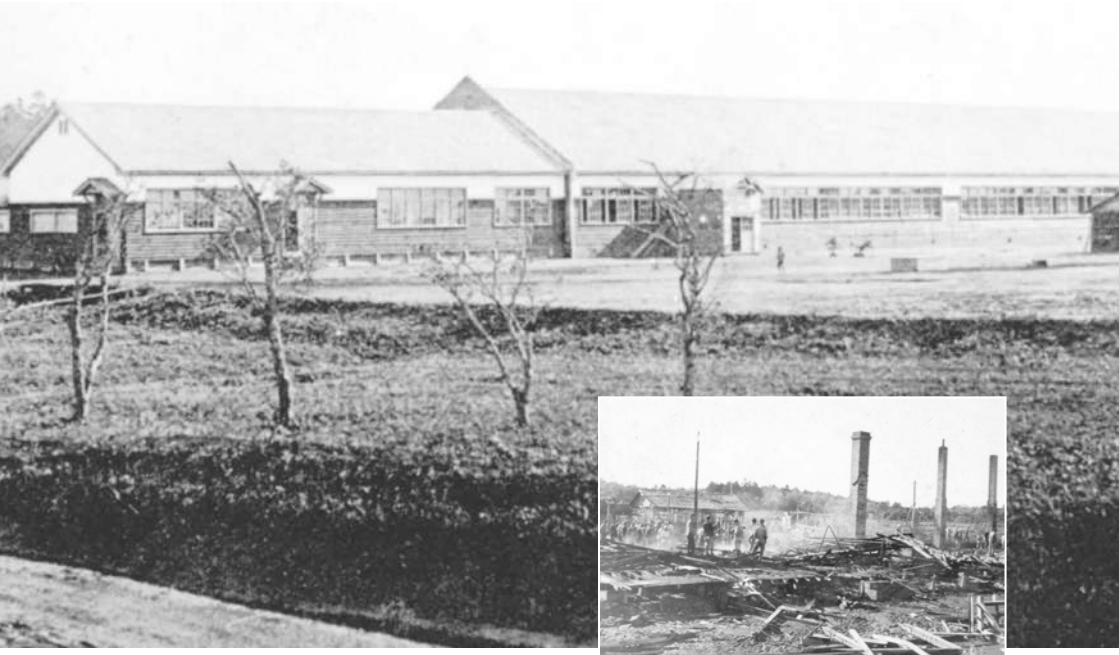
野幌機農学校　元野幌農場
エン麦刈り実習　1943年頃

現存する精農寮
当初はかやぶき　1944年頃

野幌機農学校開校当時の露天風呂　1942年

希望寮（1950年焼失）

機農寮での食事　1942年頃



野幌機農学校　校舎　1943年　　（1949年焼失）

馬の手入れをする野幌機農学校１期生　1942年頃

野幌機農学校開設当時
朝の起床集合ラッパ

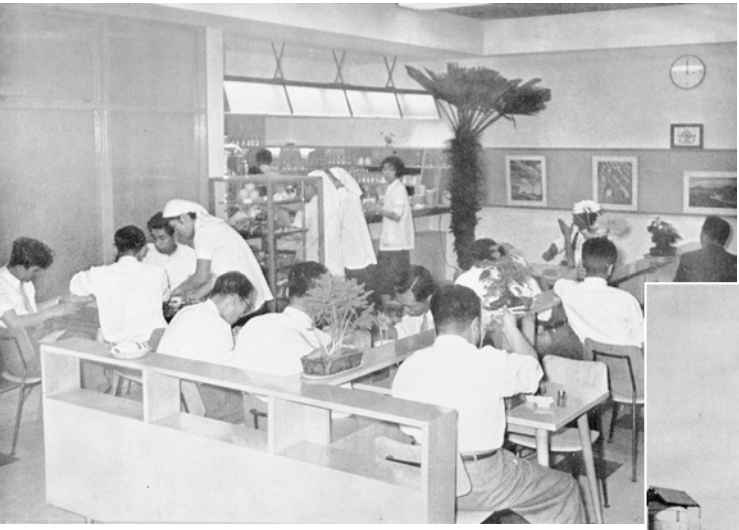
上：教育理念「三愛精神」　1946年９月１日理事会決定
中：学園教会堂　かやぶきの農家住宅を移築　1948年
下：野幌機農学校　通信教育部スタート　1948年

Ⅲ 『学園短期大学部』から『女子高等学校』の誕生時代

１９４６年(昭和21)～１９５９年(昭和34)頃まで

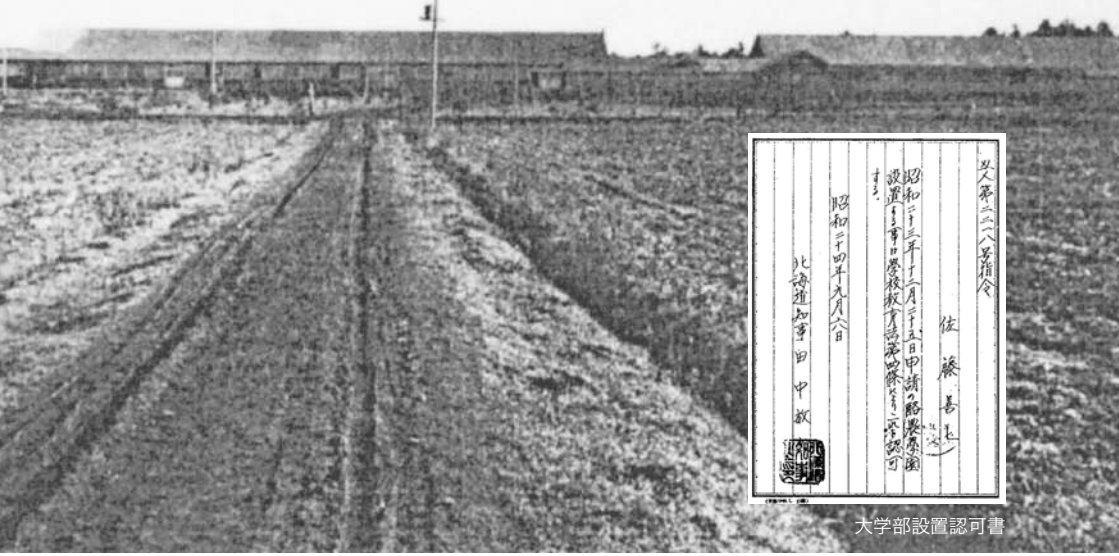
第2次大戦の敗戦による疲弊の中で、酪農学園の建学の精神をデンマークを範とするキリスト教主義「三愛精神」に置くことを理事会決定し、「日本農業の発展は教育をおいて他に道なし」を決意する。短期大学・女子高等学校の開学へと進む

野幌高等酪農学校　1950年頃
開校　1948年
酪農短大酪農学校に改組　1964年



酪農学園事業部発足　1948年（北農会館地下学園パーラー）

乳製品実習実験工場　江別市緑町　1947年
北酪社から無償譲渡



大学部設置認可書

酪農学園大学部（各種学校）開学当時　現白樺通りからの全景　1949年

酪農学園大学部開学のため機農寮を改築　1949年頃

酪農短大校舎へ改築　学生も動員　1952年

廣大な本道に

國際キリスト教大学設置

戦後道内に国際キリスト教大学設置構想を報ずる新聞（1948・6・11　北海タイムス）

酪農短大初期の教職員　1954年

酪農学園短期大学校舎工事　機農寮兼校舎を改築
（現同窓生会館）1954年

賀川豊彦先生を囲んで野外礼拝堂　1952年
（尾崎為治郎氏提供）

賀川豊彦先生を迎えての三愛塾（開塾1950年）
前列右から２人目　アーサー神塚先生　1952年

厩舎を改築した機農寮
（門柱は1955年生徒制作）

野幌機農高等学校　大志寮（左）青峰寮（右）1956年頃

野幌機農自動車学校開校　1955年

酪農学園大学部を廃止し
酪農学園短期大学開学
１期生　1950年

酪農学園女子高等学校　開校　1958年

北海道農学々生ゼミナール
樋浦誠学長の訓話　1959年

野幌機農高等学校10周年記念式典　1952年

学生の農場実習　1959年頃

酪農短大校舎全景　1957年頃

上：農道上方が現とわの森三愛高等学校地附近
下：野幌機農高等学校　精農寮　1955年頃

右：野幌高等酪農学校実習農場（植苗）　1955年頃
左：野幌機農高等学校　農場実習（直腸検査）　1958年

上：酪農学園女子高等学校開校時仮校舎　1958年
下：酪農学園女子高等学校　初めてのクリスマス礼拝　1958年

野幌機農高等学校　礼拝　1955年頃

野幌機農高等学校　中央講堂　1956年竣工

黒澤理事長　元野幌農場踏査　1957年
（右　髙橋磐根場長）

元野幌農場　泥炭土に埋ったトラクター　1958年

元野幌農場　寮生　ストーブでジンギスカン　1958年

野幌機農高生　デントコーンの収量実習　1958年

野幌機農高等学校希望農場と希望寮　1958年

酪農短大生
元野幌農場　排水溝掘り実習　1950年

野幌機農高等学校　開学記念弁論大会　1958年

岸信介総理大臣　来園　1958年

Ⅳ 『酪農学園大学』から『とわの森三愛高等学校』の誕生時代

1960年(昭和35)～1988年(昭和63)頃まで

酪農学園の経営が厳しさを増す状況下で、黒澤酉蔵は四年制大学の開設を決意する。大学はその後、社会の時代的要請に応えて「農・食・生命」の領域に関わる学部・学科の増設を図り発展軌道に乗る。高校も新制「とわの森三愛高等学校」となる

酪農学園大学開学　1960年　第１校舎（現Ａ１号館）同年８月竣工

野外礼拝堂　1960年

大学開学当初の入学案内・要覧

酪農学園大学１期生　化学実験　1961年

酪農学園創立30周年（機農校開校20周年）記念式典　1962年

ペテロ寮

ヨハネ寮

ヤコブ寮

マルコ寮

酪農短大開学当初からの学生寮

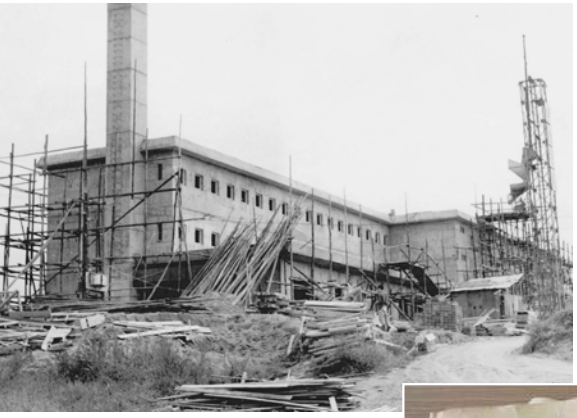
ペテロ・ヨハネ・ヤコブ・マルコの各寮は1966年廃止　ダビデ寮は1962年廃止

ダビデ寮

ダビデ寮のひとこま　1965年

酪農学園創立30周年記念式典「黒澤酉蔵顕彰会」佐藤貢会長祝辞　1962年

黒澤酉蔵寿像から第１校舎（現A号館）　1962年



建設中の創世寮　1963年竣工

寿像の除幕式　1962年
（左２人目　制作者　加藤顕清）

大学･短大学生自治会役員選挙　1961年

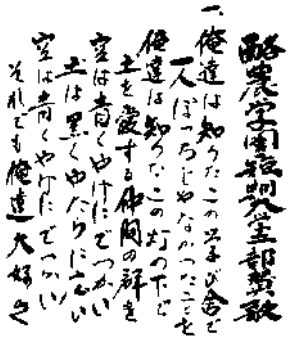
大学初期の学生新聞（創刊1960年）

右上：機農高校収穫祭　1962年
左上：三愛女子高校生ダリア栽培圃場見学
1963年

機農高校職員室　1962年

三愛女子高等学校　校旗伝達式　1966年

三愛女子高等学校　生徒会執行部選挙　1966年


酪農学園短期大学生部賛歌

一、俺達は知らなかったこの広い舞台で
一人ぼっちじゃなかったことを
俺達は知らないこの灯の下で
土を愛する仲間の群れを
空は青く申分なくつかい
土は黒く申分なくつかい
空は青くやけにでっかい
それでも俺達大好き

酪農学園短期大学第2コース　賛歌
1964年開校

酪農短大第2コース　申命寮　1964年
（旧 自由寮）

酪農学園大学・同短大附属農場牛舎　全焼　1979年

附属農場牛舎火災　学生も出動

全国の学生が集った北海道夏季大学　1965年

附属農場牛舎新築　1979年（サイロ１基　土谷製作所寄贈）

三愛女子高等学校　移転による礼拝堂解体　1979年

酪農短大酪農学校（通信）　テキスト

野幌高等酪農学校（通信）　野外授業　1967年頃

上：学生会館（書籍部）　1965年頃
下：学生会館（食堂）　1965年頃

上：酪農学園大学・短大　学生会館　1965年頃
下：野幌機農高等学校　校舎全景　1966年頃

国道12号線大麻駅近くの学園地　花壇づくり
三愛女子高等学校生の実習　1980年頃

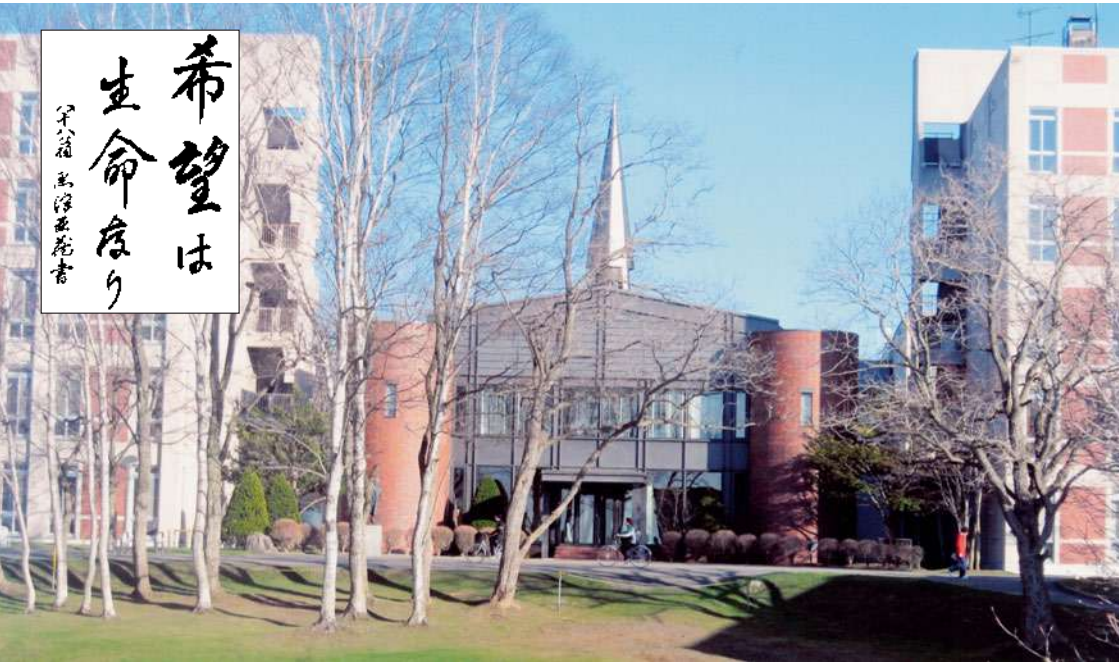
望来原野（厚田村）の取得　1973年

佐藤栄作総理大臣（左）松野頼三農林大臣（中央）に冷害克服を説明する黒澤理事長（遠浅）　1966年

三愛女子高等学校　移転新校舎　1979年竣工

礼拝堂

酪農学園創立者黒澤酉蔵学園長永眠 酪農葬 1982年2月6日



黒澤記念講堂 1984年 竣工

酪農学園大学　応援団　1986年

馬術部　1985年

大学獣医学研究科実験　獣医学専攻（修士）　1984年

校名変更　1984 年 4 月
酪農学園機農高等学校から酪農学園大学附属高等学校へ

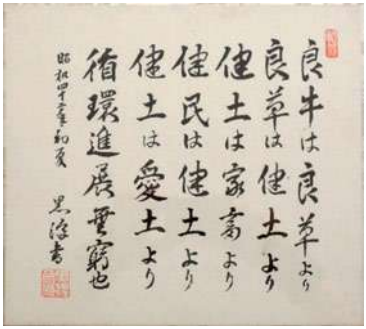
道北三愛塾　冬期塾　1980年

佐藤貢理事長揮ごう「機農」碑と野幌機農高等学校校舎　1984年頃

校名変更　酪農学園女子高等学校を三愛女子高等学校へ　1960年

野幌機高等学校　相撲部　1968年

循環農法論を説く黒澤学長　1965年頃



酪農学園大学獣医１号館（旧家畜病院・現Ｂ１号館）1975年竣工

北海道文理科短期大学　コンピューター演習　1987年

大学獣医学部解剖実習　1983年頃

酪農学園ホール　1987年竣工

農場実習　1988年

白樺通り
1988年頃

V 『酪農学園』の発展への時代・今

1989年(平成1)～2012年(平成24)頃まで

真の農業人の育成を標榜し誕生、星霜80年。酪農学園は教職員の不断の努力と関係者・団体等の支援を得て今日を迎えている。建学の理念を反芻し合い「世界人類の平和と福祉に貢献し得る有為な人材の育成」に向けて一層の充実が求められている

酪農学園機農高等学校正門
卒業生寄贈（2001年復元）

大学正門　狭き門から希望の塔　1989年頃

大学酪農１号館（現C２号館）前庭　1995年頃

とわの森三愛高等学校
生徒会　役員選挙　1991年

酪農学園60周年記念式典　1993年

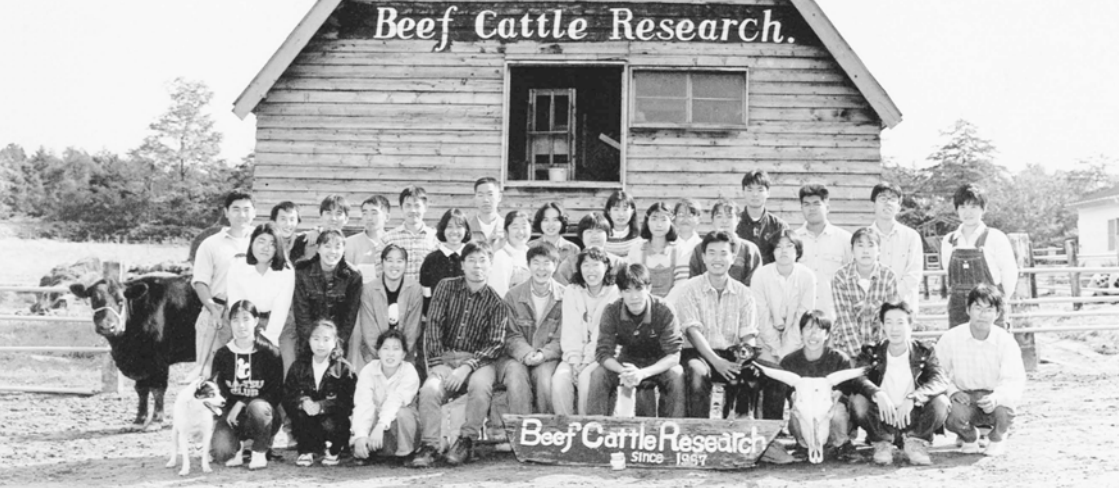
大学乳製品実習　1991年頃

大学農業経済学科　専門演習　1989年

大学校舎の一隅（C3・C8号館）2008年頃

白樺祭　1997年

上：ラグビー部　1989年
下：アーチェリー部　1992年頃



肉牛研究会　1994年

農場実習　1998年

農場実習　1993年

農場の春耕　2002年

酪農学園本館　1991年竣工

附属農場研究棟　1991年竣工

中央館ロビー　2001年

大学中央館　1998年竣工

現酪農学園同窓生会館　2002年

上：白樺祭　2000年
中左：大学・短大部・大学院学位記授与式
　　2000年
中右：学園ホール食堂　2001年
右下：よさこいソーラン参加　2004年

上：大学校舎群（中央館屋上から）2001年頃　　下：野外礼拝堂と学園ホール　2004年

研修館　2002年竣工

サークル棟　健身館　2004年竣工

大学附属動物病院　2004年竣工

大学C1号館（旧中央講義棟）　2003年竣工

大学Ｂ４号館（旧第３校舎）　基礎実験棟　2006年竣工

大学ハイテクリサーチセンター（インテリジェント牛舎）　2000年竣工

白樺通りからインテリジェント牛舎

サークル棟　健音館　2006年竣工

大学地域環境学科フィールド演習（望来演習林）　2010年

サークル棟　緑音館　2006年竣工

大学C1号館（中央講義棟）正面壁
苦難は忍耐を　忍耐は練達を　練達は希望を生む

とわの森三愛高等学校　20周年記念式典　2011年

大学附属とわの森三愛高等学校
改革―新しい高大一貫教育―2010年

寮の門柱

大学改革「学群・学類」制スタート
2011年

高大共同女子寮「清温寮」　2010 年竣工

大学獣医保健看護学類開設　2011年

短期大学部開学60周年・大学開学50周年
記念事業「酪農讃歌」碑　2011年

付2　酪農学園役員・教職員録

1　北海道酪農義塾役員・教職員　1934（昭和8）年10月～1944（昭和19）年3月

理事・監事・評議員・顧問

役職名	氏名	役職名	氏名	役職名	氏名
理事長	佐上信一	理事	北勝太郎	評議員	上原轍三郎
〃	黒澤酉蔵	〃	幡野直次	〃	蠣崎知次郎
副理事長	宇都宮仙太郎	〃	佐藤貢	〃	出納陽一
常務理事	佐藤善七	〃	瀬尾俊三	〃	神田不二夫
〃	青山永	〃	大野勇	〃	吉田貞次郎
理事	佐上信一	〃	佐治正一	〃	相原幸四郎
〃	宇都宮仙太郎	〃	板垣信之	〃	高倉佳造
〃	黒澤酉蔵	〃	若林常次郎	〃	北勝太郎
〃	佐藤善七	〃	青山永	〃	澤吉夫
〃	深澤吉平	監事	幡野直次	〃	中西藤市
〃	本田栄三郎	〃	定免惣一	〃	吉水続
〃	太田鉄太郎	〃	今野末松	〃	町村敬貴
〃	北村謹	〃	佐藤善七	〃	宇都宮仙太郎
〃	岡村文四郎	評議員	安孫子孝次	顧問	
〃	吉田貞次郎	〃	相澤金治		

教職員

役職名	氏名
主事	青山永
講師	中曽根徳二
〃	野喜一郎
〃	免定惣一
〃	神田不二夫
〃	佐藤貢
〃	鈴木伝
〃	今村正男
〃	折橋佐一郎
〃	長崎寛作
〃	中川忠行
〃	佐々木酉二
〃	神田哲二

役職名	氏名
講師	鈴木重光
〃	河野定義
〃	福島正雄
〃	辻岡教太郎
〃	佐瀬一笑
〃	辻淳
〃	北村キク
〃	松崎宗光
嘱託医師	氏家孝
書記	樹村義博
〃	西村実
舎監	太田外男
〃	沖太平

役職名	氏名
舎監	片岡計雄
助手	上原弘明
〃	相沢栄佐男
〃	本田林司
〃	常盤節
〃	本井力治
〃	寒河江弘道
〃	阿部信行
〃	船本松良
嘱託	中曽根ミチ
用務員	神田花子

2　酪農学園役員・教職員

財団法人（1942(昭和17)年3月31日～1951(昭和26)年2月23日）
学校法人（1951(昭和26)年2月24日～現）

注1、歴代理事長・学園長・副理事長、副学園長・常務および名誉理事長等は、第4部第1章の5に掲載
注2、歴代学長、学校長等は各学校関係項目の中に掲載

理事・監事・評議員・顧問

理事

氏名	在任期間
黒澤酉蔵	42・3・31～46・3・31 50・11・25～82・2・6
佐藤善七	42・3・31～57・2・2
深澤吉平	42・3・31～46・3・31 51・6・20～57・12・15
岡村文四郎	42・3・31～59・1・28
安孫子孝次	42・3・31～46・3・31
青山永	46・3・31～66・2・28
幡野直次	46・3・31～55・7・20
大東勝市	46・3・31～47・4・10
川村秀雄	46・3・31～72・6・21
佐藤貢	48・8・10～91・6・30
白戸八郎	48・8・10～51・6・20
樋浦誠	50・2・8～64・3・31
ゴードンkチャップマン	50・3・7～55・3・16
斎藤惣一	50・3・7～55・7・20
平野一城	50・3・7～57・7・23
三井武光	55・7・18～80・12・7
出納陽一	55・7・19～64・7・20
高杉英雄	55・7・19～63・6・12
西本宗信	57・7・23～87・6・30
黒澤力太郎	59・1・28～07・6・30
児玉由一	59・1・28～75・6・17
三田村健太郎	59・1・28～77・6・29
高橋雄之助	59・1・28～67・6・14
町村金五	59・1・28～67・6・14

早坂正吉	牛島純一	井上錦次	橋本吉雄	菊地正一	松原太郎	高橋節郎	澤潤一	大川義男	黒澤亮助	河口陽一	町村敬貴	原田正男	築山泰蔵	宮古哲雄	蒔田余吉	中曽根徳二	藤田保平	鈴木伝	野喜一郎
71・6・15～83・6・30	81・69・6・6・25～03・6・30	69・6・2・2～71・6・15	69・6・2・2～87・6・30	68・3・31～71・1・3	67・6・14～79・6・17	67・6・14～71・6・15	67・6・14～07・6・30	67・6・14～77・12・21	67・6・14～81・7・13	67・3・31～68・3・31	63・6・12～71・6・14	63・6・12～67・6・14	63・6・12～79・6・17	63・6・12～74・3・11	61・3・27～72・4・5	59・1・28～63・6・12	67・59・6・1・14～69・6・2	67・59・6・1・28～64・7・20	79・59・6・1・18～81・1・4	71・59・6・1・15～72・2・17	71・59・6・1・28～69・12・1	59・1・28～68・7・17

床鍋繁則	濱本恒男	井上昌保	船木長一郎	山崎	町村末勇	中野富吉	山下正雄	杉田文亮	鈴木徳雄	五十嵐清	福屋茂見	小林哲威	津田佳吾	山本庸一	土橋慶吉	山花豊	辻村富士朗	遊佐孝五	青山義人	勝目孝雄	伊藤幸太郎	沼田芳明
83・7・1～95・6・30	83・7・1～89・5・31	82・7・8～95・3・31	82・6・30～95・6・30	81・6・25～86・8・31	81・6・25～07・6・30	81・6・25～86・5・31	81・6・25～89・3・31	80・6・30～88・6・30	79・6・18～81・6・25	79・6・18～80・8・23	78・7・8～87・6・30	77・7・11～83・6・30	77・3・4～81・6・25	75・6・17～87・6・30	75・6・17～83・6・30	74・7・1～76・10・31	74・4・1～82・7・7	73・7・6～04・7・9	72・6・21～79・6・17	72・6・21～80・6・30	72・4・5～74・3・31	83・71・7・6・1～87・6・30	83・71・7・6・15～75・6・17

石川哲郎	島津宏興	安宅一夫	阿部忠男	野村武	大谷俊昭	村山昭二	正野勝也	片山純男	菊池利治	阿部光雄	坂本与市	平尾和義	斎藤義孝	原田勇	石田貞夫	浅田邦八	高田哲夫	永澤悟	山本稔	崎浦誠治
99・7・1～00・8・24	97・5・22～現	97・4・1～05・3・31	95・7・1～99・9・7	13・7・1～現	95・7・1～07・6・30	95・7・1～07・3・31	95・4・1～07・3・29	91・7・1～11・5・26	91・7・1～98・10・10	95・7・1～04・5・24	91・7・1～95・3・16	91・7・1～95・6・30	89・4・1～97・3・31	89・4・1～07・6・30	87・7・1～90・12・31	07・7・1～12・12・16	87・7・1～91・6・30	87・7・1～13・6・30	87・7・1～91・6・30	87・7・1～95・6・30	87・7・1～93・5・27	86・6・26～91・6・30	85・4・1～97・4・6

北良	菊地政治	平棟孝則	仙北富志和	佐藤巖	日下雅順	金川幹司	荒木和秋	麻田信二	谷山弘行	榮田稔忍	飛田誠章	渡邊治	山口義弘	高野瀬忠明	工藤英一	加藤清雄	西島紘平	鮫島邦彦	宮田勇	中井保博
10・7・1～13・6・30	10・7・1～現	07・7・1～13・6・30	13・6・1～現	07・7・1～10・6・30	07・7・1～10・2・9	07・7・1～10・6・30	07・7・1～10・6・15	07・7・1～現	07・4・1～13・3・31	07・4・1～現	05・12・1～07・6・30	04・5・24～07・6・30	03・7・1～05・5・6	11・5・27～現	03・7・1～10・6・30	03・7・1～07・6・30	03・7・1～07・6・30	01・12・21～03・6・30	01・5・26～03・6・30	07・7・1～現	99・9・8～03・6・30	99・7・1～07・6・30

監事

氏名	在任期間
二瓶栄吾	42・3・31～75・6・17
佐治正一	42・3・31～51・6・20
松原太郎	51・6・20～67・6・14
築山泰蔵	59・1・28～63・6・12
石畑久成	63・6・12～79・6・17
安達勇	67・6・14～79・4・7
西作久一	75・6・17～87・6・30
菊地正一	79・6・18～94・6・30
原田正男	79・6・18～83・6・30
青山義人	83・7・1～98・5・24
木下知行	87・7・1～91・6・30
近雅宜	10・7・1～13・6・30
福山二仁	10・7・1～現

氏名	在任期間
山崎真治	91・7・1～95・6・30
高倉勝孝	95・7・1～07・6・30
新谷冨雄	96・7・1～07・6・30
安田勲	99・7・1～07・6・30
菊池利治	07・7・1～08・7・6
昌子守彦	07・7・1～13・6・30
森田正夫	07・7・1～13・6・30
渡邊誠治	10・9・28～13・6・30
佐藤泉	13・7・1～現
山口靖孝	13・7・1～現
山口靖孝	10・7・1～13・6・30
干場信司	13・4・1～現

評議員

氏名	在任期間
黒澤酉蔵	42・3・31～50・11・25～82・2・6
佐藤善七	42・3・31～57・2・2
深澤吉平	42・3・31～51・6・20～57・12・15
岡村文四郎	42・3・31～59・1・28
安孫子孝次	42・3・31～46・3・31
青山永	46・3・31～66・2・28
川村秀雄	46・3・31～66・12・19～72・6・21
幡野直治	46・3・31～55・7・20
佐藤貢	48・8・10～91・6・30
白戸八郎	48・8・10～51・6・20
安孫子八重子	49・5・12～51・6・20
野喜一郎	49・5・12～68・7・17
三田村健太郎	49・5・12～77・6・29
手島寅雄	49・5・12～79・6・17
瀬尾俊三	49・5・12～79・6・17
上田歓子	49・5・12～59・1・28
小野村林蔵	49・5・12～63・6・12
西田進	49・5・12～67・6・14

氏名	在任期間
高杉成道	49・5・12～71・6・15～71・7・15
斎藤惣一	53・6・6～64・7・20
ゴードンkチャップマン	50・3・7～55・7・20
樋浦誠	50・3・7～64・3・31
平野一城	50・3・7～57・7・23
鈴木伝	51・6・6～67・6・14
三井武光	51・6・6～67・6・14
高杉英男	51・6・6～63・6・12
池田実	51・6・6～67・6・14～69・6・2
鈴木進	51・6・6～63・6・12
寺田照雄	51・6・6～53・6・6
榎田栄吾	53・6・6～58・8・5
田村昇	55・6・6～59・1・28
西本宗信	55・7・7～03・6・30
井上錦次	55・7・7～87・6・30
辻田武作	55・7・7～76・3・20
大澤二郎	55・7・19～58・9・13
	55・7・19～64・7・20～67・6・14
	55・7・19～71・4・6

| | | |

五十嵐齢七	63・6・12～67・6・14
細川明	63・6・12～64・1・31
後藤邦義	63・6・12～64・7・20
伊臣第一郎	63・6・12～71・6・15
神塚アーサー	63・6・12～67・6・14
国生義夫	63・6・12～67・6・14
藤井才介	63・6・12～67・6・14
館清	63・6・12～67・6・14
上原弘明	63・6・12～67・6・14
大野勇	63・6・12～67・6・14
太田正治	63・6・12～83・6・30
高倉勝孝	63・6・12～95・6・30
高橋節郎	63・6・12～03・6・30
澤潤一	63・6・12～77・12・21
宮古哲雄	61・3・27～72・4・5
原二郎	59・1・28～67・6・14
吉田定次郎	59・1・28～63・6・12
吉水続	59・1・28～67・6・14
板垣信之	59・1・28～71・6・15
徳田二郎	59・1・28～67・6・14
西本嘉一	59・1・28～67・6・14
河口陽一	59・1・28～63・6・12
服部吟次郎	59・1・28～67・6・14

石田貞夫	67・6・14～13・6・30
中西文雄	67・6・14～75・6・17
小野愃弘	67・6・14～99・6・30
青山義人	67・6・14～72・6・21
尾崎為治郎	64・7・20～67・6・14
佐竹静治	64・7・20～67・4・30
阿部孝一	64・7・20～66・5・31
高畑武雄	83・75・69・64・7・6・2・20～87・79・71・67・6・17・15・14
長谷川清市	64・7・20～67・6・14
神正士	83・79・64・7・6・7・1・18・20～91・80・75・3・31・7・11
野村喬	69・64・6・7・2・20～75・67・6・17・14
遊佐孝五	72・64・6・7・21・20～99・71・6・30・15
山岸六郎	63・6・12～79・6・17
橋田武	63・6・12～67・6・14
中島誠	63・6・12～71・6・15
原国夫	70・63・6・6・2・12～71・67・6・6・15・14

渡辺基	井上昌保	土橋慶吉	船木長一郎	沼田芳明	橋本吉雄	戸田克己	藤井一夫	名越典昭	斎藤寛	浦部浩行	米田孝	西川求	原田泉	松井幸夫	桜井豊	山崎勇	安藤功一
71・6・15～75・8・31	99・7・1～01・3・31	71・6・15～95・3・31	87・7・1～94・3・31	75・6・17～83・6・30	69・6・2～71・6・15	69・6・2～03・6・30	82・6・30～89・3・31	69・6・2～75・6・17	68・3・31～71・1・3	67・6・14～68・11・26	67・6・14～71・6・15	67・6・14～71・6・15	67・6・14～71・6・15	67・6・14～70・3・31	67・6・14～71・6・15	67・6・14～68・4・10	67・6・14～71・6・15	93・5・28～04・9・29	82・6・30～91・6・30	67・6・14～71・6・15	67・6・14～71・6・15	67・6・14～80・5・31	67・6・14～91・6・30

津田佳吾	辻村富士朗	勝目孝雄	伊藤幸太郎	山田利雄	福屋茂見	窪田佐智子	大谷昇	佐藤明	五十嵐厳	松村衛	村山昭二	松縄善三郎	坂本与市	太田一男	中村忠敏	大高全洋
77・3・4～81・6・25	74・6・22～75・6・17	74・4・1～82・7・7	72・6・21～80・6・30	72・4・5～74・3・31	71・6・15～79・6・17	71・6・15～87・6・30	79・6・18～91・6・30	71・6・15～75・6・17	71・6・15～79・6・17	71・6・15～79・6・17	79・6・18～91・6・30	71・6・15～75・6・17	91・7・1～07・3・29	71・6・15～79・6・17	71・6・15～75・6・17	99・7・1～13・6・30	87・7・1～97・3・31	71・6・15～75・6・17	95・7・1～99・6・30	71・6・15～91・6・30	71・6・15～82・1・22	71・6・15～78・9・30

山下正亮	廣瀬可恒	石塚喜明	寺田一寿男	大原久友	後藤輝雄	小林哲威	深谷正男	町村末吉	山下仲市	山極三郎	柴田四朗	高島温子	福田武明	尾崎幸雄	梶原興正	甲斐猛	伊藤茂生	市川舜	山花豊	本多八郎			
79・6・18～89・3・31	79・6・18～07・6・30	79・6・18～03・6・30	79・6・18～91・6・30	78・7・8～94・9・25	77・7・11～83・6・30	77・7・11～83・6・30	76・6・30～79・6・17	76・6・30～83・6・30	76・6・30～85・6・26	75・6・17～75・9・16	75・6・17～79・6・17	75・6・17～79・6・17	75・6・17～89・11・26	75・6・17～79・6・17	95・7・1～99・6・30	75・6・17～83・6・30	87・7・1～91・6・30	75・6・17～79・6・17	75・6・17～98・3・31	87・7・1～07・6・30	75・6・17～79・6・17	74・7・1～76・10・31	74・6・22～79・6・17

古田修吾	小林道彦	太田真樹夫	松村宏	日下雅順	平尾保	西仁	小野木弘司	渡邊誠治	奥山武美	塩見建樹	荻原康之	澤田憲宏	久米小十郎	遠藤清司	中野富雄	三野和雄	高橋国夫	杉田文雄					
83・7・1～91・6・30	83・7・1～01・12・9	83・7・1～91・6・30	81・6・25～85・6・26	99・7・1～10・6・30	80・6・30～86・6・25	80・6・30～90・3・3	80・6・30～91・6・30	79・6・18～83・6・30	04・5・24～07・6・30	99・7・1～03・6・30	86・6・26～88・5・31	79・6・18～83・6・30	79・6・18～83・6・30	79・6・18～86・3・31	79・6・18～87・6・30	07・7・1～10・6・30	03・7・1～05・3・31	79・6・18～83・6・30	79・6・18～83・6・30	79・6・18～81・3・5	79・6・18～83・6・30	79・6・18～85・6・26	79・6・18～85・6・26	79・6・18～88・6・30

金川幹司	柴橋伴夫	永澤悟	山羽昇	礒西将治	正野勝也	山田光千年	酒井保	斎藤義孝	三上勝	青柳剛	大谷俊昭	平尾和義	阿部光雄	濱本恒男	奥田兵治	高田哲夫	大吉豊	鈴木常正	太田多美子
87・7・1～07・6・30	86・6・26～06・3・31	85・6・27～93・5・27	85・6・27～87・6・30	85・6・27～87・6・30	85・6・27～91・6・30	85・6・27～91・6・30	85・6・27～88・6・30	95・7・1～03・6・30	83・7・1～90・12・31	83・7・1～87・6・30	83・7・1～87・6・30	83・7・1～07・3・31	89・4・1～07・6・30	83・7・1～87・6・30	89・4・1～95・6・30	83・7・1～87・6・9	83・7・1～89・5・31	83・7・1～86・6・26	95・7・1～07・6・30	83・7・1～87・6・30	83・7・1～85・6・26	83・7・1～91・6・30	83・7・1～91・6・30

金田隆一	浦川利幸	和根崎喜一郎	山畑勝美	藤井幸昭	種田泰典	佐藤恒巌	小泉邦男	浅田八	新谷冨雄	菊池利治	横山節麿	新政文	三宅勝	大川建雄	加藤隆	中尾敏彦	安宅一夫	中原准一	片山純男	森山昭	田中時信
91・7・1～95・6・30	91・7・1～03・6・30	91・7・1～93・1・31	91・7・1～07・6・30	91・7・1～99・6・30	91・7・1～01・12・20	91・7・1～07・6・30	91・7・1～99・6・30	91・7・1～93・5・27	90・3・24～96・6・30	95・7・1～07・6・30	90・3・24～95・3・16	89・4・1～91・6・30	88・6・1～91・6・30	88・6・1～99・6・30	87・7・1～95・6・30	87・7・1～91・6・30	87・7・1～99・6・30	07・7・1～10・6・30	87・7・1～05・3・31	87・7・1～07・6・30	87・7・1～91・6・30	87・7・1～95・6・30	87・7・1～99・6・30

平賀武夫	志摩親壽
鮫島邦彦	加藤勲
市川治	齋藤善一
温泉和也	植田勝美
佐々木均	湯山莊平
安田勲	横山初恵
山﨑惠子	中井保博
土田孝幸	野村武
林多喜夫	綱島彰男
高橋清志	佐々木淳
菊池直哉	

95・7・1～03・6・30	95・7・1～02・3・31
95・7・1～03・6・30	04・5・24～07・6・30
95・7・1～99・6・30	01・5・26～03・6・30
95・7・1～現	95・7・1～10・6・30
95・7・1～01・12・20	95・7・1～07・6・30
94・5・26～13・6・30	93・5・28～99・6・30
93・5・28～99・6・30	91・7・1～99・6・30
91・7・1～現	91・7・1～13・6・30
91・7・1～99・6・30	91・7・1～現
91・7・1～95・6・30	91・7・1～97・3・31
91・7・1～94・12・18	03・7・1～10・6・30
91・7・1～99・6・30	91・7・1～95・6・30

吉田升三	太夫和人
竹内良種	岡田晴彦
十倉宏	中尾憲満
土谷令次	笹島昭彦
金川弘司	小野寺武夫
大山裕	山下政秀
木村栄之進	三島陽子
赤尾全廣	干場信司
加藤清雄	岡本全弘
内生藏啓貢	田中義則
横田博	

01・12・21～03・6・30	01・12・21～03・6・30
01・12・21～03・6・30	01・12・21～03・6・30
10・7・1～現	01・5・26～07・6・30
99・7・1～01・12・20	99・7・1～13・6・30
99・7・1～01・12・20	99・7・1～10・6・30
99・7・1～01・12・20	99・7・1～07・6・30
99・7・1～03・6・30	99・7・1～07・6・30
99・7・1～03・3・31	99・7・1～10・6・30
99・7・1～13・6・30	99・7・1～07・6・30
99・7・1～10・6・30	98・5・27～03・6・30
10・7・1～現	97・5・21～99・6・30
10・7・1～13・6・30	97・5・21～99・6・30

近木雅宜	07・7・1～13・6・30
荒島和秋	07・7・1～現
藤浩二	04・3・18～13・6・30
横山明光	03・7・1～10・6・30
福島恒雄	03・7・1～07・6・30
平棟孝志	03・7・1～13・6・30
辻冨美子	03・7・1～13・6・30
篠塚勝夫	03・7・1～07・6・30
井上詳介	03・7・1～10・6・30
水野直治	03・7・1～07・6・30
桂川育美	03・7・1～07・6・30
上村篤正	03・7・1～現
浅野政輝	03・7・1～現
森田茂	03・7・1～07・6・30
永幡肇	03・7・1～13・6・30
谷山弘行	13・7・1～現
佐藤文彦	03・7・1～07・6・30
工藤英一	03・7・1～07・6・30
阿部忠夫	03・7・1～03・10・31
田口俊哉	05・5・31～07・6・30
菊地庸	02・5・28～03・6・30
	01・12・21～07・6・30

波岸裕光	07・7・1～13・6・30
中村由美子	07・7・1～13・6・30
永田亨	10・7・1～現
城近泰	10・7・1～現
菊地政則	10・7・1～現
岡田ミナ子	10・7・1～13・6・30
安孫子建雄	10・7・1～現
大澤宏一	10・7・1～現
真田昭好	10・7・1～現
浅井太一	10・7・1～13・6・30
矢吹哲夫	10・7・1～現
町村均	07・7・1～現
福屋脩三	07・7・1～09・9・1
長谷川豊	07・7・1～10・6・30
長谷川行夫	07・7・1～13・6・30
仙北富志和	07・7・1～10・6・30
黒澤敬三	07・7・1～10・6・30
川成眞美	07・7・1～10・6・30
掛村博之	07・7・1～10・6・30
麻田信二	07・7・1～10・6・30
板倉敏雄	07・7・1～13・6・30
黒畑勝男	07・7・1～現
照井俊秀	13・7・1～現 07・7・1～10・6・30

顧問

氏名	在任期間
小林篤一	55・7・19～72・11・23
岡村文四郎	59・1・28～68・10・20
樋浦誠	64・4・6～91・1・14
町村敬貴	67・6・14～69・8・14
塩野谷平蔵	67・6・14～70・4・15
高橋雄之助	67・6・14～83・1・24
町村金五	67・6・14～92・12・14
大野勇	67・6・14～84・5・30
武田清平	67・6・14～83・12・17
黒澤亮助	68・3・30～73・12・13
堂垣内尚弘	71・6・15～04・2・2
植村甲午郎	71・6・15～78・7・8
高田富与	71・6・15～76・10・17
松原太郎	71・6・15～86・2・22
福山二仁	10・7・1～13・6・30
矢野征男	10・7・1～13・6・30
湯浅優子	10・7・1～13・6・30
四杉惇	10・7・1～13・6・30
小川澄男	11・5・27～13・6・30
小山久一	13・7・1～現
北良治	13・7・1～現
佐々木靖子	13・7・1～現
田中二三男	13・7・1～現
堀内信良	13・7・1～現
山本隆	13・7・1～現
宮古哲雄	72・4・5～72・6・10
川村秀雄	75・6・17～80・1・31
三田村健太郎	77・7・11～87・3・2
瀬尾俊三	79・6・18～80・9・17
手島寅雄	79・6・18～85・9・30
山田為吉	79・6・18～80・3・28
山田利雄	79・6・18～01・10・3
原田正男	83・7・1～92・4・21
岡英雄	83・7・1～07・6・30
山本庸一	87・7・1～87・12・23
福屋茂見	87・7・1～92・12・22
西作久一	87・7・1～88・9・13
土谷長松	99・7・1～99・10・12

教職員

注1、本欄は64年4月1日から49年間分を記載したが、それ以前の「学園史二」に退職記録のない者は本欄に転記した。

注2、職種は主たるもの、教は教育職、事は事務職、技は技術職、用は用務・調理職、医は校医、栄は栄養士を示す。

注3、所属は、機は機農高校・附属高校、酪は酪農学校、自は自動車学校、三は三愛女子高校・とわの森三愛高校、高はとわの森三愛高校(新設)、短は短期大学、大は大学、本は法人事務局、戦略本部および農場勤務を示す。

注4、契約職員、臨時職員および5カ月未満の勤務者は除外した。

注5、在職期間は西暦で記載した。

(2013年4月1日現在)

氏名	職種	所属	在職期間
廣島正雄	技	機本	50・3・1～08・3・31
井上昌保	教	三大	58・4・1～04・3・31
小野愃弘	〃	三高	63・4・1～05・3・31
甲斐勝子(旧姓佐藤)	事	機大	63・5・1～05・3・31
中村百合雄	〃	短本	64・4・1～74・3・20
山本保太郎	技	本	64・4・1～66・3・31
粟野慎一郎	〃	本	64・4・1～66・3・31
渡辺コトミ	〃	本	64・4・1～66・5・31
工藤美紗子	教	三	64・4・1～65・3・31
長谷川清市	〃	三	64・4・1～89・3・31
小山勇夫	教	三高	64・4・1～00・3・31
櫛引浩司	〃	三	64・4・1～65・3・31
南条巨季子(旧姓田島)	〃	三	64・4・1～68・3・31
塚本恭子	〃	三	64・4・1～66・3・31
小野樹子(旧姓山田)	〃	三	64・4・1～71・3・31
下条光輝	教事	三大	64・4・1～92・10・31
島崎忠利	教	三高	64・4・1～01・3・31
池田篤彦	事	本	64・4・1～74・5・5
安藤功一	教	大	64・4・1～06・9・30

| | | |

都築利夫	教	大短	64・11・1～68・2・15	
鈴木健二	〃	大本	64・12・1～70・3・31	
金子紀久恵	技	大本	65・1・1～66・3・31	
山口富夫	教	大	65・4・1～68・3・31	
田村實	〃	大	65・4・1～05・4・2	
和田數雄	〃	大	65・4・1～77・3・31	
沼田芳明	〃	大	65・4・1～94・3・31	
阿部光雄	〃	大	65・4・1～99・3・31	
森本仁	〃	大	65・4・1～03・3・31	
鮫島邦彦	〃	大	65・4・1～07・3・31	
篠原功	〃	大	65・4・1～03・3・31	
甲斐節子	〃	大	65・4・1～67・6・30	
後藤俊子	事	大	65・4・1～69・12・20	
大川建雄	〃	機大本三高	65・4・1～10・3・31	
小野木弘司	教	機高	65・4・1～98・3・31	
小松守	〃	三高	65・4・1～99・11・9	
村山昭二	〃	三高	65・4・1～07・3・29	
森浦絢子（旧姓高橋）	〃	三	65・4・1～70・3・31	
鈴木智恵子	〃	三	65・4・1～70・3・31	
中山輝	〃	三	65・4・1～69・4・1	
小松純子（旧姓中尾）	〃	三高	65・4・1～02・3・31	
河谷奈美子	〃	三	65・4・1～66・3・31	

小山昌子	事	三	65・4・1～85・3・31	
森清静	教	三	65・4・1～79・3・31	
一戸辰男	〃	短	65・4・1～66・3・31	
大高全洋	〃	大	65・4・1～78・9・30	
賀川和子（旧姓小川）	事	大三高	65・4・1～75・12・31	86・4・1～09・3・31
小林秋子	用	大	65・4・1～80・3・31	
坂田幸太郎	事	大	65・4・1～66・3・31	
田中孝次郎	教	機	65・4・1～66・3・31	
松木任弘	〃	機	65・4・1～66・3・31	
藤原美代子	技	本	65・7・1～66・5・31	
下村悦子	〃	本	65・7・1～66・3・31	
加藤悦子	〃	本	65・9・1～66・3・31	
三浦明子	〃	本	65・10・1～66・3・31	
作田栄子	〃	本	65・10・1～66・3・31	
山崎紀子	事	大	65・11・1～70・3・11	
山下正亮	教	大機	66・1・1～81・6・24	
赤木久光	用	短	66・1・11～78・3・31	
日下好喜	〃	大	66・1・16～76・3・31	
小沢一雄	教	大	66・4・1～67・7・31	
田坂隆美	〃	大	66・4・1～96・3・31	
阿部緋佐子	〃	大	66・4・1～68・3・31	
加藤ツヤ子（旧姓奈良）	事	大	66・4・1～72・12・31	

峯寛子	〃	三	66・4・1～80・3・31
斉藤佳鶴子	〃	三	66・4・1～70・3・31
土合紘造	教	機	66・4・1～67・5・31
中島実	技	機大	66・4・1～97・3・31
中村捷二	〃	機	66・4・1～74・6・30
西川求	〃	機高	95・4・1～05・3・31 66・4・1～68・4・10
伊藤茂生	〃	機高	66・4・1～00・3・31
深沢秀則	教	機高	66・4・1～03・3・31
三上勝	事技	短酪大	66・4・1～06・3・31
沼崎洋明	技	大	66・4・1～71・3・31
金栄教	〃	大	66・4・1～66・11・1
古畑北雄	〃	大	66・4・1～77・3・31
村木金弥	〃	大	66・4・1～76・3・31
橋本吉雄	〃	大	66・4・1～71・1・3
東谷文雄	〃	大	66・4・1～68・3・31
山口格	教	大	66・4・1～68・3・31
岡本佑子	〃	大	66・4・1～67・7・31
中川明子	〃	大	66・4・1～73・7・31
日下雅順	〃	大本三高	66・4・1～12・3・31
木村幸恵	〃	大	66・4・1～74・9・30
管野紘一	〃	大	66・4・1～68・3・31
小野寺靖彦	事	大	66・4・1～74・7・31

中園昌子（旧姓大場）	教	三	66・4・1～71・3・31
下条節子（旧姓石川）	〃	三	66・4・1～71・3・31
柱川則子（旧姓田沢）	〃	三	66・4・1～68・2・29
松田孝子（旧姓神治）	〃	三高	66・4・1～04・3・31
梶原興正	〃	三高	66・4・1～00・3・31
美濃彰	用	三	66・4・1～73・3・31
大鋸ひろ子	教	三	66・4・1～73・7・31
木川尚仁	事	三	66・4・1～68・9・30
鶴巻正敏	技	本	66・6・1～81・3・31
藤原政雄	教	酪	66・7・1～73・3・31
大串チエ子（旧姓川端）	事	大	66・7・1～69・3・31
吉田美津子	用	機	66・7・15～67・3・31
横山智恵子（旧姓野村）	事	本	66・8・1～07・3・31
永渕茂夫	用	三機	66・9・1～84・6・30
高橋清志	教	大	67・4・1～94・12・18
澤田麗子（旧姓田浦）	事	大	67・4・1～74・1・31

小林都美（旧姓舘越）	事	大	67・4・1～75・3・31	
川合信美	〃	大	67・4・1～67・8・31	
加藤隆	教事	酪大	67・4・1～04・3・31	
福田ミツ子	事	酪	67・4・1～87・3・31	
後藤七郎	〃	三	67・4・1～68・1・31	
奥山ミヱ	用	機大	67・4・1～86・3・31	
渡辺富子	事	三	67・4・1～68・2・21	
村田キミ	用	三	67・4・1～84・3・31	
小幡幸子	事	三	67・4・1～71・12・31	
青山義人	〃	本	67・4・1～83・6・3	
渡辺京子	用	本	67・4・20～68・8・5	
小林禎次郎	教	大	67・5・1～69・2・28	
菊池利治	事	本大	67・8・1～01・3・31	
星鈴江	〃	機	67・8・1～69・3・20	
北郷和枝	〃	大	67・8・16～71・6・30	
島久子	〃	大	67・8・16～68・8・31	
管井大果	教	大	67・10・1～69・3・31	
加村正直	技	本	67・10・1～69・3・31	
吉田信子	用	大	67・10・1～68・3・31	68・6・1～97・3・31
野田きよ子	〃	短	67・11・1～69・3・31	
川村幸一	事	短本三大	67・11・1～97・3・31	
三島八重子	用	短	67・11・1～74・3・31	

横地竟吾	事	短本大	67・11・4～81・3・31
村尾和子（旧姓野尻）	医	本	67・12・4～86・3・31
斉藤留雄	事	本	67・12・25～70・11・30
吉村千代	用	三	68・2・8～71・3・31
米沢トク	事	三	68・2・13～85・3・31
久米小十郎	教	大	68・3・6～92・1・12
赤坂喜恵子	事	本	68・4・1～73・3・31
田中賢壱	技	大	68・4・1～71・3・31
浜内征雄	〃	大	68・4・1～69・3・31
小野由美子	〃	大	68・4・1～71・12・31
荻原康之	事	短大	68・4・1～07・3・31
折尾広一	技	大本	68・4・1～93・3・31
山田ユキエ	用	大	68・4・1～69・10・18
黒田和子（旧姓村上）	教	三	68・4・1～74・3・31
安藤寿美子	〃	三	68・4・1～69・3・31
天谷正道	〃	三高	68・4・1～03・3・31
小幡光正	〃	大	68・4・1～07・3・31
大谷俊昭	〃	大	68・4・1～05・3・31
島田昌子（旧姓野尻）	〃	大	68・4・1～73・3・31
川上克己	〃	大	68・4・1～08・3・31
奈良将治	技	大	68・4・1～72・3・31

志摩陽子（旧姓永田）	事	大	68・4・1～72・3・31
坂本邦和	〃	大	68・4・1～70・4・30
土田祐子	〃	大	68・4・1～73・12・31
小林公子	〃	大	68・4・1～73・3・31
鎌田みどり	〃	大短	68・4・1～76・6・15
澤田憲宏	〃	大本	68・4・1～07・3・31
卯野木悦子	〃	大本	68・4・1～70・7・23
橋間泰作	教	短	68・4・1～74・11・26
長田キク	事	三	68・4・1～74・7・31
武内武夫	用	本	68・4・1～70・2・28（68・6・1～83・3・31）
佐々木芳丸	技	本	68・4・1～69・3・31
九津見明	教	大	68・4・16～00・3・31
野田直子	用	機	68・4・25～71・1・25
朝倉恒美	技	本	68・5・1～69・3・31
近藤トシエ	用	大	68・5・1～72・2・29
池倉スミ	〃	大	68・5・1～71・12・31
福田銀蔵	〃	短	68・5・1～70・12・31
神保新太郎	技	本	68・5・1～74・4・30
加藤信幸	事	短	68・7・1～74・3・31
広島厚子	〃	大	68・7・16～74・8・31
森清行	用	機	68・7・15～69・4・10～68・9・30
小谷忠生	教	大	68・4・1～72・3・31
三島徳三	〃	大	68・8・16～74・6・30
鴨田幸子	用事	機大	68・8・16～96・3・31
川端よし子	事	大	68・9・1～73・3・31
高野しず	用	大	68・9・1～85・3・31
野明美	用事	本	68・9・16～70・12・31
武田保弘	事	三大	68・9・16～92・12・31
溝浩	教	大	68・10・1～75・3・31
小玉福子（旧姓木伏）	事	大	68・10・1～69・4・30
杉田文雄	教	短酪	68・10・1～80・6・30
斎藤洋子（旧姓高井）	事	機本大	68・10・1～00・12・22
荒岡浩美	〃	本	68・12・1～70・7・25
菊池悦子（旧姓土田）	〃	大	69・1・1～70・9・30
小舘哀一	教	酪	69・1・1～74・3・31
白川康子（旧姓横地）	事	三短本	69・2・1～03・12・31
今井保之	教	三高	69・4・1～99・6・30
野村興雄	〃	大	69・4・1～72・3・31
斎藤純	〃	大	69・4・1～91・12・15
村木茂明	〃	大	69・4・1～06・3・31
及川真理子	〃	大	69・4・1～70・10・15

道下幸子	事	短	69・4・1～73・7・15
仲野定男	技	本	69・4・1～71・4・26
森田修	教	大	69・4・1～70・3・31
外山敏雄	〃	短	69・4・1～73・3・31
大橋義躬	〃	短	69・4・1～74・3・31
平尾和義	〃	大	69・4・1～98・3・31
竹元道代（旧姓山重）	事	大	69・4・1～76・4・30
田村康夫	教	大	69・4・1～77・3・31
M・F・デビドソン	〃	大	69・4・1～70・8・31
渡辺タツ子	事	機	69・4・1～74・8・31
能登谷順子（旧姓斎藤）	教	三	69・4・1～73・12・31
野田万寿雄	用	三	69・4・9～79・3・31
佐藤幸一	事	本大	69・4・1～76・3・31
貝沢二郎	技	本	69・4・1～69・10・31
渡辺基	教	大	69・4・16～75・8・31
高橋賢二	事	大	69・4・16～71・3・31
大野陽子	〃	大	69・5・1～70・6・30
吉田勝美	技	本	69・5・1～71・10・20
勝目孝雄	教	本酪	69・6・1～80・6・30
前川美津江	事	機	69・6・16～70・7・5
片岡昌子	教	機	69・7・1～86・3・29
加藤正勝	事	大三酪	69・7・1～04・3・31

沖本美津江（旧姓菊池）	事	本	69・8・16～80・2・29
前島正義	技	大	69・9・16～71・4・30
服部智恵子	事	大	69・10・1～91・3・31
島崎とき	用	機	69・12・10～75・3・31
増本淑子（旧姓宮崎）	事	大	70・1・1～73・6・30
樺沢誠一	技	大	70・4・1～74・2・28
新谷良一	事	大酪	70・4・1～00・3・31
橋詰喜代子	教	大	70・4・1～73・9・17
上田真理子	〃	大	70・4・1～74・3・31
岡田雅昭	〃	大	70・4・1～76・3・31
山畑勝美	〃	大	70・4・1～90・3・31
三田保正	〃	大	70・4・1～97・3・31
種池哲朗	〃	大	70・4・1～08・3・31
伊藤慶市	用	短	70・4・1～75・3・1
小倉規子	事	短大	70・4・1～76・12・15
首藤嘉子（旧姓栗原）	教	三	70・4・1～71・12・31
荒木朋子	〃	三	70・4・1～71・3・31
柴橋伴夫	〃	三高	70・4・1～06・3・31
三島陽子	〃	三高	70・4・1～03・3・31
鳴海敏夫	技	本	70・4・1～72・3・31
谷本等	事	本三	70・4・1～75・8・31

鳴海洋子	事	短	70・6・1～76・6・15
杉沢厚子（旧姓是安）	教	大	70・6・1～72・4・30
峰矢恭則	教	短	70・7・1～79・5・21
山本自子	事	大	70・7・1～06・3・31
高橋静江	事	大	70・7・16～73・12・31
平野敦	技	大	70・8・1～05・3・31
南裕子	事	本	70・9・1～74・3・31
田畠誠吉	〃	短	70・9・1～73・8・31
渡辺誠治	〃	本大	70・9・16～07・6・30
中松喬三郎	教	短	70・10・1～75・3・31
白田道子（旧姓原田）	〃	三	70・11・18～75・3・31
小川豊子（旧姓世羅）	事	短大本高	70・12・1～13・3・31
池田和子（旧姓林）	〃	本大	70・12・17～09・5・31
木村宣治	〃	大	71・4・1～75・3・31
島津千栄	〃	大	71・4・1～74・3・31
岩佐憲二	教	大	71・4・1～00・7・30
高橋茂	〃	大	71・4・1～73・9・29（71・4・1～11・4・1現）
西埜進	〃	大	71・4・1～97・3・31
菊地政則	〃	大	71・4・1～12・3・31
中島豊吉	技	大	71・4・1～72・6・30
古瀬庄平	用	大	71・4・1～76・3・31
小池万夫	事	三	71・4・1～73・10・13
寺山佳代子	教	三	71・4・1～88・3・31
俣野弥生	〃	三	71・4・1～72・9・30
古瀬イト	用	三	71・4・1～73・3・31
中本教一	技	本	71・4・1～73・3・31
山崎金治郎	教	大	71・4・1～77・3・31
橋本伸子	〃	三	71・4・1～79・3・31
千葉昌子	〃	三高	71・4・1～03・3・31
青柳剛	〃	短	71・4・1～99・3・31
鈴木矩子（旧姓藤居）	〃	三	71・4・1～84・3・31
安宅一夫	〃	大	71・4・1～12・3・31
菅沼英二	〃	大	71・5・1～00・3・31
富田寿美子	事	大	71・6・1～75・1・31
萬田正治	教	大	71・7・16～76・2・29
加藤久美子	事	大	71・8・1～73・3・31
引地麗子	教	三	71・8・5～73・7・10
深沢一造	用	大	71・11・1～77・3・31
中島まつえ	〃	大	72・2・1～80・3・31
菊地あきえ	〃	大	72・3・1～89・3・31
板橋孝雄	技	本	72・4・1～75・3・31
勝部信二	〃	本	72・4・1～73・3・25

| | | |

松原久夫	技事	大本	74・4・1～現
渡辺典子	事	短	74・4・1～78・3・31
後藤朋子	〃	大	74・4・1～80・3・31
西野加代子（旧姓山下）	〃	大	74・4・1～84・1・31
加藤勲	教	大	74・4・1～09・3・31
中村志津子（旧姓平出）	事	短	74・4・1～77・3・31
肥田野豊	教	短	74・4・1～79・3・31
村瀬信雄	〃	大	74・4・1～83・3・31
菊地眞紀子	事	酪大	74・4・1～現
山﨑久美子	〃	本大高	74・4・1～13・3・31
堀内信良	〃	本大	74・4・1～94・3・31
笹渡憲吉郎	技	機	74・4・1～78・3・31
浜本祐美子（旧姓白井）	教	三	74・4・1～78・3・31
中村文夫	〃	三高	74・4・1～13・3・31
金田隆一	〃	三短大	74・4・1～現
三浦いづみ（旧姓長谷川）	〃	三	74・4・1～77・8・13
川井あや子	〃	三	74・4・1～87・3・31
辻村富士朗	〃	三	74・4・1～82・7・7
山下勝弘	用	大	74・4・16～83・3・31
後藤又吉	〃	短	74・5・1～80・3・31

清野正道	技	大	74・5・1～75・3・31
野平郁子（旧姓清水）	事	機	74・5・1～79・6・5
沖本憲行	〃	短大高	74・5・16～12・3・31
濵谷耕一	〃	大	74・5・16～現
山田龍翁	〃	短大本	74・5・16～10・3・31
山花豊	教	機自	74・7・1～76・10・31
中原准一	〃	大	74・7・1～12・3・31
大井裕子	事	本大	74・7・10～83・3・31
川上善三	教	大	74・7・16～95・3・31
内生蔵啓貢	〃	機高	74・8・1～06・3・31
袖野道子（旧姓沢田）	事	三大本	74・9・1～05・3・31
宮本昭子	〃	機	74・9・1～78・3・31
土部美好	〃	大	74・9・1～80・9・13
岡本紀子（旧姓本江）	〃	大	74・9・1～94・3・31
藤田正一	教	大	74・9・1～83・3・31
高橋セツ子	〃	短大	74・10・1～04・3・31
竹吉キヨ	用	短	74・11・1～99・3・31
其田三夫	教	大	74・11・15～94・3・31
武内千保（旧姓出口）	事	大	74・12・1～83・3・31
竹川昭代	教	三	75・4・1～78・3・31

柴（旧姓浜谷）朝子	教	三	75・4・1～82・3・31
川上真知子	〃	三高	75・4・1～06・1・26
荒川光夫	〃	三高	75・4・1～10・3・31
大北（旧姓舟橋）直子	〃	三高	75・4・1～07・3・31
白崎久彦	〃	機	75・4・1～81・3・31
吉田真	〃	機高	75・4・1～96・3・31
家股美津枝	事	短	75・4・1～75・12・31
斎藤瞭	教	短大	75・4・1～11・3・31
半沢道郎	〃	大	75・4・1～80・3・31
渡辺（旧姓杉江）敏子	事	大三本	75・4・1～13・3・31
浦川（旧姓中村）真美子	〃	大	75・4・1～79・9・30
斎藤英則	〃	大	75・4・1～75・10・31
加賀谷千晴	〃	大	75・4・1～79・3・31
尾崎邦嗣	技	大	75・4・1～現
渡辺伸雄	〃	大	75・4・1～76・3・31
武田とも子	事	大	75・4・1～79・3・31
小岩政照	教	大	75・4・1～80・3・31（93・9・1～現）
菊池直哉	〃	大	75・4・1～現
千早豊	〃	大	75・4・1～86・7・31

小山久一	教	大	75・4・1～13・3・31
小阪進一	〃	大	75・4・1～現
中尾敏彦	〃	大	75・4・1～99・9・30
今村晋一郎	〃	大	75・4・1～99・3・31
宮崎周造	〃	機	75・4・1～79・3・31
高林菊太郎	事	本	75・4・1～81・3・31
宮脇（旧姓岡田）瑞恵	〃	三	75・4・1～79・3・31
近藤勝美	用	大	75・9・1～84・7・31
神久美子	事	大短	75・9・15～79・12・31
岩井正敏	教	大	75・10・16～86・10・21
野英二	〃	大	76・4・1～現
浦川利幸	事	大本	76・4・1～現
豊田真由美	〃	大	76・4・1～80・6・30
中野（旧姓永野）明美	〃	大	76・4・1～96・7・31
福井ひとみ	〃	大	76・4・1～79・6・30
尾形仁	技事	大本	76・4・1～現
筒井雅弘	技	大	76・4・1～77・3・31
佐々木均	教	短大	76・4・1～現
筒井（旧姓大槻）静子	事教	短大	76・4・1～現
本田優子	教	三	76・4・1～77・3・31
三股正年	〃	大	76・4・1～85・3・31

村岡範男	教	大	76・4・1～現	
近雅宜	事	本大	76・6・1～現	
中野百合子（旧姓坂本）	〃	短	76・6・16～84・3・31	
小林めぐみ	〃	短大本	76・6・16～現	
南条道雄	教	三	76・10・18～81・3・31	
斎藤真弓	事	大	76・12・16～79・12・31	
頭川恵子（旧姓田村）	〃	三高大	77・4・1～現	
森下美喜代	〃	短	77・4・1～89・2・28	
多田正栄	用	大	77・4・1～84・3・31	
長谷川誠一	教	大	77・4・1～88・3・31	
滝沢義郎	〃	大	77・4・1～84・3・31	
上野光敏	技	大	77・4・1～13・3・31	
阿部朝子	事	大	77・4・1～85・6・30	
高坂嘉孝	教	大	77・4・1～80・7・31	
山舗直子	〃	大	77・4・1～現	
平賀武夫	〃	大	77・4・1～現	
近藤誠司	〃	大	77・4・1～83・1・31	
加藤清雄	〃	大	77・4・1～現	
梅沢馨	〃	大	77・4・1～00・3・31	
河田啓一郎	〃	大	77・4・1～96・3・31	
大塚譲	〃	大	77・4・1～80・3・31	
佐藤毅	用	大	77・4・1～83・3・31	

佐藤金四郎	技	本	77・4・1～81・3・31	
白井俊三	〃	本	77・4・1～78・3・31	
安藤由章	教	大	77・4・1～91・3・31	
中ノ目敏雄	〃	機高	77・4・1～現	
薄井健男	技	本	78・4・1～83・7・15	
角田修男	教	大	78・4・1～83・3・31	
前田義雄	用	大	78・4・1～86・3・31	
奥村優子	事	短	78・4・1～83・3・31	
中山一二三	技	短	78・4・1～87・3・31	
和泉与一	用	短	78・4・1～85・3・31	
伊藤敦司	教	機高	78・4・1～08・12・31	
長瀬隆	〃	機高大	78・4・1～12・3・31	
伊藤眞美（旧姓国澤）	事	機大	78・4・1～現	
大野亮子（旧姓伊藤）	教	三高	78・4・1～88・3・31	06・4・1～09・3・31
安達恵理	〃	三	78・4・1～81・3・31	
上田晃	〃	大	78・4・1～85・3・31	
荒川恵美子（旧姓山畑）	〃	三	78・4・2～83・3・31	
木村貞夫	技	本	78・4・2～81・3・31	
中居千枝子	教	三	78・5・1～96・3・31	
山岸雅樹	事	機	78・6・15～80・6・15	
荒田善之	教	大	78・9・1～86・3・31	

伊藤文雄	技	本	78・9・1～81・7・31	
久保舒章	用	機	79・4・1～85・3・31	
上野弘志	教	大	79・4・1～現	
森津康喜	〃	短	79・4・1～04・3・31	
宮崎秀人	〃	大	79・4・1～92・2・5	
永幡肇	〃	短大	79・4・1～現	
飯沼香代子	事	大	79・4・1～87・3・31	
井下さゆり	〃	三	79・4・1～83・3・31	
赤塚正太郎	用	三	79・4・1～87・3・31	
先本勇吉	教	短大	79・4・1～86・3・31	
黒岩京子	〃	三	79・4・1～86・3・31	
赤尾全廣	教事	三高大	79・4・1～現	
長谷川真理	教	三	79・4・1～82・9・30	
永澤繁	〃	三	79・4・1～88・3・31	
有好潤二	教事	機高大	79・4・16～現	
小野寺美保子（旧姓松本）	事	機大	79・5・1～87・12・31	
海野芳太郎	教	短	79・6・1～02・4・9	
菊田治典	〃	短大	79・7・1～現	
高木浩隆	技	本	79・11・1～80・6・10	
岩井洋	教	大	80・4・1～現	
竹花一成	〃	大	80・4・1～現	
黒澤隆	〃	大	80・4・1～現	
青木道子	〃	大	80・4・1～83・3・31	
下田尊久	事	大	80・4・1～90・2・28	
伊藤耕太郎	〃	大本	80・4・1～82・8・18	
今村明美	〃	大	80・4・1～90・3・31	
高橋千鶴（旧姓道谷）	〃	大本	80・4・1～現	
加福幸枝	〃	大本	80・4・1～現	
伊澤正夫	教	大	80・4・1～88・3・31	
角澤忠	〃	短	80・4・1～99・3・31	
田中義則	事	短大本	80・4・1～現	
浅野裕子	〃	短	80・4・1～85・3・31	
山崎洋子	〃	短	80・4・1～85・3・31	
山田和弘	教	機高	80・4・1～現	
田村敬子	〃	三高	80・4・1～現	
十倉宏	事	酪大本	80・4・1～現	
小峰政夫	技	大	80・4・1～83・3・31	
関浩一	事	本大高	80・4・1～現	
小松敏子	〃	本	80・4・1～83・3・31	
奥寺好子（旧姓芳賀）	〃	本大	80・4・1～現	
竹内博子	〃	本	80・4・1～86・3・31	
佐藤秀子	用	大	80・5・1～94・3・31	
横田博	教	大	80・5・15～現	
小寺明子	事	大	80・7・1～84・12・31	
髙橋秀一	〃	大本	80・7・1～現	

柴田弘幸	事	機酪大高	80・7・1～06・9・12
松本寛	教	大	80・10・1～97・9・10
ジェームズ・クラーク	〃	大	81・4・1～83・3・31
国本隆美	〃	大	81・4・1～82・3・31
中出哲也	〃	大	81・4・1～現
漆原小織（旧姓浜谷）	事	大	81・4・1～92・3・31
辻直人	〃	大	81・4・1～00・3・31
風岡利尚	事教	大三高	81・4・1～現
後藤郁子	教	短	81・4・1～98・3・31
高原利好	〃	大	81・4・1～91・3・31
木曽忠吉	〃	機	81・4・1～85・3・31
千島真津子	〃	三	81・4・1～85・3・31
榮潤子	〃	三高	81・4・1～94・3・31
田口みゆき	事	三	81・4・1～83・2・28
照井俊秀	〃	酪機本大	81・4・1～現
加藤康子	〃	本大	81・4・1～04・3・31
林多喜夫	〃	本大	81・4・1～現
奥平武市	技	本大	81・4・1～現
服部芳弘	〃	本	81・4・1～82・12・31
日置明男	教	機	81・5・1～83・3・31
中西宥	〃	大	81・10・1～94・3・31
千田直之	〃	大	82・4・1～83・3・31
小西辰雄	〃	大	82・4・2～84・3・31

石川恒	教	大	82・4・2～89・3・31
酒井保	〃	大	82・4・2～89・3・31
平棟孝志	〃	大	82・4・2～97・3・31
荒井惣一郎	〃	大	82・4・1～99・3・31
桐澤力雄	〃	大	82・4・1～現
福本真一郎	〃	大	82・10・1～現
東洋生	〃	大	83・4・1～85・3・31
峯尾仁	〃	大	83・4・1～97・8・31
坪敏雄	〃	大	83・4・1～93・3・31
工藤英一	〃	大	83・4・1～11・3・31
森好政晴	〃	大	83・4・1～現
岡田洋之	〃	大	83・4・1～03・9・30
松田浩治	事	大高	83・4・1～現
今野穂	〃	大	83・4・1～93・4・30
折出須美江	用	大	83・4・1～02・9・30
奥村みね子	〃	短	83・4・1～87・12・14
廣岡亨	事	短大本	83・4・1～現
中村真智子	教	三高本	83・4・1～現
田中睦子（旧姓肥田野）	事	本	83・4・1～91・3・31
新政文	〃	本三大高	83・4・1～現
佐々木淳	〃	本大	83・4・1～現
佐藤絵里子	〃	本大	83・4・1～現
堀内一男	教	大	83・4・16～01・3・31

亀尾義晴	事	本	83・5・10～95・3・31	
大橋昇	技	本	83・8・20～92・3・31	
林（旧姓西岡）真佐子	事	大	83・10・24～87・3・31	
小沼操	教	大	84・4・1～89・6・30	
丸山明	〃	大	84・4・1～現	
四月朔日英子	事	大	84・4・1～90・3・31	
加藤浩	〃	大本	84・4・1～現	
菅原真澄	教	三	84・4・1～86・3・31	
編田悦子	用事	三高	84・4・1～88・3・31	
高橋中子	用	三	84・4・1～86・2・28	
島尻宗義	技	本	84・4・1～89・3・31	
日光文夫	〃	本	84・4・16～99・3・31	
中村武	用技	三大	84・7・1～96・3・31	
稲垣義人	用	機	84・10・1～90・3・31	
秋田定夫	技	大	84・10・1～06・3・31	
C・L・ロッグヘアー	教	三高	85・6・1～90・3・31	
小林弘之	〃	大	85・4・1～08・3・31	
塩見徳夫	〃	大	85・4・1～現	
森田茂	〃	大	85・4・1～02・3・31	
山口令子	用	大	85・4・1～98・4・1～07・3・31	
マーク・A・ブラジル	教	短大	85・4・1～85・10・25	
尾崎巌	〃	短大	85・4・1～05・3・31	
山田（旧姓米澤）真由美	事	機大	85・4・1～99・3・31	
松田（旧姓村林）直子	〃	短本大	85・4・1～10・3・31	
臼田一昭	教	機	85・4・1～90・3・31	
佐々木富八	用	機	85・4・1～90・3・31	
梅津（旧姓松原）佐衛子	教	三	85・4・1～92・3・31	
漆原滋	事	本大	85・4・1～現	
新山雅美	教	大	85・9・1～07・3・31	
浅川満彦	〃	大	85・11・1～現	
秋山敏弘	〃	大	86・4・1～96・3・31	
今岡久人	〃	大	86・4・1～98・3・31	
小野寺秀一	〃	大	86・4・1～現	
荒木和秋	〃	大	86・4・1～現	
甲田佳子	事	大	86・4・1～89・3・31	
岡田富子	〃	大	86・4・1～05・3・31	
和田謹吾	教	短	86・4・1～92・3・31	
森二三男	〃	短大	86・4・1～93・3・31	
矢田貝紀雄	〃	短	86・4・1～99・3・31	
ネル・L・ケネディ	〃	短大	86・4・1～08・3・31	
岩井繁和	事	短大本	86・4・1～現	
坂本妙子	教	機高	86・4・1～98・3・31	
柏倉宏造	用	機	86・4・1～91・3・31	

千代西尾知恵	教	三	86・4・1～89・3・31
佐々木壽	〃	三高	86・4・1～98・3・31
梅津敏	〃	三高	86・4・1～現
岩井素枝（旧姓岡本）	事	本	86・4・1～93・6・30
後藤哲也	〃	本高大	86・4・1～現
金子千恵	〃	本大	86・4・1～現
田口俊哉	技事	本	86・4・1～現
南佳子（旧姓内田）	教	大	86・4・10～12・9・30
栗田正一	技	大本	86・6・1～94・3・31
河内克夫	〃	本	86・9・1～90・3・31
土永孝	教	大	87・4・1～92・3・31
竹内恭	〃	大	87・4・1～93・3・31
北澤馨	〃	大	87・4・1～94・3・31
谷山弘行	〃	大	87・4・1～現
柳村俊介	〃	大	87・4・1～05・3・31
小宮道士	〃	大	87・4・1～現
尾野麻紀子（旧姓久恒）	〃	短大	87・4・1～09・12・31
伊藤明美	事	機三高本大	87・4・1～現
桜井孝一郎	教	三高	87・4・1～94・3・31
黒畑勝男	〃	三高	87・4・1～97・3・31（07・4・1～現）

泉澤康晴	教	大	87・4・10～現
伊東登	〃	大	87・4・10～07・3・31
長谷川慶子	用	大	87・11・1～04・3・31
吉田かよ子	教	大	88・4・1～89・3・31
遠藤順三	〃	大	88・4・1～89・3・31
宇野光雄	〃	大	88・4・1～92・3・31
中田平	〃	大	88・4・1～93・3・31
大林正士	〃	大	88・4・1～95・3・31
工藤宣夫	〃	大	88・4・1～95・3・31
小池寿男	〃	大	88・4・1～95・3・31
梁川良	〃	大	88・4・1～95・3・31
山田弘司	〃	大	88・4・1～現
旭勝	技教	大	88・4・1～90・3・31
佐藤元昭	〃〃	大	88・4・1～現
榎本守恵	教	短	88・4・1～93・9・8
笹原武丸	事	短	88・4・1～92・3・31
河原淳	教	三	88・4・1～91・3・31
林田敏	〃	三	88・4・1～91・3・31
三浦寛	〃	三高	88・4・1～94・3・31
泊出秀雄	〃	三高	88・4・1～98・3・31
藤島浩二	〃	三高	88・4・1～現
天田輝久	事	大本	89・1・1～01・3・31
坂村貞雄	教	大	89・4・1～90・2・28
池内義則	〃	大	89・4・1～93・3・31

| | | |

永井珠夫	〃	大	93・4・1～97・3・31	
牧野利一	〃	大	93・4・1～97・3・31	
白鳥宗紀	〃	大	93・4・1～01・3・31	
北澤多喜雄	教	大	92・7・1～現	
野呂英行	医	本	92・4・1～現	
竹井真紀（旧姓北角）	事	本大	92・4・1～98・3・31	
橋本久美	〃	高	92・4・1～99・3・31	
笹原明子	教	短	92・4・1～99・3・31	
川端幸枝	〃	短大	92・4・1～現	
高山基樹	〃	大本	92・4・1～現	
西田美知絵（旧姓中村）	事	大	92・4・1～03・3・31	
小林敬	〃	大	92・4・1～現	
山口博	〃	大	92・4・1～07・3・31	
山下和人	〃	大	92・4・1～現	
寺岡宏樹	〃	大	92・4・1～現	
森田千春	〃	大	92・4・1～04・3・31	
發地喜久治	〃	大	92・4・1～現	
宮川栄一	教	大	92・1・1～12・3・31	
塩出真司	事	大	91・10・1～現	
高橋樹史	〃	大	91・10・1～現	
義平大樹	教	大	91・9・1～現	
阿部悦夫	技事	本	91・9・1～現	

片桐誠士	〃	大	95・4・1～99・3・31	
新井健一	〃	大	95・4・1～98・3・31	
林正信	〃	大	94・10・1～現	
吉野知男	〃	大	94・8・1～03・3・31	
久保木崇	〃	高	94・4・1～現	
内堀堅造	〃	高	94・4・1～99・3・31	
水野直治	〃	短	94・4・1～02・3・31 02・4・10～03・3・31	
村上恒一	〃	短	94・4・1～99・3・31	
中村忍	〃	短	94・4・1～99・3・31	
七戸長生	〃	大	94・4・1～98・3・31	
寺内光宏	〃	大	94・4・1～96・3・31	
泉谷眞実	〃	大	94・4・1～98・9・30	
牧野輝男	〃	大	94・4・1～02・3・31	
山本博信	〃	大	94・4・1～03・3・31	
森田潤一郎	〃	大	94・4・1～06・3・31	
鈴木忠敏	教	大	94・1・1～現	
窪田系生	事	大	93・9・1～現	
村松康和	〃	大	93・8・1～現	
中田健	〃	大	93・8・1～現	
岡本全弘	〃	短大	93・4・1～11・3・31	
淺利英吉	教	短	93・4・1～97・3・31	
波多腰和寿	技	大	93・4・1～96・1・31	
岡本英竜	教	大	93・4・1～現	

齋藤善一	教	大	95・4・1～99・3・31	
尾碕亨	〃	大	95・4・1～現	
深澤史樹	〃	大	95・4・1～現	
干場信司	〃	大	95・4・1～現	
松中照夫	〃	大	95・4・1～現	
村松圭	〃	大	95・4・1～現	
矢吹哲夫	〃	大	95・4・1～現	
吉野宣彦	〃	大	95・4・1～現	
J・D・ウイリアムス	〃	大	95・4・1～05・3・31	
山下昭芳	技	大	95・4・1～03・3・31	
上野伸	教	高	95・4・1～97・3・31	
佐藤一義	〃	高	95・4・1～00・3・31	
大中隆	〃	高	95・4・1～現	
石橋紀彦	〃	高	95・4・1～現	
辻佳江	〃	高	95・4・1～現	
一条茂	〃	大	95・10・1～98・3・31	
小川環	〃	大	96・4・1～97・3・31	
盛田フミ	〃	大	96・4・1～01・3・31	
佐藤博	〃	大	96・4・1～12・3・31	
竹田保之	〃	大	96・4・1～現	
中村邦男	〃	大	96・4・1～07・3・31	
伊藤多香子	〃	高	96・4・1～02・3・31	
榮忍	〃	高	96・4・1～現	
相馬憲子	事	高本	96・4・1～現	

石黒直文	教	大	97・4・1～99・3・31	
角田順三	〃	大	97・4・1～02・3・31	
芝崎希美夫	〃	大	97・4・1～06・3・31	
細川允史	〃	大	97・4・1～11・3・31	
萩原克郎	〃	大	97・4・1～現	
及川伸	〃	大	97・4・1～現	
山保千都子	用	大	97・4・1～12・3・31	
高橋一	教	短大	97・4・1～13・3・31	
太田静	〃	高	97・4・1～99・2・28	
越後治之	〃	高	97・4・1～現	
栃金健	〃	高	97・4・1～現	
諏訪馨	事	本	97・4・1～99・3・31	
岩森昭憲	〃	大本高	97・7・1～現	
北山陽	〃	本大	97・7・1～現	
佐藤誠治	〃	本大高	97・7・1～12・4・30	
伊藤顕史	〃	大	97・8・1～09・6・30	
梅田美恵子	用	大	97・9・1～現	
山崎亮一	教	大	97・10・1～09・3・31	
金子佳弘	〃	大	98・4・1～08・3・31	
加藤敏文	〃	大	98・4・1～現	
村野紀雄	〃	大	98・4・1～09・3・31	
森川純	〃	大	98・4・1～現	
河合博司	〃	大	98・4・1～13・3・31	
伊藤悟	〃	大	98・4・1～06・3・31	

押谷一	教	大	98・4・1～現
岩崎智仁	〃	大	98・4・1～現
井上博紀	〃	大	98・4・1～13・3・31
泉賢一	〃	大	98・4・1～現
浅井太一事	〃	大本	98・4・1～現
中村隆文	〃	短大本	98・4・1～現
西田智	〃	大	98・4・1～現
寺脇良悟	教	短大	98・4・1～現
肝付典子	〃	高	98・4・1～00・3・31
越後久美子（旧姓酒井）	〃	高	98・4・1～05・3・31
北所康一	〃	高	98・4・1～02・3・31
龍聡己	〃	高	98・4・1～現
樋口豪紀	〃	大	98・7・1～現
堂地修	〃	大	98・10・1～01・9・30
A・M・ティルムルティ	〃	大	98・10・1～現
丹渥技	〃	高	98・11・1～10・3・31
北倉公彦	教	大	99・4・1～00・3・31
艾尼瓦尔・艾山	〃	大	99・4・1～01・3・31
B・J・サネスキー	〃	大	99・4・1～02・3・31
遠藤大二	〃	大	99・4・1～現
小澤修二	〃	大	99・4・1～現
相原晴伴	〃	大	99・4・1～現
植田弘美	〃	大	99・4・1～現

昌子守彦	教	大	99・4・1～07・3・31
山形郷美	栄	大	99・4・1～現
走出成子	用	大	99・4・1～現
久保木宣子（旧姓矢吹）	教	高	99・4・1～03・3・31
竹田弥生	〃	高	99・4・1～08・3・31
松浦武光	〃	高	99・4・1～04・3・31
澤向豊	〃	大	00・4・1～09・3・31
千田忠	〃	大	00・4・1～08・3・31
田口清	〃	大	00・4・1～現
平澤佐智子	事	大	00・4・1～03・5・31
長松孝明	教	高	00・4・1～03・3・31
石川和哉	〃	高	00・4・1～現
伊藤有輝	〃	高	00・4・1～現
諸橋めぐみ（旧姓東條）	〃	高	00・4・1～現
妹尾将義	〃	高	00・4・1～現
龍梓（旧姓石若）	〃	高	00・4・1～現
佐々秀和	事	本大高	00・4・1～現
津川裕一	〃	本大	00・4・1～現
岩澤勉	〃	本	00・7・12～04・3・31
曽田春水	教	大	01・4・1～02・3・31
嘎尔迪	〃	大	01・4・1～02・3・31

音竹満	教	大	01・4・1～03・3・31
森永文彦	〃	大	01・4・1～11・3・31
保坂善真	〃	大	01・4・1～08・3・31
黒澤誠治	〃	大	01・4・1～05・3・31
仙北富志和	〃	大	01・4・1～10・3・31
日野晃輔	〃	大	01・4・1～08・3・31
三河勝彦	〃	大	01・4・1～04・3・31
吉田英雄	〃	大	01・4・1～07・10・31
小野輝夫	〃	大	01・4・1～06・3・31
石川紀子	〃	大	01・4・1～04・3・31
金辰保	〃	大	01・4・1～04・3・31
倉内貴美	〃	大	01・4・1～03・11・30
柿崎明子	〃	高	01・4・1～現
大光慎太郎	〃	高	01・4・1～現
周仲光	〃	大	02・4・1～03・3・31
菊地和美	〃	大	02・4・1～09・3・31
小糸健太郎	〃	大	02・4・1～現
佐藤和夫	〃	大	02・4・1～現
眞船直樹	〃	大	02・4・1～現
三谷光照	〃	大	02・4・1～現
佐野晴行	〃	大	02・4・1～12・3・31
長谷川豊	〃	大	02・4・1～10・3・31
本多芳彦	〃	大	02・4・1～現
B・バーンズ	〃	大	02・4・1～07・3・31
加内敦子（旧姓阿久津）	教	大	07・4・1～12・3・31
植村なお子	〃	大	08・4・1～09・3・31
中橋愛	〃	大	02・4・1～04・3・31
小島友子	用	大	02・4・1～現
我妻尚広	教	短大	02・4・1～現
新井昭雄	〃	高	02・4・1～現
大光真礼（旧姓蟹田）	〃	高	02・4・1～04・3・31
福田憲太郎	〃	高	02・4・1～現
守田純子	〃	高	02・4・1～現
横川容子	教事	高大	02・4・1～現
千田喜美子	用	大	02・10・1～12・3・31
家串哲生	教	大	03・4・1～09・1・31
上野岳史	〃	大	03・4・1～現
澤本卓治	〃	大	03・4・1～現
中野益男	〃	大	03・4・1～08・3・31
千葉誠哉	〃	大	03・4・1～06・3・31
許應哲	〃	大	03・4・1～04・3・31
佐藤雄平	事	大本	03・4・1～現
島田恵子（旧姓仲野）	〃	大本	03・4・1～現
廣田政則	〃	大本	03・4・1～現

吉田陽平	事	大本	03・4・1～現
脇島和宏	〃	大	03・4・1～現
坂本勲技	教技	大	03・4・1～10・3・31
名久井忠	教	短	03・4・1～12・3・31
岡本吉弘	〃	短大	03・4・1～現
竹中匡志	〃	高	03・4・1～07・3・31
隼野謹	〃	高	03・4・1～現
（旧姓蒔田）源津弥生	〃	高	03・4・1～現
八木啓太	〃	高	03・4・1～現
真田昭好	〃	高	03・4・1～現
播磨良信	〃	高	03・4・1～現
前田俊哉	〃	高	03・4・1～現
中野亮子	事	本大	03・4・1～現
都築圭子	教技	大	03・7・1～09・3・31
酒見蓉子	教	大	03・7・1～06・3・31
岩野英知	〃	大	03・9・1～現
岡本実	〃	大	03・10・1～現
廉澤剛	〃	大	04・4・1～現
田村豊	〃	大	04・4・1～現
石井智美	〃	大	04・4・1～現
舩津保浩	〃	大	04・4・1～現
新名正勝	〃	大	04・4・1～10・3・31
胡爾査	〃	大	04・4・1～06・3・31

松本久美子	教	大	04・4・1～06・3・31
淺川聡子	〃	大	04・4・1～07・3・31
奥村昌子	〃	大	04・4・1～07・3・31 10・4・1～現
宗像美恵子	〃	大	04・4・1～07・3・31
（旧姓大野）永田真弓	事	大本	04・4・1～現
（旧姓北原）保原明子	〃	大本	04・4・1～現
竹下善史	〃	大本	04・4・1～現
（旧姓藤林）村松愛	〃	大	04・4・1～07・3・31
川岸孝博	技	大	04・4・1～現
青木由恵	用	大	04・4・1～10・3・31
有澤奈々子	教	高	04・4・1～現
池田淳郎	〃	高	04・4・1～現
大塚健太郎	〃	高	04・4・1～06・9・30
建部大自	〃	高	04・4・1～現
伊早坂政宏	〃	高	04・4・1～09・3・31
三上義博	〃	高	04・4・1～07・3・31
永田恭之	事	本大	04・4・1～現
中村丞	技	本	04・4・1～現
辻和彦	事	本	04・4・1～07・3・31
大泰司紀之	教	大	04・4・1～07・3・31

髙橋正子	教	大	04・5・1～10・3・31
今井彩（旧姓伊勢）	事	大本	04・8・1～12・9・30
滝口満喜	教	大	04・10・1～07・9・30
上田純治	〃	短大	05・1・1～現
杉村泰彦	〃	大	05・4・1～現
吉岡徹	〃	大	05・4・1～現
保原達	〃	大	05・4・1～現
山下亜紀郎	〃	大	05・4・1～10・11・30
林英明	〃	大	05・4・1～現
松田一哉	〃	大	05・4・1～現
横山明光	〃	大	05・4・1～10・3・31
神谷正男	〃	大	05・4・1～09・3・31
播磨屋敏生	〃	大	05・4・1～10・3・31
一戸由美	〃	大	05・4・1～08・3・31
大竹亜弓	〃	大	05・4・1～07・3・31
D・アンダーソン	〃	大	05・4・1～10・3・31
野越禎子	事	大	05・4・1～現
菅昌弘	〃	大本	05・4・1～現
立川直生	〃	大	05・4・1～現
星野澄子	用	大	05・4・1～現
長沢亜有美	事	本大	05・4・1～現
星野仏方（旧姓布和敖斯尓）	教	大	06・4・1～現

遠井朗子	教	大	06・4・1～現
山口太一	〃	大	06・4・1～現
寺井格	〃	大	06・4・1～現
牧原統	〃	大	06・4・1～現
趙萌	〃	大	06・4・1～11・3・31
村上輝子	〃	大	06・4・1～07・3・31
伊藤俊文	〃	高	06・4・1～現
前原誠也	〃	大	06・4・1～現
菊地誉	〃	高	06・4・1～09・3・31
野坂しおり	〃	高	06・4・1～現
石川佳奈	〃	高	06・4・1～08・3・31
J・M・ヴァンダイク	〃	高	06・4・1～07・3・31
山﨑広子	事	高	06・4・1～09・3・31
樋元淳一	教	大	06・10・1～現
吉田磨	〃	大	06・10・1～現
金田勇	〃	大	07・4・1～現
藤田佳也	〃	大	07・4・1～現
鈴木一由	〃	大	07・4・1～現
栃原孝志	〃	大	07・4・1～現
山田大隆	〃	大	07・4・1～現
安川澄子	〃	大	07・4・1～現
D・A・ミラー	〃	大	07・4・1～12・3・31
髙橋あゆみ	〃	大	07・4・1～08・3・31
島田麻理子	〃	大	07・4・1～09・3・31

小畑 るりこ	教	大	07・4・1～10・3・31	
瀧 佳代子	事	大	07・4・1～08・9・30	
宮本 禎	教	高	07・4・1～現	
肥田 信長	〃	高	07・4・1～現	
中野 軍二	〃	高	07・4・1～08・3・31	
三浦 克樹	〃	高	07・4・1～12・3・31	
伴 翼	〃	高	07・4・1～10・3・31	
小山 嘉宣	事	本	07・4・1～10・3・31	
吉田 剛司	教	大	07・5・1～現	
伊吾田 宏正	〃	大	07・5・1～現	
鈴木 透	〃	大	07・5・1～現	
高橋 圭二	〃	大	08・4・1～現	
打出 毅	〃	大	08・4・1～現	
藤井 創	〃	大	08・4・1～現	
平田 晴之	〃	大	08・4・1～現	
上野 敬司	〃	大	08・4・1～現	
石原 加奈子	〃	大	08・4・1～12・3・31	
安宅 仁人	〃	大	08・4・1～現	
朴 美愛	〃	大	08・4・1～13・3・31	
本田 康夫	〃	大	08・4・1～現	
玉川 真弓	〃	大	08・4・1～現	
赤坂 猛	〃	大	08・4・1～現	
松下 悟	〃	大	08・4・1～09・3・30	
浅野 由貴枝	事	大	08・4・1～現	

篠原 朱輝子	事	大	08・4・1～現	
堀（旧姓 佐藤） 美津穂	〃	大	08・4・1～現	
西川 謙	教	高	08・4・1～現	
金山 文香	〃	高	08・4・1～11・3・31	
成田 康子	〃	高	08・4・1～09・3・31	
本多 明日香	〃	高	08・4・1～11・3・31	
小島（旧姓 佐藤） 比鎖子	事	本	08・4・1～現	
上野 博史	教	大	08・8・1～現	
安藤 貴朗	〃	大	08・9・1～12・3・31	
片桐 成二	〃	大	09・4・1～現	
能田 淳	〃	大	09・4・1～現	
中谷 暢丈	〃	大	09・4・1～現	
遠藤 能史	〃	大	09・4・1～現	
美名口 順	〃	大	09・4・1～現	
小川 巌	〃	大	09・4・1～現	
宮木 雅美	〃	大	09・4・1～現	
三橋 友子	〃	大	09・4・1～10・3・31	
横尾 千尋	〃	大	09・4・1～現	
石岡 祐基	〃	高	09・4・1～10・3・31	
富澤 喬史	〃	高	09・4・1～11・3・31	
志田 和仁	事	本	09・4・1～現	
蓑島 ゆかり	〃	本	09・4・1～現	

小川健太	〃	大	11・4・1～現	
小野静香	〃	大	10・6・1～現	
渡邊淳	〃	高	10・4・1～現	
十河優	〃	高	10・4・1～11・3・31	
河野司	〃	高	10・4・1～13・3・31	
川口貴之	〃	高	10・4・1～現	
庄田弘子	〃	大	10・4・1～現	
三浦豊史	〃	大	10・4・1～11・9・30	
三井友秀	〃	大	10・4・1～現	
（旧姓鈴木）志田理恵	〃	大	10・4・1～現	
高橋直樹	〃	大	10・4・1～現	
佐々木民江	〃	大	10・4・1～現	
干場敏博	〃	大	10・4・1～現	
岡田正裕	〃	大	10・4・1～現	
扇勉	〃	大	10・4・1～現	
三好健二郎	〃	大	10・4・1～現	
安井由美子	〃	大	10・4・1～現	
白石治恵	〃	大	10・4・1～現	
蒔田浩平	〃	大	10・4・1～現	
川邊哲司	〃	大	10・3・1～現	
大久保大悟事	〃	大	09・10・1～13・3・31	
（旧姓金髙）荻原有里	〃	大	09・9・1～現	

山口昭弘	教	大	12・4・1～現	
倉内清貴	技	大	11・10・1～現	
宮庄拓	〃	大	11・10・1～現	
馬場賢治	〃	大	11・5・1～現	
園田高広	〃	大	11・5・1～現	
三浦高譽	〃	高	11・4・1～現	
（旧姓築山）都静華本	〃	高	11・4・1～12・12・31	
張北荔	〃	高	11・4・1～現	
重冨ヒカル	〃	高	11・4・1～12・3・31	
小林正昭	教	高	11・4・1～13・3・31	
（旧姓中村）田端希原	〃	大	11・4・1～13・3・31	
（旧姓松谷）北山有子	技	大	11・4・1～現	
大津円加	〃	大	11・4・1～現	
入江遥	事	大	11・4・1～現	
三木直倫	〃	大	11・4・1～現	
椿下早絵	〃	大	11・4・1～現	
八百坂紀子	〃	大	11・4・1～現	
猫本健司	〃	大	11・4・1～現	
中辻浩喜	〃	大	11・4・1～現	
井上誠治	〃	大	11・4・1～現	
柳京熙	教	大	11・4・1～現	

森志郎	教	大	12・4・1～現
川本哲	〃	大	12・4・1～現
郡山尚紀	〃	大	12・4・1～現
仁科こずえ（旧姓本田）	〃	大	12・4・1～13・1・31
玉利和弘	〃	大	12・4・1～現
品川晴香	事	大	12・4・1～現
森重尚子	〃	大	12・4・1～現
長濵愛	技	大	12・4・1～現
安加奈子	〃	大	12・4・1～現
青羽桃佳	教	高	12・4・1～現
伊藤稔	〃	高	12・4・1～現
田島友晴	教	高	12・4・1～現
大熊成美	〃	高	12・4・1～現
森田努	〃	高	12・4・1～現
吉能康博	〃	高	12・4・1～現
岡島毅	〃	大	12・5・1～現
臼井優	〃	大	12・5・1～現
山田未知	〃	大	12・5・1～現
中港康裕	事	大本	12・10・1～現
森忠大	〃	本	12・10・1～現
佐野忠士	教	大	12・11・1～現
野村正裕	事	本	13・1・1～現
高橋俊彦	教	大	13・4・1～現
今井敬	〃	大	13・4・1～現
小林昭博	〃	大	13・4・1～現
佐藤喜和	〃	大	13・4・1～現
田上貴祥	〃	大	13・4・1～現
佐藤理紗子	〃	大	13・4・1～現
宮崎早花	〃	大	13・4・1～現
玉田哲也	事	大	13・4・1～現
内山由香	〃	大	13・4・1～現
花田愛	〃	大	13・4・1～現
廣嶋彩子	〃	大	13・4・1～現
稲森剛	技	大	13・4・1～現
上原恒一郎	〃	大	13・4・1～現
赤羽克美	〃	大	13・4・1～現
高野加奈	〃	大	13・4・1～現
野口郁子	用	大	13・4・1～現
岩井眞	教	高	13・4・1～現
家山麻希	〃	高	13・4・1～現
加藤啓	〃	高	13・4・1～現
吉川明花	〃	高	13・4・1～現

付3　酪農学園80年史主要年表

注・学術交流協定締結は海外のみとした

年代	酪農学園関係事項	一般関係
1933年〔昭和8年〕	6・～ 酪連役員会において「北海道酪農義塾」の設置を決定 10・1 札幌村苗穂に北海道酪農義塾を設置 理事長に北海道長官佐上信一就任。酪農と製酪に関する短期講習（修業期間1カ月＝酪連職員対象）を開始	3・27 日本国際連盟を脱退
1934年[1]〔昭和9年〕	2・11 北海道酪農義塾酪農科と製酪科（修業年限各1カ年）を設置し、入塾式を挙行 4・～ 北海道酪農義塾苗穂の酪連用地に第1農場を開設。同時に札幌村三角に農地11haを取得し、第2農場を開設	3・21 函館市大火
1935年[2]〔昭和10年〕		4・～ 青年学校令公布
1936年[3]〔昭和11年〕	7・13 北海道酪農義塾社団法人の許可を受け、理事長に黒澤酉蔵就任 12・1 北海道酪農義塾に冬期学校を設置し、短期講習を開始（昭和19年まで継続実施）	2・26 二・二六事件が起こる 4・18 国号を「大日本帝国」に統一
1937年[4]〔昭和12年〕	4・～ 札幌郡白石村野津幌の出納農場跡地21haを借り受け北海道酪農義塾酪農科経営農場を開設し、第1農場を移す	5・～ パリ万国博開催 7・7 日華事変起こる
1938年[5]〔昭和13年〕	2・1 北海道酪農義塾冬期学校に女子部を開設 2・11 北海道酪農義塾に皮革科を併置（昭和14年廃止） 10・～ 札幌村三角の農場用地を酪連に譲渡し、酪農義塾酪農科の塾舎と第2農場を白石村野津幌に移す	5・～ 国家総動員法公布 8・～ 北海道開道70年祭開催

1939年〔昭和14年〕	5・20	北海道酪農義塾、酪連より基本財産として現金10万円と別海村奥行臼、苫小牧市植苗の農地、原野ならびに福島町の造林地の寄付を受ける
1940年〔昭和15年〕	3～12	江別町西野幌の宅地と農地160haを学校用地として購入
1941年〔昭和16年〕	3・30	「野幌機農学校」の設置認可
1942年〔昭和17年〕	3・31	財団法人興農義塾野幌機農学校設立認可を受け、黒澤酉蔵理事長に就任
1943年〔昭和18年〕	6・18	江別町西野幌の仮校舎において野幌機農学校の開校式を挙行
1944年〔昭和19年〕	2～	北海道酪農義塾第10回卒業式をもって閉塾
1945年〔昭和20年〕	3・31	社団法人北海道酪農義塾を解散
	4～	太平洋戦争厳しさ増し、野幌機農学校教職員の応召者23名に達する
	5・20	野幌機農学校教職員生徒18名を日本軍現地自活指導のため千島に派遣（同年7月15日帰校）
1946年〔昭和21年〕	3・31	財団法人興農義塾野幌機農学校理事長黒澤酉蔵退任し、青山永理事長に就任
	9・1	財団法人興農義塾野幌機農学校理事会、教育の指導理念をキリスト教の聖書に置く方針を決定
	5・11	ノモンハン事件起こる
	7・8	国民徴用令公布
	10・12	大政翼賛会結成
	12・28	北海道興農公社設立
	6～	日本キリスト教団設立
	10・23	酪連解散
	12・8	太平洋戦争起こる
	2・21	食糧管理法公布
	3・11	農業団体法公布
	8・23	学徒動員令、女子挺身隊勤労令施行
	8・6	広島、長崎（8・9）被爆
	8・8	ソ連対日宣戦布告
	8・15	日本ポツダム宣言を受諾して無条件降伏
	2・20	ソ連、樺太、千島の領有を宣言
	11・3	日本国新憲法公布

1947年	4・1	野幌機農学校に研究科と選科（各修業年限1カ年）を併置
14〔昭和22年〕	7・～	北酪社より江別乳製品工場を無償にて譲り受ける（営業は北酪社に委託）
1948年	3・31	学制改革により野幌機農学校、高等学校（全日制農業課程）としての認可を受け、4月1日開校
15〔昭和23年〕	4・1	「野幌機農高等学校」、研究科、選科を廃止して、別科（修業年限1カ年）を江別町元野幌、苫小牧市植苗、標津町川北の各地方農場に併置、授業を開始
	4・～	野幌機農高等学校に通信教育酪農科（修業年限2カ年）を併置し、7月開講
	7・～	「酪農学園事業部」発足
	8・1	「野幌高等酪農学校」（通信教育・酪農科）開校。野幌機農高等学校から通信教育を引き継ぎ独立
	12・27	野幌高等酪農学校、各種学校として設立認可
1949年	3・31	野幌機農高等学校、標津町川北の別科を廃止
16〔昭和24年〕	4・1	野幌機農高等学校元野幌農場内に農機科（修業年限1カ年）を併置
	5・～	財団法人興農義塾野幌機農学校の名称を「財団法人酪農学園」に変更し、12月12日変更認可
	5・12	酪農学園理事長青山永退任し、佐藤善七が理事長に就任
	7・11	「酪農学園大学部（修業年限2カ年）」を開学し、9月6日各種学校として設置認可
	9・20	野幌機農高等学校火災により校舎・施設を全焼。直後、復興後援会を組織し募金活動を開始

	4・1	六・三・三制教育実施
	5・3	新憲法施行
	4・～	新制大学発足
	7・29	ロンドンオリンピック開催
	11・～	東京裁判開廷
	11・3	湯川秀樹日本人初のノーベル物理学賞受賞

1950年 17〔昭和25年〕	3・14	「酪農学園短期大学」酪農科設置認可を受け、4月1日開学
	3・31	酪農学園大学部を廃止
	4・1	野幌機農高等学校内に別科を併置
	4・15	野幌機農高等学校第5農場の希望寮焼失
	5・〜	江別乳製品工場を酪農学園で直営、同時に酪農学園短期大学の附属実習工場となる
	7・1	財団法人酪農学園事務局を設置
	8・10	酪農学園短期大学において三愛塾を開設(昭和38年まで継続実施)
	12・22	酪農学園に学園長制度を新設し、初代学園長に黒澤酉蔵就任
1951年 18〔昭和26年〕	1・10	財団法人酪農学園を「学校法人酪農学園」に変更。2月24日変更認可
	3・〜	野幌高等酪農学校校舎新築なる(レンガ建中2階593平方メートル)
	4・1	野幌高等酪農学校に家庭科(通信教育・修業年限2カ年)を併置
	6・20	酪農学園役員機構を変更し、専務理事に樋浦誠、常務理事に川村秀雄就任
1952年 19〔昭和27年〕	7・25	野幌機農高等学校開校10周年記念式典を挙行
	1・7	新千円札発行
	3・15	私立学校法施行
	4・1	短期大学制度発足
	5・1	北海道開発庁発足
	6・25	朝鮮戦争起こる
	9・8	対日講和条約・日米安全保障条約調印
	2・14	オスロ冬季オリンピック開催
	4・28	講和条約発効
	4・〜	公職追放令廃止
	6・〜	中央教育審議会設置
	7・19	ヘルシンキオリンピック開催

1953年	4・1	野幌機農高等学校に農業協同組合科（修業年限3カ年）を併置
20〔昭和28年〕		
1954年	4・～	酪農学園短期大学学則の一部変更
21〔昭和29年〕	11・～	野幌機農高等学校生徒会、全校ストライキに入る（翌年1月解除）
1955年	2・8	「野幌機農自動車学校」、各種学校として設置認可を受け、7月開校
22〔昭和30年〕	3・31	野幌機農高等学校、別科と農機科を廃止
1956年	4・1	野幌機農高等学校農業協同組合科の名称を「農村経済科」に変更
23〔昭和31年〕	7・1	樋浦誠酪農学園専務理事を退任
1957年	2・2	酪農学園理事長佐藤善七死去により、2月7日黒澤酉蔵再び理事長に就任
24〔昭和32年〕	6・1	野幌高等酪農学校開校10年記念式典を挙行
	6・10	黒澤酉蔵私財を拠出して「酪農育英会」を設立し、12月27日財団法人として認可を受ける
	7・23	酪農学園常務理事に西本宗信就任
1958年	2・14	「酪農学園女子高等学校」（全日制普通課程）設置認可を受け、4月21日開校
25〔昭和33年〕		

	8・5	日華平和条約発効
	6・8	朝鮮戦争休戦
	3・～	米、ビキニ環礁で水爆実験
	6・14	酪農振興法公布
	9・27	15号台風により洞爺丸沈没
	1・26	コルチナダンペッツォ冬季オリンピック開催
	10・19	日ソ国交回復
	11・22	メルボルンオリンピック開催
	12・18	日本国際連合に加盟

1959年[26]（昭和34年）	12・20	酪農学園理事会、「酪農学園大学」の設置を決定
1960年[27]（昭和35年）	1・20	酪農学園大学酪農学部酪農学科設置認可を受け、4月20日開学（定員100名）
	3・21	酪農学園女子高等学校の名称を「三愛女子高等学校」に変更認可。4月1日変更
	4・6	酪農学園常務理事川村秀雄が専務理事に就任
	5・31	「酪農学園後援会」設立、会長に町村金五就任
	8・30	酪農学園大学第1校舎落成
	9・7	酪農学園短期大学開学10年記念式典を挙行
1961年[28]（昭和36年）	4・～	酪農学園大学、同短期大学学生自治会発足
1962年[29]（昭和37年）	2・10	酪農学園大学酪農学部酪農学科に教職課程認定（中学・高校理科・高校農業）
	2・27	「酪農学園職員組合」結成
	3・23	酪農学園短期大学に製造科設置認可を受け、4月開設
	3・30	野幌高等酪農学校に通信教育酪農講座、酪農経営研究講座開講認可
	3・31	酪農学園大学、同短期大学附属乳製品工場を雪印乳業株式会社に売却
	10・10	野幌機農高等学校第1校舎落成
	10・14	酪農学園創立30周年、野幌機農高等学校開校20周年記念式典および「黒澤西蔵寿像」除幕式を挙行

	8・～	国際教育会議東京において開催
	2・18	スコーバレー冬季オリンピック開催
	6・23	日米新安全保障条約発効
	8・25	ローマオリンピック開催
	4・～	ソ連のガガーリン少佐がボストーク1号で人類初の軌道飛行に成功
	10・～	キューバ危機が起こる

1963年	12・20	酪農学園大学酪農学部に「農業経済学科」設置認可、昭和38年4月開設
30〔昭和38年〕	4・1	野幌機農高等学校、農業科と農村経済科を統合して「酪農経営科」に変更
1964年	1・27	酪農学園大学酪農学部「獣医学科」設置認可を受け、4月開設
31〔昭和39年〕	4・1	「酪農学園中央農場」発足
	4・1	酪農学園短期大学製造科学生の募集を停止して、酪農科に季節制(修業年限3カ年)を増設、従来の全日制を第1コース、季節制を第2コースと改称
		野幌高等酪農学校副教材「酪農の学校」を「近代酪農」(月刊)に改め、全国に販賦する
	5・1	樋浦誠学長更迭をめぐって酪農学園大学、同短期大学自治会全学ストライキに入る(6月29日解除)
	6・16	野幌機農高等学校を「酪農学園機農高等学校」に、野幌高等酪農学校を「酪農学園短期大学酪農学校」に、野幌機農自動車学校を「酪農学園自動車学校」にそれぞれ校名変更認可
1965年	3・1	酪農学園大学酪農学部農業経済学科に教職課程認定(中学・高校社会)
32〔昭和40年〕	3・1	酪農学園大学酪農学部酪農学科に教職課程(聴講生の課程)認定
	4・19	酪農学園副理事長制度を新設し、専務理事制を廃止する。佐藤貢副理事長に、また川村秀雄常務理事に就任
	10・30	酪農学園大学獣医2号館落成

	11・～	米大統領J・F・ケネディ暗殺される
	1・29	インスブルック冬季オリンピック開催
	10・10	東京オリンピック開催

1966年〔昭和41年〕	6・1	学園事業部を分離して「クロバー食品株式会社」設立
	12・19	酪農学園理事長黒澤酉蔵退任し、佐藤貢理事長に、川村秀雄副理事長に就任
1967年〔昭和42年〕	6・14	酪農学園常務理事西本宗信退任し、菊地正一常務理事に就任
1968年〔昭和43年〕	7・17	中央農場長　野喜一郎死去、7月20日酪農学園葬を実施
	11・7	三愛女子高等学校開校10周年記念式典を挙行
	11・19	酪農学園大学酪農学部酪農学科に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設認定
1969年〔昭和44年〕	11・18	酪農学園後援会、財団法人として認可
	12・20	「酪農学園だより」創刊
1970年〔昭和45年〕		
1971年〔昭和46年〕	1・3	酪農学園大学、同短期大学学長橋本吉雄逝去、1月19日酪農学園葬を実施
	12・〜	学費改定、学長選任規定等をめぐって酪農学園大学、同短期大学学生自治会全学ストライキに入る（翌年2月解除）
1972年〔昭和47年〕	3・31	酪農学園短期大学製造科廃止認可
	6・10	三愛女子高等学校前校長宮古哲雄逝去、6月12日酪農学園葬を実施
	6・21	酪農学園副理事長川村秀雄退任

	2・6	グルノーブル冬季オリンピック開催
	5・16	北海道十勝沖地震
	10・12	メキシコシティーオリンピック開催
	1・〜	大学管理法案をめぐって全国的に大学紛争激化
	7・〜	米宇宙船アポロ11号、人類初の月面着陸に成功
	3・〜	大阪で日本万国博覧会開催
	2・3	札幌冬季オリンピック開催
	5・15	沖縄、日本に復帰
	8・26	ミュンヘンオリンピック開催

	8・31	酪農学園大学酪農1号館落成
	10・9	酪農学園機農高等学校開校30周年記念式典を挙行
	10・27	酪農学園短期大学酪農学校酪農経営研究講座を「農業経営講座」に変更認可
1973年〔昭和48年〕	6・23	「酪農学園同窓会連合会」発足。会長に中西文雄就任
	10・1	酪農学園創立40周年記念式典を挙行
	10・16	「北海道アルバータ酪農科学技術交流協会」を酪農学園内に設立
	12・25	三愛女子高等学校開校15周年記念式典を挙行
1974年〔昭和49年〕	4・〜	酪農学園短期大学に生活科学専攻コース新設
1975年〔昭和50年〕	3・25	酪農学園大学院獣医学研究科獣医学専攻修士課程設置認可、4月開設
	7・31	酪農学園大学、同短期大学附属図書館落成
	8・31	酪農学園大学獣医1号館落成
1976年〔昭和51年〕	3・31	酪農学園中央農場を廃止
	6・30	酪農学園自動車学校を廃止（翌年1月13日北海道教育委員会認可）
1977年〔昭和52年〕	7・11	酪農学園常務理事菊地正一退任し、小林哲威常務理事に就任
	12・6	酪農学園理事会長期財務計画を決定

	9・29	日中国交回復
	10・〜	石油ショック始まる
	2・4	インスブルック冬季オリンピック開催
	2・4	米国上院多国籍企業小委員会でロッキード事件が暴露
	7・17	モントリオール・オリンピック開催

1978年〔昭和53年〕[45]	4・1	酪農学園大学酪農学部獣医学教育6年制に移行
	8・27	三愛女子高等学校20周年記念式典を挙行
	11・20	三愛女子高等学校移転に伴う新校舎の起工式を挙行
1979年〔昭和54年〕[46]	6・18	酪農学園副理事長に山本庸一、常務理事に鈴木徳信就任
	6・18	酪農学園に副学園長制度を新設し、遊佐孝五副学園長に就任
	9・4	酪農学園大学、同短期大学附属農場牛舎火災により施設、設備を全焼（12月復旧）
	11・15	三愛女子高等学校の校舎、施設落成により西野幌へ移転を完了し、12月1日落成式を挙行
1980年〔昭和55年〕[47]	7・13	北海道酪農義塾、酪農学園機農高等学校卒業生と五寮会有志学園用地内に「野喜一郎顕彰碑」を建立
	7・30	酪農学園大学、同短期大学酪農2号館完成し、8月11日落成式を挙行
	8・30	酪農学園大学開学20周年、同短期大学開学30周年記念式典を挙行
	9・1	「酪農学園史二」刊行
	11・22	植苗農場牛舎と付帯施設完成
1981年〔昭和56年〕[48]	3・26	酪農学園大学大学院獣医学研究科獣医学専攻博士課程および酪農学研究科酪農学専攻修士課程設置認可、4月開設
	3・31	酪農学園常務理事鈴木徳信退任
	8・17	酪農学園大学獣医3号館完成、落成式を挙行
1982年〔昭和57年〕[49]	2・6	酪農学園園長黒澤酉蔵逝去。2月26日酪農葬、3月1日、追悼礼拝を挙行
	6・18	酪農学園機農高等学校開校40周年記念式典を挙行

	2・13	レークプラシッド冬季オリンピック開催
	7・19	モスクワオリンピック開催
	8・3	集中豪雨で石狩川はんらん

6・30 酪農学園理事長佐藤貢が酪農学園長を兼任
12・13 酪農学園将来計画推進委員会を発足。12月18日酪農学園将来計画案策定

1983年〔昭和58年〕50

4・1 三愛女子高等学校普通科に英語コース設置
6・30 酪農学園常務理事小林哲威退任し、濱本恒男常務理事に就任
10・1 酪農学園創立50周年記念式典を挙行、同記念史刊行

1984年〔昭和59年〕51

1・10 三愛女子高等学校英語科増設認可、4月開設
2・22 酪農学園機農高等学校を「酪農学園大学附属高等学校」に校名変更認可
3・31 酪農学園短期大学酪農科2コースの学生募集を停止
7・10 酪農学園短期大学教養館完成、落成式を挙行
8・20 酪農学園大学農業経済学科館完成、落成式を挙行
12・6 「黒澤記念講堂」完成、落成式を挙行
12・22 酪農学園短期大学を「北海道文理科短期大学」に校名変更認可

1985年〔昭和60年〕52

4・1 北海道文理科短期大学教養学科増設認可、4月開設
9・14 酪農学園学園長に遊佐孝五就任

1986年〔昭和61年〕53

8・27 酪農学園大学野球場完成
酪農学園大学獣医2号館完成、落成式を挙行

1987年〔昭和62年〕54

2・2 酪農学園ホール完成、落成式を挙行
12・23 酪農学園大学酪農学部食品科学科増設認可、4月開設

2・8 サラエボ冬季オリンピック開催
7・28 ロサンゼルスオリンピック開催

3・16 筑波科学万国博開催
1・28 米国スペースシャトル・チャレンジャー号爆発
4・26 ソ連でチェルノブイリ原発事故

1988年〔昭和63年〕[55]	3・17	三愛女子高等学校を男女共学制に。それに伴い「とわの森三愛高等学校」に校名変更認可
	8・3	酪農学園大学酪農2号館完成、落成式を挙行
	9・1	酪農学園大学第2体育館完成、落成式を挙行
	4・1	酪農学園大学エクステンションセンター開設
1989年〔平成1年〕[56]	6・1	酪農学園常務理事濱本恒男退任し、牛島純一常務理事に就任
	9・1	酪農学園大学獣医4号館完成、落成式を挙行
	12・22	北海道文理科短期大学経営情報学科増設認可、4月開設
1990年〔平成2年〕[57]	1・22	北海道文理科短期大学経営情報館完成、落成式を挙行
	8・〜9・14	獣医学科25周年記念誌を刊行
		北海道文理科短期大学40周年、酪農学園大学30周年記念式典を挙行
	9・28	酪農学園本館定礎式を挙行
	11・27	酪農学園大学肉製品実験実習室完成
	12・21	酪農学園大学の期間を付した入学定員の増加に係る学則の変更認可
1991年〔平成3年〕[58]	1・11	酪農学園大学附属高等学校およびとわの森三愛高等学校廃止認可。統合した「とわの森三愛高等学校」設置認可
	1・11	酪農学園短期大学酪農学校(通信教育)廃止認可
	2・27	酪農学園大学教員の免許状授与の所要資格を得させるための課程設定
	3・20	酪農学園大学大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻博士課程設置認可、4月開設
	2・13	カルガリー冬季オリンピック開催
	3・13	青函トンネル開業
	9・17	ソウルオリンピック開催
	1・7	昭和天皇崩御。新元号は平成と決定
	4・1	消費税がスタート
	1・13	大学入試センター試験
	6・29	生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律公布
	10・3	ベルリンの壁崩壊、統一ドイツ誕生
	12・2	秋山豊寛、日本人初の宇宙飛行
	1・17	湾岸戦争突入
	2・8	大学審議会答申「大学教育の改善について」など
	5・17	大学審議会答申「平成5年度以降の高等教育の計画的整備について」など
	5・29	長崎県の雲仙・普賢岳噴火

6・3　米国コーネル大学と学術交流協定を締結
7・1　酪農学園理事長佐藤貢退任、名誉理事長制度を新設し佐藤貢就任、遊佐孝五理事長に就任、高田哲夫副理事長に就任、牛島純一学園長に就任、菊池利治常務理事に就任
7・31　酪農学園本館完成、落成式を挙行
12・20　酪農学園大学・同短期大学附属農場教育棟完成

1992年 59〔平成4年〕

2・29　酪農学園教職員組合30周年記念式典
8・31　教学事務電算化完成、運用開始
酪農学園大学獣医学科大動物臨床センター完成、落成式を挙行

1993年 60〔平成5年〕

3・2　経営情報館増築完工
8・6　酪農学園退職者による「貴農同志会」が発足
9・30　酪農学園創立60周年学内記念式典を挙行、同講演会を開催
10・1　酪農学園創立60周年記念式典、同祝賀会を挙行、同記念誌刊行
10・23　酪農学園大学、同短期大学馬術部馬場（6000㎡）が完成
11・27　農業経済学科創設30周年記念式典
12・21　酪農学部食品流通学科増設認可、4月開設
中国内蒙古哲里木畜牧学院と学術交流協定を締結

大学設置基準、短期大学設置基準、学位規則の一部改正
11・25　大学審議会答申「大学院の量的整備について」
2・8　アルベールビル冬季オリンピック開催
6～7・25　PKO法案可決
バルセロナオリンピック開催
9・12　毛利衛スペースシャトル・エンデバー号で宇宙へ
1・1　EC市場の統合
2・12　高等学校教育の改革に関する会議第四次報告「総合学科について」
3・10　学校教育法施行規則の一部改正（単位制高校、調査書なしの高校入学者選抜、高校間連携、総合学科開設等）
7・12　北海道南西沖地震

1994年	2・28	食品流通館完成、落成式を挙行
61〔平成6年〕	3・4	フィリピン大学ロス・パーニョス校と学術交流協定を締結
	5・19	ポーランド・ワルシャワ農業大学と学術交流協定を締結
	10・1	酪農学園大学・同短期大学事務部と学園事務局の業務関係事務を統合
	10・14	韓国　安城産業大学校と学術交流協定を締結
1995年	1・31	教養館完成、落成式を挙行
62〔平成7年〕	2・15	デンマーク国立畜産研究所と学術交流協定を締結
	3・16	大学院酪農学研究科フードシステム専攻修士課程増設認可
	4・1	酪農学園大学・同短期大学教務部入試課を入試部入試課に、教務部に教務課と学務課を併置 学生部就職課を就職部就職課に、厚生課を学生課に統合 黒澤力太郎酪農学園学園長に就任。平尾和義酪農学園副理事長に就任
1996年	12・22	獣医学部獣医学科設置認可（酪農学部獣医学科改組）
63〔平成8年〕	10・7	クロバー食品株式会社解散登記

	2・12	リレハンメル冬季オリンピック開催
	6・21	専修学校設置基準の一部改正（「専門士」の称号新設）
	7・8	向井千秋宇宙飛行士、日本人女性初の宇宙飛行
	10・4	北海道東方沖地震
	11・24	学校教育法施行規則の一部改正（学校週五日制次年度から月2回実施）
	1・17	阪神淡路大震災
	3・20	オウム真理教地下鉄サリン事件
	10・22	国連創立50周年記念総会開幕
	12・8	高速増殖炉「もんじゅ」事故発生
	2・10	豊浜トンネル崩落事故
	7・19	アトランタオリンピック開催
	8・27	教育課程審議会発足

1997年
64〔平成9年〕
7・31 中国　新疆農業大学と学術交流協定を締結
11・30 中華民国　国立嘉義技術学院と学術交流協定を締結
12・19 環境システム学部経営環境学科、地域環境学科設置認可、4月開設
北海道文理科短期大学を「酪農学園大学短期大学部」に校名変更。酪農学園短期大学部酪農科を「酪農学科」に学科名称変更および収容定員変更認可
1998年
65〔平成10年〕
4・6 酪農学園大学中央館完成、落成式を挙行
5・7 カナダ　オールズ・カレッジと学術交流協定を締結
8・31 中華民国　国立屏東科技大学と学術交流協定を締結
12・17 米国　オハイオ州立大学食品農業環境科学部と学術交流協定を締結
1999年
66〔平成11年〕
7・1 平尾和義酪農学園理事長に就任、高橋節郎副理事長に就任
9・26 酪農学園名誉理事長佐藤貢逝去
9・27 雪印乳業株式会社札幌研究所と連携大学院の協定を締結
11・24 乳牛糞尿循環研究センター落成
12・22 酪農学園大学短期大学部教養学科、経営情報学科廃止認可
2000年
67〔平成12年〕
3・17 北海道立食品加工センターと連携大学院の協定を締結
3・21 酪農学研究科フードシステム専攻修士課程に高等学校教諭専修免許（商業）の課程認定
5・26 短大50周年・大学40周年記念式典を挙行
8・8 黒澤酉蔵銅像を黒澤記念講堂前に移設
9・30 インテリジェント牛舎完成、落成式を挙行
4・1 消費税率5％がスタート
10・30 町村文相「21世紀の大学像」を大学審に諮問
11・17 北海道拓殖銀行破綻
12・3 省庁再編で文部省は科学技術庁と統合し「教育科学技術省」へ
2・7 長野冬季オリンピック開催
10・26 大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」
8・9 大学審議会答申「大学院入学者選抜の改善について」
3・31 有珠山噴火
7・2 雪印大阪工場で乳飲料が問題化
9・15 シドニーオリンピック開催
12・22 中央教育審議会まとめ「新しい時代における教養教育の在り方について」

	10・18	酪農学部食品科学科にフードスペシャリスト養成課程設置認可、4月開設
2001年	1・22	ドイツ・ハノーバー獣医科大学と学術交流協定を締結
68〔平成13年〕	3・19	酪農学園大学酪農学部食品科学科に食品科学専攻および健康栄養学専攻設置認可、4月開設
	9・1	企画推進部を廃止。総務部、財務部（新設）の2部4課体制に再編。大学学務部（新設）に学事課と学務課（教務から移管）を設置
	10・13	とわの森三愛高等学校10周年（統合）記念式典を挙行
2002年	8・28	弓道場完成
69〔平成14年〕	10・28	酪農学園大学酪農学部獣医学科廃止認可
	12・18	研修館完成
	12・19	酪農学園大学大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻（修士課程および博士課程）設置認可
2003年	1・30	中央講義棟竣工
70〔平成15年〕	9・30	酪農学園創立70周年学内記念式典を挙行、同講演会を開催
	10・1	酪農学園創立70周年学外記念式典、祝賀会を挙行
		「酪農学園史二」刊行
2004年	2・28	附属動物病院竣工
71〔平成16年〕	3・20	健身館竣工
	5・28	附属動物病院の落成記念式典・祝賀会
	7・9	遊佐孝五前理事長、酪農学園葬
	11・17	酪農学園大学環境システム学部環境マネジメント学科・生命環境学科設置認可

	5・2～	日本初の牛海綿状脳症（BSE）発生
	9・11	米中枢同時テロ発生
	1・1	EUの統一通貨ユーロ流通開始
	2・8	ソルトレークシティー冬季オリンピック開催
	7・16	国立大学法人法成立
	12・1	地上デジタル放送開始
	1・12	国内で79年ぶりの鳥インフルエンザ発生
	12・26	インドネシア・スマトラ島沖でM9・0の地震発生、大津波で12万人が犠牲

12・15 農経館エレベーター設置、食品流通館エレベーター設置

2005年〔平成17年〕[72]

12・20 トレーニングセンター竣工

2・10 酪農学園大学環境システム学部経営環境学科学生募集停止

4・1 内部監査室を新設

4・11 アメリカ　フィンドレー大学と学術交流協定を締結

6・21 デンマーク　コペンハーゲン大学生命科学部と学術交流協定を締結

10・1 総務部・財務部から、大学・短大業務部（庶務課・業務課、システム支援課）、事務局総務企画課（新設）および施設管理課に再編

2006年〔平成18年〕[73]

2・28 健音館竣工

3・10 第3校舎竣工

5・11 アメリカ　モンタナ州立大学と学術交流協定を締結

5・31 緑音館竣工

7・24 カナダ　サスカチュワン大学と学術交流協定を締結

4・1 酪農学園大学、（財）日本高等教育評価機構による第三者評価の結果、適格と認定。短期大学部、（財）短期大学基準協会による第三者評価の結果、適格と認定

7・1 酪農学園理事長平尾和義が退任し麻田信二が理事長に就任。学園長黒澤力太郎退任し原田勇が学園長に就任。高橋節郎副理事長退任し金川幹司が副理事長に。常務理事渡辺誠治退任し、仙北富志和、日下雅順常務理事に就任

7・1 総務企画課・施設管理課を総務部（総務課、システム支援課）および財務部（財務課・施設管理課）に再編

2・16 CO_2削減京都議定書発効

6・17 食育基本法公布

12・15 改正教育基本法成立

5・15 国民投票法が成立

	8・15	台湾　国立中興大学と学術交流協定を締結
	8・31	肉牛研究会牛舎竣工
	10・1	酪農学園事務組織が改編され、「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」を新設
	10・1	組織改編により業務部を事務局へ業務統合
	10・25	インド　アラハバード農業大学と学術交流協定を締結
	10・31	元野幌農場肉牛教育事業に伴う牛舎他完成
2008年		
75〔平成20年〕		
2009年	3・23	モンゴル農業大学と学術交流協定を締結
76〔平成21年〕	10・1	財務部に資産管理課準備室、教育センター準備室および資産管理課準備室設置
	10・8	カザフスタン国立大学、カザフスタン国立バイオセンターと学術交流協定を締結
	11・16	元野幌農場肉牛教育事業に伴う農機具庫他完成
2010年	3・5	高大共同女子寮清温寮竣工、開寮式
77〔平成22年〕	4・1	とわの森三愛高等学校、酪農学園大学附属高校に。酪農経営科を「アグリクリエイト科」に、普通科を5コース制にし、新たに通信教育制を導入
	4・1	学事課（学務部）を学務課へ統合。財務部資産管理課準備室を資産管理課へ
	4・23	酪農学園大学農食環境学群および獣医学群の設置届出
	10・1	郵政民営化スタート
	5・2	ミャンマーで大型サイクロン、13万人が犠牲
	5・12	中国・四川省で大地震、8万人超が犠牲
	5・21	裁判員制度がスタート
	9・16	国内で新型インフルエンザが大流行
	3・～	3月から7月にかけて宮崎県口蹄疫発生。牛豚など28万頭を殺処分

2011年〔平成23年〕[78]

4・1 酪農学園大学酪農学部酪農学科・農業経済学科・食品科学科
食品科学専攻・食品科学科健康栄養学専攻・食品流通学科、
獣医学部獣医学科、環境システム学部環境マネジメント学科・
地域環境学科・生命環境学科の学生募集停止
4・1 酪農学園大学短期大学部酪農学科の学生募集停止
4・1 酪農学園大学2学群5学類体制最初の入学生
9・17 酪農短期大学部60周年、酪農学園大学50周年記念式典挙行
9・30 とわの森三愛高等学校20周年記念式典挙行
11・6 「酪農讃歌」歌碑黒澤記念講堂前に設置

2012年〔平成24年〕[79]

3・21 酪農学園大学短期大学部最後の卒業式
10・12 酪農学園大学短期大学部廃止認可
12・16 原田勇酪農学園学園長逝去（13・1・29 黒澤記念講堂で追悼礼拝）
12・ とわの森三愛高等学校南棟完成

2013年〔平成25年〕[80]

2・15 酪農学園大学短期大学部閉校記念式典
2・19 牛島純一元酪農学園学園長逝去
2・ 繋ぎ飼い牛舎が完成
6・1 酪農学園学園長に仙北富志和就任
6・ 機農ファーム牛舎解体
9・28 短期大学閉校記念石碑の除幕式
9・30 酪農学園創立80周年学内記念式典を挙行
10・1 酪農学園創立80周年記念式典、祝賀会を挙行
「酪農学園史三」刊行

3・11 東日本大震災発生

7・27 ロンドンオリンピック開催

編集後記

酪農学園の歩みの記録は、これまで１９８０(昭和55)年に「酪農学園史」、２００３(平成15)年に「酪農学園史二」が刊行され、そのほかに大学や短大、高校などの節目節目で記念誌や写真集などが刊行されてきた。いずれも苦難の道を歩みながらも、前途の灯りを目指して奮励した先達の思いと労苦を後世に伝え残すことへの熱い願いが込められている。

このたび刊行となった「酪農学園史三」は、「二」の刊行から10年しか経っていないが、学園創立80周年の記念すべき時を捉えて、その歩みを再整理しようとの麻田信二理事長の強い判断によるものと承知している。

私は、これまでの学園史の刊行に際し、当時学園長として編纂の筆を執った黒澤力太郎先生の下で、資料の収集や整理のお手伝いをし、さらに「三」の編纂に際しても関わりの機会を与えられた。酪農学園で学び、長くお世話になった者として、感謝の限りである。申し上げるまでもなく学園を取り巻く情勢は、世情の動きと同様にその変化には激しいものがある。わずかここ10年間だけでも、その足跡の記録はあっという間に散逸しがちである。その意味においても、このたびの再整理は意味を持つものと解している。

「酪農学園史三」は、これまでの学園史をも踏まえ、80年の歴史を通読できるものに意を配しながら、学園の発展過程と現状を収録したが、必要に応じ前刊も合わせて参照されたい。特に創立者黒澤酉蔵翁の今に生きる「農民教育に生涯を掛けた」思いと「遺訓」の幾つかを収録したので、学園の将来を担う方々の糧になることを願っている。また、学園創立時からの貴重な写真で綴った「写真が語る酪農学園史」にも多くの頁を用い、ＤＶＤも作製した。

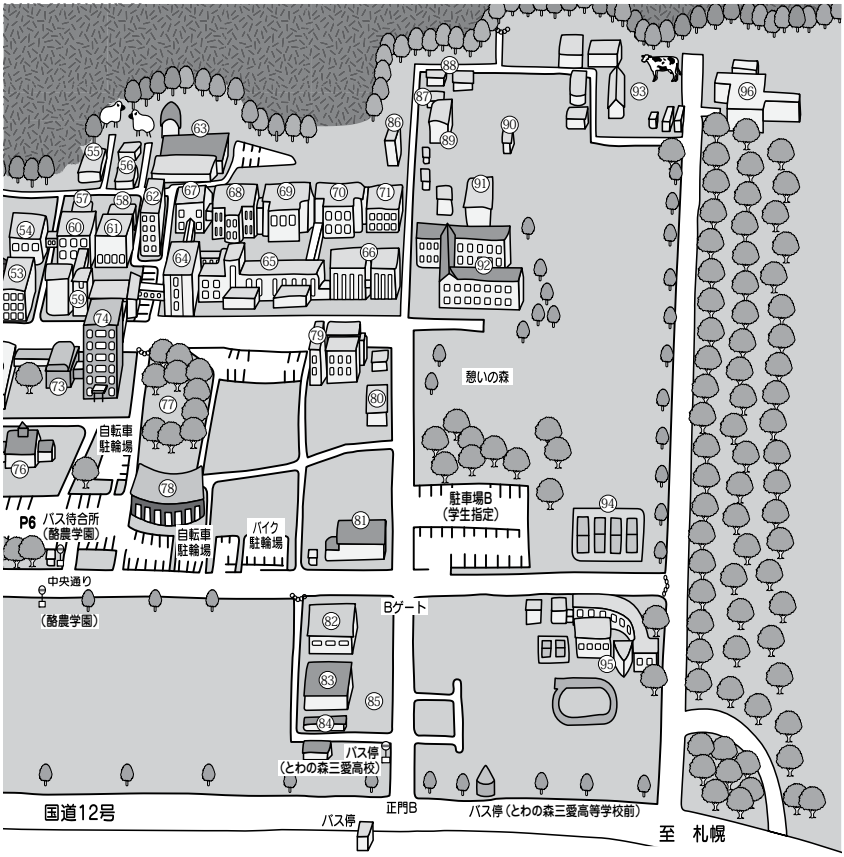
刊行に当たっては、主筆の仙北富志和学園長をはじめ、急逝された原田勇前学園長など、多くの方にご指

導いただいた。紙面を借りて感謝し、印刷の労をいただいた社会福祉法人北海道リハビリーの方々にもお礼申し上げる。多々あるであろう不備な点はご容赦願いたい。酪農学園の悠久の発展を念じつつ筆をおく。

（長野徳之 記）

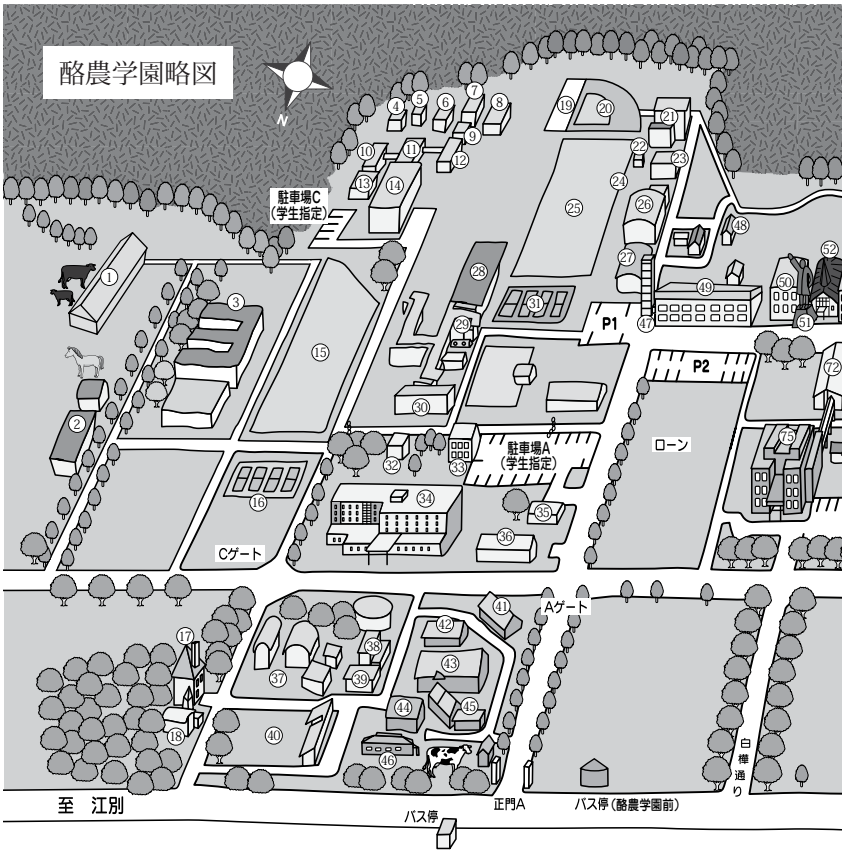
主な参考資料

北海道農業発達史 上巻（北海道立総合農業研究所 １９６３） 北海道酪農百年史（木村勝郎 １９８５） 雪印乳業史第一巻（雪印乳業史編纂委員会 １９６０） 石黒忠篤の農政思想（大竹啓介 １９８４） 宇都宮仙太郎（黒澤西蔵 １９５８） 空樽自鳴・宇都宮仙太郎物語（宇都宮勤 １９８１） 出納陽一氏の面影（刊行会 １９７７） 黒澤・佐藤・瀬尾先生講演録（雪の会 １９７６） 酪農語録（高宮英俊 ２００８） 農村青年と科学（樋浦誠 １９４８） 求めよさらば与えられん―樋浦先生遺稿・追憶集―（刊行会 １９９２） 酪農学園の歴史と使命（黒澤西蔵 １９７０） 反芻自戒（黒澤西蔵 １９７２） 北海道開発回顧録（黒澤西蔵 １９７５） 私の履歴書（黒澤西蔵 １９７５） 健やかな土（黒澤西蔵 １９８９） 農業国デンマーク（黒澤西蔵 １９５２） 皇道農業（黒澤西蔵 １９４４） 黒澤西蔵（青山永 １９６１） 田中正造全集１・８巻（編纂会 １９７７） デンマーク復興の父・グルンドウィ傳（出納陽一 １９５３） 天地人・佐藤貢の生涯と追憶（佐藤巌 ２０００） 北海道牛づくり百二十五年（蝦名賢造 ２０００） 北海道三愛塾運動史（福島恒雄 １９８７） 『健土健民』への招待（仙北富志和 ２００５） 牛飼いからの伝言―黒澤西蔵の生涯（仙北富志和 ２００９） 農場のあしあと（高橋盤根 １９７２） 野喜一郎の歩み（野みつ子 １９８０） あしあと―農協運動に燃えた日々―（高橋節郎 ２００５） 酪農学園大学部・十六名だけの卒業生（高橋節郎 ２００７） 江別に生きる・野幌原始林物語（江別市 ２００２） 記念史 短大30・大学20周年（１９８０） 同短大40・大学30周年（１９９０） 同短期大学部50・大学40周年（２００１） 同短期大学部60・大学50周年（２０１１） 同短大62年の歩み（２０１３） 貴農・設立10周年（２００３） 酪農育英会・設立50周年（２００７） その他



⑤⓪ Ａ２号館
⑤① 黒澤酉蔵　像
⑤② 黒澤記念講堂
⑤③ Ａ３号館
⑤④ Ａ４号館
⑤⑤ ＲＩ棟
⑤⑥ 鳥類・野生げっ歯類飼育舎
⑤⑦ 犬舎
⑤⑧ 健体解剖室
⑤⑨ Ｂ１号館
⑥⓪ Ｂ２号館
⑥① Ｂ３号館
⑥② Ｂ４号館
⑥③ 動物実験ステーション
⑥④ Ｃ１号館
⑥⑤ Ｃ２号館
⑥⑥ Ｃ３号館
⑥⑦ Ｃ４号館
⑥⑧ Ｃ５号館
⑥⑨ Ｃ６号館
⑦⓪ Ｃ７号館
⑦① Ｃ８号館
⑦② 学生サービスセンター
⑦③ 学生ホール
⑦④ 酪農学園大学中央館
⑦⑤ 酪農学園本館
⑦⑥ 同窓生会館
⑦⑦ 野外礼拝場
⑦⑧ 酪農学園ホール
⑦⑨ Ｄ１号館
⑧⓪ 食品加工実習室
⑧① 乳製品実習室
⑧② 教育研究棟
⑧③ 実習棟
⑧④ 格納庫
⑧⑤ 附属農場
⑧⑥ 農業機械実習室
⑧⑦ 豚舎
⑧⑧ 鶏舎
⑧⑨ 家畜センター実験実習室
⑨⓪ 廃水処理施設
⑨① 圃場温室・実験棟
⑨② 創世寮
⑨③ 家畜管理牛舎
⑨④ テニスコート
⑨⑤ とわの森三愛高校(第１校舎)
⑨⑥ 北光寮

〔2013年７月現在〕



① 肉牛研究会
② 馬術部
③ 機農寮
④ 堆肥舎
⑤ 汚水処理施設
⑥ 乾草庫
⑦ 動物処理棟
⑧ 炭化プラント棟
⑨ 野生動物医学センター
⑩ 実習棟
⑪ 入院棟
⑫ 感染動物管理棟
⑬ 臨床講義棟
⑭ 動物病院本館（環境汚染物質・感染病原体分析監視センター）
⑮ グラウンド
⑯ テニスコート
⑰ 旧精農寮
⑱ 研修館
⑲ アーチェリー場
⑳ 野球場
㉑ 健身館
㉒ 屋外トイレ
㉓ 合宿所
㉔ トレーニングセンター
㉕ グラウンド
㉖ 第１体育館
㉗ 第２体育館
㉘ とわの森三愛高校（第２校舎）
㉙ 弓道場
㉚ 東部室棟
㉛ テニスコート
㉜ 緑音館
㉝ 健音館
㉞ 清温寮
㉟ 学生会館別館
㊱ 多目的格納庫
㊲ 貯蔵粗飼料研究センター
㊳ 乳牛糞尿循環研究センター（バイオガス発生発電装置）
㊴ 第２牛舎管理棟
㊵ 酪農機械実験・整備センター
㊶ 育成舎
㊷ ロボット牛舎
㊸ フリーストール牛舎
㊹ 哺育舎
㊺ 搾乳棟
㊻ 繋ぎ飼い牛舎
㊼ 希望の塔
㊽ 校務室
㊾ Ａ１号館

２０１３年10月1日発行

酪農学園史 三

編集兼発行人　江別市文京台緑町五八二番地
学校法人　酪　農　学　園

印刷所　北広島市西の里五〇七番地一
社会福祉法人　北海道リハビリー